
闇ふり払う君の調べ

冴草みつな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇ふり払う君の調べ

【Nコード】

N3378F

【作者名】

冴草みつな

【あらすじ】

いまひとつ、なつちやいない自分の身体（病弱。）をどうにかして『あの方』から自立するのが目標。そんな・・・方向は例えあさってでも、前向きなりゅうムはシエンテラン家の養女です。そんななりゅうムの願いに声を掛けたのは、真つ黒の猫。『叶えてあげようか。でも代わりに何を寄こす？』 本編完結しましたが、番外編もあるので設定は連載中のままです。

第一話 シェンテラン家のジ・リュームは（前書き）

テーマは『シリアス』ですが。

内容は『コメディ風味』でございます。

るかのような、切れ長の瞳でございます。

正直その深みのある常緑の瞳に曝されると、震え上がります。怖いのですから、無条件で全面降伏。

ええ。左様でございますわあねえ、本当に。なっちゃんありませんですわよね、わたくしの身体。

「・・・・・・・・・・」

思い出したら何だかまた、泣けてきてしまいましたよ。

つい先日もたっぷり煩わせちまいましたからね。それはそれは。お怒りでらっしゃいましたとも。

何をやらかしたのかって？

自分でも思わず、周りに尋ねたと同時に叱られました。

自分の住み慣れた館内をうるちよろしたあげくにですね・気が付いたらですねえ。

なぜか、寝台に寝かすつけられていたんですよ。なぜでしょうかと、記憶を辿りました。

どうやら張り切って庭仕事の手伝いを、買って出たはいいものの。

昔 何の対策もしないまま庭に長時間いたら、体調をばつちり崩して寝込むという事があったものですから。また繰り返してもしたら、お手伝い禁止令が出されそうなので。それだけは嫌なので。走りました。

日除けになるよう、ほっかむりになるようなストールをばです。ね。取りに走ったんですが、それがいけなかったようです。

いかんせん、なかなか暑い日でしたから。

流石の私も館内行き倒れは初めてでしたから、驚きました。

ですけどもね。さすがに高熱出してる病人相手に、全力で怒鳴りつけるなんてえのはですね。

なさらないんです、あの方。私それをちゃんと知っています。堪

えて下さるんです。本当は怒鳴りつけてやれたら、楽でしょうが私みたいな病で弱ってるやつをですね、罵倒するのは流石に人間として後々何かひっかるものでしょうかね。

同情を買ってるんですね。私。それも、また申し訳ない。

基本的に、優しい方なんだと思います。

単に私の事は心底嫌っていらつしやるので、その『優しさ』を使う気になれないというか。何とも早ですが。

本気で面倒臭いらしいのは窺えますですよ。

本心を隠し立てする気は無いんだよ、みたいな？

ははは・・・

はあ~~~~あああですかね。

笑うしか。そう、笑うしかないですね。

「が、がんばるぞお〜!!」

ぐしくしいってるのは、嫌いです!!あの方の重荷を軽くするため、自立するのが私の目標ですから!

そのためには健康で丈夫な身体になるのです。いくら歩いてもくたびれないというのは、いきなり高望みすぎなので・・・せめて一人で街に出れるくらいの足にします。

誓います。そのためにまずは歩くことから、始めたいと思います。

身体が弱いのは少しづつ、少しづつ体力をつけて行くことで改善していけるはずです。多分、いや確実に。

問題はそれが身に付くまでの対処の仕方です。何で乗り切るか。

それは『気力』なるもので補うしかないと思うのです。

病は気から。ええ、そうですね。苦しいだの、痛いだの。

そんな弱りきった事をですねえ、すぐさま口にはならんですよね。

そう思わんかね、私よ？

『気力』。まあある程度の強がりも含め、演技力が要求されるかもしれないません。

これからはあまりそう易々とそのような言葉は一切合切、控えま

す。
そんなこんなを心に誓いながら、館内を歩き回っております。

「……………」

ぜえはあ言いそうになる、この我ながら頼りの無い肺活量を嘆きながらの運動です。

単に徘徊してるに過ぎないかもしれませんがね。立派な運動量ですよ。

ぜっぜつと軽く嫌な感じに息が上がって来ていますが、そこはソレ。アレです、アレの定番です。

『気力』。おいでませ気力!!

ワケのわからない思考回路にどうやら切り替わったらしく、いい感じですよ。

気力が沸いてきて、どうやらこのまま館内あと20周は果たせそうです。

何せまだ5周目ですよ。5、ですよ？思わず誰も見ちゃいませんよ、ですが右手をぱつと開いて見せました。誰に？

自分に。なにせ、目標の5分の1でもはや気力を必要としているあたりで、以下略。くどいので。

その時。

「おい！オマエ、何やっているんだ!？」

幻聴でしょう。……って、いえ。幻聴であって下さい、お願いします。

「オマエ！こら、自分じゃないって顔してるそのオマエだ！ジ・リユーム・タラヴァイエ！」

「ご丁寧に旧・正式名で呼ばれましたよ。幻聴に。この期に及んですみません、現聴でした。……おおうっ。」

「わ・わわわ私めでございましょうか？」

「あっさり追いつかれました。多分逃げようとしたところで無駄なので、いいですけど。」

「しかし。またしても大荷物を蔑む目が、始まったようです。思わず声は上ずりまくり、目は泳ぎます。」

「そうだ。リユーム。オマエだ！ここはオマエの部屋から随分遠いはずだろう？何をやっているのかと訊いている」

「言えませんが。まさか、歩く事で体力をつけようとしていました。」

「なあんで、ね。恥ずかしいので……ねえ？言えますか？」

「そ、そう仰るお館さまこそ、いかがなさいました？」

「ここは俺の館だからな。どこで何をしようと勝手だろう」

「おっしゃるとおりでございます！それでは……し、失礼を……」

「……」

「リユーム？オマエの挙動不審は今に始まった事じゃないが。いいから、答える」

「やはり言わないことには、解放はありえませんが状況です。」

「ならば正直にありのままをお伝えするのみです」

「歩いておりました。部屋に戻る途中です」

「ハイ。嘘じゃありません。えっへん。意味もなく堂々とした態度は、単に開き直っただけです。」

「だからなぜこんな離れにいるんだよ？」

「猫がいたので。付いてきてしまいました」

「すみません。これは、嘘です。ごめんなさい！ごめんなさい！方便って類の嘘なので大目に見てやって下さいまし。」

「猫お？」

「猫、です！」

はああああと見るからに解りやすい落胆のされ方です。途端に
哀しくなりました。なぜでしょうか。

「オマエは真正正銘の・・・なんだな。やっぱり。少しは立場つて
ものを弁えて、立ち回るくらいの気使いは出来ないものか？」

「は？え、あ、えと？ま、またご無礼を致しましたか申し訳ご
ざいせんすぐ！部屋に　！！」

戻ります。回れ右！そう慌てて背中を向けた。勢い良く駆け出し
たつもり、だったのですが。

・・・・・・・・・転びました。

気がついたらですね、それはもう見事に床石に這いつくばってお
りましたのですよ。

痛い。痛いです。身体よりも、何よりも視線がですね突き刺さっ
てきています！！

あわわ本当にどうしましょう、ど、ど、どしましよかつ！！

「リユーム。」

「！！」

ものすごく低い声で名前を呼ばれるのは、これが初めてじゃない
ワケですが。実は。

身を早いところ起こして迅速に視界から消え失せるべく、駆け出
さなくてはならないのはよっく解るんですが！

全然ですね、力が入らないのです。じたばたもがくばかりでして、
気分は虫けらです。

っ。

泣きたい。いやいや。このまま泣きだしてしまつたら、もっとも
っと怒られますから堪えて堪えて。

・・・・・・・・・・・・・・・・ぶたれます。

これは今回ばかりは許されないでしょう。これまでの積み重ねを
考えても、これだけ迷惑かける自分ですから。お怒りなのも当然で
す。

覚悟を決めて、目をつぶり、首をすくめました。それしか。本当
にそれしかできない自分が情けないですが、まあそれしか。やりす
ごすしか。

はあ、というため息と一緒に、身体が助け起こされました。鼻先
を擦り剥いた模様。ひり付きます。

「リユーム・・・・・・・・」

(ひええ　！！)

そんな痛みも吹っ飛ぶくらい、恐ろしく身体が強張りました。何
せ大きな手が！目の前に　近付いていたものですから。

思わず目を瞑って、覚悟を決めて待っていました。　が、別に
ぶたれはしませんでした。

「リユーム？どうした？また熱か？」

「いえ。申し訳ございません。またお手数をおかけ致しまして、申
しわけございません」

「もうわかったから。謝るな」

「はい。申しわけ・・・・・・・・ごさい・・・・ませ、ませ、でした。以後、
気をつけます」

謝るな、と言われたそばから思わず。途中で黙るのも何ですから、
また謝ってしまいました。

「・・・・・・・・・・もう、いい」

「はい」

黙りました。昔謝るなと言われたのに謝罪をし続けて、しゃれに
ならないくらい怒鳴られたので、学習済みです。

「リユーム」

「……はい」

「もう、いいから。泣き止め」

「はい」

言いながら恐怖を覚えました。黙ればいいのと違って、涙は制御が利かないからです。

どうしよう。どうしよう。止まれ、止まれ！そう念じて目を固くつぶってみました。

服の袖口を強く押し当ててもみしました。

「……リユーム」

呆れたように名を呼ばれて。情けなさど恥ずかしさで、面を上げることが出来ませなんだ。

……*……*……*……*

こんな調子も早・七年目です。ちつとも成長できていません。どうしたのかと思案に暮れるばかりの七年間でした。

(うつ……ん。本当に……いい加減、どうかして大荷物人生を終わらせたいものです。申し訳なさもあり。情けなさもあり過ぎです)

何故リユームが近頃とみに、志を新たにしたのかと言いますとです、ね、まあ。色々……お聞きしまして。

『なぜ、ご領主様は奥方様をお迎えにならないのかな？』

『いや、もつじきお迎えになるかも知れないらしい……が』

『が？』

『ほら。離れのリユーム様だよ。お義妹様いもむすめがいらっしゃるからな』

『そうか。まあ、やっぱりな。あの御方が同じ館にいらつしやつては、な』

『渋るお気持ちも解らないでもないな。何と言つても 奥方の連れ子であつて、血がつながつていらつしやらないしな』

『だがお立場は義妹さまだから。前ご領主様が実の娘も同然と、可愛がつていらつしやつたから体裁というのもおありなのだろう』

『そうだな。まさか別館に追いやる訳にも行くまい。ましてやお体の弱いお方だからな、リユーム様は』

『 そうだなあ。リユーム嬢様も、もう少しお体が丈夫で有らせられればなあ。お館様も対処のしようがあるだろうに』

『そうだな。そうすれば一度良家のご養子にと出されるのも、方法として有らせられるだろうになあ……』

………そういつたやり取りをですね、耳にしてしまったのですよ。

やっぱりな。

そう確信するに至りました。

(お館様に見てみたら、血の繋がらない庶民上がりの義妹などは、ただの足手まとい。ただ飯喰らいの厄介者だよなあ)

うん。どうしたらいいかと考えてみました。前々から。いえ、初めて会つた時から。宣告されていましたからね。

『オマエをこの館に置いてやるのは、父上の許があつてのこと。

この館の主がそう決めたんだから、俺はその取り決めには仕方なく従う』

はい。

『………父上の選ばれた後妻に、俺がとやかく言つつもりは無い。だが、これだけは言っておく。間違つても、俺を義兄あになどとは呼ぶな。俺はオマエのような出の者を、たとえ義理であろうとも

妹とは認めない』

はい。もちろんですとも。

と、まあ最初っからこんな調子でして。思わず回想の中の彼に対してすら、かしこまってお返事です。

初めて会ったのは彼が・・・十八歳。私は十一歳の終わりかけ。

それから七年。七年という月日が経ちました。

『俺はオマエのような者を妹とは認めていない。だが・・・貴様のよくな病弱を放り出して野垂れ死にされてもこの家の恥だからな。置いてやる』

はい。ご厚意感謝致します・・・。

そう、告げられたのが半年ほど前。お義父様とおかあ様の・・・ご葬儀が済んだ後のことでした。

彼は二十五歳。私は十八歳になっていました。そう。七年という月日が経つてもなお、彼にとって私は目障りなお荷物以外の何者でもないのだなあ・・・と妙に感心したのが半年前。

あの方はお義父様の跡を継がれて、ご領主様と成られました。ですから。この館の主様です。

リユームの身など。本来ならばお好きなように どこか他所にやるなり、養子に、嫁に出すなり・・・なさればいいのです。

まあ、そうできたら。とつくのとうに、そうしていただしようが（問題はこの体の脆弱さだよなあ。加えて・・・生まれの身分も低い。かといってそれを補えるだけの、器量もあいにくと持ち合わせちゃいないし。うっくん？どうしたものかな。このささやかながら、私なりにも『野望』を遂行させるにはどうしたら？）

今のところの強みは、この領主であるシエンテラン家の養女とい

う立場なのだけど。

その強みもお義父が生きていらしていた頃よりも、確かではないのです。

現・領主であるシエンテランの若様は、義理のお妹様を疎ましく思っていらつしやる。というのは、もはや『公然』たる事実じつじなのは広まくっているようでした。

そんな小娘（しかも病弱。）を引き取った所で、何の得にもなりはしませんからね。一応年頃なんですけど。

縁談の『え』の字もありやしませんよ、ですよ。

ううむ。どうしたものでしょうか？

「せめて体が健康だったらな。何でも出来ちゃいそうなんですけど、ねえ……」

丈夫な、体。健康な。せめて人並みに　すぐ、熱を出したり、咳き込んだり、倒れこんだりしない体が……欲しいです。

あんまり悩む方では無いのですが、ここ最近はこうして考え込んでしまいます。さすがに。

眠れないまま、自室で一人呟いてしまいました。

「誰か……誰……でも……いいから、願いを叶える手伝いをしてくれないませんかねえ？」

ほんとうに？

「ほんとうですよ」

じゃあ、叶えてあげようか？

「ほんとうですか！　って、は？ハイ？」

こっちだよ！

恐るおそる・・・振り返ったそこにいたのは。真っ黒・黒く
るの。

「にゃんこさん？」

そうだよ。

「にゃんこさんが？」

そうだよ。

「私の願い・・・を？どうしてですか？」

あんなが願ったからだよ。叶えて
やったら、何を寄こすね？

「私・・・叶えていただいても何もしてさし上げられません。何も
持っていませんから」

持っているじゃないか。できるよ
。

「え？」

「にゃーあーおー」。

「ねえ。猫さんの・・・おめめ。キレイな深緑なんだね。あの

方とおそろいの……」

。 . . . + : . . . 。 . . . * : . . . 。 . . . + + : . . . 。 . . . * : . . . 。 . . .
+ + + : . . . 。 . . . * : . . . 。 . . .

久しぶりに勇気を振り起こして、訪れてみましたよ。あの方の執務室！

いつ来ても緊張する造り。

立派過ぎて『場違いもいいところなんだよ、オマエ』という幻聴付きのお部屋でございます。

ときどきしながら、一通りの挨拶をしようとしたのですが。

「いいから。手短に用件を言え」との事でしたので。

手短に。

「ご、ご領主さま。私はもう身体は丈夫ですから、一人でもだいじょうぶでございます。長い間お世話になりました、本当に感謝致しております。それでは、ご領主さま。どうぞお迎えになられる奥方様ともども、幾久しくご多幸でございますように。リユームはお祈りしておりますわ」

何べんも練習したかいがあつた。滞りなくお伝えする事が出来て、私なりに満足できた。

「ご領主さまはもたもたしゃべられたり、つつかえつつかえ話されるのは嫌いなのだ。」

「……」

「？」
長く無言のままのご領主さまに、不思議に思つて顔を上げてみました。

もう私に掛ける言葉など無い、といった所でしようか。

それもそうだと納得して、ちょっぴり泣きそうになりましたが・
・どうにか。堪えました。

せめて最後まで、煩わしい想いをさせたくないものですから。

「さようなら。どうぞお元気で」

にっこりと笑って、もう一度改めて暇いとまを告げました。そのまま身を引くようにきびすを返して、退室するべく扉に進みました。

「リユーム!!」

「え？あ、はい？」

「おまえ、何言い出してるんだ？正気か？また熱で浮かされてるのか？」

「リユームは熱などございませぬよ。もう健康になりましたから、ご領主さまにご迷惑をおかけする事も・・・もう無いでしょう」

「出て行く？どこにだ？おまえその身体でどうやって生きていくつもりなんだ？」

「はい。もともと私は庶子でございます。街におります。そこで住み込みで働ける場所を探しますから、大丈夫ですよ。当てもありませんし。取りあえず、神殿前の広場でお花を商って行こうと思います」

「リユーム・・・・」

「あ！時間はかかるかもしれませんが、今までお世話になった分はきちんとお返ししていきますので。毎月少しづつ、」

「おまえは！」花を売る”だと!？」

「・・・はい？」

「そんな事で、身を立って行けるとでも考えているのか！女風情が一人で！」

「その時はその時でございます。私分を弁えて行動しているつもりです。どうぞ、私の安否などに心煩わされることのございませんよう」

きつぱりと。

「しぎげんよう」

(さようなら。どうぞお元気でいらして下さいませね。そんな思いは伝わるかな・・・?)

「ジ・リユーム！ タラヴァイエ！」

「は、はい？」

尋常じゃない叫び声に思わず固まってしまいました。振り向くよりもはるかに早く、肩を掴まれてしまっていました。

「リユーム？オマエは死にたいのか？このまま、野垂れ死にしたいのか？」

「いいえ？リユームはご、ご、りゅしゅ、りよ、領主様のお幸せを願っておりますよ。ご婚礼の際にはきつとお祝いをいた、いたしま、て、・・・・・・・・・・」

いけません。恐怖のあまりどもり始めてしまいました。あまりもたまたしてこれ以上、ますます不興などごめんです。

もたつきたくななんて無いのに。彼を煩わせる存在から解放されたいのに。最後まで上手くいかせられないものでしょうか。

情けなくて哀しくなってきました。

「リユーム。貴様を拘束する」

「ご、こうそ・・・く？」

「 義理でこそあるがこの俺の身内でありながら、身を弁えぬ発言。ただで済むと思うなよ。オマエは俺に恥をかかせようというのだな。ならばその身は監禁するしかなかるう」

「恥？リユームの存在が恥なのは知っております。弁えております、だから、ご、りゅしゅ、りゅ・・・のお側にはいら、えな、と、おも・・・・・・・・・・て！」

「何が」花を売る”だ。・・・恥を知れ。いや、知らぬと

見えるな。オマエには・・・呆れるばかりだ。腹立たしい」

「・・・・・・・・・・？・・・・・・・・・・ご、ごめ、なさ・・・」

呆れられているのも、恥知らずだと思われるのもずっと。ずっと、ずっと前から知っていました。

七年前、初めて会った時から・ずーっと。

だから。

もう。

終わりにしませんか？

そう、持ちかけたつもりだったのですが、ね……………。

にゃ　　おお……………。

その時かすかに、猫さんの鳴き声が耳に届いたような。気のせいか……………何だか、楽しそうに聞こえたような。

(わああああ……………ああ……………！ど、どうしましょうかっ！
？この状況を！！)

彼に腕を引きずられながら、思わず猫さんの姿を探してしまいましたが、ね……………。

第一話 シェンテラン家のジ・リユームは（後書き）

『ジ・リユーム・タラヴァイエ』

かなり性格はおめでたいタイプ。

自分を不幸と思っちゃいない。

この重いテーマ（呪い）を浄化していけるかと。

本当は養女なので『ジ・リユーム・シェンテラン』ですが。
あの方がそれを許しません。ので、母方の姓のままです。

彼女目線なので、描写少な目でした……………。

第二話 シェンテラン家の闇夜のカラス（前書き）

リユーム、体調がいいので調子付いてみましたが

……が。

なぜかって？ その夢にいられる価値がどうやらリユームには無い、という判断からです。

前々から気が付いていましたが、何分子供でしたので分別など持ち合わせていなかったのです。図々しいですね……。

お義父様もお亡くなりになり、母も後を追うように亡くなったから。

あの方の視線が物語る『真実』に。……目を覚まさねば成らないときが、いよいよ。

いよいよ、来たな……の判断からでございます。

はい。

わたくしめこと、ジ・リユーム・トラヴァイエですが。亡くなった実父がかろうじて貴族の親戚筋（本家の分家の分家のそのまた分家）の役職持ちだったため、一般庶民よりもほんのわずかばかり（ここを強調したいと思います！）身分持ちでした。

おかげさまでリユームは、幼くして働かんでも済みました。字だって習えたから、読めるんですよ。

これはなかなか幸先のいい、スタートだと思ったものです。

大事ですよ。字が読める、っていうのは。上手い事行けば、女の身であっても役職にありつけるかもしれませんからね。

よーっし！おとーさまの後釜狙って行こうかと、張り切ったものです。

女の身であっても教養は大切だと、説いてくださったおとーさまには感謝です。

そうです。このままちよいとがんばって、おとーさまとおかーさまを楽させてやりましょうか！

一応抵抗を試みているんですけどね。その場に止まるかどうか。しかし、力の差は歴然。

リユーム < ご領主さま。

何気におとーさまが教えて下さった『数式』とやらを、用いてみる私。こんな時にしか使い所を思い浮かばない私。

「……………嫌ですもん。『拘束』何て。あゝあゝ……………いよいよリユームも『前科持ち』かなあ。

始終この方を煩わせているのは我ながら『公務執行妨害』とか？『不敬罪』とか？

つてえのに、分類されるかも。まずいかも。

思考から見れば割とのんきに構えています、心臓はばくばくうるさくて仕方ありません。

「……………」
ハッキリ言つて恐ろしくて、なかなか声をかける勇氣も出ません。何でしょう……………本当に。この方を包む暗くて冷たい空気はこりゃ、下手したら手打ちかも。

このさつきから嫌々に昔の事が思い返されてしまつのは、アレですか。

俗に言う人が今わの際に思い返す、これまでの人生とか言う……………
……………ものですか？

ふう。やれやれ。そうとしか思わない自分をちよいとばかり、哀れんでもいいのではないかと思えてきます。

どこまで行くんでしょう。カツカツとご領主さまの靴音が回廊を響いて、先に渡っていきます。

そこに続くは（続いちゃいけないけど）、ずるずるずるーと表現するのが相応しい私の足音。

「りょう・しゅ・さま。」

(頭の中ではきちんと発音出来るんですけどね)

「・・・あ、あ、あの？ご、りゅ、・・・りゅしうさま？」

また失敗。リユーム、舌の回りが悪いのです。

今から2年ほど前に高熱を出して死に掛けてから、少し口に麻痺が残りました。後遺症というモノです。

それがこの方を余計に苛立たせるのは承知しておりますが、もういいです。構ってるばあいじゃありませんから。

「・・・・・・・・。」

ずるずるが止まりました。でも見つめ上げても、こちらを向いては下さいません。

何の返答もありませんが、止まってくださったのは聞いていてくださったと言う事。

「リユームをどう・て拘束すうのですか？わかりません。私、もう元気にな・たからご迷惑をお掛けしあくて済むように、一人で生きていけまうよ？」

「・・・・・・・・。」

「ごりゅ、しゅ、さま。お義父さまも お亡くなりになりましたから、も・仕方なく取り決めに従わなくともいい・のですよ？」

「・・・・・・・・。」

「リユーム、もうこえ以上ご・・・ごりゅ、しゅさまの邪魔になりたくありません。この館にいても私、何の役にも立てませんし。ず・と・・・考えていたです。『身体を丈夫にして、元気にな・て一人で生きて行こう』って」

思えばこんなに長く自分の意見を申し上げたの、初めてです！お
お！ ちよつとは進歩したかな？

自分がつつかえつつかえ話すたどたどしさが、たまらなく情けな

「言いたい事はそれだけか？ジ・リユーム・タラヴァイエ！このカラス娘！」

勢い良く振り返るとご領主様は、大声を上げました。押し黙って聞いていたけど、もうかんべんならなくなったご様子です。

ピイ・・・ツチチチチチ！！

・・・明らかに警戒音を発しながら、小鳥さんたちは飛び去った模様。驚かせてすみません。でも羽根があるっていいですね。好きなところに飛んで行けますモンね。逃げて逃げて。あの空の彼方。

今のリユームで在っては、とうてい渡りえない広い広い青空。思わずこのお方越しに仰ぎ見た空の青さに、心がふつと軽くなった気がしました。

きれい。私も自由に飛んでいけたらいいのに。
そう願ったほんのつかの間。リユームの心はあの大空にあったようです。

「おい？リユーム・・・どうした？」

いくらか低められた声音に我に返ってみれば、深い緑の眼差しとぶつかりました。

（あれ・・・ああ・・・そうか。この方は・・・わたしの・・・？）

わたしの。何でしたでしょうか？

あまりに間近だったため息を飲んで、せわしなく瞬きを繰り返しました。

いつの間にか両方の二の腕を掴まれて、乱暴に揺すぶられています。

「あ・・・え？」

「おい、こらカラス。　　しつかりしろ。正気に戻ったか？・・・
珍しいな。リユームが言いたい事を抑えず俺にぶつけてくるのは。
・・・ずいぶん、久しぶりだ。生意気め、もう気が済んだか？」

はい。カラスカラス。リユームの髪と瞳は真つ黒なので。そう呼ばれます。カラス娘、羽根が無いのが残念です。

見栄えのしない、不吉な黒・黒・一色です。それが何か？カラスさんに謝ってください。ネコさんにも。ちよつと、むか。

「いええ？まだまだ。盛りだくさんえ、ございます。お答え下さい、お館様。リユームなんて放・ておけあい・ないですか？」

「は！放つて置いたらおまえ。何をしでかすか解らないからな。それでなくてもオマエは目立つんだ　カラス娘」

そうなのです。この国の人たちの髪と目の色は、それはそれは鮮やかなものが多いというのに。

色彩の明度に差こそ有りますが基本、金糸のような髪にキレイな青やら緑やら紫やらの瞳。この世の中の美しいものを映したかのようですね。羨ましいです。

そんな中に紛れ込んだ、リユームと言うカラスが一羽。それは良くも悪くも人目を引くのです。

ど・しよつぱなから『オマエを例え義理でも妹とは認めない』と宣言されるのも頷けます。はい。

この目の前のお方もこの国の基準から、外れちゃおりませんから。雨に洗われた常緑樹の森を映した瞳に、存在感の強い光を放つ、金の髪がサラサラです。

サラサラ加減ではリユームも張り合えそうですが、だからどうしたですね。すみません。

このお方のお母様はそりや美人さまだったそう。百聞は一見にしかず！と、はりきってこつそりお義父さまに頼み込んでみました。誰にこつそりかといいますと、おかー様と・・・もちろん・・・

この方です。多分　ものすごく嫌な気持ちにさせてしまうかも知れないな〜と考えましたので。

こそこそする罪悪感もありましたが、好奇心には勝てませなんだ。お許しを。

そこで初めてお目にかかったご領主様の『お母様』は・・・この方の『女性版』？生き写しつてものですかね。素晴らしいものを譲り受けましたね、と肖像画を見せて頂いてリユーム納得。

・・・おかー様！大丈夫、おかー様はお色気では微妙に勝っている気がします。（身内のひいきを差し引いたとしても。）

リユーム？

わたくしは〜まあ『おとーさま』譲りですかね。カラスなのは闇夜からとでもしておきましょうか。ハイ。

「む〜・・・そえが放り置けない理由のお答えでうか？」

「・・・病弱のくせに。一人で生きて行けるわけなからう？」

「ですあ・ら、もう健康ですよ。咳もしなけ・ば、熱だつて出てません」

「それもここ五日ばかりの話だろう！」

「五日間も咳も熱も出なか・たのなあ、もう大丈夫です！お薬だ・てもう要りませ・から、飲んでませ・ん」

「何を根拠に言うのだ、リユーム？」

「・・・自信が有りあす。リユームもう、健康です。だ・ていつも身体に力が入らなくて、口ごたえすう気も起きませんでした。今は違いまうもん！」

そう。もう・・・おかー様もいませんから。いつも不興を買ってリユームのせいで、おかー様まで被害を被つたらどうしよう！

っていう心配もですね、しなくていいのです。不興を買うのはリユーム一人。何とも気楽です。

「そのようだな、リューム？それでもおまえは・・・自分がよほど大切じゃないと見える」

「そ・・・うれがなにか？」

流石に。その凄みのきいた声音に、ちよつとばかり引きました。気持ちも身体も。

(ええい！怯むな、負けるな、ガンバレ・リューム！！)

自分を奮い立たせます。心臓が相変わらず痛いくらい早いですけど。息がしにくいんだか、息切れを起こしそうなんだかもはやわかりませんが、ぜえはあ言い出しそうです。

(何！なにをおく！気力。こんな時はおいでませ『気力』！！) 負けるもんか(何にだ)ときゅつと目を瞑って、拳に力を込めました。爪よ、食い込めとばかりに。

「何が” 花を売る” だ・・・。誰がオマエから買うか、ばかめ・・・。」

勝ち誇ったように唇の端を持ち上げて言い放たれては、なけなしの自尊心を保つのもままなりません。とほほ。

「それは・・・リューム、『カラス』であらでしょうか？」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

おかし様よ。

やたらきれいだった、おかし様が浮かびます。

リュームが『この先どうやって生きていこうか？』と、いよいよ本格的に途方に暮れ始めた頃に・・・。

あつさり。

”リューム。お母様、再婚する事に決まったの。喜んでちょうだい。もちろん、リュームも一緒に行くわよ”

・・・ええ!どこに?どこにですか?いつの間に!!

” ふふ。何と『シエンテラン家』よ。もちろんお母様の身分上、お妾さんだけだ。いいでしょ?”

・・・ええとお、おかー様?・・・そこに『愛』はあるのでしょうか?

” 嫌だわ!リユームつたら、おませさん!もちろんじゃないの”

やりますね、おかーさま!さすが。期待してなかったけど。

最後の最後でご自分の魅力を余すところ無く、かつ遺憾なく発揮して!御領主様に気に入られるとは。何やったんだか。

結局・・・最後の最後まで、教えてもらえませなんだ。

しかも。 しっかり、ちゃっかり。『お妾さん』どころか『後妻さま』になってるし。何でだ。

” だつてえ。リユーム・・・まだまだかわいい『子供』のまま
でいて欲しいんですもの。親心よ”

そうですか・・・じゃ、リユームがオトナになったら教えてくださいまし。

” いいわよ。リユームがうんと魅力的な女性に成っている頃におかー様が直々に殿方を『めろめろ』にする秘策を伝授してあげますからね!ふっふっふ”

・・・め、めろめろ・・・ですか?はあ???

かくして。リユームはシエンテラン家の養女となり・・・現在に至るつと。

(めろめろかあ〜結局、聞かず終いでしたね。ま、いいですけど。天の国とやらでおかー様にお聞きしましょう・・・)

ちなみに。おかー様は天の国では、『おとー様』のお側でしょう

情けないナア。

ほんとうに。

ただなす術も無く

泣き出しそうな自分が

たまらなく情けないです。

それでも最後の強がりでも力を振り絞って、嗚咽を飲み込みます。
かみ殺すというか。せめてもの意地です。

・・・でしたが。・・・が！

・ウウ！ワン！！ヴァン！！ワンワンワン！！！！

「~~~~~!？」

いつの間にか駆け寄ってきていた犬に吠えられました。

ワンワンワンワン！！・・・ヴァン！！ウウ・ワンワンワンワン

！！

犬は巨体を低く構えて、今にも飛び掛らんばかりの勢いで吠えています。

「 退け。シンラ」

シンラ。そう名を呼ばれた彼は、リュームの事が大嫌いな
ご領主様の猟犬なのです。

犬は飼い主に似るそうです。シンラはリュームを見ると、
いつも酷く吠えるのです。

きっと嫌われているからに違いありません。犬は一番強い者に従
うけど、弱い者はバカにするそうですから。

彼の中で順番は確立されているのでしょうか。

ウウ・・・ワンワンワンワン！！ヴァン！！ヴァン！！ワンワン
ワンワン！！

主が退けと命じているのを無視して、シンラは吠え続けます。
オオカミの血を引く優秀な彼が吠えると、リユームは震え上がる
しかありません。

（ 怒ってるんだ、きつと。リユームが主人に逆らって生意気だ
って、シンラも怒っているんだ……か、噛まれるっ）

いつもなら逃げるのですが。今日はそうも行きません。がっしり
と肩を固定されたままで、身をすくませて瞳を閉じました。

「う、う……ええ……っく」

「リユーム……。いいから退け、シンラ！」

何かを訴えるかのように、シンラのうなり声は止みません。

ひどく興奮していて、いつもならお利口さんのはずの彼が……
いっこうに鳴きやみません。

牙をむき出しにして、リユームに向かって吠え続けるのです。

「シンラ……！」

どうしたんだ、とご領主様が続けたのとほぼ同時に。

シンラが飛び掛ってくるのを、嫌にゆっくりと感じました。

第二話 シェンテラン家の闇夜のカラス（後書き）

『ジ・リユーム・タラヴァイエ』

いやに強かな精神力の子。

身体の弱さを補って余りある、忍耐力の持ち主。

髪は黒。瞳も黒。

カラス娘は、何も黒いばかりじゃございませぬ。

カラスはなかなか賢いのです。

第三話 シェンテラン家の度胸試し（前書き）

リユームに苛立ちを感じて下さったらそれは「ご領主さま」目線で
ございます。

OK!OK! 狙いどおり(?)でございます。

リユームに憐れみを感じてくださっても、それもまた。

第三話 シェンテラン家の度胸試し

二度と俺に微笑み掛けてくれるな。

。.
 ..*.....*.....+.....*.....
 ..+.....*.....*.....+.....*.....

「!?!」

「 シンラ！よせ!?!」

噛まれる!!　　こうがっちりと掴まれていては逃げようがないので、リュームはそう覚悟を決めて目を閉じたのですが。

「 ? 」

いつまで待っても痛みは訪れません。その事に疑問を覚えてそろそろと脛を持ち上げてみますと、信じられない光景が飛び込んできました。

「 !?!? 」

ひっと思わず息を飲み込みました。目の前に牙を剥き出しにした犬ケン・狼ロウの姿があったのですから。

獣の彼の牙が腕に食い込んでいます。 ！ その腕はリュームでは無く、あろう事かご領主様の左腕なのです。

「 シンラ。 わか たから、放せ 」

. ウウ グウ ヴウウウ ！！！！
 低いくぐもった唸り声を止ませる事も泣く、シンラの牙は緩みそ
 うもありません。 一体 ?

一体何がどうしたってこののでしょうか?

彼はとてつもなくお利口さんで、ご領主様の一番の猟犬であり護衛でもある『忠犬』なのは間違いないありません。

「きゃあああああ　　あああああー！」

目の前には食い込む真つ白い獣の牙。

それがこの目の前の、腕に　。その腕はリユームのものではないのです。

なぜですか？なぜ、リユームの腕じゃ無いのですか？

いつまでも食い込み続ける牙に、疑問しか覚えません。

なぜ、この腕を伝って滴り落ちる赤い雫は・・・リユームのものでは無いのでしょうか？

(あかい・・・あか。　血？・・・血！！)

「きゃあああ　　・・・いやー！！いやあああー！」

うるさい。何て耳障りな。嫌な叫び声でしょうか。誰かが叫んでいる。誰・・・？誰が？

「リユーム！リユーム、しっかりしろ。大丈夫だから、リユーム！」

！
そして『誰か』がリユームの名を呼んでいるようなのですが。

遠くて。何もかもが遠いのです。

目に焼きつくその鮮血の赤のみが、私の目と耳と・・・全てを支配していくのを止められません。

・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊
あの娘に与えてはならないもの。それは・・・鮮血の記憶に加え
て炎の記憶。それと憐れみの心。

そういい含められてきた事を思い出し、鋭く舌打つ　。

・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊

・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊

「リユーム。この大バカ娘。正気に戻ったか」

「……?」

緑の瞳に覗きこまれ、ただ忙せわしく瞬きを繰り返しました。

「……?」

どこでしょうか。疑問に思っ
て尋ねるために発した声は掠れてい
て、弱いものです。ああ・・・
そういえば、さつき驚いて叫ん
だからだと思いましたが。

「今は俺の部屋だ」

そう言われてみればここはかつて、お義父さまの私室だったお
部屋です。リユームが幼い頃何度か訪れた事のある。

歳を重ねるに連れて体裁もあり、あまり気軽には訪れなくなっ
ていたお部屋。小さい頃にこっそりと、お義父さまを訪ねて以来

しかし記憶とは少し違う部屋の表情に、すぐには思い当たらな
かったのです。

あの頃よりももっと人を寄せ付けないかのような、スキの無い完
成度の高さに息が詰まるばかりです。

寝台と布張りの椅子とテーブルだけという素っ気無さでありなが
ら、その一つ一つがこの館の主に対応しい造りで有る事くらい、大
バカのそしりを受けた娘にだってわかります。

作りつけられた書棚には厚く重みのありそうな書物がずらりと並
べられ、書物の傷みを避けるためなのか採光もごく僅かです。

先ほどまでの春の日差しなど全て遮られたかのような造りに、身
体が冷えて行くのを感じますが止められません。

目の焦点が合う頃には、自分の状況も飲み込めて来ました。

自分は今、椅子に腰掛けており両頬を挟まれている事。道理で逸
らしようのない苛立った眼差しを、もろに仰ぎ見ているわけですね
おまけに立ち上がるにも。椅子の背もたれとこの部屋の主
に挟まれていては、身動きが取れませんな状況です。

『拘束』は早速開始のようですね・・・。

(これは大っ変に マズイ状況かと思われませんがいかがでしょう

か?)

そう尋ねられたら誰だって、首を縦に振るに決まりきった状況です。ええ。大ばかのそしりを 以下略。しつこいですから。

下手したらこれは自分が最高に具合の悪かったあの日よりも、何かしら危機的な状況だと認めざるを得ません。

今すぐにごの方から逃れなければならぬと、自身の深みから這い上がってくる何か告げてきます。

ええ。そんなの。実行可能ならとづくに。ええ はい。

眼差しに射すくめられている事に対する恐怖より、強制的に首を持ち上げられてる体勢の方が辛くて、視線を逸らしました。

許されたほんの少しだけの角度。それなのに・・・俯いたその拍子に自分でも自覚していなかった、温かな雫が零れ落ちました。

不覚でした。そのまま上を見ていたら、流れる事も無く済んでしまったものを。そうは悔し紛れに思ってはみたものの一度、堰を切ってしまった涙を押し止める理由にもなりはしないようです。

「また、泣くのか。・・・いい加減泣き止め。もう、シンラもない」

でもあなたが居るではないか。そう言い返そうにも口を開く事すら、ましてや何かを深く追求するために思考を働かせるのすら億劫で。

何ごとかと今一度、この身体を支配する虚脱感のワケをこの方に尋ねたつもり。

それは力ない眼差しを向ける、という所作だけで済ましてしまうやり方で。

「あれだけ泣き叫べば声も枯れよう。オマエいい加減に学習したらどうだ?たとえ『健康になった』としても、体力など持ち合わせちゃいない脆弱な作りの身だという事実を。まったく」

ようは無駄に体力を消耗してしまつたと。そういうことですね。ハイ。

おかしい。おかしいな。こんな時こそ、頼りにしている『気力』

なるものの力が・・・湧き上がってくるはずなのですが。

「・・・・・・・・。」

まだまだ今日は始まったばかりです。挑戦しなければならぬ、自分目標も山積みであるのですからね。

そんな時の頼みの綱がいつころに見えませんか。おかしいな・・・もう気力まで使い果たしちまったって事ですか。早すぎやしませんか。

とにかくこの手を放して頂きたい。そんな想いを込めてそろそろと、ご領主さまの両手首に手を掛けてみました。

「！？」

右手に感じた違和感にはじかれた様に、すぐさま手を引っ込めてしまいました。

衣服の袖口は冷たく湿っており、思わず確認するように見た自分の指先を見て、そのワケを鮮明に思い出したのです。

あかい。その指先を彩った赤に、よりいっそう視界がぼやけ始めました。

「っ、怪我を・・・・・・・・！？シ、ラ、シン、ら・・・な・・・で？」

「たいした傷ではない。シンラとて加減を心得ている」

「シ、・・・らあ・・・か、噛んだ・・・えうっ、く」

「泣くな。シンラは・・・始末するから」

「！？」

つつくと、大きくしゃくり上げて自分の耳を疑います。言われた言葉の衝撃は、一瞬息が出来なくなるほどの威力。

告げられた言葉が意味する所を、理解するよりも早く。ものすごい勢いで首を振っていました。もちろん、横に。

ですがそれもすぐに大きな手の力に、止められてしまいます。

「だ、ダメで・・・ダメ！いあで・・・す、だめえ！！」

「駄目？何故だ。シンラは四つ足の分際で、この俺に齒向かったの

だぞ？」

「　だめ、だ．．．め！どして．も、だめえ！」

「俺に指図するか。この館の主に逆らったものは、何者であろうと処罰は受ける決まりだ。例外は無い」

「．．．ちが．．．ます。し、シ・ラは、まちがえたのです！き、とりゅうむを怒って．たのです。えも、ごりゅう、りゅう、しゅ．．．」

つつかえつつかえ。言葉が上手く紡げない焦りがまた焦りを呼び、伝えようとする言葉の並びにならず、自分自身嫌気がさします。早く。きちんと事実をお伝えしなければ。

シンラはリユームを狙ったのに、ご領主さまの腕が間にあつたから．．．きつと間違つたのです、と。

「耳障りな」

「　っ！？」

「その舌足らずは計算のうちか？」

「けい、さん？」

「自分を弱者と見せかけて。強者の憐れみを誘う作戦か？」

忌々しい．．．その舌。いっ

そ、引き抜いてやろうか。

心底リユームは蔑むべき者として、この眼に映るようです。それ以外には見当たりません。

この深く暗い　凍てついた瞳以外で、私が映る事はないまま．

．もう、七年？その次も？これから先々いくら年月を重ねてもずつと、リユームはこの湖底に沈められ続けるしかありませんか？

「ふえっ．．．く」

「飲み薬を止めたな、リユーム？何が『健康になつたから薬は要らぬ』だ。　服用を怠らねば口蓋に残る麻痺も、いくらか和らぐと言つのに。バカめ。そうやって弱々しさを前面に曝け出さねば生きられぬくせに！何が一人で生きていくだと？はっ！　笑わせるな」

ああ　。もう本当にリユームの行動のどれを取ってみても、こ

「……………リユーム。貴様もよほど始末を受けたいとみえる」
「……………ヴウ!!!」

望むところですよ。

でもその言葉は発せませなんだ。どうせ、もたつくに決まっているから 自ら飲み込みました。

それに。答える代わりに最後の気力を振り絞って、顎に力を込めているのに忙しかったですし。

「いい度胸だ」

凄みのある声が短く発されると同時に、そのまま抱え上げられてしまいました。片手であっさりなのが気に入りません。

こつも力の差は歴然なのかと、悔しさしか感じません。ちなみに、そんな悔しさをバネにして。

浮遊感にも負けじと、リユームはいい度胸を保ち続けております！

第三話 シェンテラン家の度胸試し（後書き）

はい、15禁らしくなってきました〜……………。

そうか？という、突っ込みはさておき。

今回の話は「萌え」ていただけましたか（笑）

私は燃え尽きましたよ、精一杯だ！！

「萌え」って何でしょう！

この意味不明のコメントは、まるつきり内輪受けでございます。少しでも興味をもたれた方……お待ちしております。少

<http://ameblo.jp/mitunappa/>

……みつなっぱの気持ち。

ブログです〜

第四話 シェンテラン家で掲げた旗（前書き）

『いい度胸』を保ち続けていた、リユーム嬢でしたが。

はこの部屋の主様ですけれども。

それでも・・・降りなきゃ。早く。降りたい！

そう思っただけで身体を起こさずとも両腕を押さえつけられては、ただごろごろと転がるばかりです。

(どうしよう・・・どうしよう・・・!!・・・どうにもならない?)

そう思い当たったところで、また新しく涙が溢れ始めました。それこそ盛大に。

アレだけ泣いてもまだ枯れ果てないのか、涙よ?それこそもう、自分で自分に呆れ果てますよ。

「・・・」花を売る”等と言っていたな、リユーム?”

「・・・」

はい。それが何か?神殿前の広場はお祈りに向かう方々が、お供えするお花やお菓子を求められるので市が出ているのですよ。

売り子さんたちもたくさんいて。昔、おと一様が亡くなって間もない頃。リユームは広場で商人の子達と、花とお菓子を商った事があるのです。楽しかったな。

思わず頬が緩みます。あの時は路頭に迷う寸前ですよ!という恐怖感もあつたけれども、それより何より。

どうにかするぞ!お!!という気持ちのほうに勝っていたから。身体も心も元気で自由で・・・楽しかったな。

(事情を話したら『しょうがねーなあ!手伝わせてやるよ!』って。言ってくれたあの子達・・・元気かな?また会えたらいいな)

あれからもう七年と言う月日が経っているというのに、リユームの心はまたしてもあの時の活気に満ち溢れた広場にあつたようです。

あの明るい日差しの下、微笑みあう人たちの輪の中の記憶。新参者のリユームを面倒くさいと言いながらも、あれやこれやと世話を焼いてくれた人たちの・・・あの陽だまりの中に、どうかどうかもう一度。

「おい！リユーム、おまえはまた……意識をどこに飛ばしている？ちゃんと俺の話を聞け。質問には答える」

苛立った声に一瞬で我に返ってみて、また改めて自分の置かれた状況に驚いてしまいました。

「……！！？」

自分を見つめ下ろす深緑の瞳は、まるで深い森に迷い込んだかのごとく。

そんな幻想を抱かせるには、痛いほど充分です。この方の眼力に囚われたら最期。いつもそう思ってしまいます。

リユームごとき小娘なんぞ、実を取るに足らない相手にしようにご領主として渡り合わねばならない方々に比べたら。

「リユーム？おい……おまえ！聞いていなかったのか？」俺の質問に答える””と言ったのだ

「……しつ、もん？」

「……””花を売る””等と本気で言っているのか、と訊いたのだ。答える

「はな

売りたいです。また広場の皆と陽だまりの中で働いて、身を立っていったならどんなにか素晴らしいでしょう。

そう考えたので頷きました。ためらいも無く。こく、と小さく顎を引いたと同時にした。

「……！！？」

大きな手に右肩を押さえつけられ、襟元に手が掛けられてそのまま乱暴に引き下ろされました。

あまりの勢いに首の後ろが持ち上がるほど、のけ反ります。ビツと胸元の衣が引き裂かれた証拠に、鈍い音が空気を裂きましたが……

それをどこか遠くで感じてしまいました。

リユームはといえば一連の動きに頭の方が付いていけず、一体何事がこの身に起こったのかと状況を把握するのが精一杯でしたから。

「リユーム」

今までに無い何の感情も見出せないほど、静まりきった声音に名を呼ばれ身体が跳ね上がりました。

押さえつけられているので、そう大きく身動きは取れませなんだが。

「あ………?」

気が付けば鎖骨の辺りが空気に晒されており、より一層この冷え切った室内を体感しておりました。

それより何より。この大きな節くれだつた手の関節が。リユームの首筋に当たる感触が嫌に冷たいのです。

ふり払おうと背そむけかけた頭おこがしを、捕らえられてしまいました。

容赦の無い指先は力強く、また乾燥していて肌を傷つけるようです。

恐怖からくる焦燥感からか、泣きすぎたためなのか。いずれにせよ喉の奥からカラカラに干上がってしまったかのようで、一向に声を発することが出来ません。

抗いようも無く、暴力を待つ身なのだとはい理解できます。はたしてそれは、平手打ちを喰らうのか。拳で殴られるのか。

このまま首を締め上げられるのか。そうやって『始末』とやらをされるのか。

ただ待つ身というものは辛いものです。ましてやこれから自分に訪れるであろう『痛み』を、身構えて待つというのは。

いつそのこと一思いに、その剣で一突きしてくれたらそれで済むのに。思わずそう願ってしまいます。

この先行きの見えないほどに、怒気を孕んだ眼差しに晒され続けるくらいなら………いつそ。

それもまたケジメの付け方として、いいかもしれません。

そりゃあ、はっきり言って怖いですよ？でも、先ほどから『もう、いいや。どうなっても。』という結論が出ておりましたね。

無意識なんだか意識的になんだかわかりませんが、どうにもその

『どうなつてもいい』方向へと、己自身で誘導しちゃってますよね？私よ？そんな受け答え方をしたり、がぶりといった日には・・・ねえ？ どうなるかわかってますよね？

答えは『ハイ』ですからねえ。わかっていてある意味この方を挑発してしまった自分に呆れたところで、何の解決もしませんけど。

やだやだ。後ろ向きで、暗くつて。辛気臭いったらないですね・・・

これだから。これだから、嫌なんですよ。体力が付き掛けたときの思考は。ろくな物じゃないのは確かですから。

先ほどのいい度胸で溢れかえっていたリユームですが、気力体力ともにアレで、すっかりキレイに消耗してしまった様子です。え？何？振り絞っちゃいましたか、全て？蠟燭が勢い増してから、燃え尽きる直前と同じ現象のごとく。

ええもうほんとうにどうせ『脆弱なつくり』でございますよ・・・だ。

延々、延々とこのように考えることにすらくたびれたので、目を閉じました。

.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*

「リユーム？」

なんでございましょう？

そろと様子を窺うために薄目を開け、答える代わりに小首を傾けて見せました。依然顎は掴まれたままですが。

「オマエは”花を売る””というのが暗に何をさしているのか、知っているのか？」

存じ上げません。

今度は首を横に振りました。無言のまま。ふるふると振る途中で

顎を掴んだ指先が、食い込みました。 痛い。

「・・・・・・・・なぜ、言葉を発さない。質問には答える」

貴方が耳障りと言ったからに決まっているではありませんか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙秘。

「リユーム」

睨みつける眼差しが、凄まれた低い声音が。どうやら再び『いい度胸だな』とお褒め頂いているようです。

黙秘続行 を試みましたが。どうにもリユームが、何かしら述べないと進まない模様。大体からにして、コレだけ強く顎掴まれるとますます発音する気も失せます。失せてます。

も・いいや。だんまりで・を続行。そんなリユームを見据えながらご領主さま、表情ひとつ変えずに一言。

「ああ、そうか。ならばシンラを」

「・・！みつ・耳ざわり、・・と、い・い け な から」

リユームなど。いつも渡りあっていらっしやる方々に比べたら

。それを思わぬ所で見せ付けられたのだけは、わかります。リユーム脅しに、あっさりと。弾かれた様に答えておりました。

「薬をちゃんと飲め。いいな？」

どこでどうやったたらそのような言葉が出てくるのでしょうか？ソレほどまでに『耳障り』なのが、癩しやくに障るのでしょうか。

だとしたら、なおの事いやです。飲みません。癩しやくに障り続けて下さい。

「・・・・・・・・」

首を横に振り拒否を表したところでしたが。またお怒りを買うのは必至なので、何の反応も出しませんでした。

もうこの方の世話にはなりたくありません。自立と掲げた目標の旗はた。リユームはもうそれを振ってしまつたのです。

そうです！旗を振り続ける覚悟であります。例えその先に待つのが『敗北』であつても。

．．．．．そうなつても負けを認めた白旗なんぞは、断じて振りませんよ！

『薬代だつてバカにならない出費のはずです。これ以上ご厄介になる気もありませんし。要はリユームが言葉を発さなければ済む話ですから、そうします。』

そう口に出して言う勇氣は、ちよつと無いのが情けないです。だからこそ態度で示す　その構え。

「~~~~ おまえは！」

お？何ですか。何か？やりますか？

閉じてしまいそうになる瞳を、必死でこじ開けたままでいようと唇を噛み締めました。

逸らしてなるものか。受けて立ちますよ。視線に^{なぶ}翱られるのにも、もういい加減慣れましたものね．．．．．

．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

そうは思うのですが。ナゼに。何ゆえ視界がぼやけるのですよ？

．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

「ジ・リユーム。このカラスが」

底意地の悪い笑みを浮べたご領主さまの薄い唇に、忌々しそうに名を吐き捨てられました。

その真正面から見下ろす瞳がふいに外され、さらさらの髪が頬を掠めました。その金系の束が、視界を占めたと思ったと同時に。

「痛・い!？」

がぶりと首筋に噛みつかれて、悲鳴を上げていました。

ひっと息を飲み込み、痛みに顔を歪めて逃れようともがきます。

しかし、もがけばそれだけ苦痛が、また新たに押し寄せるとい

仕掛け。まるで害獣狩りのための足環に嵌はまってしまったかのようにです。

アレはもがけばもがくほど、足の腱に食い込んで引きちぎるとい
う・・・たいそう無情な造りをしているのです。

アレとまったく同じです。 罾はに掛かった獣は大抵、そのまま
そこで死と言つ闇に飲まれてしまうのです。

「 ”花を売る” のだろう？ だったら俺が買ってやる」
意味がわかりません！！

唇をわずかに浮かせただけで、ご領主様の表情は見えません。

そのあまりにつまらなそうに言い捨てる、その売買の意味を尋ね
ようにも言葉は出てきません。

「いや！い・・・っ、いやいやいあいーやあああ・・・っ、いー
やーあー・・・！！」

身体の奥底から這い上がってくる吐き気に抗えず、逃れたい一心
で半狂乱で泣き叫びます。

緩むどころか込められる手の力に、戒めのごとく首と肩を押さえ
つけられては、貼り付けの刑に処せられた気分です。

ずきずきと脈打つ鼓動が、すぐ耳元で聞こえているかのような早
まり具合にも更に気が遠くなります。

（手も眼差しも冷たいくせに・・・いやだ！逃げたい！気持ち悪い
！）

この方の持つ意外な熱を直に押し付けられて、こみ上げてくるの
は気持ちの悪さだけです。もちろん逃れたいのは、痛みからもです
が。

この身を扱よじらせるのは恐怖でもなく羞恥心でもない、嫌悪感な
のです。

（触れられたくない！例え髪の一筋であっても！！）

それはそれは強烈な想いでした。何かお腹の方からせり上がって
きます。

第四話 シェンテラン家で掲げた旗（後書き）

はい。

15禁々まだまだ、手ぬるいでしょうけれども。

危なかったですね、リユーム。

気が付いていない辺り、アレです。

彼女もまだまだ、幼いのです。

『初・義兄とバトル』くらいにしか思ってますん。

第五話 シェンテラン家で広がる波紋（前書き）

リユーム、不戦勝にさせてなるものか！と食い下がってますけど。

うん。大人しく、寝込んでおいた方が身のためだよ？

という猫さんからの冷静な突っ込みからスタートです！

第五話 シェンテラン家で広がる波紋

時間切れだよ！

残念だったね。

そうでもないかな？

(ええええ　！せっかく『お試し期間』設けていただいた身の上で文句垂れるのは本当に何様だよって思うんですけど、ええええええええ！もうちよつとがんばらせていただけたら何とかなっていたかと思いませんか!?)

その契約内容には大変満足いたしましたので、どうか契約続行をこのまま！ゼヒ！とすがる気持ちで叫んでました。

” 思わない。思えないよ、リユーム・・・そもそも『何とかなっていた』？って何が？あの状況でどういう風に？”

(ご領主様にちよつとはリユーム、やるな！　って思わせるとか！)

” 呆れた！その前に犯^ちられちゃってるよ。うん”

(や・・・殺^ちられちゃってマスか・・・!!)

” うん。おいしく食べられちゃってオシマイ。ま、それもいいんじゃない？”

(いや・いや・いや・いや！『時間切れ』ありがとっございましたあ！何がいいものですか！食べられるんですよ！　って、食べる？食べられるんですかあああ!?)

” うん。　リユーム・・・君の精神年齢の低さはよくわかったから”

とりあえず。一旦はお眠りよ。

。。。。。。。。
*。。。。。。。。
*。。。。。。。。

意識手放す直前に、これが眼を閉じたままの暗闇で交わした会話。
猫さんと。

時間切れで助かったらしいですね。私。

ただ面子とやらは丸つぶれですけど。「自信があります！」等と
言い切っております、このザマです。

このザマとは、こうやって、リユームの自室とあてがわれた部
屋で、寝台に大人しく横たわっている事を指します。

ただこうやってぼんやりと、痛みと苦しみをやり過ごす。ひたす
らに寝台の天蓋を見つめて。

今回痛むのは、いつもと明らかに違う箇所も含まれております
。そのせいなのか嫌に回復が遅い気さえます。

気が付いたら寝台の上。それも何回繰り返した事か。もう、思い
出せやしません。

だからでしょうか？目覚めた時は真っ白でした。

空白。

何一つ意識に上らず、なぜここにとか。

なぜいつのまに、なぜ。。。あまたいつもの発作か。
その直前まで何をしていたんでしたっけ？

ああ、そうだ。体力を付けようとして、館内を歩き回っていたん
だった。。。途中でご領主様に怒られて戻ってきたのだった。

そうだそうだ。

そう落ち着いて、再びまどろみかけた次第でしたもの。何て
オソロシイ。そんな自分の記憶の曖昧さが。

(いや？アレ？待てよ？何か忘れていませんか？)

記憶を追及しようにも鈍く淀んだ思考回路は働かず、ただ胸の奥深くから何かがせり上がってくるのです。

それが何かいつもと違うと訴えかけてくるのです。しかしどうしようもありません。

ただじくじくと痛む身体を宥めようと、忙しく呼吸を繰り返すばかりしか無いのです。

この弱り切った身体のどこに振り絞れる気力がございましょう？

(まずは体力を回復させねば、まずはそれから。)

そう自身にもっともらしい理由を付けて、とろとろとまどろみに身を任せました。

しかし。遠くで物音と人の声がします。何か言い争っているかのような。しかもそれはだんだん近付いて来ているようです。

お控え下さい！まだ熱が下がらきってはおりません！意識もまだはつきりとは言い難い容態でございます！

意識は戻ったと報告を受けた。ただ見舞うだけだ。そこを避け。

どうか！せめてもう一日、ご容赦を。ただでさえ不安定な状態でございます！今、ご領主様のご訪問とあつては！

いいからよける。見舞うだけだ。

そんなやり取りの片方のどこか悲痛な叫びに、こちらまで泣きたくなってきました。いったい誰が？

それすらも追及しないまま、まどろみに漂っている身。

意識の遠くで『ああ、誰かがリュームを気遣ってくれているのか』と認識は出来ました。

不思議と少しだけ呼吸が楽になった気がします。心の奥底がふん

わり、少しだけ浮上したような心地よさに安心して瞼を閉じました。

「リユーム……」

振ってくる声音がひそめられたのが伝わってきました。おそ

らくは、その眉根も一緒に。

「このバカのこの傷は何だ！」

「お静かに願います、どうか……あちらに」

「説明しろ」

「リユーム様が……ご自身で」

「理由は」

「それを私に尋ねますか？」

「……」

「何にせよ、目を離れた私どもの不手際でした。申しわけございません。御いたわしい事です」

「この……バカが！」

「ご領主様っ、どうかお静かに。今はささいな物音ですら傷に障るはずです」

「知るか！」

痛い。痛いイタイイタイ……！

(……い……あ……！ついた……い)

確かに、ささいな物音ですらこつも障るとは！

「……っ、ふえっ……いた」

苦しくて。無理やり意識が浮上せねばならない程の、無視できない痛み。せつかく眠りで封じ込めていたのに。

無意識に頭^{かぶり}を振り、その些細な振動に新たな傷みを覚えました。

うつすらと瞼を持ち上げると、ぼやけてはいましたが

ニーナが心配そうに覗き込んでいます。

そして恐ろしく険しい顔で見下ろしている、ご領主様とも目が合いました。

ビクつき身を擦ったために起こった痛みにも、意識はすっかり覚醒です。

「ああ リューム様。だいじょうぶでございますか？せつかくお薬が効いてお休みでしたのに・・・申しわけございません」

ぐずぐずと痛みでぐずりだした子供をあやすような優しい声音と、気遣うように髪をすくい上げてくれる指先に慰められました。またそのまま心地よく瞼を閉じます。

しばらくひんやりした手が額と瞼を覆っていてくれたお蔭で、何の気かりも無くまた眠りに引き戻されて行きます。

その波間に漂うほんの僅かに。

ああ、もう。せつかくやつと寝付いたばかりだと言いますのに。何が見舞うだけですか、まったくもう！

という二ーナの、打って変わって責め立てる様な声を聞いたのでした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

『絶対に逆らってはならないのよ？リューム、わかった？ 絶対に』

常々母から聞かされてきた言葉に、黙って首を縦に振り続けて7年。繰り返される呪文のお蔭か、この生意気な性分は抑えられていたようです。

しかしその呪文を唱えてくれる方も、もうおりません。記憶の中から浮かび上がってくる声音も、既に効力を失いつつあるようです。リューム・・・おかー様の事は今も変わらず愛しておりますが、どうしても好きにはなれませんでした。それは呪文と。そう表して間違いの無い、恐ろしい呪いです。建前はリュームのためを思っていると。

思い出したように己の首筋に手を這わせました。左の鎖骨の辺り。ご領主様にガブリといかれた辺り。

(・・・気持ち・・・悪い・・・)

思い出しただけでも虫唾が走ります。あれからいくらか日も立ち、当時ほどの強烈さは無いにしても、この首筋を掻き^{むし}りたい衝動は抑えようがありません。

その内なる衝動に従った結果がコレです。喉元、包帯でぐるぐる巻き。なぜかって？

リユーム、気が付いたらナイフでその部分を、削ぎ落としてやるうとしていたのです。

私にしてみたら何てことはない、あの方の名残を消せればそれでよし。薄皮一枚剥げればそれでよし。

気が付いたら部屋にあつた果物用ナイフ持って、鏡の前に立っていました。

そんな軽はずみな行動を取った事を、今は反省する事しきり。別に死ぬつもりなんて無かったのでしたけど場所が場所なだけにそりゃーもー大騒ぎになりました。

しかも、思ったよりも出血しましてー・・・。

『刃物は消毒すべし』なんて知識の無いリユームですから、傷口が膿んだ拳句発熱。

もちろん見つからないハズもなく、侍女の皆さんにはめちゃくちや泣かれた上、がんがん怒られました。

(もちろん誰かサマとは違ってちゃんと容態が落ち着いてからですよー)

『何て事なさるんですか!』

『ひとつ間違えればこの程度で済まなかったんですよ!わかってらっしゃるんですか!?』

と、怒鳴られた後は号泣されると言う。

『こ、こんなうら若きお嫁入り前のお嬢様が!痕になったらどうされるんですか』

あ、大丈夫。どこにも嫁の貰い手ないから。

と、答えたらもつと怒られたし泣かれまして疲れました。

(それこそ・・・あんなご領主様に付けられた痕を晒して生きていく方が、わたくしには屈辱です)

そう言っただけならどんなにいいか・・・・・・確実にまたお小言をくらいかねないので、黙って飲み込みましたけどね！

さてさて、気を取り直して。リユームは夜の体力作りさんぽに勤いそしみたいと思います。

何せ一人では怖い館内も、今夜は心強い事に猫さんが一緒なので

「ふふふ。。」

思わず笑ってしまいました。何だか楽しくて。闇夜のカラスのリユームに、同じく真っ黒の猫さんの組み合わせなんて最高ではないですか。何かあっても夜闇がこの身をくるんで、紛らわせてくれるでしょうから。

” どうしたの、リユーム？”

「だって。楽しいんですもの！こうやって人並みに健康な身体で、猫さんと夜一緒にお散歩できて！」

” それは光栄だね。ボクもだよ”

「ふふふ。ねえ、猫さん・・・。」

リユーム食べられちゃう所だったんだよ。

意識手放す直前に聞いたあの衝撃の一言。

それから『花を売る』という言葉が、なぜあんなにもご領主様のお怒りに触れたのか。

” 俺が買っただけ” と吐き捨てられた言葉。

一昨日やっとなんか身体を起こせるようになったので、ニーナにこっそり尋ねてみました。もちろん、猫さんの事は内緒のまま。

でも、ご領主様との喧嘩バトルの事は告げました。

『ね、ニーナ。あのね……？』

寝台の横の椅子に腰掛けて控えてくれている彼女に、聞いてくれるかと切り出すと、はい何でしょう？と優しく微笑んでくれました。それなのに。

『……でね、ごりよ、しゅ様に”俺が買・てやる”て言われ……てね。そえからね、』

寝台に押さえ付けられて、首筋をガブリ。と、行かれてしまった経緯を話したのですよ。そうしたらですね……。

泣かれてしまいました。

ごりや、とんでもない事をご領主様にしでかしたんだな、またお説教されるんだな等とも身構えてしまいましたが。

あわわわわ……。泣かないでと声にならな
いまま手をバタつかせるばかりでした。

そんなリユームをニーナは『お可哀相に』と言いながら、抱きしめてくれました。

『さぞ、恐ろしかったことでしょう』と涙ぐみながら。

大丈夫、と答えるためにニーナの服の袖を引っ張ったのですが……うまく伝わらなかつたようです。

『……リユーム、食べられるところだ・た？』

そうもう一つの疑問を口にした途端、腕に込められる力が強まって一層やり切れなさが募ってしまいました。

ニーナの表情は全く見えませんでした。泣いているのだけは伝わってきます。

『ごめなさい、にーな』

もう泣かないで。

『こんな幼くてかわいお嬢様に……何てことを』

リユームはもう十八歳ですよ？と抗議し掛けましたが、止めました。

第五話 シェンテラン家で広がる波紋（後書き）

はい、どうもお疲れ様です。

この子にちゃんと教育係つけてやれ　！

そんなツツコミがきてもおかしくない、十八歳。

年頃の友達もいないし、母親はもういないしでこの先不安ですね。

しかし本能でかなりやばかったのは、しっかり察していて気持ち悪さにすつきりしない様子。

……ちゃんと理解できたとき、どうなる事やら。

一応15禁の主人公なのでがんばっていただきたいところです。

第六話 シェンテラン家の夜の秘密（前書き）

実の所、はりきった時点であらかた体力は使い果たしている事を、
いまだ学習していないリユーム。

一歩進んで二歩下がっているって、そろそろ気が付けない？

” リュームの体力の問題だから” だそうで。当然ですね。だつたらさつさと契約内容に『体力増強』も盛り込めって？

ちちち！それはいけません、感心できません。出来る事はなるべく自分で。でなければ真に健康を手に入れたことにはなりませんからね！

今まで体力付けようにもそれすらままなりませんでした、こつやつて『契約』の力を最小限かりつつ体力を付けて行けばですね・
・
・
・

きつと、契約なんぞに頼らなくても人並みの体力を身につけた、理想のリュームになっていく魂胆ですともよ！

さあさあ！この軟弱な身体を鍛えるために、あともう十六周行きますよつ！

何がリュームをここまで駆り立てるかと言いますと、やはり根底にあるのは『打倒！ご領主さま』なんです。

「……………」

あれ？打倒つて、倒す気満々？ 倒してどうする！いつのまにか目標が何か変わっている気がします、まあ・いいか！つい最近まで「この方のお荷物になつてばかりいて申し訳ない」等と、しおらしい気持ちはもはや何処いすこでしょうか！

探す気もありませんケドね。やっぱり心と身体は密接なのです。弱つてりや、弱つてる事しか考えつかないのです。きつと。

「うんっ……………」

考えがまとまつたので思わず、ぱんつと己の手のひら同士を打ち合わせました。

” ” りゅーむ？”

猫さんが何かまだ言いたそうでしたが、リュームときたら構わず自分の世界に突入中。

なので、目の端で猫さんの存在を確認しつつも回想は止まりません。
ん。

今更ですが。思えばあんなにご領主さまと話したの、初ですよ！

しかも、喧嘩にまで発展しちゃって。すごい進歩です。そして今は退化してますが（逃げ回ってるので）

何て収穫の多さかと実感しております。きつと、ものすごーく・
・話が合わない人だろうとは予想はしていましたが。

それを遥かに上回る、合わなさでしたから！きつとあちらも同じことを感じてらっしゃる事でしょう。

ええ。ええええ！！確信しておりますとも。こうやって一人でも力一杯、頷きを繰り返してしまうほどに。

（きつと初めて会った時から、そこら辺を見越していたんだろうなあ）

ですから、ど・しょっぱなからの宣言にもリユーム納得。ものすごく頷けます。

（このまま、やられっ放しでいるものかあゝゝ！．．．．．でも、ちよつと苦しいや．．．．．休みたい．．．力モ）

いやいやいやいや！そんな甘ったれた事をぬかしては、いついつまでも大荷物人生のままです。

ちらりと浮かんだその考えを振り切るべく、ぶんぶんと頭を振ります。勢い良く！

．．．

．．．．．

” リユーム．．．．．”

にや あ・あああ 。 猫さんが、ひときわ長く鳴きました。 た。

しかも、最後の方はあくびに成り代わりましたからね。こんにやる。

ええ。ええ！左様でございますともっ！

その場に眼を回してへたり込んだリユームを見つめるその緑の瞳に、やはりあのお方が重なってしまうのです。

屋で一休み中なのです。

リユームお気に入りの秘密の場所は、一人になりたい時に等ぴつたりの隠れ場所。

はじめはリユームがシンラがどうしているか気になったので、様子を見に行きたいと提案したのです。

” いいんじゃない？シンラも気にしてたし”

「そうですね。．．．ん？も？」

” そう。あれからご領主に連れ攫われちゃったから、彼も心配していたよ”

「おこつていませんか？リユームのせいで、辛い目に遭ってませんか？シンラ」

” ．．．．．自分の目と耳で確かめてごらんよ”

そんなワケで訪れてみたのですが。吠え立てられたら怖いナアと思いつつ、猫さんの案内でシンラに会いに来たのです。

そろそろと納屋の引き戸を開けて、様子を窺えば彼は．．．．．起きていました。

前脚をお行儀良く重ね置き、後ろ足は投げ出す格好で、こちらをじっと見つめ返してくれます。

その凛々しい姿には感動すら覚えます。同時に首に掛けられた鎖に、罪悪感も覚ええました。

他の猟犬の皆さんとは離されて、一線を画しているシンラ。

彼はその温和な性格と賢さを買われ護衛として、館内の行き来の自由を許されていたほどの身分だったのに。

「シンラ．．．．．ごめんね。だいじょうぶ？」

痛む胸を抑えながら戸口から覗き込むようにして、彼に声を掛けました。

シンラの深い灰色の毛並の先を月明かりが照らしています。それがよりいっそう、彼の受け継いだであろう、野生の血筋が誇る美しさを際立たせています。

その琥珀色のキレイな瞳が、キラキラと光って少し怖いくらい。流石、狼の血を引くだけあります。月はきつとシンラの味方なのでしよう。そんな気さえます。

「ごめんなさい。リユームのせいで」

() 別に。嬢様が謝るいわれなど無い()

「……………!?!?」

シンラが！シンラが返事をしてくれました！

驚きのあまり言葉が出てきませんでした。口をぱくぱくさせながら、猫さんに視線ですがりました。

” ” シンラの意志が、わかるようになっていて驚いた？もちろん、ボクのおかげに決まってるでしょ？” と、またもや呆れたように言われました。……………ですよね。

……………。

そんなワケでシンラとお話する事が出来て、いくらか心の晴れた次第です。

『シンラ……………ごめんね』

() (いや。嬢様が謝る事ではないわ。若造めが嬢ちゃんへの振る舞いになっておらぬから、注意したまで。)()

だ、そうで……………。

そのまましばらく、シンラの傍らでくつろいでいました。

ここは乾いた干草が積み上げられており、いつもお日様とホコリの混じった香ばしい良い香りで満たされた場所！

リユームお気に入りの場所です。こっそり布地を持ち込んで、うまい具合に敷き詰めてここで寝転がるという感じですよ。

試行錯誤の結果、敷き用の布は厚手がいいです。薄いと干草がちくちくと刺さって、やや不快でしたと経験済み。

かねてからこっそり持ち込んである布地を引っ張り出してきて、シンラの隣に引きました。

そうやって皆で猫さんの名前を考えたり、おしゃべりしたりしてほんの少し呼吸が整うまでの間の休憩のはずが、すっかり忘れてしまいました。

「寝心地はいかがですか、エキ？」
「うっふっふっふ」と得意満面で尋ねました。

” ” リューム。君には呆れる” ”

「んん？聞き捨てなりませんね。何ですか？」

” ” 館内をその状態で四周と半分したあげく、こっやって敷き布という物体までを引きずり出してきた君を ” ”

エキがじつと緑の瞳を輝かせながら、リュームを覗き込んで言いました。

” ” 何という精神力かと驚かすにはいられない。そしてボクに名まで与えて。君はやはりタラヴァイ工家生粋の縁の者” ”

「は・い？」

何のことでございましょう？

” ” でもそろそろ、流石の精神力でも限界だと思っから。戻るよ、リューム” ”

「ええ ！大丈夫ですよ。それにまだ後、目標まで十六周残っているんですよ！」

まだもうちょっとこうしてたくて、エキに訴えましたが。

” ” あっそ。ボクは別にいいけど ?ご領主サマが君の身体にもうすぐ触れちゃってもいいなら別にいっく?” ”

「戻りますともよ!!」
「触れる?もうすぐ!?!リュームにつ!?!」

言われた言葉に驚き、思わず勢い良く振り返ってみました。背後に人影でもあるものなら確実に驚きのあまり、絶叫していたでし

寒い……身を包む肌寒さに違和感を覚えました。何せ突然、寒さを感じたものだから。

「おい」

それと、どこかしら覚えのある何か頬を掠かすめています。何だったかな　？どこでだったかな……？

「　おい、こら。リユーム。起きろ、こんな所で眠っているんじゃない」

「ん……？」

「それとも、また行き倒れているのか」

「ん……な、に……？」

眠い。眠たくてたまらない。瞼を持ち上げようにも、億劫で。誰かが呼んでいる、ようなのに意識が保てない　？

身体が沈んでいくみたいに、重たくて意識ごと飲まれて行くようです。

重すぎて、意識ですらも一緒に飲み込まれて行くのを止められません。

はあ、という深く何やら重苦しいため息が、耳を掠めましたけどうつすることもできませんでした。

誰が、とか。誰の、とか。そういった疑問も一切合財いっさいがっさい全てひっくりめて、一緒に沈んでいくようです。

頬に触れていた冷たい節くれだった何か。それが今度は前髪をかき上げて、額に当てられました。

その冷たい感触と重みに、ますます意識は押さえ込まれて行くようです。

「……行き倒れている方が」

（ああ、そうか。これは　手だ……男の人の、おおきな、手のひらだ……？）

誰の、という浮かんだ疑問符に、なぜか疑いようも無く。こう、結論付けていました。

「……おと、さ……」

ま、と言いつわり終わる頃には、これまた身に覚えのある浮遊感を心地よく感じながら、身を任せ切ったら最後。

後はもう何も感じられないまま、闇に漂っていたようです。

そうして迎えた朝の光は、出し惜しみと言うものがありません。そして遠慮も。容赦なくリュームの寝台にまで、日の光は射し込んできます。

(眩し……おはようございます)

今日も何て素晴らしい朝でしょう　　と、眩しさに眼を^{すが}眇めながら身を起こします。

そのまましばらく寝台に起き上がったまま、ぼけーっとしていました。

(はて？何か変だぞ？昨日は確か　　？猫さん……エキと、確か・夜の体力づくりに張り切って出向いた覚えがあるのですか？)

うう　　っむ、っといくら唸ってみても、どうやって部屋に戻ってきたのかが記憶にありません。

ふと、テーブルの上に置かれた一枚の紙に気が付きました。昨晚までは見かけませんでしたから、何でしょうかと近付いてみて。

……リューム、驚愕のあまり指先が震えました。そのまま、持ち上げた紙がひらりと指先をすり抜けて行きます。

(こ、これは、間違いなく……！)

その殴り書き具合からも容易に推し量れるであろう不機嫌さが物語る、その筆跡の主は一人しか思い当たりませんとも。

『この次　　。館内で行き倒れていても、己の巢に戻って休めると思っな。ジ・リューム・タラヴァイエ　　^{この}　　カラス娘！』

なななな何でこんな手紙がつ！いつの間にリュームのもとにっ！そして相変らず意味不明なんですけど？

何が仰りたいのか全く持って、ぜんぜん！ わかり
ま せ ん ！ ！

リュ・ムときたらその場に固まってしまっ、いつまでも遠巻き
に落ちた紙を見下ろすばかりなのでした。

第六話 シェンテラン家の夜の秘密（後書き）

はい、お疲れ様でした〜！

いきなり本編に関係ない裏話を、ひとつ。

あのバカに手紙を書いて置いてきた。

本当は勢いに任せて二枚目まで書いたのだが、部屋を出る直前に忌々しくなって やはり止めた。

戻って二枚目をひったくると、自室に持ち帰った。

今こうして、読み返してみると改めて己の判断が正しかったと確信している。

『ちゃんと薬を飲んでいるのか。』

『もっとアレコレ食う努力をしろ。』

『夜中に出歩くな。』

『もっと服は厚手のものにしろ。』

『もっと己と言うものをわきまえて行動しろ。』

．．．．．などなど。延々と書いた小言は直接あの娘に言うか、彼女付きの侍女に告げる事にした。

しばらく無言で己の殴り書きを眺めた後、その手紙を勢いつけて丸めてくずかごに放る。

全く持ってどうかしていた
その一言に尽きる。

．．．．．

”はい、リユーム。これ、預かってきたよ！”

「なあに？誰から　．．．．．！」

エキがくわえてきた、ぐしゃぐしゃに丸められていた紙。
広げ見て。

そこにまた見覚えある筆跡に、リユームはただその場に凍りついたのでした。

にゃ　　っはっはっはっはっは………。

「なっ、ちょ、これっ、何っ!!!エキ　　待って、説明してっ!!!」

第七話 シェンテラン家の新しい風向き(前書き)

ここからは言うなれば『新章』の幕開けとなります。

ちなみに(仮)タイトルは『受けて立ったはいいけれど。』

全体的な才手を予想させますね、リユームや？

第七話 シエンテラン家の新しい風向き

リユーム。おまえの豪語する『人並みの体力』とやらをお披露目してみるか？

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

はい。

迷い無くお答えしたのはこの口です。

ジ・リユーム・・タラヴァイエこと、シエンテラン家の養女にして現・ご領主様の義妹の！

こ・の！ 私めでございます。

そしてその言葉に後悔は無いと言えば嘘になる。。。。。。。。。。只今そんな状況の真つ只中のリユームです。

正直に申し上げます。

今、疲労のあまり気が遠くなり掛けております。そこを何とか踏み止まっている次第です。。。。。。。。。。よ。。。。。。。。。。。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

事の始まりは半月ほど前に遡ります。

「来月ご領主様は、正式にこの領土の主様とされますから。任命式がございませすんです」

差し向かいでニーナから刺繍を習いつつ。ニーナは針仕事をしながら、色々と教えてくれます。

刺繍も上達しておけば、身を立てるのに役に立つでしょうと言う寸法です。小さい事から抜かりなくがリユームの主義です。

図案を考えたり、糸の配色を考えたり。一針一針ちくちくと丁寧。実に地道で、根気の要る作業です。

でもだんだんと自分の手元が、華やかに彩られていく様は楽しいものです。

作業に没頭していたのですが、ニーナの話に手を止めました。

「せいしき？え……そうなの？」

「はい。まだ前・領主様と奥方様の喪も明けておりませんでしたからね。任命式という晴れやかな舞台は、そういった事が落ち着くまで行わずにいるものですからね」

今まではまだ仮の状態だったそうです。たとえ公にそのお仕事をされていても、試験期間だったそうです。……知らなかった。

『これからは領主と呼ぶように』とすぐ館の皆に命を出されていたから、もうてつきり本決まりだと思っていましたから。

お義父様が亡くなられたのも急だったせいもあって、引継ぎの事務処理だの審議会の協議だのに手間取つたらしいです。

ニーナの話によると来月、ルゼ・ジャスリート公爵様から直々に任命のお言葉を賜る『任命式』が執り行われるそうです。

ルゼ様。このサンザスの国ウルフィード地区をお治めになつてらっしゃる公爵様。しかも、女性の方と伺つております。

（はあ……！すごいです！同じ女性でもリユームとは全然違いすぎますね……。いいな。リユームも人のお役に立てたら。お仕事できたら、いいな。そしたら、ちよっとは見直して貰えるかもです）

そこまで考えて止まってしまいました。

（ん？見直して貰うって、誰に？）

リユームの役立たずぶりは、自他共に認めるところですからね。

幼い頃の野望『おとーさまの後釜狙って役職持ち』は、いまだにリユームの中でくすぶっていたようです。

何もリユームも好きで『ただ飯ぐらいの役立たず』に、甘んじている訳ではございません。

抜け出せる機会があるなら、いつだって飛び込む構えですよ。本気ですともよ！

その為にも何を差し置いてもまずは健康な体作りからですね。とほほ。結局そこに行き着く自分に、とほほ……。

「そのご準備でシエンテラン家の皆様方もお忙しくなりますよ、きつと。ご領主様は勿論のこと、リユーム様もお支度しなければなりませんわね」

「……」

(いやいや。それはリユームには関係ないよ、きつと。だってねえ、リユームの存在はシエンテラン家の 恥だから……)

あの方はけつしてリユームを公の場には出さないでしょうから。そうは思いましたがわくわくと声を弾ませているニーナには悪いので、ただ黙って聞いていました。

へえ〜？ふ〜ん。そ〜ですか〜。何て思いつきり『他人事』として聞き流していた、穏やかな昼下がりに。

そこで突然扉がノックされました。

「はい？」

ニーナが素早く出向いてくれましたが、それよりも早く扉が開け放たれていました。

侍女が礼を取ったのと同時に、その背後に立つ人影にリユームは思わず立ち上がってしまったじゃありませんか！

……派手に椅子が後ろに倒れました。いえ何も自然に倒れたワケではなく、倒したのはわたくしですが。

おまけに倒れた拍子に椅子の脚が、リユームの太腿ふとももの裏を直撃です。痛い。

ガツタ・・・　ンツン！後、リユームの「いたあ・！」という情けの無い声が続きます。

それくらい動揺も露わなリユームに、そういえば名前も知らない侍女の方。一つも動じずにいてくれてありがとう。

・・・二ーナも。笑いを堪えてくれてありがとう。

「失礼致します、リユーム様。　ご領主様のご訪問にございます」

とまあ、前触れも無く。突然ご領主様のご訪問にあつた訳です。

呆気ないほど穏やかな午後よ、さようなら。

（こつこつこのを噂をすれば、何とかって言っんですよね？あつこつこつ）

穏やかさは何処へやら。いかにも用があつて仕方なく来ましたと言わんばかりの険悪な表情に、リユームの表情も翳っている事でしょう。

実際あつという間に日が翳り、部屋の温度すら下がった気がします。

前触れも無くイキナリでは逃げ出す口実・・・気分が優れないの何だのと病弱を逆手に取る作戦の実行もかなわずです。

（おのれ・・・こつこつなるともうコレはこやがらせ奇襲でございましょうよ、そつでしようよ！）

しづしづ　。差し向かいで義理の兄妹はお茶を飲むはめになったのですが。

「　本日はわざわざお運び下さり・・・あ・あり・あ、がたく・・・
・・・存じます」

「ああ・・・」

（ご領主様はおそらくご公務を終えられたばかりなのかもしれない。それともまだ執務中なのかもしれない）

彼の装いがいつもお見かけする時より、物々しいのでそう思いながら頭を下げました。

その銀糸で襟元を刺繍された黒い上等そうな上着を、出来ればお脱ぎにならないかなあと願いながら。

それを羽織られている様が、いつもの圧迫感が三割ほど増しているように感じます。

（黒というのはやはり・・・あまり面積が大きいと、人に圧迫感を与えてしまうものなのかもしれませんね。

リユームも、でしょうか？）

そう考えて思わず、小さくため息を漏らしてしまいそうになりました。

（せっかく・・・ご領主様の方を見ないように、深々と頭を下げているのに）

今日は髪を下ろしたままなので、頭を下げた途端自分の黒髪が視界を遮ります。

それすらも視界から締め出す為に、ご領主様が席に付かれるまで自分の足の靴先を見つめていました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ありがたく、の後に続く言葉に思わず一呼吸置いてしまったのは、本音ではなく建前を言わねばならない自分にうんざりきたからです。本当はありがたくの後は、『ないんですけど』って続けられない自分につながり。

でもオトナな対応でしょうか？えらいぞ、リユームと自画自賛。ちなみに好き放題をこの方に言ったら最後、また喧嘩バトルになる事くらい大バカのそしりを受けた（根に持ってますね）娘でもわかってますよ。だ。

そんな調子で堅苦しい、そしてワタクシは息苦しさも伴なう挨拶が終わった時点で既に・会・話・終・了・！　どうしろと？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ニーナが給仕をしてくれるのが救いと言えば救いです。

無言。誰もが。

二ーナの淹れてくれたお茶を無言ですするだけ。カップと受け皿が控えめに立てる音だけが嫌に響きます。

これが気まずいの何の……リユーム早々に降参。耐えられなくて自分から切り出しました。

「あの……今日はどうい……たご用件でしょう?」

「用が無ければ訪れるなど?」

「え? ない……ですか!」

じゃあ、何しに来たんですか? そう思いつきり不審がつて、責めるような調子が出たのには自分でもびっくり。

思わず俯きがちになっていた面を上げてしまいました。その途端に、煌びやかな金の髪が眼にしみみます。

思わず、驚きの為に見開いた目を眇すがめてしまう程に。

そもそもご領主様のお言葉にびっくり。絶対のつぴきならない理由でもなければ、リユームなんて無視してるくせに。

結果。不本意ながら眼差しが絡み合う事に。

「……………」

何も睨まなくてもいいじゃありませんか! 思わずあからさまに顔を背けちゃいましたよ! 何の取り繕いも無く。

無礼丸出しです。しかしリユームはそれ所じゃありませんでした。二ーナの必死の目配せにも気が付かないくらい。

(……………つく! 悔しい……負けたっ!)

視線の切り晒し合いに。その眼力まで強すぎですよ。膝の上

に置いた己の拳を握り締めたのは言うまでもありません。

普段から食卓も別々。あの喧嘩バトル以来特に接触を避けている者同士が、会話も弾みようが無く。

そもそもですねえ、会話のやり取りなんてものが成立した例ためしがないんですよ?

本当に何しにいらしたんですか? 嫌がらせですか。それともこの間の喧嘩の決着でも付けにですか。

(ああ、そうそう。アレだ　！アレでしょう！『意味不明なんですけどあの手紙。カラス娘がこの次・行き倒れを起こしたら、自分の巢に戻れないように遠方にも見限るって事でしょうか？　望むところですので、どうぞどうぞ。』って同じく手紙で返事を書いたから。その件でまたリユームを解釈違いとバカ呼ばわりしにいらした、とか？)

ちなみに。ご領主様に当てた手紙にはそんな馴れ馴れしさ皆無の、必殺お嬢様口調で書きましたからご安心を！

まあ言いたい内容はそんな感じでした。要は言いたい事を、ばか丁寧な調子で書いただけで内容は無礼ですと認めます。

何気に静かに戦闘態勢の構え継続中と、察していただけました事でしょう。

正直それつきり何の音沙汰も無いので、今の今まで忘れておりましたが。

(自分から切り出すのもまた・・・お怒りを買いそうですしねえ？でもなかなかそのような運びにならないと言う事は、もっと違う目的が有られる様にお見受けします。

そんなリユームの考える事は、もう！ただただ、一点に絞られております。

(ど、どうやってお引取り願おうかなあ、もう・・・)

このままお開きに持ち込むために、仮病でも使おうかと軽く考え始めた頃。

突然、ご領主様は一言呟かれました。何を見ても無く、視線はご自身のお手元に置いたままで。

「縫い取り物・・・か？」

「あ・・・？え、はい？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

会話終了。

(縫い取り？　あ、刺繍の事かな？)

「……………」
「引くのも同時です。お互いに黙り込みました。」

「何だ？」

「何でございましょう？」

「俺が訊いている」

「え……あ、はい。申しわけございません」

再び沈黙。だってねえ。何とまとめればいいのでしょうか？

衣食住まるつきり頼りっぱなしの割りに感謝の言葉も無いので反省中です、何て。

「……………リユーム。」

「失礼ですが、ご領主様。リユーム様がそろそろお疲れのご様子かと。それにお薬の時間でございますので」

『お引取り願います。』

流石にそこまではつきり口にしないまでも、暗にそう告げている事を隠そうともせずにニーナが助け舟を出してくれました。

「そうか……………この体調はどうだ？」

「はい。最近は発作も起こされませんが、お熱も出されません。いくらかお疲れ安い事を除けば、ずいぶん健やかになりました」

「リユームはもう、大丈夫です」

何気に放り出し推薦。もう野垂れ死にの可能性は無いので、いつでもどうぞ。

「そうか。ならばリユーム。オマエが何時ぞや豪語した『人並みの体力』とやらを披露して見るか？」

「はい」

不敵な笑みに思わず答えておりました。ためらわず。その『お披露目』の内容やらを確認もせずに。

「来月の任命式にシエンテラン家の身内として立ち会え」
それは要するに、リユームに公の場（おまひけ）に出席しろと言う命令。

。。。

。。。

。。。。。。。

。。。。。

本気デスか？

「やりましたね！リユーム様っ、このニーナ、今日のような日をどんなに待ち望んでいた事でしょう！」

え。。。。。。？そんな、涙ぐむほど？

「お嬢さまのお美しさ、可愛らしさをお披露目するまたとない機会！ここで有力者の若様の目に留まれば、一気にご縁談が舞い込むこと間違いありません！さあ、お忙しくなりますよ」

え、えつと？ニーナ？

それもそうですけど。。。。。。ど〜？

コレ、どうしると？

どうしると！？

リユームの手にはなぜかご領主様の上着が。あの重苦しそうな黒の上着が。全く持って予想を裏切らない手触りの良さと、重厚さが上等さを静かに主張してくれる上着を！

いかようにして欲しいと仰っているのか！

リユームごときのお頭くぶではさっぱり解りませぬう。。。。。。

（）（）暗に、ってモノですか！？また？暗に何かを意味してそれをリユームに推し量れと？（）（）

動揺のあまりニーナの嬉しそうな声をどこか遠くに聞きながら、己の手の感じている確かな重みに。。。

第七話 シェンテラン家の新しい風向き（後書き）

お疲れ様でございました！

またしても長い・長い。軽く一話分詰め込んだのは、リュームの体調がよろしいせいかと。

彼女目線なのでリュームがおしゃべりなら話が長くなり、具合が悪くてしゃべるのもやっとだと（やや）短くなるようです。

そして。恒例化させようかと目論んでいる・どうでもいい裏話行きます。

” ” ねえねえ、リュームう？ さっきのお手紙はなんて書いたの？ ”

そろりそろりとご領主様のお部屋の扉に、手紙をすべりこませた帰り道。

相変わらず挙動不審。見つかったらどうなる事やら。
なので素早く速やかに！立ち去るべく早足です。付き合ってくれる
エキも一緒に。

「ん？あのね」

かさり。

ごくごく僅かな空気を振るわせた音も、この過敏な神経は聞き逃す事が無いようだ。

(何だ………?)

僅かな灯かりの中で、視界に浮かぶのは白い紙。

扉の隙間からのぞくソレを抜き取り、広げ見て言葉を失う。

『カラス娘の巢は何処へなりともって頂いて結構です。どうぞい領主様のお好きなように』

「……って。今度行き倒れたらそのままにしておくなり、どこか遠くにやるなりして頂くようにと思って」

” うわ………。無邪気って怖いね ”

「？」

” うん。この次は無いと思った方が身のためだよ ”

「うん？」

” ねえ？ それ『素』なの？ ”

第八話 シェンテラン家の主の名(前書き)

(仮) タイトルは『予想通りぐつたり。』でした。

だから何だ、毎回？ですね。すみません。一応方向性が伝わりやすいので報告。

そう。そして(仮) タイトルは大抵次回へと持ち越されるのでした

第八話 シェンテラン家の主の名

はい。

そもそもこうしてご領主様の晴れの舞台に立ち会う前にですなー。

。。。。。

あらかた体力を消費してしまったのです。

ただでさえ持ち合わせも少ないと言うのにですわ。

本当にもうどうしましようかという焦りすらどこか遠い、意識を保つのが精一杯いっぱいなのが窺えます。

そこら辺は妙に冷静に己を分析出来るあたりで、かなり。ええ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

朝も早い時間からーナ達の何やら思い入れのこもった衣装に着替えさせられ、念入りに髪を結い上げられ。

普段なら絶対に履かない先細りの華奢な靴に、歩き出す前から何ともいえない嫌な予感がひしひしと押し掛かってきましたんですよ。

何て事は。。。『ああ　！朝からいい仕事をしたわ！』という表情のーナたちに誰が申し伝えられますわ。

いかに大バカのそしりを受け続けて（根に持って）いるリユームとて、場の空気ぐらい読めますことよ？

しかしですね、さすがにここまで。準備の段階からして　思っただけで思わず視線は遠　くをさ迷います。

ただでさえ念には念をとつか。もはや執念と言いましようか、この念の入れようは。

『リユーム様を何処から見ても立派なシェンテラン家の誇る淑女に
』』

何に對しての意地なのかもはやりユームには量りかねますが・・・

二ーナを筆頭に侍女の皆様方のこの熱い想いを背負って、出で立
つリユームの姿を勇姿と捉えてくださる方！

大募集でございます。

等とは訊いてはなりません。何となく本能が回避せよとお伝え下
さることに。

(二ーナが・・・絶対に真つ先に挙手してくれるに決まっていますけ
どね。せつかくだけでも、リユームちよつと疲れちゃったなあ)

いつも以上に食事と薬と就寝の時間は厳守の半月。

それはいいです。『この脆弱極まりない身体を人並みの体力に持
って行こう！おー！』月間はいまだに開催中ですもの。

しかーし。・・・食事の。場合によっては薬の時間も、に
ですね。。。

『ご領主様・ご同席』だったですよ。ここ半月ばかり。おおうう。

。。。

。。。

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

ほとんど所か！ほぼ無言の食事時間はもはや拷問の時間でしたと
も！

ある時は。

「リユーム様。『もう少しお召し上がりになるように』とのご領主
様からのご伝言ですわ」

「はい。努力いたしておりますとお伝え下さい」

ちなみにご領主様は上座。リユームはその斜め向かい前。何も長テーブルのはじつことはじつこに、お互い席を取っているワケではございません。椅子一つ分距離は空けてあります程度です。空けてありますのは、まあ、・・・習慣でしょうかね。

元はお義父様が今ご領主様が座られているお席。リユームとおか様は隣同士で。その真向かいは、義兄と呼ばせなかつたこの方が。ちらりと盗み見ましたら、ご領主様は何食わぬ顔で食事に専念されておられるようです。

「・・・・・・・・。」

ふ、と思わずため息をこぼしてしまいました。

(・・・・・・・・本当は『ちゃんと食え!』と言いたいに違いない。だから貧弱なんだとか百回以上は言われ続けてますから、知ってます。でも無理でしょ? この状況でいつもより食べられなくなるとは考えられませんで?)

自分の目の前に盛られたお皿には、まだ半分以上お肉も野菜も残っています。それに向き合おうにも、どうにも胸がいつぱいな気がしてしまいます。とても重苦しくてやるせない。

食事を残し続ける罪悪感と共に、それは募って行くのです。

「リユーム様。俯きながらのお食事はあまり見栄えがしませんよ?」

「はい。申しわけありません」

(でしたら。この思い切り良く視界に入れたくないお方とは、食事の時間は別に設けてくださいますし)

そして、ある時は。

(「リユーム様。せつかくのご領主様とのお食事の席ですのに。何かお話になつてはいかがでしょうか?」)

「・・・・・・・・はい?お話・・・することですか?あ、の?特にはございませんか?」

あまりの無言の食卓に気をもんで下さったらしい給仕の侍女さん

を、思わず見上げてしまいました。

彼女はこそ、っと小さく言ってくれたのですが。リュームの音が驚きのあまり、少しばかり大きかったようでした。

(いや・いや・いや・いや。何かまた気に障る様なこと口走りかねないので、黙っておきますよ)

そんな気持ちは汲まれようも無く。むしろ『誰が貴方様と話すことなんか！ありやしませんよ？』と受け取られたとしても、何の言い訳も出来やしません。

『俺の方でも貴様と話す事など無い。オマエと食事を一緒に取っているのは忍耐力を養うためだ』

またしてもいつの間にか。自室のテーブルの上に置かれていた紙の両端を引き裂きましたよ。ビリッとね。

そんな事！睨んでいる暇がお有りなら、その場で言ってお下さいましよ！そんなにリュームと直接口をきくのは疎ましいのですか！ああ、そうですか！左様でございますか！忍耐力なくしてはリュームとは口もきけぬと！

(何おおおうー！！ 望むところですよ！だーあれーが・あ、貴方サマと話す事何かあるもんですか！)

いや。本当はお聞きたい事はあるんですけど、とつてもじやないけど面と向かってお聞き出来るような心臓。リュームは持ち合わせちゃおりませんの。ええ。

(はっ！？そうか！わかった！わかりましたよコレはリュームを鍛えるためですね。公爵家の方々の前でも緊張の余り倒れたりしないように！)

はたまた、ある時などは。
「リューム様。お食事の最中に上の空なのはいかかと思われ
ます」

「はい。上の、空で・た」

「リユーム様……。ご領主様から『その挙動不審は時と場所を考えて選べ』というお達しです」

しかも後々、こんな調子の反省会付き。

そんなこんな半月を過ごした自分を振り返り、改めてよくがんばったものだと思えて頂きたいくらいです。

えらい！仮病も使わず。えらい！かくれんぼしつつ、館内を逃亡とかしなかった！ えらく……ないですね。

だつて、すねええ？

リユーム毎食時こんな席を設けられていたら、餓死……。とまでは行かなくとも脆弱さにより一層磨きが掛かる所だったと踏んでいます。

栄養不足間違いなし。たださえその傾向にある身なのに。

思わずうな垂れて自分の体の線を見下ろしてみても、何てすつきりしたものでしょうかと思いました。

見下ろしたら真つ先に目に入るものは、自分の胸元であつて欲しいものです。

しかしソレは叶わずなのは間違いない事実です。

そこは咳と誰かさんの言葉の両刃から、胸をえぐられる様な日々のせいと踏んでいるリユーム。

曲がりなりにもこの、リユーム。あのおかー様の実の娘なんですから、もうちょっと、ごう……ねえ？

出るところは出ていても いいと思うんですよねえ。

(……な、何てよく言えばサワヤカな着こなしが……できていますか！リユームよ！)

見下ろしたら視界に真つ先に入るの、己の靴の先です。なんてね……はは。はは……はあああ……ですよ？

思わず胸元に手を当てると撫で下ろした格好になる、鏡の中の自分と目が合っていました。

(そんなリユームにあえてこのような胸元がすーすーするドレスを選んだのは、何の賭けですかニーナ。冒険ですか。ああ、そうです

か。リユームにコレで戦い抜けと言っわけですか？)

何やら戦いに行く前から戦意喪失。というよりも『戦意』なんぞ、はなから持ち合わせちゃいないリユーム。

それでもニーナ達の期待に少しでも応えるべく、なけなしの自信を引っかき集めて鏡の前でにらめっこです。

うす淡いクリーム色の光沢ある生地、それ一枚だけでは向こうが透けて見えるよなレースを重ねて。

その縁ふちをかがるのは、生まれたての木立の若芽の刺繡ものが目に見え鮮やかです。

繊細なレースをふんだんに用いて、それでいてドレスの型はいたって簡素なもの。

リユームの体の線をさらけ出し過ぎることの無い、控えめな裁断となっておりするのはどなた様のお気使いでしょうか？

それは。

・。:

:。・。)

『リユーム様は鎖骨リズボンの線がキレイに出ますから。その辺りを強調してみてもいいのでは？』

『しかし。しかーし……ですね！そういった物にしますとその、お胸元が……。』

『あくまで控えめな程度に。あまり切り込みは深くない方向で、それで背中も肩甲骨の上部が覗く程の深みを持たせようかとオモイマス！』

『危なくはありませんか？』

『危なく……ならない程度で』

『華やかさを出すために背面にはレースを腰帯に、裾にまで流れるよう施しましょうか。やや、交差させるように段差を付けて』

『長さは床に触れるか触れまいかといった長さで、ドレスよりも気持ち長く持たせて 歩きたびに風になびかせましよう』

『スカート部分は広がりを持たせずに、さりげなく脚にまとわりつくようにしましょう。裾の所々からレースが覗くように丈も計算しますから』

『 背面に飾りの留め具を付けませんか？』

『それは……危なくは……？』

『あえて。今にも零れ落ちそうな零型の飾りをひとつ、目立たせる方向を一押し』

『それは危ないかもしれませんが……？いやいや。うん。それくらいお楽しみが有った方がいいかもしれません』

『そこはそれ。リユーム様の髪の長さを生かして。一部はまとめ上げますが、少し後ろに流すよう残しましょう。ですから露骨に晒す事も無い訳ですよ。でも！ちよっとした動きによつては ちら見せる作戦ではいかがでしょうか？』

『それは賛成！後姿までも手抜きなく 行きましよう』

『いいですねー。嫌でも想像を駆り立てることでしょうねー。腕が鳴りますよね、本当に！』

『清楚で可憐。それでいて幼さの残る危うい色香。本人が気がつかない所がまた、悩ましいまでに罪作り。そんな幼い色仕掛け。そこら辺を踏まえて、表現していきませんか？』

隅々まで抜きなくなり、仕掛けていく方向で行きましょう！

『『『ええ！』』』

『 さんの危険度が増すのでしょうか？ リユームの転ぶ確率が、でしょうか？』

『 お楽しみ？かき立てられる ……って何がですか？何かおもしろい事でもやりかねない、リユームの間抜け具合でしょうか？』

” なかなか楽しそうだねーリユームの周りの侍女サン達い”
「そーだねえ、エキい……。あゝそれにしても暖かくって、眠たいねーシンラあ？」

” リユームう？も・ちよつとは興味持ったらどう？仮にも君の事みたいだし”

呆れながら言うエキだつて、あくびをしつつの助言です。

そんなこと言われましてもねえ。この状態では聞かなかつたことにするのが、礼儀って物でしょうよ？

リユームはエキとこつそりと、部屋を抜け出して納屋の中。リユームはシンラに寄りかかり、エキはリユームの膝の上です。

干草の上にごろごろしながら、そんなやり取りを耳にしながらうとうとしていた次第です。

声の中心はニーナでしたし。まさかここで口を挟みでもしたら驚かせちゃいますもの。

しかも。リユームが部屋を抜け出してシンラと、干草の上にいる所を見つかつてごらんさいよ？それこそまた騒ぎの元ですよ。というワケで。何やらひそひそ声からだんだんと。もはやそんな調子で収まりのきかなくなった彼女達の声を子守唄に、お昼寝続行しました。存分に満喫。

今思えばそれがこの半月のうちで、最もくつろげた時間だったかもしれない。ええ。

その日のくれる頃には、満面の笑みのニーナが。弾んだ声で『さ！リユーム様。採寸を致しますよ』と訪れたのでした。ハイ。

その後はもう。時間割なるものが組まれておりまして。

食事・お薬・教養・お勉強・お裁縫・沐浴・髪とお肌のお手入れ後に就寝。

きつつちりと組まれておりましたとも！何やら力のこもった眼

・・・」

「 ” ヴィンセイル ” 」

「 ・・・っ! ? 」

またしてもガッターンツ! と勢い良く椅子を倒してしまいましたよ!
たよ!

(いいいいいいのまにっ、いらしていたのですかっ 　ご領主様!)

リユーム思い切り動揺。当たり前です。またしても意識を飛ばし気味だったせいで、不覚にも気がつかなかった模様。

(おおうう!! な、なんてところを見られ・・・聞かれてしまったんでしょかあああゝあああ!)

そもそも。今日の主役ともあるう方がこんな所で何を? リユームに構っている場合ではないでしょうに。

そのご立派な出で立ちからして既に、彼は誰もが認める『シエンテラン家の主』で、『ご領主様』であらせますのに。

「 ” ヴィンセイル ” 」だ」

「 は、はい・・・っ・・・!! 」

「 ” ヴィンセイル ” 」

ご領主様は扉にもたれ掛かられていらしたのですが。ゆっくりと近付きながら、ご自分のお名前を繰り返されました。

「 ・・・も、もうしわけあり、 」

「 ” ヴィンセイル ” 」

リユームは驚きと恐怖のあまり、声が震えてしまいました。思わず一歩下がります。

といつても、鏡台に阻まれてしまいそれ以上は下がれませなんだ。

(これじゃ先が思いやられるとか! やっぱり恥だから欠席しろとか! そんなお達しにいらしたのでしょうか?)

静かに息を飲み・・・言い渡されるであろう処遇を待つてはみましたが、なかなかお言葉は振ってはきませんでした。

「？」

不思議に思つてそろりと見上げて、眼差しで問い掛けますれば、深い緑の眼がゆつくりと、ため息と共に伏せられました。

「 ” ヴェイン ” ” ”

顎をしゃくりながら、ご領主様は繰り返しました。

「 …… ヴェイン？ 」

「 そうだ。 ” セイル ” ” ”

「 セ・・・セイル ” ”

「 ” ヴェイン セイル ” ” ”

「 ヴェイン セイル ” ”

「 もう一度 ” ”

「 ヴェイン、セイル ” ”

「 もう少し。 ” セイル ” ” ”

「 ヴェイン・・・セイル？ ” ”

「 そうだ。それでいい ” ”

今度は深く頷かれました。それにはリユームも少しばかり小首を傾げました。何やらいつもと様子が違うので。

「 ” ヴェイン ” ” ”

すいと手が差し伸べられました。リユームはただそれをぼんやりと眺めるのみです。

「 ” セイル ” ” ”

そして根気良く繰り返されます。リユームはといえば、ただ。咳くような歌うような。その独特の言い方に集中してありました。そのせいでしょうか。何の構えもためらいも無く自分の右手を預けておりました。

まるでお利口さんの犬みたいに、お手。

それはもはやただの条件反射でしかありませんでしたが、気がついたらご領主様に手を引かれて歩き出しておりました。

「ヴィン、セエール？」
「” ヴィン、セイル”」
「ヴィン、セイル？」
「そうだ。” ヴィンセイル”」
「ヴィン・・・・セイル」
「” ヴィンセイル”」
「ヴィンセ、ル」

歩きなれた館内の回廊を渡ります。

ずっとご領主様の繰り返し返す名前を、これまた独特の口調を真似ながら続いたのでした。

その様子を。すれ違い様に礼を取って下さる館の皆様のも。

表情が何やらおかしそうに、口角を持ち上げ目尻を下げて。

・・・笑いを見せているような気がしますのはなぜでしょうか？

そしてその中でも、一番深い礼を取っていたのがニーナです。

彼女の表情も何やら堪えたものでした。そこはリユーム見抜いておりますよ。

そして。ひっそりと曲がり角で、ニーナが拳を振り上げるのも見ておりましたとも。

第八話 シェンテラン家の主の名（後書き）

15禁。

の割りに『ほのぼの』しちよります。

ま。

嵐の前の静けさでございます。

最初は18禁にするか迷ったのですが。

『そりゃ、あんまりだ！闇ふり払える兆しがねえ！』になるのでやめました

さて。 どうでもいい裏話。 行きます

。。。。

さて。

今日は私どものお嬢様こと、ジ・リユーム様が公の場に臨む大切な日。

いづなれば私どもの、綿密な計画と根回しと配慮が試される日でもございます。

「 ヴイン、シエ・・・？

” ” ヴイン、セイル” ”

「 ヴイ、ヴィ、セイル

” ” ヴイン セイル” ”

『おもしろいものが見られるよ！急いで！』

そんな慌ただしい中の、火急を知らせる情報に館内の人間が集まって来ているのには笑えた。

ふふふふふ。

やりましたねえ、リユーム様！

あの『ご領主様』が直々にお出迎えですよ！

ま。当のご本人は何が何やらといったご様子ですが、そこがまた愛しいワタクシのお嬢様です。

ええ。

ワ・タ・ク・シ・の、ですよ？　ご領主様？

そんな調子で礼を深く取りながらも、心の中で勝ち誇っておりましてよ。

そんな主サマと一瞬視線が絡みましたが、先にかわしたのはあちらでした。

その事がさらに手応えを感じてほくそ笑んでしまいます。

「あら………。バルハートさん」

「こんな所で何だ、ニーナ？持ち場に戻りなさい」

館内をまとめる、初老の彼にじろりと睨まれたが慣れているせいもあってか、ニッコリと笑って見せた。

「はい。私の持ち場はリユーム様のお側ですから。そういうバルハートさんこそ」

「わたしの持ち場はご領主様のお側だ」

主に事情通の勤め人の顔がこの回廊に揃っているのには、笑え

・
○ た
・

・
○
・

第九話 シェンテラン家の来賓（前書き）

がんばれ、リユーム

みんな暖かく見守っているぞ。

ガンバレ〜ヴィンセイル

みんな生ぬる く、見守ってるよ？

第九話 シェンテラン家の来賓

何と……何とご領主様自らに付き添われて、連れて来られたのは一番正門に近いこのお部屋。

お客様をお部屋にご案内する前に、お待ち頂く為の間です。

いつもキレイに整えられた間ですが、今日はまた一段と綺麗にされています。お花もたくさん。

この美しい白磁が来客時用の花瓶だと、リユームも知っています。お部屋も来るべき高貴な方をお迎えするために、よそ行き顔なようです。それは何やらこの場合も、誇らしげな気さえます。

嫌でも緊張感が高まります。何せリユームも……初めに近い公式の場。

『リユーム様っ！ご健闘をお祈りいたしますわ！』

この半月あまり折にふれ繰り返された言葉。ニーナを筆頭に、お世話してくれる皆からもらった激励を胸にリユームはこの日を迎えました。

しくじるわけには、いかないのであります！

リユームとて心得ております。リユームが『どこから見てもシェンテラン家の誇る淑女』とやらを演じ切れれば、それこそニーナたちにも少しはご恩返しが出来るつてもでしょう！

（脱・役立たずのまたとない好機到来でございますとも！！）

そんな力の入れようをおくびにも出さないのが、淑女のハズなので黙っておりますが。ええ。

『演じきる』等と思っている辺りで、だいぶ本来のリユームではなし得ない領域に食い込んでいる気がしないでもありませんが。

……そこはそれ。リユームの本質は庶民なのだから、仕方ない事です。大目に見て貰いましょう。

「ここで控えている」

そう命じられるままに頷き、促がされるまま椅子に腰を下ろしました。

「じき、公爵家の方がお着きになる。そうしたら式が始まる前に、挨拶だ。出来るな？」

「・・・・・・はい」

右手を取られたまま見下ろされて、リユームは小さく答えるのがやっとという有様。

これからそんな偉い方にお会いするという緊張感もさる事ながら、この只今の状況も誰か！誰か説明してください！

（な、何だっというのでしょうか。この方のこの調子は・・・・ちょっと、いつもと様子が・・・・？）

何とも言えない違和感です。

それがまた居心地の悪さとなつて、リユームの心はそわそわと落ち着きません。

落ち着く事が何よりも大切な場に臨むというのに、こんな調子でダイジョウブですか？ と自問自答。

いいえ、大丈夫じゃありません！・・・何て言ってる場合でもありませんが。

とにかく。この心臓に悪いお方に出来るだけ離れていただく事が、何よりの解決策と思われるのですが・・・・・・。

「あ、の、ごりよ、しゅさま？」

「何だ」

「え、と？手 手を」

離してくれないのだろうか？まさかこの状況のまま、公爵様のご到着を待つおつもりなのでしょうが？

そんな事された日には、今日の挨拶した時点で気力・体力共に使い果たしてしまうと思われませんが？

掴まれた手を引き抜こうとしたのですが、それも一瞬。リユームはその手をまた、自分から握り締めていました。

「……………」

「どうした!？」

「ごりよしゅさまは、寒いのですか？」

不思議に思いながら手を見つめます。そしてそれは恐らく、ご領主様も。お互いに。

「いや。寒い?何故だ」

「手が・・・冷たくてらっしやるから」

寒いのかと思つて。

その言葉を続けるよりも早く、ご領主様の大きな手のひらが視界を占めました。

思わず目を固く瞑ってしまったのですが、別にぶたれたりしませんでした。

ただ、額に手を当て込まれて。大きく後ろにのけ反りそうになつたくらいです。

「リユーム……………オマエ」

「はい？」

「控えているか、ニーナ!このバカに熱さましの薬を！」

はい!ただいま!

扉の向こうで、ニーナの張り上げた声が答えました。

慌てたように礼を取り、すぐさまニーナは準備に取り掛かるべく駆け出してしまったようです。

「……………べ、別に、熱なんかへいきです、

よ

と、押さえつける手のひらを跳ね返すべく、頭を持ち上げたのですが。

このバカ、とまたぎゅうと押さえ付けられてしまったのです。

……………本当にもう。やっぱり予想通りな展開に、自分でも笑つしかありませんよ。

本当にもう、何て言っていないやら。……申し訳ございません、すみませんでした！

そのまま重みに負けて、うな垂れてしまいそんな頭を必死で持ち上げます。

「これくらい、なんてことはないのです」

「……………」

「いつもの事、ですから！」

「無様に引っくり返って恥をかかせる可能性があるなら無理をせず・

……………部屋に戻れ」

「それはご命令ですか？」

「いや」

「では、戻りません」

「リユーム」

「立派にやり遂げて見せます」

見ていてください、リユームの生き様を……………って大げさな。ま

あ、それくらいの勢いと意気込みで臨む今日という晴れの日。

大きな手のひら越しに、緑の眼と睨みまなこあつたのでした。

「見得を切ったものだな」

「……………」

（切りますともお！そりゃ、切りますよ！何ですか、この気合と熱意の込められた衣装に加えて、期待のこめられた瞳に送り出されてごらんなさいませよお！）

本当はそう叫びたいのは山々ですが。

叫んだら折角の見得を切る演技も台無しなんで、黙っておくに越した事はありません。黙っておきます。

人はこうしてオトナになるんでしょうか？ ええ、そうですね
うとも！

「この次……館内で行き倒れたらどうなるか。覚悟の上だろうな」
” ”二度と自分の巣に戻れなくても” ”

意と眼差しを思い出したら。

(……………うわ……っ！)

リユーム新たな胸の痛みに思わず、身体を屈かがめてしまいました。胸を切り裂かれたような痛みと。

胸を占める切なさ。

この胸を満たすあたたかな疼き。

同じこの胸にいつぺんにせめぎ合う、何やら種類の異なる『痛み』の正体は　つかないようで、ついていきます。

このひとつの胸には抱えきれない想いが、出口を求めているのだとしても。

リユームは手放したりせず、大切に抱えておこうと思います。

この方とのどうしようもない七年間に、決るような痛みを絶え間なく与えられたとしても。

『さ、リユーム様……これで傷痕は見えませんかからね』……そう、泣きそうな顔でコサージュを付けてくれた皆の気使いに、感謝でいっぱいですよ。

(ありがとう……リユーム、バカな真似してごめんなさい)

何も考えずに軽々しく、自身を傷つけました事を深く・お詫び致します。そして、二度としませんと誓います。本当に今さら理解できました。確かに大ばか者のそしりを受ける訳ですね。とほほ。

「　どうした、リユーム？」

「な、な・でも、ありません……」

ん、そのまま息を飲み込みました。いつの間にか。

前のめりのリユームを、覗き込むようにしていたご領主様の視線がそうさせたのでございます。

「すこし、胸が……苦しくなっただけです」

「　リユーム……」

「いつものことだから、平気です。お薬、いただければ、治まるでしょう」

治まりますかねえ？

などと思っただのは、もちろん秘密ですが。

。．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．

風が吹き抜けて行ったようです。

それはリユームがちょうど、水薬を飲み切ったのと同じでした。

これは正直、飲むのに勇気と言うか。覚悟がいるのです。

．．．．．たいそう、苦いので。容赦なく。飲み口もさることながら、飲み下した後もしつこく残る苦さですよ。

一口、いかがですか？．．．って　リユームがちゃんと飲み切るのを見届けるまで、睨んでいたご領主様にもお勧めしてみたい。

そうしたら『熱なんて平気ですよ』 『薬なんかは頼るまでも無い』と強がったリユームの気持ちのいくらかはご理解頂けるかと？
睨むのは数瞬で止めといてやるか位には、ご容赦いただけるんじゃないでしょうか？

風が吹き抜けたのは、正門に続く扉が開け放たれたから。それは、もちろん意味する所はですね。

来ました、ですよ。

もちろん、今日の来賓の方々ですけど。意味合いとしては『リユーム・ついにこの時が来ましたか!』の、来ましたでもあります。（さあ！行きますか!）

吹き抜ける風は心地よく、リユームの上がりすぎた熱を冷ましてくれるようです。何とも頬を撫でる冷たさが．．．って、アレ？

アレ？

え、ちよ、っと？

待って下さいよ？

「顔が赤い　と思ったら、だんだん青白くなって行くな」

そりゃああああああ、そうでございませうともおおおお
お!!

ろつ背中も。

「あああああゝもおう！お加減というものを、少しは――！
そう声を上げて、見事に床に這い蹲るリユームを、素早く助け起
こしてくれたのは。

これまたもちろん、二一ナなのでした。

。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。

おでこ、赤いでしょうかね。

もしかして”まあるく赤い”何てことは、ありませんでしょうか
ね？

でなければ、こんなにも満面の笑みでいらっしやる公爵様の・・
笑いを堪えているであろう風情に説明が付きません。

あ・き・ら・か・に・！

その扇の向こうにお顔を忍ばせ気味にされてらっしやるルゼ様が、
小刻みに揺れてらっしやいますものね？

せめてもの救いといえば。

フィルガ様はあくまで、にこやかーに・温かーく・見守るがごと
き笑みを湛えて下さっている事です。

不思議な深みのある銀の髪とお揃いの瞳の、フィルガ様。初めて
目にする珍しい色合いです。

件のご領主様の^{くだん}上着を、かがつていた刺繍糸と同じ色です。リユ
ームはそれしか例えが見つかりません。

これがまたご領主様の金の髪と並ぶと、対照的でありました。

お日様の光を跳ね返したかのような^{こがね}黄金色と、月明かり受け止め
て 柔らかく光放つかのような灰味の強い銀色。

（あ！そうだつ！ シンラの毛並に似ていらっしやるのです）

良い例えが見つかりました。うん、うんとリユーム一人で納得し
て満足です。

「今日という晴れの日を楽しみにして来ました。シエンテラン家の若き主とその妹御のお二人。ご両親のご葬儀以来ですわね？」

「はい。その節は大変お世話になりました。既に喪も明け、亡き両親も哀しみから解き放たれた事でしょう」

「ご領主様は礼に乗っ取った口調で、頭を垂れながら答えられています。リユームもその横でそれに倣います。」

「そうですね。今日はご両親にとっても、誉れとなる祝いの日となるでしょう。どうぞお二人。お顔をお上げになって？」

「は」

「っ、は・・・い」

ルゼ様は明るくはつきりとした口調でいらっしゃるのですが、笑いを含んでいらっしゃるせいかとても親しげに感じます。

時折り目が合うと、ニツコリと笑いかけて下さいます。その瞳の色もまた、ご領主様と同じ深い緑なのですが。

ずいぶん印象が違って見えます。もっと 厳しい方を想像していたリユームにとっては、これもまた救いになりました。

お二人が自然に放たれている『威厳ある者の持つ特有の威圧感』も、何やら薄らいでいるようでリユームとしては助かりましたけど。

せつかくの厳かな場に臨む緊張感は、その・・・台無しのような？

（一応、ご挨拶は無事終了でございますよ？でも、どうしましょうか、ご領主様・・・？何だか、ルゼ様に示しとやらがつきませんでしたかね？）

何やらおでこに視線を感じるのですが、それは気のせいであって頂きたいものです。そう祈らずにはいられません。

「リユーム嬢？」

「はい」

「今日はお体の方はよろしくて？無理されてないかしら？」

「え・・・？あ、の？はい、だいじょぶですが」

なぜ、そんな事を？ルゼ様が尋ねるのかと思いました。それがま

た、表情と口調に現われていた模様。

気がついた時にはもう遅い。ああ、演じきろつにも。何とも危うい淑女です。

「私のこと、忘れちゃった？」

「え！？え……。と。は、い？」

小首を傾げて覗き込むようにされて、ルゼ様がリユームを見つめます。

「申し訳ありません。義妹これは葬儀の際は動揺して、取り乱しておりますから。正気であったとは言い難く」

「いいのよ。別に責めているわけではありませんよ、リユーム嬢。あなた……。ご葬儀の時もだいぶ、咳き込んでいらつしやったからだからね。貴女の体力ではこの今日の席も危ぶまれるかもしれないとお義兄にいさまから、お聞きしていたので気になったのです」

「ごしんぱい、いただいて・ありがとうございます。だ、だいじょぶ、です」

（あわわわ〜）『はじめまして』とか、挨拶してしまいましたよ！葬儀の時？思い出せ！思い出すんだ、リユーム！

うん、と。うん、と???

「貴女と。喪が明ける頃には、きつとまた会いましょうと。その時は、と『約束』したの。覚えていない？」

「……………!」

「思い出していただけたようね？」

ふふ、と。いたずらっぽく笑われるその様まで、何やら高貴な香りがあります。

リユーム、すっかり動揺してしまいました。

無言でひたすら、こくこくと首を縦に振り続けました。言葉を発しようにも、忘れてしまいました。

自分がしゃべれるのを　すっかり、きれいに。

第九話 シェンテラン家の来賓（後書き）

お疲れ様でございました！

またしても、長い。

恒例の（？）小話は、明日（2009・2・17）にはここに書きます。

予定は未定ですけど。

つてか、次回にしとけ？

.....。

では。

.....『有言実行！』いきまっす！』どっでもよくね？ 小話』

「やりましたね」 ニヤリと笑うは、ニーナ。

「やりました！」 満面の笑顔は、サラ。

「やりましたともっ」 拳を振り上げるは、スウミル。

「.....でも、ちょっとやりすぎましたかね？」

「.....かも.....ね？」

「もう、少し胸の切り込みは浅くても良かったかもしれませんね」

「盛りすぎたかも」

「パッドは何枚入れたんです？」

「入れてません」

「?!？」

「じゃ、何っ!?この半月で？」

「うん。採寸ミス。・・・ちゃんと矯正コルセット下着付けてからも、測ればよかったね。リユーム様、はと胸タイプだし。実際よりもふっくら感が・・・目立たせるよね」

「・・・・・・・・・・。」

「それ以外にもこの所の努力の甲斐あって、ふっくらされてきたしねえ。いい事だしね。」

「うん」「同感」

「・・・それにあの奥方様の血を引いてらっしゃるしね。将来に期待・大でしょう」

「それでもリユーム様ね、ご自身の事を”貧相なのであんまり身体の線が出ないものがいいです”って仰ったんだよ！」

「!？」

(お、恐るべし!思い込み!)

「ま・・・何にせよ。その思い込みを植えつけたであろう、張本人サマの前に立ちただかつてるといふ訳だ」

「勝敗は」

「・・・・・・・・もつ」

「ついでるんじゃないかなあ？」

「ニーナ！ご領主様がリユーム様に何か羽織る物を用意せよとの事だ」

「バルハートさん。リユーム様どうされました？寒がってらっしゃるんですか？」

「いや・・・だが、用意させるようにと」

「バルハートさん。ボレロは夜会用で、祝賀会のドレスには合いませんの」

「ええ」

「はい。御召し物に合わない、不自然なシヨールくらいしか」

「・・・わかった、ニーナ。ならばそうご領主様に申し上げてください」

「あら、大変。私、持ち場に戻らないと」

そんなワケで勝利を確信できた私達『リユーム様を見守る会』なのでした。

力強く頷かれては、もう隠し立てする気も起きません。いつそ、清らしい笑われっぷりにリユームもつられて笑ってしまいます。

しょうがないですよね、転んじやって、打っちゃったんです。そうそう。しょうがない、しょうがない。転んじやったものは！言葉も無いままルゼ様とひとしきり、笑いあいました。

すい、と優雅に手が伸ばされるその時まで。

……条件反射、とでもいましょうか。リユーム、思わず目をつむって身をすくめてしまったようです。

薄目を開けて見ると、ルゼ様は優しく微笑まれていらっしやいました。それは何故か。

いくらか哀しそうに見えたのは気のせいでしょうか。

その指先がそ……っと、リユームの額の中心に触れました。恐らく”まあるく赤い”であろう、その場所に。なでなで。

「ごめんなさいね、ぶしつけに……ついね」

触れてみたくなつてと、ルゼ様はリユームの額を撫でてくれます。

「い、いえ、そ……そんなに赤いですか？」

無視できないほどまでに。

鏡も無いので確認も出来ません。

実は先ほど助け起こされた時、ご領主様にも撫で付けられました多分。それはどうみたって、ごしごし・ごしごしと乱暴に擦られているだけだったので……何ともはやですが。

リユームの頭は後ろに大きく傾きました。それほどまでに、ごしごし！

ニーナが『余計に赤くなってしまう。』と、冷静に発言してくれなければ今頃。

リユーム、決戦の時を目前にして部屋に戻されていたことであり

ましょう。

そうです。ルゼ様直々にこうしてお呼び頂けなければ、危なかつたかも知れません。

。。。

。。。

『ご領主様。公爵殿がリユームお嬢様と是非、お話したいと仰せです。二人きりで』

約束とは何だ？

いえ、その、あのお。。。。。

何を約束したのだ。いいから言え

べ。別にたいした事じゃございません。

。。。。。。ジ・リユーム・タラヴァイエ。

う。。。。う。。。。うえつ。。。

そんなやり取りが始まってしまっていたので、助かりました！本当に。

そう告げてくれた執事のバルハートさんは、いつだって。。。。
いつも通りです。どんなにご領主様とリユームが気まずかろうと何だろうと、冷静に冷静に。落ち着いた様子のまま、接して下さいます。

さすがです！この館で誰よりも一番、年上なだけあります。

お亡くなりになったお義父様よりいくらか年上のバルハートさんを、リユームは尊敬してしまいます。

ご領主様が声を荒げられていても、彼から動揺を感じたことはありません。リユームもそうなりたいものです。

他の侍女の方の中にはやっぱり、動揺されているというか。気まずい想いをさせてしまって申し訳ないな、と思うことが多々あるものですから。

どうにかしようよですね、本当に。

『二人きりで』

公爵様と！

な、何の御用でしょうか？

バルハートさんの落ち着いた物腰に何となく安堵したのもつかの間、リユームみつともなく動揺。 相変らず。

こ、公爵様と？公爵様ですよ？公爵様・忘れたワケではないのですが、怒ってらっしゃるとか？

あわわ、あわわとただ手をいたずらに泳がせるばかりで、声も出ませんでした。

落ち着き皆無の『お嬢さま』ですみません、本当に！

そんな調子でバルハートさんとご領主様を、代わる代わる見上げました。

とりあえず、無言で一睨みされた後。

腕を組んだご領主様に顎をしゃくる仕草で促がされ、リユームは出来る限り深く・強く頷いて見せました。

『………言つて来い。』

（（お任せ下さい！））

そんな短い一言でしたが『無礼をとるなよ』『挙動不審は抑えろ』『下手したら後でわかってるだろうな？』という幻聴のおまけ付き。その一言に凝縮されているであろう意味合いをひししと感じ、受け止めまして臨みましたがとも！いざ、謁見の間！

。。。

。。。。

何故。このような流れになっているのかと言いますれば、ルゼ様がリユームとお話したいと仰って下さったからに他なりません。

そもそも。リユーム……この、お優しいご婦人とは『顔見知り』なのでした。

いつの間に。我ながらびっくり。

なぜ、さつさと報告しない！って怒鳴られそうだな……と軽く眩暈がしますが。

だって。リユーム。知らなかったのです。

お義父様とおかー様とのご葬儀の時。

優しく慰めてくれたこの方が、まさか現・公爵であらせられるルゼ・ジャスリート様だなんて。

思いもよりませなんだ。

そもそもあの時のリユームは、一人で立っているのもやっとの精神状態に加えて『エキとの契約前』でしたから。

熱も高い。

目の焦点はどこにも定まらず。

呼吸も不規則で荒く。

咳き込み始めている。

明らかに胸の病を患っていると見て取れる。

目も当てられない健康状態でしたが、まさか部屋で伏せている訳にも行きません。

そこはなけなしの気力を振り絞って、葬儀に立ち会っておりまして次第です。

具合の悪さはベールくらいでは隠しようもなく、傍から見てもよほどの見苦しさだったのでしよう。泣きじゃくりながら、咳き込む『後妻の連れ子で血のつながりの無い養女』に誰もが注目するのは当然でしょう。ただでさえ微妙だった立ち位置。

お義父様のおかげで保護されていたその立場。唯一『シエンテラン家の養女』と認めて下さっていたお方がいなくなれば……リユームごときはどうなるかなんて。

今すぐにも割れてもおかしくない、危うい薄氷に立たされた事くらい。

その扱い方いかんによっては、リユームの利用価値も推し量れると思われました。

その・・・ご領主様の、リユームに対する態度如何いかにによってそれは量られるのです。

リユームのシェンテラン家における目方が、千金の重みに値するのか。鳥の羽根一枚ほどでしかないのか。

『この病持ちを一刻も早く、下がらせる！』

鋭く場を打った叱責に、慌ててニーナが駆け寄って来てくれました。その時のニーナの眼差しを、リユームは忘れる事など出来そうもありません。それは幾年月経とうとも。リユームがお墓に入るまできつと、ずっと。

甲問のお客様でさざめいていた聖堂が、一気に静まり返ったと言ふ事はそれだけ皆量りたかつたのだと思われれます。

答えは。あえてお答えするまでもないでしょう。

それを思い知った瞬間でした。

それでもせめてとお願いしたのです。ニーナには無理を言いました。彼女にも立場と言つものがありますのに。

また、わがままを言いました。お願いだから、葬儀には立ち合わせて欲しいと。せめてこの聖堂の影に居させて。姿は見えないようにするからと、必死にお願いしました。

それくらいさせていたできたかったのです。最後は言葉を交わす事もできないままだったのに、お別れを告げる手立てといえませめてお見送りくらいさせて欲しかったのです。どうしても。

ニーナも仕事がありましたから、リユームが部屋に戻った方がいい事くらい解っていました。

・・・・・・そうせずにはいられませんでした。

神官様のお言葉が終わるまでという約束をして、リユームはこっそり聖堂の影に身を隠しました。壁に寄りかかって耳を押し当てれ

ば、見えなくても中の様子が伝わってくるものです。

その壁の冷たさにくらか意識を保つ事ができましたから、何とか約束した場面まではお側に居る事ができました。

ただ、最期の献花^{けんか}だけは許されませんでした。

『 下がらせる！ 』

その命下った時点で、リユームはその場に立ち会う権利を無くしたのです。

無理にでもその場に乗り込めば命令に背いた事になり、ニーナにまでとばつちりが行くのは確実でした。

これ以上迷惑をかけたくなんでありませんでしたから、その場でひたすら !

ひたすらに二人のご冥福を祈り続けました。それがその時のリユームに出来る、精一杯でした。

『 病持ちはシエンテラン家の一員にあらず 』と。それに等しい宣告を受けたのです。

そんな事あえて宣告されるまでもなく、リユームはこの家に来た時から知っておりましたから構いません。

せめてお花を。二人にリユームからの、最期のお花を贈ってからお送りしたかったのです。

それが叶わずに、申し訳なくて。哀しくて。

ただただ、聖堂のレンガに額を押し当てて泣きました。

そして気がついたら、ゆっくりと。

嗚咽を飲み込み

呼吸を整えて

小さく小さく

ごくごく微小の声音で

歌を

歌を

この胸の内に湧き上がる何かは、衝動にも似たもの。
出口を求めるそれは、旋律をとって調べとなる。

” どうかどうか。その天に至るまでの死出の旅路が安らかなものでありますように。

怒りも哀しみも憂いも恨みも痛みも

すべてすべて。ここに留まる者達に預け置いて。

小鳥の羽根より軽き御魂となりて

喜びと嬉しさと安心と微笑みにまどろみながら

天の国の扉まで迷うことなく至る旅路でありますように

天の御使みつかいよ

どうか二人の御魂の道しるべとなるべく

側に寄り添ってください

.....

.....

.....

.....

小さく咳き込みながら、歌い終えたと同時に後ろから抱き止められたのです。

『だいじょうぶ、あなた!？』

緑の深い眼差しとぶつかりました。金の名残のある白髪に、深く刻まれたお顔や手のシワから察するにご年配というのは解ります。ですが歳など感じさせない気丈なお声でした。

リユームは驚きと同時に、深く安堵もしました。

そのためらいの無い優しい気使いに、張り詰めていたものが一気に弾かれてしまったようです。

リユームはそのやさしいご婦人の胸に抱きしめてもらいながら、落ち着くまで泣きじゃくり続けたのでした。

ニーナが心配して迎えに来てくれるまで、ずっとずっと。

それがルゼ様だと知ったのは、ほんのつい先ほど。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

「良かったわ。リユーム嬢のこと、ご葬儀でお見かけしてからずっと気になっていたのよ」

「あ、ありがとうございます、ほ、ほ・とに、ご心配をおかけするよ・な。あ、の、みとも・ない所をお見せいたしました」

恐れ入ります！

今思い出しても、リユーム激しく動揺。勢い余って拳動不審に突入中の自覚あり。されどもどうしようもありません。

あの時も・・・この優しい”なでなで”にどれほど、慰められたかしりません。

「まさ・・・か、お約束した方がルゼ様とは、わたくし存じませんで、ご無礼をいた・いたしまして」

「無礼だ、なんて。今、私のほうがよっぽど『無礼』よ？リユーム嬢」

なでなで。 なでなで。 優しい指先は休まることなく、おでこを撫で続けて下さいます。

少しだけ前髪をかき上げられては、リユームのまたみつともない所を晒すしかないようです。

抗ってその手を振り切るなんて思いもありませんが、気恥ずかしいので肩をすくめ顎を引きました。

その途端にぼろりと零れ落ちた雫が視界をよぎりました。

いけない！そう思っただけ固く瞼を閉じます。これ以上、堰を崩壊させての洪水は何としても避けたい展開です。

「リユーム嬢。貴女との『約束』を楽しみに来ました。でもね・・・どうか無理はなさらないでね？」

「だいじょぶ、です。」

なでなで・・・なでなで。それは続きます。

「あ、の・・・？」

いつまでも優しいその手つきにうつと目と目を閉じたままで居ましたが、少し不安になってそろりと窺いますれば。

小さく笑うルゼ様と目が合いました。

「困ったわねえ。手を放す気が起きないわ。 貴女のお義兄さまの気持ちかわかるわ」

苦笑されながらも、ルゼ様はそう仰られました。

「義兄の、気持ち・・・？」

「わからないか。 わからないわよね、あれじゃ・・・」

わからなくていいと思うわ。まだ」

「？」

ルゼ様のお言葉は、謎かけ遊びのようです。

「あのね・・・」

くすくす笑いながらなおも続けられた言葉は、そっと耳打ちされ

ました。

この部屋には二人きりなので、その必用は無いのですがそういう事がとても自然なように感じてしまいます。

耳打ちされた内容に、リユームは思わずぽかんとしてしまいました！

「ええええ！？」

「嫌かしら？」

「え、あ・うと・えええええ！怒られませんか？」

「怒られないわよ」

きっぱり言い切るルゼ様に、リユーム思わず吹き出してしまいました。

何て自信に満ち溢れていらっしゃるのでしょうか。

「……………では、がんばってみます。では、なくて！喜んでお受けいたします。が、がんばりまうね……………！」

言ってるそばから声が裏返ってますが、ルゼ様はニッコリと笑って下さいました。

「では。任命式の宣誓の……………後くらいに。大丈夫！『合図』致しますからね」

リユームはその力強いお言葉に、二度も三度も頷いて見せたのでした。

第十話 シェンテラン家の亡き一人に捧げた鎮魂歌（後書き）

『でこっぱち』

思わず撫でたい。そんな気持ち。

ルゼは全部（・・・3作品）に顔出してます。
フィルガも。それから・・・も、これから。

小話は、すみません〜また後日！

・・・
の、本日3月9日・・・ようやっと。

有・言・実・行！

どうでもいい・裏話劇場 『フィルガ・ジャスリートも』

「公爵・・・祖母はリユーム嬢が事の他お気に入りの方で、
今日会えるのを楽しみにしていたようです。何とも不躰で申し訳な
い。・・・あの方は自分の無くした娘と年頃の娘を重ね見て
しまうので」

「いえ。・・・ただアレは・・・義妹は至らぬ点も多いゆえ、公爵
殿にはお見苦しい限りかと」

（・・・なるほど。祖母とのやり取りの手紙の内容と同じ主張を通
そうとしますか）

フィルガはあくまでにこやかに、かつ柔らかい物腰で振舞う。目の前の不機嫌も露わなシエンテラン家の若き主に、先ほど耳打ちされた祖母の言いつけ（という名の命令）が理解できる。

フィルガ。貴方、ご領主殿のほう任せるから。上手くなだめといてよ！

（やれやれ。俺に足止めになれと？）

フィルガは隠し様の無い苛立ちを時折り見せる、緑の視線が向けられる先に気がついていたが・・・気がつかないふりをしている。

（何が哀しくて・・・）

野郎と差し向かいで、茶をすすらねばならぬのか。

いつてらっしやいと見送ってくれた彼女の赤い髪が浮かぶ。

祖母は彼女も連れて来たがったのだが、時期が悪すぎる。なので彼女は留守番させたのだが。

『シエンテラン家のジ・リユーム嬢。これまた将来が楽しみな美少女なのよ。珍しい黒髪に瞳でねえ！　なのに。彼女の義兄さまつたら。』義妹は病弱ゆえ式典は体調によつては欠席せざるを得ない。『そうさせたい』つて一点張り』

『仕方ないじゃないですか。それなら無茶させたら可哀相だ』

『そりゃそうよ。で・・・も！そんなの詭弁に決まりきってるじゃないの。せめてご挨拶だけは伺いたいわと返事しといたから、大丈夫だと思っけど』

『無理に公の場に出すこともないのでは？』

『嫌よ。あの美少女と約束もあるし、会いたいもの。何より気になるわ』

そんなやり取りから窺えるその意図は、フィルガにだって汲み取れる。

（ディーナ。貴女を連れてきたかった様な・・・置いてきて良かったような・・・）

目の届く場所に常に置いておきたい婚約者。

しかし、他の者の視線に晒したくはないという葛藤もある。できれば館から一歩だって外に出したくは無い。

そう告げると彼女は逃亡を図るから、口にしなないが。恐らく。

この目の前の男も似たようなものなのだろう。

フィルガも傍から見たら、他人の目に映る自分はこんな調子かもしれないとぼんやり思った。

今日は式典日和。

射し込む春の日差しが心地よい。

『あの橋のむこうがわ』メンバーSがこんな所にまで出張っております。

遊んでいます。すみません！

第十一話 シェンテラン家の美少女(前書き)

こいつ。

現代なら軽く『ス』で始まるアレでしょう。

微妙にイタイです。

第十一話 シェンテラン家の美少女

失礼致します、それではまた後ほど。

そう礼をとり退室します。出来うる限り扉をそろそろと閉めました。

ぱたん、と静かに扉の向こうにルゼ様の笑顔を閉じ込めた気分。はあああゝどきどきした！今もまだ、どきどきしてる！

ルゼさ、ま。何だかステキすぎて緊張してしまったようです。

今さらながら、あんなに泣きじゃくってしまった自分が恥ずかしくなります。手足を思いつきりじたばたさせたいくらいです。

それに加えて、ごろごろ転がって暴れだしたいくらいです。

「・・・・・・・・」

リユームときたら呼吸すら制限されていたようなので、しばらく扉に両手をついたままでいました。

ぜえぜえはあはあと軽く息が上がっているのを、認めざるを得ません。

これしきの事で・・・まるで館内10周した時と何ら変らない疲労感を訴えないで下さい。

我ながら何この脆弱な身体。こんな調子で『約束』果たせますか、リユーム？

『おいおい。駄目ですねー全然なつてませんね、相変わらず。』

（ルゼ様・・・本気ですか？本当は『正気』ですかと尋ねそうになりましたよ。無礼もいいところだから堪えましたが）

でもリユームや？例え無理があったとしても、やる前からそんな心意気で許されるとでも？

そもそも、それでアナタは満足ですか？いつまでも病弱だの脆弱だのを理由に、何一つなし得ないままで？

自分自身に問いかけます。答えは、もちろん ひとつ。

己の中で閃き放つ一筋の光が、ひときわキラリと煌いたかのよう
に感じました。

眼を閉じていようと、射し込む確実な光に勇気付けられます。
良かった。

リユームの根性もまだまだ腐ってもおらず、捨てたものでもない
ようです。

(いや！やり遂げてみせますともよ！)

がんばるぞ！がんばるぞ！がんばれ！気力体力共に総動員して！
そもそも『人並みの体力とやらを見せてみる』という挑発に、受
けて立つたのはリユームです！

そうです。例え契約のすえ手に入れた『偽りの健康』であろうと
も！手に入れたものは『本物の健康』なのです。(何気に時間制限
はありますが。)リユームとて独り立ちできる可能性を見せ付ける、
またとない機会をみすみす見送るのは感心しません！ですから闘い
ます。

決意も新たに思わず小さく拳を握り締めつつ、控えの間に戻ろう
と回れ右したところで。

「ご、ごりよ、しゅ・・・さま」

リユーム硬直。 またしても。

い・・・いつからそこにいらつしやたのですか？

何故そこまで気配無くせるんでしょうかね、この方。存在感・・・
半端無いくせに。毎度毎度毎度。

何なのでしょうかねーもー？アレですか？修練の賜物とかっても
のですか。 そうですか。

もちろん。そんな事はお聞きできませんので、恐るおそる向き合
うしかありません。

それが最善の対処と導き出した答えが、ここの所の学習の成果で
す。我ながら嫌な答えを導き出したモンです。

ここでため息でも付こうものなら。かなり面倒臭い事にまっしぐ
らなので、堪えるのが賢いですからそうしています。

壁により掛かり腕を組み。気だるそうに見下ろす、ご領主様の視線が突き刺さってきました。

『まさか。公爵の御前で無礼は無かつたろうな？』

そんな無言の責めに、リユームは無意識の内にくくくくと頷いておりました。

『だいじょうぶだと思えます！　おそらく』

そんな意思表示を込めて。

……嫌だなあ……リユームの気のせいとは言え、何やら最近ご領主様とは言葉交わさずとも会話が成立しているような。気のせいであつて欲しいものです。ええ。なぜかつて？

だつてリユームの考えなど、全て見透かされているも同然ではないですか。何となく。

あんな事とかこんな事とか。近い将来絶対自立して、ちょっとはと言わせたいと目論んでいるとか。

例の刺繍は取り掛かるたびに、いちいちご領主様との今までの喧嘩トルが浮かぶものだからまるで集中出来なくて放置してる事とか。

あまつさえ、頭にきて八つ当たりしてる事とか。

上着につて？えええ！潔く認めましょう。そうですとも　上着に！（開き直るな）

うう。小さいなあリユーム！と空しさが募るだけですが、思わず日課になりつつあるのでそろそろマズイです。

早い所『何かもうこれでいい感じ』に適当に仕上げて、さっさと持ち主に返さねば。

このままだと原型を留めていられるかどうかすら、保障できません。

出来上がったとしても、一針一針がリユームのそんな邪念が籠つていて何ともはやな出来栄への予感。

きつとこの方はそんな事、全部お見通しだと思われませう。一枚も二枚も上手。

……一枚や二枚で済んでいてくれればいいと、思わず祈

ります。この方今さらですけれども底、読めなさ過ぎでしょう。
7年という月日を費やしても、未だに謎の方。何がしたいのか。
何をリュームに望んでいらっしやるのか。

ここのところさらに輪を掛けて、全く持って理解不可能に拍車の掛かっている次第ですからららら。

と、茶化してしまうくらいには考えても解りませんので、これもまた放置。いいのか、それで。

リュームがいくら齒軋って悔しがろうが、何だろーうが認めざるを得ない事実であります。

（うーん？でも実際あの黒の上着に施す糸の配色は難しいんですよ。ねーさてさてどうしよう？それにしても見事なかがり具合ですな！その御召しの上着。うん・・・素晴らしいですねえ・・・濃紺にあえて藍と薄青とはやりますね！職人の方・・・に頼めばいいのにもう嫌がらせ、反対したら反対！）

思わずご領主様の正装の上着に目を取られていたために、またしてもリュームの思考はあさって方向に行っていたようです。

「リューム」

は、っと焦点を取り戻しますれば、ぶつかりますは不機嫌な眼差しの染み入るような緑の瞳。

「グインしえう・・・セイ ル、さ・ま」

今日はそう呼べと散々言い含められていた事を思い出し、慌てて言い直しましたが・・・かえって声の上ずり具合から発音が不明瞭になり、怯えも動揺も丸出しです。

あう。リューム、思わずたった今退室したばかりの扉に背を預けます。

（もう一度、戻れたらどんなにいいか。うう。ルゼ様くやっぱり”作戦”は止しておいた方がいいのでは？）

余計に不機嫌にさせてしまう可能性の方が高いですよ！

そうお伝えするために引き返したい、この扉一枚の向こうに。

しかしそんな事、このお方の目の前でやらかした日には一体どう

なることやら　ねえ、リユームや？

リユームせつかくの決意の現われの拳は解いて、そのまま心臓を
押さえつける形に。

はふ、と一呼吸吐き出します。

「早くしろ」

「？」

理解できなくて小首を傾げますれば、手を差し伸べられました。
近付くこともなく、その場で。

しばらくそのまま立ち尽くして、ただただその手を眺めてしま
いました。その指先が鬱陶しそうに、一度曲げられまで。

シンラを呼ぶ時と全く同じような調子で。

『来い』

宙に浮いたご領主様の左手に促がされ、ふらふらとリユームから
近寄って行きました。

「式典の立ち位置などの確認もある。それに他の招待客に挨拶がま
ただ」

「挨拶、まだ……」

どなたにご挨拶すればいいかなんて、ルゼ様フィルガ様以外の名
前を窺っておりませんでしたから慌てます。

練習しておりませんから、それこそ恥をかく……『かかせる』
可能性がありますので。

「親戚筋だからあまり問題無い。リユームを知っている者達ばかり
だ」

「はい」

頷くよりも早く、持ち上げかけた右手を取られました。そのまま、
引っ張られるようになりながら続きます。

リユームは瞬間すばやく身構えて、歩幅を普段よりも意識して大
きめに取りました。先ほどの経験から、早速学ばねば！

また転びましたなんて、避けたい展開ですもの。

ドレスの裾も邪魔にならぬよう、空いた手でたくし上げながら進

みます。

「何を話したのだ？公爵殿と。何を訊かれた？」

「え？・・・ええ、はい？」

「何を話したのだ、と訊いている！」

振り向かず突然投げ掛けられた質問に、返事をする事がやつのリユームにすぐさま叱責が飛びます。

「も・・・もうしわけ、ごさいません。ただ、あの、リユームの額が赤いからおもしろいって、笑われました。撫でなでされて『手を放す気がしなくなる』と仰って、たくさん・・・撫でなでしながら、また笑われました。まだ赤いですか？」

ドレスを絡め取っていた手を放し、自分の額を押さえながら尋ねてみました。

唐突に歩みが止まりました。

しかし手は引かれたままだったので、当然身体は前にのめり込みます。

倒れこんだ身体は、そのままこちらに向き直ったご領主様に抱き止められました。

それも一瞬のうちの事。次の瞬間には両肩を掴まれ、真上から見下ろされておりましたよ。

(ひいひい!!この体勢苦手です!・・・良からぬ予感がひしめき出すからっ、ご勘弁を!)

そんな恐怖もあつてかりユームは両手で、ご領主様の胸元を突っぱねる格好を取りました。

ちょうどエキが気が向かないのに、無理やり抱っこされた時と同じ体勢です。顔も背けます。

「オマエが聞いたくせに、逃げるな。見せてみる」

「うう・・・」

確かにそうですけど。そんなにまじまじ見なくてもいいでしょうよ。

絶えられません至近距離。耐性もあまり持ち合わせちゃいないので、もっこのくらいにしておいて下さい。

ぎゅう、と頑なに目を閉じて耐えます。早く過ぎ去って下さい、この拘束のお時間。

ご領主様の指先が、額に掛かる前髪をかき上げます。

(あれ? いかんせん、瞳を閉じているせいなのか嫌に…………?)

リユームの全感覚は鋭さを増して、額に集中しているせいでしょうか。

先ほどよりも余計に冷たい気がします。

。。。。。*。。。。。*。。。。。*。。。。。*。。。。。*。。。。。*。。。。。*。。。。*

そろと薄目を明けてみようかと思ったのと。

微かに湿り気帯びた温かな何かが、リユームの額を掠めたのと。

悲鳴とも歓声とも取れる声が響いたのは、すべて同じ瞬間であったようです。

「っもっ! こんな所にいらしたわ! ヴインセイル様だったら、リユームを迎えに行くといっただまま戻っていらっしやらないんですもの! わたくし、待ちくたびれました! まったく、リユームしたら、早くわたくしにもご挨拶なさいよね!」

見つけた! とばかりに興奮したお声を上げられたのは!

流星のご領主様も、不意をつかれて驚かれたのでしょうか。リユームを掴んでいた手が弛められました。

(このお声は)

喜んで振り返ってみれば、飛び込むように抱きついてきたのは金の髪の美少女。

薄淡いすみれ色のドレスが、ふんわりとまとわりつきながらも落ち着くまで。しばし無言で抱きとめたままでおりました。

本当に花びらを抱きとめているみたいなので、リユームは思わずうふふと笑ってしまいました。

重ねた生地とレースから覗くか細すぎる足に、少女が生身だとやっとな認識できるような錯覚に囚われてしまいます。

「ミゼル様。お久しぶりでございます。お元気でいらっしやいましたか？」

「もちろんよ。アナタと一緒にしないで。早く！こっちに来なさい。わたくし達と一緒にお茶を飲むのよ。急いで、ぐずぐずしないでちょうだい。任命式が始まる前に挨拶を済ませておくのが礼儀つてもものでしょうに。本当にリユームったらトロいんだから」

言葉は容赦も無く厳しくていらっしやるのですが、語調は明るく笑顔を絶やさずにリユームと向き合って下さっておりますので、怒ってはいないと判断していいと思われまます。

何というか・・・照れ隠しのような気がするものですから。

告げたら最後『違うわよ！』と全力で拒否されるので、もう黙ったままでいます。

(なんて相変らずお可愛らしい)

ぎゅう、と抱きつくお力が以前よりも、心なしか増されたように感じました。

それに何より。リユームに抱きつく場所が前回は腰周りでありましたものが、今日はそれよりも高い位置です。

「はい。それでは急ぎましようか」

ぎゅううと抱き返しますれば、ミゼル様のお顔をリユームの胸に押し付ける格好になります。

「背が高くなりましたね、ミゼル様」

「子供扱いしないで頂戴！アナタとは三つと半分しか違わないのよ？それともなあにい、自分の方が成長してるからって嫌味？嫌味なの？」

「成長？リユームは多分もう背は伸びないみたいですよ。ですから

いつかミゼル様には、追いつかれてしまいそうですね」

「……アナタ……って本当に愚鈍なのね！もう！」

素直に流れる髪を撫でながら感じたままを口にした途端に、やっぱり怒られてしまいました。

ミゼル様。ミゼルド・シエンテランお嬢さま。言わずと知れたシエンテラン家の一族の、由緒正しいお嬢さまでございます。

見事な黄金色の髪と色鮮やかな新緑の瞳が印象的な、文句なしの美少女です。

そんなミゼル様は、ご領主様の又またいとこ従兄妹様に当たられるそうです。

こつそりご挨拶させて頂いたご領主様のお母様（の肖像画ですけど）に、面立ちがよく似てらっしゃいます。

きつと将来は、あのような美貌の貴婦人にご成長される事でしょう。

すんなりとした少女特有の肢体が、お会いする度に丸みを帯びて行かれるのがわかります。

それは言ばしい事であり……先が楽しみでもあり、少し寂しくもあります。

あと何度……こつやつてためらい無く、リユームに抱き付けて下さいますでしょうか？

それを思うと不思議と胸が締め付けられてしまいます。

なので今のうちとばかりに、リユームは思い切り良く抱きしめ返すのです。

返すというより、飛び込んできたのをコレ幸いとばかりに捕まえちゃうのです。

（抱っこしたら最後、逃がしませんよ？ミゼル様！）

ミゼル様のツヤツヤの頭に、どさくさに紛れて唇を押し当てました。あまりに愛おしいので、つつい。

「もう、リユームったら！甘えっこなんだから、世話の焼ける。

いいから、もう行くわよ……」

はい。

急ぎご挨拶することに、異存などあるはずも無く。リユームは頷き、右手を引かれるままその華奢な背に続こうとしたのですが。

「!?」

ぐい、と左手を引かれました。

当然、その場から一步も進めなくなりました。

驚いて振り返るよりも早く。

そのまま視界は半回転。

(はあ!?はい? って、ええええええ!!)

ふわりと感じたのは浮遊感。しかもかなり不安定な。

己の爪先が床には着いていないという、驚きの状況。

それより何より、ご領主様の左腕一本に抱えあげられていますよ?

何とご領主様の腕に腰下ろす格好ですよ!

(きゃあああ!高いっ 高いんですけど!怖いじゃないですか、

イキナリ何ですか!もううう・・・うう・・・嫌がらせ反対!)

何と言う早業。何と言う力持ち。

感心するよりも慣れない視点に恐怖を覚えて、ためらい無くご領

主様の頭に抱きつく体勢で落ち着きました。な、なんとか。

寄りかかるようにして、しがみ付いて見下ろすと。

精一杯両手を差し伸べて『返して』と訴える、ミゼル様が見上げ

ていらっしやいました。

「酷いわ! ずるい、ヴィンセイル様。リユームはわたくしと遊

ぶのよ、返して」

「いい加減にしろ、ミゼルド。今日はコレは勤めがあるのだから、

あまり振り回して疲れさせてくれるな。 後々面倒だ」

「.....」

突っ込みどころ満載です、ご領主様!と告げられたらいくらかこ

の胸もすくのでしょうか、そんな勇氣はございません。

ですが何やら脱力のあまり、おろして下さいなんて抗議する事す

ら忘れましたよ。思わず無言になります。

(その台詞・・・そっくりそのままお返しいたしま・・・) す
デスよ、というリュームの思考を遮って、ミゼル様のお声が響きま
す。

「その台詞そっくりそのまま、ヴァンセイル様にお返しいたします
わ！そんな風に抱え上げられたら、リュームが驚いて目を回すに決
まっていますのに。早く下ろして差し上げてよ」

(うわーミゼル様！最高です、代弁ありがとうございます。ますま
す大好きになっちゃいますよ！たすけてえ！！)

「ミゼルさま・・・」

嬉しくて思わず瞳も声も潤みます。

「リュームをいじめて遊んでいいのは、わたくしなのに！」

「ミ、ミゼルさま？」

「何を勝手な。ずいぶん子供じみた事を言う」

悔しそつにだん！と荒々しく足を踏み鳴らすミゼル様に、ご領主
様は鼻先で笑われました。

(うわ。一笑に付しましたよ？何て大人げの無い・・・)

「リュームを返して下さい、ヴァンセイル様」

「返す？返すも何も」

「・・・せめて下ろして差し上げて下さい。リュームが怯え
ております」

子供扱いされた悔しさからか眉根を寄せながらも、冷静さを心が
けていらつしやるのでしよう。

ミゼル様は丁寧言葉を選んで進言下さいました。

「・・・」

お願いいたしますと付け加え、真剣に訴えるミゼル様に免じてか
リュームは下ろしてもらえました。 ゆっくりと。

「リューム！大丈夫？」

「は・・・はい、少し驚いただけですよ」

色々な意味で。

(いじめて・・・遊ぶおつもりなのですか。ミゼル様？)

そもそもこの目の前で繰り広げられた、傍から見れば『歳の離れた兄妹』に見えなくも無い二人のやり取りは一体……？

「リユーム……行きましょう？」

「駄目だ」

「何故ですの!？」

「コレには勤めがあると言ってるだろう。ミゼルド、お前も戻れ。ではまた後でな」

有無を言わせぬ口調に、流石のミゼル様も従うしかないようです。

「リユーム、また………後で!」

「はい」

振り返り肩越しに、そうお答えするのがやっとです。

リユームはご領主様に肩を抱かれる格好で、歩き出さねばなりませんでした。

第十一話 シェンテラン家の美少女（後書き）

『この、ムツツリが』

何なのでしょうかね、この一族は。

感情の表現の仕方にも似ているようですね。

片方は女の子なので許される部分も多いのですが、もう片方の彼は
ねえ……………。

かわいいものはいじめてしまう。

でもそれは他人には許さない。かなり歪んでるよ、あんた達。

曲がって伝わるから、それ。

しかし、周囲にはダダ漏れ。

『どうでも……小話 劇場！』

くミゼルード嬢く

リユームはまだ公爵様のお相手をされているらしい。
つまらない。

あの、ほわっつとしてばけっつとした、リユームがいなければこの
館は退屈極まりないったらないのに！

(きつと公爵様もリユームのポケ加減がお気に召されたのね・・・早く返して下さらないかしら)

それを思うのはわたくしだけではないらしく、本日の主役のヴィンセイル様も『迎えに行く』と言い残したまま戻ってこない。

他にすることもあるでしょうに！

こうやって控えの客間に押し込まれているのも、もう限界！

お母様には外の空気を吸ってきます〜などと貴婦人ぶって告げたのに。

「・・・リユーム様を引つ張りまわさないのよ？あとあまり邪魔しないようにね」

と、見事に見透かされていた。

邪魔？邪魔なんてしないわ・・・失礼しちゃう！

ぷりぷり怒りながら回廊を突き進む。

幼い頃から訪れているから、勝手は知っている。

迷子の心配は無い。

公爵様をお通ししてあるだろう、客間を目指す。

その角を曲がって、突き当たり・・・！？

「！？」

思わず一歩、慌てて引き返した。が、そろりとまた用心しつつ覗く。見覚えのある流れる黒髪に、これまたさつき見送ったばかりの金の髪。

(ヴィンセイルっ！！何を・・・っ)

明らかにリユームは逃げ出したそうに身体を擦っている。

手だって、突っぱねた格好だ。

ヴィンセイルの事は思わず呼び捨てだ。

彼の唇がリユームの額に近付いている。

気が付いたら、思いつきり良く駆け寄っていた。

大声を上げながら。

リユームに抱きついた瞬間、ヴィンセイルの舌打ちが聞こえてきそうな勢이었다。

・・・邪魔って・・・こういう事かしら？

でも、しるものか。全力で『子供の自分』を使う事に決めた。

第十二話 シェンテラン家の祝福の道（前書き）

早朝から色々と仕度だの、何だので慌ただしかったリユーム。

はい、もうじき『晴れ舞台』ですよ。

その、一歩手前。

・・・まできました、がんばって。

蹲りつつやっている事は『頭の中で予行演習』どころか、今日が始まってから繰広げられている嫌がらせの数々の再演。

(あああゝもあゝ・・・すっかりご領主様の調子にいいようにされてる感じで始まって、ずっとこの調子で来ましたよっ！)

気配を感じさせないくせに、威圧感だけはたつぷり振りまかれてご登場。リユームが何より恐怖を感じるのを熟知されてらっしゃいますね？確信犯ってモノでしょうかね？

そのくせ名前を・・・根気良く教えて下さったかと思えば、引つ張られて勢い良く転んで。

そのせいで公爵様には笑われて、せつかくの淑女(の演技)も台無しデスよ。

あげく。 。 本日に今日はどうしちゃったんですか、ご領主様。大丈夫ですか。それこそ春の陽気のせいで頭・・・温まりすぎちゃってませんか？

この七年間はどうなったんですかというくらい、やたらリユームを構ってませんか？

極め付けが、ミゼル様との。せつかく久しぶりにお会いしたミゼル様とお茶の機会を、阻まれてしまいました！

(何だったのでしょうか。アレ。)

アレ、とは。『ぐいっ』後、『ひよい』のアレです、アレ。

(持ち上げられちゃいましたよ！しかも片腕でって、どういう事ですか！)

悔しい事に手も足も出ませんでした。出せませんでした。

いつぞやの『ずるずる』のち『ぐいっ』後の、『ばいっ、どさ。』を彷彿とさせませんか。

はい、させます。あの時感じた恐怖と悔しさが再び、舞い戻ってきております。

だって。悔しいです。あんなに軽々とリユームの動きを奪うんですもの。歯が立たないって改めて思い知らされるから。

思い知らされなければ、いつかは敵う気満々のリユーム自体にも
かなり問題あるとは思いますが。

相手の力量が読めずに挑んでいくのは、確かに身の破滅を招
かざるを得ないと。

この間身に染みて学習したばかり・・・じゃなかったのでしょうか、
リユームよ？

定着していなければ、学習した事にはならないのだぞ。と、おと
様の言葉が思わず蘇ります。 はい。

まずは置いておきましょう。それより何より。リユームはこれか
ら臨まねばならない『勤め』があるのですから。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

頭が暖まりすぎる前に、切り替えねば 。

そう考えをまとめて、リユームは立ち上がりました。慎重に。で
なければ、くらりとしてしまうので。

「！？」

どなたでしょうか？

興味深そうに辺りを見上げては、何やら一人呟いてらっしゃる方
がいました。

() いつの間にか まあ、リユームが蹲っている間にか……………

その黒い出で立ちはこの聖堂の影の一部分のようでありながら、
不可思議な異彩を放っておりまして。

ここはシエンテラン家の聖堂であり一部例外を除いて、一般の方
が訪れる事はそう滅多にありません。

では本日のために招かれたお客様？そう考えるのがごく普通なのですが、任命式という祝いの式典に真っ黒の衣装？

だからといって警備の方でもなさそうです。確かに今日は人手が必要でありましょう。

それでも日雇いで警備を雇う事は考え難いです。

では何故『彼』は、腰に剣を佩いておられますでしょうか。リュームがそれを見逃せるわけありません。

……何せ、恐怖の対象ですから。嫌でも過敏になって目ざとさを発揮してしまうようです。

剣を身に着けている　それを扱うに適した身体。大きくて頑丈そう。それこそリュームなんぞ抱え上げるくらい、難無くこなせるでしょう。そう腕の太さが充分に物語っているようで、怯みました。

何せご領主様のような瘦躯の方でも、片腕で事足りたのには驚いたばかりです。

女の身の作りとはまるで違うのですから、男の方ってズルイ。

そんなやつかみを込めて観察する『彼』の表情は和やかでありました。

(そ、そんなに警戒しなくても大丈夫そう……でしょうか?)

こんなに近くでリュームが熱心に見守ってるのに　まるでお構いなし。

そんな様子で聖堂の天窓から差し込む日差しを見上げて、手でひさしを作っていたりします。

眩しさに目を細めつつ、口元は笑み浮べながら。何て暢気なのでしょうかと、リュームに思われていますよ。

(大丈夫でしょうか？まるで意識飛ばしちゃってるときの『リューム』です！もしかして春の陽気で頭、温まりすぎましたか？

何て失礼でしょうか)

そんな心配をよぎらせつつ、見守ります。

髪は……光の加減もありますでしょうが、明るい赤褐色。瞳は

ここからは良く見えませんのでわかりません。

(どなたでしょうか？リユームに気が付いていない？)

声を掛けるべきか否かと迷ううちに、目が・・・かち合っていました。

リユームが思わず怯み背を向け、逃げ出そうと足を一步踏み出した瞬間に声が掛けられました。

『ああ。驚かせてしまって申し訳ない　まさか君が気が付くとは・・・いるとは思わなくて』

むしろ驚かせたのはリユームの方なのではないでしょうか？

それは『彼』の慌て具合からも、そう思わずにはいられませんでした。

この聖堂の造り上、声は響きます。それは独特の余韻を持たせてだからでしょう。この方のお声が何やら、耳慣れない響きを持っていたとしてもリユームは何の疑いも持ちませんでした。

この方のお耳にもリユームの声が、同じような余韻引きずる響きと届いていることでしょうし、などと勝手に結論付けて完結させました。

説明のしようはありませんが、その時はそう考えたのです。

。。。

。。。。

『や・・・リユーム。はじめまして』

「はじめまして　？どして、わたくしの名前知っているのですか？」

警戒心と。もしかして知人なのに忘れてしまったかも知れない、己への焦りから声がかすれます。

それは彼があまりに屈託の無い笑みを見せるから。嬉しくてたまらない。もしくは、おかしくてたまらない。

そう笑顔が告げている気がします。

それでいて、ゆったりとさりげなくも 慎重に彼は近付いてきます。真っ直ぐに、。

一段高いこのリユームの居る、立ち位置とされた”祭壇”へと。

恐らくはリユームが怪訝な表情を、より強張らせたからでしょう。

『彼は宥めるように、目尻を下げました。』

『ああ、驚かせてしまったかな？当然か。申し訳ない』

両手を軽くあげてひらつかせながらの、優しい声音です。

リユームにもこの表情と仕草には覚えがあります。例えば初めて見かける猫さんが、屋敷に居た時など。そろそろと。

驚かせて逃げ出されないように慎重に、かつ絶対にその毛並を撫でてやるんだという下心満々のもの。

((だいじょうぶ、だいじょうぶ。こわくない、こわくない))

いいえ！怖いです。大丈夫な気がちつともしません。

リユームが今まで試みてきて、全部失敗に終わったのも頷けます。

納得！はい、回れ右！ しようにも、出口にたどり着くには『

彼』を突破しなければなりません！ぬ〜う………！

そんなリユームの気迫など微塵も感じていないのか、歯牙にも掛けていないのか。

恐らくその両方の『彼』はにこやかさを崩さずリユームの目の前、祭壇の一步手前まで来ておりました。

また誰かさんとは違った意味で余裕です。腹立たしいです。

気持ちだけはエキを見習って、体中の毛を逆立てている……つもり。体勢は低くとります。

そんな警戒心もあからさまなりユームに、笑いながら『彼』は一言。

『初めて会う気がしないね。かな？』

姉さんからいつも聞いているせい

「姉さん？」

そつだよ、と彼は語尾に笑いを含ませながら頷きました。

『ニーナ。ニーナ・ルシア・フォルテンシア。』

「ニーナの弟？」

それを聞いた途端にリユーム、肩の力が抜けました。そう言われてみれば確かに。

ニーナと同じ髪の色に、そばかすの薄っすら浮かぶ頬に加えて、瞳は淡い青の空模様。眉の形はやや太めで、目尻は笑っていないくとも下がり気味な所が似ています。

『そつだよ。姉がいつもお世話になっております。リユーム嬢。改めて。僕の名前はクレイズ・ルシア・フォルテンシアと申します。以後お見知りおきを』

そつ礼をとりながら彼は私にも、返礼を求めてきました。すい、と流れるような仕草で、その右手を差し伸べられました。

迷いましたが、おずおずと左手を差し出しました。

「はじめまして。ジ・リユーム・・・と申します」

姓は告げませんでした。あの方の嫌そうな顔が思い起こされたせいもあります、別に彼はニーナから聞いて知っているだろうから。何もいちいち名乗る必用も無いだろうと解釈しての事です。

クレイズの指先が、リユームの中三本指を支えます。

そこに触れるか触れまいかといった距離まで、彼の唇が寄せられました。

『不躰に申し訳ないのだがお願いだ、リユーム嬢。後で”正式”にご挨拶に上がるから、ここで俺に会った事は誰にも言わないでもらいたいのだが・・・。。何せ一番にこの”祝福の道”に足を踏み入れるべき人を差し置いてしまったのだからね。つい、この素晴らしい建築に惹かれたとは言え申し訳ない』

にこ、と屈託の無い笑みを浮かべながら言う彼が、ニーナの優しい笑顔と重なりました。

リユームもつられて笑います。

「えい！」

リユームは頷きながら、一步だけぴよんと飛び乗りました。この真紅の布地が敷かれた”祝福の道”に。

クレイズに手は預けたままで。飛び乗ったときよりも勢い良く、素早く飛びずさって戻りましたが。

「リユーム嬢？」

「わかりました。二人だけの秘密ね。ナイショですよ。ばれて叱られるときは一緒ですよ？」

これで二人は晴れて共犯者となったわけです。ですから片方がお咎めを受ければ、もう片方も逃げられない訳です。

二人、顔を見合せて笑いあいました。

そうしてどちらからも無く拳を握り締め、突き出し、互いにぶつけ合いました。ごちん、と。

下町つこ時代に広場の皆から伝授された、仲間同士の挨拶の仕方です。

つぐぐつつとお互い押し合って、自然に離れるまで左手は腰に当てますのが正しい姿勢ですよ。

(ああ、みんな。元気かな?)

久しぶりにこの挨拶ができて、ちょっと持ち直しました。
重プレ圧力ツシヤから。

。。。。

リユームは何とも誉れな事にすね。この祝福の道の果てに

当たる、栄光の祭壇に立ち位置を取る事になっていると告げられました。先ほど。ええ。ほんの、つい！先ほど！

(も、もっと早くにお伝えくださいよ！何故につい、今しがたまで黙ったままでいるのですか！　もおおく嫌がらせ反対！反対つたら反対！)

したところでリユームの心の中だけの、反対運動に留まってしまうのが情けないです。

「……………」

思わず勢い良くうな垂れました。その役はきつとシエンテラン家のご親戚筋のどなたかがやるに普通！相場が！

決まっているではないですか！

『リユーム？』

（そもそもですね、シエンテラン家の一員とも見なされず、ましてやリユームの立場は義妹ですよ？『義妹』！『養女』ですよ？血、一滴も繋がってないのですよ？知ってますよね。その上、唯一の義兄様からも『認めない』宣言された上にですね……しかも。何ですか葬儀の時のあの仕打ち！『献花すら認めてやらない』と公に発表したのと同じ事ですよ？　そんなリユームに何て場所を寄こすのですか！それこそ後々面倒な事に……やっかまれたりとかする　のは『リユーム』ですか！ああ、そうですか。そこが狙いですか。でなければ『カラス』を祭壇に上げるなど、どういう神経さされてらっしゃるのかと問い質したくて仕方ありませんよ！まったくもう！）

『　じゃあ、後でねリユーム？俺は姉さんに呼ばれてるから、戻るよ』

何で。聞こえたような。聞こえなかったような。

……………

”リユームが立会人となれ。立ち位置はここだ。”

はい。

そもそも何で、リユームは頷いちゃったのでしょうか？

ご命令だから仕方なくというのも勿論あります。

あの方に認められたいの………？

若くしてこの地の主となった、何もかもに恵まれたあの方に？

何一つ誇れるものを持たない自分を？

義妹とすら認めぬとされてもう七年？

何のお考えあつてのものかと図れませんが、またとない機会と捉

えてですか？

………リユームの望み。

それは。

それは？

………。

………。

？

リユームよ、何か、忘れておりませんか………？

「　っクレイズ！！」

弾かれたように頭を上げて、辺りを見回しましたが姿が見えませ
ん。

聖堂にはリユームが一人きり。

いません。どこにも。いつの間に………って、それは。

またリユームが意識を飛ばすほど、考えに囚われている間にでし
ようけれど。。。

聖堂にある人影は、リユームのもの一つ切りなりました。

第十二話 シェンテラン家の祝福の道（後書き）

またしても、ここまで書くか！

までたどり着けませんでした。何のこっちゃんですわね。

出ました新キャラ、クレイズ君。

そんなワケで どうでもいい・・・ってか、もうコレ本編に食い込むだろうよ！後々！

そんなツツコミをしつつ、行きます！

『小話 劇場』くクレイズ・ルシア・フォルテンシアく

クレイズ・・・？

クレイズ！

クレイズ！

「・・・やあ、姉さん」

「やあ、じゃないでしょう。全く。こんな所でうたたねしてるなんて、暢気なものね！」

自分と同じく、うつすらとそばかすの浮かぶ頬が目の前にあった。

かけた椅子を利用する格好で、体の節々を伸ばす。

呆れた、と姉さんに軽く頭を叩かれた。

姉はこの館の侍女だ。しかも噂の美少女『ジ・リユーム嬢』付きの。

噂の出所はもちろん、この実姉からである。

（ 別に”うたたね”していたわけじゃあ無いんだけどな。 ）

そんな思いはもちろん、口には出さない。

「こっちはこんなに忙しくしてるのよ。不謹慎だわ。もう少し、シヤンとしてなさい」

「あいにくと式が始まるまで、俺にはやることが無くてね」
「そうなのだ。俺は今日これでも”仕事”で来ている。」

「この俺より若いご領主殿には、一応挨拶は済ませたがそう長くは時間は取られなかった。」

「なあに？クレイズ、ったら。思い出し笑い？」

「ちよつとね・・・姉さん。すごいカワイイのな、あのリユーム嬢」
色々な意味を込めて。

「そうでしょう！って、アンタご挨拶、出来たの？」

「・・・いや。お見掛けしただけだ。ご領主殿に手を引かれてらした」

「そう」

姉さんが茶器を片す手を、一瞬だけ休めた。小さくため息を付きながら。

「ああ」

「・・・アンタ。変な気起こすんじゃないわよ？」

「心外だな」

「ほらほら、もうそろそろ仕度する！」

「ハイハイ」

「はい・は、一回！」

「はいよ」

笑いながら手を上に、もう一度椅子にかけながら伸びをした。この長い手足を持って余すように。

「アンタねえ・・・本当にいい加減に引っ込めなさいよ？そのいやらしい、笑い」

おかしくてたまらないのだ。

何もかもが、話通りで。

リユーム嬢の『自分の世界に入り込んだら全てがそっちのけ』の様子から。

ご領主殿の、リユーム嬢に対する振る舞いまで 何もかも。

(まさか。ほんの一瞬目を離れた隙に・・・等とは夢にも思っまい)

野郎が。 リユーム嬢に接触した等とは。

「クレイズ！」

「はいはい。」

ハイは一回！と姉にはもう一度、後頭部を叩かれた。

姉と弟。

作者も姉なので。 こんな調子です。

第十三話 シェンテラン家の剣と鞘（前書き）

今回、ちょっとシリアスです。

と思っているのが自分だけだったら、イヤだなあ。

しかも詰め込み過ぎて長いです。

小話含めると、もうどうしようもありませんな長さです。

『長すぎて疲れるわ！半分に削れ！』と身内からのアドバイス。すみません、次回からそうします。

休憩をはさまれながら・・・どうぞです！

第十三話 シェンテラン家の剣と鞘

扉が開け放たれました。

ひそやかに、ざわめきも引いて行きます。

ただ溢れかえる人々の持つ熱気は引くことを知りません。この場が静寂に包まれたとしても、です。

これだけ人がひしめき合っているというのに、静まり返っているのもまた不思議なものです。何やら感慨深いそんな中。

真紅の敷物に導かれるように続く”祝福の道”の始まりを、皆が注目しています。

その開け放たれた扉の向こうに現れた御方を、その道を歩むに相応しい御方として。

「グインセイル・シェンテラン。これへ」

凜として朗々と響き渡るは、彼の公爵様のお声。この方もまた、その栄光にいらっしやる御方です。

ご領主様は左手を胸に当てて、軽く一礼なさってから一步を踏み出されました。

その瞬間、皆の緊張感も高まりましたように思います。リユームも何やら心臓が嫌にひとつ、跳ね上がりましたから。

恐らくはこの場に居る者の心はきつと、ひとつでしょう。

この今日という日に居合わせたのは運命だの、偶然だの、義理だの。各々いろいろありましようが。

聖堂というものは嫌でも心を改めて、足を踏み入れる場所でしょう。

この皆が見つめる先にいらっしやる御方も、きつとそうなのではないかと思えます。

何せ『主役』でらっしやいますからね。
栄光をたなびかせた御方の名は、ヴィンセイル・シェンテラン。
運命でこの場に臨むお方は、陽光の色彩の祝福を受けたお生まれ
のようです。

誇らしく胸を張って出迎えられる立場であればまた、少しはリユームの気持ちも違ったものでしょうが。

何せ『場違いもいい所だ』という自覚しか持ち合せちゃいないので、いたたまれなさに気が遠くなります。

しよせん、義理でこの場に臨む我が身はカラス。闇をまとって闇を映す眼^{まなこ}。

気後れするなという方が、土台無理がありません。

リユームは居心地の悪さに先ほどから落ち着き無く、小刻みに身体を揺らしてしまいます。

この一段高い場所からは皆が良く見渡せるのですが、リユームのように闇色に生まれついた者など見当たりません。

その上容赦なく降り注ぐ陽光の煌き^{きらめき}も手伝って、ますます互いの存在の違いを浮かび上がらせてくれます。

光が強ければ強いほど、その足元に落ちる影は色濃く感じるものなのです。

(光射すその道を歩まれる方なのです)

今さらですが認識いたしました。ついでに自分のちっぽけさもです。

そんな思いのまま見守る方は、もうすぐ”栄光の祭壇”に至りそうです。

迷い無く力強い歩みは、厳かで優雅な気品に満ちておりましたよ。リユームはただ無力感に苛まれながら、虫けらに等しい気持ちでぼんやり眺めるばかりです。

ほうと誰からとでもなく漏らされた溜め息^{ためいき}が、賞賛のものであるのはまず間違いない筈です。

『何と素晴らしい！ご立派な領主様だろうか！』と。

この場に居合わせた者ならば皆、同じような気持ちになった事でしょう。

そして。ちよつと『ちえ。』とか思ってるフトドキ者はリユーム一人でしょうとも。・・・。

だって。ただ歩かれていますだけなのに、リユーム『完敗』な気がしますの。

何その存在感。加えて威圧感。けっして無視できないような強く人々を惹きつけるその正体は何でしょうか？

ついでに、重ねてお尋ねしとうございます。思わず平伏ひれふさねばならないような気持ちにさせる、それは何ですか？

目には映らぬものの、貴方様が確実にまとつてらっしゃるものの正体は何と？

その正体を人は賞賛に値すると、見上げるばかりなのでしょくけれども。

彼は・・・見目の良い方なのだと思います。

『文句なしの美女』のお母様譲りの金の髪に、深い緑の眼という恵まれた色彩。

その切れ長の瞳をよりいっそう引き締めてみせる眉は、ややつり上がり気味です。

それに加えて鼻筋はすつきりと通っておられるので、隙スキ無く整っている**と強く印象付けておりますよ。**

くせの無い金の髪を束ねて歩く様など、その後姿すら優雅と皆様の目に映っているのですしょう。

歩みに続くマントの裾すそがひるがえる様まで、イヤミミたらしい位完璧に見えます。

仕草まで洗練されておりますのは、どんな修練の結果でしょうか？

(もってお生まれになった気品とかいうものでしょうかね？その正体は？)

両脇を固めて見守る人々の眼差しがいつまでも追いかけるその様

子から、ゆづに推し量れましょう。

”祝福の道”に踏み込んでしまいそうなくらい、身を乗り出しているご婦人方もちらほら見えますもの。

その様子にリユームときたら、今すぐお役目を投げ出したくなってきました。

(代わりにあの辺りの誰かキレイなお嬢さまが、やった方がいい気がします。どうしてそうしてくれなかったのでしょうか。)

なんで、わざわざリユームみたいなカラス娘にやらせるのですか？
相応しい方がたくさんいらっしやるでしょう？)

しかも『この方には一生敵いそうもないかもな』と、思わず弱気にもなってきました。

(『敵いそうもないかも？』ではなくて『敵わない』じゃない？)
思わず猫の口調です。

(リユームの思考の中にまで、いつもながらの冷静なツッコミどうもありがと！)

思わずうううと唸ってしまいますのは、何故かといいますと。

ばか正直に！自分の心に正直に告白しましょう。

(ごりょうしゅ、さま。『怖い』です。怖い・怖い・怖い！なぜこ
うも真っ直ぐに、睨みつけるのですか？)

うええ〜もう〜いや〜・・・睨むのだったら、最初から『立会人』
になど指名しないで下さいよ〜)

泣きたいです。

泣いてどうなるわけでもないですが、泣き出したいです。怖いか
ら。

胸がずきずきずきずきと、しつこいくらいに痛みを訴えています。
睨まれるのは、やっぱり慣れません。怖くって、いつも竦んでし

まいます。

シンラに吠えられると、どうしようもなく怖かったのと一緒です。今は逃げ出す事も出来ません。囚こわれて、ただ身体を縮こまらせるしかないのです。

その眼差しが物語っているのは『蔑かばみ』でしょうか？やはり祭壇に上げてしまったことを悔やまれてのもの？

（もう、何でもいいですけど。いい加減この瞳になぶられるのも慣れてきましたし。何て・・・ただの強がりですけどね！）

リユームは逸らしたら負けだと思いましたが、せめて強がってみました。

負けとは。

この場で気を失う、激しく咳き込む等の失態を晒す事。

その結果『この病持ちを一刻も早く下がらせる』という叱責を喰らう事。

もつと素直に申し上げましょう。リユームの、心の恐れに正直に向き合えば導き出される答えはひとつ。

（どうしよう。この方の目的がリユームをまた皆の前で価値無しと知らしめるためだったとしたら？）

リユームはどう出るのでしょうか？

この期に及んで今さら何ですが、この方の意図が解らないままいぶかしんでいる次第です。

そんな風に身構えて冷や汗をかくリユームのいる祭壇に、ご領主様の到着です。

.....

眼差しが絡み合った気がした後に、ご領主様は公爵様に礼をとりました。

対するルゼ様はしゃんと背筋を伸ばされたまま、ただ差し伸べた左手だけで答えられます。

それを合図と優雅にマントを後ろでに払われましてから、ご領主様は跪かれました。

マントが床にゆったりと落ち着きを見せた頃合を計って、ルゼ様が命じられます。

それもまた言葉無く、眼差しと右手だけで促うなががされるものでした。命じられたのは公爵様のお孫様、跡取りでらっしやるフィルガ様です。

彼は形良く礼を取ると、祭壇にまつられた剣と向き合います。祭壇にも恭こつやしいしい一礼をしてから、フィルガ様は剣の柄と先を目にも鮮やかな翠の布地で包み支えました。

そうしてくりと一回りいたしましてから、剣をルゼ様に捧たかげ持つ格好で片膝を付かれます。

それはむき出しの刃。

確かに儀式用のやや細みの剣ではありますが、その鋭利な輝きが本物であると誰の目にも見て取れる事でしょう。

それに臆する事も無く手に取られましたルゼ様は、さすが公爵様です。こういうのを威厳があるというのでしょうか。

もしかしたら剣術の心得もあるのかもしれない。

女性の腕一本分くらいは、ゆうにある長さの剣です。それを持て余した様子も無く、扱あつかいなれているご様子でしたから。

ルゼ様はゆったりと、右手で柄を持ちました。左手で剣先を支えて、剣を取られています。

その指先が切れやしないかと、少し冷や冷やしながら見守ります。会場全体も息をのんだようです。

それが小波のごとくこちら、祭壇に押し寄せたようでありました。それも数瞬で引くように収まり、再び聖堂は静まり返ります。

コツリ、と一歩進まれたルゼ様の靴音だけが響きました。

「この誉れ高いサンザスの国にあって。

我がジャスリート公爵家の領地ウルフィードに属する恵まれた地、エキナルド」

先程よりも凜と響くルゼ様のお声が、威厳に満ちて宣言されました。

「陛下と巫女王のお許しを得、このルゼ・ジャスリートが今日この日を持って『ヴィンセイル・シエンテラン』をエキナルドの領主に任命する！」

捧げ持たれていた剣が構えられました。

その切っ先はヴィンセイル・シエンテランへと向けられています。名を呼ばれたご領主様が、面を上げられました。

「大役の任を仰せ付かり、身に余る光栄にございます、ルゼ・ジャスリート公爵殿。

喜んでこの国と地の民人に、富と豊穰と平穏をもたらす事を誓います」

つき付けられた剣先に眼差しをのせて、その先にいらっしゃる公爵様を見据えながらご領主様は答えられました。

不敵にも唇の端を持ち上げられながらです。

見下ろされた体勢なのに、引け目というものをまるで感じさせません。

その様子に満面の笑みを浮かべながら、ルゼ様が頷かれます。

今にも飛び掛つてきそうな獣にも似た風情に、たじろぎもしない公爵様もすごいです。

まるで獣の頂点に立っているかのような犯し難い気品は、間違いなく何であろうと付き従わせてしまふに違いありません。

「よろしい！このジャスリート家の”羽根をひとつ”そなたに託します！」

言うが早いか剣が振り下ろされました。

ひっと短く息をのんで見守るしか有りませんでした。それに負けないくらい素早くご領主様は立ち上がって、剣の柄を取られておりました。

まるで奪い取るかのように、ルゼ様の手から剣を掠め取っていたのには驚くしかありません。

その俊敏さもさる事ながら、仮にも公爵様から奪ってみせたその大胆さにも！

奪われたはずのルゼ様も、最初はなから承知されていたご様子でした。ただ余裕の一言です。

ニヤリと表現するに相応しい笑みで、ご領主様を見据えています。
「・・・・・・・・。」

無言でいらつしやいましたが『やるわね』という賞賛の眼差しに、いくらか『油断なら無いわね』という牽制けんせいも含まれているかのよう
な笑みでございました。

リユームに向けてくれた、ひたすらに優しい笑みとはワケが違います。

先ほどまでの穏やかな雰囲気はガラリと変り、ルゼ様も何やらご領主様とよく似通った物々しさを放たれています。

その様子を何事も無かったかのように、しれっと見守るフィルガ様にも驚きです。

（何でしょうか。う、上に立たれる方というものは、底が知れないといましようか。そもそも底が無いような気がして来ました）

そんな様子にただ呆気にとられるばかりのリユームはまた、ご領主様と目が合いました。

合ったなんて生易しいものではありませんでした。むしろぶつかったと表現してもいいかと思われます。

「っー！」
思わず小さく悲鳴が漏れそうになりました。

リユーム、やっぱりその場に硬直。剣を構えるご領主様は、恐怖の対象の極みですから。

その割りに目を逸らす事ができません。こともあろうに、その鋭い切っ先から目が離せないのです。

すい、と剣の先が持ち上げられました。
まずはリユームの胸元の高さまで。その剣先を据えられ、リユームの顔色は一気に青ざめた事でしょう。

何せ呼吸までが狭まりましたから。

これでは発作を起こせと言われてしているのも、同じではありませんか！

ですが恐怖のあまり、そんな抗議に口を開く事も出来やしません。その陽光を跳ね返し煌く剣に、何を見出せというのでしょうか。

不埒ふいぢな思いでいつぱいの不届き者、リユームを成敗しようとても？

「リユーム嬢、しつかり。大丈夫ですから、しつかり！コレを」

そう囁きかけられながらフィルガ様に手渡されたものは、細長い筒型のもの。

剣を収めるための鞘さやとおぼしき物でした。

それに綺麗に施された細工は、孔雀の羽根を模したもの。

漆黒の鞘に映えるのは金銀で縁取られた孔雀の羽根の輪郭と、中央にはめ込まれた見事な緑玉です。

（なんて、きれいなのでしょうか）

それはジャスリート家の紋章だと、うっすらと思い出しながら眺めるのがやっとでした。

そうです。只今ルゼ様が仰っていたではないですか。

『ジャスリート家の羽根をひとつ託す』と。それはすなわち、領土を任せるとい証でもあるのです。

「だいじょうぶですから、儀式ですからね、しつかり。コレを少し立ててお持ち下さい」

そう励まされながら、言われた通りに縦に支えるよう捧げました。それはずしりと重く、リユームの両手にはあり余る存在感です。

その質感の重みもさることながら、自分が感じているのはその責任の重さに違いありません。

その重みに耐えるべき手腕、リユームごときにはありえぬのだと告げています。

それでも落としてなるものかと堪えます。緊張の余り、やはり震えておぼつきませんが。

（これは落としてはならないものです。けして、落とすものか、で

す！)

唇も引き結びます。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

劍の切っ先が逸らされる事のないまま持ち上げられて行くのを、
しっかと見据えておりました。

その弾き返すかのようなきらめきが、リュームの頭のてっぺんに
まで上がります。

輝きを増し、一際きらめきを集めたかと思われた後です。

劍先がリュームに向かって、振り下ろされました。

「！！！」

ひゅおん、と空を切る音が耳を掠めたのとほぼ同時に、リューム
の手の指先まで痺れました。

それに怯む間もなく増した重みに今度こそ耐え切れず、両手の間
を滑り落ちる鞘の感触に心底慌てました。

(重い！でも、落としちゃ駄目つ。。。！)

必死で力を込めてすがり、留めようと試みます。

例え無理だと解っていても諦めてなるものかと、力を込めました。

「リューム」

いつの間にか目を瞑ってしまっていたようです。

はっと勢い良く顔を上げ、瞳を見開きます。

とたんに飛び込む、眩い光は金色の陽光でした。

まぶしくて思わずまた目を閉じてしまいそうになりましたが、す
ぐに光が遮られたので瞬まはたくだけで済みました。

そうして覆いかぶさるような大きな人影はご領主様のもの。

陽光ではなく、金の髪の束の一筋であったようです。

そう認識できて、いくらか呼吸も落ち着きました。動悸は治まり
を見せませんが。

(そうだ！いけないっ、鞘を落としてはなるものですか！)
すぐさま安心するのは早いと、両手に意識をむけます。
しかしそれもまた、いらぬ気遣いであつたようです。

既にご領主様の左手も、鞘を支え持っておりますから。
だからといって両手を離すのも気が引けて、より一層の力を込めて掴みました。

それにしても、自分の手の何と小さく頼り無い事か。
両手を持ってしても、ご領主様の左手ひとつの働きも出来ないでしょう。

(それでも離してなるものですか。支えられるんですからね。リュームだつて、ちゃんと。たとえ、剣が収まっていても！)
何故かしら意地になつて、力を込めたままでおりました。

せつかくの立会人ですから！なんて今さらですけどね。出来る事
といえば、こんなしょうもない意地を見せるくらいしかありません
の。

泣きそうなまますが継りついていました。

ふいに鞘ごと剣がリュームの目線の高さまで、持ち上げられました。
た。

見れば鞘からほんの少しだけ収まりきらずに、剣刃が覗いており
ます。

その鋭さを感じさせる銀の輝きに、再び目を見張りました。

加えて柄越しに見下ろしてくる、見慣れた緑の輝きにもです。射
すくめられたように身動きを忘れます。

それは皆も同じであつたようで、聖堂はしんと静まり返っており
ました。

リュームの目の前で収められて行く剣を、見つめます。言葉もあ
りません。

ただ立会人らしく、余すことなく見届けようと眼を見開き続けま
した。息すらもひそめて。

……カチ……イン……！！

第十三話 シェンテラン家の剣と鞘（後書き）

『リ्यूームにイラつくその訳は』

リ्यूームにイラつくわけがわかった！

前々回UPした時に思ったの

ム力つく原因これだー！！って。

次会ったら言おうと思ってた。

……以上が身内からのメールでした。原文そのままです。

そんなワケでいつもはUP後に感想を聞いてたのですが、それじゃあ遅いので今回はUP前にチェックしてもらったのですが（汗）

本当に言われないとわからないものです。

で、原因なんだった？

もうここには書ききれません。要は全部ジャン？って感じでした。うわぁ……。

少しは改善されているのだろうかと悩みつつ！

『どうでもいい 小話劇場』 ルゼ・ジャスリート

扇を持つワケにもいかないので、表情を無理やり固めねばならなくて苦労した。

気を許そうものなら、顔がにやけてしまうのだ。

（いけない・いけない！式典らしく引き締めねば！）

そう己を戒めながら、なるべく厳しそうな表情を作るのだが。

（ああ、もう何て微笑ましいのでしょねえ）

そう感じてしまうのだから、仕方が無い。

仕方が無いから、せつかくの公爵の顔も保つのは難しくなる。思わず笑みがこぼれてしまう。

自分のような齡重ねた者にとっては、何もかもが眩しくてたまらなかつたりするものなのだ。

特に若者が目を逸らす事の出来ない様子を、こうして見守る時などは強く感じる。

そのひたと見据えた視線の先に、可憐なお花が俯きがちで立っている。

何やら雨に打たれすぎたかのように、それが気がかりだ。

（はいはい。もう少し、眼力は控えめに？）
気持ちも解らなくもない。

何せ彼にしてみたら、自分を誇るべき日であるのだから……。

ここぞとばかりに、自分を誇示したくもなるものだろう。

控えると言う方が、無粋な気がしてさえ来る。

それでもあえて言いたい。

（控えめに！）

孫とその婚約者の口を見ていても、感じたことだ。

「……………」

お花は身に余るほどの日光に晒されすぎてもしおれるし、たとえ慈雨でも過ぎれば重みで俯くのだ。

（でも、まあ。いいか）

孫は身内だから口出しも許されるが、こちらはそうもいくまい。

（見ている分にはオモシロ……もとい、微笑ましいし）

せめて代わりに本気を出して、相手をしてみた。

こちらも眼力全開で若者に向き合う。

そうしたら、この若者。

怯むどころか、むしろ逆効果だった。

がぜん張り切らせてしまい、心の中でこっそり『お花』に謝った。彼がますます威圧的になるだろうと思われたから。

(生一 意一 気一！この若造、鼻っ柱が強いんだわねえ)

そんな若者の鼻っ柱を折るのに、自分は切り札を持っている。

ちらと様子を窺えば、彼女もまた負けてはいない。

どうにか持ち直したようだ。

(あらあら。この子も以外に気が強いかもね？いい事だわ)

剣を諫めるのは、いつだって腕力ではない『力』だと信じている。

少し思い上がっている彼が、何かを感じてくれればいい。

そう願いながら『合図』を送った。

さあ、作戦なるものの開始だ。

彼女は どう出るのだろうか？

微笑んで見守った。

第十四話 シェンテラン家の若き領主に捧げる調べ（前書き）

タイトルまえに【今度こそ！】とつけていた、（仮）タイトルでした

長かった・・・毎回ここまで書くうとしては、次回に持ち越しての繰り返しでした。

やっとこの第十四話、どいぞです！

第十四話 シェンテラン家の若き領主に捧げる調べ

息を吸い込みました。

両手は徐々に外側へ開きます。

『場の空気をかき分けるかのように』するのがコツです。その方が胸が広がって、呼吸がしやすくなりますから。

一呼吸おいてから、旋律を呼び覚ますように口ずさみます。

らら・・・ら あーーーーー

どこからか呼び覚まされる何か。その正体を突き止めたことはありません。

何処からかと聞かれたら『リユームの身のうちの奥深い所から』と、お答えしましょう。

「・・・・・・・・」

リユーム、ちいさく口ずさんだ後はぴたりと黙りました。

気持ち俯いて、目はふせます。

ゆっくりとひとつ、長い瞬きをまばたをする事で意識が高まる。そのように思います。

『いま、ここにいる』ために、集中するのです。

聖堂にいる皆の視線が、リユームへと集まるのも解ります。

それは目に映さずとも、わかるものです。誰とでもなく、息を飲んだのもわかりました。

ご領主様は微動だにせず、ただリユームの傍らに立ったままです。そんな彼でさえ今、意識を向けているのはリユームでしょう。

(これで無視とかナシですよ・・・ありえそうで泣けてきます)
ちらとそんな弱気にもなりました。

(なあに！それならば、ムリにでも向かせるのみですよ！)
やたらに強気になっていきますね、リユーム。我ながら大丈夫でし
ょうか。

(できる。できる、はずですよ。集中・集中！)
しよせんリユームの七割がたはハツタリで成り立っているのです。
今さらどうってことはありません！

聖堂にいる皆の、意識すら集めるのです。

高まる緊張感の中、ルゼ様だけがおおらかに微笑まれています。
さすが余裕でらっしゃいます。

期待して下さっているでしょう。生き生きと瞳を輝かせて、リ
ユームを何やら熱のこもった視線で見守ってくれています。

『どうかまた、アナタの歌を聞かせてちょうだい』

あの葬儀の日、そう丁寧に申し出て下さったルゼ様のお言葉が蘇よみがえ
ります。

ようやく、約束を果たす時が来たのだと思いました。何とも誇ら
しい気持ちです。

『でも、アナタが元気に歌えるようになったらね？』

リユームは泣きじゃくりながらも、確かに『はい』と頷いたので
す。

『はい。お約束いたします』と。

この優しく慰めてくれたご婦人に報いるためなら、それくらいな
んて事は無いのです！

目の端でリユームを見つめるルゼ様が、頷いてらっしゃるのを確
認いたしました。

ためらいなく、いきなりの大音量で始めます。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

栄光に至り

奏でる

祝福の調べは

若き領主に

寄せらるる調べ

永遠と

栄光の

響きもつ

調べ

この

晴れやかな

良き日に

響き

渡れ

祝福の歌声

ほうと息をついたのは、リユームだけでは無かったようです。
この場面を息を詰めて見守って下さっていた、どなたかも一緒に
肩の荷を下ろした瞬間でした。

（終わりました！やりとげましたよ、無事に『任務完了』です！）
情け無い事にリユーム、足腰の力が抜けていきました。

そこはそれ。胸に両手を当てて膝を折って行きます。

お褒めの言葉に礼をとって頭を垂れるという形でごまかし、
似非^{えせ}お嬢さまらしく見せました。

わあああつ！！

「！？」

どよめきと共に、湧き上がったのは割れんばかりの拍手でした。
びっくりしました！先ほどまでの静けさが、嘘のようです。

自然と笑みが浮かび、目頭が熱くなってきました。

皆さんに改めて向き合つと、リユーム深々と礼をとりました。

深く深く　この胸に湧き上がる感謝の気持ちを込めて、深く。

そうです、忘れてはなりません。

この場にいらして下さった皆さまあつてのご領主様の任命式、リ
ユームの了承であります。

気が付くとご領主様も同じように礼を取られているのが、目の端
に入りました。

少しだけ驚いたので、そちらを見てしまいます。

ご領主様は左手を胸に押し当てて、最高の敬意を払っておられま
した。

わあああああ！！

歓声と共に再び拍手の勢いが増しました。鳴り止みません。

人々の喝采はドーム状の天井にすい込まれた後、光と共に降り注ぐかのようです。

(どうし・・・よう。な、泣き出しそうです！)

「リユーム、もう頭を上げろ」

「？」

ご領主様に促がされました。差し伸べられた手を、その先を見上げます。

「皆がオマエに賛辞を贈っている。それに応えろ」

「いいえ！いいえ！」

リユームは慌てて首を横に振りました。

ご領主様に向き合うと一瞬だけ屈み、顔は上げたまま礼をとります。

この拍手喝采はすべてご領主様に捧げられたものでございます。

鳴り止まない拍手の中、声を張り上げるように申し上げました。

また頭を下げたのですが、気が付けば素早く左手を取られた上に。

あごまで取られておりましたんですよ。

「！？」

ご領主様が何か仰っているようです。唇の動きからわかりましたが、このどよめきの中ですからよくは聞き取れません。

「え・・・っ！？」

言っている事をその唇から読み取ろうとしたのですが、ふいに視線が外された次の瞬間。

右の頬、耳たぶの辺りに軽く押し付けられたソレは、唇ですよね！？

(く、口、つけましたか、今ああ！?)

わああっ！と皆の歓声が、何やらまた異なった勢いを増したように感じます。

「！？」

それだけならまだしも、囁かれた言葉にリュームは固まるしかありませなんだ……！！

今度は舌を出さないのか？

何のことでしょう等と考えたのですが、思い当たってしまったのです！

式の始まる前に、ご領主様を見送った時の振る舞いを。

(確かにリュームに背をむけていたはずなのに、このお方は……！！)

全くもって油断なりません！恐るべし、ご領主様！リューム、泣き出してもいいですか？)

……*……*……*……*……*……*……*……*……*……*……*……*……*

拍手も熱のこもった視線も、やむ気配がありません。

(ははは……ははは……はあゝつて、笑えないけど笑うしかないですね。

どうなるんでしょうーこの後？リューム、どうなるんでしょうか……？)

(ご領主様の浮べる笑顔は怖く、握る手はやたらに強く感じます。後で覚えてるよ、って所でしょうかねえ)

リュームはといえば、うつろな目で手を振ってどうにか皆様に応

えたのでした。

第十四話 シェンテラン家の若き領主に捧げる調べ（後書き）

リユームが！りゅ〜〜むが！

『誰が！若き領主に捧げてやるものか、調べ！』

そんな調子で歌う気になってくれませんでした。

キャラ、暴走。何気に負けん気の強い子だったようです。いつだって、けんか腰。

こんな事（最初の下書き大はば無視）があるのかと思いつつ、何とかだめすかしての十四話でした。

『もう・どうだってよくは、なくなってきたませんか？ 小話』

（（（（見つけた））））

鳴り止まない拍手の中、キレイに頭を下げるリユームに初めてあった日を思い出していた。

（見つけた、私の理想のお人形！）

今まで見たことも無い、黒い瞳に黒い髪。

それでいて白磁のような肌は、白すぎて血色というものを感じさせなかった。

何て作り物めいているのかと、幼心に胸が震えた。

『はじめまして、ミゼールド様。ジ・リユームでございます』

キレイなキレイな澄んだ声で、人形は挨拶した。

人形遊びなどとうに飽きていたが、再び自分が夢中になるなんて思いもしなかった。

六年前のあの日、確かにそう思った。

今、その日と同じ気持ちだ。

（私が一番・・・とまでは行かなくても、早くに見つけていたのに

なあ。これじゃ)

もう、あんまり。私だけのお人形として遊べなくなりそう。

そう思えて、拍手にあまり力が入らなかった。

(ああ！見つけた！)

シエンテラン家のカラス娘。

兼ねてからそう囁かれているだけで、実際に『彼女』を目にするのはこれが初めてだ。

噂では『カラスのように真っ黒で・なき声までがカラス』でみつともないから、公には出さないのだと。

そんな噂は根も葉もないというよりは、わざとこの家が流したものと推測できる。

(何がカラスか！)

例えるなら黒真珠がいい。他にも、色々あるだろうに。

何にせよ館の奥深くに大切にしまい込まれていた宝を、自分は見つけたのだ。

巷で流行っている『星のカケラ』なるものを、渡したい相手を。

(ああ、これは)

ずっとずっとしまい込んで、人目につかぬようにしてきたのだろう

なと思った。

(今になって見せびらかしたくなったのか、ご領主様？)
わずかとは言え、常は吃音のある歌姫もまた珍しかろう。
姉からはそう聞いている。

何にせよ、彼女はもう館に引き籠もってはいらなくなるだろう。

(” ” 見つけた ” ”)

獣の我を呼びつけてしまうほどの、その威力は何だ？

(” ” これもまた『嬢様』がお気に召すかもしれない ” ”)

獣の自分が聞き惚れてしまったこと、人間のくせに生意気なと腹も立つ。

(” ” ふん ” ”)

カツツとひづめで、その場を蹴り上げる。

はい。

『誰だよオマエ』が二名ほど。

これから出てきます。

第十五話 シェンテラン家の乱入者（前書き）

でしゃばり王^{キング}が、毎度のことながらお騒がせします。

第十五話 シェンテラン家の乱入者

何でしょうか。強く惹かれる何かがあります。

リュームが皆さんに応えて振っていた手を思わず止めてしまうほどに、無視できないものです。

あの、聖堂の通路の向こう側。

ご領主様が入ってこられた扉の上、誰もいるはずの無い天窓辺りから視線を感じました。

そもそも足場など無いのです。隠れようもありません。

見上げましたが、べつだん変った所はないようです。

ただ、日が陰^{かげ}ったようだとは思いました。

天窓から明るく差し込むはずの日の光が、雲で遮られたように暗くなりましたから。

（あれ？お天気悪くなりそうなのかな？）

徐々にその暗さが増していく様を、リュームは目を逸らす事ができません。

「リューム？」

名を呼ばれたのはわかっていましたが、頷く事すら忘れて魅入っていました。

ご領主様も不審に思われたのでしよう。リュームと同じ方向を見上げます。

壇上の二人が何に視線を奪われているのか。

皆もそう思ったようです。当然、振り返り見守ります。

（闇が集まりだしている？）

そうとしか表現できません。

それは集まり凝^{こじ}りながら、ゆっくりと舞い降りてくるかのようです。

細かい闇のかけらの一つ一つが、まるで意志を持っているかのよ

うです。それは、次第に大きくなって行きます。

それに伴って、高みから見下ろされていたように感じた視線も、とても近く強さを増しています。

完璧な闇の塊が祝福の道に降り立つ頃には、その輪郭もハッキリとしてきました。

闇の中からまるで一步踏み出したかのように、蹄が現われて着地します。

それと同時に、闇の中心に紅い炎が二つ見えました。紅すぎて黒に近い、小さな火です。

火が瞬きました！まるで暗闇に火花が散った時のようです。

ソレが獣の眼だと理解するのに、そう時間は掛かりませんでした。

。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*

きゃああああ！！

わあああ、獣だ！

そんな悲鳴と共に駆け出す人もいれば、その場に固まってしまっ人もいます。

「警備、皆を誘導しろ！駆け出させるな！術の心得がある者は残れ、援護しろ」

そんな的確な指示が飛びます。

ご領主様はルゼ様とフィルガ様を、背に庇うようにして下がります。

(ああ。なんだかんだ言ってもさすがです、ごりょうしゅさま) 意識のはじつこの方で、そんな事を思いました。

リユームと来たら、その獣から目が離せないのです。
引き剥がそうとは思うのですが、どうしてもその闇に釘付けにな
ってしまうのはなぜですか？

いえ。そもそも、そんな気にすらなりません。

” 人の子ども、散るがいい！我が用があるのは、コヤツだけだ
”

闇色の獣は、大きく首をしならせると唸り声を上げました。
グルルウ、と押し殺したかのように、牙の間から漏れます。

それがまるで何かを訴えているかのように聞こえてしまうのは、
リユームの耳だけでしょうか？

(なあに？どうしたの？)

” 人の子の分際で我を歌声で魅了した、その小娘だけだ！”

獣がひとときわ強く唸り声を上げます。

蹄で『祝福の道』を一蹴り、二蹴りしたかと思うと、その一角を
突き出すように構えました。

枝分かれした一角の先端が、リユームへと狙いを定めているよう
です。

(え!?)

空を駆け抜けた跳躍に、恐怖よりも感動してしまいました。

嫌に冷静にそうとしか感じないまま、身動きが取れませなんだ。
身震いした次の瞬間にはもう、獣の身体は目の前でしたから。

ガ・キイツ……!!

明らかに聞き慣れない音がしました。何かが折れたかのような、
不快な音に我に返ります。

「じゅ……じゅりよ、しゅ……ま」

「下がっている、リユーム！」

目の前に飛び込んできた光景に、リユームは目を見開くしかありませんでした。

「ご領主様は今しがた収めたばかりの了承の鞘を抜き、獣の一角を押し留めています。」

獣の跳躍もご領主様の剣さばきも、何もかもが一瞬の出来事でした。

しばらく押し合った後、獣が勢い付けて頭を持ち上げました。剣をいなそうというのでしょうか。

「ご領主様は獣の一角の枝分かれた部分に、ちょうど剣を掛けて押し留めているのです。」

獣も負けていません。その事を理解した上で、剣を引っ掛け上げようとしているようです。

しばらく睨みあった後、双方振りほどくようにそれぞれの武器を引き下ろしました。勢い良く！

ガッ！とまた木の枝が軋み上がったかのような音が響きます。

渾身の力をぶつけ合ったのでしょうか。再び、互いに後退して距離を保ちます。

「退け、四つ足風情が。聖堂に踏み入るとは身の程知らずが」

” ほう？貴様が新しいエキナルドの領主か、若造！”

カツ、カツ、と獣は蹄を鳴らしながら。ご領主様も同じように、重い靴音を立てながら。

一定の間隔を犯すことなく、左右を行ったり来たりを繰り返します。

互いの背後に回り込もう、回り込ませぬといった所でしょうか？

リユームは慌てて鞘を拾うと抱えました。

「ご領主様！剣はお収め下さい」

「正気か、カラス」

呆れたように、吐き捨てられました。しかも獣と睨みあったままなので、振り向きもせずじ。

「だ、て、このコは、リユームに用があるみたいですよ！」

それに、ご領主様のこと傷つける気ない・です。だから、剣向けちゃダメですよ」

「何を根拠に言うリユーム。しかも俺に指図するか」

「うぐ・・・、えと。さ、鞆の役割ですから」

「警護！誰でもいいから、リユームを下がらせろ。そして今日はもう部屋から出すな」

にべも無い一言ですよ。

「え、えと！獣さん！無礼をお許し下さい、驚いただけなのです！もし誰も傷つける気が無いのなら、どうかどうかその場にお鎮まり下さい」

かくなる上はそう、直談判に限りませう。リユームもその場に座り込んで、頼み込みました。抱えた鞆を下ろします。

獣の紅い紅い目が、リユームをじっと見つめています。

大きな身体ですよ。立ち上がれば、リユームの背など軽く越す事ですよ。

シンラより一回りは大きいでしょうか。

打ち振る尻尾が、ふあさふあさと床を掃いています。

こうやって見ると、何て立派な獣だろうかと思いました。

「怒っていますか？ごめんなさい。わたくし、何か無礼な事、いたしましたか？」

諦めずに辛抱強く、声を掛けます。その瞳を見つめると、獣の方も逸らさず見つめ返してくれました。

しばらく見つめあった後、獣はおもむろに前脚を折ると次いで後ろ足も折りました。

通じました！

良かった。やっぱり、この子はイイコのようにです。
獣はそのままくつろいだように、ごろんと身を横たえてくれました。

「まあ！かわいらしい！　痛^たっ！」

そう手を叩いてはしゃいだと同時に、おでこを叩かれました。
ぺし！つと乾いた音が響きます。

言わずと知れたご領主様の仕業です。

何てことなさるんですか。また赤くなったら恥かくのは、ご領主様なんですからね。多分。

涙目を向けて、控えめに訴えてみました。

オマエには警戒心・緊迫感という
ものが無いのか！
おそらくそんな所でしょうか。

ご領主様の様子から、そんな見当が付くようになってしまったり
ユームです。

「だ、だって、このコは怖い感じがしません。きっとご領主様のお
祝いに来てくれた、いいコに違いありません、」

せっかくの進歩ですが、残念ながら活かせていないようです。
相変らず彼の機嫌を損ねる方向にのみ、働かせてしまっている様
子なのは明らか。

リユームを睨むご領主様の拳が、固く握ってげんこつを作ってい
ます！

ん、と言葉を飲み込むしかありません。

これ以上なにか言ったら次は、拳骨^{けんこ}決定でしょう。

この方ならやります、間違いなく！ルゼ様の御前だろうと何だろ
うと。

（もう、ご領主様のおこりんぼ！短気！すーぐ、そうやって睨む
んだから！）

リユーム、この中で一番警戒しなくてはならないのは『貴方』だ
と思っっていますから。ええ。

” フィルガ、ルゼ ”

「いけません」

ルゼ様が厳しく言います。

(いいこ、 いいこ、 するのはいけませんか？)

” まだ、何も言っていない ”

「 いけません。これ以上、口にするのもいけません」

(いいこ、 いいこ、 って言ってもいけないですか？)

” ” コヤツも嬢様の遊び相手に、ちょうど良いのではないか？何より、この歌声！ ” ”

リユームは咎められたのかと驚いて、お二人を見上げます。

「 黙らんか、ダグレス 」

フィルが様まで、拳を握り固めています。

しかも持ち上げて見せ、今にも振り落としてきそうな構えかたです。

(ぶったら、ダメです！)

。
。 。

角があるので、頭全体を抱えきる事はできません。

それでもリユームは、なるたけ庇うように獣を抱きしめました。

「 だぐ、 れす？ だまる？ 」

何のことでしょうか。ルゼ様もフィルが様も、このコに向かってお話されているようです。

” この娘は『獣耳』ではないようだな。残念だ ”

ダグレスは抱かれたまま、紅い眼だけを動かしています。

「ダグレスとはこの獣の名ですよ、リユーム嬢。これは『獣』ですからね。一応賢い。」

我々はこの獣と意思疎通が可能な『獣耳』なものですから、この獣が何を言っているのかわかるのです」

” 一応とは何だ、若造。貴様よりも賢さ品位共に、はるかに凌ぐ我をつかまえてその言い草は。礼儀が足りぬわ！”

腕の中のこの獣は確かに、何か唸っているように聞こえなくもありません。

でも体の割りに大人しい、とてもいいこです。

「ステキですね！お話できる、なんて。何て？このコは何て言っているのですか？」

「この獣は貴女の歌声が、たいそう気に入ったそうですよ。出来ればもっと聞きたいらしい」

ですがどうかお気になさらずにと、フィルガ様はダグレスを睨みました。なぜでしょう？

「だぐ……れす？」

” そうだ。娘。軽々しく我の名を呼ぶなど、本来ならば『嬢様』以外許されぬのだぞ ”

答えるようにダグレスが、リユームに身体をなお一層すり寄せました。甘えているのでしょうか。かわいいです！

「だぐれす、いいこ、いいこ、かわいい、かわいい！」

嬉しくてぎゅううと抱きしめました。

” ” 娘。なかなか抱かれ心地が良い身体をしているな。何、我の嬢様には劣るが。

それに、娘よ。オマエも闇の気配がするな。我、と同じ ”

「ダグレス。それは、後で」

” ” 気が付いているだろうか？ フィルガ。この娘、闇に魅入られているぞ。『今すぐ加護が必要だ』という事くらい” ”

「黙るんだ、ダグレス」

始終温厚であったフィルガ様が今までに無い厳しい表情で、ダグレスをたしなめました。

「フィ、フィルガ、さま？ど、どうされたのですか？」

「ああ、リユーム嬢。この獣は自分とお揃いの闇色まとう貴女を、心底気に入ったようだ。

だから不躰にもジャスリート家に『今すぐ招待したい』と言っつきかないのですよ。

館には彼の仕える私の婚約者も待つているものだから、会わせたいらしい。

貴女の素晴らしい歌を彼女にも聞かせたいと、ね」

ガ ” ” 何だその、当たり障りの無い通訳は。我は不満だぞ、フィル ” ”

「ダグレス、本当？ りゅ・・・わたくしの歌で良かったら、喜んで」

” ” 決まりだな。では” ”

とてもゆっくりと、ダグレスが前脚を立てました。

「まあまあ二人とも」

ルゼ様の笑い声が響きます。その笑い飛ばしてくれる明るさが、せめてもの救いです。

それなのに、ご領主様と来たら、まったく怒りっぽくていけません。

「リユーム！オマエは、まったく！」

リユームはご領主様に引っぱり上げられて、耳元で思いつきり怒鳴られたのでした。ううう。

「ダグレス……抱っこ」

腰回りをがちりと拘束されては、駆け寄ることも出来ません。

それでも未練がましくダグレスに向かって、両手を差し伸べていました。

「リユーム。いいかげん聞き分ける」

ぺしい！とまた、リユームのおでこはいい音を立てたのでした。

第十五話 シェンテラン家の乱入者（後書き）

『闇色おそろい獣様』

今回の（仮）タイトルでした。わかりやすい。
女子供には割合甘く、野郎には手厳しくがモットーの
実にわかりやすいダグレス。

間違いなく『タラシ。』です。ええ。

『どうでもいい 小話劇場』

（あああ〜リユーム嬢・・・もう駄目だな。見逃せないな、これは）
すっかり獣を手なずけてしまった彼女を見る。

（ま、俺は楽しいからいいけど。姉さんが怒るだろうなあ）
『術の心得がある者』として、援護するつもりで残ったのだが自分
は必要なかった。

（彼女もこれで『有資格者候補』 確定となった）

ジ・リユーム・シェンテラン嬢。彼女の事は上に報告せねばなるま
い。

「まったく。ダグレス！悪乗りしすぎだ」

” ” ふん。盛り上がったではないか” ”

「やりすぎだ」

” お？我を責めるか？そもそもルゼの提案だぞ”

「公爵」

「いいじゃない。盛り上がったんだし」

” 頭が固いな、フィルガ”

「ねー。本当にこの年寄りよりも、年寄り臭いったら」

” 全くだ、我よりずっと若造のくせに。なあ、ルゼ”

「・・・本当にダグレス。気に入ったからという理由で『誘拐』ま
がいの行いはするなよ！」

” さあな”

「~~~~ダグレス！リユーム嬢は『特に』駄目だ！」

” 確かにあの若造が怒り狂うだろうな”

「それは 見ものよねえ」

” だろう？”

フィルガはぐったりとうな垂れた。

(リユーム嬢・・・おそらくこの先スミマセン。)

第十六話 シェンテラン家で人形遊び（前書き）

またしても仮タイトルから逸れまくりの十六話。

まだ十六話。 もう十六話。

第十六話 シェンテラン家で人形遊び

聞き分ける。

そう命じられては黙るしかありません。

本当は聞き分けたりなんてしたくありませんでした。

もっと、ダグレスと一緒にいたかったのに。

せつかく、こんなみつともない子のリユームでも『気に入った』
と言ってくれたのです。

そんな事言われたの、初めてだったからすごく嬉しかったです。

しかも髪と目の色と、ダグレスの毛並がおそろいだとまでしてく
れたのです。

黒猫のエキに、闇をまとう獣のダグレスに、カラスのリユーム。

それくらいです。リユームが知っている『黒い毛並のコ』なんて
突然その優しいぬくもりから引き剥がされて、寂しくなってきた
ました。

「リユーム。オマエの勤めはもう済んだ。部屋に戻れ。今日はもう
出歩くな」

「………はい」

絞り出すように小さく返事をするのが精一杯でした。

「それはご命令ですか？」

「そつだ」

「はい」

「ご命令ならば仕方ありません。大人しく従うのみです。逆らう
事は許されません。」

式典の後の祝賀会はどうやら、出席させてはもらえないようです。
(どうしよう、ニーナ達があんなに張り切って祝賀会用になって、ド

レスを作ってくれたのに・・・無駄になってしまいました。
ごめんなさい。やっぱり、余計な事したからご領主様に呆れられ
たみたいです)

申し訳なく思いながらも、どこかほっとしてしまいました。
終わったのです。

もうこれで、ご領主様と一緒に行動する日々は終わりを告げたの
です。

よかったよかった。

これからまた、なるべくこの方の目の前に出ないようにしましょ
う。

そうしましょう。

(出来ればまた今夜抜け出して、エキとシンラと遊ぼうと。報告
も兼ねてお礼に行きましょう)

リユームはそんな事を考えながら、大人しく頷いて見せたのでし
た。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

これはもう休ませろ。

「。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

はい。お言葉ですが『控えさせて』おくという事でよろしい
ですか？

「。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

好きにしろ。

「。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

はい。その方が万事においてよろしいかと思えます。

上の空で、ご領主様とニーナのやり取りを聞いていました。

リユームの心を占めるのは、あのたいそうステキな闇色の獣の事

ばかりです。

(ダグレス、イイコだったなあ)

ご領主様に付き添われての強制送還です。

ご一緒とあつては、こつそりダグレスに会いに行けません

一人で大丈夫です、と主張したのですが、今ひとつ信用の無いようです。

もちろん。ふら付く気、満々でした。見透かされていますね。

「リユーム、疲れたな？」

ぼんやりと何を見るとでもなく見ていたリユームに、ご領主様の手が降って来たように感じました。

驚いたのと今までの経緯から、体が勝手に跳ね上がりましてゴザイマス。

そりゃあもう、派手に大きく。また、叩かれるかと思っしまいましたから。

首をすくめて目をつぶって、二ーナにすがりました。

「勤め、ご苦労だった。また倒れる前に休め」

言いながらご領主様の手が、リユームの頭をわしゃわしゃとかき回すように撫でました。

まるでシンラに『よしよし。』する時みたいに。

リユーム、ちょっとはガンバったとつら勞われているようです。

少しだけ顔を上げて目を開けました。

「は・い。でも、まだ、そ・なに、疲れてません」

『よしよし』する手が止まりました。

「ふん・・・生意気だな」

リユームのくせに。

「痛っ！」

またぺしつとね、叩かれちゃいましたよ。やっぱり。いい加減、学習しましょうや！リユームよ！

言い捨てると背を向けられたご領主様に、リユームは『くっそお！』と思いながらも頭を下げて見送りました。

今度は舌は出しませんでしたよ。ええ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

一応しおらしく部屋に戻ったリユームは、待ち構えていたニーナに謝りました。

「ニーナ、ごめ・なさい。やっぱり、色々呆れられたみたいですが。せつかく応援してくれたのに、リユームにはアレが精一杯だったようです。」

でも一応、もう勤めは済んだそうです
「ニーナは首を横に振って見せながら、優しく手を引いてくれました。」

「いいえ。リユーム様、謝る必要なんてどこにもございませんよ？ 本当にご立派でした。ニーナは鼻が高かったですよ」

「ほんとう？」
「本当ですとも」
「。。。。*！」

無言でニーナに抱きつきます。
言葉にならない想いは感謝で溢れかえっているはずなのに、言葉という形を取りませんでした。

ありがとうございます・ありがとうございます、いつもありがとうございます。
ニーナが大好きです。

「あらあら、リユーム様。甘えんぼさんですね」
うん。これもまた無言で頷いただけで、ニーナの胸元に顔をうつすめました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

着替えも終わり、薬も飲み終わり、ほっと一息ついていた時です。それはそれは勢い良く、リユームの部屋の扉が開けられました。そのままの勢いで駆け込んだきたのは、愛しのミゼル様です。

「まあ、ミゼル様。どうされたのですか？」

リユームは嬉しさのあまり笑顔で駆け寄ったのですが、ミゼル様のお顔はしかめられ難い表情ものでした。

「リユームっ！アナタ何やっているの？私、待っていたのに。どうして部屋にいるのよ？」

「ミゼル様？」

「ア、アナタねえ！自分の立場つてものをわかっていないの？早く、ヴィンセイル様の所に行くのよ！早くっ」

早く早く、と言いながら、ミゼル様に腕を引かれました。

「ミゼル様？それはなりません」

「どうしてよ！？」

「リユームはもう今日は部屋から出てはならないのです。ご領主様のいいつけです」

「……ヴィンセイルっ、もう！！」

だん、と心底悔しそつに足を踏み鳴らすミゼル様。しかも呼び捨てですか。流石です。

ますます惚れてしまいそうです。

何やら悔しそつにお顔を歪ませていらっしやいますが、そこも絵になるミゼル様です。

「ミゼル様、お言葉ですがご領主様は『控えさせておけ』と仰ったのですよ」

ニーナが宥めるように声を掛けると、それもそうね、そうよね、と小さく呟いてミゼル様は、手を放されました。

「そうね。リユームの脆弱せうじやくっぷりを考慮したら、それが普通よね。これからが本番なのだし」

「流石です、ミゼルド様」

敵かにニーナが請合います。何でしょうか？二人、申し合わせたように頷きあっています。

リュームを置いて話が進んでいくのだけはわかります。

「ミゼル様？ニーナ？」

「リューム！仕方が無いからそれまでは、ミゼルが遊んであげるわ！」

「まあ、喜んでミゼル様。何をいたしましうか？」

打って変わってゴキゲンな様子の子のミゼル様に、リュームも嬉しくなって声を上げました。

「もちろんっ！ねえ、ニーナ！」

「ええ、ミゼルド様」

『お人形遊びよ』

リューム、お人形ではないのですが？という控えめに訴えてみましたが、

着せ替えごっこなるものをして遊ぶのだ、お人形役はリュームだ、嫌とは言わせない。

はあ。

え〜？嫌じゃないですけど。

お人形役はミゼル様がいいと思うんですけど〜？

何て意見は即座に却下されました。

.....

『リュームはこれを着て、これを付けるのよ！』

下着姿で寝台に腰掛けて、待たされているリュームです。

気楽に足を交互にぶらぶらさせながら、ぼんやりとミゼル様を見上げます。

よう。

・・・それにしてもリユーム、この首筋の傷は何？またどこかに転んで打ち付けたの？

いやね、目立つじゃない！」

「・・・・・・・・」

ははは、そんなんですよと笑ってごまかすしかありません。

目立ちますか。そうですか。自業自得なんです。思わず目を伏せました。

「ミゼル様。後でボレロを羽織っていただければ、隠れますから」

ニーナが助け舟を出してくれました。

「そうね。リユームったら、もうそそっかしいんだから！気をつけなさいよね！」

「はい、ミゼル様。気をつけます」

何気にリユームも、ミゼル様をお人形扱いして楽しんじゃってますよ。

白粉おしろいを軽くはたいてみたり、薄っすらと頬紅をぼんぼん付けてみたり。

滑らかなお肌にそんなものは必要ないのですけどね。

夢中になっているせいか、ミゼル様がお構いなしなのをいい事に

「はい、リユーム。仕上げは私がやってあげるわ！こっちむいてんー』ってやってー！」

「ん？」

ミゼル様が唇を引き結んで、突き出して見せました。リユームにもそれを真似るというのでしよう。

素直に従うと、ミゼル様の指先が頬に当たります。

「もう少し、んーんってやってー！」

「んっ・でいいですか？」

「しゃべっちゃ、ダメー！」

はい。申し訳ありません。言葉も禁止されたので、心の中だけで

詫びました。

ミゼル様は真剣そのものの表情で、リユームの唇に紅を刷はいてくれているのです。

「ご自身も唇を引き結んで突き出したまま、ていねいにいていねいにリユームの唇の輪郭りんかくをなぞってくれています。

「できた！いいわよ、リユーム。動いても。いい出来ばえだわ！ねっ、ニーナもそう思うでしょ」

ねっ！とミゼル様は鏡を持ってくれている、ニーナに同意を求めます。

その瞳はきらきら輝いていて、少女らしい可憐なまばゆさです。

なんっってお可愛らしい！！

リユーム感激のあまり、勢い余らせ調子に乗って 。
ちゅう。

向かい合わせにしゃがみ込んでいたミゼル様を捕まえて、思わずそのふっくらした頬ほっぺたに唇を押し当てていました。

「なっ、ちよっと、リユーム！！」

「んんーです」

「もういいわよっ、もう、何するのよ！せっかくキレイにしてあげたのに、取れちゃったじゃないのよ」

ミゼル様は顔を真っ赤にして、頬ほっぺたを拭きます。

ああん！もう本当に可愛らしすぎです。隙を見てもう一回やっちやおっ。思わずそう狙ねらってしまいます。

「リユーム。私にこんな事してる場合じゃないのよ！わかっていて？」

「？」

わかりません。

今日はもう、部屋から出る予定もありませんし。

何の事でしょうと小首を傾げて、ミゼル様を見つめました。

「リユーム！あ、あなたねえ、自分がどのような立ち位置に据えられたか、まさかと思うけど理解していかないのね！？」

「まあ。していますよ。ちゃんと」
「言ってみなさいよ」

「シエンテラン家の立会人、鞘の役割です」

「それを真に理解できているとは思えないわ」
えっへんと胸を張って答えたリュームに、ミゼル様の視線はなぜか白けたものでした。

「もう、リュームの『勤めは終わった』そうですね。カラスはもう今日は部屋から一步も出るなつて、さつきご領主様にそう言われましたから。間違いありません」

「終わつてないわよ！これからよ！まだ、始まつたばかりなのよ？ さあ、準備はこれで整つたんだから行くわよ」

リューム、しっかりしてちょうだい、となぜか嘆かれてしまいました。

「行く？どちらへですか」

「決まつてるでしょうっ！ヴィンセイル様の隣よ。祝賀会の宴に私たちも乗り込まねばダメよっ！女が廃^{すた}るわっ」

「いけません。ご命令に背くことになります」

「行くの！」

「いけません」

「何よ！リュームのばかぁ！何でわかつてくれないのよっ、子供の言つ事だと思つてバカにしてっ！」

ミゼル様に怒られると正直へこみます。

嫌われたくありません。

それもあります、何やらあのお方の面影と重なるものですから
余計に。

半端じゃないほどのダメージです。

それでもリューム、持てる限りの気丈さを装って頑として譲りま

せんでした。

「いけません。ご領主様の命です。ミゼル様、聞き分けてくださいまし」

泣かれようがわめかれ様が、ここは『お姉さん』ぶるしかありません。

ここでミゼル様の仰るようにすれば、命令に背いたと叱られるのは確実。

しかも下手したらお怒りを買うのは、リユーム一人では済まなく なります。

それは何としても避けなければなりません。

さて・・・リユームの『お姉さんぶり』がいつまで持つ事やら？ と危ぶみ始めた頃です。

コンコン。

控えめに扉が音を立て、訪問者を告げます。

「？」

「まさかつ！ヴィンセイル様？」

弾かれたようにミゼル様が立ち上がります。

そのまま駆け寄って、勢い良く扉を開け放ちました。

「きゃあ！..！」

「あら、まあ」

「ダグレス！」

リユームも駆け寄って、驚いたミゼル様を抱きとめました。

扉の向こうにいたのは、何と先ほどの黒い獣『ダグレス』でした。頭を垂れ、大人しくこちらの出方を待っているようです。

「大丈夫ですよ、ミゼル様。ダグレスはとってもイイコですからね？遊びに来てくれたのね、ダグレス？」

扉をノックしていたのは、どうやらダグレスの角だったようです。「本当に賢いのね。どうぞ、ダグレス。入ってください」

” ああ。 邪魔をする ”

ダグレスは解ったと言つように首を上下に揺らしました。

第十六話 シェンテラン家で人形遊び（後書き）

（仮）『ぐずるリユームに切れる領主。』でしたが
『ぐずるミゼルに手こずるリユーム』の十六話でした

おかしいな。また次回に持ち越し、15禁。

いつのまにやらPVが！！

いち、じゅう、ひやく、せん、まん、じゅ・・・じゅうまん越えしてました！！

ありがとうございます〜（感涙）

『あの橋』『神殿まえ』より遅いスタートを切ったはずなのに（苦笑）〜我ながら『ダークホースだ、闇払！』ですよ。

それでは行きます！

遊ぶつもりが本編食い込み・殴りこみ　いい加減STOPキャン
ペーン。

超どうでもいい小話　劇場『領主のドン引きエピソード』盛り合わせ。

『侍女^{ニーナ}は見た！見守ってきた〜7年間の記録』

「ねえ、ニーナ。この子供の私でも解る事が、どうしてリユームには理解できないのかしら？やっぱり、バカだからかしら？」

人のお嬢さまつかまえて何てこと仰るんですか、ミゼル様。いいええ。この七年間の誰か様のおかげだと思われます。

「何故、食事をきちんと取らない？ここの食事が口に合わないとも言つのか」

「え？えと、だってさつき食べたばかりですよ？」

機嫌よく庭で読書をしていた少女に、いきなり詰め寄ったのはこの館の若さまでした。

それはそれはもう。めいいっぱい不機嫌丸出しのご様子で。

驚きながら見上げたのは先日この家の養女になつたばかりの、十一歳の少女。

見下ろすはその義兄となつた十八歳の若者。

どうやら食事の席で少女はほとんど手をつけず、もう食べられないからと早々に切り上げる事数回に及んだらしい。

「では何だ？遠慮しているのか」

「いいえ、あの、ちゃんといいただきました。パンとスープとお野菜」

そりゃ、前菜の段階だ。そこで席を立たれて、この若様はお怒りと言つ訳らしい。

「オマエは仮にもこの家の養女になつたのだ。その自覚はあるのか。持ち合せていないようだがな。食事はちゃんと取れ。わかつたか！」

「はい。もうしわけございませ・・・でした」

かわいそうに。少女にとって食事は瞬く間に苦痛となつたようだった。

お菓子を勧めても「た・たべると、食事がたべられなくなつてしまつので」と、手を出さなくなつた。

しかも。無茶をして詰め込んだ後は気分を悪くして、戻すこともしばしば。

これでは食事を取る意味が無い。

（ ）コワイ。食べなきゃ、怒られる。（ ）

きつとそう怯えているのだろう。

アホかっ！

食べ盛りの若者と少女を比べて何とする。

しかもあまりきちんとして食事を取れていたとは思えない経歴は、その細すぎる体が物語っているではないか。

そこに重圧とは何事か！

気持ちはわかる。少女には栄養がたくさん必要だったこと位、見れば誰だって同じことを思うだろう。

しかーし！モノにはやり方・言い方なるものがあるのだ。

姉という性質の生き物の私は、即座にお館様にご進言(という名の告げ口)をしたのだった。

・・・十二歳と十九歳編につづく。

第十七話 シェンテラン家の暗がりで（前書き）

『お叱りは 覚悟の上でいじります。』

第十七話 シェンテラン家の暗がり

ダグレスダグレスお利口さん
まっくる毛並のかわいこさん
まっかなお目は紅珊瑚

ダグレスの歌なるのものは自作です。リユームくつろぎ切って、のん気に歌を作って遊んでいました。

” 我を称える歌か。それはいいがセンスはまったく無いな、リユームよ”

ダグレスはまた応える様に、身体をすり寄せてきます。

おお！どうやら好評のようですので、はりきって続けますよ。

ダグレスダグレス甘えっこさん

おっきな体の甘えっこさん

しっぱはふさふさもっふもふ

ダグレスにも『ちゅう』っとその見事な毛並に唇を押し当ててみたり。

ダグレスはくすぐったいのか、耳を前後に動かしました。

でもそれ以外は大人しく、リユームに抱っこされてくれています。しかもその傍らに、ミゼル様も一緒に寄りかかっています。

部屋に遊びに来てくれたダグレスはすぐ、どっかりとリユームの方へと身体を投げ出してきたのです。

おや、さっそく抱っこですか。あまえっこですねと撫でてあげていましたら、ミゼル様も無言で抱きついてきました。

おや、こちらにも甘えっこさんが！というワケでリユーム、只今身動きが取れません。

少女と獣様を両方同時に抱っこしていますから。
うふふふとゴキゲンで、次はミゼル様の歌でもと思った時です。

。。。。
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。
。

バンつと!! これまた勢い良く扉が開きました。

もう驚きませんよ、と思ったりリユームでしたが。。。。

ツカヅカと荒々しい靴音が近付きます。

ええ つと、デスネ。

何やら背後からだだならぬ威圧感が、近付いてきていますが何事でしょうか?!

リユーム、振り返ることが出来ません。

その嫌でも身に覚えのある重圧感を漂わせる方、一人しか知りません。

いや！恐れるな、リユームっ

何を引け目に感じる必要があるものですか。

ちゃんと部屋から出ていないですし、何も悪い事はしていないはず!

だ、だから。多分、大丈夫なはず。

ぎゅうつとダグレスとミゼル様を強く抱きしめました。

「リユーム。ダグレスから離れろと言ったはずだ」

そこ??お怒りの点はそこ??そ、それですか!それは先ほどの話では?

リユーム意外な禁止事項に驚いて、不機嫌のかたまり様を見上げ

ます。

” ふっ。遅かったな、若領主”

「いいじゃない、ヴィンセイル様。このコ大人しいわ！」

そうでしょ、そうでしょ、ミゼル様！ねっ！いいこですよ！悪い事しませんよね？

ダグレスとミゼル様という心強い味方を、抱きしめているリュームはちょっと強気ですからね。

そのミゼル様の言葉に、こくこくと頷きます。

「リューム」

「……いや。」

名を呼ばれたと同時に、ふるふると首を横に振っていました。

あ。また、部屋の温度が下がりました模様。

リューム、胸に抱えたふたつのぬくもりに^{すが}縋ります。

「ミゼルド。こんな所で遊んでいる暇があるなら、おまえも宴に顔を出しておけ」

ご領主様は腕を組んで、顎をしゃくりました。

「リュームを迎えに来たのよ。それに遊んでなんていない。見てよ！良い出来ばえでしょ？」

「おおかた、ほとんどがニーナの手腕だろう」

「本当に素直じゃないんだから！」

「ミゼル」

「わかりましたわ。行きましょう、ダグレス。私たちは野暮^{やぼ}よ」

” ふふ。金の髪の娘は、なぜこうも揃いも揃って『小生意気』なのだろうな？面白い”

「なあに、ダグレス？何か言いたそうね。残念だけど私にはわかりないわ。

公爵様たちなら解るのよね？通訳してもらおうよ！」

” 多分どころか確実に脚色されるから、無駄だ”

「まあ本心をそのまま教えてくれるとも思えないけれども、仕方が無いわ。

転ばないようにと気遣ってくださったのか、向かい合わせに肩を支えられます。

「口の中に、何かが・・・糸？髪の毛？」

小さく舌先で感じる細長いそれは、そのような感触でした。不快過ぎるまでも無いけれども、気になりました。

ぺつと引つ張り出すとそれは、真つ黒で短い『毛』が三本ほど出てきました。

「あゝ・・・ダグレスの毛のようです。食べちゃってました」
指先にリユームの唾液で濡れた毛をつまみます。

「何？」

「ですから、ダグレスの。さっき『ちゆう』ってしたから」

「・・・・・・・・・・。」

「!？」

な、なぜに？なぜにまたこのような冷気をかもし出すのですか！
その、リユームの手を引くお方っ!!

何故にっ!？

だんだん・・・だんだん、だんだん・・・リユームもムカムカしてきました。わけのわからなさ。

(せっかく、せっかくミゼル様と楽しく過ごしていたのっ!ダグレスも遊びに来てくれたのっ!)

この方に対する苛立ちもそうですが、結局はいつも怯えてしまつて情けない自分自身にもです。

「ダグレス、遊びに来てくれた・から。抱っこしてって甘えてきて、かわいかったのに」

掴まれた右手首を引き抜こうと、腰を落として力を込めてみました。びくともしません。

ますます、ムカムカムカムカしてきました。

「ミゼル様とも一緒に、抱っこして。ぎゅうってして、たのに。いきなりっ、」

そこをご領主様がいきなり来て、ダメだっというから悪いのです。相変らずリユームの手首は、がちり固定されてビクともしません。でも負けていられません。なるものですか。

「じ、ごりよ、ごりよしゅ・あま何てっ、」

きらい

そう小さく呟いた途端、視界は半回転。後、ものすごい勢いで引っ張り上げられたせいで浮遊感まで味わっておりまして。

気が付けば。背に伝わるひいんやりとした石作りの壁に、身を預けている始末です。

おい・・・？おいしい、またか。またですか、またですよ。

リユームよ相変らず学習能力は持ち合せていないんだな？ああ、そのようですよ！

と嫌に冷静に突っ込むリユームに、誰か突っ込んでみて下さい。

ここは中庭を望む通路を突っ切り終わり、本館へと続く屋根付きの場所でゴザイマス。

おりしもリユームがそう日も経っていない半月前ほどに、目をまわしたいわく付きの場所でございますよ。

きつとリユームにとって、ケチが付いている場所に違いありません！！ええ！！（やけっぱち。）

しかもここは離れとの境目という事もありましてですね。

通行人も少なくてですねえ、要は・・・人目もなかなか無いんですよ。

加えて言いますよう、悪条件の数々を！

ここはですね『暗い』のです。薄暗い何ていう甘ったるい表現じゃ追いつきません。

何せ人通りも少ない場と有れば、そうそう灯かりも必要ないですよと判断されて当然です。

回廊の向こう側に広間が近いせいでしょう、灯かりがいつもよりも多く用意されたようで、僅かながらもほのかに明かりが届きます。それも今日のような華やかな日であればこそ。それが以外に仇になっってしまった感じがです！

その分、この暗闇を濃く感じずにはおられません。

かろうじて届く明かりは、足元をおぼろげに浮かばせるほどの威力しかありません。

もちろん、ご領主様の表情は見えません。

それがいいのか、悪いのか。まあ怖い目が見えない分、少しは休まる気もしませんけれども、一概に判断はできません。

見えない分余計に、圧するがとき気配をひっしひしと感じてしまいうりゅうムは圧死寸前でしょう。

気配で人が殺せるのか、などというツツコミはもはや受け付けません。

りゅうム、こうして実際に息継ぎすらままならないほど、口をぱくぱくいわせておりますからね。

うつとさすがに息が詰まりましたが、想いは言葉となって留まる事を知りませなんだ

「ご領主様がりゅうムのこと大嫌いだってこと、ちゃんと知っています。」

ただの大荷物だっと思ってしていることも。恥だっと思ってしていることも。

カラスの、りゅうムの何もかもがお気に召さない事も！

ぜはつと息を吸い込んで続けます。

気が付けば両手はがっちり掴まれて、壁に押し付けられていました。が構わずに続けました。

真つ暗闇の中、かろうじて掴めるだけの輪郭に向います。

息も触れそうな距離ですが、かのご領主様の視線にいたぶられる事もない闇の中。ここぞとばかりに続けます。

「だから！だから、今すぐにでもどなた様にか『押し付けられたい』

と思います。

嫁に出すなり、養子に出すなりされればよろしいのです。

リユーム、いい加減ご領主様のお心に平穩をお約束したいのです。『カラス』のこの見てくれ。取り様によっては物珍しくも取れなくもありませんでしょう。

歌うカラスとして、もしかしたら誰かおもしろがって……

「

もういいから黙れ」

リユームの訴えは舌打ちと共に、途中で遮せきられました。

「黙りません！だって、リユームのせい・せいでごりようしゅさま、おくがたさまを

おむかえになるのをためらっているって……！」

お聞きしてしまいました、何て言葉はかるうじて飲み込みましたよ。

本当に腹立たしい！そこまでお荷物の自分が必要です。早い所何とかしたい。何とかしないと。

そのために『自立と掲げた旗』振ってしまったこと、リユームは忘れちゃいませんよ。

人様の人生にまで食い込むリユームという存在は、どうにかしたいのです。

冗談じゃありません、本当に終わらせてやるとというのが目下の目標標。

ぶれる事も無く、その一点は変わらない自分に少し驚きました。

いい根性してるな、腐ってるだけじゃないな。それならば捨てたものじゃないと、少しは自画自賛です。

息も荒く……荒々しく肩を上下させている自分に気が付きました。

(ああ)

やっと告げることが出来ました。

第十七話 シェンテラン家の暗がりで（後書き）

（仮）『嫉妬のご領主』くぐずるリユームに切れる（寸前）ヴィン
セイル。

秒読み開始。 5 4 3 2 1 0 となりました後は、次回に
持ち越し。

またか！またなのか、と自分に思わず突っ込む作者です。

『おいおい。これもう、別物にして書いたほうが良いだろうよ 小
話で済まなくなりつつある小話。』

少女がこの館に来てから、早いもので八ヶ月が過ぎていた。

最初は不安な始まりだったが、どうやら皆それぞれ落ち着いてきた
ように思う。

新しく迎えられた奥方様にも少女にも言えることだが、それを迎え
た館の皆の方もだ。

寄るともう『新しい奥方様は〜』だの『リユームお嬢さまは〜』だ
の。

いい事も悪い事も含めて噂される話の数々が、好意的に締めくくら
れるようになってきたのがその証拠だろう。

いい傾向だ。

私も女の子の世話をするのは楽しい。

何より少女に頼られているのがわかるから、余計に。

『ニーナへ。いつもありがとう』
と書かれた手紙を貰ったときは、侍女冥利に尽きると思った。
嬉しくて思わず少女の頭をなで過ぎて、ぼさぼさにしてしまったの
も記憶に新しいワタクシ目である。
(これ・・・自慢しようつと)

誰に？決まっている！

そりゃあもう、色々と方々に。

「なあに？ニーナったら、さっきからごきげんねえ？」

「ふふふふふふ！ゴキゲンですともよ！」

「何？なにになになに？」

「あのね」

女同士が集まっつての休憩時間というものは、とにもかくにもこんな
調子でかましい。

まあ、今その中心は間違いなく自分だが。

「あのね、見てよ、これ！」

そう、おもむろに手紙を開きかけたその時。

「ニーナ！ー！いるか！ー！」

「はい！ここです。どうされましたか、バルハートさん？」

「いいから、来なさい」

うおっと。何かやらかしたか私？

アレとか？コレとか？いや、アレの事か？

等と内心冷や汗をたらたらタラシながら、呼ばれて行った。

「ニーナ・・・コレが。リユーム様のお部屋に」

バルハートさんが沈痛な面持ちで取り出したソレは、手紙だった。

「見ていいんですか？」

「かまわない」

何だよ、バルハートさん？

誰かから不幸の手紙でも貰ったのか。それとも？

滅多に無い彼の様子に戸惑いながら、目を通すために恐るおそる開いてみた。

『ちよつと おでかけしてきます。』

お夕食までには もどります』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この見覚えのある、可愛らしい文字は、まさか。

おい、そのまさかなのか！！

「バ、バルハートさん！コレはっ、もしかしなくてもこれはっ！？」

「リユーム様だ」

今思い返してみても、この時ほど『寿命が縮んだ』と思っただことはありませんでした。

つづく。

第十八話 シェンテラン家の首飾り（前書き）

はい。きた、R指定。

まだまだ、なまるいでしょうが。

第十八話 シェンテラン家の首飾り

「終わりにしたい？」

「う、はい」

「俺とリユームの事が」

「そ・です」

それ以外に何があるってんでしようか。

「義兄妹であって・・・兄と妹ですらない、この関係です」

どうせ最初からお認めですらないでございましょうよの、この関係です。

「だからオマエを他家に出せと？」

「はい」

「そうできるのならば、とっくにそうしている」

「そうですよね」

「何だ？そのわかった風な物言いは？」

「え？だつてリユームが病弱だから、どこにも貰い手が無かったのでしょうか？」

それでも、だいぶ丈夫になりましたから、大丈夫だと思うのです
が」

「・・・・・・・・」

「カ、カラス娘だからみつともなくて、というのもありますね」

「・・・・・・・・」

「そ、そですね。他にも色々問題ありますからね、リユーム。なかなか・・・それは貰い手が無いわけですね」

自分の事は弁わえてまっているつもりでも、いざ實際口に出してみると落ち込むものですね。

気分はどんよりです。おかげで、さっきまでの勢いが無くなって

しまいました。

暗がりの中、しょげ返っております。

「リユーム」

ふいに名を呼ばれ、何でしょうかと口を開きかけたその時です。

「ん、むっ!？」

声がかくもってしまいました。

何やら唇を押さえられてしまったようなので……って、はい!？

(ええつとお?)

呼吸しづらい上に、生温なまめたかいたのですが。

湧き上がってくる熱から逃れたいと、身を擦ります。

(うわ……っ、あ)

きつと逃れようの無いものだとわかってはいても、そうせすにはこの身が持ちません。

身を任せ切ってしまったてはいけないとだけ、それだけに縋ります。きつと、身を任せ切ってしまったら最後……取り返しの付かない事になる予感がします。

痛いくらいに苦しいのは、どこでしょうか？

もはや自分の身体であって、ないような感覚に眩暈めまいがします。

目を固く閉じているのに、頭の中がぐらんぐらんします。

世界が回っちゃってますよ、誰か助けてくださいですよ。

それはきつと吐息に混じった酒気のせいに違いありません。

微かに舌をシビレさせる、このお酒の味のせいに違いありません。くっそう!未成年に何て事をしでかしてくれるんですか!

リユームはその昔、お酒飲まされて大変な事になったのを忘れたんですか!え〜と、確かアレは……アレはっ!

(だ、だめだっ、うえええ〜)

思考を過去へと飛ばしてみますが、嫌でもこの与えられる熱と感触の生々しさに現実に引き戻されてしまいます。

まるで館内十周し終えた時のような疲労感に、虚脱感に襲われて
おりますよ。

(え?え?はい!?今、いったいなにながっ!?)

これで、とご領主様が低く唸りました。

「これで。オマエが言う『今までの関係』はもう終わりだ」

「.....?」

耳に直接囁きかけられた言葉に、問い返そうにも声が出ません。

一体なにが起こったのでしょうか。

どうやらリユームのお頭くむでは、ソレを処理するのに追いつけませ
なんだ.....!

体がやたらと痺れております。

体の奥深くからじわじわと湧き上がってくる熱は、いつもやり過
ごして来たものとは全く別物だという事くらいは解ります。

身体から力が抜けたようになって、支えられて立っているのがや
つとです。

「リユーム」

「っ!?!」

首筋を捉えられた途端に、体がビクリと跳ね上がりました。

それから、体の震えが止まりません。 涙も。

暗闇の中、温かな雫がぼろぼろとこぼれて頬を伝います。

それが触れるご領主様の手を、濡らしたのでしよう。

闇の中見えないながらも、彼の眉間が寄せられた気がしました。

「泣くな。泣き止め」

「うえ.....つく」

(そんなことを言われても、今アナタが取り返しのつかない事をし
でかしてくれたせいではありませんか)

何て反論すらする気も失せています。

顔を背けようという抵抗は易々と封じられ、思わず大きな手に自

分の手を重ねました。

もちろん力を込めようとも、ビクともしませんでした。

「リユーム、泣くな」

(だったら放して下さいよ、ですよ)

思考だけは威勢を保つリユームです。

「.....!？」

そんなリユームの瞼やまなじりを、温かな『何か』が押し付けられます。

泣くな、とまぶたに。

泣き止め、と眦を。

リユーム、頼む、と涙をすくうのは、ささやきを紡ぎ出す領主様の唇です。

睫毛の先まで震える気がします。

それがリユーム自身の震えによるものなのか、彼の吐息によるものなのかはわかりませんが。

そのどちらも、認めたくもありませんが。

嗚咽の止まらなくなったリユームに、そんな事をしてはダメですよ。

ますます止まらなくなるってものでしょう。

しかも、何気に『頼む』って仰いました事に驚きます。

いつだって命令口調なアア様が、そのように仰るとは何事ですか。

よほどリユームに泣かれると困るんですね、と嫌に冷静に判断つけちゃったじゃないですか。

いいんですか、そんな下出に出て？

リユーム、今つけあがる気まんまんですよ？

って『付け上がる』と言ったって、具体的にはせいぜいこつちゃって泣き止まないくらいしかできません。

「リユーム、コレをやるから」

だから、泣き止め。

すべて暗がりと思わせた錯覚だったのでは、何て。

そう思いたい。ええ、はい。見たくないのです、現実・事実。そんな事を考えながらぼんやりと、ただ周りを見ているようで見ちやいなかったのですが。

バルハートさんが、無言でご領主様に手拭を差し出しました。鏡越しに、二人のやり取りをぼんやりと眺めるリユームです。鏡の中のご領主様は無言で受け取ると、口元を拭われました。拭い終わると、それをまた無造作に返します。

「!？」

バルハートさんが受け取った手拭が、うつすらと紅く色づいておりましたのを、リユームは見逃しませんでした。

(ああ、そうかあ。リユームの紅が)

紅が？

紅が！

うつつたのか、何て認めたくない現実を突きつけられて、リユームはその場に倒れ込みそうになりました。

そんな鏡の中のご領主様と目が合いましたゴザイマス。

「・・・・・・・・」

「何だ」

何も。

そう答えようにも、声が出ませんでした。

何も無いわけがないでしょうよ、リユーム。

リユームの髪を整え終わったニーナが、きつちりと礼を取りました。

それは恐らく、ご領主様に対して取られたものでしょう。

ニーナの流れるような退室の仕草すらも、ぼんやりと見送りしました。

扉の脇で控えていたバルハートさんともう一度一緒に、二人は頭を下げます。

ばたん、と静かに扉が閉められました。

二人きりです。

尋ねるなら今でしょう。

コレは何のつもりなのかと。

価値の無いカラス娘に、せめてもの付加価値として与えた『持参金』のつもりでしょうか？

それとも。

それとも？

『コレをやる』

そう仰ったアナタ様の真意がいまひとつ、よく解らないのだけれどもリユームはどうしたらいいですか？

鏡の中の彼が近付いてくる間も言葉を、答えを問いかける言葉を探しているはずなのですが・・・浮かびません。

「リユーム」

距離はあっという間に終わり、傍らに立たれたご領主様に手を差し出されました。

「行くぞ」

「……………」

どこへ？

ああ、広間へでしたね。

皆が待っているのは、誰でしょうか。

どちらにせよ、そこで答えが示されるでしょう。だったら、尋ねるまでもないかと彼の手を取りました。

預けた指先に、彼の唇が寄せられました。

触れるか、触れないかの掠めるもの。

どうせ触れるなら、それくらいの距離を常に保って下さいよ。

なんて今さらながら、恨み言が湧き上がってくるような……優
しいものでした。

第十八話 シェンテラン家の首飾り（後書き）

（仮）「いよいよ15禁」〜なんちゅうタイトルだよ。

「はい、ミゼル様〜広間はあちらですよ〜」

「ちょ、何!?!」

僅かな灯かりの中、背後から両目を覆い隠された。ニーナだ。

「ミゼル様〜これ以上はなりませんよ。何せ、ミゼル様は14歳と半分ですからね〜」

「何よ、っ……っむぐ〜」

口も押さえられてしまった。

” それ以前に。こうやってのぞき見ようとしている、我々の方が問題だろう”

「はいはい、ケモノ様も行きますよ。お二人の問題ですからね〜このニーナも気になって、気になって、気になって

しつかたありませんが、仕方がありません。これ以上は踏み込んでいけません〜いきますよ〜」

リユーム、とうい声は押さえつけられたまま、ニーナに引き摺られていくしかなかった。

〜小話とは別に、削った余計なシーンでした。〜

ま……まだ、あるのか!

『侍女は見た!見守ってきた! 小話〜つづき〜』

「お夕食までに戻ると思いますが・・・？」

「何ともいえない」

今はまだ昼過ぎ。

ちよつど昼食を終えたばかりの時刻。

夕食までには確かに、たつぷり時間はあるのだ。

しかも。

今日のご領主夫妻は揃ってご公務で不在なのだ。

おのれ。計画的犯行か、リユーム様。

まさか。まさか、まさか、まさか。

『家出』

思い当たる事がありすぎて、その可能性が否めやしないよバルハートさん！

ああ、そうだな・・・ニーナ。

二人、無言でかわすそんな思いのやり取り。

「どうしましょうか」

「とりあえず、館内は搜索するよう指示を出してある。しかし、どうやら先ほどの報告では・・・野菜の運び屋の出入り場所付近で、リユーム様が遊んでいらしたと・・・」

みなまで言わなくてもいいですよ、バルハートさん！

あああゝもおおゝ、リユーム様そりゃ街でちゃったわ。

本当に計画していたんだな、と妙に感心した後泣けてきた。

問題は・・・これを、あの方に報告すべきか。否か。

「行きましようー！いいえ、私ちよつとばかり心当たりがありますので、行ってきます！それから、」

「ニーナ・・・ヴィンセイル様はもうご存知だ。何せ手紙を見つけたのは」

彼、だったと。

うっわ。

ははは。

もう、笑うしかナイですね、バルハートさん。
お互い、苦勞しますよねえ。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「心当たりだと？ニーナ、オマエも付いて来い。探しに行くぞ。あのバカ、見つけたらたっぷり説教だ」

そんな無言のやり取りを遮ったのは、冷たいお声でしたとさ。

りゅ、りゅーむさま！逃げてっ！

・・・・・・・・っていうか、逃げたのか。

そんなワケで、午後の搜索隊の一員に加わりましてゴザイマス。

まだ、つづく。

第十九話 シェンテラン家の宴の席（前書き）

『最近また長すぎ。』

身内からの注意事項でした。

すみません。休憩はさまれながら、どうぞです！

第十九話 シェンテラン家の宴の席

扉の向こうに人々の熱気を感じて、すは、と一つ深く息を吸い込みました。

取られた手を無言のまま高く持ち上げられ、いざ祝賀の場へと促がされます。

うやうやしくも開け放たれた、扉の向こうは煌びやかな広間のホールです。

広間自体の装飾も灯かりもさることながら、着飾った人々の華やかな群れに夜だという事を忘れてしまいそうになります。

金に銀に深緑に紅に純白……。

それは人々の持つ色味に装いによる、色彩の洪水です。

『その中に紛れ込んだ闇色のカラス娘が一羽。』

聞こえやしないはずの幻聴に、思わずしり込みしてしまいます。

目の前に飛び込んできた華やかな光景に、目がちかちかして忙しくなくまばたきを繰り返しました。

「お待ちせして申し訳ありません。公爵殿」

ご領主様の言葉に我に返り、取ってつけたように頭を下げます。

一瞬の後のどよめきが、さざめきに変るまで頭を垂れておりました。

「まあ。これはまた艶あでやかなお姿です事、リユーム嬢！待ったかいたが、あったというものです。どうぞこちらへいらしてね？」

これまた鮮やかな深緑の装いのルゼ様が椅子から立ち上がると、両手を広げて迎えてくださいました。

「は。」

答えたのは、胸に手を当てて礼をとるご領主様です。

リユームはといえば、慌てて小さく頷くばかりでした。そんなリユームの肩に腕を回すと、ご領主様はルゼ様へと進みます。
……ととと。

足が上手く運べずよろけました。その途端、しやらんらと飾りの軽やかな音色が届きます。

会場のあちこちからも、人々のひそめた笑い声が上がったようです。

それもそのはず。ほとんど強制的に連れられてる上、歩幅というものが違うのですから。

しかし倒れこむ事は、このばか力の腕が許してはくれないようです。

な、なんででしょうか。

近い、近すぎですよ、この方！
たすけて

視線を泳がせると、ミゼル様と目が合いました。うう、ミゼル様。『鞘』の役割って何でしょうかね？

ただの『了承人』とか『立会人』でいいと思うんですけどね？
すぎるように、ミゼル様を見つめましたか……。

なぜ、無言で首を横に振るのですかミゼル様？
え？不正解？

そしてその『信じられない』とでもいいかげな、眼差しをくれるのですか。ミゼル様！

（……って、アレ？リユームじゃなくて？）
ミゼル様の視線が、少し上にずれているのに気がつきません。

「……………」
「……りよう……ヴィンセイル様よ。」

何だってそんなイジワルそうに、勝ち誇ったかのように唇の端を持ち上げてらっしゃるんでしょうかね？

本当にこの方はミゼル様に対しては、大人気ないというか。

『こんな華やかな場に出席していいの？』

『こんなに派手な装いをしていてバチが当たらないか？』

『こんなに目立つ首飾りをしていては誰かに何か言われやしないか？』

「などなど要約すると『思いつきり場違いなんですけど？リユーム、大丈夫？』という想いでいっぱい・いっぱいです。」

「まあ、リユーム嬢！お顔の色が優れないわ。大丈夫？」

先ほどからお酒を召し上がられているせいでしょうか。ほんのりと頬を朱に染めたルゼ様に覗き込まれました。

「あ、の。少しだけ暑くて・・・疲れてしまったみたいです」

少し所か、疲労度はかつてないほど最高峰ですけどね！

そんなこと言える訳がありませんので、黙っておきます。ええ。

できるだけ視線を遠くの方にさ迷わせてみるくらいに、留めておきますね。自分の、今後の為に。

。少しだけ、外の空気を吸ってきます。

そう、さりげなく退室を試みたリユームの肩をご領主様が掴みました。

ちい！

一人に

一人に

して下さいよ！

そつと

しておいて下さいよ！

・・・いいえ。

いいええ？

ちようどいい。

今すぐ、話をはつきりさせておいた方がいいに決まっています。

事は一刻を争うものと判定しましたよ、リユーム。

「~~~~~!!」

本当は物が物でなければ引きちぎり、かなぐり捨ててやっていますよ!

もし目の前にテーブルがあったら、ひっくり返してやりましょうぞ。

ええ、出来もしませんが、心意気だけはそんな調子ですよ。ぜえはあ。

まるで小ばかにするかのようには、飾りの雫がしゃん・しゃん・しやりらとはやし立てます。

「オマエ・・・あまり凶に乗るなよ?後で思い知らせるぞ」

その一言で、ぴたっと動きを止めてしまった自分が情けない。事件反射に違いない。

そう自分を慰めると思考を切り替え、素早く自分を立て直します。脅しだつて何のその!リユーム、歯を食いしばって見せました。

な・・・なにをおって意気込みだけはどなたか買ってやって下さい。

見下ろす、威圧感たっぷりの彼と睨み合います。

「.....」

しまった。

怒りに我を忘れちゃありません、ね。

気がついたときはもう遅かったです。

『暗がり二人きりは危険』とさっき、あれほど思い知ったばかりではなかったのですか?リユームよ?

両肩はがっちりと、上から押さえつけられておりましてゴザイマス。

先に立たないそれを、人は後悔と呼ぶのです。

びくびくと彼の動きに怯える自分にムカつきます。

「リユーム・・・」

そう名を呼ばれると、彼の唇がリユームの左耳に近づけられました。

「い・やつ!」
身を擦りましたがまたしても、せいぜい首をすくめる事が出来た
くらいです。

似合っ っ て いる ぞ

そう張り詰めたように低めた声で囁かれた直後、耳朵をちりりと
小さく焼けたような痛みが走りました。

「っ・あ、痛っ」

瞬間何が起こったか理解できませんでしたが、今度はもつと加減
してゆつくりと。

彼の唇がリユームの耳たぶに触れています。

噛まれた!!

それはたいした痛みでは無かったはずなのに、とても痛かったの
です。

痛いというのは『熱い』というのと、さして変らぬものだとも感
じました。

噛まれた耳よりも、何よりも。熱を訴えてくるのは先ほどと同じ
く、体の奥の深い部分。

(~~~~いや・いや・いや!離れてっ!)

そんな意思表示も込めて顔を精一杯背け、右手で突っぱねます。
「後でな、リユーム」

の・・・望むところデスよ!!とは、伝えずにおきます。

言ったら最後、揚げ足を取られる形で望まない方向へと突っ走る
事でしょうから。この方。ええ。

要はだんまりを決め込むしかないリユームです。

たまらず、左耳を押さえ込みました。

そのまま、一気に彼の側をすり抜けると駆け抜けました。

逃げましょう!それがいい!暗闇なんかにいちゃ、ろくな目に遭
いません。

常日頃。館内行き倒れ起こすほどがんばって鍛えた脚力を、今使わずにいつ使うのでしょうか！

それいっ！と心の中では威勢よく叫んだと同時に、駆け出しましてございます。

改めて健康万歳。エキよ、ありがとう。それではっ！

リユーム、お先に公爵様たちの所に戻ります。

って、勢いもそこまででした。

あっと思ったときはもう遅い。見事なまでに前のめり。

ドレスの裾が長かったのが、命取りだったようです。

早すぎやしませんか！

リユームの脚力お披露目時間といい、この方の行動の機敏さとい

い。
気がつけばお腹周りを、後ろからがっちりと固定されておりまし

た。
お約束過ぎでしょう。誰かの陰謀でしょうか。ドレスの裾に靴に
仕掛けか、地面に罫でも？

あわわ。またしてもリユームの大嫌いな浮遊感に苦しみます。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

「だからオマエはどうしてそう挙動不審なんだ」

ぐいっと引き寄せられた後、今度は後ろに押されました。

またしてもおぼつかなくなった足元に驚く間もなく、背中を大きな腕が支えている体勢に星空を仰ぎ見ます。

何でしょう。また、この格好。

抱えられたまま、おでこをぺしんとひとつ叩かれました。

「いいかこの次館内で、転倒および行き倒れなど起こしてみる。
わかっているのか？」

「そもそもオマエは自覚というものが足りなすぎる。」

「脆弱な身のクセに急に駆け出すなど、何べん言わせれば気が済む。
・聞いているのか？」

「呆れたようなため息と共に、何度繰り返されたか知れないお小言
の羅列が連なります。
いいえ。」

「聞きたくないのに聞き流すように、全然関係ない事を考えるよう
に努めています。何て言えるわけがありません。」

「リユーム。ちゃんと答える」

「聞いてませ・でした」

「貴様」

「リユームを挙動不審にするのは、いつだて・ごりよしゆ様の『不
可解な言動』です……!!」

「言った!! 言いましたよ!! 今日のリユーム、すごい!!」

「いい度胸だな。後で仕置く」

「なんでしたら今すぐどうぞ」

「オマエは。」

「今ぶつと赤く痕が付いてみつともないから? だから後で?」

「……オマエが泣いて最低二日は寝込むと踏んでいるから
だ」

「っ、!?!?……うえっく」

「泣くな。まだ冗談だ」

「?」

「まだ、な。だが覚悟はしておけ」

「できません」

「リユーム」

そんなかみ合っているとは到底思えないやり取りをしながら、広間へと抱えられて戻ったのでした。

ち・・・ちいえええええ　　っだ！

第十九話 シェンテラン家の宴の席（後書き）

（仮）『計算高いか？リユーム。』

そして、アンタ、なにそのあつさり具合。
もう、ちょいつと動揺して見せろ。
作者のいつもながらの突っ込みでした。

『小話とは別に』〈舞台裏〉

『責任者、出てくるように』

「リユーム様のお色気、全開すぎ」

「誰。あのデザイン考えたのは」

「誰。あの化粧に髪型させたのは」

「……私らじゃん」「」

「もう、危うさ全開。やばいのでは」

「ニーナ？な、何で涙ぐんでるのよっ」

「……今日は飲もう。後で、ご相伴に預かるっ」

「何の酒の席ですか、ニーナ？」

「もしかして……ああ〜ついに？ぱくつとくらしいはいかれちゃい

ましたか、リユーム様……」

「も〜黙ってよー！」

まだ、宴は終わらない。私たちの仕事も。

『どうしても*小話〜午後の捜索隊』

ご勘弁願いたい。
色々。

何だっこの方が第一発見者？

いつもはわざとらしいくらい、構わないようにしているくせに〜さ
〜？

おかげさまで、私は気まずく二人で連れ立つはめに。

馬を飛ばしてやってきました、市場へと。

とりあえず出入り業者さんのところを目指しております。

「心当たりとは何だ、ニーナ？」

「そりゃ〜・・・」

言いよどむ。

言いたくない。

だって、この方に少女とのやり取りを教えるのも、何だかりユーム
様に悪い気がする。

「・・・もとのおうちとか？」

「何だその間の長さは」

ちっ。

流石に察しがいいですね、若様。

「若様こそ、お心当たりがあるのでは？」

「ない。」

そうですか。

会話終了！

早い所見つかって欲しいような。

・・・そうでもないような。

とにかくリユーム様！

「知らない人について行ってませんように〜！！！！！！」

全力で女神様に祈った。

第二十話 シェンテラン家の婚約者候補（前書き）

『遠慮なく。』

長いです。

『オマケ。』 『つきです。』

第二十話 シェンテラン家の婚約者候補

広間に戻ったりリユームは、ご領主様の『ここで大人しくしている』というご命令に従っております。

要は大人しく席に着き、控えているだけです。

椅子に腰掛けながらも気を抜いちゃなりません。

何気に視線は感じるので、淑女とやらのふりを続けています。

一応は公の席だつて事を、忘れ去つちゃなりません。

(姿勢を正して 顎を引いて ゆつたりと微笑んで・・・でしたっけ、ニーナ先生?)

それ以外は特にすることも無いので、ぼんやりと広間を眺めておりました。

ルゼ様やフィルガ様にお目通りしたい方はたくさんおられますし、リユームもそうそう長く話し込む訳には行きません。

本日の主役でもある、ご領主様はもちろん外交も兼ねてお忙しいようです。

先ほどからひっきりなしに入れ替わり立ち代り、杯を片手に訪れる方々と談笑されていらつしやいます。

『俺が許可する者以外とは会釈程度にしておけ。あまり余計な事は話すな』

(はいはい。ようはどもるとみつともないから、笑つてごまかしておけつてことございますね。了解シマシタ。)

ご領主様のご挨拶を許された方々にのみ挨拶すると。それまで、待機つと。

広間の一角に設けられたこの席は軽く避難場所です。

ご領主様も時折り、酔いを醒ますためにか来ては少しだけ座つてお水を飲まれます。

「たいくつか」

「たいくつではありません」

「疲れたか」

「疲れません」

そのような軽いやり取りだけをしながら、リユームはお茶と一緒に少しだけ飲みます。

同じ質問に同じ答え。その繰り返しも三度目にまで及んでいます。

「……………」

「……………」

またしても会話終了。

その後は沈黙。

いやはや。なんともはや。

それくらいしか話すことの無いご領主様とリユームであります。

暗がりから戻ってみると、呆気ないほどいつも通りのワタクシ達の微妙な関係のままです。

何もこの方から甘い態度や言葉を期待するわけでもないのですが、何の説明もされないままなのはいかなるものか、と。

とは思うものの、今ここで自ら下手な質問をして『またしても』

言い合いにもつれ込むのは避けたほうがいい展開でしょう。

何より人目もありますしね。

でも訊きたい事はたくさんあります。

アレとかコレとかソレとか。何だっぺあんな事を？何故にこんな物を？

後で覚えているって仰られても、色々ありすぎてもう何が何だか

うゝあゝもゝ！！たくさんありすぎてまとまりません。

ですからその全てを総じて出る言葉はコレに尽きます。

（何なんですか何なんですか何なのですか！？一体全体、どういうつもりなのですか！まったくもって、もおおゝゝ！！）

今はよしとけ、二人の時にしておかないとマズイ気がする……………

彼にこの気持ちを矢継ぎ早にまくし立てて、浴びせかけてやりた

いものです。

そんな事をしたらどうなってしまうか。予想が付くので今は沈黙を守りましょう、リユームよ！

（早くあちらに戻ってくださればいいのにな・・苦痛です、この沈黙。まるでご葬儀の最中のようにではないですか）

そんな叫びだしたい気持ちを堪えて、大人しくお茶と共に飲み込むリユームです。

・・・・・

それと入れ替わるようにして、ルゼ様とフィルガ様がいらしゃいます。

「はい、リユーム嬢。お邪魔するわよ」

「お邪魔だ何てそんな」

「少し休むわ。貴女はどう？くたびれてはいないかしら？」

「ありがとうございます。ここで大人しくしておりますから、大丈夫ですよ」

「そう。良かった。私は流石に立ちっぱなしはツライものがあるかしらね」

「公爵は飲みすぎなんです」

フィルガ様がお水を注ぎ、すかさずルゼ様に差し出しました。

「付き合いですから。アンタがあまり飲めない代わりに」

「人のせいにして後で後悔しても知りませんよ」

ルゼ様はかなりお強いようです。いつもの事なのでしょう。

フィルガ様も口ではたしなめるものの、無理にでも止めたりはされないようです。

そんなお二人のやり取りに参加させてもらえるのが嬉しくて、リユームは笑ってしまいます。

ルゼ様もにこにこ笑ってくださいるものだから、余計に安心して

しまいます。

聞かれる内容が同じでも、誰か様に尋ねられるのとは違った受け答えをしてしまうってものでしょう。

「リユーム嬢。その首飾りとても似合っているわ。ステキよ」

「あ、ありがとうございます」

「ふふ。さあて。リユーム嬢の笑顔に癒されたところで戻りますか！」

こうしていらしてくれるのも、リユームの事を気遣ってくださるのが目的のようです。

そう感じてしまうのは、おこがましいでしょうか？

そうは思いましたが嬉しくて、自然と笑みがあふれでてしまいました。

今のところ、その三名さまとしかリユームは話すこと以外ありません。

せいぜい、お茶を入れたりお水を注いだりするくらいしか。

皆さんお忙しそうです。

その様子をちよろっと、帳つぼみの端から窺うかがいます。

あの大きな人だかりの中心にいらっしやるのは、おそらくご領主様でしょうか？

ここからは人の囲む輪があつて、その頭の先の方しか見えませんがそうです。

その輪から一歩距離を置いて見ているご令嬢が、目に飛び込んできました。

（うつわ！すっごいすっごい綺麗な方がいらしたよ！すごい・すごい・すごいっ！）

この煌びやかな空間に在ってさえ、相当に人目を引きつける存在感は威圧的でさえありました。

リユームご無礼とは承知の上で、思いっきり賞賛の眼差しを送り続けます。

おそらく見渡した限りでは、リユームと同じように釘付けになっている方が数名いらっしやるようです。

それに乗じてリユームも思う存分見つめ続けようと思います！
体の線に沿った美しいドレスの胸元は切り込み深く、その背の部分も同じように深く、見ていてため息物の妖艶さです。

（『たわわ』・・・そう『たわわ』っていうんですよ、あのお胸元は！！）

惜しげもなく魅せ付けられて、女のリユームですらイチコロです。こゝれは殿方だったら、イチコロリ。でしょう！間違はなく、一部を結い上げられた巻きの強い金色の髪は長く、ほっそりとした腰までに届いています。

綺麗に浮き出た鎖骨、なだらかに続く肩の線、しなやかに伸びた両腕。手首には金製の腕輪が輝いています。

彼女のまとう何もかもが一体感をもっていて、しっくりと馴染みよいまとまりがありました。

（うっわ〜もうここまでくると芸術品ですよ）
「！！！」

リユームの熱い視線に気が付いたのか、目が合ってしまった！
じろりと一睨みさたようですが、それすらもステキです。

なんの！ご領主様の睨みに比べたら美人さんの一瞥いちへつなんて『なんのその』ですよ！

リユーム、感動いたしました。

美人は何をやっても美人のまま、素晴らしく様になるもんですってね。

こっち！こちらを、リユームを見ているようです！

しばらく目が合った後、フンと細い顎あごをそびやかせて背けられてしまいました。

（晴れ渡った青空みたいな瞳、きれい！リユームのよな、闇色なんて目に映すのも厭いとわしいと思われたかもしれませぬ）

『ギユルミナ・ハイレジット・ナディン様』

「ご令嬢の名乗ってください。たお名前に、リユームは身を乗り出して必死で耳を傾けました。聞き逃すまいとして。

聞き漏らしは無かったとは思うのですが、いかんせん発音となると違います。

「ギョ、うミナ様」

「ギユルミナ」

「ギユ、ギユ・・・」

「もういい」

「よくありません。えと、ギユ、うミナ様？」

「もういいから、黙って」

「発音むづかしいので、ルミナ様とお呼びしていいですか？リユ、ミナさま！」

「よくない」

「では・・・しばらくお呼び出来ませんので、練習しておきま
すね」

「何・・・アナタ。どこがおかしいの？」

「えへ・・・はい。申し訳ございません。お水かお茶をい
かがですか、ユミニヤ様」

「アナタ・・・本当におかしいのね？」

「？」

「わたくしが何用があつてここに来たのか。はっきり言われないと
わからない、バカな子だつて言っているのよ！」

「はい。わかりま・せ・・・」

お茶かお水か。ではなさそげですね。

ぼけつと見れば唇を歪めて睨むギユルミナ様に、荒々しいため息
をつかれてしまいました。

「わたくし、貴女のお義兄様の『婚約者』候補よ。一番の。まさか、ご存じない？」

そのまさかです。何て言葉は出さずにおきました。

「そうですか。お話だけは今先ほどお伺い、いたしましたばかりです。ごりよ、しゅさまのご婚約がもうじき整うらしいって」

「そう」

「はい」

「だったら！何だってその首飾りを貴女が身に着けているの？まさか！

ヴィンセイル様から直々に贈られたとか、言い出すんじゃないでしょうね！」

「……………」

それも、そのまさかでございますともよ。

何て……とてもじゃありませんが、言い出せる雰囲気ではありません。

リユームはこぼしてしまいそうになりながら淹れたお茶を、おずとおずと出しました。

まあ、お茶でも。そんな気分では無いでしょうが。何でしたら、お水でも。どちらでも。

落ち着いてください。

そんな意思表示の現われた行動です。

泣き出しそうなギルミナ様に、かける言葉が出てこないものですから。

「それはシエンテラン家の女主人の持ち物なのよ？どうして貴女みたいなの『カラス娘』が持っているのよ！」

身の程を知らないさいよ！

ダンツと拳がテーブルを叩き付けました。カップが倒れ、グラスは床に落ちました。

ガッシャーン！という破壊音ですらどこか遠くに聞こえます。
 リュームは固まってしまうって身動きを忘れてしまいました。
 驚いてただその振り下ろされるであろう、ギョルミナ様の振り被
 った手のひらを見上げていました。

ぶたれます。

やっぱり。

身のほど知らずだつて……。

わかつてますよ。

知っていますよ。

ちゃんと。

リュームは目をぎゅむむっと固く閉じて、首をすくめてその時を
 待ちました。

。
 。
 。

「ここで何をしている」

「！！」

だらつと、背中に嫌な感じで汗をかいた気がします。

まごうことなきこの威圧感の主サマは。

「俺が許可した者以外と。」

はい。ご命令に背きました。！いいつけ破りました。！はい！

心の中で拳手。(それはリュームです！)

そんなものこの美人さんの魅力を前に、すっかり忘れ去ってい

ました！

「ギユ、ギユ、リュ・メナ様とお話してました」

逃げも隠れもしません。できませんから。恐るおそる目を開けて
 みました。

「リユーム。オマエには訊いていない」

「っえ？」

「ここで何をしておいででしたか、ギョルミナ嬢？義妹ゴシが何かご無礼でも？」

「っ！」

悔しそうです。悔しいと言うよりも苦しそうです。

ギョルミナ様がご自分の右腕を、胸に抱えてらっしゃいます。

「これのどもりや発言がご不快なようでしたら、この義兄が代わってお詫びいたしましょう。義妹は身体が不自由ゆえ、責任は甘やかして育てた俺にあります。よって今後二度と、この義妹は責めないでやっていただきたい」

なんと！ご領主様は言いながら頭を下げられましたよ！

驚く以外、他にありません。リユーム、ぽかんと見つめるばかりです。

え……！？はい？今、何て仰いましたかね？甘やかすとか、なんちゃら？

(リユーム甘やかされた覚えなんてありませんよ！いや、今はそれはおいて置いて……！)

掛ける言葉もなく、ただ見守るばかりです。お二人を交互に見つめました、無視されました。

お二人のかもしれない妙な空気に挟まれて、リユームはうるたえる位しかできません。

長い、長い、沈黙。

ここだけ別世界のような静けさです。

ほんの数歩行けばその先に、人々の楽しそうな喧騒が溢れているというのにも関わらず。

ギョルミナ様は何も言わず、唇を噛み締めたまま駆け出して行かれています。

それくらいギョルミナ様のご様子は、痛いくらい哀しそうでしたから。

「オマエは！」

すかさずちつと忌々しそうに吐き捨てられて、身体が跳ね上がりました。

「イキナリ駆け出すなど何べん言わせる気だ！」

ガシャリ、グシャリと嫌な音が、足元でしました。

ガラスの破片が床に飛び散っているのでしょうか。ご領主様が足で払いのけられたようです。

確かに転んだらタダではすみません。

でも今はそれどころでは無くはありませんか？リユームはそう思いますよ。

そして。またしても嫌な体勢ですよ。身体が自由が利きません。

「だ……で、早く、早く……コレを取って、ユミナ様に……っ、ん!？」

踏ん張りも空しく、二の腕を掴んで引き寄せられ顎も掴み上げられました。

暗がりではないので、もろにその深緑の瞳とぶつかります。

「リユーム。もう黙れ」

「黙りませ……!」

ん ん んん ……!

と今度ばかりは精一杯抗いました。唸るぐらいしか出来ませなんだが、そうしたくもなるつてものでしょうかよ!

おい。

ここ広間ですよ。

義兄が義妹に明らかに挨拶ではない口付けをしている図って、まずいでしょうがああ……!

『口付け』っていうその言葉の意味に、改めてくらくらしました。

もう、本当にヒドイ。この方はヒドイったらない。

拳を作って振り下ろします。力一杯込めたつもりなのに、何の威力もないって事くらいわかっちゃいますが！

押し付けられる唇に目を閉じてなるもんか、と必死でまばたきを繰り返します。せわしなく。

瞬くたびに熱い雫が頬を伝います。

あんまりです。だって、あんまりじゃありませんか。

そう唇を封じられた代わりに、訴えを乗せた拳もだんだんと勢いを失いつつあります。

だんだんと深く深く、侵入を許してしまう自分の無力さに腹が立つてきます。

唇をなるたけ引き結んでの必死の抵抗も、ただただ自分が無力と
思い知る 空しいだけのものでした。

しまいには、それすらも手首を取られて安々と封じられて。それ
じゃもうリユーム、成す術すべもないではありませんか。

この帳の隙間、ご領主様の肩越しにギョルミナ様と目が合いました。

信じられないものを見たというような、ギョルミナ様の背けたお
顔は今にも泣き出してしまいそう。

見られました。見られてしまいました。

多分ソレがこの方の目的なんだろうと思ったら、また無性に腹が
立ってきました。

こんな醜態、人様に見られるなんて恥ずかしくて死にそうです！
泣き出しそうです。喉の奥が引きつれて痛みます。

わけのわからないはずさした胸の痛みにも、泣けてきます。

でも、もう抗う体力も底を付いた模様です。

(もう、つかれました)

諦めて目を閉じました。そのせいでしょうか？

裾に行くほど赤味の強くなる衣装は、いつにない装いでその肌の白さを際立たせている。

胸元は装飾が映える様にしろとだけ命じておいたから、その作りだ。

だからといって、何もここまで肌を露出させるとは一言も言っていない。

単にレースの類たぐいの飾りは控えるという意味で伝えたのだが。

いらぬ気を働かせる侍女たちですらも、いちいち言わねば伝わらないものなのか。

確かにそこに輝く紅い柘榴石が、はまり込んだかのように落ち着いている。

腰の線に添って流れ落ちるかのような、身体にまとわり付くドレスに明らかに歩き方がぎこちない。

切り込みの深さがある裾は、足を運ぶたびに重ねた薄いシフォンの純白が覗く。

けっして素足をみせぬそれが、かえって余計な男の要らぬ視線を買うと思うと不愉快だった。

靴のかかとの高さもあるのだろう。一足ごとに身体が揺れる。不自然に。

そのおぼつかなさも手伝ってか、今にも折れてしまいそうな儂さを魅せ付ける。

華奢な肩口は肌が透けて見える、レースのボレロが覆っているだけだ。

それすらも、侍女たちのいらぬ気使いの現われのように思えてならない。

「覚悟しておけ」

「できません」

「リユーム」

片腕に抱えた身体のまるやかな感触は、少女から一步進みつつある確かさがあつた。

熱く腫れた唇に、闇に在ってさえ白く浮かび上がる肌も、少し冷えた耳朶も。

なにもかもがなだらかな曲線を描く。

いつの間に全身で誘う事を覚えたのかとも思う。

このまま自室に引きずり込むのはたやすい。

人目につかぬよう育ててきた花を、いきなりへし折る事になるのだとわかつてはいても。

それが育ててきた者の特権だと、身勝手な権利を誰にとでも無く主張する。

第二十話 シェンテラン家の婚約者候補（後書き）

『ギユルミナさん』

リユームを気に食わない代表、作者の身内。

この子を思う存分罵ってやりたい！！・・・そうで。

よっし。

君がモデルな。

つてなわけで『ギユルミナさん』登場です。

罵りは足りません。

なにせリユームがこの調子ですから、独り相撲になってしまっワケです。

恐ろしいコー！

『すみません』

またかよ。

小話はまた後日！

書きますんで、気が向いたら読んでやってください。

『有言実行』などと自画自賛。もうこれ小話では済まなく・・・』
小話 』

「心当たりとは何だ」

ちっ。しつこいな。

ぱかぱか・ぼくぼくと馬二頭の歩みの合間に、再び同じ質問が振られた。

目当ての野菜問屋に、首を横に振られてしまったのだ。

それもあつてか先程よりも僅かだが苛立ちを含む声音に、黙秘は到底許されそうもないと悟る。

（まだ・ちよつと・教えてやりたくないな）リユーム様が『ニーナにだけ、教えますね』って言うてくれたんですもの（

そんな思いをおくびに出さず、ワタクシめはふうつと物憂げにため息を付いて見せた。

「そうですね。後はよく遊びに行つてらしたという、双子のお友達のととか。よく面倒見てくれていたらしい商店街のご一家の所とか。神殿前広場の市場のおじちゃん・おばちゃんの所とか。商工会連盟の皆さんのところとか？」

「そんなにあるのか」

本当はまだまだある。だがこれくらいでいいだろうという判断から、口を嚙む。

「リユーム様まだ幼いですし。あのかわいらしさに加えて、お父様を亡くされてお母様の為に奮闘するいじらしさでしょう？誰だつて面倒見たくなると思いますよ？それに、ここの下町っこ達の結束は固い・絆で結ばれているものです」

あら？知らなかったんですか？

とでもいうような眼差しを若様に送る。

これで満足して黙つてくださいよ、とも祈りながら。

それでも充分、納得の行く情報と思われる。

恐らくどころか確実なまでに、このニーナに向つて見せてくれる少女の顔はこの若様には向けられたためしなど無いだろう。

何気にアア様より少女の信頼を頂いちゃってる事を、さりげなくもすっかりと自慢。

それくらいしか、これ以上の質問をやり過ぎす方法を思いつかなかった。

「・・・それより。何だつて若様が一番にリユーム様の書置きを見付けたのが、このニーナには少し謎です」

そう。曲がりなりにも少女の部屋に勝手に入ったのか、この人。いつから義兄という立場でも、その一線は大事でしょう。

自分の弟だつたら思いつき詰め寄ってやるのだが。いくら自分よりも年下とは言え、彼にはそうもいかない。

所詮自分はただの侍女である。そこら辺はわきまえているが、ここはハツキリさせておきたいのだ。

「今日は領主夫妻が不在だろう。だから面倒を見るようにと言われた」

「ちなみにどなたに？」

「父だ」

「・・・」

いい加減に歩み寄れと。

そんな所だろうか。

「昨夜呼ばれて、何かと思えばそんな話だ。リユームにも伝えておくから、昼からは空けておくようにと」

「お迎えに行ってみたら返事が無い、と？」

そりゃ、不審に思っただけで部屋に入るわ。まあ、許しましょう。一人で仕方なく頷く。

「そうだ。俺からも仕方が無いから遠乗りにも連れて行ってやる、と朝食の席で伝えておいたのもかわらず、だ」

(「仕方が無いから」だとお〜！)

ちよ、ちよっと、待ってクダサイよおお!!

そのやり取りも、この書置きを決心させるのに後押しとなったはずだ。だって気が付こうよ！

そんな風に言われたら、誰だって逃げ出したくなるわー！！叫びたい。叫ぶわけにはいかない自分がもどかしい。

「何だ？」

ぼくぼく・ぱかぱか・ぼくぼく。

お馬さんたちの蹄の音が心地良い。

その音に慰めを求めているワタクシめは、脱力しきったタダの侍女でございます。ええ。

「取りあえず一箇所ずつ・・・尋ねて歩きましょうか」
それしかない。

最終手段は、まだ取らなくてもいいと思う。

下町っこの根性を舐めては行けない。

ワタクシめも、リユーム様も含めて。

少女は無事だ。多分、目的あつての犯行だと思うから。

「アレは本当にわからん」

アンタもな。

リユーム様の代わりにつつこんでおいた。

気に入らないわけは・・・ないか。

こつやっつてわざわざ自ら馬飛ばしてくるくらいだしな。

そんなワケで。

自分で言った心当たりを順番に回ることになりましたんですよ、リユーム様。

第二十一話 シェンテラン家の主の求婚（前書き）

『ばかに長い』です。

『小話』までもが……。

第二十一話 シェンテラン家の主の求婚

早く終わって。

切にそう願った時間は長かったのか。短かったのか。

実際はわかりません。

ただリユームにとっては永く永く感じられたのは確かです。

またしても息が上がり、肩が上下に揺れるほどには呼吸が乱れておりました。

そこに嗚咽まで加わったものですから、目も当てられない状態でしょう。

まるで久方ぶりの病の到来です。

せつかく健康を手にしたのに、思いがけないご領主様の言動のせいで台無しです。

それなのに！それなのに、ご領主様ときたら！

「申し訳ありません、公爵。コレは慣れぬ場にくたびれたせいか、ぐずり始めております。

実年齢よりも幼き精神の者ゆえどうかご容赦を」

しれつとそんな風に言うものですから、悔しくてもがきました。

出来ればその胸をドンつと突放してやりたくて。

『ぐずってなんていません！』

言っただけです。そう思う時点で既にぐずってますよね、わかっています。

そもそもぐずらせたのは誰のせいでしょうねえ！？出来る事なら、指差しながらそう訴えてみたいものです。

でもそれは叶わずで、ますます悔しい。

「ああ、ああ。大丈夫よ。気にしなくても。リユーム嬢、大丈夫ですからね。アナタ無理していたのね」

ご領主様の胸にがちりと抱きかかえられていては、遠慮がちに

声を掛けて下さるルゼ様を見る事ままなりません。

そもそも一体いつからルゼ様はこちらにいらしていたのでしょうか！

そこに思い当たった時は、思わず気が遠のきましたよ！頬がかつと熱く火照ります。

「ご領主様の手が項うなじを撫でていきます。背に回された手でばんぼんと軽く叩いてきます。

まるで幼子にするかのような仕草に、何だっと言うのでしょうかと腹が立ってきました。

というよりも『大人の彼にあやされる子供でしかないリユーム』という構図は、怒りを通り越して情けなくなってきました。

多分それは『泣くな』という事でしょう。

公爵様の御前です。わかっていきます。わかって・いーまーすーとーもー！

出来ればそうしたいのはヤマヤマなんですけど、そうそう簡単に行かないのです。

人前で涙を見せるなど、ソレをやると責められるのはこのお方でしょう。

いい気味です。困れ困れ。困るがいいです。体裁の悪い思いを味わってみてください。

そんな調子で、ぐずぐずとぐずり続けるリユームは引つ込みが付きません。

それはそれは優しく気を使って下さるルゼ様をまともに見ることも出来ません。

「・・・つく、・・・え・・・うつ、く・・・やだ、や・・・だ・放して」

「あらあら。リユーム嬢、そんなにくたびれてしまったの？」

リユーム嬢のおめかしした姿が見たくてお義兄様には無理を言いました。

「アナタの体調が優れないというのにも関わらず、無理をさせてく
めんなさいね？」

「違うんです。」

「さつきからご領主様、酷いんです。」

「さつきも。」

「さつきも………！」

「！」

「そこまで思い当たったらまた、ぶわつと涙がこみ上げてきました。
言葉に出来ません。」

「訴えようも無く、ただ泣きじやくるしか能の無いリユームです。」

「ルゼ様にも見られてしまったかもしれない。」

「急にまた恥ずかしくなって、リユームは顔を見ることが出来ませ
ん。」

「不本意ながらも離れ様としていた、義兄の胸元に顔を押し付ける
しかありません。」

「……ガシャ、ガシャと控えめながら耳障りな音が、先ほどのギ
ユルミナ様とのやり取りを思い起こさせました。」

「細心の注意を払って、侍女の皆さん方がガラスの破片を速やかに
片してくれている音です。」

「『どうしてアナタみたいなカラスが！』」

「そんな悲痛であった叫びと重なります。」

「どうして？」

「本当にどうして、でしょうか？」

「ソレはリユームにだってわかりません、ギユルミナ様。」

「この方の言動はいつだって理解不可能なんですよ………！！」

「そう、出来る事なら今すぐ叫んで訴えてやりとうゴザイマス。」

「公爵。ここは危ないですから。まだ、破片がどこかに無いとも限
らない。こちらには入られない方がよろしいかと」

「お気遣いありがとうございます。もう片付けも済んだようだから、大丈夫で
しょう。」

あなた達、どうもご苦勞様。手など切らぬよう気をつけてね？」
もつたいないお言葉感謝いたします。そう、礼を述べると侍
女の方たちは下がっていったようです。

コッ、と乾いた音が響きます。どうやらルゼ様はこちらにいらっ
しやるようです。

リユームはいい加減なんとかルゼ様を見ようと、首を捻ひねりました。
遠慮がちに帳しほのドレープを持ち上げて、こちらを窺うかがっていらっし
やるルゼ様と目が合います。

「かわいそくに、リユーム嬢。驚いたのよね？もう、大丈夫ですか
らね」

相変わらず余裕の笑みです。

るぜさま、と言葉も無いまま唇をわななかせて、リユームはやつ
との事で頷いて見せるのが精一杯でした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ルゼ様に縋りつきます。残念ながら気持ちだけです。
何せ駆け出そうにも拘束されておりますから、身動きが取れませ
ん。

視線だけがさ迷いながら泳ぎます。

「あらら、リユーム嬢？放してもらえそうも無いようよ？」
くす、と小さく笑われてしまいました。気恥ずかしくなっていま
います。

「ルゼさま、ルゼさま、ルゼさ。。。」

助けてください。もう無理です。耐えられそうもありません！
今それがお願いできるのはルゼ様だけなのです。ルゼ様が頼りな
のでございます！

そんなリユームなどお構い無しで、ご領主様は切り出されました。
「公爵。どうか先ほどの了承に上がる件の日取りをお決め願いたい」

「あらあら。」「
くすり、というよりもニヤリ、という表現ふさわしくルゼ様が笑
われました。」

何やらきらりと光宿る瞳には迫力があります。

その笑みはご領主様に向けられているようで、その愉快そうに眇
められた瞳はリュームの頭上にありました。

な、なんででしょうか……！！？

こ、この重苦しさのある雰囲気は？

リュームが息を呑むほどのこの感じは、式典時の剣を渡す場に似
通っています。

恐らくは二人、またしても睨み合っているのでしょう。

ルゼ様はフンと鼻を鳴らされると、ぱち・しゃらん、と流れよく
扇を開かれ口元を隠されました。

そつする事で深い緑の眼差しが、より一層強調されたように思っ
ます。

「それは私よりも先に『了承』を請わねばならない相手がいるでし
ょうに。」

他でもない、貴方の腕の中にいる彼女にね」

「そつすればお許し願えると？」

「さあ？彼女次第かしらね」

「……リューム」

背に回された腕の力はそのままに、顎を持ち上げられました。

反射的に背けようとはしましたが、思いのほか真剣な眼差しに射す
くめられては固まるしかありません。

(お……怒られる！？)

怯えも隠しようがないまま曝け出すしかありません。

緊張の走るリュームをご領主様は、ふ・と軽く一息つかれました。
笑われたようです。

「！」

次の瞬間、またしても意味不明の行動に途惑います。

む、と引き結んだ下唇の輪郭を、その親指でなぞるのは止めてもらえませんか。

寒気が。そう、何だか背筋がぞわぞわするので止めてください。

「ジ・リユーム・・・シエンテラン嬢」

「はい？」

な、なんでしょうかな？嫌にあらたまつて、ご領主様？

「このヴィンセイル・シエンテランの妻にお迎えしたい。どうか『了承』を」

・・・・・・・・・・・・・・・・妻？

『妻』とは『奥方様』の事ですか？

誰が誰の？

『婚約者さま』は『ギユルミナ様』では？

色んな疑問がよぎっては次々と現われます。

リユームのお頭つむでは整理が追いつきません。

そもそも、そんな事仰られるご領主様の気が知れません。

正気の沙汰ではないように思います。

何故でしょう？何故、リユームに？今、この場で？

ただ驚いて。

驚きのあまりに言葉を発するのも、発し方も忘れて、その信じられない発言をしたご領主様を見つめました。

式典の『シエンテラン家の鞆』としての『了承』は立会人としてのもの。

このお方がエキナルドの領主に任命されたものとしての『了承』とはワケが違つて事くらい、リユームにだってわかります。

(ええ と？それは・・・・・・・・？どどういう意味でしょうか？)

そんな想いはこの一言に尽きます。

「そえ、は『了承命令』ですか？」

「。。」
純粋にそう思いましたから、そう尋ねました。
だってそうでしょう？

何か・・・体裁とか。何かしらの理由があつて、ギユルミナ様と
のご婚約は辞退せねばならないから、とか。

身近にリユームがいたから、それを一時的に利用しているだけで
しょう？

そういうことは前もって打ち合わせなどして、教えてクダサイな。
そうでなければ対処に困ります。

見上げた瞳が眇すめられた気がしました。ほんの一瞬でしたが。

次の瞬間には背に回された腕に力が込められ、隙間がなくなるほ
ど抱きしめられました。

苦しいです。そんな抗議を込めた眼差しで、リユームはご領
主様を見つめます。

長く無言のままのご領主様は何も仰らないまま、ただ静かに見つ
め下ろしてきました。

「ほら、ごらんなさいな。未だにこの子の心は幼いと貴方自身が言
ったばかりでしょうに？受け止めきれぬ状態ではないの」

苦笑しつつ、というよりもなじるようなお言葉でした。

「.....」

ご領主様はそれに対しては何も返さず、変わらずリユームを見下ろ
しているばかりです。

静かに見つめられ居心地の悪いったらないリユームは、少しばか
り身体を擦って抜け出そうとしました。

もう解放してくれないかなと思ひながら、両腕も突っ張ります。

そう、エキが『だっこは嫌！』と拒絶するときみたいに。

「.....」

「リユーム」

ご領主様に後ろ頭を押さえ付けられてしまいました。そのまま、

再び抱き寄せられてしまいます。

腰周りにも彼の腕が回っています。それが先ほどのイマシメよりも、心ばかりですが強さを増しました。

つぶされはしませんでしたが、ありえませんか状況です！

温もりに包まれる安心感は否めないものの、苦しくもあり混乱してしまいます。

(ど、どうされちゃったのでしょうか？ご領主様？)

出来れば彼の表情を見てみたいとは思ったのですが、この体勢では無理でした。

常はわからぬ彼の感情が、回された腕や、頬を預ける胸板から感じ取れそな気がしないでもないですが。

「見たところ、貴方焦りすぎだわご領主・・・ヴィンセイル殿？」
ルゼ様が笑いをひそめながら仰る言葉に、リユームは驚きました。
この方でもそんな時があるのでしょうか、と考えてほんやりしてしまいます。

「まあ気持ちもわからなくもないけれど？山ほどの縁談が舞い込む前に、貴方のものとしらしめたい気持ちは、ね。

痛いほどよ。豪商・メルシユア商会。ここの縁談をそう無下
に出来るものではないでしょう。

それに黙って大人しく、はいそうですかと引くような家ではなく
てよ？あの家の利用価値・・・もとい協力は有力よ。貴方とて嫌と
いうほど知っているでしょうに！流石の私も『口利き』を頼まれた
ら断る理由は何も無い。むしろ協力せざるを得ないと認めるしかな
いの」

「これは、とご領主様は呟くとリユームの頭を撫で付けました。そ
うしてから言葉を続けます。

「これは身体も弱く、病持ちだ。そんな大きな家に嫁よめいだとしても、
負わねばならない責任という重圧に耐えられるとは思いません」
「そうね。わたくしもそう思う。何よりも大事な跡継ぎを残さねば

ならないのが、嫁^かした女の定めでもある。差別に満ちた哀しい事実だけれど、そこは貴方にも言える事ですよ。その覚悟はあつて？ シェンテラン家の主人」

「コレに無理はさせぬつもりです」

「そう。もし跡取りに恵まなければ別に妾を持つのか？」

「いえ」

「そう。では、その子は『妾』の立場に据^すえればいい。何も『正妻』等にする必要もない。それこそ、この子にとっては重荷でしかないのではなくて？ シェンテラン家の正妻の座など」

「公爵。それ以上は、コレに聞かせるのはお控え願いたい」

それはまるで庇^ひうように、耳を塞いでしまおうとするかのように。ご領主様の腕がリュームの頭を抱え込みました。

「あら。お義兄さまはどうも過保護すぎですわね。大事なことよ。それをきちんとこの子には聞かせなさい。」

まずはそれからでしょう。そうね。席を外していただきたいわ。
ヴァンセイル殿」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

それは初めから拒否するのは許されない類^{たぐい}のものだつて、リュームにだつて解りました。

ルゼ様は話があるのです。リュームと、二人きりで。

「さあて。ではこの子が領主^{きやく}の奥方の座に相応しいか否か。

それを見極めるためにも二、三質問したいわね？ よろしくて？」

それはリュームではなく、ご領主様に確認を取るかのようにされた言葉でした。

そう念を押されてご領主様は腕を解いてくれました。

よつやつと解放されたリュームは、やっと自由に息が出来た気がします。

「口づけは」

交わすものであり一方的に押し付けるものではないわねえ？

ご領主様の立ち去り間際、すれ違い様にルゼ様は歌うように呟かれました。

その真横で一瞬だけ足を止めたご領主様に、なぜかひやりとしたものを感じました。

そのいつもリユームを怯えさせるに十分なソレも、ルゼ様にかかっては取るに足らないものようです。

そんな事はお構い無しでさっさとご領主様を追い出すと、リユームへと向き合います。

にっと笑われて、思わず一步下がってしまったリユームです。迫力負けもいいところでしよう！

「手強いなあ、リユーム嬢。ヴィンセイル殿もだけど」

「？」

「自業自得とはいえ。アナタのお義兄様には同情する」

ほんの少しだけれど、と付け足して笑われました。その瞳はちっとも笑っていないのが、気がかりです。

「いやあ、今日は面白いものをたんとお見せいただいたわ」

そんなルゼ様におでこをぼん、と扇で一打ちされてしまったリユームでございます。

第二十一話 シェンテラン家の主の求婚（後書き）

『おいしい！！』

誰かこのお方止めてください、って気持ちで書きました。それはルゼにお任せする気分です。

『小話・・・じゃないよね？もはや。』

カララン

と、扉を開けると同時にベルが鳴った。

それはこの家の住人に来客を知らせるためのものだろう。

「いらっしやいませ」

可愛らしい声に出迎えられ、ワタクシめはその声の主言葉に言葉を失うほど感動した。

「なっ・・・！！」

何と言う可愛らしさかと思った。

かわいい！かわいい！！か〜わ〜い〜い〜！！

セピア色の波うつ髪は豊かに長く、頭の高い位置で二つに分けて結び上げられている。

それがまた少女の活発そうな雰囲気によく似合っていた。

ぴょんぴょん跳ねるといいだろう。ウサギさんみたいで。

それにこの少女の深みのあるすみれ色の瞳は、くるくると良く動く。

あわい水色の生地、フリルの付いたエプロンドレスがまた良く似合っ！

少女自身がまるで砂糖でこしらえた菓子のようにありませんか。

うちのリューム様とはまた趣の違う美少女だった。年の頃は十歳前後だろうか？リューム様より少し幼い気がする。

その血色のいい、ぷくぷくのほっぺはバラ色ってやつだ。そこで少し胸が痛んだのは、うちのお嬢様の頬を思い浮かべたからだ。白く透き通った頬が自然と紅さず様になりますようにと願いながら、お世話してきた。

はにかんだ笑顔を見せてくれるのは、少しづつ応えてくれるようになった証。

うちのお嬢さまは、ほんの少くしだけつり目なんです。

豊か過ぎる睫毛と彫りの深い二重が、それを打ち消しておりますがね。白状しましょう。

初めて少女と会った時は「子猫みたい。しかも野良ちゃんの」等と思ってしまうたフトドキ者はワタクシです。

このお嬢ちゃんが春の華やかさをまき散らかすお花なら、うちのリューム様は夜露に濡れた白バラがいいだろう。

どこか気品と幼いながらも思慮深い、落ち着いたオトナの魅力ある子なのだ。ふと心配になる。

そこがまたえもいわれぬ色気を醸し出す少女に、よからぬ思いで近づく者がいないとも限らないからだ。

いい加減、本気をだして捜索に当たろう。

ええ。ワタクシ美少女が大好きですが 何か？

）

）

そんな感動と焦りに内心打ち震えていると、思わずいらぬところに力が入ってしまったらしい。

目の前の少女の瞳が戸惑いがちに揺れた。

そりゃそつだ。いくらなんでも見つめすぎだ、ワタクシよ。

「あの、お菓子をご入用ですか？それともキャンディーでしょうか？」

（君を！）

なんちやって。

そんなおっさん思考はモチロン表に出してはなりません。

「菓子ではない。ここの双子……」

「うん！お菓子も欲しいけど、ちょっとお尋ねしたいことがあってね！」

「ここの看板娘って双子って本当？もしかしてアナタがそう？」
抜群の瞬発力を發揮して、ものすごい勢いで若様の言葉を遮った。この方に少女を思いやれとかいう方が土台無理なので割り込んだ。でなければ目も当てられない結果になるのは目に見えている。

「あ、はい。お姉さん、なぜソレを？」

「うふふふのふ。あのね〜もしかして『ララサ』ちゃん？」

「え〜！？お姉さんもここの生まれですか？」

「違ったか。では『タバサ』ちゃんですか？」

「はい、タバサです、けど？」

「では、リユームさ……ちゃんをご存知ですか？」

「リユーム！はい！もちろんです。ずっと一緒に遊んでましたけど、もうずっと会ってません」

「そつか〜。じゃ、今日はここのお店には来ていないのね？」

「はい……リユームどうかしたのですか？お姉さん達は一体？」

「リユームの『義兄』に当たる者だ」

きゃわきゃわ女同士で盛りあがっていたせいで、その存在をすっかりすっかり忘れていました。ハイ。

しかも　なんだその自己紹介。

さりげなくも『リユームはうちの子だから。』を露わにせんでもいいでしょう。も~~~~！

「とーさん！！行ってきますー！」

「はいよ。気いつけてな」

「はい。バイバイ」

「はいはい。バイバイ」

少女が無邪気に父親に手を振って見せた。父親もそれにならう。親子の儀式なのだろう。

見ていて微笑ましかった。

そのまま駆け出す少女。その背を見送る父親。

（おじさんはこんなかわいいこをいつかお嫁に出すのか〜しかも二人も。泣けるね。その日と思うと）

そう思って実に余計なお世話だが、ここん家のお父さんには密かに同情した。

「ではタバサ。案内しろ」

「・・・ハイ」

おい。イキナリ呼び捨て命令口調はやーめーろー！

この子が怯えたらかわいそうだろうに。

しかし案外少女に応えた様子は見られなかった。さっすが。

やっぱり商店街の子だけはある。いろんな大人たちと仕事をしているから、鍛えられているに違いない。

それを思うとリユーム様は過保護にしすぎているかもな、とちらと思っただ。

それは少女のせいではない。そもそも少女は元々、ここの子だったのだ。

案外鍛えられているに間違いないに100・ロートだ。賭けても

いい。

ちなみに100・ロートあればこのキャンディーが一つ買える。

「お姉さん、はぐれると悪いから」

そういつて無邪気に手を繋がれた。少女の手のふっくらした感触に、思わず頬が緩む。

「おにいさんも！」

「?!?」

無邪気つてすごい。ある意味、尊敬すらしてしまう。

勢いのままに若様も手を取られてしまった。

ぶんぶん嬉しそうに、タバサちゃんは手を振り回すように繋いでいる。

(何だろう・・・このシアワセな図は！)

「ねえねえ、おにいさんとお姉さんは『お付き合いしている仲間』なの?」

「「違」「う。います。」

否定の言葉は仲良かぶった。

それはない。断じてない。

よくて好敵手だろう。さしずめ恋(?)の。リユームという一人の少女を巡っての。

だからと言ってワタクシめにそのような性癖がない事は、誤解の無いようここに明言しておく。

まだまだ続く(?!)

第二十二話 シェンテラン家の主張する石（前書き）

ルゼと二人で領主の奥方に相応しい女性とは？

などと語らったりはしません。

もちろん。

ルゼは女の人生の味方ですから。

だから」

「そ、それ……?」

「そうよ。それ。留め具を惑わす呪まじないが働き始めているわね。

下手に他人が手を貸そうにも、それすらも惑わしにかかるでしょうよ。」

そうやってこの柘榴石たぐりいしは長いこと主人と添そうべき女性を見極めてきたのだと思う。

それより、何より。『他者に対する牽制けんせい』もあるでしょうけど、ルゼ様が閉じた扇でそれなるものを指しました。すなわち、リュームの胸に輝く紅い宝石を。

(な・何だっというのでしょうか!? ワケのわからなさには『主人』そっくりではないですか? ザクロさん!!)

思わず咄嗟とつさに名づけてしまいました。人の形ではなくても、それは人格があると思ってもいいはずですよ。

意思があるのならそれが相応しい扱いだと思いましたが、心の中で『ザクロさん』に叫んでいました。

(ザクロさん! 間違っていますよ、ご領主様に相応しいのはもっと他のステキな女性ですよ。しっかり!)

その呼びかけに応えるかのようになり、より一層重みが増したように感じてしまいます。

見下ろした柘榴石がきらりと光を反射し、一際強く輝きました。

ザクロ様と呼べ。

幻聴でしょうか。ええ。きっと! リュームの一人芝居劇場のなせるワザでしょう。

しかも幻聴にしても何だその受け答え……! もっと他に言つべき事があるでしょうよ!

「何にせよ、その石はアナタの胸に居座ると決めたようよ。」

かっしやら、かっしやらんと音を立てながら、首輪はリューム

の首を回ります。

リユームが留め金の部分はどこかと、目を凝らして回し探しているからです。

惑わしの呪い稼動中ですか？そんなバカな事があつてたまるものですか。

はめることが出来たのですから、外す事も出来るはず！

リユーム、諦めませんよ。

でなければこんなとんでもない物と、いつまで日常を過ごさねばならなくなることやら！

こんな高価な物とずっと一緒なんて、リユームの気が休まりません。

しかもそうになると、気楽に湯にもつかれませんよね？本気で落ち込みます。

「ルゼ様は・・・その、なぜ？」

「ああ。私も術の心得があるからね。初めてお会いした時からリユーム嬢の持つ、術に馴染んだ気配は気になっていた」

「こころえ、ですか？」

「そう。ジャスリート家はね、そうなの。血筋的に。シエンテラン家もね。おそらく『タラヴァイ工家』もそのようよ？」

目を細めてルゼ様が、リユームを観察するかのように見据えました。

「りゅ・・・わたくしにはそんな能力無いと思います。微塵みじんも」

「自覚は無い？」

「はい。もし少しでもあつたならば、この石も外せますでしょうか？」

「外したいの？何故？それはアナタの物になりたがっているのよ。その石の意思に反する行いは怒りを買うかもよ」

「お・怒りますか！？」

何て誰かさんと一緒なんでしょうか、ザク口様！

「流石の私でもそれはどうやって外すか教えられないわ。そこまで

強力な術ではない。仕掛けはむしろ単純。

いや、ある意味複雑かな？」

単純な仕掛けであるのにも関わらず、ある意味複雑とはこれはいかに！？」

謎かけですか。考えるまでも無く、降参です。

「ル・ルゼさま。お願いですから教えてくださいませんか？」

「まさか。私の口から言えるわけが無いわ。第三者の私が種を明かすのなんて 野暮やぼなもの」

お馬さんに蹴られちゃう、とルゼ様はくすくすと笑い出されてしまいました。

リユームは途方に暮れるしかありません。

さつきから心の中でザク口様には『リユームは相応しくないんですよ、選択間違ってますか？』と訴えているのですが。

わたしの選択を間違いとするのか？

そんなお怒りを含んだ幻聴が返って来る始末です。

ぶんぶんと勢い良く頭を振りかぶりました。

いいえ、そんな恐れ多い！って言いたいのか。それとも、一人芝居はあっちに行け！なのは自分でも分かりません。

（ああ、もう、ほんとうに、どうしょ、とれない？）

情けなくもまた、ルゼ様に視線でお縋りました。

「あゝもう、泣かない！泣かないのよ、リユーム嬢！泣かなくなつていいのよ、大丈夫ですからね」

「ルゼさま、ごりよしゅ、さま・急に变なんです。コレをくれるって言い出したり、

さつきも急に妻に迎えるとか言い出しました〜ワケが解りません」

『妻に』って仰ったのは幻聴であって下さい、お願いします。

「そんなに嫌？」

「はい」

「泣くほど嫌？」

「はい」

「どうして嫌なの？」

「ご領主様が怖いからです。そもそもリユームのこと・すぐくすぐ嫌っていて、

いつも冷たかったくせに、何でこんな事言い出すのか急すぎて解りません」

「ええと、リユーム嬢？それ、本当？本気で言ってるの？何かの間違い・・・そう、ちよつとした行き違いだと思つわよ」

「間違いありません、ご領主様には『仕方が無いから置いてやってるんだ』

と言われ続けて早・七年ですから。間違いようがありません」
リユームは力強く言い切ります。

はあ とルゼ様が深々とため息と共に、身体も前倒しに沈ませて行きました。

「やっぱり手強いなあ、リユーム嬢・・・どうしたものかしらねえ

？」

「？」

「自業自得とはいえ。やはり、アナタのお義兄様には同情する
としか言いようが無い」

ははは、はははと乾いた笑いをもらされました。やはり・・・その瞳はちつとも笑っていないのが、気がかりです。

そんなルゼ様はご自身のおでこをぼん、と扇で一打ちされてそのまま考え込まれてしまいました。

どうしたもんかなーこの子がこの調子じゃあな・・・と呟かれながら。

「じゃあねえ、リユーム嬢。こうしてみましようか？」

りちらりとこちらを窺っているのです。

そりゃ、注目もするでしょうよ。

先ほどからのちよっとした『騒ぎ』は、みなさんの好奇心を煽るに充分でしょうから。

その中にもしかしたらギョルミナ様もいらっしやるかもしれないのです。

ぎり、と胸が締め付けられます。

「皆が見ているからこそだ。見せ付けてやっている」

「!?!」

「リユーム。逃げるな」

「嫌です。恥ずかしいです。逃げます。」

「ならば人目の無いところに行くか？」

「それも嫌です」

「ではどうしろと」

「どうもごうも。放して下さい」

（誰に、何のために!?!この方おかしいよ!?!って今さらですけどね）

なぜでしょう? 話せば話すほど、会話の罫にはまり込んでいくかのようにです!

それが狙いなのでしょうけれども、誰かあ!

『彼女の許可無く、リユーム嬢を自分以外の嫁に出せない身体にしない事!それが必須の条件』

先ほど立ち去り間際、ルゼ様がご領主様に告げられたお言葉です。

「ごりよ、」

「ヴェインセイル」

「ヴェイン、シエウ、様。リユームを傷つけたいのですか？」

「.....」

「みつともない、傷を付けることで気が済むのですか？」

触れるのはおろか、目にするのも厭いとわしくなるような事だとは思

います。

「目には触れぬ場所の傷だ」

「……………うえつく」

言葉になりません。この方はリユームに何をしようとしていたのでしょうか。

恐ろしくて、尋ねるのすらはばかられました。

でも話し合わねばなりません。ルゼ様のご提案に、リユームはいたく賛同いたしました。

ここはひとつハツキリさせるためにも、がんばってみなければなりませんでしょう！

「後で」

ぐ、と腕に力を込めて、彼の腕の中で身を振り向き合いました。

「後でお部屋にお伺いしても……………いいですか？」

お話したい事があるので、と恐るおそる告げました。

今ここでは人目もありますから『後でお部屋で』とを強調しました。

ちなみにそれもルゼ様の指示と言っか、指南というかのままの調子を心がけて見ましたら！

「待っている」

『敵』はあっさり頷きましたよ！ルゼ様、流石です！！

「今からでもいいが？」

「ちゃんと祝賀会がお開きになってからにしましょう？だって、ご領主様のためのお祝いですもの」

「グインセイル、だ。リユーム」

そう柔らかく抱きしめられました。

……………それがいくらか優しいものだったので、リユームも抱き返してみました。

それに呼応するかのように柔らかく抱き返されます。

おや？とも思いました。

強くもがくよりも少しばかり大人しく収まれば、この方もあえて力任せにはしないようです。

発見は気のせいか？単なる気まぐれのなせるワザなのか？
試してみるとしましょうか。

「もう、お放しくださいませ」

腕を突っ張ります。だっこを拒む時のエキバりに、ぐぐいっと両手
を突っ張ります。

「くるしいからいやです。ごりよしゅさま、くるし……」

「リユーム」

「なんででしょうか？」

「リユーム」

諦めて力を抜けばやはり、やんわりと包むかのようにされました。
そのままの体勢でお互い無言です。

その分、彼の手が背を上下する感触やら、じんわりと伝わってくる
体温が嫌に感じられてしまい途惑うしかありません。

「リユーム、抱っこするのは好きですが、されるのは嫌いです。く
るしいから」

いや、でもこれ切りが無いみたいです。

いつまでこうしていればいいのでしょうか。

いい加減、ご領主様のおでこを叩いてみてもいいのでしょうか？

両手が塞がっているのです、ここはひとつ。

「!?!」

「じっ!」

いい感じで音がしました。

頭突き。ご領主様の下あごをめがけての。

後すかさず、腕を精一杯突っぱねます。

腕の緩んだそのスキに、やりましたよ脱出成功です！

そんな勝利に酔う暇なんてありません。急いで帳とばしの向こうへと躍り出ました。

「リユーム・・・相変わらずいい度胸だな。『後で』覚えていろ」

「いいえ、忘れ去りたいと思います！」

そんな捨て台詞に背を向けて、リユームはルゼ様に向って一目散
！全力で駆け出したのでした。

第二十二話 シェンテラン家の主張する石（後書き）

『どうしたもんか』

この話の先の、先の、先へと書き進み間が空いてしまいました。

いつもありがとうございます！

『もう・小話ではないよ！劇場』

ルンラルンラルン

ワタクシ目はゴキゲンでうっかりすると一大事を忘れそうなくらい、今日の午後を楽しんでしまっていた。

傍らの少女もとても楽しそうだというのもあるだろう。

手のひらから伝わってくるものがある。

と、言う事は若様も？

そんな期待は無駄に等しいと思った。

どうしたらこんなにお天気も良く、風も心地よく、行き交う人々は親切で気前良いというのに、そこまでしかめっ面が保ってるのかと感心した。

一見遊んでいるように見えるだろうが、あまり変に取り乱しても目立つので

『うちの子、遊びに来てませんか？そうですか、見かけたら広場で待ち合わせと伝えて下さいな』

・・・なぐんでさりげなく搜索中です。

あまり血相変えて大騒ぎすると、誘拐事件にまで発展したら嫌だし。

何？迷子の女の子がいるって？どれどれ・・・？

みたいな不埒な奴いませんように　　！！
それにうかうか付いて行きませんかように　　リユーム様！！
女神様とリユーム様とに同時に祈りながらの搜索である。

少女の案内で行く商店街の先々からは『おやつ』を渡された。

果物屋のおじちゃんとおばちゃんからは店先で色々と振舞われ、パン屋では『きれっぱし』なる立派な一品を、乾物屋では干した葡萄をとまあ威勢よく気前よいやり取りが続く。

『リユーム、来てませんか？』

『見てないねえ、会いたいねえ！元気にしているのかい？』

そんなやり取りを繰り返しては、何の情報も得られないまま『おやつ』だけはいつぱいになって行く。

少女のバスケットのふたも持ち上がるほどだ。しかも1・ルートも払わずじまいで、ありがたいやら申し訳ないやら。

下町つこ同士で遠慮は無礼と知っていても、さすがに気の引ける量である。

このまま行くと、バスケットには収まりきらない　　。

商店街を通り抜け、残るは神殿前の広場だ。

そこに商工会議所もあるようだし、なじみの市も立っているといるとい

う。

恐らくリユーム様はそこにいるハズだ、多分　　。

そんな緊張を彼にだけは悟られてはならない。何せアホみたいに勘のいい彼の事だ。

思考をソレいつぱいにもしようものなら、たちどころに嗅ぎ付けて問い詰められるに決まっているに1000・ルートだ。

(落ち着け、ワタシ！落ち着けえ〜)

歩幅の全く違う若様は、少女と歩くには無理があったようでサク

サク先を歩いている。

よしよし。その調子でお願いします。

ふと気が付けば、傍らの少女が幾分緊張しているように感じた。先ほどまではゴキゲンで、元気いっぱい道行く人々に挨拶していたのに。

しまった。もしかして、ワタシめの緊張が伝わってしまったのか？ そう思って少女に声を掛けるべく、屈んだ。

「…………お姉さん。リユームは元気ですか？ ちゃんと食べていますか？ 何か、悲しい目にあってはいませんか？」

「なぜ？」

その時を待ち構えていたかのように、タバサちゃんは小さく小さく切なそうに尋ねて来た。

「お姉さん。リユームの事を大事にしてくれているみたいだから、知っていると思う」

(うん。)

ここはひとつ声は発さず、慎重に頷いて見せた。

「今日が……何の日か」

(うん。知ってるよ。だからだね、うん。)

もう頷く事も無く、力を込めて小さな手を握り返して応えた。

すれ違う雑踏もまばらになり始め、日も暮れかかっている。

お夕飯には間に合いそうも無い。

ゆっくり、ゆっくり。タバサちゃんの手を引いて、広場へと向う。知ってるよ。だから、わざと回り道しながら来たんだよね。私たち。

「うん。でも、もう迎えに行かないと日が暮れちゃう」

「うん。ゆっくり、急ごうか、お姉さん」

こんな会話若様に聞かれた日には、吊るし上げを食うなどは思いますが構いませんまい！

先に行く若様の背とは距離を保っているがどうだろう。
もうこれ以上、隠し立てしてもしょうがない気がする。

若様も若様で付き合ってくれていたような、気がしないでもない
気の長さだった。

諦めたような、やけっぱちになったような気持ちで追いつく。

広場に入る一歩手前で彼は立ち止まり、振り返って待っている。

「タバサ」

「はい」

あっちゃあああゝバレてますかね？と突つ伏して嘆きたいワタク
シめとは違って、少女は実に潔く思えた。

子供にすら手加減の感じられない眼差しに、面と向き合うだけで
もエライと思う。

「いい加減、案内しろ。リユームはどこだ」

「リユームのこと、怒りますか？おにいさん」

「なぜ、タバサが気にする？」

「リユーム・・・言ってたから、その、おにいさんに」

少女の両手がぎゅ、と力を込めて縋ってきた。

（かわいそうに。本当はやっぱり、怖いよね。見下ろされてさ、す
ごまれたらさ）

思わず少女を引き寄せてしまっていた。

「何だ？」

「ど・・・怒鳴られるのも。たっ、叩かれる・・・のも覚悟の上だって」

堪えきれなくなったのか、少女の瞳からは涙が溢れ出す。

その涙は若様への恐怖からではなくて、リユーム様へ寄せた同情
のためのもの。

それにはつと胸をつかれたのは、ワタシだけでは無いはずだ。

「リユ、リユームをそんな風にするのなら、案内しません。リユ
ームは帰しません。前みたいに、私たちと一緒にいるのです」

第二十三話 シェンテラン家の宴の後（前書き）

ヒーローに頭突きを喰らわせ、逃げ出したヒロインで、その後。

第二十三話 シェンテラン家の宴の後

「ルゼ様……っ！」

すみません、助けて下さい、あの方どうにかして下さい。

せめて一時避難場所になって下さい、お願いします。

そんな気持ちで駆け寄りましてございます。

その優雅でいて堂々としたお背中をめぐけて一目散のリュームが、周りなど見ているはずもありませんでした。

「まあ、リ्यूム嬢」

「っ……！」

ルゼ様が何やらお話中だったにも関わらず、リ्यूムはそれを中断してしまったようです。

振り返って驚いたように目を見開かれたのも一瞬で、ルゼ様はすぐさま感じの良い笑みで迎えて下さいました。

「お加減はもうよろしくて？」

流石です。先ほどのリ्यूムの失態など何事も無かったかのように、気遣って下さるルゼ様バンザイ。最高です。

その傍らにはルゼ様と話し込まれていたらしい、若い男の方がいらっやいました。この方も背が高くていらっやいます。

何やら不思議なものでも見るかのように、リ्यूムを見下ろしております。

そりゃ、そうですね。目の前に急にカラスが飛び込んできて、話の腰を折ったのですから。

思わず視線を感じて見上げた瞳は、薄く曇ったかのような空の色合いです。曇っているといってもほんの少しだけ。

この方も明るい場所を見つめるに相応しい、薄水色の瞳です。

リ्यूムは不躰にもその瞳を覗きこんでしまっていました。

その不思議そうに眺める様子に急に我に返ります。呆れられたも

のと思われず。

「あ・・・はい。その、申しわけ・ございませ、お話ちゆうでしたよね？大変、ご無礼致しました、し、失礼致します、」

言いながら一歩、二歩と、じりじりと後退しました。

「リユーム嬢！」

「・・・つは、はい!？」

その男の方に急に呼び止められて、リユームの身体は跳ね上がりました。

怒られますでしょうか？

「ああ・・・その、驚かせてしまって申し訳ありません」

リユームの怯えを感じ取ったらしいこの初めてお目にかかる方は、すぐさま優しく声をかけて下さいました。

しかも気遣うかのような調子で、頭まで下げられます。

「いいえ、つそ、そのお邪魔してしまってご・ごめなさい」

慌てて首を横に振りました。

「そんな邪魔だなんてとんでもない。こうして間近でシエンテラン家の歌姫にご挨拶できるとは光栄です。」

改めて リハルド・メルシユアと申します。リユーム嬢、本日はお招きに預かり光栄でございます」

「あ・・・はじめまして。お目にかかれて光栄でございます。」

リ、リハ・・・ード・メ、シユさま。ジ・リユームです。その、ごめ、なさい。お名前、その・・・ちゃんと」

お呼び出来なくて、としごろもどろと謝りました。

あの方が許さないわけです。確かに恥です。ギユルミナ様にも、さぞやご不快な思いをさせてしまったかと思われず。

「ああ、何もそんなに謝ることはありません。」

何でしたら『リ・ド』とお呼び下さって結構ですよ。妹も小さい頃うまく呼べなくて、そのまま定着した私の愛称です」

「リド・・・さま。では、お言葉に甘えさせていただきます」

そう告げたとたん、彼の表情が一気に晴れ渡りました。見ている

こちらが怯むほどです。

な・・・なんでしょう。これはこれで思わず後ずさりしたくなる威力がありますね。

にこにこことこんなに笑う男の方を見たのは、お義父様以来です。にこやかな笑みを浮べる事のないあの方がよぎります。

クセのない金の髪ですら寄せ付ける隙のない、あの鋭い目つきのあの方がなぜにちらつくのかと言いますれば。

リド様があまりにその対極にいらっしゃるからでしょう。

いや、いけませんねリユーム。せめて心の中ではきちんとお呼び致しましょう。

リハルド様の髪は少しクセがおありになるのでしょうか。

短くもくるつとしておられ、お顔立ちの周りの印象を柔らかく見せるのに一役買っているようです。

ふわふわとした髪質までもがこの方の、温和そうな性格の現われのように思えて内心感心してしまうリユームです。

ふわふわとやわらかい。にこにこにこやかで、人を歓迎してくれるかのような微笑み。温和。柔和。

どこぞの誰か様には掠^{かす}りもしない表現ばかりが浮かびます。

始終しかめっ面ではないでしょうかね、あの方は。

そう思ったら大丈夫でしょうか、という気持ちすら湧いてきます。何となく。きつとご領主様はお年を召したら、ものすっごい気難

しい偏屈おじじになっっているに違いない気がして来ました。

(きつと変わらず・・・あの調子なのかもしれませんね。この方を見習ったら見習ったで・・・それはそれでコワイ)

「リユーム嬢、どうぞ末永くリドと愛称でお呼びください」

「え、あ、はい？」

「歌姫に名を呼んでもらえたと、皆には自慢せねばなりませんね。その歌声もさることながら、普段のお声もまた格別の響きだと」

「そ、そんな・・・あの、きょう・恐縮です」

胸に手を当てられたまま、リハルド様がにこやかに続けます。

それに乾いたような笑いを貼り付けて、何とか受け答えしているリュームです。

「実に控えめなのですね、リューム嬢は」

「申し訳ございません、せ、せつかく褒めてくださったのに」

「そんな謝らないで下さい。そこがまた魅力だと思いますよと言いたかったのですが。」

気を使わせてしまった様でこちらこそ申し訳ない。言葉が足りなかったようだ

「いいえ、いいえ。リド様はお優しいのですね」

「リューム嬢」

リハルド様は驚いたのか目を軽く見張った後に、またしても満面の笑顔になりました。

眩しい。眩しいです。惜しげも無い男性の笑みは普段滅多にお目にかかれない分、リュームには刺激が強すぎます。

思わず一歩引いてしまいそうになりましたが、堪えました。失礼もいところですからね。

「あ・・・あの？リド様？」

そのまま固まってしまったりリハルド様に、どうされたのかとお声を掛けたのですがにこにこ、にこにこされるばかりです。

「リューム嬢、不躰で申し訳ないが是非一度我が家に招待したい。受けていただけますか？」

「え、と？その、ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます。ルゼ公爵！今の聞いていていただけましたでしょうか？」

「ええ、確かに聞いていたわよ」

ルゼ様が澄ました調子でお答えになった後、ちらとリュームを見て扇を開けました。

明らかに小刻みに肩が揺れており、時折りこちらを窺う目元は笑いを堪えたもの、とリュームには見えました。

「あの、ですが、リド様。義兄の承諾を得ない事にはわたくし自身

が、『はい』とは申し上げられません。

ですから、そういつたお話は義兄の方にご確認下さいませんか？
「どうやら、貴女のお義兄さまは過保護すぎるようだ。気持ちは解
るが一人占めは・・・おっと。失礼。口が過ぎたようです」

そう最後の方はリユームではなく、一人ごちるかのようになりハ
ルド様は眩かれました。

視線もリユームの頭上であり、変わらずにこやかではあるものの
眇めた瞳は鋭いようでした。

「？」

何事でしょうか、と不審に思い振り返りますれば。

背後の人だかりの中心人物と、何やら視線をぶつけ合ってます模
様。

あの主おもにご婦人方の集まりの中で、頭二つ分は抜きん出た金髪は、
言わずと知れたご領主様です。

むっとしたお顔です。なので、リユームもむっとしてみました。
べっと舌まで出して・・・まあ、心の中だけですけれども。

「リユーム嬢、貴女のお義兄様にご挨拶してくるとしましょうか。
名残惜しいが、それではまた」

そう優雅に一礼するとリハルド様は、ご領主様へと向われました。
その様子をルゼ様と見送りました。

「ふふふ。いいわねえ、リユーム嬢。面白くなりそうじゃない？」
「はい？」

ルゼ様も満面の笑みです。

その笑顔を見つめながらまたしても一人置いていかれたような気
持ちで、首を傾げるしかないリユームでゴザイマスよ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

祝賀会の宴もいよいよお開きになり、リユームは自室に戻ってお

着替えしました。

二ーナには自分で出来るからと告げて、退室してもらいましたから自室には一人きりです。

何か言いたそうな瞳を背に受け、心苦しく感じながらも何も説明できませんでした。

湯に入るか、今日はよしておくか。

かなり迷いましたが、本日の嫌な感じでかいた汗を洗い流してしまいたい誘惑には勝てませなんだ。

用意してもらった湯桶には、恐るおそる気を使いながら入りましたですよ。

だってこんな高価なもの身につけたまま、湯につかるわけには参りませんかしょう？

立ち上る湯気に曇る紅玉が、そりゃあ気がかりでしたとも！

清めを素早く手早く済ませると、湯の中でくつろぐ事も無く上がりました。

そして何よりも先に！真っ先に！

ザク口様を柔らかな布で包み込んで、水気をふき取ります。

そうしてまた素早く、いつものように装飾の少ない服に着替えたのでした。

ますます、違和感が何ともいえない感じがしました。

あまりに強い存在感。それは意思あるものの輝きに相応しいものであります。

ますます、リユームの存在は霞かすむ感じがしてしまいます。

(うう・・・ザク口様ひとつで立派なお屋敷が二つ、三つは立つですと！？ちゃんと箱にしまつて鍵をかけたいです。嚴重に！)

恐るおそるザク口様の中心に、指先で触れてみました。

何故か冷たいはずの感触は、やたらに熱くもあります。

湯上りで覗き込む鏡の中、途方に暮れた浮かぬ表情の自分と目が合いました。

残念な事にこんなに素晴らしいザク口様に見込まれたというのに、

心臓がばくばくばくばくとそりゃあもう、痛いくらいうるさいです。

脈打ちすぎてこめかみまで、その鼓動が上がってきたような。頭痛がしました。

嫌な記憶も真新しいリユームの身体は、あの、ままならない状況を予測しているようでして。

足が、手が、動きません。動いてくれません。

（コワイ！）

それは根深くて強い恐怖でした。あの、押さえつけられて噛み付かれた出来事は、この身をすぐませてしまいます。

扉の取っ手に指先を震わせたまま、立ち尽くしていると内側から開けられてしまいました。

「何をやっている。いいから、早く入れ」

「ここでこのままで。なあに！す、すぐ済みますから」

「すぐ済むわけが無いだろう。いいから入れ。身体を冷やしてまた倒れる気が」

ちえ。そう言われてしまえばソレまでです。

否定も出来ない可能性に、リユームは渋々と招き入れられたのでした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「湯につかってから来たのか？」

「はい。す、すみません、お待たせしましたよね？」

これでも急いで仕度したのです。髪もまだ湿ったままです。

「それは構わない。覚悟は付いたのか？」

「はい？覚悟ですか？」

何ののでしょうか。

「ご領主様とちゃんと、話し合う覚悟をしてきましたか？」

「……………」

重々しいため息と共に、不服そうに仰る事にはですね。

「それはいいが。ソレは何のつもりだ？」

腕を組み立ったままの、ご領主様の顎がそびやかされました。

それ、と顎でしゃくられたのは。

” 残念だったな。そうそう貴様の思い通りに事が運ぶと思うな、若領主”

リユームの傍らに寄り添ってくれている黒い獣・ダグレスの事のようにです。

「ダグレスです。お利口。」

「……………」

リユームはダグレスの首に抱きつきながら答えましたが、返事はかえりません。無言です。

この期に及んで無視ですか。望むところですよ。

そのおつもりなら、リユームは好きなだけ訴えさせていただきますからな。

「リユームは訊きたい事があってご領主様の元へ参りました。ちゃんと聞いて欲しくて。」

だからダグレスと一緒に来てもらったのです。ルゼ様もそうしなさいって」

ごくごく小さいながらも、チツと鋭い舌打ちが静寂の中、響きました。

何でしょうかね……この方は。一気に不機嫌な様子です。

「なんだ」

「ご領主様は……リユームの命が短いものとしてご同情の上のお計らいですか？」

単刀直入に訊きました。

この一連の言動の意味を問いますれば、そうとしか思えませんか。

「おかし様もご領主様のお母様も。『正式に』この館の女主人とな

つてから、実に三年と・・・持ちませんでした」

リユームにも同じ道を辿れど？」

そんな意味合いも込めて問いかけてみます。

なるべく慎重さを心がけながらさりげなさを装って、ダグレスの毛並を撫で付けながら。

『シエンテラン家の柘榴石。』

女主人の血潮によりてその真紅の輝きが年経ることに増してゆく。

『

そんな噂を耳にしたことが無いとは言わせません。

死と引き換えに得る女主人の座とまで、まことしやかに人々の間に上る噂はリユームにだって届くのです。

ええ。つい、先ほど耳にしたばかりですが。そりゃあ驚きましたよ。

息を呑むとはまさにあの瞬間を言うのです。

(なるほどですね)

驚きもありましたが、それ以上に妙に納得したのもまた確かです。

(さもありません。リユームのこの脆弱な身の上なら、宝石なんちゃらのせいでも・・・)

思わず視線は闇をさ迷います。底知れぬ闇の深遠を覗き見たかの気持ち。

それは深く深く飲み込まれて、自身が闇に染まり行く感覚。

そう、それは絶望と呼ばれるものです。

何てことでしょうか。

そこはこの方に確かめねばなりません。

はつきりさせねば。その上でギユルミナ様にもお尋ねせねばならないでしょう。

それでもコレを望みますか、と。

それでもコレを贈られたいと望みますか、ギユルミナ様？
ザク口様、アナタはリユームの血潮を望みますか。
それがシェンテラン家の主の意思だとでも？

(この方はリユームに死ねと言っている………?)

死すらいとわないのだと、胸を張ってこの方への愛を誇示するた
めの寶石。

しかし『噂』はあくまで『噂』です。

それに振り回されちゃあなりません、のもまた事実。

ですから、ある意味度胸だめですよ。

いや、実際試されるのは………なんでしょうかと解らなくなっ
てきています。

胸が……声が指先が、震えるのを止められません。

第二十三話 シェンテラン家の宴の後（後書き）

『石榴石』

なんてものを寄こして下さるんでしょうかね。
ばっちり呪われているようではないですか？
いや、ただの噂か？
は、また次回に持ち越しとなりました。

『またしても』

すみません！小話はまた後日！

お待たせ（？）しました〜6月23日・小話UPです〜

『小話・・・続き・・・本当にもう、小話で済まない感が拭い去れません。』

それは例えて言うなら子猫に”ちび。”何て名づけちゃったけど”でぶちゃん。”になっちゃったよウチの猫〜みた〜く。』

「帰しません」

強く言い切る少女の眼差しは、涙に濡れてこそいたが鈍る事無く決意に満ちていた。

「それがリユームの望みだとでも？」

「私たち皆の、望みです」
皆。

それは恐らくこの商店街の皆々様を指すのだろう。

少女が強気なワケだ。ここには千の味方がいるに等しい。

「タバサ！」

びっく、と少女の肩が跳ね上がった。

急に名を呼ばれたのだから、驚くだろう。ワタシだって驚いた。思わず声のした方を見た。当の本人はといえば、どうしたことがワタクシめの前掛けをきつく掴んで寄り添ってきた。

まるで『彼から』身を隠そうとするかのよう。

「タバサ、どうしたんだ？ずっと姿を見せないで・・・しかも何だ？面倒事にも巻き込まれたのか？何を泣いている！」

早口でそう一息にまくし立てる少年は、黒い制服に身をつつみいっぱしに腰には剣を佩はいていた。

（おや。このこも黒髪・・・ふうん。いいところのぼっちゃんだね、こりゃ。）

襟首に刺繍されたツタの模様に、少年が役職持ちなのを見とめた。（おお。見知っているぞ、そのヘビとツタの紋様。神殿に属しているようだね、少年よ）

黒髪に琥珀色の瞳の組み合わせが凜々しい少年は、神殿前広場の護衛団員らしかった。

その蜂蜜色の瞳で少女を見つめる。

だが、タバサちゃんはぎゅっと目をつぶってワタシにしがみついている。

少年の心配そうに覗き込む瞳がひとつまばたいた。その次には怒りに変わったらしい。

琥珀の瞳を差し向けた先にいたのは、うちの若様だった。

「タバサに何かしたのですか？」

（タバサちゃん、このコ、アナタの味方だと思っけど？）

そう、こっそり耳打ちしたが、少女はいいやと首を横に振るば

かり。

「別に何も」

「だったら何で……!？」

「アナタには関係ありません。向こうへ行つて下さい。この方に失礼な事言わないで下さい。お願いします」

腕組み下ろす若様に食つて掛かろうとする少年を諫めたのは、他でもないタバサちゃんだった。

すごいな、おい。感心した。それは若様もだったらしく、くしくも二人顔を見合わせちゃったよ!

「タバサ」

叱られたように少年は見るからに落胆してしまった。

かわいそうに。うん。君なりにこの子を守りたかつたんだよね。

お姉さんにはわかるぞ。

肝心の少女には通じていないのが、なんともはやだけどさ。

「関係ないとは言わせない。広場で騒ぎを起こしていいはずが無い」

おっと……少年。負けん気が強いようだね。でも、その切り返しは逆効果だと思つよ?

そんな少年の精一杯の虚勢を見抜かざるを得ないオトナなワタクシ。

甘く、苦い気持ちで見守ってしまった。きっとオトコノコ特有の愛情表現をしてしまったあげく、嫌われたつてところでしょう。

(ちよつと不憫だけでもさ……かわいいなあ)

多分、それは若様も一緒だと思う。さっきよりも、すこしだけ・眼光が緩んだ気がしますから。

「神殿の護衛団員か?何も騒ぎを起こす気など無い。タバサには案内を頼んでいただけだ」

「案内?」

「そうだ。義妹が黙って遊びに出たまま帰らないから探している。黒髪で黒目のリユームという少女だ」

「リユーム?あいつ……帰ってきているのですか?タバサ?だつ

てあいつはもう・・・ご領主家の養女に」

驚いたように少年が呟いた。しかもリユーム様を『あいつ』呼びわりですか。

そりゃ顔見知りなら当然でしょうが、何だかこのまま若様の前で連呼はマズイ気がする。

慌てて話しに割り込んだ。

「あの子。君も・・・リユーム様を知っているの？私たち、迎えに来ただけけれど」

少年は黙り込んだまま、ちらとタバサちゃんをうかがった。

タバサちゃんは心配そうに、おずおずと少年を見ている。

（（言わないで。））

そう、涙目が訴えている。そんな眼差しを向けられて、言える訳が無いよな！少年よ！

「どうした？言え」

「今日だけはあいつの好きにさせてやって下さいませんか？

せめて日が暮れるまでの、あとほんのわずかな時間でいいから」

「何故だ？」

「今日は　。多分、もうじき・・・」

少年はきつちりと頭を下げて、そのまま頭を上げなかった。言いよどむ語尾が何かしら、含みをかんじさせる。

その潔く下げられた黒髪を、タバサちゃんも黙って見つめていた。

もう日暮れも間近。

足元に伸びる影も、広場の鐘もそれを告げ始めた。

その時だった。

広場を駆けながら横切る、子供たちの歓声が届いたのわ。

第二十四話 シェンテラン家の噂の出所（前書き）

『ヴェンセイルの部屋ではとる。』

今回の（仮）タイトルはそんな感じで書き進んでおりました。
誰と誰のバトルなのか、と自問自答しつつ。

第二十四話 シェンテラン家の噂の出所

椅子にかけるようにと勧められましたが、リユームはそのまま扉の前に座りこみました。

だって、椅子に腰掛けたらダグレスを抱っこできなくなるんですもの。嫌です。

それにこの方と膝を付き合わせるかのような距離は、ちょっと近すぎる気がします。

いくら間にダグレスを挟んでいようと、今日のご領主様ならまた無理やり抱っこしてきそうですから。

嫌です。ゴメンです。警戒を怠らずに距離を保つに限ります。

ゆるゆると首を横に振りながら、その場に崩れ落ちるようになんがみ込みました。

何だか、力が入りません。今さらながら震えてしまいます。

やはりご領主様の眼力は強く、こつも間近で晒されるとやはり恐ろしさですくんでしまうのです。

ダグレスの首にすがりつきながらでなかったら、転んでいたかもしれません。

ダグレスはリユームに合わせる様にして、ゆっくりと膝を折ってくれました。

「誰がそのような事をオマエに聞かせた？」

「・・・・・・・・」

聞かされたのではなく、耳に入ってきただけです。偶然。そう偶然。

目を伏せます。出所の不確かな『噂』が嘘でも本当でもそのどちらでも、ただご領主様の真意を確かめたかったです。

そうとは告げられずに言いよんどんでしまいました。ただ、ダグレスの毛並に指先を絡めて慰めとします。

「言え！隠し立てするな」

「その・・・お名前をぞんじない方でしたので、誰かは申し上げられませんか」

「いいから言え。その無礼者は男か？女か？」

「申し訳ありません。そのハッキリしない噂などに惑わされてしまって、ご不快にさせましたよね。」

「どうか忘れて下さい。リユームも忘れれますから」

「忘れる、だと？そのようなオマエの態度でどう忘れると言つのだ。そもそも、リユームは忘れる事ができるのか？」

「・・・ど、努力します」

「そんなものを用いねばどうにも出来ぬなら、無理だろう。」

「何ひとつ納得出来ずにいるくせに何が『忘れる』だ。そこまで器用でも物分りがいいわけでもないくせに呆れる」

「なっとく、します」

「何が！出来もせぬくせに無理やり聞き分けのいいフリをするな、今さら。」

オマエの聞き分けの悪さは筋金入りだ。俺とて治せん。

先ほどの宴でも俺が許可せぬ者とは口を利くなと命じたにも関わらず、ギョルミナとメルシユアと接触したな？

おかげで面倒事が増えた。ことごとく俺の言いつけを破るなら、もう公の場には出さない」

「う、めんどう・・・おかけ、して・・・もうしわけ、あ、ありません。そのリ・ド様に何か言われたのですか？」

「恐るおそる尋ねます。」

きつと馴れ馴れしくしすぎたか、しゃべり方がおかしかったのかして、拳動不審だったのでしょうかと思われれます。

「なぜ、オマエがああ男の言う事を気にする？」

「リユーム・・・リ・リド様の事、ギュー・ミニヤ様と同様にきち

んとお名前呼べなかつたです。

だからきつとご不快だつたらうなと心配したのです。

笑つて許してくれたのですが、その後『リユームのお義兄様に』
挨拶をする』と仰つて。

すぐ、ごりよ・ごりヨシユ様のところへ行かれたから。き、きつ
と、リユームのこと注意されませんでしたか？みつともないとか、
聞き苦しくて不快だつたとか、その、やはり恥をかかせてしまいま
したよね？ごりよしゅ様に」

「そうだな」

「やはり、そうでしたか。申し訳ありませ、でした」

ああ、またやつちやいましたか。うう。情けないです。

ダグレスの首に抱きついたまま、頭を下げました。

「メルシユアの跡取りに何を言われた？」

「え？」

「そいつがオマエにその首飾りにまつわる『噂』とやらを吹き込ん
だのか？」

「リ・ド様が！？いいえ、違います！」

ぶんぶんと勢い良く頭を横に振りました。なぜ、そうなるのでし
ようか。

どうやらこの出所の無い『噂』は相当ご領主様にとってご不快の
ようだと、リユームはやつと理解しました。

当然でしょう。シエンテラン家が代々引き継いできた家宝を、そ
んな風に貶められたら誰だつて怒るに決まっています。

「では誰に吹き込まれたのか白状しろ。言え！」

「ですから、あの・・・お名前わからない・・・言えません。申し
訳ありません」

必死で詫びました。ご領主様はやつぱり、ご領主様なのです。

家宝を辱められたら、この家が辱められたのと同じ事でしょう。

リユームの考えが足りなくて、不快にさせてしまいました。

そのせいで関係の無い、リハルド様や他の方まで巻き込みかねません。

やはり、リユームの言動はご領主様の癪に障るのですね。

少し、優しく構われた気がしたからと思いがあってはいけないのだと、改めて思いました。

ルゼ様のご提案にそって『ちゃんと話し合う』つもりで来たのに、耳にした噂話あまりに哀しすぎて、それを一番に確かめたくなつたのは浅はかでした。

いきなり余計な事を言つて、それどころじゃない状況にしたのはリユームです。本当にバカです。泣けてきます。

こうなってしまうともう、リユームごときが何を言っても無駄であり、それどころか余計に不快にさせるだけなのは学習済みです。何も言えず、必死で向けられたお怒りに平伏すしかありません。

ダグレスが鼻先でリユームの頭を突きました。どうやら、慰めてくれているようです。

ありがたい。やはりいいこです。

リユームの頬をぺろりと舐めると、ぐうと小さく唸りました。頭を低くもたげて、まなこ紅い眼でリユームとご領主様とを交互に見ま

す。
” 先ほどまでオマエを取り巻いていた女どもだ、若領主。しかも直接ではなく、あくまで噂話としてだ。

まったく！『ここだけの内密の話』の割りに、ずいぶん大きな声であつたなあ”

「……………ダグレス」

ご領主様が平坦ではありませんでしたが、ダグレスの名前を呼んだので驚きました。

「このこが唸るからでしょうか。」

『この館の主に逆らったものは、何者であろうと処罰は受ける決まりだ。例外は無い』

ふいに、かつてのご領主様の言葉が蘇ります。

それと同時にリュームの胸の鼓動も早まりました。

（ダグレス・・・ダグレス・・・お願いだから、もう、唸るのをやめて）

必死でなだめようと首に回した腕に力を込めました。

” そうだ。ダグレスだ、若領主。やはり貴様は『獣耳』か。聞こえているなら早く返事をせぬか！無礼者”

ご領主様とダグレスは静かに互いを見ているようです。

リュームはただ、ダグレスにすがり付いてその眼差しだけのやり取りを見守ります。

” この娘、確かに身体の作りが脆弱なことこの上ないな。今、少しづつ体温が上昇している。

鼓動も不規則だ。あまり声を荒げて怯えさせるな。それこそこのままでは ”

ダグレスの唸り声はやみません。それどころかどんどん増して行きます。

「あの一！ご！ごりよ、」

” 正式に女主人になるまでもなく、三年持つかどうかといった所だろう。もっと^{いた}労わってやれ”

「うるさい！黙れ！！」

「も・申しわけございません」

グウウ！とダグレスが牙を剥き出しにしました。

(「いけません、ダグレス。ご領主様はダグレスのことを怒ったりなんてしないから、怒ったらダメよ?」)

” 若造! 『わ』を『ば』に変えて呼ぶぞ、まったく!”

なおもダグレスが軽く身を起こし、鋭い唸り声を上げました。低く、それは続きます。

(「ダグレス・・・だいじょうぶよ、お利口さん。ご領主様はリュームを叱ったの。」)

ダグレスの事じゃないわ? ね、だから、落着いてね)

落ち着かせようと、震える指先でダグレスの毛並をかき上げました。

あいにくとそれくらいでは、ダグレスの唸り声は止んではくれません。

今にも飛び掛りそうなダグレスを押し留めようと、腕にも力を込めますが、ついにダグレスは立ち上がってしまいました。

リュームも慌てて立ち上がって、諦めずにダグレスに抱きつきます。

(「いけません! ダグレスっ、いけません!」)

” 貴様の側に置きぬと判断した場合、公爵家に連れて行くぞ。ルゼもそれを見極めて来いと言ったしな。覚悟しろ。”

「リューム。ダグレスから離れる」

「ダグレスはいいこです、だから! だいじょ・・・」

「離れると言っている! 何度も同じ事を言わせるな! いいから離れる、こちらに来い!」

ご領主様も立ち上がると、椅子の側に立てかけていた剣を取ります。

そのまま孔雀の羽根の細工が施された鞘から差し抜くと、剣を構えられました。

リユームの頭上高く。

燭台の薄明かりを鈍く返して光る剣。

昼間とはまた違った表情を見せています。

リユームの心臓がばかに忙しなく、早まりました。

『了承の剣』はその『鞘の立会人』に、振り下ろされようとしているようです。

（そ・そか、剣を収めるのは『鞘』の役割とルゼ様が仰っていた・・）

だったら。その剣を身に受けるのは、リユームのはずです。ダグレスではなく。

それがいい。そうして欲しい。それでお怒りが収まるのなら、安いものでしょう。

きっとモノを知らないリユームが、触れてはならない禁忌をご領主様に言ってしまったのだという自覚があります。

（けっして、けっして、ザクロ様をこの家をご領主様を、辱めようと思ったわけではありません）

しよせん、そう謝ったとしてもただの言い訳にしかならないでしょう。

もう言ってしまったのですから、取り返しが付きません。

結果として、リユームはお世話になっている家に不信感をつのらせたあげく、無礼を言ったようです。

罪悪感からか胸が痛みます。

痛みます。

胸を押さえると、もう立っていられませんでした。

ずるずると扉に背を預けながら、足が崩れ落ちてしまつのを留めようがありません。

” ” ばか領主！貴様こそ落着け！ジャスリートの守護の我に、ル

ぜから賜った剣を向けるとは何事か！！

くそ、何故貴様の耳に届いて、この娘には我の声は届かぬのだ！
忌々しい！

いい加減に剣を収めろ！この娘には我々のやり取りは理解出来て
おらぬのだぞ？”

「ならば離れろ、ダグレス。公爵のもとへと帰れ。リユームは渡さ
ない 誰にも。」

許可を得るまでも無い。これはすでに俺のものなのだから」

”このバカ領主！娘の心臓が悲鳴を上げているのがわからぬの
か。興奮させるな、これ以上は……！！”

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ガッという破壊音は、ダグレスの角がご領主様の剣を受けた証で
す。

ぶつかりあって弾けた衝撃の閃光があつたように思いますが、そ
れも確かめようがありません。

ただ、目を固く閉じていても火花は臉を掠めるのだな、と妙に感
心してしまいました。

リユーム！

遠く、名を呼ばれたように思います。しかし、リユームは暗闇を
見ているようです。

そのまま、深く沈むのは意識でしょうか。わかりません。

それきり、リユームの瞳に光が届く事はありませんでした。

第二十四話 シェンテラン家の噂の出所（後書き）

『本編と同じ長さの小話ってどうよ？』

今回、珍しく本編短め（作者比。）

切り良く！はい、ここまで！

どうしようもないな、誰かさん。

ダグレスも呆れているぞ。

では、もう違うってわかってる・・・！うん。

『小話 いいかげん、くらいまっくす』

やっと追いついた・・・！！

久方ぶりの全力疾走にひはこら言いながら、女神像の安置されている祭壇の扉にすぎりついた。

夕闇がゆつくりとしのび寄せ始めている、薄暗い聖堂に見覚えある長い黒髪が目に入った。

（いた！リユーム様、無事だった！良かった）

少女の後姿を見とめホツと安堵したのもつかの間、慌ててもう一人の目を離しちゃならないお方の姿を探す。

（いない？どこに・・・確かに、先にここに入ったよね。そういえば、あの少年もどこに？）

辺りを見回したが見当たらない。

「リユ、」

その女神像に跪いて祈りを捧げている背に呼びかけようとしたが、タバサちゃんにそれを制された。

小さく、しかし力強く袖を引つ張られて。

落ち着いてみれば、リユーム様のいる通路の両脇を先ほど駆け抜けて行った子供たちがいた。

だが驚くほど神妙な顔つきで、一言も発さない。

この年頃の子供たちがこうも大人しくしていること事態、異常事態と思う。

そう何か神聖さに当てられて、静寂を保つよう努めているのだろう。

これから何が始まるというのか。それはこの少女を中心に巻き起こるのだろうか。と期待に胸が高鳴る。

この場を支配するのはそんな気持ちだ。

神聖で犯し難いのは、何も女神様だけではないようだ。

それを子供たちは敏感に感じ取っているのだろう。

子供達だけではない。通路のはしっこに身を隠すように、先ほど尋ねて回った所のおじちゃん・おばちゃん・おじいちゃん・おばあちゃん達もいる。

(うっわ！みんな『承知の上』だったか！)

そういう騙され方なら実に小気味良いと感動した。してやられた感よりも、何よりも。

タバサちゃんに促がされながら、通路の脇の支柱に身を隠しながら進んだ。

リユーム様の表情が見たい。せめて、もう少しだけでも。

驚かせてはならないだろうから、慎重に進んだ。

と、前方に若様と少年発見。彼らも一足先にこの場の取るべき礼儀に倣ったのだろう。

それにはほっとした。若様がリユーム様を頭ごなしに怒鳴る確立はこれで格段に低くなった・・・！よしよし。

女神様の前に跪ひざまずいて祈るリューム様の脇わきに、これまた黒髪くろかみのほっそりとした少年が立つ。

そのとたん、うちの若様の影が揺らぐ。

内心冷や冷やしたが、そこにすかさずタバサちゃんの騎士ナイトが立ちはだかつてくれた。

（た・頼もしいな少年！その調子でうちの若様頼んだっ！）

「思わず熱い視線を送ってしまったではないか。」

リューム様はその背の高い少年の手に手を預けると、促うなががされるように立ち上がる。

そのサマはゆったりとしていて、とても優雅で、思わずため息がこぼれてしまった。

見惚れると表現するのが相応しい、まさにそんな状態だったと思う。

ゆっくりとリューム様と少年が祭壇に進む。

そのまん前にまで迷い無く。

リューム様は女神様の御前までたどり着くと、伏せていた眼差しを上げた。

見上げたその拍子に、被おっていたボールが滑り落ちる。

ぱち・ぱち・ぱち・ぱち……！

期待を抑えきれなくなったであろう、子供たちの小さな手のひらが拍手をした。

それに驚いたようにリューム様が、目をまんまるにしてから笑み浮かべ、微笑みながらゆっくりとひとつ瞬まはたいた。

子供たちの拍手が止む。

（うわ……っ！目で、目で制したよ。まなざし、ひとつで！）
ワタクシめなんぞは圧倒されてしまう。

今、この場を支配しているのは紛れも無くリュームという少女だ。

常からは想像もできないほどの、自信に満ち溢れた優雅な所作はどこぞの貴族のご令嬢かと思えた。

何が始まるうとしてしているのか。嫌でも期待に胸が高鳴る、高鳴る、高鳴る　　うるさいくらいに！

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

広場から響き渡ってきたであろう、鐘の音がここまで届く。

日暮れを告げる鐘の音は、夜の帳がもう間もなく下りるのをひそやかに告げるのが役目だと思っている。

それぞれの一日を終え人は皆、帰路に着くのだ。その帰るべき場所へと。

それだけでなく、この鐘の音が告げるのは。。。。
そう。今まさに少女の祈りが始まる事を知らせてくれている前触れ、いわば合図だ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

もはやリユーム様とその傍らの少年は、女神様だけしか見ていないだろう。

二人の歩みは、祭壇の一步手前で止まった。

耳を掠めていた鐘の音も、その余韻も二人の歩みと揃って止まった。

何だろう・・・犯し難くて誰もが自分自身の存在を、この場の空

気と馴染ませるように気を配っている。

その一体感が生み出す静けさを連帯感というのだろう。

何か神聖な儀式を待ち侘びているのだから、当然だ。

二人は軽く膝を折り、両手を胸の前で組んで祈りを捧げた。瞳も伏せる。

そんな二人に導かれるように、その場に居合わせた者達もそれに倣っていた。

もちろん、ワタクシもその一人だ。

その胸の前で固く手を組んだまま、ただじっと見守った。

リユーム様は祈りの形であった手を流れよくほどき、放つかのよ
うに両手を広げる。

まるで小鳥が飛び立とうとするかのような、流麗さに目を奪われ
てしまった。

そして間を空けずにして始まった美しい旋律には、目も耳も心も
さらわれてしまう事となる。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

響きたまえ

わが歌声

女神様のもと

憩う魂に届くほどまでに

夜闇ですらふり払い

遠ざけるほどの

威力を授けられし

わが歌声

矢のごとく放たれる光のしるべとなり
駆け抜けよ
数多の闇という闇を
ふり払い
ただひとつの御魂に
たどり着くために

響きたまえ
われらが歌声
数多にきらめく
夜空の星のひとつ
ただひとつの
輝きのみなもと

シザール・タラヴァイエに

届けたまえ
われらが歌声
その心優しき父の魂へと
静寂を調べとする彼の者の魂にまで
響きたまえ
われらが歌声

その女神様のもと
憩う御魂にまで
届けたまえ
われらが歌声
響きたまえ
われらが歌声

く思ったくらいだった。

今、それを訂正したい気持ちでいっぱいだ。

言い換えるなら、そう。

あまりの桁違いの威力に、少女の恵まれたものに平伏したいくらいだった。

第二十五話 シェンテラン家の扉の向こうで（前書き）

リユームさん、一人反省会のようです。

だいぶ、お疲れなのは間違いありません。

小話UPしました く7・8く後書きにてどうぞ！

・・・スクロール・・・大変ですみません。

第二十五話 シェンテラン家の扉の向こうで

またしても、と言いましょうか。毎度の事と言いましょうか。

ご領主様のお怒りをおかしてしまったりリユームでございます。

（あゝあゝあゝ。ただ、確かめたかっただけなのにな。どうしてあんな嫌な言い方してしまっただんでしょうか。

ご領主様が怒るのも無理ないですね。それでなくとも、ギユルミナ様とリハルド様とも上手くお話できなくなつて、

恥をかかせてしまったというのに。リユーム、もっと、じょうずに話せたらいいのに。・・・もっと、ちゃんと気持ちを伝えることが出来ればいいのに）

結局は『うるさい。黙れ』と叱られてしまったのを思い返しては、うな垂れるしか能のないリユームです。

『・・・・・』

（そもそもリユームは何を確かめたかったのでしょうか。ザク口様にまつわる噂は本当かどうか？

そもそもご領主様だつて困りますよね。そこで本当だつて言われたら、リユームはどうする気だつたのでしょうか？

やっぱり目障りなんだな、嫌われたもんだな、と思ひ知りたかつたのでしょうか？

本当にお聞きしたかつた事は、どうしてこんなに高価なものをリユームにやるとか言い出したんでしょうと、彼のお気持ちを知りたかつただけなのに。失敗しました。そういえば、妻にとかつて言い出しましたよね？正気ですか？何だつてまたリユーム？カラス娘ですよ？ギユルミナ様は？と言いたかつたのに！しかもいきなり変ではないですか？やたらに構つてきて。・・・あああゝまとまらないですゝ！！上手に気持ちを伝えられるようになりたいです）

改めてそう思います。まずは收拾のつかない思考をスッキリとさ

せたい所です。

それよりも、せめてきれいに話せるようになる事が先決かもしれません。

それこそ聞き苦しくては、聞かされるほうが嫌になってしまおうでしょうから。

どもったり、もたもたしゃべったりしないようになるには、きつと訓練すればいいと考えました。

それまで、誰とも会いたくないなとまで思ってしまった。

(もう、公の場には出さないって言われちゃいましたしね。)

もう遅いかもかもしれませんが、だからと言って努力をしないのはいけませんよね！)

静かです。

リユームの頭の中は色々とぐるぐるしちゃって、ごちゃごちゃしておりますが辺りは静かです。

こうやって考え事をするのには最適です、リユームの自室は。何てたって本館から離れてますからね。

先ほどニーナが訪れてくれたのですが、扉越しに会話をしただけです。

『少しだけ、一人にしてもらえませんか？リユームは一人反省会中なので』

と、告げたところ啜り泣きが聞こえてきました。一体、どうしたっていうのでしょうか？

『お願いですから、リユーム様。戻ってきて下さい』
戻る？広間にでしょうか？

もう、宴はお開きのはずです。不思議に思っただけ扉を見つめてみましたが開く様子はなく、気配が遠ざかって行きました。

ニーナはまだ仕事があるのでしよう。戻ったようです。

(ご領主様には黙れと言われましたしね。もう少し、ここから出ない方がいいでしょう。目障りでしょうから)

それにお客様たちにまた何か粗相そそろうをしないでかしかねないリユームは、
ここでもう少し大人しくしているに限ります。

気配を殺して、やり過ぎしましょう。

「じゃあーん、と足元にまとわりついていたエキが鳴き声を上げて
注目を促がします。」

『なあに？エキったら、抱っこしてほしいの？』

” ” うん。” ”

『はい、いらっしやい。甘えっこさん』

素直なエキに思わず笑みがこぼれます。その柔らかな身体を抱き
上げてやると、エキはごろごろと喉をならしました。

撫でてやると目を細めて気持ち良さそうです。

” ” ねえ、リユーム。お歌、うたっ

てよ ” ”

『はい。いいですよ』

リユームはその可愛らしいお耳を掻いてあげながら歌いました。

エキが一番気に入っている【闇ふり払いたま給えし我らが光】という
曲です。

何でもエキはこの曲を聴くと一番、自分らしく在れると言っ
ます。

自分らしく。エキはエキのまままで充分だと思っただけだね。

そう告げましたところ、なるべくならこのエキのままですりたい
のだ、それがリユームのためでもあると言われました。

そうですか。そこまで言われたら（何の事やらよくはわかりませ
んが）頷くしかありません。

そんな事もあって気軽に請け負ってしまいいながらも、気合を入れ
て歌ってしまうリユームです。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

”ねえ・・・リユーム？”
『なあに？エキ』

”あのねー・・・”
リユームが歌い終わり、その余韻に浸っていたかのように目を閉じていたエキがこちらを見上げます。

あの方とおそろいの。雨にぬれた葉のような、綺麗な緑の眼がリユームをとらえています。

”あのねー・・・”

エキが何か言いかけてました。その時です。ドンドンつと荒々しく扉が叩きつけられました。

『リユームっ！！ちよつとお！いい加減に戻りなさいよね！早くっ、わたくしを待たせないでよ！』

リユーム、聞こえているのなら返事をしなさいよお！..！』

威勢のよかったのは最初の方だけで、後は明らかに涙に濡れた声に驚いて扉に駆け寄りました。

『ミゼル様？どうされたのですか！』

扉の取っ手に手をかけたのですが、びくともしません。

押しても引いてもダメでした。開きません。

（もしかして、鍵をかけられてしまったのでしょうか？閉じ込められた？・・・ご領主様の命令ですか？）

慌てて扉を拳で叩いてみました。しかし、リユームが非力なのでしょうか。たいした音は立てられませんでした。

『ミゼル様！』

『うつう・・・リユームのばかぁ・・・返事くらいしなさいよ』

扉の向こうで聞こえる少女の泣き声があまりに悲痛で、リユームは心底慌てました。

『ミゼル様、ミゼル様、ミゼルド様！どうされたのですか？..』

しかし返事はありません。そのうち、すすり泣きながら気配は薄れていきました。

(一体、何があつたのでしょうか？)

リユームが扉に張り付いたように離れられないでいると、今度は控えめにコン、コンとノックされました。

「ちよつと、アナタ。本当に身体もおかしかつたのね。」

だからと言つてこのまま、戻つてこないなんて許さないから。後味が悪いじゃないのよ」

「ギユ、ギユルミナ様ですか！？な、なぜ？」

「リユーム嬢！どうかお戻り下さい！」

「ええ？そのお声はリド様ですか？」

(な・・・何事でしょうか？一体、皆さんどうしちゃつたのでしょうか)

そこまで言われては戻らない方が無礼でしょう。

リユームは無駄に力を振り絞りました。うんうん唸りながら、扉と格闘します。

「エ、エキ？どうしちゃつたんでしょうか、ここ開かないんですよ！鍵でもかけられちゃいましたかね！？」

” ” リユームが悪いんだよ。ボクの・・・ボク以外のために歌つたりするからいけないんだよ。

せつかく、シエンテラン家の怨嗟えんさから守つてあげていたのに！”

「 じゃあ ーん！ 」

「 エ・キ？ 」

エキが長々と鳴くと、その真つ赤な舌が良く見えます。毛並が真つ黒な分、真つ赤に、それはそれは真つ赤に見えます。

まるで、真つ赤な血に濡れたように鮮やかに紅く。

” ” ボク以外のために歌うなどは言わないけど、これからは気を付けた方がいいよ。

明らかに誰かさんはものすごく君に嫉妬心を向けたから。

ああ、まあ、誰かさん以外の人間もいたけど、彼の比ではないからアレだけどさ” ”

取るに足らないって言うか？とエキは可愛らしく小首を傾げて付け足しました。

『エキ。意味がわかりません』

” ” わからなくていいよ。まだ” ”

『そんな！中途半端な情報は混乱するだけです。そこまで言っていてそれはないですよ』

” ” だって〜リユームってほら。ばか、じゃない？だから理解できないよ” ”

うぐつと言葉を詰まらせました。反論できない自分も何ですが、認めるのも癪しやくに障ります。

そんなエキと見詰め合っていた時です。また、扉がどんと大きくひとつ打たれました。

『リユーム・・・返事をしろ。幾日も俺を無視していい度胸だ』

苦しげに絞り出すかのようなお声に、リユームは震え上がりました。

『ご、ご領主様！？』

扉越しに聞こえた呻くような声に、リユームは何故か胸が絞られたかのように苦しくなりました。

『リユーム、リユーム、リユーム！』

『ご領主様！ご領主様、ご領主様！』

リユームの声は届かないのでしょうか？必死で呼び声に答えているのじ。

何やら悲痛な叫びに近いご領主様のお声に、コレはただ事では無い状況だという事だけが伝わってきます。

『ご領主様・・・・・・・・！？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

呼び声が止まりました。気配も遠ざかっていきます。

扉の向こうにはただ、絶望したかのような哀しみだけが残っているようです。

” シャアアアアア！！”

『エ、エキ！？どうしたの！』

そのままエキの身体は膨らむと、ばんっとはじける様に散り散りに散ってしまったのです！

まるで濃い闇色の霧が日の光の下、霧散むきんしてしまうかのように跡形も無くなってしまいました。

『エキ！』

『ダメじゃないか、リユーム嬢！あんな魔物と馴れ合っちゃあ！』
『魔物？エキが？』

クレイズは苦笑しつつ、腕を組んでリユームを見下ろしておりました。

第二十五話 シェンテラン家の扉の向こうで（後書き）

『十二話の伏線が・やっとこさ。』

クレイズ君お待たせ！出番だよ。
長かった。

またしても、どうしてこんなに書き出すとそれなのか。
おかげで次回の更新も、私にしては早いと思います。

『またしてもいいでしょうか。』

小話はまた後日！

只今、本編連続更新強化月間開催中です。
小話も大詰めな、ハズ。

『はい！もう容赦なく長いよ！すみません、小話で済まない小話』

7・8 UPしました！　〜とりあえず・十九歳と十二歳編・
ラスト！〜

平伏してはならない。

少女はそんな事は望んでいないはずだから、途惑わせるだけだろ
う。

だからワタクシはひたすらに見守るに留める。

歌い終えたと同時に跪き、リユーム様は女神様に祈った。

そのか細い背を後ろから抱きしめて、寄り添ってやりたいと思っ

「どういたしまして」

若様に抱え上げられながらも、少女は一緒に歌った少年に礼を述べている。

「ふうん？」

「何だ？」

「思いのほか、リユームを大切にしてくれているみたいだからさ。意外だった。でも安心したよ」

「何？」

「決まっている。大切に出来ないようなら、やれるわけが無い。大切にやって欲しい。オレ達の大切なリユームだから」

ジルエルと先ほどから呼ばれる少年は、若様を見ている。

真つ直ぐに逸らすことなく、まるで少女を託していいものかどうか見極めるみたいに。

この少年・・・？ 実に整った端正な顔つきをしている。

まつげが濃くて目鼻立ちもはつきりしており、少し異国情緒漂わせているような不思議な雰囲気を持っていた。

声質も凜と響くが甘さもあって、声変わりはまだのようだと思う。せる。

（見たところ十五、六歳くらいのもようだけど・・・まあ、成長には個人差があるか）

その年頃で加わり始まってもおかしくない、男らしさの片鱗を探すが見つからなかった。

そのせいか男の子でもなく女の子でもない、中性的な魅力があるようである。どちらにしてもキレイな子だ。

「ジルエル・・・！」

「リユーム。元気で。もう、しばらくはサヨナラだ。オレは今日のこと、忘れない」

「リユームも忘れないよ」

「そっか」

二人はそれはいい笑顔を交し合った。その割り込めない雰囲気は、

ちょっとおかし難くて・・・やきもきしてしまっ。

「おばちゃんも、リユームちゃんのこと忘れないよ。いつかきっとまた、歌って聞かせておくれね？」

「うん！きつと、また歌うわ。ここにいる皆の、皆のために！」

「リユーム。たまに抜け出して来い。タバサもララサも俺も待つてる」

「ウォレス・・・変なの」

すっかりタバサちゃんの隣に割り込んだ、制服の少年はウォレス君というのか。

「何だと」

「だって、いつもいばってイジワルなのに。リユームがいなくなっ
て清々したかと思っていたからびっくりしたの」

「ふん。何とでも言え」

ははは。少年特有の照れが誤解を招いていた模様。早く、素直に
振舞えるようになるといいねえ、ウォレス君や？

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「リユーム」

「はい」

若様が少女に注意を促がすと、居心地悪そうにリユームさまは若
様を見た。二人、見つめあったようだった。

「帰るぞ」

「はい」

少女は実に潔く頷いた。若様もすっぱりと『帰る』のだと告げた。
もっと、嫌みったらしく帰る気はあるのかとなじるかと思ってい
たワタクシはいささか拍子抜けした。

若様はリユーム様を抱えたまま、その場で優雅に一礼すると歩き

カ兄いとタリムとはハーブを売ったりしました。あと、ジルエルとお花を売ったのです。楽しかったな」

無邪気にそう告げる様子は、幼子が今日の報告をするのと同じ調子だった。

うつとりと目を細めて懐かしむ、その今を見ぬ視線の先にいるのは誰なのか。

頬を上気させる、微笑ませる威力あるのは今日出会った商店街および神殿前のみんな。

「そうか」

「はい」

その浮かれた心をすぐさま引きずり下ろすような若様の声の低さは、この少女を怯えさせるのには充分過ぎた様ですよ！

「・・・タバサとララサとは？」

「フォリウムさんの、飴屋さんの双子です」

(本当はもう、知ってますよね？)

「ルカとタリムとは？」

「ルカ兄のところは乾燥した薬草や、お花の種も売ってるお店です」

「ルカ兄？」

「はい。みんなのお兄さん役で、面倒見てくれたのです。色々今日も柱の影にいてくれました。

ルカ兄、小さい子達の面倒見てたから話はできなかつたけど、笑ってくれていたから充分です。

「ばいばい、ってさつき手を振ったの。ジルエルも一緒に」

「ジルエル。さっきの黒髪の少年・・・あれもオマエと同族か？」

「どうぞよく？ジルエルは東の国から来たって言っていました。

その、戦でおうちの方といられなくなったから、おじいちゃんの家に来たって。

ちよと、変った子。イジワルだけど、優しいの。リユームに広場案内してくれたり、一緒に歌を練習したり・・・」

（それは聞き捨てなりませんね？若様？）

馬上では若様、彼の知らない少女の過去を詰問しつつ。
ワタクシは心の中で一人、ツッコミを入れつつ。

そんな調子で無事に午後の捜索隊は任務完了でございます！

第二十六話 シェンテラン家の闇の中（前書き）

はい、15禁。

生ぬるいでしょうが、一応ご注意願います。

7月16日 『小話 UPしました！』 後書きにてご報告。

第二十六話 シェンテラン家の闇の中

闇の中から抜け出てきたかのような黒服は、聖堂で見かけた時そのままです。

『って、アレ？クレイズ？』

ずかずかと歩み寄ってきたのはクレイズでした。

『や！リユーム嬢。お久しぶり。ご無事で何より。迎えに来たよ』
『迎えって・・・？久しぶり、ですか？ク、クレイズ！それよりエキは？エキはどうしちゃったんです？』

『うん・・・リユーム嬢すごいな。魔物と馴れ合ったあげく、名前まで与えちゃったのか！やるねえ！』

だったらそんなに手ひどい状況でもないかなあ・・・まあ、あの魔物は心配要らないよ。

ちよつと形が保てなくなっただけだから』

『何をしたのですか、クレイズ！エキにヒドイことしないで下さい』！

『ナイシヨ。まだね。君がちゃんと身体に戻ったら教えてあげる』
『身体に戻る？』

『うん。やっぱり自覚は無いよね。当たり前か。君、あるう事が本体ほつたらかきにしてウロついてるんだよ、精神体だけで』

『本体・・・って ハイ？』

『あーもーやっぱり、わからないよね。あんまり長々説明しても仕方が無い。』

あまり時間もないしね。よし、わかった！いいから付いてきなよ』

そう言われるがままに付いて行った先は、中庭の隅の東屋でした。辺りは真っ暗で、足元すらおぼつきません。

そんな中で腕を組み、瞳を閉じたまま動かない人影がありました。

それはどう見たって、クレイズです。

『クレイズですよね？』

『うん。そう、俺。クレイズ・ルシア・フォルテンシアの本体だね』
『！？』

口をぱくぱくさせるだけで言葉も紡げずに、目の前のクレイズと目を閉じたまま動かないクレイズとを代わる代わる指差しました。

『本体。この世の現われの姿だね。それで今、君としゃべっているのが精神体の俺だね』

『な・・・な？だって、え！？えええ？』

『今までもさ〜リユーム嬢は、身体がづらい時こつやってフラついていた事はない？　って覚えがあるわけないか。』

でも見たところその可能性は高いと思うよ。術者の俺の見解だとそうなるな。君、術者向きなのな。才能あるよ、うん。』

それはどうも。リユーム、意外な才能発見。そう言われてみれば、そんな心当たりもあるような・ないようなです。

（（うわあ。嫌な予感。））

このようにクレイズの本体とやらがここにあるってことはですね。それはつまり、と嫌でも読めてくると言っものです。

『あのですねー』

『うん』

『リユームの本体はどこでしょうかね？』

『うん。どうしよっかな？ただで教えるのも癪じゃまだなア』

『どうしると』

『うん。お礼をしてくれたら考えない事もない』

『・・・・・・お礼？』

『そうだよ！苦労してリユーム嬢の気配を探したんだよ！しかも魔物の結界をくぐり抜けてさ〜ちよつとは勞うらなってくれてもいいだろ？そう。ほっぺでいいからさ〜ちゆうつと』

イタズラっぽく笑いながら、とんとん、とクレイズは自分の頬を叩いて見せました。

『・・・クレイズにはこれで充分です』

拳。と拳を合わせて商人の証。それを頬に見舞ってやろうと思いません。

えい。と拳を突き出して見せました。調子に乗るなよと勢いつけ、届かないのでみぞおちを狙ってみました。

しかしそれも難無くかわされてしまい、勢い余ったリュームはそのまま。

そのまま引つ張られて、クレイズに身体を預ける格好になってしまいました。

助け起こされる気配もなく、がっちり両肩を固定されてしまいます。

すみません！調子に乗っていたのはリュームの方であります！

ニヤリと笑うクレイズに背中がぞわあ、と毛が逆立つかのような寒気が走ります。

『カワイイなあ！リューム嬢は・・・このままもう少し、独り占めしたいかも。大人しくキスされてくれない？』

『えええ！？な、何で、クレイズ？』

『何でって、かわいいから。リューム嬢だって、かわいいものには自然とこうしたくなるだろ？』

『そんな無茶苦茶な理由でご無体な！』

ん〜と唇を突き出されて、心底慌てました。両手を必死に突っ張ります。

『いや、いやっ！ご、ご領主様！！助けて！』

思わず口を付いて出た名に、リューム自身が驚いてしまいます。

クレイズも一瞬驚いた表情を見せましたが、すぐにまた余裕あふれる笑みを見せました。

ニンマリ、と表現するのが相應しいような。

『うん。そう。そういう気持ちからでいいから、大切にしてみなよ？見逃したり、無視を決め込んだりしないでさ』

『・・・クレイズ？』

ぱつとクレイズは手を放すと、両手を上げてひらつかせて見せています。

『さあてと、おぶざけはオシマイ。リユーム、いい加減戻ってやってくれないか？』

俺も姉さんに泣かれ続けて流石に途方に暮れているんだ。

まー正直リユームの自由だからさあ、無理強いするつもりは無いといえは無い。あるといえは、ある』

『どっちなんですか』

『どっちだつていいでしょ。君にとつてはしんどい現実に連れ帰るのは、荷が重いと云つちや重い。うん。

でもさー少しは届いたかな？皆が君の事、待ってる気持ちは』

『はい。びっくりしました。お声だけでしたがニーナにミゼル様・それに、ギウルミナ様にリハルド様、

おまけにご領主様まで！』

『”彼”はオマケかよ！はははは！笑うしかないな、ご領主様！はははは、可哀相に！そう。良かった。

だからこそ俺も、君にはやっぱり無理強いをしようと思う。このままここにいれば楽だつて俺も知ってる。

解ってるんだけど頼むよ。特に”彼”はこのままだと、間違いなく廃人まっしぐらだと思うから、戻ってやって？』

『”彼”！？廃人つて・・・そんな』

『シエンテラン家の剣（きん）の彼は飲まず食わず眠らず、ひたすら、同じくシエンテラン家の鞞（かぶと）の君の本体にへばりついてるよ。

もちろん、すべての業務は滞っているね。誰も近付けやしない。もちろん姉さんも』

リユームはその言葉に今度こそ強く頷いて見せました。

『戻ります。みな元へと戻らねばなりません！クレイズ、案内をお願いします』

”彼”のためというのもモチロンのこと、他の皆さんのためにも

やがてご領主様は唇を離すと、また同じように杯をあおります。それからまた、同じようにリユームに唇を重ねるのです。

(あ・・・水を？リユーム、に)
精神体だけのリユームですが、知らず知らずのうちに己の唇に手を当てておりました。

触れているのに、触れていない。かつて与えられた熱を思い出して、もどかしく感じてしまいます。

『あ、の！状態のリユームに”戻れ”って仰いましたか？あ・・・あ、あの！』

『うん。”あの”状態だからこそともいえる。このままじゃ、マズイって。早く、戻りなよ』

(あわわわわわあぁっ！！！？？あの、あの、あの状態のリユームにっ！)

口をぱくぱくさせながら、ただ指差します。

『うん、そう』とさも”他人事なんで。”という風にしか感じられないクレイズの胸元に掴みかかりました。

もう少し、リユームの背があつたならば、胸倉を迷わず掴んでいた事でしょう。

(こ、こっ、この！！)

『わ・・・あ。リユーム、いいの？見てみなよこのままだと食べられちゃうよ。』

黙って好きにさせとくなんて、本当は我慢なら無いんだろ？』

クレイズは両手で目を覆い隠してこそいますが、その隙間からこっそり覗いています。

『もちろんですとも！ちょっと、クレイズ！見ないで下さいよ！た、食べられ・られって、食べっ！？はい！？』

このままだと食べられる？何がどうなっているのでしょうか？リユームは怖くて確かめる気も起きません。

『俺は別にこのままでも、いい眺めだし構わないけどさ。抵抗して

みたら？』

振り返る勇気を下さい。そんなことも思いましたが、もっと決心しなければならぬ事があります。

それは。

『戻ります』

『うん』

『戻りますから。クレイズも戻ってください。私たちが覗き見るよ
うなマネ、しないで』

『はいよ』

息を飲むように、ひとつ。自分自身を納得させるために、ひとつ。
こくん、と頷いてから呟きます。

『戻ります』

決心が鈍らない内にと一歩を踏み出しました。

ご領主様の傍らに立ってみますが、彼はまるで気が付いちゃくれ
ません。

『ご領主様。リユームはここに。ここに、おりますよ？』

話しかけてみましたが、それすらも届きません。哀しくなるのは
何故でしょうか？

リユームこんなにお側にいるんで
すよ、ヴェインセイル様？

そつと伸ばした指先もすり抜けるだけでした。

そのまま彼の身体をすり抜けると、その腕に抱かれた『本体』に
倒れこむように重なります。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

クルシイ。。。息もそうですが、胸が苦しくてたまりません。

「……つ、う、や……！」

いや。

いやだ。

はなして。

そんな言葉を伝えようにも唇は隙間無く合わされて、後頭部はが
つちりと固定されたままと有っては不可能でした。

「んう！」

そんな嫌悪感も露わな悲鳴ごと飲み込まれて行くのみです。

つせい、ぜいと荒い呼吸を繰り返しながら、必死でその胸元を押
し返しますがびくともしません。

それがまた新たな焦りを呼ぶのです。

「……う、うあ、つや……だ！……やだ！や
……だああ！！ っげほっ、ごほっ、」

ぜっぜつと小刻みに体が揺れるたび、意識が遠のきます。

それでも。抗う気持ちは萎^なえたりもせず、抵抗を試みます。

「リユーム……リユーム？」

「や、だ」

「リユーム。リユーム、このばかめ。目覚めるのが遅い」

何度も名を呼ばれます。

何も答えることが出来ず、ただ拒絶の言葉だけを紡ぎます。

「や……あ・や、いや、いや」

既に胸元ははだけていて、夜の空気が冷たくさわっています。

それと同時にご領主様の大きな手も、リユームの首筋を支えてい
ました。

首筋だけではなく、そのはだけた胸元までを指先が探ります。

首と胸を撫でるように上下する指先は、だんだんと深くなりまし
た。

しかも、そのまま止まってしまいました。リユームのちよつど、
どくどく煩くはねる心臓の上で、です。

(嫌 っ！！)

リユームは身を固くして、僅かに身じろぎます。
ですが心臓を抑え付けるように、手のひらを押し当てられてしま
いました。

室内の空気の冷たさに反して、温かい体温。
そのせいか必要以上に手のひらを、熱く感じてしまう気がしまし
た。

いつもは冷たい手をしているくせに、何だっけ今日は熱いのです
か？

「この、ばか。いいから落ち着け。呼吸が乱れる」

「やだあ！いあ、いやあ、はなして、はなして！」

呼吸なんて。

乱れたままで

整わなくていい。

何故かそう思ってしまう。

だって胸が苦しいのです。

彼の触れるその場所が、ずしんと重みを訴えてくるのです。

それよりも呼吸が出来ない苦しさの方が、まだ耐えられます。

「いあ・・・いや、なの！きらい！きらい！いいっ！」

ぜつとまた呼吸が狭まりましたが、訴えは続けました。

胸を掻き^{かむし}ながら、咳と嗚咽とに苛^{さいな}まれながら訴え続けます。

サワラナイデ・サワラナイデ・サワラナイデ！

ただソレだけが願ひ。

「さ、わら・・・な・・・で！」

嫌だ。

どうしたって。

次の動きが予測できてしまうのは、体が覚えているからです。

『い・・・い、やあ・・・！やめてください、やめてください、お
ねがいだから！いや　！こわい、っあ、やだあ・・・』

そう、泣いて叫んで訴えた事あったのです。

今の

今まで

忘れて・・・というよりも封じ込んでいた記憶がある。

あの時をまた繰り返し返すのですか？

あのまま壊れたようになってしまったリユームに戻れと？

己の無力さを思い知り、悔し涙に明け暮れた日々に戻れって言うんですか！？

「リユーム、リユーム、リユーム・・・」

うわごとの様に狂おしいまでに繰り返される呼び名に、体の震えが増して行きます。

「目を開けて俺を見る、リユーム。そして名を呼べ」
「幾日も俺を無視し続けて、いい度胸だ。」
「相変わらずむちゃくちゃです、この人。」

「いや、やめて・・・」

「俺を見て名を呼べばやめてやる」

「ご、りょ、しゅさま。」

「違う」

グインセイル。

責めるように耳朶を噛まれて、そう囁かれました。囁きの割には力強すぎでしょう、その威力は！

「やめて、ヴィ、グイン、せい・・・んう！」

様という敬称は飲まれてしまいました。
うそつき。

そう、続けてやるうにもそれごとでした。

『かわいいと思っっているなら口付けたくなるだろ？自然と』

先ほどのふざけたクレイズの言葉が蘇りましたが、リユームは首を傾げるしかありません。

「いや。あのですね、リユーム一応さつきまで意識のない状態だったんですよね？」

それをこの方忘れちゃいませんか？

「いや……だって、ちよつとねえ？」

「苦しいんですけど？」

「ん、ん、……あ、ヴィ……うん」

「聞いて。」

「少し、聞いて下さい。」

「待つて……はくれませんか？」

そんな思いを込めて、のろのろと持ち上げた両腕で彼の項うなじに触れました。

なめらかな金の束に指を絡ませ、抱き寄せるようにしてみました。リユーム自身が……望んだからそうしてみました。

この痛みを覚えるほどに忙せわしい胸の鼓動も、少しは抑えがきくかも？という期待を込めて。

「……！」

「今度は強く抱き返されて、身体が軋きみます。」

「またしても上げられない悲鳴は、彼に飲み込まれていくようです。それでもまだ、この痛みの方がまだいい気がしました。」

「リユーム、このばか。目覚めるのが遅い……」

「あ……あ、……ごめなさい、……っんうー！」

受け止めた唇の感触に

やわらかさに

涙がこぼれ頬を伝います。

第二十六話 シェンテラン家の闇の中（後書き）

『やっとここまで』

最初の方ではった伏線・浮上やつとこさ〜

（そんないたいそんなものでもないですが）

そしてまた、何気に新たな伏線になりかねない展開。

リユームが矛盾の嵐、真っ只中にいます。

嫌とその反対の気持ちと同時に進行。

これ以上おあずけが長引かないといいね、領主。

リユーム次第ですかね〜？

小話は・また・すみません！

『そんなわけで7月16日 UPしました！小話』

こりもせず〜二十歳と十三歳編〜

ある日の出来事。

「リユーム、早く！こっちに来て。まったくもう、とろいんだから」

それはそれは嬉しそうな罵声は、ここの若様の親戚筋のお嬢さまことミゼルド様です。

「はい。ミゼル様」

対するワタクシめのお嬢さま事、リユーム様も嬉しそうです。

そこは救いだが、ちと不憫ふひんで泣けてきます。

少女は何だかんだでお姉さんなので、自分より下の子にはことさら優しいのだ。

いくら・・・トロ・・・もとい、のんびりしていても、普通だったらここまで虐げられたら嫌になるでしょう。

(オトモダチ、というものはね対等であらねばならないのだよ？ミゼルド様？)

ちら、とみゃればミゼル様は、思わずうっとりしちゃうくらいの極上の笑みを浮べている。お年は九歳。

そう。シエンテラン家の血筋を受け継いだ、それはそれは可愛らしくもお美しいお嬢さまです。

金の髪は木漏れ日に映え、緑の瞳は透明感があって、そりゃあ色白のお肌がきめ細やかで。

文句なしの美少女なんですけどね。ただし、黙っていればという注意書き付き。

「リユーム！早くって言うてるでしょう」

「はい、ミゼル様。もう少しお待ち下さいま・・・せ」

リユーム様の息は、すでもう上がっている。ここ最近体調が優れなかったから無理もない。

寝付いた分、体力が落ちているようなのだ。

「もう！遅いつ！早く出来ないのだったら、もうリユームとは遊んであげないんだから！」

大切に、ともすれば甘やかされてお育ちになっただけらしいミゼル様にしてみたら、自分の思い通りにならない事にガマンが出来ないのだ。

「ミゼル様・・・待って」

リユーム様は必死だ。それはもう、痛々しいくらい。

金の髪に緑の瞳。シエンテラン家の血筋の現われの証のような。

ミゼル様にまで嫌われたくはないらしい。

(嫌われてはおりませんよ。むしろ ねえ？)

全くもってこの家の方々の、愛情表現の明後日さには視線が遠くをさ迷うではないか。

ワタクシはリユーム様が転んだりしないよう、注意深くお側に付いているがけっして急がせはしなかった。

手を添えて背中を支えながら進む。

。。。。

目当ての中庭に着くなり、ミゼル様は勢い良く振り返った。

あまりに曇りのない笑顔は、何かしら嫌な予感を覚えさせますのに充分ですな。

（嬉しそう。うん。また、なんかイジワル思いついたんだろっな）。

ミゼルド様が先ほどから手にしていたリボンをリユーム様へとかざす。

「これを結んであげるから、後ろを向きなさいよ。リユーム！」

「まあ、ミゼル様。ありがとうございます」

「じつとして！動かないですよー！」

「は。。。い？え、ミゼルさま。何を？」

「動かないでって言うてるでしょうー！」

ミゼル様はリボンでリユーム様の両目を覆うことに忙しい。

小さな手つきは真剣だった。

（うーわ。。。ミゼル様。目隠しじつじつ、やる気ですねー。。。

やーめーてー！）

「出来た！」

「ミゼル様。見えません」

「そうよ。そうしたんだから！今度は立って。早く」

途惑うリユーム様を立たせると、ミゼル様は嬉しそうに両手を叩いた。

「リユーム！わたくしを捕まえてごらんなさい！捕まえられないなら、もうリユームとはつまらないから遊ばないわ」

（あ　もう！そう来ました？やっぱり？）

リユーム様はミゼル様の手拍子を頼りに、そろそろと慎重に一步を踏み出されていた。

両手を差し伸べて、ミゼル様の姿を求めている。

「ミゼル様、待って下さい。どこ、ですか？」

「こっちよ！本当にアンタってとろい子ね。ほらほら、こっちよ、こっちよ！」

「あ、待って。・・・っあ！」

リユーム様がつまづいた。倒れこむ前にワタクシめが慌てて支える。

「ニーナ！手出ししないで」

「ミゼル様。この遊びはリユーム様が転んでしまいますから、お止め下さい」

「嫌よ！ニーナの言う事なんか聞かないわ。せっかく結んだんだから、ニーナは邪魔しないで見ていなさい！」

（ではミゼル様はリユーム様を転ばせたいのですね？全く！もう・・・知りませんよ？）

ワタクシはため息と共に、リユーム様から手を放した。

「ニーナ・・・？？」

「リユーム！ほら・早く」

ミゼル様のはしゃいだ声に、リユーム様はまたゆっくりと進みだす。

また同じようにはやし立てながら。

『ワタクシを捕まえられないようなトロイ子何かともう遊んでやらないわ！』

くすくすと可愛らしい残酷な笑い声が響く。

「あっ！」

リユーム様の身体が再び、前に倒れる　のを、やたらとゆっくり感じた。黒髪が流れる様を黙って見守る。

。。。。

リユーム様が転んでしまう事は無かった。

当然だ。若様が素早く抱き上げて下さったのだから！

ワタクシがあっさり手を放した理由はここにある。

彼女の騎士ナイトが側に控えていたのだから、ワタクシの出る幕は無いと踏んでの事だ。

何。ミゼル様の背後でやたら怖いお顔で立つ、若様と目が合ったまででございます。

（ヴィンセイル様。あのですね、このわがまま嬢ちゃま何とかしておくんないまし！

ワタクシめの事は下賤げせんの者と認識してるので、はなから聞く耳持ちませんの。

ついでに言うならリューム様のことも、都合のいいおもちゃ扱いしちゃってて、ここの所目に余るんでよろしく願います）

そうなのだ。いくら幼い少女とは言え、権力だけはあるのだから困ったものだ。

一応ワタクシめも貴族の出なのだが、はっきり言ってこの家の足元にも及ばないからこの様なのだ。

それをいい事にミゼル様の歪んだ愛情表現はこの所勢いを増し、どこかの誰か様も顔負けのイジワルっぷりだった。

流石にこのままではよくないな、と思い始めていた。

若様もお気づきだったのだろう。だからこうして見守ってくれていたのだと思う。

だったら、取るべき行動はひとつ。

（頼みましたよ！若様！！）

権力をふりかざす子は、所詮自分より上の権力の者に弱いのだ。

そんな無言の訴えが、通じていたのかどうかはさておき。

リューム様は若様に、またしても『保護』されていた。

。。。。。。

リユーム様は目隠しされたままなので、何が何やらといったご様子だった。

言葉がなかなか出てこないのだろう。不安そうに唇をわななかせている。

そんなリユーム様を黙って見つめたまま抱えなおすと、若様はミゼル様を叱った。

「ミゼルド。オマエは当分の間、出入り禁止とする。もう少し家庭教師達にマナーを仕込まれてから来い。

オマエの事は両親にも報告しておこう。もちろん、この館の主人にも」

（うむ。それがいいです。お館様は、リユーム様をそりゃあ可愛がっておいでですからね）

「ヴィンセイルの横暴！わたくしがリユームで遊ぶんだから、返してよ」

「だったら人形とでも遊んでいる。リユームを人形と一緒にするな。いいからもう下がれ。ニーナ、見送れ！」

ぴしゃりと叱られ、ミゼル様は返して！と伸ばしていた腕を下ろした。

「ニーナ……」

「はいはい、ミゼル様。行きますよ。門までお送りしましょうね？」
泣きべそかいてる少女をさりげなく諫めつつ、門まで送ってあげました。

「ニーナ。どうしてミゼルだけが悪いの？」

「はい。それはよ　く、よお　く！ご自分でお考えになりませうよ、ニーナは申し上げたく思います」

「だって・ズルイわ！ヴィンセイル様だって、いつもリユームをいじめて遊んでいるじゃないのよ！

そのくせ、自分以外がリユームを構うと怒りだすなんて、なんつて勝手なのかしら」

「ミゼル様。どうか今の発言はこのニーナだけに留めおいて下さい

ね？」

くれぐれも！と念を押し、ミゼル様を送った後はお二人の元へと、
急ぎ駆けつけたのは言うまでもありません。

。。。。

様子を見に行ったらどうだったのかって？。。。うん。はい。

『二人いい感じに義兄妹らしくなってきたじゃない！』
等と思ったワタクシめが甘うございまして、とだけ申し上げてお
きましよう。

あああゝ本当にもう！

第二十七話 シェンテラン家の日の光（前書き）

『闇抜けてみればそこに差し込む日の光』

小話 8・8 UPです 後書きにしてください。

第二十七話 シェンテラン家の日の光

闇ふり払い給え

我らが光

そして迎える

数多の光

祝福されし

我らが光

優しい声が心地よく

リユームはうっとりとそのかすかな歌声に耳を澄ませて聞き入りました。

誰……？

眠たすぎて目が明きません。

それでも無理やり持ち上げた瞳に映ったのは、朝日を受けて輝く綺麗な金髪の女性でした。

寝台から少しだけ離れた椅子に腰掛けて、お膝には黒猫がまあるく収まっております。

（キレイな方。キレイな声。ああ、エキ！良かったね、あんた撫でてもらって気持ち良さそう。

エキはその歌が好きなんですものね。それはそうとエキ、大丈夫だったの？）

確かクレイズのせいで、エキは形状を保てなくなってしまったはずです。

声にならないまま、そう視線で訴えました。

エキは気がつかないようです。よほど心地よく眠たいのでしょうか。少しだけ視線を上に向けるとエキを撫でる手の持ち主に、にっこりと微笑み掛けられてリユームは驚いてしまいました。

優しい緑の瞳が、そのあまりに冷たすぎる印象からは遠すぎてすぐには思い当たりませんでした。

間違いなくご領主様と同じ色合いです。

雨に洗われたかのような、常緑樹の瞳。深い深い森の色彩に思わず息を飲みました。

(!?)

ミゼル様の、オトナの姿？

いえ、違い、ますね。

このお方、は　　もしや。

ヘンリエッタさま。

ご領主様の、おかあさま？

肖像画でしかお逢いした事はありませんが。

くす、と優しく笑うとヘンリエッタ様は、リユームを見つめ返してくれているようです。

絵画の中の完璧とも言える美貌はどこか冷たく感じられてしまい、幼心にも気おされたものでしたがどうやら違うようです。

(あの、あの？ヘンリエッタさまですか？ご領主様のお母様の?)

そう問いかけたくても声すら出せません。せいぜい視線を泳がせるくらいです。

それでも迷い無くひとつ頷き、にっこりと微笑んでくれるご様子から間違いないと判断していいものと思います。

(ご領主様！大変です、ちよつと起きた方がいいですよ、ヘンリエッタ様がいらっしゃってますよ!!)

多分、眠りの中でいらっしゃるであろうご領主様を目で探します。

様を横抱きにしておりましたよ！

なぜっ、このような事故が起きるのでしょわか。

(えーと、うーと、あーっと思いつい出せない！)

幸か不幸か　ご領主様は安らかな寝息を立てていらっしやいましたから、動こうにも動けません。

このまま彼が眠っていてくれれば、抜け出せるかもしれません。

ですが身じろいだ結果、起こしてしまい朝っぱらから望まない方向へは何としても避けたい展開です。

だって、そうでしょう!?

(うわ、もうどうしよう〜な、もう、近すぎでしょう!誰かあ!)

一人身悶えてしまいます。

だって。ご領主様の頭を抱える格好ですから、リユーム。ありえなくないですか？

ぜえはあと一人で騒いで、何とか落ち着きを取り戻す頃には少し余裕が出てきました。

落ち着けーとにかく、落ち着けー!と呪文を唱えながら、朝日に目を向けます。

(近すぎも何も。こうしたのはリユームではありませんか)

そう思い出していたたまれなくなりました。

彼とこれだけ密着していなかったら、手足をバタつかせて転がりまわるくらいはしていた事でしょう。

(昨晚は。昨晚は確か。ううううわあああああん!)

落ち着きましょう。そしてあんまり思い出してはいけません。

ぜえはあと慎重に呼吸を整えます。それしか方法がありませんんだ!

彼の目元につつすらと浮かぶクマに指先を這わせてみます。

クレイズの話だとリユームは五日間意識が無かったそうで、その間ご領主様はろくに休む事も無くずっとリユームの側に付きっ切りだったらしいです。

お疲れなのでしょう。顔色が少し青ざめているようにも見えます。

頬にも触れてみました。少し、ひんやりとしています。寒いのでしょうか？

何か掛けて上げれたらいいのですが、見当たりません。そもそも動けません。

そ、と身を寄せて、ご領主様の首筋を抱え込みました。

そうすることで自然と彼の額、前髪の生え際に唇を寄せる格好となります。

「……………」

どうしよう。声を掛けるべきか。否か。

(このままそっとしておきましょう。ええ。それがいいです、そうしましょう)

……………

確か昨晚は幾度も口付けられた、はず。

そのまま、ご領主様の方が先に意識を手放した、はず。

抗議の声も何もかも許されず、飲み込まれてしまうほどに幾度も深く。

ですが先に意識を手放したのは彼のほうでした。

(か・勝った！)

何となく意味もなく、勝利を感じてしまったリユームでございます。

五日間眠りっぱなしだったこの身体と、その間ろくに休息も取らずに付きっ切りだった身体。

どちらが意識を長く保てるかなんて、問われるまでもないでしょう。

勝ったの負けたののではない事くらい解っています、助かったという安堵と共にリユームも意識が途切れがちだったのは言うま

でもありません。

そりゃそうです。五日間ろくに何も口にしておらずその上、目が覚めたと同時にまた呼吸困難へと導かれたのですから。

（重い。うとう、勝ってないですね。今度は負けた気がして来ました）

彼の重みを受け止めつつ、何とか腕だけ這い出せました。

（ヴァインセイルさま？）

本体に戻る直前に見たご領主様にほだされた、とでもいいまじょうか。

まるでリユームの存在を確かめるみたいに名を呼ばれ続けて、髪をかき上げられて、身体を撫で上げられて。

幾度も幾度も幾度も。

それは狂おしく存在を求められたような気さえして、リユームはどうしていいかさっぱり解りませんでした。

狂気にも似た想いを寄せられた錯覚からただただ怯えて、リユームはなされるがままでした事を少し悔やみました。

まあ、声を掛けようにも唇はふさがれっぱなしでしたし、その上抱き返してあげたくとも両腕の自由を彼に奪われていては

なす術もございませんでした。

やがて彼はリユームの存在を確信したのか、ゆっくりと意識を手放されたのでした。

リユームの耳元を掠めるのは、彼の穏やかな寝息と判断しました。良かった良かった。ようやくと、安心してくれたみたいですよ、とリユームもほっとしました。

途端に再び襲い来る睡魔に、リユームは抵抗を試みました。

今はまだ、もう少しだけ意識を保たねばならないと思いましたが
ら。

（ヴァインセイルさま・・・聞いて下さい）

彼の意識がない事がいい事に、今はまだ戻ってくれませんかようにと祈りつつ腕に力を込めました。

ませんか？

そんな想いを込めて虚ろなまま、視線を何とか向けました。

「何だ？」

ゆるゆると指先だけを持ち上げます。それが精一杯でしたから。ご領主様はリユームが何がしたいのか、黙って見守って下さっているようです。

残念ながらリユームにも解りません。

そ、と屈んで顔を近づけて下さったご領主様の頬に、あご先にと指先を這わせました。

「何だ？どうした」

おひげ。少し。

昨日頬を寄せられた時、ちくちくするなーと思ったので何かな、と思ったのです。

それだけ、です。

「後で剃る。それともこのまま伸ばすか？」

何故かリユームに確認するように言われます。

お義父さまみたいにされるのですか？

想像も付きません。少し驚いて目を見張りました。

そのまま、指先を取られゆっくりと下ろされます。

手を包み込むように寝台に置かれ、まるでお返しとばかりに頭から頬を撫でられました。

大きな手に視界を塞がれてしまいます。

「リユーム。医師を呼んでくるから休め。昨晚の続きは後だ」

続き？続きなんてあるのですか？

そうは思いましたが聞き返す気力も無く、大人しくひとつ頷いて見せたのです。

第二十七話 シェンテラン家の日の光（後書き）

『小話は更新した内に入りませんかねえ？』

そんな調子でお久しぶりです。

目標、週一回更新も行けると思ったのですが、（七月の頭くらいに）

とんでもない！思い違いでしたよ！

何でだ！リユームだ！

この子の戸惑いに付き合ってるうちに、こりゃ全部書き直しだぞっとな。

ヴィンセイルはどんどん飢えたオオカミさんに仕上がりつつ・・・あつてはならないだろうと思いつつ。

オアズケ状態は続くのでした。

小話は、ま、また！後日でお許しを！

やっとなさUPです。八月八日にどうぞ！

『小話 第二十二話のこぼれ話、フィルガ・ジャスリート』

「俺は彼女とは。婚約に頷くしかない方向にもって行って、半ばご強引にこぎつけただけです。

彼女はおそらく本意ではなかったはずだ。今もただ負担でしかないと思っているフシがある。隙あらば解消しようとな」

「……………」

帳とけから祖母に追い出された若領主に向って、苦笑しつつ呟つぶやいてみる。

軽く目配せをして答えただけで、新しくこの地の領主に任命された男は黙ったままだ。

それでも俺は続けた。

沈黙が気詰まりだという理由からだけではなく、少しばかりリューム嬢に同情したからだ。

それとこのシェンテラン家の当主にも。

リューム嬢がまだまだ幼いのは、俺の目から見ても明らかだったから。

そこで突然「妻に」等と求婚されては途惑うばかりでしかなくなる。

” 義妹は病弱で公の場は体力的にも無理をさせるので辞退させたい”

の一点張りの理由など、とうに尋ねるまでも無い。

彼が間違いなくリューム嬢を『義妹』などとは思っていない。

リューム嬢を自分のものと信じて疑わないのだろう。

いや。信じるというよりも、それはもう彼の中では決定事項なのだろうとは思う。

(やれやれ。かつての俺のようではないですか)

契約によって呼び出したのは俺だから、彼女は俺のもの以外の何者でもない。

あの時は本気でそう思っていた。

相手の気持ちや思いやる事もせず、強引に自分のいいようになって当たり前と振舞った。

その代償は後々まで引きずる。その確信は苦い経験上、間違い無いと言っている。

それを見せ付けるためだろう、この家の家宝を身に付けさせて広

間に誘^{こゝろな}つた。

それが何を意味するのかくらい客人の目にも明らかだ。今日の招待客の漏らした感嘆の声の七割以上は、悲嘆の込められたものと判断を付けていいと思う。

この若き領主がそろそろ身を固める頃合だろうと、気合の入ったご令嬢達の視線が一気にリユーム嬢に注がれていた。

それだけではない。

初めて華やかな場に現れたリユーム嬢に、これを機会とばかりに近付こうという男性達の視線も加わってとあつては、自然と彼女の手を取る彼の雰囲気も威嚇するものとなる。

嫉妬と羨望を一身に向けられ、しかも傍らには怒気はらんだ気配なれぬ場でこうも注目されてはひとたまりも無かるう。

実際、リユーム嬢は今にも泣き出しそうに見えた。足元もふら付きおぼつかず、視線は不安からか惑い、揺れていた。

そんな彼女に我が物顔で付き従うのは、この家の主人。

ああ・・・そうか。お二人はそういうことか。

耳に届かずとも広間に集った者の言葉はソレに尽きる。

解っていないのはリユーム嬢ただ一人くらいだったろう。

それを承知の上で話を進めようとする彼に、祖母も俺も苦い笑みを浮べるほかは無い。

『そうですね。このフィルガ・ジャスリートの妻になって行く行くは公爵夫人の座におさまりたくはありませんか？』

思い出してみても、今の自分ならばあの時の自分を殴つてでも止めたいと思う。

今は婚約者、その頃はほぼ初対面の少女の表情が悲しそうに歪んだのを残酷なまでに愉快だと思った。

どれほど詫びても詫び足りない。

かつての自分の愚拳を省みているからこそその、生意気ながらも進言のつもりだった。余計なお世話と知りつつ。

後で必ず、彼女の気持ちを無視して突っ走った事を悔いる事になると思うからだ。

「無礼を承知で俺の意見を言わせて下さい。どうか女性には時間を掛けてあげた方がいい。ゆっくりと、焦らずに。

必ず受け止めてくれる日が来ますから。祖母は何も悪いようにはしませんよ」

「ご進言、感謝する」

ぼつ、と一言だけ返った答えはいくらか落ち着いたもののように聞こえて、俺は少しばかり安堵した。

” ” あの！あの、若造！！いや、ばか造がああああ！！！！”

「ダグレス」

何事だ。そんな非難を込めて名を呼んだが、無視された。

いつもの事だが、今回ばかりはいただけない。

館内の者は寝静まっている時分であり、大きな物音を立てられては困る身とあっては特に非難したい。

何せ一時ばかりと忍んで帰宅し、腕の中には俺の婚約者を抱えているという状況だ。

ほんの半刻前に彼女を訪れたばかりで、夜はこれから。 。
という時にこの獣。今日こそ決着をつけるべきだろうか。

「まあ！ダグレスも帰ってきてくれたの？でも、どうしたの。何をそんなに怒っているのかしら？」

するりといともたやすく抜け出すと、彼女は勇み足のダグレスに駆け寄ってしまった。

俺の婚約者は無情にも、いつだって獣の味方なのだからやるせなさは募る一方だ。

俺の両手はため息と共に空を切る。

” 嬢様！今日は嬢様に相応しい遊び相手を見繕うて参ったのですが、その娘に無体を働く輩がおりまして。

ルゼにもその娘の力になってやれと言われて付き添っていたのですが、その若造は独占欲の塊！

我を無体にも追い払いおって、娘を泣かせただけでは済まず、気を失わせたのです。

ですがその若造ですが一応はルゼの懐ふところがたな 刀になる男ということで、下出に出るより他無かったのでございます！”

「まあ！大変です。そのコは大丈夫なのでしょうか？フィルガ殿。今の話は本当ですか？」

” ” というわけだフィルガ。リユーム嬢はジャスリート家で保護ふびんしろ。不憫だ”

まんまとダグレスは彼女の腕の中に納まり、大きな身体で甘えながら俺を見上げた。

「大丈夫ですよ、ディーナ。彼はそのコの義兄ですからね。危害は加えたりしませんよ。

それよりもダグレス。おまえがまた要らぬ事でもしでかして、ヴィンセイル殿を挑発したのだろう？」

” ”

黒い獣は答えない。凶星なのだろう。それが答えと言う事か。

(ああ、もう。ヴィンセイル殿も・・・やれやれ)

誰も彼も人の話しなんぞは、聞く耳すら持たないといった所なの
だろうか。

第二十八話 シェンテラン家で流行る熱病の兆し（前書き）

『後悔とはまさにこれね。』

そんな調子の二十八話でございます。

『小話 どんどん溝が深まっていく義兄妹編。』 8月17日UP

第二十八話 シェンテラン家で流行る熱病の兆し

サワヤカナ朝の陽射しが室内を明るく照らします。

みなさま、おはようございます〜と、いつも心の中でも挨拶するリュームです。

もちろん家人に会ったらちゃんと口に出しますよ。

「おはようございます。ご、りよ、うしゅ・サマ」

「なかなか熱が下がりきらないな」

そ、そのようでございますね。

大きな手のひらを額に当て込まれては、朝日も遮られます。

リュームは視線を泳がせながら曖昧に頷いて見せました。

「別にこれくらいいたいたことではありませんので、そのそろそろお暇おひやすしようございま・・・っ！」

なぜか黙れと物語る瞳に睨にらまれました。すかさず逸はなりましたとも。ええ。

（くっ・またこの眼力に負けてしまいました！対抗しようにもこの体力の落ち込みように、頼みの綱の気力もままなりません！）

リュームは悔しさのあまり掛け布を握りしめます。

さつさと熱を下げて、いえ例え下がらなくても、リュームはこのご領主様のお部屋から速やかに下がりとうございます！

切実とは正にそれ。

『熱あつが下がったら』

下がりました！確実に、昨日よりも身体が楽に呼吸が出来ます。

かつて常に熱を出していたこの病弱リュームは、己の身体の高熱度合いがわかるんですよ。

そんな風に自信満々で訴えましたところ、今度は『熱あつが ちゃんと 下がりましたらな』に言い換えられてしまいました。

何せ、そんなやり取りも何回目かすら覚えちゃおりません。
いい加減しつこいくらい訴えていると言つのに、思いのほかご領
主様は短気を起こしたりもせず、むしろ根気良く言い聞かせようと
するのです。

おかしい。おかしいですよ！

だってですね今まではリユームが熱でも出して寝込もうものなら
デスネ、すかさず見舞いだと言つて訪れては枕元で小言を並べ立て
て、ニーナ達に追い出されるといふそんな七年間は一体どうしたつ
ていふのでしょうか？

「熱が下がりがきつたらな」

「ごりよしゆさま、ですが、ずっと下がらなかつたらどうするので
すか？」

「その時は」

「そ・その時は？」

「その時だ」

「そんな」

「なんだ」

「お言葉ですが。ご領主様のお側にいる限り、この微熱は下がらな
いものと思います」

一瞬、ご領主様が心底驚いたように目を見開かれました。

な、なんですか！？またご無礼だったから怒らせましたか？

だって当たり前じゃないですか！

リユーム、ご領主様のお部屋のお部屋のしかも寝台に寝かしつけられてい
るって、おかしいですよね！？

緊張しすぎて熱が出ているに決まっているではありませんか。

しかも、いつの間にか目が覚めると一緒に寝ているって何事だし
ょうか！？

どうにかなってしまいそうではないですか！！

す、と大きな手のひらが左耳に添えられて、またびくついてしまいました。

その様子をじっと見守ってから、もう片方も同じように手が添えられます。

強張ったかのように見えた瞳も、その次には柔らかさを宿してリユームを覗き込んでおりました。

「俺もだ」

「えええ？た、大変です、リユームの病がもしかしたらうつったのでしょうか？熱があるのですか？」

寝台に上体だけを起こしたりリユームと目線を合わせたご領主様の額に、思わず手のひらを当て込んでしまいました。

横に流された前髪を無遠慮にかき上げて、ぴったりと。

「う！熱いですよ！」

「おまえの手の方が熱いからだろう」

「言われてみれば、そうですね。それもそうかもしれません」

ご領主様にくっ付けているのとは反対の左手を、自分の額に当ててみました。

どちらも同じように熱を帯びています。確かにこれでは人様の熱など計りようがありません。

本気で不安になります。もうどれくらい経つのでしょうかと、時間感覚すらもはや麻痺している模様。

さて。どうしたものでしょうか、と途方にくれるばかりしか能の無いリユームです。

（困ったな。エキもご領主様のお部屋から出るまでは『やや病弱』でいた方が

身のためだよって言って『人並みの体力』には及ばないんですよ

ね)

クレイズが魔物と称したにも関わらず、リユームはエキと契約続行中です。

別にどうってことはありませんから。

エキの好きな歌をうたう。そのお礼としてリユーム、つかの間の健康を謳歌する。

そんな後ろ暗さ皆無の間柄にナゼ終止符を打たねばなりませんかと今ならクレイズを問い詰めたいくらいです。

(エキに後で相談してみしよう)

取りあえずは気を取り直して、この眼前のお方。この方の説得に当たりましょう。

「あの、いつまでもここにおじゃましては、そのご迷惑でしょうし。その」

「オマエから言い出したことだ」

「はい！？記憶に全くございませんが！？」

「……………」

ご領主様が無言で引き出しから取り出しましたのは、小さく折りたたまれた紙でした。

その見覚えある紙に、嫌な予感がしたのは言うまでもありません。

【この次行き倒れたりしたら カラス娘の寢床は好きな場所にしていただいて結構です。 ジ・リユーム・タラヴァイエ】

この次行き倒れたりしたら。

この次……この、次。

「!？」

「そうだ」

こともあろうに敵の根城で行き倒れたわたくし、リユームでございますとよ！

「何も泣く事はないだろう」

呆れたような眩きもどこか遠くに感じながら、リユームはその場で突っ伏して悔し涙を流したのでした。

こんなものとして置かないで下さいよ!!

リユームなんてご領主様からの手紙びっぴりに破いて捨てて！いえ。そうしてやりたいのはヤマヤマでしたが、そんな勇氣は無かったから同じくしまい込んでますけど。

「だからと言って何だって”好きな場所”がこのお部屋になるのでしょうか？ワタクシとしてはどうぞこのようなお荷物、どこぞにでも放り出して頂いて結構ですという意味合いを込めたつもりなのですが」

かつて自分が書いた手紙とご領主様とを代わる代わる見比べながら、首を捻りました。

人並みの体力を手に入れたリユームは、もうご領主様を煩わせる事ありませんし、もうこれ以上迷惑を掛けたくもありません。

それはこの七年間切実に願いつけてきた事なのです。

例の義兄妹バトル後、不覚にも倒れた（とは認めていませんが）リユームの意地の現われがこの一文なのですが。

あれは眠たくて眠り込んでしまっただけですから！

と言い張りましたら『屁理屈をこねるな』と一喝されてでこっぱちをぺしんとひとつやられちゃいましたとも！ええ！

それはそうと。

何をどうしたのか、どうかして曲がって伝わったのかが知りとうございますね。

そんな疑問を素直に口にしたらとたん、ご領主様から盛大なため息をつかれましたよ。

今までの心の底から思い切り見下げ果てた、馬鹿にするものとはまたちと趣の違うような気がしないでもないですが。

な、なんでしょうね？バカな子を見ると言うよりは、その憐れみを浮べたような眼差しは!?

「ご領主様は無言で背を向けると、腕組まれて何やらしばらく考え込まれているご様子です。」

小さく、おちつけと呟かれたような？

何ですか。それ。新しい出方ですね。

リユームはやや緊張しながらその背を見つめて身構えます。

たっぷりと時間を置いてからご領主様が振り返られた頃には、すっかり気も抜けていましたけれど。

「リユーム。おまえはいくつになった？確か十八を数えたはずだない？」

「はい？そうですけどけれど、それが何か？」

きょとんとしてしまいます。その質問の脈絡の無さに、ますます首を捻るばかりなのですが。

「リユーム、早く良くなれ。それまでは待つてやる。また発作でも起こされたらこちらの心臓が持たないからな」

「発作起こすと？なぜでしょう？」

発作。この間は派手に胸が痛みましたからね。あんなのは久しぶりで驚きました。

思わず胸元を押さえると、かしやらん、と柘榴石の首飾りが音を立てました。

そうなのです。未だにこれはリユームの胸元にあるのです。

思い切り部屋着なのに、この豪華絢爛なザク口様。不釣合いな事この上ありません。

相変わらず外れないのです。

いい加減外して下さいと訴え続けてはいるのですが、返る言葉はいつも一緒です。

「早く俺のものになれ。そうすればその首飾りも外れる」

言いながらリユームの顎を持ち上げて、瞳を覗きこまれるのです。

最初は驚いて目をそらしてしまいましたが、最近は少し慣れたのかその眼差しを真っ直ぐに受け止めます。

何となく潤んで熱を帯びたかのように見える瞳に戸惑いを覚えるのです。

やはりご領主様も熱病の兆きざししなのではと尋ねるのですが、その答えはいつも曖昧なのでわかりません。

「とうにリユームはご領主様の持ち物かと思えますが？」

何を今さらそんなこと仰るのがまたわかりません。

そんなの改めて言われるまでもないですよ？

だって、ご領主様に何もかも頼りきって生きているんですもの。

ですから、彼がその気にさえなればいつだって、リユームの存在などはいともたやすく　ねえ？

相変らず何でしょうかねその、バカな子を見つめるかのような哀れんだ瞳は。その意味は。

まったく会話が噛みあつちやいないのは、リユームとて読めますともよ！場の空気ぐらい！

身の危険を感じます。

彼が距離を縮めたのを気配で感じ取ると、身がすくみます。

そのまま恐怖で固まってしまいうルームの頬に唇が押し付けられるのです。

「俺は仕事に行ってくる。オマエはちゃんと養生している」

そう告げてからご領主様は執務室に向われるのが、ここ最近の朝の日課と言つか儀式と言つか・・・です。

「はい。いつてらっしゃいませ」

小さく頷いてそう答えます。

声も裏返って今にも消え去りたい気分になりながら、そう答えるのがせいぜいのリユームでございますとも！

「いつてくる」

「っあ、」

油断しました。いつもならそれで解放されるのですが、耳朵を噛

まれてしまいました。うう。

『あの夜の続きがまだだからな』

そんな風に囁きこまれ、耳を押さえながらご領主様を見送った次第でゴザイマス。

そ、そうか。

腹ペコ狼さんは 元気になったら すかさず いただきます、と行く気なんですね!?

リユーム、食べられる所だったのを忘れちゃなりません。

(それはそうと、食べる? 食べられるって?)

確かに。思い出してみてもまさに『食べられるかと思った』と表現するに相応しい行いの数々に、こうしちゃいられませんと立ち上がろうとしました。

逃げるが勝ち、って寸法です。

そのまま寝台から転がり落ちたからと言って、諦めてなるもののリユームでございますともよ!

派手に落ちて、したたかに打ち据えなかっただけでも良しとしましよう。

これだから寝込むのは厄介なのです。

すぐさま意識が戻り次第に、多少無理をしても寝台から起き上がるのが正しい対処方なのですよ。

そうなのです。寝込んだ分に比例して、それだけ足腰は弱っているんで油断なりません。

ご領主様は寝込んだこと無いから解らないと思いますが、リユームの経験上そうなのですとお伝えしようゴザイマス。

(うう・・・せっかく地道に培ってきた人並みの体力が、ふりだしに戻っちゃってますよ! って、まさか、それが狙いですか!?)

ああ、もう! これだから体調が悪い時の思考は、ろくな方を向い

ちやいないのです。

いやいや、待て待て。リ्यूムよ、その思考は待て。断ち切れ！とばかりに床に這いつくばったまま、顔を上げました。

寝台の下に光る何かが目を引きました。

なんでしようかと手を伸ばして探ります。

爪先にこつ、と小さく当たったそれを指先でつまみました。

（キレイなカケラ。どこかで見たような？ええ　　と・・・これは、もしかしたらダグレスの！）

右に左に持ち上げてみて思い出しました。

この日の光を受けてさえ、闇色の輝き放つコレはダグレスの角の一部分のように思います。

ご領主様ときたらこともあろうに公爵様から賜った剣で、公爵家に仕えているという獣様をいなしただけでした！

（ダグレス・・・角が欠けてしまったのでしょうか。心配です。あれからどうなったのでしょうか？）

リ्यूムは自分の事にかかずらってすっかり大事な事を忘れていた事を悔やみました。

ご領主様が帰ってきたら確かめたいと思います。

そんな事を考えながら、部屋の中をうろつき回りました。

それだけで身体がだるく、息も既に上がり気味なのが気になりませんが無視です。

これは相当体力が落ち込んだ模様。確かにこのまま逃亡を図っても館内行き倒れとなるのは間違い無さそうです。

そんなの恒例化してなるものですか。歯を食いしばって部屋をうろつきまわります。

せめてあと二十周はがんばりたいと思います！室内ですけど。

そんな調子で性懲りも無く体力を使い果たしたリ्यूムが、ご領主様を待っていられるわけも無く。

だからといってこのまま横になるのもためらわれます。ですから
せめてと椅子に腰掛けて待つことにしたのでした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。

くすぐりたい。

首筋と頬の辺りを舐められたようです。

小さく遠慮がちに肌を滑るのは、きつとあの「コ」でしょう。

「んん・・・くすぐりたいよ、エキ・・・」

「エキ、とは誰の名だ？」

「うん、エキ?どこ?」

「違う」

苛立ったを通り越し、殺気だった声に意識は一気に浮上です。

第二十八話 シェンテラン家で流行る熱病の兆し（後書き）

『微熱は下がらないものと』

すごい、殺し文句。素で魔性。

さすが魔物とへっちらで渡り合っ子です、りゅ〜〜む！
君さあ。うん。

『早く俺のものに』

くどき文句、しかも直接的なのを連呼するヴィンセイル。

逆にあからさますぎて、上滑ってる模様ですよ。

さすがリユームには浸透しない。今までの生活環境で誰も彼女に
教えてないし。

と誰か教えてやった方がいいって。

どこまでもかみ合わないまま、平行線の二人。

狼も（今まさに・いただきます！しようとしている）

目の前のウサギがあまりに何もわかつちやいないので（狼が自分
を食べると思っていない）

取り合えず前脚で転がしてみる。ころころ。

さて。次回予告と言う名のネタバレ。

『誰かさんは必死でお花を贈ってるって話』

小話はまたお待ち下さい

『小話』 8月17日 UP どんどん溝が深まっていく義兄妹編。

俺にも見せてみる、とそんなに大いばりで言われたら、見せない訳にも行きますまいに。

その日リユーム様とワタクシは将来ただ一人から貰うであろう、指輪の話で盛りあがっていた。

リユーム様から何だか嬉しそうに呼び止められて、何でしょうかとそこで立ち話になったのだ。

「ニーナ、あのね。リユーム指輪もらったの！初めて」

「あら。それは嬉しいですね、リユーム様。それを見せに来てくれたのですか？」

「うん！」

少女が大事そうに合わせていた手のひらをそつと開くと、中から華奢な金の指輪が顔を出す。

（これは結婚指輪？）

「ニーナが触ってみてもいいものなのですか、リユーム様？」

「もちろんです、ニーナ」

誇らしげに少女が差し出す。

そつと指先でつまみ傾けて見る。その内側に彫られた文字にそれは確信に代わる。

『この胸の愛を捧ぐ シザール・タラヴァイエ』

リユーム様のお父様の名前だ。と言う事はこれはリユーム様のお母様の物のはず。

そんな風を感じた疑問に、少女が順を追って話し始めた。

「お母様はお義父様からいただいた指輪があるからって、これはリユームに持っていて欲しいのですって」

少し寂しそうに、でも嬉しそうに少女は独り言のように呟いた。

「そうでしたか。ではリユーム様、お返しいたしますね。大切なものを見せて下さってありがとうございます」

「どうぞ致しまして、ニーナ」

いたずらっぽく笑いながら、いつか迎えるであろう少女の晴れ姿を思い描きながら指輪を差し出した。

その時ふつとイタズラ心が沸き起こり、少女の指を取った。

儀式の時さながら、はめて差し上げようと思ったのだ。

リユーム様もその意図に気が付いたのだろう。嬉しそうに、くすぐったそうに笑った。

その様子をいつから見られていたのかなんて、知らない。だが、ほとんどずっと見ていたのだろうなと思えない。

その抜群の瞬間に現れる彼のお人は！

いきなり現れた若様にいいところを邪魔されたワタクシでございます。

ちっ！

「かえして、かえして！」

「ふん。ほら。」

「!?!」

言うなり振りかぶった若様に嫌な予感。

うっわ。

勘弁！

指輪はおもいきり良く（良すぎだ、こんにやる）見事に弧を描いて茂みに飛び込んでったよ、しかも遠っ！！

止める間もなかったよ、本当にほかんとするしかないよ。

何て見事な腕力ですか。そんな物ここぞとばかりに披露するとは何事ですか。大人気ない。

若様よ！！

思わず言葉も無く見送ってしまったではあり、ませんかよ！

おい、いくつになったアンタあ！！？

確か成人の儀式済ましたよな！？この間！

呆れ具合も極限に達し、既に怒りにまで変っているワタクシめの思考は荒れ模様でゴザイマス！

「何だ。返してやったるう？」

それは返したとはいえない。少女の手に収まってはいないのだから。

ああゝ・・・もう！

どうしたもんかねえ、と頭が大きくかしましたよ、ワタクシ。

それさあゝ

本当にもあゝ

年端もいかない少年がさゝ

気になって！

気になって！！

気になって！！！！

しょうがない女の子にするのと一緒だからさあゝ

リユーム様、とお慰めするよりも速く、少女はものすごい勢いで駆け出して行ったよ、オーイ、勘弁してください！

今、雨が降っていますよ！！しかも結構いい降りですよ！

「！！！！？」

コレには二度目のビックリでしたよ。

若様も呆気にとられているよ。

「おとーさま！おとーさま、ごめんなさい、おとーさま！どこですか？」

半狂乱で泣き叫ぶ少女に声が出ませんだ。

こんなに悲痛な叫びは初めて聞いたよ。しかも常は穏やかな少女から、予想だにしない深い悲しみ溢れる声に耳を塞ぎたくなった。

この子は多分・・・未だに癒される事の無い傷を抱えたままなんだ、とそう思い知らされた。

明らかにやりすぎだよ、若様よ！

固まる若様を思わず一睨みしてから、ワタクシめも駆け出しておりました。

「リユーム！」

騒ぎを聞きつけたらしい奥方様もやっていらっしやった。

お急ぎになったのだろう。呼吸が乱れたままの様子で叫ばれた。

「おかー様、おとー様が、おとー様の形見が・・・」

「リユーム！いいから戻りなさい！そんなものに未練を残してはなりません。おとう様は私たちを置いて、先に旅立ってしまったのよ？そんな方に未練など。いつまでも抱くものではありません」

「おかー様・・・だって」

「黙りなさい！今私たちがお世話になっているのは誰ですか、リユーム！」

「・・・・・・・・・・」

「早く戻りなさい！そして非礼をお詫びするのよ、今すぐ。早く！アナタがそこにいる限り、二ーナだって雨に当たるのよ？」

少女ははっとしたらしく、体を強張らせた。

そうして見上げた頬には明らかに雨とは違う雫が伝っている。

「ごめんなさい、ニーナ。濡れちゃったね。ごめ、なさい」

「ニーナは大丈夫ですよ。さ、リユーム様。戻りましょう。雨が止んだら一緒に探しましょう？ね？」

うん、と少女は頷いた。だが、全く納得しちやいないは見れば明らかだった。

若様は若様で何も仰らず、ただ奥方様のお詫びを受けていた。それを横目に通り過ぎる。

(若様もなあ。まあ、『初めて』と言えば『初めて』なのかな『恋』？ あああああ！もおおおおお！)

リユーム様はその横を通るとき、小さく申し訳ございませんでしたと頭を下げた。

若様は何も仰らない。

リユーム様の視線は茂みを見据えたまま動かない。手を放したら確実にまた飛び出すだろう。

そんなか細い身体を引きずるようにして、お部屋にお連れした。

その間リユーム様は大人しくされるがままで、一言も発されないのが痛々しかった。

その晩中雨は止む事はなかった。

そして明け方。

庭師がすっかり冷たくなっただま、動けないリユーム様を発見したのだった。

第二十九話 シェンテラン家の主の部屋（前書き）

「わたしにふねて」。

第二十九話 シェンテラン家の主の部屋

「エキじゃないの?」

「だからエキとは誰かと聞いている!」

久しぶりに殺気を孕んだ声で怒鳴られました。しかも耳元と言つてもいいくらい、間近で。

「うえ・・・つく」

ひくつと喉がひきつれてしまい、それっきり上手く呼吸も言葉も続ける事が出来ません。

怖い。やっぱりご領主様は怖い。怒らせた。嫌われるような事をまた、無意識のままやってしまったんだ。

だいぶこの方に慣れてきたとはいえ、このように寝起きですとやはり思考は最悪です。

怖い。もう嫌。いつ怒るか解らないご領主様のお側にいるの、嫌怖い。

囚われる恐怖感に今さらながら押し潰されそうになります。

「リユーム」

「エキ、どこ?エキい」

「じゃ・・・ん!」

鳴き声がしました。とても可愛らしい甘い声はエキのものです。

気が付けばまたご領主様に抱きすくめられておりました。

彼の腕がリユームの背に回さているのは、呼吸は狭まりますに決まっていますでしょうか?

その上後頭部を押さえつけられる形で彼の肩に顔を固定されては、なおの事!

苦しくてもがけばもがくほど彼の腕の拘束力は増すばかり。

足掻きようも無いまま空気を求めて喘ぐ始末。

それが発作につながるんですよ、ご領主様。

「そ、そんな、何故に、嫌がらせ反対でございます！」
「リユーム」

苦しそうに絞り出すかのような声で名を呼ばれます。うわ、と思
いました。

背筋が何かぞわぞわします。

それは這い上がってくる恐怖と言つものでしょうか。その正体は

「放したら何をしてくれる？」

「え。取引ですか。見返りを要求ですか。何が欲しいのですか？」

「リユーム、」

「あ！そうだ！エキを紹介してあげます。抱っこもさせてあげます
よ。かわいいですよ、エキ」

おしゃべりも出来る魔物ですけど。そこは伏せておきましょう。

またでこっぱちを叩かれるのは目に見えて明らかですから。

それでも、リユームは張り切つてエキを呼びました。

ちちち、ちちちちつと舌を短く鳴らして呼ぶ、独特の方法で。

唇をすぼめて舌先を丸めるので、何気に頬の方まで引きつります。

そんな所の筋肉までが衰えていますか、リユームよ？と感じつつ
呼び続けます。

あのツヤツヤ毛並は最高に素敵ですから、一回は撫でてみられた
方がいいです。ぜひ！

にゃあ　ん！にゃあ、にゃ　ん！

エキが答えてくれます。

一向に緩まない腕の中、視線を窓辺に向けました。

どうやらその窓枠付近にいるらしいエキの、黒い尻尾の先だけが
揺れています。

「じりよう、しゅさま、エキが答えてくれますよ。エキは、真っ
黒の猫なので・・・す」

説明しながら弾んでいた語尾が、小さくなってしまいました。

真つ黒の毛並。それは艶光りする良き手触りなのです。

しかしそれすらもご領主様にしてみれば厭いとわしいものはず。
リユームと同じカラス色とあれば。

ギユルミナ様に目を背けられた事を思い出して、俯うついてしまいま
す。

背けられてしまうのなんて見たくはありませんから、リユームは
初対面の誰かと会うのは怖くもあります。

だからと言ってずっと苛いら立つた視線に晒さらされるのも苦しいですが。
「カラス猫か」

「う、はい」

ぼつりと漏らされた呟つぶきに身体に緊張が走ります。

リユームはエキを呼ぶのを止めました。

彼に縋すがっていた腕からも力が抜け、だらんと投げ出します。

「カラス猫です」

「そうか。オマエに懐なついているのだな」

「はい」

「俺には多分、懐なつかないと思うから呼ばなくていい」

「そんな事はないと思いますけど？ぶつたり、大きな声を出したり、
無理やり抱かかつこさえしなければ」

エキが嫌きらう三大要素です。

撫なでようと手を伸ばすと耳を伏せて身構みかまえてしまうようなので、
慎重に手をかざしましょう。

あと必要以上に肉球をふにふに押し過ぎたり、耳を突ついたり、顔
をにぎにぎ三角などと歌いながら両手ではさみ過ぎたり、口付けの
雨を降ふらせすぎたりしなければ。

それら全部を、余すことなくやっているのはリユームではありません
せんか？

「そういえば!？」

(懐なつかれていないのはリユームの方ではないですか!?)

「どつした？」

「いえ。リユームもたいして懐かれていないだろうな、と思い当たった次第です」

ふん、わけがわからんなどご領主様は呟いてから、リユームの後頭部を撫でられました。

「俺はカラス系統には疎まれているからな。それに俺には既にカラス娘がいる」

最初は表面を撫でるだけだった手のひらが、徐々に力強さを増して行きます。

指先が髪をかき上げるようになり、リユームの項を這い再び押さえつけられるかのように固定されてしまいました。

「そうですか。やはりカラスに属する毛並は、ご領主様の目には厭いとわしく映るのですね」

カラスはリユームだけで充分と。そう仰りたいのですね。

「だから何故そういう事になるのだ？その特殊発想思考はどうにかならんのか？」

「違うのですか？それこそ何故そうなるのですか？」

驚いて目を見開き、彼の不機嫌そうな瞳を見上げました。

それはエキと同じ緑の眼。

「わかるまで解放してやらん」

「!？」

だとしたら一生このままですよ。

(もう嫌。もう、いいや。好きにシテクダサイですよ)

そんな絶望感にも馴染んだこの身は、そんな投げやり思考でもありません。

「わかりましたから解放願います」

「何をどうわかったか言ってみる。その特殊思考の導き出した答えを」

「うう。シエンテラン家にカラスと名の付くものは、リユームとい

「う一羽で充分？」

「そうだが」

「やはりそうですか。それは申し訳ございません」

「だから何故そこで詫びが入る？それと。このシエンテラン家ではなく、俺には一羽で充分と言っているのだ」

「そうですね。こんなのが二羽も三羽もいたら困りますよね。いつもご迷惑をお掛けして申し訳ございません」

「ああ。俺にとってのカラスは一羽で充分だ。よく覚えておけ」

「一羽ですら手に余るとそう仰っているのですね、わかりました」

「リユーム。何か否定的な受け取り方をしているな？オマエは」

「否定的、とは？」

一向に嘯みあわない会話に苛立たれたらしいご領主様に、またしても盛大にため息をつかれてしまいました。

これ以上、会話を続けてもらちが明かないと思われたようです。

「俺がリユームを否定していると言いたいのだろう。俺に言わせてみればオマエが俺を否定していると言いたいがな」

俺の自業自得と言えばそれまでだが、とご領主様は苦しげな笑みを浮かべられました。

それが何とも言えず自虐的なものだったので、驚いてしまいます。

「え！？だってそうですよ？初めてお会いした時から、七年間ずっと」

「何故、今この状況でそう言えるのか教えてくれ」

「こ、の・・・状況」

彼の腕の中に閉じ込められている、この身動き取れませんか状況を何とするか。

髪を撫でられ瞳を覗きこまれる、この体勢が意味するところとは？

ぱちぱちと忙しくなくまばたきする間も、ご領主様には苛立たしいのを見て取れます。

そうなつてくると蘇るのは彼のかつての言葉ばかりであります。
それが浮かんでは、再び胸を抉りました。

『俺を間違つてでも義兄とは呼ぶな』

『オマエのような小娘を例え義理だとしても妹とは認めない』

『ジ・リユーム・タラヴァイエ。このカラスが』

抉ります。

いつもタラヴァイエ家のカラスなど、シエンテラン家の一員とは認めないとはつきり口にされてきましたよね。この七年。

それを打ち消してくれたであろう言葉も、あつたような無かつたような？

例えば、そう！ギルミナ様から庇つてくださった時の、お言葉とかはどうでしょうかと思ひ出してみました。

『これのどもりや発言がご不快なようでしたら、この義兄が代わつてお詫びいたしましょう』

『義妹は身体が不自由ゆえ、責任は甘やかして育てた俺にあります』

『よつて今後二度と、この義妹は責めないでやつていただきました』

そこそこ威力はあるようですが不思議な事に、リユームにしてみたらまだまだ足りないようです。

特殊発想思考では変てこな受け方しちゃってるんでしょうかねー？
いやいや。七年間の重みの方が、勝っちゃってるだけって話の気がしますねー。

考え込むと相変わらず、どんな状況すらも意識の彼方に吹っ飛ぶようです。

この苦手なご領主様の腕の中にいる状況にすら、すっかり身を任せている始末でしたから。少し前までは『ありえませんが』なこの体勢にも、あまりに頻繁だと慣れてくるらしいですね。

人間、なんて順応性が備わっているのでしょうかと驚きが隠せません。わーお。

「リユーム？」

名を呼ばれ、軽く背を揺すられました。

そんな仕草が、早く言ってみると促がされているのだとは解るくらいには、彼との距離も縮まりましたかねえ？

「その、リユームの事、そんなに嫌いじゃなくなりました？」
恐るおそる、そう尋ねてみました。

無言のまま頬に押し付けられる唇に、首が傾ぎます。

そ、そうですね。コレがお答えと。そう受け取っていいのでしょうかね？

思いのほか、柔らかな唇を押し付けられておりますよ。

ですが、後頭部を押さえつけられているので、あらぬ方向にまで傾く事はありませんのでどこか安心してしまいます・・・って！

そんな心情に落ち着く自分自身に驚きを禁じえませんが、ご領主様！！

慣れと言つのは恐ろしいものですな。

押し付けるだけでは飽き足らず、音を立てて吸われた上、湿った温かな感触に慄きます。

(うつつひゃあああああ！！先ほど、くすぐったかったのはエキジヤなくて、エキジヤなくて！)

『かわいいと思っっているなら口付けたくなるだろ？自然と』

そこでまた思い出された言葉はクレイズのもの。
でも、それとこれとは話が別でございます。

彼の唇が頬から滑るその合間に、リユームは答えておりました。

「でも。リユームはアナタ様の事が嫌いです」

「こつやって抱っこされるのも苦しいし。」

謎掛ける様に訳のわからないことを言われて、それを考えると言われましてですね。

その割りにリユームの答えがあらかた気に入らないらしいのを、特殊思考と罵られるのは、ただのお仕置きに等しいと思います。

「いやいやいや。リユーム何も悪いことしていませんよね？」

まあ、あなた様の期待を裏切る行いの数々をこなし続け、ゴキゲンを損ね続けているのが罪とか言い出しかねませんよね、この俺様気質のご領主様。

ですからアナタ様の行いはただの嫌がらせと判断します。ええ。

拷問とまでは行かなくても、リユームにしてみたら近いので御了承ください。

それに対する彼の答えは一言。

「犯す」

「はい？おかす？食べるって事ですか？」

「俺のものにする。そこまで減らず口が叩けるのなら体力は回復したと見ていいだろう。」

「もう遠慮はしない」

「もうとつくに、ご領主様のものなのにな？」

言っている合間に味わう浮遊感すら、身体に馴染みつつあります。そんなに違和感を覚えなくなっている辺りでマズイ気がします。

ふん、つまらんとご領主様は意地悪く唇の端を持ち上げて見せました。

ですが、目はまったく笑っていません。

怒りと焦りと。それと何かが入り混じった瞳は、憐れみに近い気がします。

そんな彼にリユームもきつと似たような眼差しを向けていることでしょうよ。

「余裕なんてありません」

そんな減らず口の応酬をやり合ってる間も、彼の手は休まることなくリユームの胸元の飾り紐を弄んでいます。

その上には相変わらず妖しいまでに紅く輝くザクロ様こと、シエンテラン家宝の首飾りがかしゃらん・らんと音を立てました。

「着替えたのだな。しかもこんな脱がせにくい物を選ぶとは」

「何様基準でしょうかね、それ。着替えますとも！いつまでも寝間着でいてはいつまでも寝付いてしまいますからね」

「そのままもう二、三日寝込め」

「何故ですか」

「目の前に獲物があるのに、ただ転がしていただけで堪えた俺の忍耐力を褒めろ」

「もう少し堪えられませんか？」

「断る」

「今なら、まだ。引き返せます。間に合いますよ？」

「もう黙れ」

「い・・・や、です！ご領主様はリユームの許可無く、これ以上触れてはなりません」

必死で身を振りながら、言葉を絞り出しました。

第二十九話 シェンテラン家の主の部屋（後書き）

「も、許されると思ってるんですか。許可も無く！」

さて。リユーム嬢。ピンチの割りに余裕のような？

次回誰かさんはお花を〜とか言いましたが、長すぎてまた先送りになりました。

小話もまた、お待ちくださいませ！

第三十話 シェンテラン家に忍び寄る闇（前書き）

『小話は取り合えずまた今度！』

続きが書きたくて仕方ありません。どうぞ！

第三十話 シェンテラン家に忍び寄る闇

「ご領主様、嫌です」

首筋に彼の唇を受けながら、身を振ります。どうにかこうにか。嫌です。リユームは嫌です。怖いです。止めて下さい」

震えながら訴えを続ける間だけ、彼の動きが止まりました。

胸元に彼の頭を抱え込んでいる体勢ため、その表情は見えませんが、ほんのつかの間の静寂の合間、お互いの呼吸だけが響きます。

「ごりよ、しゅ、さま。嫌・・・嫌なの！余裕なんかであるわけがないでしょう？」

ご領主様は何も答えくれません。まるつきり無視ですか。哀しくなりますね。

そのまま彼の手が、リユームのドレスの裾を捲り上げる形で太ももを撫で上げました。

身体が自分でも驚くほど、跳ね上がります。

「嫌です　いや　っ！」

容赦なく腰元までに侵入してきた手に驚いて、身体が逃れようとのけ反りました。

その首筋にかつての痛みと同じ刺激を与えられ、リユームは半狂乱で叫びます。

「嫌です、嫌です、嫌あー！！」

無意識に頭かぶりを振れば、またしても彼の与える痛みが増します。

首筋に埋められた彼の金の髪を恨みがましく見下ろしても、何の威力もありません。

何て無力なんでしょうかと、空しくなりました。

「ごりよしゅ、さま、ごりよう、しゅ、さま・・・いやです。やだあ！たすけて、ヴィン、セイル・・・」

お願いですから、リユームの気持をこれ以上ないがしろにしない

で下さい。

そうでなければきっとまた、リユームはこの方の事を許せなくなるでしょう。

それはお互いに辛くてクルシイものになります。

本当はわかっているのでしょうか？

そんな必死の想いが、彼の名を呼びかけさせたようです。

そもそもおかしな言動に出してしまったものです。

リユームを踏みにじり乱暴を働く、当の本人に助けを求めるなんて。ねえ？

涙が頬を伝いました。

(一番・・・助けを求めてしまう相手に、ヒドイ目に合わされてるって

どれだけ救いがないのでしょうか?)

何だかんだ言って、一番頼りにしているっていう事でしょうかね。この方を。

「っ・・・ふえっ、っく」

その事実にもたまたま胸が悲鳴を上げ始めています。

しゃくり上げるたびに、胸の中心がずきずきと痛むのです。

もちろん、呼吸だって狭まります。

苦しくて。肉体的にも精神的にも苦しいのには、どうしようもない絶望感に襲われます。

嗚咽が漏れて身体が浮くたびに、ほんの僅かですが自分から彼に身体を押し付けているようで情けなくもなります。

「たすけて、ニーナあ、ミゼルさま、シンラあ・・・！おとー様あ、つく・・・おかー様あ　怖いよ、いやあ　！」

絶望感に苛まれながら、助けを求めてしまう自分が何を口走っているか何て。

頭の隅の方では何を馬鹿なことと思う自分がいます。

だって。おとー様もおかー様ももう、この世のどこにもいらっし

やらない。

ただただ子供が泣き喚くかのようにしか、助けを求めるしか出来ないのです。

ますます涙の勢いが増して行きます。止め処も無く溢れます。

(ご領主様、ヴィンセイル様！このままだと、取り返しの付かない事になってしまいます！)

どうあっても助けると叫ばずにはいられない、この気持ちをどうかわかって欲しいのです。

他にもない、今リユームをむちゃくちゃにしようとしているこの方に。

「リユーム。俺を挑発するオマエが悪い」

「っ！？・してない！いや あああ！」

頭を振るうにも首筋を押さえ込まれていては、どうしようもありませんでした。

そのまま彼の手は、無情にも肩をも押さえます。

胸元の飾り紐が弛められたため、ドレスの肩口からの侵入も容易く許してしまつたようです。

はだけた肌を感じる空気の冷たさと同時に、彼の大きな手のひらから伝わる熱にはおののくしかありません。

こうやって見せた事の無い肌を彼になぶ騫られるのは、今までの行いの比ではないほどの恐怖でした。

精一杯顔をそむけても、それはただ彼に首筋を余計に差し出しただけのようです。

「い……いやあ……いやあ！や、めて、や、めて、やめて
！！」

もはや歯の根は噛みあわず、訴える声さえも震えています。

「リユーム。今ここで俺に引けと？もつと俺に狂えと言つのか？もう待てるか」

何を仰っているのか。

アナタが引かねばわたしの方こそ、おかしくなるのです。今度こそ壊れてしまいますよ。

だから訴えを止めるわけには行かないのです。

唇を強く噛み締めて嗚咽を堪え、呼吸を整えます。

「ごりよう、しゅさ・・・ま

「リユーム」

彼の手がリユームの頬を、流れる涙を、撫でていました。

まるで壊れ物に触れるかのように、やわらかく、そっと。

そんな気遣いが感じられたので、恐るおそる彼を見上げる事が出来ました。

「ジ・リユーム タラヴァイエ」

気が付けば彼の唇がリユームの名を呼ぶ様を、食い入るように見つめておりました。

「ヴィ、ヴィ、シェー・シェイ、ル・・・つく、ヴィン・セ・・・イール」

しゃくり上げながらなので、発音はまったくの不明瞭です。

「ヴィン セイル」

またもやあの時のように、ゆっくりと発音されました。

「ヴィ、つく・・・セイル」

「そうだ。リユーム」

「ヴィン、セイル・シェンテラン」

彼の瞳が満足そうに眇められます。それに見入っている自分がいました。

さようなら。

リユームの唇は音を発さないまま、別れの言葉を告げました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

・：*。・*：：：。：*：：。：：

「何っ!？」

その瞬間、ご領主様が素早く身を翻し寝台から背後を振り返りました。

ですがもう手遅れです。

主に彼の目元にまわり付きかのように、闇が忍び寄っていました。

それがご領主様の視界を完全に封じてしまうのも、時間の問題でしょう。

闇は意思を持って目的を遂行します。

” ” リューム嬢に無体を働くようなら側にはおかぬと忠告しておいてやったのになあ。

残念だったな、若領主。ルゼとこの娘との約束をないがしろにするようなら、この娘。

公爵家が預かるとはかねてから宣告済みぞ？よもや忘れたとは言わさんからな!”

徐々に輪郭をあらわにした獣の蹄が床を打ちました。

その蹄の主の一角が彼へと向けられています。

日がかげるとに連れてこの部屋を支配しだした闇の主。

それは公爵様のお使いの獣、ダグレスです。

「ダグレスっ! 貴様!!」

ご領主様が歯を食いしばりながら、目元を押さえ込まれています。痛そうです。苦しそうです。

途端に恐ろしくなります。ダグレスにやめると叫びだしそうになります。

悔しそうに唸る声をくぐり抜けて、リュームは寝台から転がるよ

うに下りました。

ダグレスに駆け寄り、その首筋にすがり付きました。

「ダグレス、ダグレスっ！ご、領主さまにあまり酷い事しないでっ」

” ” ふん。案じずともせいぜい苦しむのは一晩ほど。手加減してやっただのは、

他でもないこの娘に免じてだと肝に銘じよ、このばか領主！” ”

「一晩も・って、ダグレス！？あなた話ができるのですね？リユームが聞こえなかっただけ？」

” ” そうだ。我はずっと話していたさ。しかしオマエの耳には届かなかったただけの話。

もつとも、そこなる若造には最初から伝わっていたがな。忌々しい話だ。

我の声が届く者は乙女らだけでよいものを。野郎なんぞと話していても無駄だからな。

行くぞ。早く我に乗れ、タラヴァイエの娘よ。詳しい話は後だ” ”

ダグレスが勢い良く顎をしゃくり、その背へと促がします。

しかし、リユームはためらいました。何度もご領主様とダグレスとを見比べます。

ご領主様は寝台の上で起き上がってこそはいるものの、片手でシートを固く握り締めながら目を覆われているのです。

彼の頭周りに薄闇がまとわり付いているのが見えました。

それがダグレスによる、意思持つ闇の仕業という事くらいリユームにとて解ります。

ダグレス。闇に属する獣。

ルゼ公爵様の元にお仕えしている人智を超えた存在。

その闇色の獣を見つめるうちに、視界がだんだんとその美しい闇一色に塗り替えられて行くようです。

しばし呆然とその毛並に魅入られて、我を忘れ去っていたリユームの耳に悲痛な叫びが届きました。

「リユームっ!!」

「ご領主さまっ!!」

彼に駆け寄ろうとしたリユームを阻んだのは、他でもないダグレスです。

” 待て。こやつは放っておけ。良い薬だ。コイツにはちと思いき知らせてやるが良い。

娘よ、オマエはこの者に無体を働かれたのだろう？何を同情する必要があるので？”

確かにその通りです。ですがリユームはゆるゆると首を横に振って見せました。

「ダグレス。彼は大丈夫なのですか？本当に一晩でちゃんと治りますか？」

” 嘘だと言ったら？”

「ダグレス、そんな！このまま彼を放っておけるわけがありません」
紅い紅い宝石のごとく煌く瞳。

紅すぎて黒に近い眼と視線がぶつかります。

彼の操る闇は、その紅い眼の言うなりになるのでしょうか。

ダグレスは一度ご領主様と牙を交えています。

その時思ったのは、この獣がけて本気ではないという事でした。このような攻撃の仕方まで身に備わっている獣の彼にしてみたら、剣による攻撃など本気になるまでも無かったのでしょうか。

こうして手を下さず一定の距離を保ちながら、闇をけしかけて来たダグレスに寒気を覚えました。

他愛ない。彼はそう思っていたに違いありません。それは今も変わらずそうなのでしょう。

眼差し一つで闇を操るのですから、当然と言えばそれまでですが。ならば、手加減を願うまでです。

その首筋を両手で捕らえながら、自らその両目に映る様にと覗き込みました。

これほど切迫した祈りを込めて歌ったのは、初めてかもしれない。

リユーム自身瞳を固く閉じて歌い終わるまで、瞼を持ち上げる事ができませんでした。

カラスの歌声がどこまで闇に太刀打ちできるのかと、吐き気がするほどの恐怖という闇の中で対峙した気分です。

闇が恐ろしいのではなく、その闇に敵わないかもしれない己が怖かったです。

（闇ふり払い給え 我らが光 ！）

幾度も幾度も心の中でもそれだけを繰り返しながら、抱きかかえた彼の額に瞼にと唇を寄せていました。

「リユーム」

大丈夫だと告げるようにご領主様の手が伸び、リユームの右頬に触たようです。

それでやっとリユームは薄目を開けて、彼を見る事ができました。彼の眉間は寄りまだ焦点は定まらないようですが、それでも幾らか苦痛は去ったように見受けられます。

彼にまとり付いていた闇は霧散したようです。

そうです。それはまるで弾け散ったエキのように、どこかに退散してくれたようです。

ほっと息をつき、彼の頭を再び抱きかかえました。

闇は完璧までには行かなくても、去ってくれたようです。

” ” やつてくれるな、タラヴァイエの娘。 我の闇を薄めおつた！ はははは、不愉快だ！

たかが人の子の分際で何とも小賢しいなこの娘も。 ますます貴様の側にはもつたいたいなくて置けぬわ。 良かったな若造。

本音を申せば、あと三日三晩は苦しむ予定だったのだぞ？感謝するのだな”

そんなダグレスの嘲りの言葉から彼を庇うように、リユームは泣きながら謝りました。

「ご領主様、少しは楽になりましたか？ですが、これ以上はリユームには無理なようです。

「ごめんなさい。ごめんなさい

！」

「リユーム、泣いているのか？何故、厭いとわしい俺のために泣く？彼の指が涙の雫に触れたようです。

「本当に、もう！どうしてか、胸が痛むんですよ、ご領主様」

このまま闇が去り切ってくれなかったら、この方はどうなってしまうのでしょうか？

それを思うと胸が押しつぶされるそうになるのは、どうしてでしょうか。

そう、こちらがお尋ねしとっございますよ！

「リユーム」

「ご領主様が悪いんですよ！リユーム、散々やめて下さいってお願いしたのに。もう！

もう・・・ご領主様のばかばかかつ！怖かったんですからね？怖かった、んですから。

ですから、最終手段に出るしかなくなったではないですか」

公爵様からのご提案通りにせざるを得なくなったのは、彼の自業自得です！

「さつさと俺のものにならないオマエも悪い」

「まだそれを言いますか！」

むかあつとしたので、その額を叩いて差し上げました。

身動き取れない彼が悪いとばかりに、やりたい放題させていただいております。

もちろんご領主様は、黙ってヤラレっぱなしでいる訳がありません。

負けじと伸びて来る手を、リュームはひょいっとかわしてやりました。

「リューム。後で覚えている」

「ルゼ様のお言葉を忘れたとか、ぬけぬけと言い切るご領主様のお言葉なんか、だーれが覚えているものかですよ」

「黙れ」

彼の唇が、呟きながら近付きます。

” ” いい加減、我の存在を忘れていちゃつくのはやめる。そして領主は一晩枕でも抱いて反省している。行くぞ、リューム” ”

ダグレスが苛立った調子で割り込んできました。

リュームの首根っこをその口が啜くわえて引っ張ります。ぐええ、ですよ！

思わずご領主様を抱えていた手を放して、バタつかせてしまします。

ひょいっと、いとも容易くリュームの身体は半回転のち、無事に床に着地しております。

見ればご領主様も手をこちらに伸ばされていました。

視界がハッキリしないのでしょうか。

何度もまばたきを繰り返しながら上体を乗り出して、リュームの姿を探しているようです。

慌てて駆け寄ろうとすると、ダグレスがまたもや間に入ります。

今度はクツションを啜くわえると、どっさどご領主様に押しつけましてゴザイマス。

” ” さ。これで良い。さっさと行くぞ。オマエらの威力を見くびっておったわ。この調子では回復までに一晩とかかるまいよ” ”

ぐぐいっと鼻先でクツションをご領主様に押し付けながら、ダグレスはリュームを横目で見ました。

ダグレス！

その厚み越しにくぐもった、恨みがましい声が聞こえます。
「ダグレス、それくらいで。ご領主様、息苦しいでしょうから」
” ふん。それくらいでコヤツにはちょうど良いわ。”
ダグレスは何というか、その。とってもいい性格をしているみたいですね。

ミゼル様がそう言っていたのも頷ける気がします。

「リユーム！どこに行く!？」

悲痛な叫びに扉に向った足を止めます。

ダグレスに目配せを送ると今一度、慎重にご領主様に近付きました。

「ご領主様。どうかお休みください。そうすれば闇も明けますから。
．．．ね?」

落ち着かせるように彼の額の髪をかき上げ、撫で付けます。

相当苦しいものと思われます。この彼が立ち上がることも出来ないでいるのですから。

気が付けばリユームから、苦悶に歪んだ眉間に唇を落としていました。

その僅かな温もりに少し安心されたのか、彼の呼吸が落ち着きを取り戻します。

「ゆっくり身体を休めてください。リユーム、お側におりますから
その青ざめた頬をさすると、彼の呼吸が緩やかなものへと変わりました。

リユームへと伸ばされていた手もぱたりと落ち、寝台がやわらかく受け止めます。

「おやすみなさいませ」

ご領主様は意識を手放し、眠りへと誘われたようです。

正直彼をこのまま闇の中に一人、置き去りにするのは気が引けました。

何事かと驚いて回廊の先を見ればそこには、ニーナの姿がありました。

足元にはこの回廊に置かれたものと似たお花が、花瓶に活けられております。

「お嬢さま！リユーム様っ」

それに少し遅れてバルハートさんも駆け寄って来ました。

「ニーナ！バルハートさんも！」

二人とも安堵とも不安とも取れる、複雑な表情を浮べております。ニーナはリユームに抱きつくとき、そのまま泣き崩れてしまいました。

そうなのです。リユームはニーナとは久しぶりに会うのです。

何でもニーナは体調を崩したとかで、休んでいるとご領主様からお聞きしていたのですが？

この様子だとご領主様め、嘘を付いていたようですね？まったく！

「ニーナ。バルハートさん。リユームは大丈夫です。心配をお掛けして申し訳ありませんでした」

肩を震わせて泣くニーナを抱き止めながら、二人に謝りました。

「リユーム様。その獣は」

「はい。ダグレスは公爵様のお使いなんです。リユームを迎えに来てくれました」

「「 迎え？」」

二人の声が重なりました。

ダグレスは誇らしげに胸をそらして見せます。

第三十話 シェンテラン家に忍び寄る闇（後書き）

『一応・R・15なんでこのくらいが限界かと？』

そんな理由ではない！ここまで。そんなワケがありません。
思いとどまれ！ヴァンセイル！
オマエのやってる事は立派な犯罪だ！！

と思いつつ、このかわいそうと思う気持ちと。
その泣き叫ぶ憐れな感じが余計に男を煽るんだよ。みたいな。
今回、ヴァンセイルの目線で書いたなあと思います。
リユームにしてみましたら嫌だと訴えている事を率先して実行されて
はますます信じられなくなります。

第三十一話 ジャスリート家の獣の瞳（前書き）

『今回も 長いです。』

休憩挟まれながらどうぞです。

小話も一緒にUPで、どうぞしよつもない。

第三十一話 ジャスリート家の獣の瞳

もう日も暮れたかと思っていたのですが、意外にもそうでもなかったです。

少し日は傾いてはいるものの、まだ十分な高さがありました。

「ダグレス！リユーム、感動です。こんなに素晴らしい景色が見えるなんて。館が小さく見えますね〜ニーナ、バルハートさん、見えますか」

リユームは、窓から見送ってくれた二人に手を振ってみました。

たぶん、もう見えないでしょうけれども、構わずに振ります。

二人とも大層リユームの事を心配してくれているのが伝わってきて、まさかしばらくこの館を出ますと告げるのもはばかられる位でした。

（リユーム様、どうかお気をつけて）

それでも二人はこうやってリユームを送り出してくれたのです。

きつと想いは同じだったのでしょうか。

このままリユームがご領主様のお側に居ては彼を駄目にしてしまう。

あのまま、流されるままに『妻に』等とされてはリユーム自身も何か壊れてしまう。

言葉にしなくてもその想いは、そこはかたなく館全体に漂っていたように感じました。

二人の眼差しが痛いくらいで、思い出すだけで胸がつきんと痛みます。

そんな風に未練がましく館の事を思っていると、ダグレスが呆れたような声を出しました。

” 高い所は怖くは無いのか？”

ぶんぶんと首を横に振りました。

ダグレスに促がされるままにその背に身を預けたリュームはですね！

何とびつくり、館よりも高い・高い・遥かに高いお空にいますよ。

ダグレス、すごいです。その蹄は空すらも踏めるようですよ。

まるで地面を蹴るのと同じようにして、ダグレスはここまで上がってきました。

「ちよつとだけ、怖いです。けれど、ご領主様に比べたら何てことはありません！」

むしろこの恐怖感がちよつとわくわくしますね！冒険してるって感じます！」

” ああ。何とかとナントカは高い所が好きだというのは本当のようだな”

「ナントカ・カントカ？何の呪文ですか、それ？」

” オマエをそのまま在りのまま表す呪文だ。”

からかうようにダグレスが鼻先を震わせました。笑ったのでしょうか？

ですがリュームにはよく意味が解りません。

獣サマの感覚は、リュームごときでは理解できないのかもしれないね。

適当にあいづちを入れました。

「そうなのですか？」

” あ・・・我に手が無いのがこんなに悔しいのもそうそうない。あつたら確実にオマエをはたきたい。その額をな！あ　バ　力領主の気持ちか解るとか思ってしまう辺りで我も落ちぶれたものよな！”

「！？」

咄嗟に額を両手で庇いました。

その途端、上体がぐらりと後ろに傾ぎます。

”ばか者っ！手を放すなと言つたろうが！！”

「ダグレスがはたくとか言うから悪いんです」

”あ~~~~！この娘、本当にはたきたい！！”

「暴力反対です。ますますリユームがばかになつたら、どうするんですか」

”黙れ。これ以上ばかになりようがあるまいから、余計な心配をするな。

まったく、口だけは減らないのだから忌々しい！”

「バカつて言う方がバカなんですよーだ？」

”っ・いやかましいっ！バカをバカと言つて何が悪い”

おお？ちよつとむかつとききましたよ。

やる気ですね、ダグレス。それならば受けて立ちましょぞ！つと息を吸い込みました。

「ダグレス、ダグレス、いばりんぼさん

ご領主様も顔負けの 筋金入りの いばりんぼ！

カワイコさんじゃなかつたよ

ダグレス、ダグレス、へらず口いい だっ！」

”だあああああああ！やかましいっ、耳元で我を貶める歌など囀るなカラス！”

気が散つて仕方が無いわ、脱力するその歌をやめろ、この神獣に匹敵する高度な我に何たる無礼、等などの贅辞にお応えすべく。

リユームは延々と歌つて差し上げました。はりきつて、えんえんと。ええ。

軽く十番まではできましたよ。もう一度繰り返してみろ、と言われると覚え切れてないので困りますけど。

そんなバカバカしいやり取りをする内に、どんどん館は遠ざかって行きます。

実際ダグレスの口調は容赦の無いものでしたが、さほど本気で怒っているわけではないのが伝わってきます。

むしろ、そのような気楽なやり取りのお蔭で、じつぱ気鬱じつぱが晴れて行くのでありがたいです。

” リューム。オマエにもあの家を取り巻いていた闇が、見えるようになったな？”

幾らか声をひそめてダグレスは切り出しました。

リュームは言葉を発する代わるに、その首筋にしがみ付いて答えました。

ええ。

視えておりましたとも。

時には濃く。

時には薄く。

その煙状のすすけたかのような闇が、館の上空を渦巻く様を、しかとこの目で！

もう館からは随分と離れており、今はもうそのてっぺんぐらいがかるうじて目に映る程度です。

それでもリュームは背後から、並々ならぬ圧迫感に追いつがられない気がしました。

闇が聞いている。何者かに気配を探られている気がする。

その圧迫感の主が、お怒りの念を飛ばしてのご領主様だったりしたら良いのですけどね。

それはそれで笑えませぬー。

ですがその馴染んだ気配が、リュームの知るご領主様のものとは違っつて事くらい大馬鹿のそしりを受けた娘にだって解ります。

解ります。

ダグレスもそれに気が付いているのでしよう。

無駄とは思いつつも、リユームも声を落としました。

「アレはリユームを追いかけていましたね。今も追っていますね。正体は何でしょうか。」

「解りませんがひどく物悲しいものですねえ」

”今はまだあまり視るな。気付かれたら面倒だから目を合わせるな。出来るな？”

「はい。ですが先々見据えられるようになりますよ、リユーム。もちろん対策をしっかりとしてからですけど」

”それでいい。アレは人の子の手には余る代物だ。我とて尻込みするわ。面倒で”

「面倒ですかーうん、はい、面倒ですよねえー。とリユームは一人ごちます。」

「ダグレス。あの闇はふり払う事が出来ると思いますか？」

先ほど、ご領主様の闇を少しだけ薄めたのと同じ要領で」

”オマエにか！リユーム？今は無理だろう。だが我ならばいま少しの間だけ振り切れることは出来る。ジャスリート家の守護結界は秀逸ぞ？

いくらこの闇が深かろうとも、つかの間のしのぎにはなるだろうさ”

「そうですか。つかの間、ですか。太刀打ちなるでしょうかと気が遠くなりますねー」

”文句があるならタラヴァイエとシェンテランの祖先に言うのだな”

「そうですねですか？そうだとでも言えませんか。皆様とつくにお墓の中ですよ！」

”まったく先祖がなっていないと子孫が苦勞するな。いつの時も！”

「まあ。そんなのですか？この闇とやらの起因は、それほどまでに遡らねばなりませんか」

” 我はいつも見てきたからな。そのような様を、悠久の時をずっと”

「ダグレス。頭が良いはずですね。御いくつなのかしら？」

” 忘れた”

そうですかぁーとダグレスの首筋を軽く叩いてやりました。すごい話です。

リユームの存在するよりも遙か前から存在していたダグレスに、畏敬の念を抱きます。

「リユームは十八歳です」

” 幼いな。そしてオマエもまた百年も経たぬうちに、この眼に映る事はなくなるのだろう。

儂いな”

” 独り言のようにダグレスが呟きました。

「そうなるのでしょうか。ですけども、ダグレス。今その紅いお目目に、リユームは確かに映っていますでしょうか？」

” そうだな”

「ええ。それで充分でしょうか？」

そうだな、とごくごく微かに呟くとそれきり、ダグレスは黙り込みました。

リユームはそんな背中を愛しく思いながら、幾度も幾度も撫でさすり続けます。

この素晴らしい毛並の手触りを、リユームはきつと忘れる事が無いでしょう。

それは確信です。

そんな想いに胸を占められて行くと共に、何ともいえない切なさも広がります。

苦しいけれども、けして不快ではないこの想いを何としましようか？

リユームは心地よく吹く向かい風に向って、面を上げて前を見据えしました。

どこまでも広がる青空に、涙が溢れてきました。いつだったか到底自分には一生縁がないであろうと、諦めつつ見上げた空にいます。

人生何があるかわからないものですね。

リユームの考えなんぞ実に及びもしない、展開を見せてくれるものなのですね。

生きてるって素晴らしい！かりそめでも健康バンザイ！ですよ、本当に！

リユームは、十八歳。と言う事は、十八年前からこの世に存在しています。

では、十と九年前はどこにいたのでしょうか？

おかー様のお腹の中にですね。ハイ。

では、その前は？どこにもいなかったのでしょうか。

ではその頃はご領主様は、ええと六歳くらいになりますでしょうか？

六歳。そんな彼は想像もつきません。何やら微笑ましい気持ちになります。

その頃に出会っていたら、また違ったものになっていたかもしれない。

そう思うと残念でなりません。

十八歳。シエンテラン家の養女になったのが十一歳。

初めてご領主様にお会いした年でもあります。

あれから七年という月日を重ねて、あの頃のご領主様と同じ年に追いつきましたよ。

あの方と出会った時、リユームも十八歳であれば良かったのに。そうしたら義兄でもなく義妹でもなく、そんな関係に縛られる事

もこだわることもなく済んだのかもしれません。

むしろリユームの方が、少しばかり早く生まれたとか主張してやりそうです。

ご領主様は冬の始まりの頃のお生まれで、リユームは春先の生まれですからね！

そうしたらリユームの方が義姉で、ご領主様が義弟と主張してやれましたのに。

そんな事を想像して一人で笑ってしまいました。

あの緑の深い眼差しが、苦悶で満ちていたのを思い出すと胸が痛みました。

彼を思い出すと、何でしょう。胸が痛みます。

あの方を一人にしてしまったという事に対して、いいようのない罪悪感が溢れてきます。

きつと、あの方は荒れに荒れるでしょう。

リユームに立ち去られたこと、あの方には良い薬と思うのですが、きつとお嘆きになる事でしょうと、確信しています。

それは涙を見せる方法では無しに、怒りを誰彼構わずぶつけるといやり方をやりかねません。

リユームが絡むと、大きな子供同然ですからね。彼は。

ああああ。考えただけで頭が痛いです、ニーナ、バルハートさん、皆さん。逃げて！

一応、予防策として『そんなことした日には絶縁ですからね？』という内容の手紙をしたためて来ましたが。

(まったく・まあ・ご領主様はシエンテラン家の主人なのですから！しつかりなさって下さいよねえ！?)

あー心配です。心配です。うう。

病とはまた一味も二味も違う痛みに、苦しくて予想もしなかった涙が零れました。

(ご領主様。ヴィンセイル・シエンテラン様。リユームの一番嫌い

というどこかで聞いたことのあるようなお小言も、さらりと流してしまいうりゅームです。

だってですね。

これまた、ものすっごくお綺麗な方が今日の前にいらっしやるんですもの！

髪は見たことの無いほど紅く、それはそれは艶めいていらっしやいます。

まるで、今まさに沈み行く太陽に染上げられたかのよう。

その髪は長く豊かです。

くるんと自然にゆるく波うっているせいか、この方をなお一層、たいそう可愛らしく見せていますよ。

瞳は先ほどまでりゅームの全てを見透かしてくれた、青空とまるで同じではないですか！

しかもりゅームとは違って、目尻が下がり気味です。いいですねえ、羨ましい。

ものすごく優しげな眼差しです。

唇も鮮やかに紅くて、色っぽい。その優雅なお花みたいな唇の端が、持ち上げられているんですよ。

(わぁ・・・！)

りゅームはまたぼかんとして、ただただその美しい配色をまとう御方を眺めてしまいます。

ダグレスがジャスリート家に降り立つ前に散々自慢し、無礼な真似をしたら許さぬぞと言い含めたわけですね。

ダグレスのお仕えしているという、ディーナ様です。フィルガ様の婚約者でもあられます。

” さ。我が嬢様にオマエの歌を聞かせてやれ ”

にこ、とディーナ様が微笑まれました。うわ。かわいいです！思わずにつこりと笑みを返します。

お互いに無言のままただ、にこにこにこにこしていました。すると、痺れを切らしたらしいダグレスに促がされます。

やっぱり甘えっこですね。自分で飲まないところが。はい、アナタもどうぞと、リユームも促がされるまま水を桶おけからすくいました。

手のひらから滴り落ちる水が、腕を伝い衣服に染みて行きます。構わずに、そっと口を付けました。

「おい、ひいです!」

「でしょう!」

ふふふと笑いあいます。

「私はディーナです」

「あ、初めまして。ジ・リユーム・タラヴァイエと申します」

「タラヴァイエ? シェンテランではなくて?」

ダグレスが頷きます。

第三十一話 ジャスリート家の獣の瞳（後書き）

『あの橋のむこうがわ』

うう。もう終わらない。長すぎて、途中で切り上げました。
まだ、本当はあったのです。そして。

宿題がたまったままの気がする・・・！

すみませんがいづくままいくので小話 今回は『ディーナ』目線です。

・ ・ ・

無防備なのはこの子の罪。

この子のせいではなくとも。

誰も責められないとしても。

そんな悩ましい格好のまま、そんなに艶やかに笑ってはいけ
ないと思う。

類には涙の後が見て取れた。それなのにこの子は笑みを浮べて見
せた。

それが心からのものであると疑いようも無いのは、私が鋭いから
だけではないと思う。

そう。術者の素質満点の私はある程度人の感情を読み取れるのだ。
好む、好むまいに関わらずだ。

それがこの胸をどんなに狭めるのか知ってくれてはいても、理解
してくれているのはごくごく限られた者達だけだ。

だから私はこうやって隔離と言う名の保護の下に、籠の鳥よろしく納まっているのだけれど。

このコからはただただ喜びだけが溢れているのが伝わってきた。こちらが怯むくらいだ。

何のためらいも憂いも無い。

何事かしらと思う。

私の心許せる唯一無二の存在の獣たちと同じ精神。

そんな人間が存在するのかと驚きが隠せなかった。

この子は無防備だ。

何の守る術も持たない。

それなのにも関わらず、何の憂慮も思慮も無いとは

！

あまりの危なっかしさに眩暈すら、する。

このあやうさがまた彼女の美しさを引きたてている気がするから、眩暈は増す。

初めて目にした闇をまとうかのような髪も瞳もつややかで、これから下ろされるであろう夜の帳のよう。

傍らに立つダグレスに引けを取らないそれが、彼女の肌は白さを際立たせて目立たせてしまう。

そのことに息を飲んだ。

その美貌にもだが、それだけではない。

眩しいほどの白さを主張して止まない肌を彩る、紅い刻印にも目が行ってしまう。

首元を飾るはダグレスの眼ような、深い深い真紅。

その石の飾りの一部かと見せる肌に浮かぶ紅い痕に、こちらの頬が染まってしまう。

それは主に胸元を飾っている。

（ああ。この子、鏡を見ていないのね。それに・・・何も理解もしていないのね）

悩ましいほど優美な肢体でいながらにして、その子の心は怖いくらい幼かった。

まるで幼い子供に興味深く見つめられたのと、何ら変わりがない気がする。

ダグレスもきつと同じ事を思っている。

この子の精神は私にとって救いだ。裏表の無いその様は正直助かる。

だがどうしてか。

この胸の奥の奥。

深く何か突き刺すのは、この子の受けてきた傷に違いないと思う。

だから この子にも たくさん お水をあげなくちゃ。

そう思ったから井戸へと誘った。

今まで流した涙の分と同じくらい、清らかな水の慰めをどうかと。

第三十二話 ジャスリート家の紅孔雀と烏（前書き）

『くじゃくとからす』

それぞれ 魅力があると思います。

10月7日 UP 後書きにて 小話UPしました。

『小話 フィルガ・ジャスリートと書いて苦勞人もしくは心配性と読む。』

第三十二話 ジャスリート家の紅孔雀と鳥

思わずいつものくせで、タラヴァイエを名乗ってしまいました。深い意味はございません。

あの方がいつもばかり丁寧に呼んでくれていたおかげでしょう。

(自分は未だに、タラヴァイエ家のジ・リユームなんだな)
とそうずつと思っていましたから。

はい。

要は誰がオマエのようなカラスをシエンテラン家の一員と認めるか、と言いたいのだろうな。

はいはい。解っておりますよ、と。

そう心の中でかしこまりましたとお返事し続けて、早七年ですからね。

意識せずとも自然に、そう名乗ったままでゴザイマスよ。

そこですかさず、さも訳知り顔で割り込んだのはダグレスです。

”嬢様と同じくこの者も輿入れするまでは、養女といえど養い家の名を名乗る気は無いようです”

前脚をお行儀良く揃えて、そう厳かに告げました。

「はい!？」

何だ、文句あるのか。

ダグレスにそう眼差しで一睨みされました。

何となく、今の説明は腑に落ちませんよダグレス?

リユームは一言だって、姓については言ってますでしたよね?

(ディーナ様と同じく、輿入れするまでは家の名を名乗らない?)
それではまるで、リユームが輿入れすると決まっているみたいで

はないですか？

（え、とですね？誰がどこに輿入れ、すなわちお嫁に行くという話ですか！？ダグレースっ！）

いつ、リユームそんなお話しましたかと尋ねようとした時です。

「あああ、ディーナ！リユーム嬢にまで水遊びをさせて」

フィルガ様です。

足早にこちらに近付きながら、ディーナ様を咎めます。

「水遊びじゃないわ。リユーム嬢は喉が渴いてらっしゃるのよ。だから、ここのおいしいお水を振舞っていただけなのに」

ディーナ様はちつとも構わない様子です。

水に手を浸すのを止めようとはしません。

言いながらご自身も水をすくうと、唇を寄せてお飲みになりました。

滴り落ちた水がドレスを濡らす事など、まるで構わないご様子です。

「ディーナ。いい加減にきなさい」

「リユーム嬢、もつといかがかしら？」

ディーナ様はといえば、まるで聞く耳持たずでいらっしゃいます。フィルガ様が険しいお顔でディーナ様をご覧になっても、まるで気にされたそぶりすら見せません。

それは見ているこちらが、はらはらしてしまうほどです。

「リユーム嬢が困るでしょう、ディーナ！」

「そうかしら？」

ディーナ様の瞳が大きく見開かれます。

しかもそれはリユームへと向けられているものですから、思わずへどもどしてしまいました。

「あ、の。そんな事はありませんが、その、ディーナ様の水浸しになつてしまいます」

そう心配して両手を振りました。

実際、その御召しの服地が水気を含んで張り付き、その華奢な身体の線を浮き彫りにしています。

「あら。わたくし、構わないわ。とても気持ちが良いもの」

そう、につこり笑われてはこれ以上は太刀打ちなりません。

どうしたものでしょうか、とフィルガ様とダグレスを見比べました。

フィルガ様はそれ以上何も仰らないまま、ディーナ様を見つめ下ろされています。

目が合うとすまなそうに頭を下げられました。

思わずリユームもいえいえ、と頭を下げ返しました。

何と言うのかその。ディーナ様はもしや、最強でらっしやいますでしょうかね。ええ。

やがて諦めたように一つため息を付くと、フィルガ様は改めて頭を下げてくださいました。

「リユーム嬢。ようこそお越し下さいました。お加減はもういいですよですね？何よりです」

リユームも慌てて立ち上がると、礼を取ってお答えしました。

「ありがとうございます。あの日はお見送りできなくて申し訳ありませんでした。それに、その。ルゼ様のお言葉に甘えさせていただきました。急にお邪魔してしまって、すみません」

「構いませんよ。むしろ歓迎いたします。それはいいのですが、大丈夫ですか？その、ヴィンセイル殿は何と？」

「えええと、あの方はですね。何と言いますか、そのおやはりどうお答えしていいのか解りません。

認められていないとはいえ立場上は義兄なる人に、リユームの嫌がる怖いことをされたので逃げてきました。

何て言えますか！？」

これがルゼ様であれば、あの祝賀会で話し合っていた心配事がそ

のまま予想通りでしたので、と言えばお分かり頂けるのでしょうか。いかにせん、相手はフィルガ様です。うう。言いにくいです。というよりも、言いたくありません！

『何かこれは間違っているな、という事をされそうだと判断したらウチに逃げておいでなさいな』

一時避難よ、とルゼ様が茶目つ気たつぷりに仰って下さったのですよ。はい。

それをフィルガ様にお伝えするのは、大変な恥さらしに違いないと思われます。

困りました。いい表現が思いつきません。どうしましょうか。そう悩んで黙り込むと、間にダグレスが割り込んできました。

” ” この娘。やはり闇に魅入られておるぞ。みすみすくれてやるのも惜しい。保護してやれ”

鼻息も荒く、ダグレスがそう説明を付けてくれました。

ダグレスはやはりお利口さんですね。助かりました、と感謝しました。

相変らずの上から目線の物言いが玉にきず、ですが。

「ダグレス。それは構わないが、ヴィンセイル殿の許可は取ったのか!？」

” ” ささ、嬢様。風が出て参りましたから、そろそろお部屋に戻られるがよろしいかと?この娘の服も濡れましたから、嬢様の良いように着せ替えてやってはいかがでしょうかな?”

くるりと優雅にフィルガ様に背を向けると、もうその話は済んだと言わんばかりに無視ですかダグレス!

「まあ!それはいい考えね、ダグレス!ね、リユーム嬢。そう思いませんか?」

「ええ、つと。あ、ハイ。そうですね」

「ダグレスっ!!!」

” ” フン。なぜそんなものが必用なのだ。我はルゼの命に従ったまでだ。そもそもルゼの言いつけを守ろうとせず、この娘に無体を働こうとしたあの若造の方が悪い。心配せずともあの若造の目の前でかつさらって来てやったわ！安心せい。あの若造は一晩は動けんようにしてきた” ”

アナタ様もあくまでご自身の調子ですか、ダグレス。

というより、あああああ〜！言っちゃいましたか。言っちゃいましたね？わあああ！

いたたまれないとは正にこのこと！リユームは赤面しつつ、俯くしかありませんでした。

” ” さあ、嬢様。日も傾いて参りました。お体を冷やされては良くありませんから、お部屋に戻りましょう。付いて来い、カラス娘

” ”
「まあ、ダグレス。何べん言ったらわかるの？そんな言い方はないわ」

” ” は。失礼しました。リユーム、嬢様のお部屋に案内してやろう。ありがたく思え” ”

「待て!!!」

さくさくと話を進め先頭に立つダグレスの背中に向って、フィルガ様がぴしゃりと言い放ちました。

「ダグレス。オマエはここに残れ！女性の着替えにオマエが同席するな」

ピタリ、とその軽快に進んでいた蹄が止まりました。

” ” 我をおまえらの様な飢えたオオカミと一緒にするな” ”
頭を傾けて、ダグレスはちらりとフィルガ様を窺いました。

「ああそうか。ならば紳士らしく扉の前で控えていればいいだろう。それでも納得行かないとほざくなら『リゼライ』にこの話が行くようにしてやるうか。彼女はなんだかんだでディーナを大切にしていたからな。怒られるぞ。いや？呆れられた上、この上なく蔑まれるだろうなあ」

” ” ちっ！！” ”

ダグレスが蹄で地面を忌々しそうに蹴りました。土ぼこりが勢い良く舞い上がります。

「リゼらい？」

” ” 余計な所に興味を持つな、カラス娘！” ”

「ダグレス。リゼライ嬢にくまなく報告する事だつて可能なんだぞ？口を慎め」

” ” ふん。何故我があのような小娘に気兼ねせねばならないのだ好きにすれば良いだろう我の知った事ではないわ” ”

「ああ、そうか。なら好きにさせてもらう。リユーム嬢。ダグレスの口が過ぎるようなら、いつでも俺にご報告下さいね」

「ダグレス、リゼライ嬢さまとやらが怖いのですか？」

” ” ” ”

じっと見つめていても、返事がありません。それが答えという事なのでしよう。

「さあ。いいから行きましよう、リユーム嬢。こちらよ」

そんなやり取りも、いつもの事なのでしようか。

ディーナ様はそんな二名様をさっさと後にして、リユームの手を取ると歩き出されたのでした。

あの最強オレ様な獣のダグレスが！恐れるリゼライ様とやらが気になりますね。

今度、お聞きしておきましょう。
そしてダグラスをからかうのに使いましょう、と心に決めたり
ームです。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ディーナ様はリユームの手を引きながら、ゆっくりと案内して下
さいました。

しかも歩きながら、実に気兼ねなく話しかけて下さいます。

「フィルガ殿はね、わたくしにはとても甘い。甘すぎるわ！見て
いたでしょう？とても煩くアレコレ口出し手出したがってるのよ。
過保護なの。わたくしにする事を全部禁止しようとするのよ！だか
らね、困らせてやろうと思って」

くすくす笑いながら、到底聞きよのない意見を述べられました。

「困らせてやる、ですか？」

「ええ。そうよ。リユーム嬢もそうして差し上げたらいいわ。きっ
と喜ばれるわ」

「え、はい？その、どなた様を困らせれば良いと？」

「決まっているわ」

ふいに立ち止まると振り返ったディーナ様にとん、と胸を軽く押
されてしまいました。

「その胸に紅い華をくれた方」

紅い。

ああ、柘榴石がと思い当たります。

見下ろしてみても、そこでやっとリユームは自身の胸元の赤く浮か
ぶ痣におののきました。

あかいはな、が何を指し示しているのかなんて。

改めて聞き返す勇気がリユームにはありませんでした。
ただただ、胸元に手を当てて赤面するばかりです。

「困らせようと思わなくても既に充分、煩わせてしまっていると思います」

「リユーム嬢はその方のご婚約者でしょうか？ルゼ様からはそう聞いていますわ」

「め、滅相もございませんん！！」

「あら？そんなの。だって、求婚されたのでしょうか？それともリユーム嬢は、その方が好きではないのかしら？だから逃げていらしたの？」

いきなり核心を突いてきますか、ディーナ様。

流石、リユームを見透かすお空の瞳の持ち主サマですね。

「あの。好き、なのだとは思っていますが。リユーム・ワタクシは忌み嫌われていた筈だったのに急に、求婚されたのです。ワタクシにはそれが正気のものとは思えなくて、まだ何もお答えしていないのです。それなのに・・・その、無理やり怖いことされるのが嫌で逃げてきたのですが多分、好きだと思います。あの、何て言っているのかわかりません。すみません」

じつとリユームを覗き込みながら聞いて下さっていたディーナ様の瞳が、やわらかく眇められました。

「謝らなくてもいいと思うわ。リユーム嬢」

「ありがとうございます」

「リユーム嬢もその方の事が好きで嫌いなのね。嫌いだけど好きなのね」

そう、確信を持ったように呟かれました。

「ワタクシもですか？」

第三十二話 ジャスリート家の紅孔雀と烏（後書き）

同じ年頃の娘さんとか、人生の先輩とかと話すと良い刺激になるものですよ。

そんな始まりの32話。

まだまだ序の口、ガールズ・トーク。
何の事か。

『小話 お知らせ』

指輪のオトシマエどうつけたのか？編。

もうじきこの闇ふり払う君の調べを始めて一周年になります。

読んでくださる皆様のおかげです。

ありがとうございます。

なので、その時『番外編』という形でUPします。

そうしないと既に、どうしようもない文字数になっていますので・・・

よろしければお付き合い下さい。

その前に本編もう一話UPできると思います！

（と、また自分の首を絞める。）

『小話 フィルガの予想・大当たり。』

10月7日 UP

「歓迎いたしますよ、リユーム嬢」

はははと乾いた笑みは、どこか虚ろに映るかもしれない。
だがこれ以上取り繕う気力すらない。

このままジャスリート家は獣を使役して、美少女を拉致するフトド
キな家とでも何とでも、好きなだけ噂を立てばいい。

やけになってそう思った。実際、弁解の余地は無いのだ。

始末は公爵がつけばいい。

(そんな事になったら・・・この先臨む審議会でディーナにとって、
不利に働くのは目に見えて明らかだと言うのに。何を考えて
！
?)

ダグレス！貴様が一番諸悪の根源だろうが！

いつからそこまで「お人好し」になった？

あれだけ古神獣らしく、お高くとまっていたオマエはどこに行った？

いいや。コイツはもともと乙女には甘い。こと、気に入った者には。

いや、やはり。

関わったものとはそれが縁とばかりに、世話を焼きたがる祖母にも
問題があるだろう。

今回もアレコレ根回しをしているのだろう。

リユーム嬢が思いも寄らない事になるのはまず間違いがないと断言
できる。

それでいて執務が滞りない所がこの人のすごい所だ。

少しでも落ち度があれば何かしら注意もできるのだが、それすら見
越しての行動力には尊敬をもちや通り越してしまう。

これからおそらく、彼女がジャスリート家の当主である限りこの
状態は続くだろう。

(いいや。違う。・・・違うな)

ダグレスだけでは事は起こさない。
祖母もまた、しかり。

そこで見逃してはならないのは、ディーナの存在だ。

ダグレスも祖母も館から自由に出られない彼女を第一で、物事を考
えているふしがあるのは否めない。

そこに『たまたま』縁あって、少々困った状況の少女を『ご招待』
となっているのが最近の傾向だ。

俺の婚約者が魅力を遺憾なく発揮して、ダグレスを骨抜きにしてい
るのが悪いのか。

ディーナが祖母の娘と似ているのが悪いのか。

ディーナにその気はなくとも、結果としてこのような運びになって
いるのは間違いが無さそうだ。

(俺もディーナには甘い。気が紛れるのならば、少しは気鬱が晴れ
るのならば受け入れようと思ってしまう)

結局はそこに行き着くのか。

ああ。ああ！だから覚悟はしている。

あのエキナルドの若領主に、この次会ったら胸倉くらい掴み上げら
れる事ぐらい。

それくらいで済めば可愛いものだという事くらい、わかっている。

もしこれでディーナがリユーム嬢と同じ状況ならば、俺だって何を
しでかすか予測も付かない。

祖母は楽しみだこと等とぬかしていたから、きっと。

あの若領主の出方を予想して試すつもりでいるのだろう。

ぜひ彼には努力して頂きたい。

間違っても力づくで奪い返しには来ない方が良いとは思いますが、どう
だろう？

俺とて同じ立場なら冷静に行動できる自信がない。

(ヴィンセイル殿。ここは是非、冷静かつ穏便に！！)
ここにはいない、置き去りにされたという彼に思わず声援を送る。
少しでも届けば良いが。

『 リューム嬢を任せても良し。』 と公爵のお許しが出る事を祈るばかりだ。

第三十三話 ジャスリート家の朝のひととき（前書き）

『ちゃんと鏡を見ることからまずは始めましょうか』

小話 10月10日 UP 後書きにて ぶじぞ〜

第三十三話 ジャスリート家の朝のひととき

「リユーム嬢。こちらとこちらはどちらがお好みかしら？」

「え、と。どちらもステキですがこちらの方が好きです」

差し出されたのは薄淡い緑のドレスと、気持ち黄色味かった白いドレス。

リユームは迷わず白い方を指差しました。

「まあ？何故？こちらの方が似合うと思うわ。そうは思わなくて？」

「あの、そちらは胸元が少し開きすぎているような気がしますので。それと、動きにくそうな・・・」

未だにどうしようもない、この胸のザク口様を少しでも隠せるような造りが希望なのですが。

それと。それとそれとそれと！

『その胸に紅い華をくれた方』

ディーナ様の言葉がよぎり、リユームの顔は火照ります。

思わず縋るように、なおかつ隠すようにザク口様を握り締めてしまいました。

あの方のくれたはな、とやらが何を意味するのかなんて考えただけでも意識が遠くをさ迷います。

毎日鏡を恐るおそる覗くたび、薄まって行くから大丈夫なはずなのですけれども。

もしかして、見逃してはいないかと心配でなりません。

それを晒して皆様の前に立つなどは、気が気ではありません。

何度も何度も見下ろしては、消えた事を確認して安堵する。

しかし、その感触だけは生々しいほどまでにリユームには残っているようなのです。

それがこの身に刻まれてしまったのかと、未だに薄れ行かない感覚に参ります。

しかも。一番最初の紅いはなとやらを、小刀でそぎ落としてやるうとしたかつての自分を阿呆と罵りたいと思います！

ばかばかばか。あほです。知らなかつたわけではありませんが、自覚が足りませんでした。

リユームは真の阿呆です。

かえってその忌まわしい記憶と共に、この身に刻んでしまったと気が付いても遅いのです。

両手を胸に当てて視線をさ迷わせていると、パ・シャラン、と小気味の良い音がしました。

ルゼ様が扇をたたまれた音です。はつとして、ルゼ様を見上げました。

「却下。」

「は！？はい？」

「そんな理由で衣装を選んではいケナイわ。だからその意見は却下します」

「えええええ！？」

「はい、リユーム嬢の衣装コレに決まりね」

有無を言わせずそのままお着替えとなります。

侍女の皆さん方がまた、無駄のない働きっぷりなのです。

リユームはあれよあれよという間に、これ普段着ではありませんよね？と思い切り尋ねたいドレス姿に途惑うばかりです。

「ご領主殿の大切な方をお預かりしているのよ？もちろん最高のおもてなしをさせていただくわ。遠慮はいらなくてよ、リユーム嬢？」

「あの、その。ルゼ様、ありがたいのですが、そのお。コレはちよつと派手すぎやしませんか？あまりにもりゅ、わたくしには不釣合いな格好だと思つのですが」

胸元が少しすーすーして落ち着きません。

肌触りもさらさらと零れるような滑らかさです。

しかも『やつぱり』とは。ええ。

ディーナ様を目の前にすると、ええ・そうでございますよね、と強く頷くしかありません。ええ。

申し訳なさでいっばいになりながら、このままでいれば乾くのでお構いなくとお伝えしたのですが……。

『どちらにしろこれから先、着替えは必要だと思わなくて？』

そう真顔で切り返されてしまいました。

そ、それもそうですね。

その時にすかさず、侍女の方の服装を指差しました。

(アレで！あの侍女のみなさん方みたいなの、お仕着せがいいです！) 途端に手首を掴まれて、椅子に腰掛けるようにと促がされました。軽く無視ですか。ええ。ハイ。

ルゼ様は落ち着かれたもので、さくさくさくつと行動が早い早い！

出入りの仕立て屋さんに見繕ってこさせるようにするからと言が残すと、勢い良く行ってしまわれました。

その背に声をかける間もなく、ただ視線だけで追いつた次第です。もちろん、置いてきぼりでした。

むなしく手と視線だけがさ迷いました。

その後は先に着替えを済ませたディーナ様と一緒に待ちました。

下着姿のままです。

妖精さんの前でそれはそれは、大層いたたまれないお時間でございますましたともよ。拷問に近いです。

リユームがいつまでもそんな姿でいる事から、全てを察してください。さつたディーナ様からは何も聞かれませんでしたし、言われませんでした。

ただ、寒いと悪いからとガウンを羽織って下さったのでした。

その後は用意された衣服たちとにらめっこ。

とつかえひつかえ、アレ駄目これ駄目、コレが良いアレが良い・
。。
そうです。ルゼ様が納得するまで解放なりませんでした。

。+：*：。。：*：。。：+：*：。。：*：。。：*：
：。。：：。。：+：。。：。。：*：。。：*：。。：。。

リユームはどうやら怠けていたわけではありませんが、あまり動かないので無駄なところにお肉が乗っかつちやっっているでしょう。これはまた緊急で館内二十周などをせねば！こつそり探検も兼ねて。そう思いました。

モチロン、勝手に他のお部屋に入ったりしませんよ？

「あの、はい。ディーナ様は華奢でまるで妖精さんのようですね。何を御召しになっていても様になります」

「そうね。あの子は特別細いのだと思うわ。でもリユーム嬢のその、はち切れんばかりの瑞々しさも魅力的だと思うわよ」

「はち切れん・・・！おおおう、マズイです！リユーム、人様から見たらだいぶそんな様子ですよ」

「そそそそそ、そんな、滅相もございません！」

「そう思うのは何故かしら？アナタを隅に隅にと追いやろうとするその感覚は、いつから身に着いてしまったの？」

「そう哀しそうな瞳で問いかけられてしまいました」

「何故？だって、リユーム真っ黒でとてもじゃないが、みっともなくて面には出してやれないとそう言われていますが？」

「そうなの。それはアナタのお義兄様がそう言い聞かせたの？」

「。。。。。」

リユームは無言のまま俯きます。まったくもってそのとおりでゴザイマス。

後は、お義父様とおかー様もですが、黙ったままでいました。下唇を噛み締めます。

「リユーム嬢は鏡がお嫌いなの？」

「いいえ。そんな事はありませんが、鏡に映る自分を見るのは苦痛です。だからあまり見たくありません」

あまり考えた事は無かったのですが、そう言われてみればそうです。

必要な時はお世話になりますが、そうですね。

鏡の中の自分にすら、目をあまり合わせていないような気がします。

「リユーム嬢。あなたが自分の事を認められない限り、お義兄様は同じ事を繰り返すわ」

「リユームを、認める？」

「そうよ。アナタがそう思い込んでいるのは、お義兄様にもだいぶ非はあると思うわ。けれどね、その評価に下ってはならないのよ！自分の評価は自分で下すの。もし誰かから否定的な評価をされてもあなたが受け入れない限りそれは無効となるものなのよ。ヴィンセイル殿の・・・シエンテラン家の苦肉の策なのでしょうけれど、代償が大きすぎるわ！」

「代償ですか？」

「ええ。あなたのような何に恥じる事もない一人の女性の人生に影響を落とし続ける。それは結果としてはあの家の都合良くなるでしょう」

「都合が良い？」

「あなたのその自己評価の低さを利用して自分の都合の良いようにリユーム嬢を閉じ込め続けようとするわよ」

シエンテラン家のお荷物なのだから、なるべく誰の目にも付かないように息を潜めて生きていかねば。

そう考えてもいましたが、それは違うと？そう仰って下さっているのでしょうか。

「ダグレス。おはようございます」

思わず駆け寄って抱きつきました。抱き心地が良いので、ムイシキのまま、つつい。

そのまま首筋に顔をうずめます。

その毛並はお日様の良い香りがしました。

ダグレスが短くああと答え、鼻を鳴らします。

” リューム。その様子だと、朝っぱらからひと仕事済ませたよ
うだな。そのカツコウには慣れておけ”

「何故です？」

” オマエはこれから大仕事が待っているからな！”

「おおしごと、デス力！」

そうだ、とダグレスは意味深に短く答えたり黙りました。

その紅い瞳を覗きこんでも「さあなんだとおもっ？」と、愉快そうにはぐらかされてしまいます。

” 何だ。浮かぬ顔をしておってからに。朝から辛気臭いのはフィ
ルガだけで充分だ”

「はい。その申しわけなくて。身一つで押しかけてしまって、結局
は全てルゼ様にお世話になっているのですもの」

” ああ。気にせずとも良いだろう”

「そうなのですか？リューム、侍女の皆さんみたいに動きやすいの
を着て、働きたいのですが」

” 無茶を言うな！おまえごときが何ができるか。余計に仕事を
増やしてリゼライに・・・！”

「リゼライ、さん？」

” 元は嬢様つきであった侍女だ。今は他所に行っている。嬢様
もアレコレ手出しをしてはリゼの仕事を増やしていたからな。オマ
エも大人しくしていた方が侍女のためと心得よ。世の中には向き不
向きがあるのだ”

「何気に無礼ですね、ダグレス。何を、ですよ。リューム、これ

揺れています。

「こちらと同じく濃い霧をまとっているかのようです。

「レド、も。おはようございます」

レドとは、その傍らに寄りそう獣さまのお名前です。

レドはダグレスとは対照的な毛並の持ち主で、見た目はまるで大きな猫です。

白くてふんわりの毛並に薄っすらと淡い金の斑点が浮かぶという、これまた触りたくてたまらなくなる様な綺麗な獣様。

レドもダグレスと同じくディーナ様にお仕えしているそうです。

まだ一度も撫でさせてもらえていない毛並に今日こそはという下心を忍ばせて、そっと手を伸ばしてみたのですが。

” ” ふん。朝からカラス色なんて見たくもない”

そう勢い良く顔を背けられてしまいました。

” ” 何だとレド、貴様！”

どかどかどか、と足音も荒々しくレドはそのまま去って行きました。

「ごめんなさいね。あのこ、人見知りなの。後でよく叱っておきますから」

「いいえ。そんな、不躰に触れたがるわたくしが悪いのですから気になさらないで下さい」

（例え否定的な事を言われても、受け入れない事！でしたよね、ルゼ様）

自分をそう叱咤してみますが、やはりといいいきましょうか。

心はそうそう変えられないようですな。

朝からいけないとは思いつつも、うな垂れてしまいます。

このままお部屋に引き返して閉じ籠ってしまいたい。そう思わず考えてしまいます。

” 放っておけ。アレもただのガキだからな、リユーム。ここであまり気落ちするのは我に対しても無礼と見なすぞ？”

しゃんとしろ！

そうダグレスの尻尾に背中を一打ちされて、姿勢を正したリユームでございます。

彼女はいつもこうやって何かをしているとレドは思う。

” ダグレスの事、怒らないのか？リゼライ？”

「怒る？何で私が？あの俺様野郎のケモノサマにどう腹を立てると言うのかしら。私には関係ないでしょう、レド？」

” そうなのか！？”

「だ〜か〜ら〜な〜ぜ〜そういう結論になるの！あ〜もう、忙しいのだからアンタもいちいち来ないで頂戴！それと、アンタ自分の立場解ってるの？誰かに見られたら危ないでしょう」

” ぐう。だって・・・”

「だって、何？」

” ” ダグレスの事、叱れるのディーナとリゼライだけ。だけど、ディーナよりもリゼライのほうが効果的”

「いや、レド。あのね、公爵家にいるケモノサマをどう叱れと？というよりもそもそも何だって私がそんな役目に落ち着いているわけ？」

” ” フィルガがそう言っていた。ダグレスが悪い子だったら、リゼライに全部言いつけるけど良いのか？っていつも脅す。そうすると、少しだけダグレスいい子になる”

「・・・そう。そりゃ、初耳だわ」

「あのね。レド、忙しいから帰って」

” ” 嫌だ”

「嫌じゃない。か・え・れ・！」

レドの飛び込んできた窓を勢い良く指し示す。

” ” いやだ・いやだ・いやだ！”

レドは大きな身体を床にころんと横たえると、そのままころころ転がった。

(構え、つてことか。忙しいのにまったくもう・・・ディーナあんたもうちよつと自分の獣の躰をしっかりせえ!)

「レド。ディーナに言いつけるわよ?」

ぴたり、とごろんごろんが止んだ。ちょうど、リゼライに背を向ける格好で。

「レドが悪い子で困っています、つて言いつけるわよ。しかも神殿内に勝手に侵入してきて、危ないっいたらないつて言うわよ?」

普段からやんちゃ盛りの弟妹達の面倒も見ているリゼライに掛かつては、駄々っ子はひとたまりもない。

「レド!」

レドは無言のまま身体をまるめている。てこでも動かない気のようにうだ。

駄々っ子のよくやる手だ。正直面倒臭い。弟妹どもで間に合っている。

(こんなに毛深い弟妹は持った覚えはないんだけど?もっ甘ったれめ!ディーナは甘やかしすぎ)

それにいちいち構ってやっては付け上がらせるだけなので、こういった場合は突放すに限る。

「あつそ。じゃあね。私午後の礼拝の準備があるから行くわ」
そういい残し、さっさと戸口に向う。

” ” いやだ” ”

そう言いながら素早く立ち上がったレドが、戸口の前に立ちふさがった。

「レド!」

” ” ぐう。だって皆、ダグレスの連れてきた黒髪に夢中で、嫌だ!

! ” ”

(あああああああ〜もう〜幼児かえりかよ!!!)
母親の注目を自分よりも幼い弟妹に取られたと。
リゼライにだって覚えがある。

実際、リゼライは一番の年長者で弟とは八つ、妹とは十七年が離れている。

弟が今のレドのような態度を取った事もあった。しかし。しかしだ。

たちの悪い事にレドは仮にも力のある獣。

その気になればリゼライを力任せで押し退ける事だって可能なのだ。

リゼライがどう対処したのか、と少しだけ考え込んでいるとレドがいじけたように言い放った。

”やはり皆、ダグレスやあのリユームのような黒い毛並の方がいいのか？”

この場合の皆、はアレだ。ディーナ・フィルガ・ルゼ辺りを指すのだろう。

「アンタがそう思うのなら、そうなんじゃないの？」

ここで『そんな事無いわよ、アンタの方がかわいいわよ』何て言おうものなら！

この先ずつと付きまとわれてしまう。

だからリゼライはレドの欲しがる賛辞を与えない。本心は違っていない。

” ” うわあああん！！ ”

再びごろんごろんごろん、とレドは戸口の前でのた打ち回る。

「じゃ、レド。うちの子になる？」

” ” リゼライの子？”

「そう」

驚いて上半身を起こしたレドの頭に、リゼライはぼんと手を置いた。

いいこ、いいこと大げさに右に左にと耳が倒れるくらい撫でてやった。

「そうしたら、たんと甘やかしてあげるわよ」

（そうしたらウチの弟妹のおもちゃ・・・遊び相手になってくれよう。

いやでも？また身体の大きな弟が一人増えるだけかも)

” そうしたら、ディーナには ”

「忘れられるんじゃないの？」

まん丸に見開かれた瞳を覗きこみながら、リゼライはすっぱりと告げる。

” 嘘だ！ ”

「じゃ、ディーナに確かめてみたら？」

” いやだ！！リゼライの家の子になんてならない！！ ”

そう言い放つと、レドは勢い良く窓から飛び出して行った。

(やれやれ。やっと思ったか)

リゼライは急いで礼拝所へと向った。

午後の勤めも無事に終わり、広場の鐘が夕刻を告げている。

リゼライは先ほどと同じく、明日の儀式の準備に追われていた。

正直雑用ばかりだが、神殿勤めの巫女は忙しい。

忙しいというのに！

” オマエはレドを『聖句の徒』にしようとしたらしいな！？ ”

「はあ！？」

はあああゝとそのままりゼライはため息を付いた。

” レドがディーナに言っていたのを聞いた。リゼライ、オマエは嬢様から獣を奪い取ろうというのか！？ ”

鼻息も荒く、闇色の獣がリゼライを問い詰める。一角を打ち振りながら。

(そんなに苛立たしそくに『どうなのだ！』と言われてもねえ) どうもしないよ。

リゼライはうな垂れそうになりながらも、しぶしぶ向き合った。

だからなぜそうなる。そうしてなぜオマエまでがいちいちここに
来る。

「ああ。ディーナが構ってくれない、アンタや黒髪のお嬢さんばかりを構うっていじけてたから。じゃあ、うちの子になって弟妹達と遊ぶ？って聞いてみただけよ。だから聖句だの何だの。そんなカンケイじゃなしに、」

” ” ダメだ！！” ”

ダグレスはその場を前脚で蹴り上げだした。

ガツ・・・！！と床が軋んだ。

「ちょ・・・こら！！床がいたむから止めなさい」

” ” いためば良い” ”

「帰れ。」

そんな調子なので公爵家を離れた後も、あの家の様子が丸わかりのりゼライだった。

りゼライ・シャグランズ

金髪のお嬢さん。

ディーナのライバル(?)

元は公爵家の侍女という名の間者でした。

ダグレスの・・・。

第三十四話 番外編 一人で祝う誕生日 前編（前書き）

『闇ふり払う君の調べ』

連載を始めてから一年経ちました。

いつも訪れてくださる方も、はじめましての方も本当にありがとうございます！

しかしまだまだ、終わりそうもありません。

そして番外編。長すぎて前・後編となりました。おおっ

第三十四話 番外編 一人で祝う誕生日 前編

おたんじょうび

おめでと

おめでと

ありがとう

ありがとう

わたしはうまれたよ

うまれて

これを記念にうたうよ

いちばん

さいしょに

歌ったのは

産声

うたうために

うまれてきたんだよ

うまれてくれたから

うたえるんだよ

おめでとのおめでと

ありがとうありがとう

ばちばちばち、と小さく拍手を自分自身に贈ってから少女は祈りの形に手を組んだ。

しばらく瞳を閉じ静かに祈りを捧げる。その様子に思わずこちらも息を潜めて見守った。

「あ、の。その、ごめなさい」

とりあえず、弾かれたように頭を下げられた　気がしてしまう。
もうここまでくると条件反射だろう。

俺を見たら頭を下げると。

かしこまって振舞うように、母親から口づるさく教育されたとは聞いている。

俺が認めていないのは義妹としての少女の存在よりも、義母と認めていない女による所も大きいのだが。

オルレイア・タラヴァイエ未亡人。

今はシェンテランの姓を名乗る、この家の主の後妻だ。

現当主が認めたのだから表向きは仕方がないと割り切っている。

女の趣味にどうこう口出しする気は無い。好きにすれば良い。俺の知ったことではない。

亜麻色の髪に薄紫の瞳の自分よりも十五歳違いの義母は、母親と
言うよりも女という生き物だと思う。

何かにつけて目に付くそれが、俺の中の嫌悪を募らせる。

実の娘に対する態度もそうだ。

『リユームはシザールが甘やかして育てたから世間知らずで、この家にそぐわないのよ。だからヴィンセイル様から認めてもらえないのだわ。私に恥を掻かせないでちょうだい。いいこと？』

だが、それとこれとは話が違う。

確かに始めの頃はそう思ったが、今は違う。

オルレイアは良く言えば無邪気であり、悪く言えば子供っぽい。

その自由な物言いが時に無神経で、周りを傷つけているのにすら気が付いていない。

特にそれは一番気兼ねなく付き合える、実の娘に向っている。

彼女なりに娘を大切に思っている所もないわけではない。

だが結局、自分がどう扱われるかに行き着くらしい。

連れ子が気に入られなければ、オルレイアの立場も危ういとまでは行かなくても揺らぎはするのだ。

その領主夫人の座を狙う者はいないとは言いつれない。

幸い現領主の俺の父親はリュームをいたく気に入っており、大変な可愛がりようだ。

例えそのきつかけが同情によるものだとしても、慕われれば情がわくのが親という存在らしい。

思いがけず年頃の娘を持つ事となった父の心配は、日増しに大きくなっていくようなのも認める。

少女が成長するに連れ、心配の種が芽吹き始めたのもまた確かなのだ。

父が催す宴に顔を出させれば、その場で縁談が申し込まれる事も度々だった。

『これはたいそう可憐なお嬢さまでいらっしやる！ご領主様も鼻が高うございますなあ。是非、我が息子の花嫁となっていたきたいくらいですよ』

『ははは。そうか！それはいい！良かったな、リューム。彼のご子息はそれは立派な青年だぞ』

『はい。お義父さま。リューム、お嫁さんになるのですか？』

『ああ。いつかは、な。まだ少し早いがな』

冗談めいた軽い口調であったにも関わらず後日、正式な申し込みをとという話に父は慌てたようだった。

酒の席での冗談と軽く請け負ってはならないと、リュームにはうかつに返事をしないことと言いつめていた。

まだ幼くともそのような話は珍しいものではない。この家と縁続きになりたいと切に願う者も多いのだ。

それくらいで済めばまだかわいいもので、父も笑っていられたのだが。

世の中にはこちらが理解し難い不埒な者も存在する。

年の差は親子以上でありながら、リユームを望む者が現れたのだ。しかも妾に、と。

そのような者に限った事ではないが、権力者であるのも始末に終えない。

そのような申し出は、このシエンテラン家を見下しきっているとしか思えない。

義理であるなら手駒として扱えば、この家の利益なるとでも言い出しかねない勢いだった。

例え血の繋がりなど無い娘でも、誰がそのような立場に押しやると思うのか！

父の怒りは激しかった。

表立って反抗できない相手であったから、それはなおさらだった。父はやんわりと、しかし、きつぱりとその申し出を退けた。

それから油断は出来ないと思わせる運びになった。

リユームがこっそり抜け出し街に出た途端に攫われ掛けたと、密かに付けていた護衛から報告を受けた時は凍りついた。

攫われ掛けた本人は連れ戻されて、何がなにやらといった様子だった。

何もわかってはいないのが見て取れて、容赦なく怒鳴りつけてしまったほどだ。

このアホウが、自分の立場をまるで理解していないのは何なのだ、シエンテラン家の迷惑になるとは考えも及ばないのかと。

そもそも勝手に抜け出すとは何事か！

える。

「いくら熱があるとはいえ、冷やしてどうするんだ！まったく」

「はい。考えがたりずご迷惑をおかけして、もうしわけございませんでした」

少女が義務的に謝罪の言葉を口にするのがまた癩に障った。

滞りなく、淀みなく。

その言葉だけならば、やたらにするすると口にするようになった少女に何故か腹が立つ。

乱暴な気持ちを宥めようの無いまま、少女の肩を引いて窓から引き剥がした。

「また、痩せたな」

「あ、まだ、とちゅう・・・」

珍しく不満げに呟くりユームの腕を力任せに引く。

「何が途中だ。雪遊びは元気になってからにしろ」

「う、はい」

言いながらもリユームの視線が窓枠から離れていない。

その事に気が付かない方がおかしいほど、熱心に見ている。

少女は思っているより強情なタチだ。何であろうと、気の済むまでやろうとするのだ。

やろうと決めた事は必ずと言っていいほど実行に移すので、次は何を言い出すやらと二ーナあたりは常に気が抜けないようだ。

館に来て間もなく書置きひとつ残して抜け出したのも記憶に新しい。

それに。

指輪の件で懲りている。雨に打たれようが何だろうが、探し当てるまであそこに居続けた娘だ。

それでも結局、指輪は見つからなかった。

当然だ。

指輪はあそこには無いのだから。

もちろん、それくらいで諦める少女ではない。

あれからふた月経ち、それらしい場所は雪が積もっている。

それでも何やかやと宥めすかす周囲の想いを汲み取ってか、二度と指輪の事を口にしなくなったらしいとは聞いている。

ただ時折り、ぼんやりとそこを見ているという話も聞いている。

そう耳にするたび、身体の奥深くがざわつくのは何故だろう。

同時にいい気味だとすら思い、愉悦がこみ上げてくるのは何故だろう。

全くもって説明が付かない。

これは目を離したらまた雪に駆け寄るに違いない。

暖炉にその手をかざさせる為に近づける。

けほ、けほと乾いた咳をしながら、少女は身を擦らせる。

「あう、や、いたいっ」

「じつとしている」

加減がわからない。自分ではそれほど力を込めたつもりなどなかった。

「う、うえ、つく・・・はい、わかりました。もうしわけございません」

腕の中に閉じ込めるように抱えた少女は嗚咽を飲み込むと、また謝罪の言葉を口にした。

その身体が小さく震えている。

案の定、リユームは起き上がって先程と同じく窓を開け放つてい
る。

見ればそこには雪が円形に作られていた。その上には紅い実と常
緑の葉で飾られている。

「え、と。と、途中だったので続きをこしらえていました」

観念したらしい少女が白状した。

「途中？」

「はい」

「何の？」

「お祝い、です」

少女は年が明けて春を迎えれば、十四歳になろうとしている。だ
がまだ十三歳なのだ。

雪で遊ぶ。

その無邪気さに説明の付かないため息を付いてしまう。

同時にあの時の出来事、リユームをと望まれた時を思い出したせ
いもある。

幼さを目の当たりにして改めて、あの男の横っ面を殴り飛ばさな
かった事が悔やまれるばかりだ。

「だから何を祝おうというのだ？」

「何って・・・だって、今日お誕生日ですよね？若様の」

自分で問い掛けている間、まったく思いもしなかった。

我ながらどうかしている。

「・・・そうだったな」

そういわれてみればそうだった。そう思っくらいで他に何の感情
も見出せないまま、虚ろに呟く。

「えっと。だからお祝いをしていました」

「雪でか？」

「う・・・と。その、はい。こやって雪でお祝いのお菓子の形にして、この赤い実で飾るとお祝いです。明日の朝には小鳥が赤い実を食べに来るのです。」

それで小鳥が食べてくれた分だけ、お祝いになるのです。お願い叶うそうですよ、何がいいでしょうか？」

冷えたのだろう。血の気の無い青白い顔をしながら、リユームは俺に微笑みかけた。

「ばかばかしい。そんな事で俺の願いが叶ったら、苦労は無い自分でも驚くほどその声はひどく冷たかった。」

ワケのわからない苛立ちを感じながら、リユームをまた窓枠から引き戻す。

「はい。も、もうしわけありませんでした。それではせめてリユームが出来る事はありませんか？お祝い」

「ない。寝ている」

「・・・はい」

「そもそも鳥など寄って来ないだろう？」

「いいえ！大丈夫です、いつも来てくれますよ」

「もしかして、毎年こっやって祝っていたのか？」

「あ、えっと」

「そうなんだな」

「はい。すぎたまねをしたことおわびいたします。もうしわけ、あり、ありませでした。も・しませんからおゆるしくください」

どうやら先回りして謝る事を学んだらしい少女に苛立ちは募るばかりだ。

「何を。何を願えと？」

「え？もちろん、わかさまのおねがい・かないますよっについて思っているのですか」

「何やら馬鹿にされている気がするが？」

「いえ、そんな事ありません！ごめなさ・もうしわけございませでした、その。この辺りのお祝いはこういった方法もあるんだよ、って教えてもらったものですから」

「誰に教わったのだ？ニーナか？」

あの過保護になりつつあるニーナが、わざわざリユームが身体を冷やす事になると解っていて教えるとは思えなかった。

だから尋ねたのだ。

「え、と。ですね・・・ないしよです」

「言え」

俯こうとする頬に手を掛けて上げさせた。逸らすのを許さず、怯えの浮かぶ瞳を覗きこむ。

「ええと、ヘンリエッタからです」

「何！？」

驚きのあまりリユームの腕を強く引いていた。そのせいでますます、大きく見開かれた瞳が潤みだす。

「あの、ですね。ヘンリエッタとおっしゃる、それは綺麗な方からお聞きしました！きつと、この館に住まう妖精さんにちがいはありません！ものすごくお綺麗で、金色の髪がツヤツヤのぴかぴかで光ってらしてですね、それで！それで、深い深いみどりの瞳・・・の！？」

金の髪。緑の瞳。

ジ・リユーム・タラヴァイエが息を飲むのが解った。

唇が形だけ、瞳のと作ったきりで音を失う。

目を見開く様が、今まで見逃してきた何かに気がついたのだろう。

思い当たるのが遅い。

無邪気なまでに何もかも受け入れてしまう子供の、いいところであり悪いところでもあるように思う。

苛立ちをのせた口調で突放す。

「ヘンリエッタは俺の亡くなった母親だ。もう、十八年も前に」

言いながら、その驚きに固まってしまった身体を抱き上げて部屋を後にしていた。

第三十四話 番外編 一人で祝う誕生日 前編（後書き）

題して 『ラブコメちっくにファンタジア!!』

もう べたべただったの甘あま・甘まままの王道で！

そんな調子でうまれたこの話

すみません。

嘘です。

『ド・シリアスに救いようがない？』
はずでしたが、なぜでしょう。

こう になりました。

しよせん、アッシの書くものですから。ええ。

後編も明日（・・・できるかな。（UPする予定です

すみま

せん！

おおおう！

無理でしたあゝできるだけ早めにUPしますのでお待ちください。

>>>ヴィンセイル（目線）は、彼があまりしゃべるタイプじゃないせいか進みませぬ！（意味不明な責任転嫁。）

第三十五話 番外編 一人で祝う誕生日 中編(前書き)

『おめでとう。』

長すねてこのザマです。 ど・ど・ど！

第三十五話 番外編 一人で祝う誕生日 中編

ヘンリエッタはいつも謝るのです。

(ごめんなさいね、あの子は素直に振舞えないものだから)
リユームはいつも答えます。

「いいえ！お気になさらないで下さいませ、ヘンリエッタ」

そもそも『素直に振舞う』とはどのような事をさすのでしょうか？
そう、疑問を感じて考え込んでしまうのが常です。

いつもヘンリエッタはゆったりと微笑んで、ただただ優しく見守
ってくださるのですが今日は少し違いました。

リユームが一人にいる時や、一人でいなければならぬ時。
気が付けば側に居てくれる、優しいヘンリエッタ。

いつからでしょうか？

リユームの秘密のお友達なのです。

どうやらリユーム以外にヘンリエッタが見えていないようなので
す。

それに、ヘンリエッタも誰かが来るとどこかに行ってしまうので
す。

(あのね。好きなものは好き。キレイなものはキレイ。そう、自分
の気持ちに正直に従える事よ)

そう、にこにこ、にこにこしながら教えて下さいました。

胸がひとつ、大きく脈打ちました。

耳元でどくと大きく音が聞こえたくらいに。

た。

「リユーム。発作を起こしそうか？」

「へ、いきです。その・・・冷たい空気をすいこむと、出てしまうだけです」

立ち止まりその身体を抱え直す。

慌てたわりに頭は冷静だったと言っているのか、ただの条件反射なのか。

少女をくるむための上掛けを引っ掴んで来た自分を、褒めたいような感じしたいような。

そんな複雑な気分のまま、リユームの顔を覗き込んだ。

「無理をさせるが少し付き合え。確かめたい」

「はい、だいじょうぶです」

頷いた拍子にさらりと流れた髪をすくって、耳に掛けてやる。

くすぐりたいのか、リユームは薄っすらと微笑んだ。

「ちゃんとくるまってる。具合が酷くなったらすぐに言え。いいな？」

「はい。わかりました」

そう頷いた少女の頬を撫でてから、目的の件の部屋へと向う。

執務室は静まり返っており、気がなかった。

当然ながら火も熾されておらず、冷気が満ちている。

吐く息が白い。あまり長居するわけには行かない。

目的の壁際に近寄ると、手にしていた燭台のほむらを蝋燭へと分けた。

いったんリユームを下ろすと、朱子織の掛け布を引く。

その途端に現れるのは、金の髪に緑の瞳の女性を描いた絵画だ。

少しほこりをかぶっていたせいか、リユームがくしゃみをした。

そのまま咳き込む。

掃除は毎日されているはずだが、流石にこれには触れぬようにと言いついでしている。

父もしばらくこの絵を見ていないという事なのだろうか。
俺自身も一体どれくらいぶりに見たのか、記憶にすらない。

「この御方が？」

「ヘンリエッタ・シエンテランの二十歳の頃の肖像画だ」

「きれい」

リユームはため息を付くと、瞳を輝かせて賞賛の眼差しを注ぐ。

「どうなんだ？」

「え？」

「オマエの言うヘンリエッタは彼女の姿だったのか？」

「あの、ですね。とても良く似てらっしゃるのですが、リユームのお友達のヘンリエッタ・・・様はもっと幼いです。リユームよりも少しお姉さんくらいで。この絵の中のひとは、大人のひとです。良く似ているのですが違うと思います」

「そうか。では母の名を誰から聞いた？」

「ヘンリエッタがそう名乗ったのです。館の誰からもお聞きしてはいません」

「どういう事だ？」

「やはりヘンリエッタは妖精に違いありません。だって。リユーム以外の人には見えていないのですもの」

「それは、オマエが・・・」

寂しさのあまり作り出した幻想なのではないか。

館の噂話を耳にしてそれをどこかで覚えていたから、それを元に幻想を練り上げたのではないか。

そう思ったがあえて言葉を飲み込んだ。

おおかた、ミゼールド辺りも混ざっているのだろう。

「リユームが？」

「どうせ都合のいい夢でも見ていたのだろう。熱に浮かされて」

「そんなこと、ないとおもいます」

「証拠は？」

「だって、ヘンリエッタ、若さまが三歳のお誕生日にもこうやって
お祝いしたんだって、それに指輪も　！」
珍しくムキになったリユームは声を張り上げた後、慌てて口をつ
ぐんだ。

言わなくてもいい事を言ってしまった。

その表情にはありありとそのように書かれている。

「リユーム？オマエは何を知っている」

「ええと・・・ヘンリエッタ、さまは妖精だったことです」

「やはり俺の母親の亡霊か？」

「妖精、です」

嫌に確信を込められて頷かれた。

「ばかばかしい。そんなものはおとぎ話の中だけだ」

必死で言い募るリユームを一瞥すると、悔しそうに唇をわななか
せている。

これ以上つくと泣き出す。

その潤みだした瞳を見下ろしながら、そう判断が付くのに止めら
れないのは何故なのだろう。

その時だった。

コトン、と小さく何か音が立てたのは。

静まり返った部屋にそれは嫌に響いて、存在感を訴えてきた。

リユームにも聞こえていたのだろう。

互いに視線を合わせる。それを先に逸らしたのはリユームだった。

ヘンリエッタ

闇に向って瞳を見開き、その唇が音も無いまま形作るのを俺は見
逃さなかった。

振り返り、リユームの視線がさ迷う方向に真向かう。

それでも、この目に映るのは闇に支配された室内の風景だけだった。

ただひとつ、ヘンリエッタの肖像画の下に置かれた飾り棚にそれはあった。

ほの淡くちいさな光を放つそれに、吸い込まれるように手を伸ばしながら近づく。

それよりも素早く駆け寄ったリユームに先を越されてしまう。

「リユーム、見せる！」

「・・・だめ、です」

リユームは弱々しく首を横に振りながら、手にした物を後ろ手にして背に庇った。

「ならば説明しろ！それが何故ここにあるんだ！」

「これがリユームの物だからです」

一歩、二歩と近付いただけで距離はあつという間に縮まる。

リユームの表情に焦りと恐怖が見て取れた。その途端、この胸を突き上げるのは愉悦。

まるで子猫を壁際に追い詰めて、隅に追いやってやったかのような優越感を何とする？

大人気ないのは百も承知の上で止められない。

逃げ出せないように両腕を壁に着く。

そうやって閉じ込めてからわざと、もったいぶるかのように膝を折ってゆっくりと視線を合わせた。

リユームがこれ以上、下がりよりの無い壁に身を押し付ける。

それでもなお、庇い続けるソレが何なのか。

何故、ここに今現れたのか。

そつだ。間違はなく何者かがソレを置いて行ったとしか思えない現象だった。

一体何の仕業なのかと好奇心があるのもまた確かだった。

「それは何だ？この館にあるものでオマエのものなど何一つとして

ないクセに」

「そ、それは、あの、その、その通りでございませぬ」
「見せてみる」

あの時と同じ言葉を吐く自分を、どこか嫌に冷静に眺めている。
きっと少女は差し出す。

逆らいようが無いからだ。

逆らうな、と言いつけられているに違いない少女を試すかのよう
に見据えた。

リユームは意を決したかのように、あの、と口を開く。

わななかせながらどうにか言葉を紡ごうとする唇に知らず、見入
っていた。

「あの。お見せしますからその、お願いですから乱暴に扱ったりは
しないで約束して下さいますか？」

「何だ。生意気だな。この館の物を俺がどう扱おうと勝手だろう？」
あのおからさまに財産目当ての女の娘の言う事など、聞く気にも
なれない。

そんな侮蔑を込めた眼差しをぶつける。

そうすることで歪む、少女の表情は見ものだと思えてならない。

傷つけば良い。もっと、深く。

少女に出会ってから込み上げてくる、この説明の付かない苛立ち
は何なのだろう。

その正体は解らないが、憎しみに近い気がした。

闇一色の想いに囚われて行くこの感覚が、全ての判断力を俺から
奪い続けている自覚があった。

「.....」

無言のままリユームは恐るおそるといった風で、手のひらを差し
出した。

そこにあるのは紛れも無くあの指輪。

シザール・タラヴァイエが、かつてオルレイアに贈った金の輝きだった。

これもまた同じように窓から放ってやったらどうなるだろう？
少女は飛び出す。きっと人目を盗んで見つかるまで探し続けるだろう。

たとえ外は雪が積もっていようと、何としても見つけ出そうとするのだろう。

そうして俺は今度こそ動かない小さな身体を抱き上げるのだろうか？

ぞっとした。

その思考もそうだがその可能性にもだ。

脅威は去ったがいつ何時そのような状態に陥ってもおかしくないほど脆弱な肢体。

煩わしいほど配慮の必要な造りは面倒な事この上ない。

まったく、ただ飯ぐらいのくせに手間がかかって仕方が無い。

そう前回意識を取り戻したリユームを見舞ったときに過ぎ去った恐怖感から解放され、訪れた安堵と共に

己が吐き出した言葉だ。

もつしわけありません。

リユーム、もっと雨に打たれば良かったですね。

俺の言葉を真に受け、少女は俯いた。

その瞬間、どうしようもないほど体中の血が沸いた。

振り上げそうになる手をどうにか抑え付ける事で、リユームを殴

「俺に？」

「お誕生日のお祝いです」

怯えながら、リユームは小さく微笑んだ。

室内は冷え切り、お互いの吐き出す息が白い。

かじかみ始めた指先にうっすらと、少女の持つ熱が伝わる。

第三十五話 番外編 一人で祝う誕生日 中編（後書き）

『一部でもいいから完結させな。』

おわらない」と嘆くアツシに、身内からの一言でした。

ほんとうにひとことだよ。

中編って・・・一人ツツコミます。

それでは後編に続きます。

第三十六話 番外編 一人で祝う誕生日 後編(前書き)

『十二歳にできる精一杯』

第三十六話 番外編 一人で祝う誕生日 後編

「本日はお誕生日おめでとございます。ワイン、セイル・シエン、テランさま。

リユームよくよく考えてみましたが、若様にふさわしいお祝いの品はこれしか持っていないませんでした。

どうか、その、わかさまに黄金の祝福がありますように」

幼い声音が厳かに告げた。

こちらの様子を窺いながら、リユームはためらいながらも俺の指先に指輪をはめようとしている。

元はといえばオルレイアにと贈られた女性用の物なのだ。男の指にそれは華奢すぎる。

それでもリユームは真剣な面持ちで、人差し指から始めて一本一本の指先にはめ込もうと試して行く。

やはり大きさ的にもそこに収めるしかなかったであろう小指へとそれは落ち着いた。

ひと仕事終えたとばかりに満足したらしい少女は微笑んだ。視線はうつとりと金の指輪を見つめたまま。

リユームはそこでようやくやく、一切こちらの動向を構わないでいた己に気が付いたようだった。

弾かれたように指輪から視線を上げると俺を見る。

リユームの表情が明らかに強張ったから、俺の眼差しはそれ相当のものだったのだろう。

浮べられた笑みが儚く消える。淡雪のように。

「あの、その。ご迷惑でしたらその、あの・・・お取りいたします」

「リユーム」

「か、勝手に若様のお許しも得ないで出すぎたマネをい・い、いたしまして」

語尾ですら消え入りそうなほどか細くなつて行く。

「リユーム。俺がこの指輪をまた放るとは考えなかつたのか？」

「えと。その、おもいません」

「何を根拠に」

「若様、指輪持つてて下さいました」

「誰に訊いた？言え。叱らないから」

多分な、と内心では呟く。

「ヘンリエッタです」

「どう訊いた？」

「リユームが、悪かつたのです」

「何!？」

「おかー様は内緒ね、と言つたのに嬉しくて見せびらかしたリユームの考えが足りなかつたのです。」

そのせいでお義父様のお気持ちや、おかー様の立場をないがしろにしてしまうところだつたとお聞きしました。ああやってみなに見せて歩いては、リユームがおとーさまのことを忘れないでいると言ふ事になるのですね。こんなにも、お義父様に良くしていただいているのに。それを養女になつた事を不満と取つて、リユームをこの館から連れ出したい方がいるから気をつけるように言われたのです。だから、」

リユームは幼い思考を言葉にすべく、一生懸命だつた。

そのたどたどしさにワケもなく腹が立って、途中で遮るべく口を挟む。

「出て行きたいか？」

「若さまが、そう望まれるのならば」

喜んで従いましょう、とリユームは頷いた。

唇を噛み締めるように引き結び、必死で震えを押さえ込んでいる様を眺めるかのように見据えた。

ゆっくりと閉じ込めるように、少女の脇の壁に両手を付く。
その噛み締められた事で増した紅さに目を奪われたまま、呟いた。
「俺とて・・・出来る事ならば」

何だという？

答えが何故か浮かばない。

気が付けばリュームの顎を捕らえて、眼差しですらそらせぬ様にしていた。

互いの息使いが頬をふれ合う程の距離。

その闇色の瞳を覗き込んで捕らえる。

ひゅう、とリュームが息を吸い込んだ途端に喉が鳴る音が耳元をかすめる。

取り繕う余裕も無かったらしいリュームの表情が歪む。

ぜ、ぜ、と苦しそうに吐き出される息が乱れる。

呼吸音も痛々しいまでに不規則だ。

「リューム！」

しまった、と思わず舌を打った。それを非難と受け取ったのだろう。

ひくつと少女の肩が上がる。息を飲む、その仕草がはっきりと怯えを表していた。

「ご、ごめ、さ・・・っ」

言い掛けてから、頭を打ち振って言い直す。

「もう、しわけありません」

そういえば、ここ最近謝る時はいつも『もうしわけありません』という言葉を用いている事に気が付く。

おおかた母親に言葉使いを教え込まれたのだろう。

たどたどしさにワケもなく腹が立つ。

その畏まった口調で話すぎこちなさがまた、俺の中の言いようの無い不快感を煽る。

若様くらいのお年と、ちょうどつりあう様に思います。

リユーム、驚いた？ごめんなさいね。ワタシよ。ヘンリエッタ！
さっき見た絵もワタシ！
今まで見せていた姿もワタシ！

（そ、ですね。そのようですね。ヘンリエッタ・・・さまは、やはり妖精なのですね。
好きな姿に変えられるのですね！すごい・すごい・すごいです
！）

ふふふ。では、そうしておきましょうか。

ヘンリエッタは一瞬目を伏せましたが、にこにこしています。

見た？あの子の驚いた顔！見ものだったわねえ。ああ、いい気味
なこと。

これで少しは反省してくればいいんだけど。

（反省？）

うん。リユーム、ごめんね。あの子、ばかで。あなたはいい子なの
じょ。ごめんね。

・・・これからもあの子をお願いします。

（へ、ヘンリエッタ？）

なでなでと何回も頭を撫でられました。

ワタシ、もう行かなくちゃならないの。もう、これでアナタに会

うのは最後。

(嫌！行っちゃ嫌！ヘンリエッタ、また遊んで下さい！)

突然の言葉にリユームは反射的に飛びついていました。

うん。あのね、アナタもうオトナになるのね。そうになると、やっぱりワタシのような者が関わるのは難しいの。

うーん。うまく言えないけど、ワタシのこと自然に忘れちゃうようになるものなのね。それが自然なの。

あの子なんて物凄く早い段階でオトナ意識に成長してくれちゃって、ワタシの事なんてすっかりキレイに忘れ去ってくれてるわね。

それで、いいのよ。うん。

妖精が見えるのは子供の心を持った者だけ、って決まりだから。なんてね。妖精じゃなくて、亡霊だけ。

(ヘンリエッタは妖精です！いえ、亡霊でも妖精でもヘンリエッタはヘンリエッタです！ずっと一緒に居たいですから、行かないで下さい！)

ううん。行ってしまうのはあなたの方なのよ、リユーム。あなたもだんだんと・・・成長して行く。

ワタシを置いて。だからまだこうやって夢に介入してお話できるうちに、お別れの挨拶を済まそうと思ったの。元気だね。ずっと見守っているからね。

(夢？これは夢なのですか？)

ヘンリエッタが優しく頬に触れながら、リユームの耳元に唇を寄せてくれます。

その勢いもあつてか、無言でその様子を見守ってしまった。と、
いうよりも呆気に取られてしまった。

「きげんよう。」

そう優雅に礼をとると、くるりと背を向けられた。
闇色の髪がひるがえる。

は？

(出て行く？一人で生きて行く？健康になった？)

どこに？どうやって？誰が？

「ジ・リユーム・タラヴァイエ！！」

気が付けば、精一杯の音量で怒鳴りつけている自分がいた。

第三十六話 番外編 一人で祝う誕生日 後編（後書き）

『十三歳（の後半。）にしても許される 精一杯！』

えーと？

にいさん、自制をお願いします。色々と。

はい。

おそれず・ひるまず・この気持ちを差し出せたならば をテーマ
に書き上げてみました。

ある程度幼く、素直さを持ち合せた方が力を発揮できているかもし
れません。

長々・長々〜お付き合いありがとうございます！

次回は本編戻ります。

『離れていてもB A カップル候補』の予定です。

第三十七話 ジャスリート家でかいま見る闇（前書き）

『何だかものすごく・お久しぶりな気がします』

気のせいじゃない。

ええ。久しぶりに戻って来ました、本編です。

第三十七話 ジャスリート家でかいま見る闇

ねえ。リユーム？もうボクのために歌ってはくれないの？

にゃあ　　ん

はつきりと。

でもどこか遠くに響いて、その鳴き声は吸い込まれて行きます。

あれ？エキ？そのかわいらしいお声はエキですか？どこですか？

どこですか？

姿を探して呼びかけてみても目の前に広がるのは闇ばかり。

思わず自分の手を前へと差し伸べてみましたが、それですらこの瞳には映りません。

闇。

なんて深い。

闇に深さなどあるのでしょうかと思わず自分で問いかけてしまいました。

真の暗闇。

闇に真も嘘もあるものでしょうか。

何かを掴もうと伸ばしていた腕が、手が、いらぬほどに白く朝日に暴かれておりました。

そして一番に目に付くのは己の白いを通り越して、青白いと表現するのに相応しい手であります。

(リユーム・・・相変らず血行不良のようですね)

心地よい闇に包まれていたときは、その爪先さえも見えなかったハズなのに。

何を掴もうとしていたのですか、リユームよ？

ぱたりと腕を寝台に落としてから、両手で顔を覆いました。

夢ですか。それにしても何て生々しい。

(おはようございます)

心の中で呟きながら身を起こしますと、頭がくらくらしました。

それをふり払うべく頭を左右に振りますと、ますますくらくらしました。

朝から起き上がれずに、寝台に突っ伏す格好に何やら申し訳なさが募るリユームでゴザイマス。

しかしそれが今しがた見ていたらしい夢を反芻するのにはもってこいの格好だったようでした。

闇に浮かぶ 緑の瞳。

耳に響いた リユームを呼ぶ声。

それだけが 闇にあった全て。

「う・・・うえっ、つく！」

何故かしらこの胸が疼きます。ずきずきと。そして時折りぎゅっと絞られるような感覚に、恐れをなすリユームです。

何でしょうか、また新たな病の発症ですか？

ジャスリート家に来てから良いはずの体調も、じんわり陰りを見せ始めていますか！ご勘弁を！

朝からじめじめしてどうしますか、リユームよ？

そんな調子で自分を叱咤します。きつとアレです。寝起きだからです！こんなにめそめそしてしまうのわ！

（ご領主様・・・どう過ごされていらっしやいますか？）

何ですか。朝から！調子狂いますね、もう。

「う、えつく、ごりよしゅ・・・ま

あいたいです。何て言えませんが。誰にも。

自分で飛び出してきておいて、何てザマでしょうかね。本当にザマあないですよー！

思わず漏れる嗚咽を寝台に押し付けて、無理やり封じ込めてやりました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

さて。

リユームといえばこのジャスリート家にお世話になって早・四日目でございます。

その間にこなしたことといえば・・・新しい服のための採寸と迷子にならないために館内を巡った事と。

あとは、お屋敷の方々にご挨拶をしまわったり、ルゼ様のご希望で歌ったくらいでしょうか。

要はあまり何もできていません。その割りにあっという間に日たちが経っておりますね。

うづうづう。いたたまれません。

何かお手伝いをさせて下さい、草むしりでも何でもと訴えましたところ。

ルゼ様は「そうねー？」と仰いながらリユームに布キレを下さいました。

何でしょう？

そう小首を傾げましたら、にっこりと笑いかけられました。

「リユーム嬢。これで館の鏡を全部きれいにしてちょうだい？ゆつくりでいいからね。この館に鏡はいくつあるのかしら？ええ、ああそう？わからない？ですってよ、リユーム嬢。それも数えてみてちょうだいな。もちろん一人では不案内でしょうからダグレスを付けるわ。できる？」

もちろんですとも！！お掃除ですね！よっし、張り切って行きま

す！

「倒れない程度でがんばってねー？」

そんなお優しいルゼ様のお声に、深く頷くリユームです。

行きますよ、ダグレスっ！

と横を見やると彼は、後ろ足で耳を掻いていました。

あんまり協力的ではないようですね、ダグレス。
「ダグレスよろしくお願いします。まず手始めにそのダグレスの立派な角から、ぴかぴかにして差し上げようと思います！」

” ” せんでいいわ！小娘っ！！ ” ”

「はいはい、仲良くねー？」

そんな調子で部屋から送り出された次第でゴザイマス。

「ダグレス。後は？」

「まったくルゼめ、我に小娘のお守りを押し付けおつてからに、等とぶつくさぶつくさ言うダグレスを宥めすかしてお屋敷を回ります。

「あのですねーダグレス？リゼライさんって、だあれ？ダグレスの

「はい。モチロンでございます！」

お仕事、任せて、いただいた！

嬉しくてこくこくと何度も頭を縦に振りました。

(アレ？縫い取り物、得意？って何でルゼ様をご存知なんでしょう？)

その疑問を口にするよりも早く、ルゼ様がいよいよこらえ切れなくなったらしく吹き出されてしまいました。

「あつはつは！ごめんなさいね、突然に！ああ、もう！最高だわ、リユーム嬢。アナタも本当に楽しませてくれるわね」

「そ、そうですね？それは、あの良かったです？」

きよとんとしてしまいます。ええと？どう反応すればよいかわかりませんね。どうしたら？

思わず隣のディーナ様に視線を送ってしまいます。

「もう一杯いかがかしら？リユーム嬢」

「いただきます」

ディーナ様もある意味、ご自分の調子を崩されませんね。優雅です。にこにここと優しく見守って下さっているご様子が嬉しいです。

えへへ、とだらしなく笑ってしまいます。

「ふふ。リユーム嬢のお義兄様ね、とても活躍されていらっしやるそうよ。ねえ、ルゼ様？」

笑いを収めつつあるルゼ様にもお茶を注ぎながら、ディーナ様が促がされました。

うぐつとはしたなくも思わず吹き出しそうになりました。

けほ、つと小さく咳き込むほどに驚きました。リユームのお義兄様ですか。あの方は「義兄」と呼ぶのは許してくれないんですよ、何てまさか言えません。

「そうなのよ。この短期間でこなしてきた業務の早い事！そして正確なこと！もともと仕事ぶりは丁寧だったから別段驚きもしないん

ですけど、まさかアレだけ難航していた農業用水の確保のための事業案をさっくりまとめて来ちゃったわよー。あれだけぐずっていた地主をまるめこ……もとい、納得させるとはね。何やったんでしようねー？」

「さ、左様でございますか!？」

知らなかつたです。初めて耳にする領主としてのお仕事ぶりに、リユームは改めて自分の小ささを見せ付けられた気がしました。

それなのにリユームときたら何のお役にも立てませんと、しょんぼりするしかありません。

「元々確実な仕事っぷりだったのよ?でも、ここの所の活躍っぷりはこちらが舌を巻くわ!外交やら交渉なら身内の鼻屑を無しにしたって、ウチのフィルガが一番敏腕だと評価していただけにね。すごいすごい。リユーム嬢の存在はすごい」

「な、何故でございますか!？」

心底驚いて身を乗り出し、思わずルゼ様に詰め寄るようになってしまいました。

(今つ、今までリユームが、ものすごい足手まといであったから?いなくなつた途端、重荷が取れてご領主様は益々のご活躍っていう運びですか?)

「え。ヴィンセイル殿ががんばるのは、リユーム嬢のために決まっているじゃない」

「そ、そんなにがんばらねばならぬほど、リユームのお薬代やらお医者代やらその他もろもろの費用がっ!シエンテラン家の負担になっているのでしょうか!？」

「全然。痛くも痒くもないわよ。それどころか大喜びで財を差し出すでしょうよ。それくらいでアナタの事が守れるのなら、安い出費だわ。ヴィンセイル殿はね、私に認められたいからがんばっているのよ。そうすれば　ねえ?」

「大丈夫ですか、リユーム嬢？」

ディーナ様が落ち着くようにと背を撫でて下さいますが、痛みはいつかな引いてはくれません。

やはり新たな病の到来のようです。何てことでしょうか。

エキとの契約もままならない今、どうやって乗り切れればいいでしょうか。

そつとディーナ様の目配せに促がされ、今一度その姿を窺うために隙間から覗き込みました。

彼はまた馬に乗り、お屋敷の門をくぐった模様であります。

(ご領主様、です)

あの金色の髪と、広い背中は見間違いようがありません。

その背を食い入るように見つめ、追いつがるリユームは一体どうしちゃったのでしょうか？

「帰られるようね。また明日、同じ頃にいらつしゃると思うわよ」

「な、何用で・・・ああ、お仕事のお話でらっしゃいますね」

「え。リユーム嬢、正気？」

背を撫でてくださる手がぴたりと止まりました。

「はい？」

「わたくしも大概、鈍いようですが安心しました。リユーム嬢、ルゼ様のお話をきちんと聞いていらした？それとも聞いていたけれど、理解できなかったのね？そうね・・・そのようね」

「え。お待ちくださいディーナ様」

自己完結は後生ですから、お許しください！お良しください！

縋るようにしてディーナ様の空色の瞳を覗きこみましたが、小さく笑って誤魔化されてしまいました。

「ねえ、見て。あまり深く見ては危ないけれども、少しだけならわたくしが付いているから大丈夫だと思うから。見てちょうだい」

真剣な眼差しにためらいなく頷き、ディーナ様の指差す方向を見ました。

(なっ!?!アレはリユームを探していたモノと同じような)

「闇!?!」

「しっ!リユーム嬢、気付かれてはならないわ」

ディーナ様が珍しく鋭くたしなめられました。

目を見開いたまま、リユームはただただ頷くしかありません。

無意識の内に己をかき抱きながら、今見たものが間違いであって欲しい。そう祈りました。

アレは。アレは、アレは、アレは!

(リユームがシェンテラン家を後にする時に見たものと同じもの)
それはご領主様の肩や足に、まわりつくかのように細く微かに・
でも確かに取り巻いておりました。

” ” 我とて尻込みするわ。面倒で。 ” ”

ダグレスがそう評価した、関わりたくない物の代表です。

残念な事にリユームは既に関わりあっているようですけれども。

「リユーム嬢が一声発しただけで気が付いたわ。やはり、油断なら無いわね。ダグレス!」

” ” お呼びでしょうか、嬢様 ” ”

すぐさま、石壁の影からともいいますように。闇色のダグレスが現れました。

「ええ。あの闇の眼をリユーム嬢からそむけて欲しいの」

” ” 承知いたしました ” ”

ダグレスがうやうやしく垂れた頭を、ご領主様の方角の方に向か

って振り上げました。

ひゅおん、っとダグレスの一角が空を切ります。

とたんに目には映らない何か、ダグレスの起こした風によってふり払われました。

リユームへと手を伸ばしていたらしい闇がちりぢりとなって霧散し、一粒一粒が意志を持ってまた彼にまわりつくべく戻って行くのを眺めていました。

「リユーム嬢。もう、見ては駄目」

そ、と後ろから目隠しされてしまいました。

ディーナ様のその細い指先に視界を遮られるまで、リユームはご領主様の立ち去る背中を食い入るように見ていたようです。

「あれは、ご領主様に害なしたりしていませんか？」

そう尋ねるのがやっとなほど、リユームは震えていました。

「今は、まだ、だいじょうぶよ」

ゆっくりと一区切り、一区切りディーナ様が苦しげに答えて下さいました。

今は、まだ。

でも、きつと。

時間の問題かもしれません。

そう先々つむがれるかもしれない言葉を予想して、リユームはその場に泣き崩れました。

あの闇の正体は、得たいが知れませんが確実な事がひとつ、ふたつ。

あれはシエンテラン家を包む闇。

リユームを生け贄と望む闇。

では、リユームがいなくなると闇はどこに向うのでしょうか？

第三十七話 ジャスリート家がかいま見る闇（後書き）

『離れていてもBA カップル候補』

（仮）タイトルです。

この「小説家になろう」様のサイトの書きかけ保存する時に、解りやすい仮タイトルを付けるのですが。

毎回、UPする時、他のと間違つてUPしてしまわないかドキドキですよ。

どんだけ、書きかけあるんだって話です。

そしてそこはおおばかわーるとぜんかいなのです。

カオスです。

がんばります。がんばってます。

「毎日更新とかしちゃう？」って目論んで、書きかけに泣いてる時点で諦めが付きました。

なるべく早く、続きを！わたし！

第三十八話 ジャスリート家で受け取った手紙（前書き）

黒い郵便配達係りが面白がっています。

見えない所でも暗躍中。

第三十八話 ジャスリート家で受け取った手紙

上がった塔でたつぷりと風に吹かれて涙も乾く頃、リユームを迎えに来てくれたのはレドでした。

” さつさとしろ ”

「？」

すごく不機嫌そうにレドはその背へと向って、顎をしゃくり上げました。

ふさふさの尻尾も左右に振られ、イライラしているのが見て取れます。

” ” 部屋に送り届けてやる。だから、さつさとレドにつかまれ。

ディーナのお願いだから聞いてやるのだからな？ありがたく思え、黒髪！”

それだけ一気に告げると、後は嫌そうにそっぽを向いてしまいました。

正直その申し出はすごくありがたかったです。

ですがそれは、触られるのをあんなに嫌がっていたレドに、無理強いする形になってしまいますよね？

レドはディーナ様の事が好きだから仕方なく、そう申し出てくれているのです。

カラス色など見たくも無い！

レドはそう言っていましたからね。

今はリユームもその気分です。

カラス色・・・闇色を見るのはやはり、あまりいい気がしない方

もいるものでしょうしね。

(ダグレスやエキには申しわけありませんが。)
先程、ご領主様を見送りながら改めてそう感じてしまいましたもの。

レドの光に祝福されたかのような、微かに金の混じる純白の毛並に触れられるまたとない機会です。

ですがあの闇を見た直後という事もあってか、今なお闇にまとわり付かれている身が触れるのはどうも気が引けました。

「ありがとうございます。お気遣いに感謝いたします。ですが、嫌がっているレドに触れるのもどうかと思いますし。ですから、レドはどうぞお戻りくださいませ」

リユームはすぐさま涙を拭くと立ち上がって、首と両手を振って見せました。

「あの。自分で歩いて戻りますから、大丈夫です。気を使わせてしまつて申しわけありませんでした」

そう頭を下げるリユームにレドはただ四肢を突っ張らせて、ぐうと小さく唸ります。

レドに背を向けて、そのまま歩き始めます。

これからどうしましょう。

何から手をつけましょうか。

早く手を打たないと、闇はどこに手を伸ばすのか、わからないのですよね。

ああ、どうしよう。

何ですかね。これ。どつかで読んだ事ある気がします。ええ。

” 何だ？何が書いてあったのだ”

「お小言の羅列が主文です」

リユームは読み上げて差し上げました。

どことなく、あの偉そうでぶっきらぼうな口調を真似て。

そうする事で間違いなくこれは、シエンテラン家で館内行き倒れをやらかした直後に書かれたモノと何ら変わらないと確信しました。ダグレスが愉快だ、と言いながら軽く首を縦に振りました。

何が愉快なものですか！

リユームは内心むっかりしながら、ため息を付きました。

牙を少しだけ覗かせるように、ダグレスの口角が持ち上がります。

” まだ、続きがあるようだが？”

「え。あ、本当です。二枚目がありましたね」

投げやりに、二枚目を取ります。

多分、似たようなお小言だろうと思いつながら目を通しました。

そこに飛び込んできた一言に、息が詰まるのは何故でしょう？

『皆、オマエの帰りを待っている。』

ただ、その一行のための二枚目に思わず指に力が入りました。

紙の端がくしゃり、と音を立てて引きつれます。

（みんな。ニーナ、バルハートさん、シンラ、エキ。それにはご領主様も含まれるのでしょうか？）

そんなリユームの不安を即座に感じ取ったらしいダグレスの、紅い眼がきらめきます。

” 我が感じたままを言葉にして表してやるのか？”

「感じたままでですか？」

” リュームが愛いとしい ”

全ての身動きを止め、ただその言葉だけに意識を奪われてしまうリュームに、ダグレスが追い打ちをかけるように続けます。

” リュームが恋しい。早く帰ってきて欲しい ”

それこそダグレスはご領主様さながらの口調でありました。

全くもってこの獣サマの作りはどうなってるっしょるんでしょるかね!?

リュームを話を通じないと面倒だからと、獣さまの言葉がわかる『獣耳』にしてくれたのはダグレスです。

その申し出を受けた事を、軽く後悔してしまうのではないですか！ダグレスときたら明らかにからかって、面白がっているように思います。

悔しいですがリューム、ダグレスが大喜びするような反応を止められません。

要は大いに照れて顔は真っ赤で、動揺もあらわにただ口をぱくぱくさせてしまえばかりって事です。

「そんな、だつて、そんな事ちつとも解るように書いてありませんし。それに、それにっ！そのお・・・あの方がそんなお優しい口調でリュームに話すわけがないじゃないですか！」

” そんなに照れなくとも良いと思うが ”
言いながらもダグレスはゴキゲンです。

悔しい。やたら悔しいので、後でリゼライさんとやらについてもっと知ってやろうと決心したくらいです。

” ” いいからさっさとその上着に相応しい、縫い取り物とやらを施してやれ。期限は七日以内だぞ。それがオマエの仕事らしいからな。励めよ！でわな” ”

そう笑いを含んだ語尾を、手紙をくわえたくらいでは押さえ切れないらしいダグレスは、さっさと背を向けると行ってしまうました。

. . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . *

七日以内ですか？

何かちよつと嫌な予感というか。胸騒ぎがしますね、その七日後とやら。

そしてよくよく見れば傍らには、これまた丁寧にリュームのお裁縫箱がありましたよ。

『縫い取り物か？』

『あ、はい？』

会 話 終 了 。

そんな、あの時のやり取りがよみがえります。

縫い取り物。

刺繍の事をそう呼ぶのはリュームの中で一人様しか心当たりがありませんのでよ。

縫い取り物っていう言い方に、嫌に引っ掛かりを覚えるリューム
でございます。

第三十八話 ジャスリート家で受け取った手紙（後書き）

今回もちよつとばかり、しょうもないカップルがいちゃついでいて黒い郵便係は『やってらんねー。』とぶつくさ言いつつ楽しんでいきます。

おかしい。また、仮タイトルから離れた内容になりました。

次回、予告（というネタバレ。）

「来ましたよ。勝負のお茶会」 頭文字 R 組 の心境。

「（お）茶会というより（お）見合いでわ」 頭文字 D 組 の心境。

「あー楽しみだ事」 主催者の心境。

何のこっちゃんのお遊び、お付き合いありがとうございました！

第三十九話 ジャスリート家で迎える勝負の前（前書き）

勝負の前に士気を高めようって事で。

嘘です。

相変わらず目標ここまで！に、たどり着けませんでした。

（今回もちと長いです。休憩はさまれながら、どうぞです！）

第三十九話 ジャスリート家で迎える勝負の前

ジャスリート家のお庭はそりゃあ見事なものなのです。

お花のアーチがあつたり、お池があつたり。

そのまま奥に進むほどお花より緑が多くなっているようです。

広々と開けた場所もあれば、うっそうと生い茂る葉に覆われた小道もあります。

そこに身を隠しつつ進んでみたりして楽しめます。

シエンテラン家のお庭も大好きなのですが、それとはまた違った趣があるのです。

鼻歌まじりに進みます。

お花だけではなく木立の一角もあつて、ちよつとした森のような場所があります。そこを目指します。

シエンテラン家には無かつたそこが何とも落ち着くので、リュームは日参しております。

そこで木に寄りかかってしばらく過ごし、元気をもらってから戻るのです。

(あ どうしましょうか?)

リュームがいつも寄りかかっている木の下には、既に先客の姿がありました。

レドです。

気持ち良さそうに目を閉じて、のんびりとくつろいでいました。

(近寄っては邪魔してしまいますね。帰りましょう。そうっと、そ
うっと)

静かにそのまま背を向けようとした、ちょうどその時にレドが薄っすらと目を開けました。

首を持ち上げると、うとううと唸って牙を見せます。

「あの、レド。邪魔してしまいましたね？ごめんなさい」

” ”べつに。” ” ”

素っ気無くそれだけ言うと、レドは再び頭を伏せました。

「少しご一緒させていただいてもよろしいでしょうか？」

返事を待たずにその場に腰を下ろしてしまいます。

それが間違いだったようです。

とたんに、レドの尻尾が勢い良く左右に振り出します。

” ”レドは・・・リユームなんてキライ、だ!!!” ”

そのままレドは半回転。ぷいっつと背を向けられてしまいました。

「レド」

” ”ふん。だってダグレスとお揃いのカラス色で！真っ黒でみっ

ともないから、キライだ!” ”

「はい。ごめんなさい」

うな垂れると自身の黒髪がさらりと零れて、視界をよぎりました。

カラスカラス。真っ黒の髪。

ははは。はい。常々あの方から言われ続けていたおかげでしょうか。

そんなに取り乱したりせずに済んでおります。

それに、何と言いましょうか？

あの方に言われ続けた言葉が、眼差しが蘇りますが、レドの言葉が胸を抉るワケでもないのです。

ただこの胸にわだかまってしまふのは、何ともいえない申し訳な

も見えました。

衣服の上からでも彼の体つきはとても厚みがあり、戦うための筋肉がしっかりついているのが解ります。

それに加えてよく日に焼けた肌が、ただでさえ精悍な印象をさらに強めて見せます。

（どこの騎士様でしょうか？ ジャスリート家の護衛の方でしょうか）

その自信に満ちた笑い方と言い、立ち居振る舞いと言い、何かしらリユーム馴染み深い気がします。

それでもこの目の前の方が誰なのかがわかりません。

このもどかしさと気味の悪さが相まって、思わず身を引いてしまいます。

レドがすかさずリユームの前に出ました。

「レドー！」

まるで庇うように。

「どけるレド。邪魔だ」

” ” ” ” ” ” ” ”

「リユームにはこれから客人をもてなしてもらおう。子供ガキの相手をしている暇なぞないわ」

” ” ” ” ” ” ” ”

ふん、と鼻を鳴らしてまた嫌な感じで口角を釣り上げるこの男性はですね。

（もしかして。この調子はもしかして）

彼もまたしゃがみ込むと、リユームたちと同じ高さにまで視線を合わせました。

とたんに飛び込む紅い紅い、紅すぎて遠目には黒に見せる眼と視線がぶつかります。

彼もまたご領主様と張り合うくらい鋭い目付きです。

まるで遙か空からでも獲物を逃さないような鷹のよう。

髪はリユームと同じ真つ黒で、服装も黒で統一された中での唯一の色彩とも言える紅い宝玉。

それには覚えがありません。

「ダグレス！」

何だもう解ったのか、つまらんなど、にやりと口角を上げて笑う様がまさにダグレスです。

どんな姿をとろうとも！

「ほう。よく解ったな、カラス娘。褒めてやろう」

「ええ。まる分かりですよ。そんなに威張った話し方をするのは、ご領主様か、ダグレスくらいしか思い当たらないですから」

「何だと。」

「しかし、ダグレス！人の姿にもなれるんですか。やりますねえ。どうなってるんですか！その造りは、獣サマ？」

「どうもなにも。我は力があるからな。その無能と一緒にするな。またしてもレドを見下したように、はんつと笑うのでリユームはレドよりも前に這い出ました。」

「どんな姿をとってもダグレスはダグレスですね。感じの悪い。ふわふわの素敵な毛並で無い分可愛らしさのカケラも見当たりません。それどころか、余計に憎らしさが増していますね。それに、せっかくの一角はどうしたのですか？」

「オマエは。どうあっても口が減らないな」

言いながらダグレスは、自分の腰帯に掛けた剣に触れて見せました。

少しだけ柄を鞘から浮かせ、覗かせたその剣も深い闇の色です。

思わず釘付けになるほどの見事な光沢を放つ様は、なかなか迫力があります。

リユームは納得して頷いて見せました。

「そうですか。取り外し可能でしたか。便利ですね」

「そうだといえばそうだが。無性に癩に障るな、その言い方は」
ダグレスは忌々しそうに目を眇めます。

” 何しに来た、ダグレス”

「だから、リユームを迎えに来たと言っているだろうか」

” レドが連れて行く。行こう、リユーム!”

「駄目だ。今日は獣を見慣れぬ連中の集いだからな。悔しかったらオマエも人型を取れるようになる事だ」

「リユーム、レドと行きたいです」

「貴様」

「だって。なあんか嫌あな予感がするんですもの。何を企んでいるのですか、ダグレス？」

「企むも何も！我は愉快なだけだ。これからあの若造がどんな顔をするのか想像するだけでな！」

「それが嫌な感じだっていうんですよ、ダグレス。しかし、ミゼル様はすごいですねえ。このようなダグレスの本性知らずして既に良い性格をしていると見抜いていらっしやいましたからね。ミゼル様！大正解ですよー」

思わずここにはいないミゼル様にご報告です。

「ああ！？ああ・・・あの金の髪の娘か。あれも獣耳で無いが近いものは持っていたな。来ていたぞ」

「え！？」

「今しがた到着したばかりだが」

さらりとダグレスが言い放ちました。

その言葉に勢い良く立ち上がり、駆け出したのは言うまでもありません！

泣きじゃくりともお話できる状態ではないようで、リユームはただただその背をさすりました。

（何の事でしょうかね？リユームはいつの間にお嫁さんになる事になっちゃってるんでしょうかね？）

困って扉の影からこちらを窺う、ルゼ様とディーナ様を代わる代わる見渡しましたが、お二人ともからはただ微笑み返されるばかりでした。

「大体からにしてねえ、ヴァインセイルがなっていないから悪いのよ！すん、と鼻を鳴らされてから、ミゼル様が勢い良く言い放ちます。

「え・・・えと？ミゼル様」

「ヴァインセイルは馬鹿なのよ。やり方が子供じみているったらないから、こういう事に・なるのよ」

「うわあ。ついに！ついに呼び捨て定着ですか、ミゼル様。流石です。」

「リユーム、ついにヴァインセイルの側に居るのが嫌になったのではありません？だから・だからっ、他所の家にお嫁に行くなんて言い出したんでしょう！？」

「いいえ、ミゼル様」

「嘘よっ！！子供だと思って馬鹿にして。リユームまで私を誤魔化そうとするの何て許さないんだから」

ぎゅうつとミゼル様の小さな手が、カ一杯リユームにしがみ付いたまま小刻みに震えています。

「落ち着いて下さいませ、ミゼル様。リユーム、お嫁になんて行ったりなんてしませんよ？どうしてそのような話になっているのでしょうか？」

落ち着かれますようにと思しながら、ミゼル様の後ろ頭を撫でながら尋ねました。

「じゃあ、何故！？こうしてリユームは公爵様の所にいるの？説明

してみなさいよ！どうして、何のためにシエンテラン家から出て行ったの？」

「ミゼル様、それは」

（無理矢理ですね、ちゅーだのぎゅーだのされた上………それ以上だのをですね、されそうになったからなんでしょう。ごさいますよ。他にも色々と問題が山積みです）

ハイ、まさか、言えません。ミゼル様はまだ十四歳と半分ですから。

それを差し置いたとしても言えません！

何と説明していいものやらと、リユームが言葉を選ぶためにみせたほんの少しの迷いの隙にもミゼル様の訴えは続きます。

「はつきり言いなさいよ！ヴィンセイルの事がどうしようもなく嫌になったのでしょうか！？」

「ミゼル様、どうされたのです？」

必死でしがみつくミゼル様のあまりに必死なご様子に、リユームの胸もまた絞られるかのようでした。

「だってお父様もお母様も、リユームは公爵様に気に入られて養女として引き取られたんだって！そこで公爵様のお目になつた方と婚礼を挙げるのだから、だから、もう私とはおいそれと会えなくなるんだって言うのですもの！だから、私、公爵様にお手紙を書いたのよ。リユームを返して下さいって！」

「そうでしたか。お手紙を？」

リユームが目線だけを向けて問うと、扉の影のルゼ様は頷かれませんでした。

「行かないでリユーム！どこにも、行かないって約束して。今すぐ帰るって言いなさいよ、リユーム！」

リユームはそのミゼル様の涙に濡れた頬を拭いながら、弱々しく首を横に振って見せます。

「はい」

本日はジャスリート家ルゼ様主催のお茶会でございます。

心の中でも力強く頷いてまいります。

ある意味ですね、勝負のお茶会なんですよ、とは伏せておきましよう。

「勝負ね、リユーム」

「はい……ってミゼル様!？」

何故それをご存知なのでしょうかとのけ反ってしまいます。

「公爵様は私にも同席の許可を下さったわ。私の目から見て、リユームに相応しい人とやらを見極めてもいいとまで仰って下さったの」「リユームに、ですか？リユームが、ご領主様に相応しいかどうかではなくてですか？」

「そうよ。リユームを大切に出来る人に任せたいから、私も側に付いているわ！もちろん、邪魔なんてしないで見守るに徹するわ。うん、公爵様とディーナ様のお手伝いをする。うんと令嬢らしく振舞うって約束するわ」

「こ、心強うございます、ミゼル様。しかし、ですね、恥ずかしくもありマス！」

レドのふわふわさに落ち着きを取り戻したらしいミゼル様に笑顔が戻りました。

良かったです。

レドも金の髪の毛のミゼル様を好ましく思っているようでほっとしました。

” ”リゼライと似ている” ” ”と言って穏やかに身を任せています。

「レドはミゼル様が気に入ったようですよ。良かったですね」

そう？とミゼル様はレドに抱きついてその琥珀の瞳を覗きこんでいます。

レドの尻尾がぱたり、ぱたりと床を打ちます。
ええ、間違いなく。

そう答えるつもりで頷くと、ミゼル様が上目使いでこちらを見ておりました。

レドの頭にご自分の顎を乗せながらです。

かっ・・・可愛らしすぎです！！美少女と獣。何て絵になる組み合わせなんでしょうか！

このままミゼル様とレドに抱きついてもいいでしょうか。

今ならレドの機嫌も良さげですので、何とか行けそうな気がします。

直に床にくつろぐお二方に近付きます。そろっと、さり気なさを装いつつ。

「リユーム、何だか変わったわ」

「そうでしょうか？」

「うん。何だか、すごく、綺麗になったわ」

「ええ！？」

申し訳ないくらい、変わった気がしないのですが。

思い切りぎゅううとした上で、ちゅううっとしてくれましょうぞ！

そんなヨコシマな気持ちで広げていたリユームの腕は、行き場を失ってしまっつてものです。

でもせっかく褒めて下さっているミゼル様にそんな事を告げられません。

ただ少し照れて困ったように笑って見せました。

また、ミゼル様は上目使いです。凝視されてしまいます。

「グインセイルに見せるのが惜しい気がする」

「ええ！？」

第三十九話 ジャスリート家で迎える勝負の前（後書き）

『これでも削りました。』

そんな言い訳はどうでもいいですね。
すみません。

今回は小話です！

ええええええええ！？

言い切っちゃう辺りでもう書いてるんだなと、バレバレですね。
はい。

もう、スクロールも長くて申しわけないので『閑話』って事でUP
します。

お付き合いありがとうございます！

閑話 く女同士の作戦会議く（前書き）

予告どおりの小話です。

今回はディーナ目線です。

閑話　く女同士の作戦会議

「リユームはあの通りでございましょう？ですから私がしつかりしないとして、いつも幼い時から思っていたんですの」

「まあ」

未だ興奮も冷めやらず、時折り涙をこぼしながら小さな令嬢は言い切った。

「ミゼルド嬢もリユーム嬢が大好きなのね」

「はい。そうです、ディーナ様。だってあんまりにもぼんやりしていて、放っておかれないのですもの。危なっかしくて！」

「ふふふ。リユーム嬢にとってミゼル嬢はそりゃあ大切なお友達でしょうに」

ルゼ様からそう言われて、この金髪の少女はとたんに気をよくしたらしく得意げに微笑んだ。

「リユームはあの性格だし、それに体も弱かったから。私がいつも遊んであげていましたの。それなのに、私に何の断りも無くシェンテラン家を飛び出したと聞いた時はそりゃあ腹が立ちましたわ！」

「ところで、ミゼル様はおいくつなのかしら？」

「もうじき15歳になります」

「では、まだ14歳なのですか？」

「ハイ。あと、少しです」

「ではリユーム嬢とはよつつ違いなのですね？」

「はい。でもリユームは実年齢よりも精神年齢はうんと下ですから、私よりも幼いくらいですわ。そんな子がお嫁に行くなんて、いくら

なんでも早すぎます」

ルゼ様と二人、お互い視線だけを合わせる。

真剣な表情で訴えてくるこの小さな貴婦人を笑う気はない。

もっともルゼ様はその扇の陰では間違いなく、唇を笑みの形にしているだろうが。

微笑ましい気持ちで見守るような感じで自然と笑みがこぼれてしまう。

この少女にとって身体の弱いリユーム嬢は、守るべき妹のように映るのだろう。

お姉さんぶりたい少女に、リユーム嬢はずっと微笑んでいたに違いない。

彼女の方がずっとお姉さんだな、とその時点で思った。リユーム嬢は何ていうのか。

優しいのだ。

優しすぎて、人を威張りたい気にさせるのだろうと推測する。

恐らく本気で、この年下の少女に腹を立てた事も無いのがよくわかる。

この上から目線の物言いの少女の好きにさせてきたに違いあるまい。

ある意味この子のような性格の子は、こうやってキツイいい方をしても受け止めてくれる者を必用とするのだろう。

それが甘えているというのだが、当のリユーム嬢がああ調子なのでは周りも放置するだろう。

結果、この幼い令嬢はますますお友達付き合いが限られたものとなるだろうに。

周囲は知っても知らぬフリなのかもしれない。

なにせシェンテラン家のご令嬢で、まだ幼いとくれば許されてし

まう部分もかなり多かるう。

(だからこそ、付け上がらせちゃうんでしょうねえ)

この家の血筋の者は良くも悪くも強者であり、征服者の気質なのだろうと思う。

要はいつだって、何につけても上から目線というか。

それにほわほわと頷き、疑いもせず好きにさせてしまいうりゅう嬢は支配される者の気質満点である。

でもそれじゃあいけないのだ。いつまでたっても、堂々巡りになる。

それにいい加減気が付き、断ち切ることが出来て初めて同じ目線で物が言えるようになるのだから。

このミゼル嬢のような幼い少女だから、ただのわがままで許されるのだろうが、そうで済まされない者の面影を浮べる。

いつも決まって必ず訪れては、りゅう嬢を連れ戻そうと躍起になっている彼だ。

いい気味だと思う。

もうしばらくこのままの調子で続けてやってよいのではないかと思う。

しかし、あまりじらし過ぎて実力行使に出られても面倒だ。

それに、だ。

りゅう嬢が夜な夜な、涙ぐみながら縫い取り物を進めているのだ。

彼女からかいつまんで聞いた七年間を思うと、なぜそのような気持ちになるのかがハッキリ言ってナゾだ。

りゅう嬢に素直にその意見を述べたら、彼女にもわからないそうだ。

思わずフィルガ殿の顔を浮べてしまいながら、一緒になって考え

ものなのである。

閑話　く女同士の作戦会議く（後書き）

ルゼにディーナにミゼル。

年齢差はありますが、女同士が集まればそんな事は関係ありません。

この後もリユームを話題にしばし盛り上がります。

ちなみに。割とディーナはそんなにしゃべる子じゃないようです。人の話に耳を傾けつつ、内心で自分の考えをまとめるタイプ。話に不参加のようできてそうでない。

ミゼルはしゃべりながら自分の考えをまとめて行くタイプ。自分の言った事で興奮しやすいので、宥め役となるルゼのような達観者が必要不可欠です。

この中で一番会話が上手いのは、やはりルゼだなと思いました。

第四十話 ジャスリート家の招待客（前書き）

来ましたよ、勝負のお茶会。

選手入場です。

第四十話 ジャスリート家の招待客

本日のお茶会はごくごく限られた内々の物とお伺いしていたのですが。

やはり公爵様の仰る「内々」という物は、規模が違いますね。

次々と訪れる招待客の皆様方にご挨拶をしながら、そのように感心してまいります。

デイナー様とミゼル様とリユームは、お館の中庭に面したお部屋に控えてのお出迎え係を命じられたのです。

中庭へと面した窓と出入り口は大きく開け放たれ、ここからでも庭で咲き競うお花が見えます。

風も陽射しのぬくもりを乗せて吹き込み、カーテンやリユームたちの頬を優しく撫でて行きます。

それが温かく誘ってくれているかのようで、思わず目を細めてしまいます。

お天気も風もお花も何もかもが心地よく、正にお茶会には最高の良き日です。

お客様方も嬉しそう。誘われるように中庭に設けられた席を目指します。

「ようこそお越し下さいました。ザカリア様」

「お招きに預かり光栄でございますよ」

優しそうなおじい様です。リユームもにこにこしてしまいます。

(ルゼ様の昔からのご友人よ。元は神殿の護衛団長でいらしたとか)

ディーナ様がこそりと教えて下さいました。

「これはこれは。また目にも鮮やかなお花さんたちのお出迎えた。今日の皆さんの衣装の見立てはルゼだろうね。女の子を着飾るのが趣味のルゼらしい。素晴らしく似合っておりますよ、お嬢さん方」

にこりと力強く微笑まりました。

ルゼ様のお見立て。その通りです。リユームはこくこくと頷きます。

ディーナ様はその紅い髪を惹き立てるようにと、鮮やかな新緑のお召し物です。

ミゼル様はその金の髪に負けぬようにと、軽やかなレースがたくさんあしらわれた薄紫色のお召し物を。

リユームはですね。

純白のレース覗く裾のドレスの上に、金糸で細かく縁取りされた深みのある赤いドレスを重ねております。

それを金糸で編まれた腰帯を巻きつけて、豪華な装いをさせて頂いております。

何でも胸元のザク口様に負けないようにするには、装いにもそれなりの気合が必要だそうでした。

気合。そこら辺は同感でゴザイマス。

半端じゃないこの存在感は打ち消すのは並大抵ではないでしょう。リユーム、いつもは試合放棄です。

要は襟首の高い服で隠してしまうか、ボレロやショールを羽織っております。

しかし今日はザク口様にも助けてもらいなさいな、とルゼ様から言われたのです。

リユーム嬢の魅力をもっと惹き立ててくれるようにね、と。

をリユームの指先に寄せました。形だけ。

「ありがとうございます。もう、大丈夫です。お恥ずかしい」

「いいえ！そんな！だいぶお疲れだったのでしょう。今日もどうぞあまり無理をなさらずに、お疲れになっただらすぐこのリハルドにお申し付けください」

「ありがとうございます、リ、ハル、ド様」

もうリユームはどもったりしないのですから、落ち着いて。

ジャスリート家に守られているおかげで、闇が舌にまで絡みつくことは無いのですから。

それに、誰もリユームの事を蔑んだりしないのですから、いつまでもビクビクしては闇に負けてしまいます！

落ち着け・落ち着け・落ち着け。

そう繰り返しながら、落ち着いて発音しました。ゆっくりと慎重に。

そうしたらちゃんとリハルド様のお名前をお呼び出来ました。

そこで安心してしまい思わずほにゃっと、気の抜けた笑みがこぼれてしまいました。

「やはり、リハルド様はお優しいんですね。お気遣い、感謝いたします」

「リユーム嬢には敵いませんよ。申し訳ないのですが席まで案内していただけると助かります」

「はい？」

席はお好きな場所でいいはずなのですが、そうお答えするのも何だかはばかられます。

では一番お日様が当たって、お庭が見渡せる席へとご案内するまです。

「で、では、こちらへどうぞ」

「ありがとうございます」

リハルド様がまたよりいっそう深く微笑まれました。

リハルド様をお庭へとご案内し終わると、すぐに戻りました。
その僅かの間は何があったのでしょうか？

ミゼル様が盛大にしかめっ面でらっしやるのです。
リユームを睨むかのように見上げて唇を引き結んで、重々しいた
め息を吐き出されました。

一方のディーナ様は、相変わらずゆったりと余裕の笑みのままです
が。

「どうされたのですか、ミゼル様!？」

「どうしたもこうしたもないわよ!う、うちのお父様とお母様が言
っていた事があまりに真実で・・・」

ヴインセイルが一番不利じゃないのよおー!!

そう叫ぶとミゼル様はリユームに抱きつきました。

「わぁ・・・っ!真実とは何のことでしょう?」

「ヴインセイルが選ばれる確率があまりに低すぎるって事よ!」

ミゼル様・・・しっかり?

そのお背なをさすさすと擦ります。

「そうですか。ご領主様ならきつと大丈夫ですよ?」

きつと、公爵様に気に入られると思います。

だって既にもう彼を「すごい」とルゼ様は褒めていらしたもの!
そう嬉々としてお伝えすると、ますますミゼル様の嘆きは深くな
りました。

慰めるどころか、逆効果!??な・・・なぜですか!?

「リユームはやっぱり、リユームでしか無いのだから!ばかっ
!ヴインセイルはね、ヴインセイルはね、公爵様だけに選ばれるん

身に覚えのあるというよりも、体に刷り込まれた覚えあるそれに体が痺れたように思います。

思えば七年もの間その視線に怯え、少しでも晒されぬようにと過敏に反応してきたのですから。

とん、とミゼル様に軽く背を押された気がします。ほんの軽く。

指先で促がすほど微かであったように思いますが、その微力だけで足元がよろめいてしまいました。

何ともはや。

「本日はお招きに預かり光栄でございます」

左手を胸に当てて礼を取る彼を、まずは迎えたのはディーナ様です。

「ようこそお越し下さいました。リユーム嬢のお義兄様？はじめてお目にかかります。ディーナです。お噂はかねがね伺いしております。ご活躍だそうですね、ご領主殿？」

淀みなくご挨拶されてそのまま、優雅に右手を差し伸べられました。

「ご領主様はそれを受けて少し屈み、その指先に形だけ唇を寄せられます。

リユームときたら、流れの良いと表現するに相応しい所作を前に言葉が出てきません！

流石です。

ディーナ様はこのご領主様を目の前にして、何一つ怯むところを見せません。

それもそのはず。いつもルゼ様やフィルガ様とお話されている時

なども、何の気負いも感じませんしね。

不思議の獣さま達に好かれるというディーナ様にかかったら、ご領主様も同じ獣さまのうちの一名さまに数え上げられてしまうのかも知れません。

落ち着いた心と洗練された物腰で来る獣サマを迎え撃つ。

これ程までに優雅で儂げである貴婦人なのに、何故かしらそのような力強さを覚えてしまうリユームです。

「ディーナ嬢のお噂も伺っております」

「まあ。どのような？」

「色々」と

「あら。そうですの」

何でしょうか。

ディーナ様の影に隠れるようにですが、お二人に挟まれていると何やら見えない火花が散っているような気がしますが！？

「ジ・リユーム・・・嬢」

静かに名を呼ばれました。

誰に？ってご領主様に！

低過ぎも高過ぎもせず、しかし、ずしんと重みを持って響くお声です。

ただ唇は戦慄わななくばかりで「はい」と言う簡単な言葉すら出てきてくれません。

申しわけありませんが、こくこくと必死で首を縦に振り続けるばかりです。

ディーナ様の見せてくれた作法を思い出し、おずおずと右手を差し出しました。

(ご領主様、です。本物です)

そ、と手を取られて、やっと彼の存在を認識できたような気がします。

一体、どれくらいぶりにお会いしたのでしょうか。

そんなに長い間でも無かったはずです。かと言って短くもなつたですが。

おかしいですね。前はひと月もふた月も会わないなんて、当たり前でしたのに。

ただ呆然とその彼が跪くの見守りました。

そのまま唇が寄せられます。

思わず、一歩引いてしまいそうになりましたが、それはなりませんでした。

ディーナ様です。彼女の手のひらがリユームの背を押し留めてくれておりました。

肩越しに送った視線の片隅で確認します。ディーナ様は優しく微笑んで下さいました。

だいじょうぶよ。

そう慰められた気がしました。

ディーナ様の方に気を取られていたりリユームですが、そのふいに加えられた指先の力に意識を呼び戻されます。

かと思うと手全体をやわらかく包み込まれて、甲にご領主様の唇を押し当てられておりました。

ただ寄せるという儀礼的なものではなくて。

そこから伝わる熱が這い上がって全身を駆け巡ります。

くるしい、です。

行き場をどこに求めたらいいのか解らないのです。
解放される事ない熱で内側からじわじわと炙^{あぶ}られてしまうかのよう。

顔が火照ってしまいます。

「いや・・・っ!」

その事に怯え、口から飛び出したのはこんな言葉でありまして。
弾かれたように彼の面が上げられました。

じつと見つめ上げられて、視線が絡み合います。

自分でもそのような拒絶の声が出た事に驚きました。そんな風になんて思ってもいないのに!

今度こそ、彼と向き合おうって覚悟を決めて臨んだのに。

いざ彼を目の前にするとこのザマです。

おまけにリユーム、じんわりと瞳が潤みだしている始末でござい
ます。

何とはなしに彼をまた突放してしまっただように思えて、涙を見せ
ぬために顔を背けました。

そろりと視線を戻すと、彼は押し黙ったままです。

何だかお辛そうです。そんな彼を前にして、ますます苦しくなっ
てしまいます。

何といいましょうか。

彼の側を離れた事に対して、申し訳ないと思う気持ちはきっと罪
悪感だと思つのです。

後悔はしておりません。

あのままでは何一つ解決しないまま、もっとこの方のお側に居ら
れなくなっていた事でしょうし。

滅多にお目にかかる事の無い、ご領主様の頭のとっぺんから目を

リユームは言葉を発することも、身動きすることもできないまま
でいます。

固まっていると、背後から声が掛かります。

「礼ならば他でもない、我にも言ってもらおうか？若領主」

ああー……。この偉っそうーな言い方は間違いありません。
彼です。普段は一角の持ち主の獣サマ。
ご領主様はリユームを抱えたまま、振り返りました。

「貴殿は？」

ご領主様の口調から推測するに、恐らくは「貴殿」ではなく「キ
サマは」と尋ねたかったに違いありません。
それくらい不機嫌な、切りつけるかのような声音であります。
腕を組んで立ちはだかり、気持ち顎を上げてダグレスは何とも嫌
な感じで口角を釣り上げました。

ふふん、とその人を小ばかにしきつた流し目は、即刻改めた方が
いいですよ？ダグレス。

「リユーム、来い。ルゼが呼んでいる」

「はい」

こっくりと頷きますが、ご領主様の腕は緩む気配すらありません。
この格好では見えませんが、確実にご領主様の眼差しも不穏なも
のに変わったご様子。

リユームを抱えた腕にも力がこもりまして、ございます。

ええと、ですね？

「このような場合どついたらいいものでしょうか？」

そつと彼の腕に両手を置いて、見上げてみます。

第四十話 ジャスリート家の招待客（後書き）

『第三十八話の予告編のかいせつ？』

頭文字R組 〃 リューム リハルド そして 領主。

頭文字D組 〃 デイナー ダグレス。

ああおううまた、本戦までたどり着けず選手入場までとなりました！

しかし、ヴィンセイル。

彼がどう出るかお待ちください。

リハルドもがんばります。

閑話　く離れていても一番の味方　く（前書き）

お久しぶりのニーナです。

領主　　ニーナ　　ニーナの所の勤め人

目線の順でお送りします　く

閑話　く離れていても一番の味方

「ニーナ。おまえの方は大丈夫なのか？ここ最近、家に帰っていないと聞くが」

ニーナは嫁いだ（といっても婿取り）にも関わらず、通いの侍女である。

月に一度まとめて休みを取り、夫の待つ実家へと帰る。

ニーナの夫も多忙なため、そうそう家には帰れないらしいからそれに合わせてはいるようだ。

それだけでもよく許可が下りたものだと思われて尋ねると、本人はいたって淡々と

「それが婚姻を承諾する条件の一つだったので、飲んでいただきました」と笑顔で答えた女である。

しかし流石にそれすら蔑ろにするのもいかなものか。

一応家庭に入っているにも関わらず、こつもこつらに関わり切っ
ていて大丈夫なのかと尋ねた。

「それどころじゃございません」

「いいのか」

「緊急事態ですから。ご心配いただくかなくとも離縁されたり等は・

・まあ、まだ無いと思えますから」

「まだ？」

「ええ。夫の家は私の家の名がまだまだ必要でしょうし、こつやつて私がお領主家の侍女として仕えているっていうのもある意味夫の助けになってますからね。文句はないでしょう」

「・・・・・・・・・・」

そうか。と肯定するのもはばかられる位、赤裸々に事情を説明された。

あからさまに嫌そうに、しびしび政略結婚しました（事後報告か！）と告げたニーナらしいと言えばらしい。

「それでもお気遣いありがとうございます」

ニーナは頭を軽く下げた。

しかしそれもすぐさま勢い良く上げられ、何やら熱のこもった眼差しと対峙する形になった。

「もし真にこのニーナを気遣って下さるのならば、このお茶会とやら是非！全力でお臨み下さい。そして、早い所決着をつけてですねーこのニーナを安心させて下さいませ！」

リユーム様をお迎えに上がる、またとない機会でございますから。

「言われずとも」

ニーナとも付き合いは長い方だ。

その度にコイツは女にしておくのは惜しい気がする、と時折り思わせてくれる。

あつさり運命やら仕事やら何やらを受け入れて、飄々と何でもこなす様が実に凜々しいといえなくもない。

まあ男だったらまず間違いなく恋敵ライバルだろうつから、こつ容易く口を利かないと思うが。

「さてー。これとこれとこれを御召しになってはいかがでしょうか

しかしご領主様はふいと視線を外すと、首を横に振った。

「いや。いい。それはニーナ宛のものだ。俺に宛てたものではない」「ご自分の二枚きりでしたものねー？」

何気に自慢して刺激してみる。ワタクシめは通算二十三枚にも及ぶ。

「ご領主様は負けず嫌いでいらっしやる。

だから当然張り合ってくるだろうな、と踏んでの挑発であったのに対応は以外にも大人しかった。

「俺だって二枚しかアレに書いていないから当然だ」

以外に。以外に俺様も捨てたモノでは無さそうだった。

ひつたくられる位は覚悟して、こちらら模写まで済まして用意したっていうのに残念である。

彼もようやっとオトナになってくれたようだ。例えそれがやせ我慢だとしても良い傾向だと思う。

なので少しは良い気分にならせて差し上げてもよろしかろうと判断した。付け上がらせない程度に。

「ええとーこれは独り言なんですけど。リユーム様ずいぶん寂しくてらっしやるようなんです。会いたい、でも会つのがコワイ方に会いたくて毎日」「

毎日？」

「ふう。このニーナに会えないよりも堪えていらっしやるなんてねえ。切のうございます」

「ニーナ」

にんまり。

心の中でも実際もそのように形容するに相応しい笑みを浮べたと
思う。

「確かな事はリューム様に直接お確かめ下さいませ。ああ。ですが
？ニーナが思うに何やらお二人の思われていることは全くもってご
一緒かと思われませんが？」

その後、彼は速やかに身支度を整えてジャスリート家に向ったの
は言うまでもない。

リューム様。

彼、格好良く仕立ててみました。

黒地のおズボンに、深みのある濃紺の上着を羽織っていただいて、
あなた様のお側立つとそりゃあ映える様にね。

あ、そうそう。

彼、上着はいらなとかめかしてましたよ。

期待しちゃってるようですよ！脈、ありありデス！

そんな風にして心の中で、リューム様に語りかけるのがこの所
の日課である。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

「だんな様。奥方様は今は帰られないのですか？」

無言であった。

「だんな様。意地張ってないで一言『帰ってきて欲しい』って仰れ

ばすむ事ですよ?」

「契約したから」

「さようでございますか」

何てことはない。

婚姻の際に交わされたという契約を健気に守っているのだ。このお方は。

どちらも可哀相に。

奥方様も「政略結婚だし、どうせ夫は家柄目当てだし! 必要以上に妻の務めを果たすまでも無いか!」

つてきつと勘違いされておられると思う。

あの奥方様なら充分ありえる。

「差し出がましいようですが。早い所手を打たないとずっと仮面夫婦のままですよ?」

「契約したから」

イラツと来た。慰めるのは止めにしようと、入れかけのお茶を下げた。

「いいから早く書状をお書きになって下さい!」

紙とインクとペンを差し出す。

「僕も奥方様にお会いして元気を分けてもらいたいですから。それではいけませんか?」

「そうか。フリーデルがそう言うのなら、仕方が無いな」

そこでやっと理由を見つけて書き出す我が主のつむじを見下ろし

ながら、思わずはたきつけないのを必死で堪えた。

こんな調子も早、二年である。

閑話　く離れていても一番の味方く（後書き）

『またですよ』

関係ないっちゃ関係ない話ですが、ニーナさんは人妻です。しかもこちらにも相当捻じ曲がっちゃっている様子。

ニーナとその旦那さんの話も……。

きりが無いのでこぼれ話で。

第四十一話 ジャスリート家で自覚する新たな病（前書き）

新年を迎えて新たな気持ちで・・・って。

リユームも領主も相変わらずでございませう。

第四十一話 ジャスリート家で自覚する新たな病

ご領主様を見上げ、ダグレスに視線を投げ掛けてから、また一度視線を下ろしました。

（抱えられていますね。身動きは取れませんよね？）
ふむ、と冷静に状況判断してみました。

ダグレスは、ルゼ様と呼んでいるから来いと言いました。

ご領主様は、ルゼ様とフィルガ様にご挨拶したいと仰いました。
ならば、ですよ。

ご一緒すればいい話ではないですか！
ひとりで納得してひとつ深く頷きました。

リユームなど片腕で一抱えのご領主様の腕に両手を掛けて、そつと押しやるようにして促がします。

「あ・あのですね！あの、ごりよ・しゅまもいつしよに」

どもり、もたつきました。

その途端うわっと思ひ、固く瞳を閉じました。

自分自身で驚いたからです。何故、言葉がうまく紡げないのでしよう？

リユームの頭の中ではすらすらと滞りなく『ご領主様も一緒にルゼ様のところへ行きませんか？』とお誘いする図が出来ていたのですが、そんな。

そんな、ささやかな理想すら遂行できないとは相変わらず何事でしょうかね？

おかしいですね。

落ち着けば、もうどもったりなんてしないはずでしたのに。

ほんの先程リハルド様とお話した時は平気でしたでしょうよ、リユームや？

落ち着けば　　そうですね！落ち着きましょう。

落ち着け・落ち着け・・・とまたもや自身に言い聞かせるように繰り返しましたが、いっかな動悸は治まりをみせません。

(この体勢のままでも落ち着けるはずがありません　　！！)
リユームはやつと気がつきました。遅い！
いやでもあの宴が蘇るってものなのです。

あの場は帳とじがありましたからまだマシだったようです。

今は何やら間近で視線を感じております。主にミゼル様でしょうかね。

何やら熱心に注視されているのだけは感じます。ひい！ですよ！
無表情なのが、かえって責められている気がしてなりません！

一方ディーナ様はといえばまた余裕の笑みで、ゆったりされていらっしゃるので読めません。

ですが時おり視線を上へに投げ掛ける時、嫌に鋭い光を宿らせているような？

本当に本当にお願いですから、人目というものを憚はばって頂きたいんですよ！

「あの、ごりよ、っ手を。どうか、」

ご領主様、人目もありますし、すみやかに解放願いいます！

「・・・・・・・・」
それなのに彼は無言のままです。

それどころか身を上手くよじれないほど、ますます強く支えられてしまいました。

うまく、うまくいきません。情けない!!

あんなに練習して煩わせないように、少しでも貴婦人らしく振舞えますようにと思いましたのに。

ご領主様はお怒りなのでしょうか？

また、また、後で怒られてしまうかもしれません。

オマエの存在は恥でしかないと罵られるかもしれません。

かくなる上は・・・仕方がありません。

「ダグレス」

ううう　　と泣くのを堪えつつ獣サマなる彼に助けを求めました。

この場でご領主様に太刀打ちできるは彼しかおりませなんだから俺様に敵うのは獣様もしくは公爵様。

リユームはそう結論付けておりますので、両手を彼に向かって伸ばします。

「いい加減にしろ、若領主」

放してやれ、とダグレスがごく静かに言いました。

命令でもなく請うようでもなく、ただ哀れむかのように一言です。

「こうなつてはオマエではかえってコレを混乱させるだけだと学習済みだろっ?」

告げながら組んでいた腕を解き、呆れたように腰に手をあて前髪をかき上げます。

「ダグレス?ダグレス・・・貴様か」

わずかに驚きを含ませたご領主様のお声が張りつめます。少しばかりいい気味だと思いました。

そうなんです。驚きますよね!

ダグレスは何でも出来ちゃうんですよ、いばりんぼなのが玉に瑕きず。そうだ。我はダグレスだ。我を呼び捨てるなど!本来ならば嬢様

以外許さぬものを・・・無礼者どもめ」

再びダグレスが腕を組み、顎をしゃくりました。

紅い目が眦められます。どうやらご領主様と睨みあっている模様です。

まあ、と細くもよく通るお声が発された途端、場が和らぎました。「ダグレス。そんな風に言っては駄目でしょう？」

「ああ、嬢様。この無礼者どもを前に少々気が立ってしまい、思わず本音が漏れてしまいました」

ダグレスは姿勢を正すと左手を胸に当て、ディーナ様に礼をとります。

何てあからさまに態度が違うのでしょうか。

ここまでくるといっそ清清しいと思います。見習いたくはありませんが。

「ダグレス、ルゼ様がお呼びなのね？リユーム嬢だけかしら？」

「はい、さようございます。嬢様」

「ですってよ。ヴィンセイル殿？ルゼ様のことだから、どこか様子を探ってらっしゃると思うの。お分かりいただけますよね？わたくしの言わんとしている事が」

ご挨拶はどうかリユーム嬢を解放されてからと付けだし、にこりと微笑まれます。

そのままリユームは、ディーナ様のか細い手に力強く導かれておりました。

ほんの一瞬の沈黙の後、腰に絡む腕がゆるみました。

「デイ、ディーナ様」

最高です。最強です！心の中で拍手喝采を贈りつつ、賞賛のまなざしで彼女を見ました。

これまた見事な紅い紅い髪。ダグレスの眼といい、紅は最高の証のような気がします。

です。

「まあまあ。どうされたのかしら、リユーム嬢？あなたのお義兄さまはまたイジワルだったのかしら？」

「ちが・ちがいます、その申し訳なくて。ままならなくて、また、彼に恥をかかせて」

「ああ・・・ゆり戻しがきたか。そうね、仕方が無い。根深いものね。何せ七年？だったわね。いいのよ。そんなに気に病まなくてもいいのよ？」

「ゆり、もどし、ですか？」

「そうよ。克服しようとして、克服したと思ってても、どうしたって昔の事を思い起こしてしまつて元に戻つてしまうものなのよ。だから、ゆっくりでいいと思うわ。ね？」

「はい。ありがとうございます、ルゼ様。ダグレスも」

「いいのよ」「我はついでか」

お二人の声がかぶりしました。

そうは言いながらもダグレスの言葉は笑いを含んでいます。かといってからかう様ではなく、何と申しましようか。温かみのあるような？

リユームも思わず涙を拭いながら、憎まれ口の応戦です。

「ついで、です。」

「言うようになったな」

「ありがとうございます」

「キサマ。」

リユームの憎まれ口もなかなか上達しているようですね。満足で

「今日はあなたのお披露目に相応しい日ですね」

「お披露目、ですか？」

リユーム、お茶を入れる手を思わず休めてリハルド様を見てしまいました。

何でしょうか。今日はまた、いやによくわからない事を言われる日ですね。

その驚きがあまりに顔に表れてしまっていたのでしょうか。

リハルド様が居心地悪そうに視線を外されました。

不躰すぎましたね、すみません。

すぐさま申しわけありませんと告げると、リハルド様も同じように頭を下げます。

お互いぺこぺこ同じように、競うように頭を下げているのがおかしくて、思わず笑ってしまいました。

「そうですね。そのための席ではないのですでしたか？」

「ええと、あの。今日はルゼ様縁の方々を御もてなしする、お茶会と……うかがっておりますが」

「そうですね。表向きはそうでしょうが、これはリユーム嬢を見せびらかしたい公爵殿の策略のような気がしますよ？」

「策略、ですか？まあ。そのような事だとしても、ルゼ様に何の得があらせられるのでしょうか？何にせよ、お役に立てたら嬉しいですけれども」

「リユーム嬢。ああ……貴女には敵わない。つまらない事を言いました。お許しください。不愉快でなければいいのだが」

「リド様とお話すると、そんなにもらないのです。安心してお話できますから、その、お付き合い頂けるとありがたいのです」

「どもる、のですか？確か前にもそのような事をおっしゃっていましたが、そうなのですか？俺には全く気にならない」

「あの、ですね。主に、領主さま。義兄を前にすると緊張してし

まって、上手く行かなくて呆れられてしまつて。だからあまり他の人と話すなど注意を受けておりました、のです」

「そうでしたか。義兄殿は緊張して、俺ではその、そうでないか？」
「はい」

リハルド様、お優しいから怒らないし。

内心呆れていたとしても、ため息付いたり何てなさらないし。

ご領主様とは違うのですー。なんてまさか言えませんが。

「ははは。リユーム嬢、容赦ないなあ。そこがまた魅力なのだが。

まあ、惚れた弱みつてヤツですね」

「ほ……!？」

はいいい!？

ご冗談が過ぎますよ、リハルド様！

「あの、ご冗談、」

「冗談などではありません」

すっぱりと勢い良く、リユームの言葉は切られました。

「本気です」

正気ですか？

シエンテラン家の養女といえども、生まれは身分なんてあつても無いに等しい庶民寄り。

しかも全ての色彩をつぶすとされる、闇をまとった黒髪に黒い眼の『カラス娘』。

おまけに病弱から脱却しつつこそありますが、脆弱極まりない身体。

リハルド様はリユームが何たるかを、まだあまりご存じないからですよ。

失礼を承知でお尋ねしとございます！

ですが流石のリユームもそんなご無礼なマネは致しませんよ。心の中だけに留めます。

「だが俺はあなたがどもうとも、何を話されようともちつとも不快に思ったりなどしません。むしろ嬉しく思います。少しでも打ち解けてくつろいでくれるのならは光栄です、リユーム嬢。たくさんあなたの話が聞きたい。どんなことでもいいから」

「あの、わたくしはその、学も無く話題も狭くてそのツマラナイことしか」

あうあうあう。

そんな呻くような調子で早速へどもどしてしまいます。

「リユーム嬢。どうかそのような事は仰らないでいただきたい。貴女には想う御方がお在りのようだ。それを承知の上でも俺は貴女に申し込みたいのです。どうか。このリハルド・メルシユアを一人の男として見ていただけないだろうか？」

「あの、わたくしは」

「貴女を感じるよりも、リユーム嬢を想う者がいる事を考えたことはありませんか？失礼を承知で言わせていただきたい。リユーム嬢が想う方は貴女を大切に、きちんと一人の女性として扱われていらっしゃるのだろうか？そうでなければ」

真剣な眼差しに、これ以上ここにいてはいけないと強く思いまして。

(聞きたくない・・・これ以上！)

リハルド様が必死に言葉を並べている様を、どこか人事のように眺める自分に驚きました。

この方は何を言い出すのでしょうか。
信じられない気持ちで彼を虚ろに見返します。
そうして言われた言葉を繰り返します。

『貴女を大切に、きちんと一人の女性として扱われていらっしゃるのだろうか？』

そんな事、お答えするまでもあり、ません……！！

そりゃあ、そう望んでおりますとも。

いつか必ず自立した女性になって、あの方からあんな目で見られない自分になるんだっていう切なる野望が！

リユームを想って下さる方はあの方であって欲しいのに。

『貴女を大切に、きちんと一人の女性として扱われていらっしゃるのだろうか？』

人様から見ても、そう疑問を抱かずにはいられない扱いだった事でしょうか！？

瞬間、全身が強張りました。

「嫌っ！」

口から飛び出した拒絶の言葉の鋭さに、リユーム自身が驚きました。

動悸・息切れ・めまいに加えて顔の火照り。

どうやら、リユームは新たな病に侵されているようなのです。

「そうか」

「あの、もう少しお待ちいただいてもよろしいでしょうか？」

椅子に腰掛けたままのご領主様に、恐るおそる尋ねました。

「あの、ご領主様からお預かりした上着を、お返ししたいのですが、その」

肝心の上着が見当たらないのです。

「後でいい」

「確かにここに」

置いたはずなのですが。

なおも諦めきれず室内を見渡します。

そんなリユームを、ただ眺めていたご領主様も立ち上がりました。

「どこに？」

「ええと、その・・・」

ない？

無い。上手く行かない。

そう思ったとたん涙が零れ落ちそうになりました。

うつと言葉を詰まらせ、飲み込みました。

泣いてはなりません、また煩わせてはなるものかなのです。

振り返りざま、見事なまでに彼に腕を取られておりました。

その、と指し示すべくためにと伸ばしたはずの腕は、また上手

い具合に自ら彼に差し出す格好となったわけでした。

嫌な予感。

どうしたって身体がすくみまして、そうそう機敏に動く事などできやしません。

そのまま、そのまま。

彼の腕の中に閉じ込められたあげく、首の後ろを支えるように掴まれてしまいました。

嫌でも彼の表情と真正面から向き合わねばならない状態です。ひ
ー！！

リユーム、と唇が音も無く形作られる様を目の当たりにします。

気恥ずかしくて視線を横に泳がせますが、彼の動向が終えなくなる分、余計な恐怖を煽ります。

第四十一話 ジャスリート家で自覚する新たな病（後書き）

あけましておめでとございます！

後から読み返してなんだこの挨拶とか思ったりもするのですが、あえて。

今年もよろしくお願いします！

『今年こそ完結だな、目標。』

身内に先程、言われました。

君に言われるまでもないよ！ああ！

ちなみにコレの（仮）タイトルは次回に持ち越し・ネタバレーですよ。また。

『卑怯だろう、領主。』

まさにそのままのないようすだ。

閑話 く気を利かせたミゼルードく(前書き)

気を利かせたっていうか。

気をもんだミゼルード。

閑話　く気を利かせたミゼルドく

リユームと来たら、バカだから。

見ず知らずの若い男の方に話しかけられるのを許して。

あまつさえ、言いたい放題言わせて。

しまいには泣き出しそうになって逃げ出すって、どっいつ事なの！？

ヴィンセイルもヴィンセイルだ。

それをおめおめと許すなんてどうかしている！

気が付けば彼の手を取って、駆け出していた。

。。

。。

右手にリユームの左手。

左手にはヴィンセイルの右手。

いつもはお父様とお母様の定位置だ。

右側半分は何だかドキドキ、びくびくしてるリユームの緊張が伝わってくる。

それに左半分からは何ともいえないヴィンセイルの熱が伝わってくる。

その両者の想いに挟まれた中心が私、ミゼルド。

(そう。わたくしは二人の仲を取り持つ・・・取り持っているの！)
それは何とも言いがたく涙が溢れた。
幸せだなんて思えた。

ずっとこのままであんなにいいのに。

もっとなんと幼かった頃も今みたいに歩いて。

同じように私があたひれて、でも自分で歩くんだって意地を張った時と一緒にだった。

あの頃よりも解るようになった事がある。

私と手をつないで歩く二人に挟まれると、胸が苦しくなる。

それは苦しいんだけど、けつして苦痛ではなくて。

伝わってくるものや、こみ上げてくるもので、私の胸ひとつでは収まりきらなくてぎゅうぎゅうになって破裂しそうに感じるからだ。二人の気持ちが手を通して伝わって来て、私の中心でちょうどぶつかる。

そんな感じだ。

そもそも自分自身の胸に手を重ね合わせると、上手い具合に手というものは胸と一直線だと思ふのだ。

この温かさ満ち溢れる想いは両手を介して人に伝わるもの。

それでいて、自分自身が温かなもので満たされるかのように心地が良くて、それが溢れんばかりだ。

だからきつと、溢れた分が涙になって零れそうになるのだろう。

この気持ちを何と呼ぶのかしら？

お父様とお母様ともまた違う、この切ない気持ちが何だかくすぐたくて少しだけ身を振りたくもなる。

不思議な感覚にちよつとだけ、のぼせてしまつ。
くらくらする。

まだ口にした事は無いが、お酒を飲んで酔つ払うときつとこつたるのかもしれない。
ふふふ、と思つ。

私という子の手を介してだけれども、いま二人は手をつないでいるに違いない。

そうは思つても何だかもどかしい。

沈黙が心地よい。

だけれども。

言葉交わす以上に何か交わされているのだから解るけれども、もどかしいのはなぜかしら。

『お二人の邪魔をしないのよ？』

そう言つて送り出してくれた、お母様め。

後ろでひっそり頷く、同じくお父様め。

まったくもつてお父様もお母様も失礼しちゃう。

『私は邪魔なんてしないわ！むしろ、二人の仲を取り持ちに行くのよー』

言つて参りますから！そう勢い良く家を後にした娘を見くびらないでいただきたいものだ。

ふいに立ち止まってみる。

イタズラ心からではない。

そのまましゃがみ込む。

「わわ・・・っ、ミゼル様っ！どうされましたか？だいじょうぶですかっ!？」

リユームがよろめく。

「ミゼルド、疲れたのか？」

ヴィンセイルが屈みこむ。

「うん」

言いながらも二人の手をぎゅうっと掴んだ。

「ミゼルド」「ミゼル様」

二人とも私に優しいの。それはそれはもう、とびつきり。それは疑いようも無い。

今、私が精一杯引つ張りながらしゃがみ込んだおかげで、二人の手の甲が触れ合う。

触れ合っている。

途端に感ずるリユームの、ヴィンセイルの手から伝わってくる熱量の変化に満足する。

それなのに！

二人ともすぐ手を放すなんて！どういう事なの!？

「ミゼルド。ほら」

「ミゼル様、もう少しですから」

ヴィンセイルは私を抱え上げてしまった。

リユームはそんな私を心配そうに覗き込みながら、額に掛かる髪を払ってくれた。

二人とも、意識を私に向けてくれているのだ。

「うん……………」

もうこうなると心地良すぎて、目蓋を閉じるしかなかった。

お父様。

お母様。

何故かお二人の事を思いながら、ゆっくりと意識を手放すの自分自身に許した。

。。。。

ミゼル様お疲れになったのですね。

まったく仕方の無いヤツだ。

。。。。

(リユームはもっとその……強^{した}かになるべきで……ヴィンセイルは私に感謝すべきでしょうよったら)

夢うつつで悪態を付いた。それが精一杯だった。

意識の遠い、遠い遠いところがかすかに、にゃーんという猫の鳴き声を聞いた気がした。

閑話 く気を利かせたミゼルードく（後書き）

『おい。』

二人に向き合っただけじゃなかったのか、という突っ込みもお待ちしております！

これは本編と同時進行でした。
むしろそれよりも早い仕上がり。

どうしても書いてしまった感じですが。

どうでもいいでしょうが一応、伏線とやらを張ったつもりです。

第四十二話 ジャスリート家でも食い違う唇（前書き）

うん、生温いと表現するに相応しい感じですよ。

どうぞー！

第四十二話 ジャスリート家でも食い違つ唇

ゆつくりと額同士をこすり合わされるように密着されては、はつきりいつて意識も飛びそうになつております。

近いです。近すぎです!!

リユームが愛しい。

ふいにダグレスが真似た口調が蘇りました。

わー！わー！！わ　　ああ！！ですよ。

何も今思い出さなくつてもいいでしょうよ、リユームよ！

羞恥で頬が火照つた上に、やはり湧き上がってくる恐怖も重なつては、なす術もありません。

正直、リユーム油断いたしました。ええ。

「お久しぶりです。」とか「お元気でしたか。」など等の当たり障りの無い挨拶から会話を進めるべし！と、寢室を出る前にこつそり練習したのは無駄だったようです。

この方を見くびっていたとまでは行きませんが、こついっお方だったのを忘れておりました。

今、思い出しました。遅い！

(ミゼル様が側にいらつしやるから、大丈夫だと思つたのに。まさか、まさか、こんな事になるなんてっ！)

「嫌あつ！」

悲鳴を慌てて飲み込みます。

その意図に気が付いたらしいご領主様は、にやりと笑われました。

「いいのか？ミゼルが目を醒ましても」

そこです、それ。注目すべきはそこですよ！

イイ訳がありましたでしょうか！？

言葉も無いままに、全力で頭を振ります。

青ざめるリユームを眺めながら、ご領主様と来たら！もう！

ダグレスに負けず劣らずの意地の悪い、でも最高にご機嫌そうな笑顔です。

いえ。ダグレスも真つ青です、その底意地の悪い笑い方。

いくらミゼル様が隣室でお休みだろうと、普通、こういう事をしますかね！？

厳密に言えば、扉一枚隔てただけですよ？ひいひい！お戯たわむれを！

言葉も紡げず、ただただ、ご領主様を凝視します。途端に唇の端を持ち上げないで下さいませ。

それでいて目はちっとも笑っていない所がコワイんですってば。

まったくもおー！相変わらず憎ったらしい笑みですね。くらくらします。

(卑怯者　　！！)

本当は全力で叫びとつごぞいます。

何せ、ミゼル様は十四歳でらっしやいますよ！まだ！

そんないたいけなお嬢さまに、こんな・こんな……！

かろ う じ て

今のところ、類ですが。

挨拶で済みそうもない口付けの現場を目の当たりにするってどうなのでしょう？

軽くトラウマ事項入りに間違いありません！

しかも。この方、下手したらミゼル様の前だろうと何だろうとお構いなしでやってのけそうな気がします。

そこら辺は気のせいであって下さいまし、お願いします！

「リユーム」

怖い。

ただ名前を呼ばれたただけなのに、身体の芯から震え上がってしまいました。

彼の声はリユームに対する苛立ちが込められているかのようで、たいそう低く響きます。

容赦の無い鋭い眼差しは、リユームという獲物に向けられているのです。

獲物がただのカラス一羽であっても情け容赦というものを知らない眼差しに、彼こそが獣様ではないでしょうか。

今、緑の眼の獣が捕らえる獲物はリユームというカラスのみに向けられているのです。

ご領主様の眼力に常々晒されてきたリユームでございますが、耐久性は何ら鍛えられておりません。

滲んで目尻に溜まった涙が溢れ、頬を伝います。

勢いゆるやかな雫はゆっくりと頬の線を伝い落ち、これまた受け止めきれない唾液と混ざってしまつて、只今リユームの顔はたいっへんな事になつていゝと思われまふ！

もはや恥ずかしいとか、そんな力ワイイ程度じゃ済まない気がします。

(ご領主様、嫌です)

そんな言葉に出来ないもどかしさで、彼の胸をこぶしで打ちます。押し、突っぱねようとしたのですがそれすらも、ただ角度が変わつて余計に彼の舌を深く受け入れねばならない結果になつただけです。

「ん・・・っ!?!」

今度は背中だけではなく、後ろ頭まで押さえつけられてまたしても身動き取れません。

なので。せめてと言つか。何というか。自分でも説明は付きませんが。

されるがまま、ただ受けていただけの口づけに応えてみました。

まあ、せいぜい何とか押し返すくらいという可愛いものでしたけど。

抗議の意味も込めてですが、今ひとつ力の入れ所が解りませんね。

逃げられもせず、ただ好きに蹂躪させていたわけですが。

そこで立ち止まつて受けて立つた気分です。

それがとんだ間違いだったと気が付いたつて、時すでに遅しです。

余計に！それが余計に奥深く導いてしまう結果に、半泣きどころか本泣きです。

要は返り討ちにあってしまっている、絶望的な気分。

自分の経験の無さがまた自分よりも遙か強者に歯向かうという、無鉄砲な行いに走った結果がコレですか。

敵は恐らく経験を積みまくった、百戦錬磨に違いありませんよ。

（つて！　誰と？リユーム以外とに決まってるじゃありませんかね？）

だから！そこで何でまた涙の勢い増しますか、リユームよっ！？

「うう・・・うえつくっ」

思わず嗚咽が漏れるくらいに。

今度は両肩を掴まれて、微かに驚きを浮べた瞳に覗き込まれます。両頬を挟みこまれました。

「リユ、おまえは。やっと応える気になったかと思えば！」

何だっでそこで派手に泣き出す、大人しくしていれば俺だっでやりようがあったというのにと、ぶつくさぶつくさ言い聞かせるために解放となったようです。

何だかよく解りませんが、彼の意表をついた模様。

や・・・やれば出来るではないですか、リユームよっ！涙目で自画自賛。

「!？」

放されたほんの一瞬だけです。

リユーム、と彼の唇が形作るのを確かに見ました。

そのまま再び唇が寄せられます。

「も、充分でございましたか？」

充分、リユームをいたぶりましたでしょう？

ええいっとばかりに彼の顎を目がけて、手で突っぱねました。

「まだ足りるか」

「嫌がらせ、反対でございますっ」

そんな攻防戦が続いた後、痺れを切らしたらしいご領主様に抱きこまれてしまいました。

頭のとっぺんや目蓋に、口付けの雨あられ付きで。

「リユーム・・・何を嫌がっているのだ？」

はい！？

この状況で何を仰いますか、この方！相変わらず過ぎでしょう。

反省の色はまああったく見られないって、どれだけ残念なお人何でしょうか。

リユームが何ゆえを思って、シエンテラン家を飛び出したのかなんて考えてもくれなかったのでしょうか？

それとも思いつきもしないとか。

ありえますね。泣けてきました。

「いや・・・いやっ！」

「オマエが悪い」

「！？」

やっぱり？そう来ましたか？

何ゆえでしょうかねっ！？

言葉にはしませんでしたが、驚きのあまり彼を見つめました。

「オマエが俺を誘い、惑わせるからだ。リユームのくせに」

「身に覚え、が、ございませ・・・ん」

上がった呼吸を気取られぬようにと平静を装いながらのお返事は、

たいそう骨が折れます。

しかも何ですか、この鼻にかかった寝起きみたいな声は！自分でも寒気がするではないですか。

ええい！ご領主様め・・・また難癖を付けて、リユームに嫌がらせですか？

それならば、絡む視線を挑戦と受けて立てばよいのでしょうか。この方はリユームが歯向かうのを面白がっているふしがありますからね。

その上でこてんぱんにリユームをあしらうのがお好みの方です。から、本当に悔しいっいたらありやしませんよ。

唇を噛み締めてみましたところ、ひり付きました。

その微かなくせにいやに主張する痛みのせいで、逸らすまいと挑んだ眼差しが早速ぶれます。

（あれ？何で痛いのでしょうか、って！噛み付かれましたものね！当然ですよ、そりゃあ、ねえええ！？）

まさに噛み付かれたと表現するに相応しい行い。

その感触冷めやらぬ唇をどうしたものかと泣き出しそうです。

何のこれしき、と今度は唇を引き結びました。

ぐいっと唇を拭きます。

余計にひりひりしてすぐ後悔しましたけれども、そこは気合で面には出しません。

指先は震えてままなりません。精一杯、彼の胸を突っぱねて顔を背けました。

「いや、です。ご領主様、いやです。嫌ったら、いやですっ！」

「いやー！と全身を使つての離れてクダサイの意思表示に、難なく両手を封じられてしまいました。」

「来い、リユーム」

もちろん返事を待たずに引つ張られました。
ほんの距離にして三、四歩よろけます。

「鏡をしてみる」

「!？」

ご領主様に背後から囁きこまれながら、否応無しに鏡に映る己を見せられました。

「リユーム。これでもまだオマエは俺だけを責めるのか？」

「な、何を？」

仰いますやら。

そんな抗議の言葉を紡ぐ暇さえ与えてもらえません。

がつちりと胸の下に腕を回された上、顎を鏡に向うようにと固定されたとあっては、嫌でも己が状況が目に入ります。

上気した頬に潤んだ瞳。

それに何より紅く腫れた口元。

いつの間にか外されたやら結び目の、はだけた胸元に覗く傷痕すら赤味を帯びているような。

『鏡を見るという事は自分自身と真向かうこと』

だから貴女に鏡を拭いてもらっていたのよ、というルゼ様のお言葉がよみがえりました。

そのおかげで少しだけ前向きに、鏡を見る事が出来るようになってきたっていうのに。

この方はまた、何て事をしでかして下さるんでしょうかね？

そんなルゼ様のお心使いやリユームの努力を、さらりと無に帰すような行いをやってのけますね。

呆然としながら、目の前の白い獣の名を呼ぶのが精一杯でした。
「レド、それはご領主様の物なのです。レドがリユームの事、嫌いなのは解りましたから、それは返して下さい」

” ” リユーム何て、真つ黒の毛並で見つともないくせに！図々しくジャスリート家に居座って！生意気だから、こうしてやる ” ”

レドが上着を前脚で押さえつけたまま、顎で片袖を思い切り引きちぎりました。

第四十二話 ジャスリート家でも食い違っ唇（後書き）

『 そんなワケあるか。』

レドに「預かってくれていたのですか？」と問うたリユームに、すかさず心の中でつつこんだのは領主だけではないと思います。

レド、いい感じでお邪魔虫。

第四十三話 ジャスリート家で見つけた眼差し（前書き）

「眼差し」

今までもあったけど、リユームが見つけれなかったただけだと思います。

（がんばれ、ヴィンセイル。）

第四十三話 ジャスリート家で見つけた眼差し

「レド！そえは、ご……ごりよ、ごりよしゅサマのです！リユームではありませんので、お止めくださいっ」

思わず声が上ずりました。

レドは耳を貸してはくれません。

駆け寄って引き止めようにも、ご領主様は腕を放してくれませんか。ビ・ビビイと上着は糸を引いてひきつれて行きます。それと同じ速さで涙が一滴、頬を伝いました。

それは……ご領主様の上着なのに。

（ああ。ちゃんとお返ししなきゃって思ったのに。相応しい縫い取り物をして。それなのに）

約束を果たさないままずっと今日まで来てしまった結果がコレです。

「っ……う……うえっ」

確かにリユーム、ご領主様があんまりイジワルだから、大嫌いで上着なんてこうしてやる！って踏みつけたり、投げつけたりもしました。

人様の物を粗末に扱う何ていう罰当たりな事をしでかしたりリユームは、それに相応しい報いを受けているようです。

そうです。

リユームときたらそんなひどい扱いをしていたのです。

大事に大事に。

一針、一針想いを込めて。
それを。

そんな扱いされたらこれだけ哀しいんだってよく解りました。

バチが当たったのに違いありませんね。

申しわけなさ過ぎます。

罰を受ければいいのはリユームだけなのに、せつかくこんな上等な上着をこしらえて下さった職人さんたちや、それに相応しい代価を支払われたご領主様に申しわけが立ちません。

それに、その刺繍は 彼のための！

シエンテランの当主として、このエキナルドの地を任された者への祈りの形だというのに。

ご教授下さったルゼ様とディーナ様にも、何だかんだと応援して下さい下さったダグレスにも合わせる顔がありません。

「レド、レド、お願いだから止めて下さい。それはリユームの物ではないのです。ご領主様の物なのです。リユームの物でしたらいくらぼろぼろにしても構いませんから」

「リユーム」

びっく、と思わず身をすくめました。

「も・・・申しわけありません！申しわけありません、もうしわけ

ありません、申しわけ、あり、ありませつ・・・つく」

泣きそうになるのを堪えながら、心からお詫びしました。

「何を言う。いい、リユーム、構うな。」

背後からやんわりと。かつ、しっかりと抱きしめられたままであった事を思い出しました。

こそり、と耳元に寄せられた唇が『見せ付けてやればこの獣は引くだろつから』と囁きこみます。

微かに湿った熱い吐息と共に。

たまらず、リユームは思わず首をすくめました。

すぐさま笑い声も続きます。

(ええええええええええ！？ご、ご領主様が笑つ？笑い声を上げられた？何に？何をっ・みせつける？)

くすぐったさと湧き上がった疑問とを同時に乗せて、ご領主様の横顔を見やりました。

思いがけず間近であったため、彼の頬を掠めてしまった事に驚きます。

何がって？リユームの唇が！

何となく予想はしておりましたが、叩き込まれた次なる行動もあつさり見越されておりましたよ。

リユーム両手首をがっちり(しかも彼は片手！)と掴まれていて・・・でゴザイマス。

要は逃れるべく、両手を突っぱねて顔を背けようにも身動きできません。

しかも背後から回されていたもう一方の手が、肩からわき腹をさぐる様に降りて腰も抱えられてしまいました。

「嫌っ！」

こちらも負けずと条件反射です。

思わず、思い切り拒絶。

当たり前です。慣れません。馴染みようがありませんから。助けて下さい。今すぐ、解放願います。

「リユーム」

いくらか苛立ちを滲ませた声に恐れをなして黙り込みます。そのおかげで、口を押さえられることは免れたようです。眼前に迫っていた彼の手のひらが遠のきました。そのまま彼の長い指先は頬をなぞり落ち、顎を捉えます。

「コレは」

コレ。

すなわち、リユームの事でしょうかね。

ぐいと顎を持ち上げられました。

レドと上着から、目を逸らす事も許されませんな状態です。

さも自分の物のような物言いそのままの扱いです。

「コレの至らぬ点の責任は、甘やかして育てたこの俺にあります。そうまで言われるのならば今日このままコレは連れ帰りますゆえ、それまでのご辛抱です。白き獣殿？」

” 連れ、帰る？” ”

「ええ。もとよりこれはシェンテラン家に属するもの。公爵家に置

くには不釣合いな娘。これ以上恥をかいてはなりませんから」

レドは目に見えてと身体を跳ね上げました。

口を上着を啜えたまま、固まってしまいましたよ。

可愛そうに。この言い方をするご領主様はおっかないですものね。同情いたします。

でもこのように何やらご機嫌でらっしゃり、流暢な口調のご領主様が一番怖いと感じるリユームって一体。

この時にしばらく分のお愛想を使い果たした拳句、リユームに辛く当たってみたりは無しでお願いしますね。

ぎゅうと胸元の服を掴んで目を閉じてしまいました。

今耳元で聞いた言葉に、胸を抉られます。

(これ以上・・・恥を。恥をかいて。ご領主様に恥をかかせてはならないのです)

この後、やっぱり、なってないと言って罵られませんように。

レドにも。

出会って間もないレドにも『大嫌い』だと言わしめる、リユームっていう存在は一体何なのでしょう？

本当は皆さん、そう思っていらしたのかもしれませんがね。

優しいから、皆。

仕方なく優しくして下さっていたのかもしれませんがね。

ダグレスもディーナ様もルゼ様もフィルガ様も。

建前であったものをそのまま都合良く解釈したリユームを、何てあつかましいのだろうと呆れられていた事でしょう。

(申しわけありません、申しわけありません、申しわけありません、申しわけありません)

皆様のお顔をそれぞれ思い浮かべながら、心の中で詫びました。

「リユーム。可愛そうに。ここまで獣に疎まれながら公爵家に身を寄せるのも辛かるう。おまえは何の気兼ねも無くシエンテラン家に帰ってくればいい」

「ご領主様？」

あの、と口にするよりも早く抱きすくめられてしまいます。

「われ等はお暇するとしましう、獣殿。コレが世話になったよう
で礼を言います。これからすぐ公爵にはご挨拶に参るとしましう」

” ” 好きにすればいい!! ” ”

レドは勢い良く身を起こすと、ものすごい勢いで窓から飛び出して行きました。

口にはご領主様の上着をくわえたままで。

(レド。行ってしまうました)

引き千切られた上着の、袖の部分だけが残りました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

せめて残された袖に駆け寄りたかったのですが、相変らずご領主様の腕から解放は許されません。

あっさり、抱えなおされ彼に向き合わされてしまいました。

「リユーム。いいから泣くな」

「は、はい。申しわけございませんでした」

見上げた顔をすぐさま下に向けました。瞳もぎゅっと閉じます。

彼が泣くなという時は、絶対なのです。

泣き止まねばならないのです。

そうでなければ、彼の機嫌を損ねてしまいますから。

「泣かずともいい」

「申しわけありませんっ、止まらなくて。も・少しお待ち下さいっ」

「謝らずともいい。オマエは悪くない」

堪えようも無く涙が頬を伝う事に怯えながら謝りますと、予想もしなかった穏やかな声に驚きます。

慰められているのでしょうか？

ただただ驚きます。

俯いていた顔を上げて、ご領主様の表情を思わず窺ってしまうほどに。

ふんわりと、ほのかな笑みを浮かべたご領主様の瞳とかち合います。

(わ・・・笑って？微笑んでいらっしやる!?)

正直、初めて見る彼の表情に衝撃を受けてしまいました！

こ、こんな、こんなにも、その。

にこのことまでは行かなくても、眉根の寄っていないご領主様はリユーム初めてです。

限りなく優しく穏やかな常緑の瞳は深く、深く、深く。

見つめても見つめても底の無い、包み込まれる深さに飲み込まれます。

リユーム、不覚にも見入ってしまいました。

いいえ、魅入られてしまっていたと表現する方が相応しいでしょう。

しばし時を、何もかもを、忘れていたようです。

もっと思っていたと思いました。

もっと思わずに、ずっと、ずうっと。

許されるのならば。

焼き付けたいと願う瞬間を、リユームは見つけてしまったようです。

まぶたを閉じて思い浮かべるのならば、このご領主様を選びとうございます。

今までの怖い・イジワル・しかめっ面の彼が全部消去されるくらいの威力ですよ！

(わ！わ あっ、わああああですよ！)

どうしたわけか、リユーム頬が一気に熱くなりました。

息を詰めてただその瞳に向き合っていた模様。

時間が止まってしまったかのような錯覚に陥ります。

全て静止しているかのように思えた瞬間を動かしたのは他でもない、ご領主様でした。

「リユーム・・・おまえは泣かずとも良い。自分を責める必要もない。いいな？」

言っただけ聞かせるように囁きながら、彼の指先がリユームの頬を辿ります。

「.....」

はいと心の中でお返事して、こくんとひとつ頷いて答えました。言葉が出てきませんでした。

唇は言葉を紡ぎだそうと開くのですが、言葉にはなりませんので。

申し訳なくて、こく・こく・こく・こくと何度も何度も首を縦に振り続けました。

「リューム。くれぐれも、俺以外にその仕草での返事はするなよ」

こくと、またひとつ慌てて深く頷きます。

だって。言葉が出てこない。

ご領主様はそんなリュームをまじまじと見つめると、はあとため息と共に突っ伏してこられました。

再び、額同士が触れ合う程の距離で念を押されます。

「頼むぞ。危なくて仕方が無いからな」

もちろんですとも！こんな、子供じゃないんですから淑女にあるまじき作法だって解っておりますよ！

他の方にはご無礼ですものね。しませんよ！ 多分。

しかし、危ないとは？一体、何の事やらですけどね。

額をくっ付けられたまま頷くので、彼の髪がリュームの額を掠め続けます。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「アレは。あの獣の態度は好意の裏返しだ」

「裏返し、ですか？」

「俺として思い当たる。アレは子供じみた愛情表現だ。許してやれ」

「？は、い・・・つく」

許すも何も、リュームは別段怒ってはいません。

ただ・・・哀しかったです。それだけです。

「こうなる事は予想が付いていた。だからオマエを人前に出したくないのだ」

「こうなる、事」

それが指す事柄は何でしょうか。

少し考えれば分かる事です。

それは『彼に恥をかかせる』という事でしょう。

己を弁えて行動しろ、とかつて繰り返されたお小言すらも蘇って切ないばかりです。

しゃくり上げそうになるのを堪えつつのお返事は、息つきすら苦しいほどでした。

頭を撫でられます。

(ぶつ？ぶたれる？だいじょうぶ？アレは演技？本当はぶってやりたいのでわ？)

始めはそう考えてビクビクしてしまいました。

「リユーム。怯えなくてもいい。オマエを叱ったりなどしないから」

(ほんとうに？ぶ、ぶったりしませんか？)

そう尋ねたくとも怖くて直接尋ねる事は出来ませんでした。眼差しは雄弁に問い掛けていたようです。

「ああ。大丈夫だから安心してくれ」

ご領主様に触れられるのは、いつだってずっと怖いのです。

いつからか 記憶は定かではありませんが。

恐らく、出会って間もない頃からずっとです。

彼の大きな手が近づけられる度に、自分はぶたれるのだ、疎まれているから当然なのだ、と違って来ました。

実際、ぶたれたことは無いのでおかしな話なのですが、そう思っ
てしまうのです。

覚えて無いだけで、そんな事もあったのかもしれませんが。
怖すぎて記憶から抹消なんぞ、リュームの事だからありえない話
ではないかもしれませんが。

そう思い当たった途端、身体が強張りました。
怖い。

その感情が沸きあがるともう抑えようが無いのです。

恐怖に飲み込まれて行くは視界すら闇に支配されて行くかのよう。

「や・・・! やあっ!!」

「リューム。大丈夫だから落ち着け。俺はオマエに乱暴したりなど
しないから、落ち着いてくれ」

逃れようとした身体を抱え込まれ、そのまま幾度も頭から首すじ、
果ては背中までを撫でさすられます。

幾度も幾度も、それこそ幼い子供にするみたいに。

優しく。それでいて強く。頭がぐらぐらします。

加減をお願いします。

彼にしてみたら充分手加減しているつもりかもしれませんが。

「リューム」

許してくれ。

確かにそう呟いてから、彼の唇が額に押し付けられました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

リユームが落ち着きを取り戻すまで、ご領主様はずっとそうやってまでいました。

落ち着いたような、落ち着かないような。

恐怖は静かに引いて行きましたが、今度は気恥ずかしさが復活です。

やれやれ。リユームと来たら忙しいですね。

どうしたらいいでしょうか？

いたたまれずに身を振りました。

「残念だがな」

ふいに呟き落とされ、何の事でしょうかと聞き返します。

「え？」

「俺に合う縫い取り物とやらだ。オマエの力作なのだろう？」

「ええ、と。あの・そのう・えと拙いばかりでして、その」

「何せ夜な夜な夜なべして、まるまる六日以上かかったそうではないか」

「なっ・・・何故それを？あ！あのもしかして、黒いお手紙配達係り様がばらしたんですね！」

「いや。公爵だ」

「ルゼ様でしたか。てつきりダグレスかと思いました」

「黒い・・・手紙配達係り？ダグレスの事か。リユーム、随分とあの獣と打ち解けたようだな」

「はい？」

「手紙。俺は一通しか受け取っていないが？」

「はい？そうですね。リユーム、一通しか書いておりませんから」

当然でしょう。こくこくと頷きつつ、首を傾げました。

「随分と可愛がられていると見える」

「可愛がられては、うん？いないと思いますが、そうでもないとも言い切れないような？」

「どつちなんだ」

「どつちなんでしようねえ？」

「俺が訊いているのだが。」

それもそうですね、とリユームは今までの事をお伝えすべく言葉を探しました。

「ダグレス、大いばりでイジワルな事ばかり言いますから。でも何だかんだと親切に面倒を見てくれます。レドもそうです。あ！でもそれはお二方の大切なディーナ様が、リユームの面倒を見てやって欲しいとお願いしてくれたようなのです。だから、仕方なく見てくれているのだと思います」

『オマエのような病弱、野垂れ死にされてもこの家の恥だ。仕方が無いから置いてやる。』

幾度も耳に馴染んだ言葉は消し去りようもありません。

そうです。仕方が無いから、なのです。

「リユーム。その発想は何故なんだと問い掛ける俺が馬鹿なのだろうな」

「ば・・・？ご領主様が？」

そんな代名詞はリユームに相応しく、自虐的に呟く彼には不釣合いで驚いてしまいました。

「仕方なくというのはただの照れ隠しだ」

「照れ隠し？」

何のためにでしょうか？

疑問を口にしないまま見上げれば一瞬、瞳を逸らされてしまいました。

すぐさま戻されましたけれども、ほんの一瞬だけ。

次にまばたきする間には、打って変わってひつたと強く見つめら

れておりましたよ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

「リユーム」

はい。何でございましたでしょうか？改まった様子で名を呼ばれましたよ。

「改めて請う。このヴィンセイル・シエンテランの。。。。。」

請う？

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

どこかどこかどかと勢いの良い靴音が近付くと共に、大きく扉が開け放たれました。

「リユーム！」

「はい？あれ？ダグレスですか。どうされましたか」

彼の何か思い詰めたような必死の形相に、リユームは何事かと辺りを見渡ししてしまいました。

火事ですか？強盗ですか？

それくらい彼の目は血走り、息が上がっておりましてので慌てます。

「どうもこうもあるか！？レドがリユームが助けを求めているといふから駆け付けたと言っのに、まったく！！」

「まあ。レドが？」

何故、そうなるのでしょうか？

訳が解らず、ただ驚いてダグレスを凝視してしまいました。

ダグレスはといえば、引き千切られた上着の袖とリユーム達を
交互に見やっってから唸りました。

「ああ・・・そうか。レドめ。アイツは全くもってガキだからな！
ああああ！レド、どこだっ！出て来い！」

「あの、ダグレス？どうか落ち着かれて下さいませ。お隣にはミゼ
ル様がお休み、」

なのですとたしなめるよりも早く、かちやりと寝室の扉が開きま
した。

ミゼル様です。どうやら遅かったようです。

眠そうに目をこすりながら、こちらをうかがっております。

大きな物音に、突然起こされたのでしょうか。

寝起きの不機嫌さも手伝ってか、今にもぐずり出しそうな顔で
す。

「りゅーむう？ヴィンセイルも、どうしたの？」

「ああ、ミゼル様。お目覚めになったのですね。ここにありますよ」

「ご領主様の腕をすり抜けて、ミゼル様に駆け寄りました。」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「邪魔したようだな、若領主」

「ダグレス。貴様」

「レドめ。あれもガキだからな。しかしこれでよく解っただろう？」

「何の事だ」

「ふふん？我があえて口にするまでもなかるつよ」

「だから何の事だ」

ミゼル様の御髪を整えている横で、そんなご領主様とダグレスのやり取りが聞こえてきました。

何ですか。お二人こそ、何気に仲良しではないですか！
いつのまに。

男の方同士の友情は種族を超えているようですね。

良いことです。リユームは満足です。

そもそもご領主様に気安く話し掛けて、ばんばん物が言えるのはダグレスくらいしか見当たりません。

まさに打って付け。

一人、うんうんと頷いておりますと、ご領主様の何か言いたそうな視線が突き刺さります。

「ご領主様こそ、ずいぶんと仲良くおなりではないですか！ダグレスと」

「何故だ。どこをどう取ったらそうなるのだ、リユーム？」

「我も同意見だ」

「そういうところがです」

「「気持の悪い事を言うな」「」

息ひつたり合った否定のお言葉も照れ隠しの模様。

腕を組みリユームを見下ろす格好までが、左右対称です。

「バカを言うな」

「まっただいだ！」

しまった。お小言も二重でしたか。
リューム、首をすくめました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「リューム、ルゼが待っている。戻るぞ。若領主も、ミゼルも行くぞ。レドは後で説教だ」

忌々しげに呟くダグレスに三人で続きます。

「ダグレス。お手柔らかに」

「リューム。アホウ、もっと怒らんか！計画を台無しにされたのだぞ！まっただい」

「。。。。*。。。。*」

「リュームう、どうしたの？」

「何でもありませんよ、ミゼル様。さ、戻りましょう」

「。。。。*。。。。*」

そんなやり取りを交わしながら戻りました。

「ご領主様は先程と打って変わって、一言も発されませんでした。

怖いです。

第四十三話 ジャスリート家で見つけた眼差し（後書き）

仮タイトルは『レド、いじめっこ』でした。

レド、どこまでもお邪魔虫でも良かったかな。

ダグレスは頃合を見計らって邪魔する気満々です。

今回書いていて、リユームがちょっとだけ『かわいいかも。』と初めて思いました。

でもウザイと紙一重。

恋するオンナノコはそんなもんですかね。

親ばかりですみません。

お楽しみいただければ幸いです。

第四十四話 ジャスリート家の木漏れ日のもと（前書き）

ダグレス 「リユーム。皆、おまえの歌を待っている」

リユーム 「はい。ありがとうございます。ダグレスもですか？」

ダグレス 「まあまあな」

リユーム 「はつきりしませんねえ」

木漏れ日の下で生きている歡びを歌い上げましょう。

第四十四話 ジャスリート家の木漏れ日のもと

ダグラスにエスコートされお茶会に戻ると、皆様からは拍手で迎えられました。

ああ 何て良き日でしょうか。

頬を撫でるそよ風に誘われるまま天を仰ぎ、その染み入る青さに感嘆のため息が風に乗ります。

リユームの髪もそよと誘われ、楽しそうにしばし泳ぎました。

おしみなく降り注ぐ明るい日差しを、天に向って精一杯両手を伸ばすかのように伸びた樹木の枝葉が受け止めてくれます。

優しく受け止め切れなかった分は零れ、こうして地上に降り注ぐのです。

こうして、心地よくざわめく樹木の下に出で立つ皆さま達へと。

そうやって木漏れ日の中、生きている事を実感いたします。

喜びをそのままに、愛しいこの日を抱きしめるようにと己が胸に両手を置きます。

いったんは大事に抱え込むようにして、それから！それから、です。

皆様にも広く受け取っていただけるようにと腕を広げます。

光の束を皆様にお届けできますようにと思いを馳せます。

でも自分の心に正直に耳を傾けますれば、想いはひとつだったり

もします。

何よりもあなた様に贈りたい等と願うのは許されますでしょうか？

リユームの立つ場所から一番に離れておりながらも、一番視界に入り込む金の御髪に瞳を眇めずにはおられませなんだ。

リユームの歌声はある程度、離れて聴いていた方がその余韻までもが風に乗リ、よくよく届くようなのです。

それは他でもないご領主様から教えていただいた事なのです。

まだ、シエンテラン家に来て一年も満たない頃だったでしょうかね。

『オマエの歌声はどこまで響くのだろうな。そう思って距離を置いてみて気が付いた。広間ひとつ分ほど置いた方がよくよく響く』

それは大事な大事な驚くべき発見の告白でした。

今よりも身長差が顕著だったあの頃にぼつりと独り言のように呟かれた言葉は、空から降ってきた一滴の雨粒が頬に当たったかと思えましたよ。

それくらい、驚きました。

その一滴を受け止めた奇跡を、雨を待ち侘びた地面のように誇らしい気分にした事を忘れてはおりません。

それは彼がリユームの歌をちゃんと聴いてくれているという驚きと共に何かが、この胸をかき乱しましたこと今もはっきりと記憶しております。

その何かがあふれてリユームに歌わせてくれるのだと言う事も、

(どうか。この場にいらしゃった皆様に祝福がありますように)
皆様に。

そうは思うのですが、リユームと来たら。かのお方の方にはかり意識が行ってしまうのです。

蘇るのは彼にまわり付いていたあの闇の、すすけた気配です。
今日お会いしてみてもその気配は感じられなかったので、ほっと一安心。

ですがそれも、このジャスリート家の強力な結界とやらのお蔭らしいのです。

おかげ様でリユームは、契約ナシでもこうやって元気でいられるのです。

闇 振り払いたまえ 我らが光

あの方に闇が及びませんようにと祈らずにはおれませなんだ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「お噂通り、いや。それ以上でございますなりユーム嬢。これはこれ
れは」

にこにこと目尻のシワをいつそう深くされながら、拍手で迎えて
下さったザカリア様に招かれます。

「恐れ入ります」

一礼した後、促がされるままに席につきました。

「貴女のお義兄様が、なかなか人目に付かぬようにされるといってお話も頷ける。わたしも同じようにするでしょうからね」

はつと表情を強張らせたリユームを氣遣うように、ザカリア様が微笑まれました。

「人目に付かないように、しますか？ザカリア様も？」

怖気つきそうになりながら尋ねました。

「ええ。閉じ込めて自分の目以外に触れぬようにしたいと思いますよ、きつと。貴女には不憫でしょうが、貴女のためにもね」

「やはりこの黒い髪と瞳は不吉でしょうから」

「不吉？誰がそのように言い聞かせたのでしょうか？とんでもない！それは恵まれた色彩なのですよ」

「ええ！？」

「そうです。貴女は面を上げた方がよろしい。いや。俯かれる様も憐くて可愛らしいがね」

「あ……の、恐縮です」

「ルゼの心配がよく解る。ああ、本当に貴女のお義兄様と来たら！何て事をしたのかと思わずにはいられなくなりますな。気持ちは解らなくもないが」

リユームはといえば、何とお答えしていいものやらと曖昧に微笑んでみました。

ザカリア様はご自身のあごひげを撫でながら、続けられます。

視線を幾分、遠くにさ迷わせながら。

「リユーム嬢は知らぬかもしれないが、貴女のお義父様に貴女をうちの息子の花嫁としていただけないだろうかと申し込んだ事もあったのですよ。今から四、五年ほど前です」

「ええ。はい。あの、お話だけはお伺いしておりました。ただ、そ

ういう話があったがお断りしたという事だけは聞いております。まさかザカリア様とはお聞きしておりませなんだ」

「まだ幼いながらも貴女は人目を引いておりましたから、これは急がねばと思つたのです。そのせいで、前ご領主殿には何とも難しいお顔をさせてしまった。それからでしょう。シエンテラン家が総出で貴女をしまいこもつと始めたのは・・・申し訳なく思つておりますよ」

「そ、そんなことは！あの、それだけでは、ないと思います。色々な・・・そう、色々な要因が重なりました結果でございます」

例えば勝手に抜け出したり、拳句に誘拐されかけたり、怪我をしたり、熱を出したりなど。

そりゃあ、もう色々と！

「しつこく、未練がましいとは思つのですがあの時の気持ちと変わりませんよ。今日は今さらながらお話を蒸し返そうと思つていた」
「蒸し返す？」

「そう。どうでしょう？うちの息子達と会つてみませんか、とね」

「ええと、あの。ザカリア様の」

「ええ。三人もおりますよ。一番上はもう三十に手が届く。次男は二十五。貴女のお義兄様と同じ年頃だ。末は二十歳になつたばかりで貴女とは歳も近い。いかがですか？」

「あの、その、そういつたお話は義兄の許しを得てからでない、そのお」

「それはさておき。貴女のお心はどうでしょうかね？お嫌ですか？」

「あの・・・申しわけありません。ザカリア様のお話はお受けできません」

「ふふふ。わかつておりましたよ。貴女が歌いながら誰を思ひやつているのかは、この場に居合わせた者ならば誰だつて解ります」

「だ、誰だつてですか!？」

「ええ。例えばそう。あそこで俯いて、たそがれているメルシユア商会の跡取り殿とか」

こそつとザカリア様は呟かれましたが、気まずくてとてもじゃありませんがそちらを向く事ができません。

「貴女に縁談を持ち込んでも全てつき返されるとは有名な話ですよ」「えええええ!？」

「ご存じなくて当然でしょうね。他には養子縁組の申し入れもね」

「一体、何故でしょう? さっさと他家に出されればよろしいと思うのですが」

厄介払いできたというのに。

思わず漏らした呟きに、ザカリア様がほ・と笑い声を上げられました。

「おやおや。若様・・・ご領主様も大変だ。こういうのを自業自得というのだったかな?」

「自業自得ですか。よく耳にする彼への評価です。主にルゼ様からですけれども」

「ええ。ルゼからもそのように聞いておりますよ。そこに漬け込めたらと思つたのですがね。息子ばかりで娘に恵まれなつた父親としては。当時のシェンテランの主が羨ましかったものですよ。宴のたびに可愛らしい娘を養女に迎えたと、あまりに自慢げなのでね」

ザカリア様が茶目つ気たつぷりに片目をつぶつて見せるので、リユームも釣られて笑つてしまいました。

「貴女は光の中で生きるのが相応しい。先程歌われたようにね。木漏れ日の中に在りなさい。闇など見据える必用などありはしないのだから」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ザカリア様や皆さんと過ごせて今日は楽しゅうございました。

楽しい時間というのは、本当にあっという間なのです。

皆様方をお見送りするために、ジャスリート家の正門に集まりました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ザカリア様とはまたお会いしましょうと約束してから見送りました。

リド様とも、ぎこちなくもそのように約束してお別れしました。

皆様とお別れを惜しんでいるそんな中、突然名を呼ばれました。

「リューム!!!待って!!!」

聞き覚えの無い、少しだけ甲高い声はよく響きます。

「え?え、と、はい?」

返事をしたものの、誰かはわかりませんでした。驚いてその声の主を振り返ります。

夕暮れにそまる空に映える、白銀に近い金の髪がふわふわです。少しだけクセのある、空気を孕んだ綺麗な髪です。

瞳はそれよりも濃い琥珀色です。

そんなあめ玉みたいな綺麗な眼でリユームをじっと見ているのです。

どなたでしょうか？

今日の招待客の一人にしては、今初めてお見かけしました。白が基調の目立つ装いの彼を見逃すとは考えにくい話です。

そんな彼はどこか思い詰めた表情で駆け寄って来ます。

リユームより背がほんの少しだけ高いくらいで、そんなに目線の高さも変わりありません。

そのせいか目が合います。

きれいな少年です。

頬の線がまるやかで、あまり骨ばった男らしさを感じさせないものですから、リユームよりも少し年下だと思いました。

身に着けた衣装の上着を飾る刺繍も金糸のようで、豪華な雰囲気醸し出しております。

まるで・・・そう。まるで王子様とやらみたいではありませんか、彼。

「リユーム」

そんな彼に名を呼ばれました。

どなたでしょうかと首を傾げます。

「リユーム。帰るのか？シエンテラン家に」

「え？」

真剣な眼差しとぶつかります。

眼差しを捕らえられたまま、腕を取られました。

その視界の端で、何かが動いたのも見ましたが、何かはわかりませんでした。

何せ、次の瞬間には腕を引き寄せられ、少年の腕の中でしたから。

「リユーム、レドがイジワルしたから帰るのか？」

「レっ・・・レド！？レドですか！？」

答える代わりにでしょうか。

ぎゅううと強く抱きこまれてしまいました。

「リユーム。レドが悪かった。上着もリゼライかディーナに頼んで直すから、ゴメン」

「レド！わかりました！わかりましたから、お放してください！！」

「イヤだ。せっかくリユームにこうしたくて、この姿になったのにぐええですよ！」

皆、皆さん見ております。（何故か微笑まながら。）

お助けくださいっ！とじたばたもがきました。

「レド！おまえは！どこに隠れていたかと思えば・・・その姿はリゼライの力添えか？」

腕を組んだダグレスが、睨み下ろしてきます。

そんな視線からまるで庇うように、よりいっそう抱き込まれてしまいました。

「リゼライは関係ない。あの男がリユームにしていたように振舞いたいと願っただけだ」

「やれやれ。恋慕の情を知って目覚めおったか。面倒なヤツ。いいから、放してやれ」

「イヤだ！」

「放してやれ！ますます嫌われないなら、話は別だが？」

腕がゆるみました。

その僅かな力の変化を見逃さなかったらしいダグレスが、レドから引き剥がしてくれました。

そのままダグレスの背に庇われます。

「リユーム！」

「ちょっとは引く事も覚えろ、ガキが」

すぐさま腕を伸ばしてきたレドの額を、ダグレスが手のひら一つで制してくれました。

レドには申しわけありませんが、ダグレスの背中にしがみ付いて避難です。

「うっう」

あー！びっくりしました！

レドー！

レド、でしたか！

「リユーム。もうイジワルな事しないし、言わないって約束するから！だから帰るなんて言わないで、レドといてー！」

「ええ、えと。レド、あのですね？」

そう思いました。

身体がふわんと持ち上がりましてですね、何でしょう、この感覚は久しぶりですねー？等とのん気に構えておりましたら（全然構えも何もあつたもんじゃないと思われませぬ）視線が高いわけですよ。「わ・・・あ。高いです・・・っ、つて？ええええ！」

そのまま身体に感じたのは嫌にがちり掴まれた腰と、ぶち当たるときのように吹き付けてくる風でした。

リユーム嬢っ！

待て！若領主、こら！待たぬか！

あらあ　？

リユーム　ムウ！！！！

等などの叫び声もあつという間に彼方です。

ジャスリート家の門構えもどんどん遠ざかって行きます。

「じりよ、じりよしゅ、さ・・・ど・・・どうされまひ、たか」

ぜはぜは、ぜーはーぜーはと肩で呼吸をしつつ、尋ねます。

「黙っている。舌を噛む」

ドカッドカッドカツとお馬さまの蹄が、力強く大地を蹴り上げる音と風とに何もかもが飲み込まれます。

きたいと思います。

という事はデスネ、かなりシエンテラン家に近い場所にまで来てしまったという事です！

「ご領主様。どうされたのですか？」

「降りるぞ」

先に降りたご領主様に抱きかかえられる格好で、下ろしてもらいました。

「何故、俺から離れたのが改めて訊きたかった」

下ろしてもらいながら、唐突にそう尋ねられました。

とん、と軽やかにつま先が地上に着地すると同時に答えます。

「その方がご領主様のためだからです」

「俺から逃げたかったのか？」

頬に手を添えられ、顎を捉えられました。

「逃げ出したい気持ちも正直、無かったわけではございませんが・

・また少し違う気がします」

「俺から逃げられるとでも思っていたのか？」

覗き込まれた視線に及び腰でしたが、そんな事は許されないようです。

逸らしようの無いほど、眼差しを覗き込むのは反則だと思えます。そんな事したら、あっさり暴かれてしまっに決まっているじゃないですかねえ？

「いいえ。逃げても捕まえられてしまうだろうな、って思っていますよ。」ご領主様ならまた、捕まえて下さるものとも信じて……いえ。願っておりましたよ」

「当たり前だ。逃れられると思うな。微塵も」

ぎゅっ、と抱き締められるとこの胸までもが同じようにぎゅっ

「わかりました！」

ハイ！と勢い良く右手を拳手です。

「言ってみる。その特殊思考の導き出したものを。いい加減、覚悟も出来ている」

何の覚悟でしょうかね？大げさな。そういぶかしみつつも、答えます。

「ええと。ご領主様はリユームをここへ連れて来たかったのですね」

「ああ、そうだ」

なかなか良い調子のようです。

「それは！」

「それは？」

「リユームをここに捨てにいらしたのですね」

まるでこれは手に負えないコを森に捨てに来たみたいですね！

「は！？」

「捨てるとまでは行かなくても、あのままルゼ様にご迷惑をお掛けする訳にもいきませんよね？だからといって、またシエンテラン家に戻っても仕方が無いですしね。こうやってリユームが森の中で一人で生活していければ何の問題も無い訳です。街中で行き倒れの心配も回避です。リユーム、ここで暮らせば誰の迷惑にもなりませんしね」

「リユーム」

「正しいご選択だと思います」

ただ最初はちょっと自信が無いので、少し救援物資など期待して

しまいますが。

第四十四話 ジャスリート家の木漏れ日のもと（後書き）

『レド、変身』

仮タイトルです。

そしてそのまま別の仮タイトル（要は書きかけ。）『誘拐犯と化す領主』になだれ込みました。

レド、どこまでも当て馬っばい。

そしてリユームよ、状況に気が付こう？

ヴィンセイルは強行手段に出たんだよ？

第四十五話 シェンテラン家の狩猟小屋で立てた誓い（前書き）

おかしいな。

また、『ここままで！』にたどり着けませんでした。

第四十五話 シェンテラン家の狩猟小屋で立てた誓い

いかがでしょうか!?

大当たりではないですか!?

そんな期待に満ちた眼差し半分、そうだと言いつらられる事への恐怖半分で怖々見上げます。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

ここはシェンテラン家の狩猟小屋です。

人里離れた森の奥深くにございます。

すぐ側には湖が広がり、この森の豊かな緑をそのままに映しております。

たいそう神秘的な静けさです。

それでいて、深い森に満ちる静寂は何かしら力強いものです。

静けさに耳を澄ませば、かすかに届くのは小鳥達のさえずりです。それ以外にご領主様とリュームの息使いのみです。

久しぶりの流れですね。

そうは言いますが、そう遠くは無い覚えがありますけどね。

リュームいい加減、勢い良く上げた右手がだるくなってきました。ご領主様の出方を窺いつつ、刺激しないようにそろそろと下ろしてゆきます。

このまま会話終了になっても不思議ではない沈黙が続いております。

「もう 何を言われても驚くものか。それがリユームと話す度に思ふ事だ」

(リユーム一応、生死に関わる判決を待つくらいの勇氣を持って、お待ちしていたのですけど?)

何だか質問とはかけ離れたお答えではないですか。
何でしょうかと、思わず椅子から立ち上がります。

「はいい!?!」

「とはいうものの、驚きを覚えずにオマエと会話を進めるのは難しいようだ」

「ちやうどございますか」

ふ、とどこか自虐的な笑い方は、この上なく嫌な予感をひしめき出させるってものです。
わい。

そうになると、次に来る展開に備えるのが賢いかと思われま
す。リユームさっさと、両手で己の耳を塞ぐために構えました。

(これは。この流れは経験上)

どっか ん!とね、大声出されちゃいます予感がひしひし。

雷ひとつ、落ちますよ。

落雷注意ですよ。

「もう、許しはしない!何もかもだ!」

「ご領主様に、ドンツと拳をテーブルに打ちつけながら怒鳴られました。」

「テーブルが床から跳ね上がりましたよ。同じようにリユームの身体も。」

（ほうら、やっぱり！うううう。怒鳴られました。もう、すぐ怒鳴っておっかないんだから）

「許さない、ですか。リユームの事を」

「違う。オマエに近付く者全てだ。人であろうと獣であろうと許さない。俺はもう限界だ。リユームが泣こうが喚こうが構わない」

「ごりよ、ご領主さま？一体、どうされたのですか？」

「恐怖のあまり一歩引きかけましたが、遅かったようです。がっしりと両肩を掴まれました。向き合っほかは無いです。」

「このリユーム、怒りも露わなご領主様と向き合っ心臟は持ってありませんのをお忘れなく。」

「そんな訴えすら咽喉に張り付いて出てきません。代わりに心臟が飛び出しそうです、ご領主様。」

「ひくつとリユームがしゃくり上げたのに気がついてくれたようです。慌てたように優しく頭を撫でられました。」

「悪かった。怯えるな」

「は、はい・・・つく」

「無理ですとは思いましたが、言えませんでした。」

「言ったらまた怒鳴られそうでしたから、何とか涙を堪えます。」

「だから、悪かった」

「ご領主様の肺活量も素晴らしいですが、なんの。リユームも以外に負けちゃおりません。

歌うのは何気に呼吸が長く続かねばならないもので、鍛えられておりますよ？

「ご領主様、リユームはその、そうなのですか？今まで言い聞かされた事と違いすぎて、理解できません。リユームにとってご領主様のお言葉は絶対のものであり、絶大な影響力でございます。それは今も変わりません。今さらそのように言い聞かされて何故解らないのだと言われましても、途惑ってしまえます。だったら今までの七年間は何とすればいいのでしょうか？」

絶大な影響力を持つ事に薄々勘付いてはおりましたが、言葉にする事でより一層はつきり致しました。

ルゼ様が折に触れて『ヴァインセイル殿の評価に下ってはならないのよ』と、言い聞かせてくれたのも領けます。

ジャスリート家の皆様がリユームに何を諭そうとして下さっているのか。

それに気がついてはいましたが、リユームはどこか上の空でありました。

自分の事なのに、まるつきり他人事くらいにしか捉えておりませんでした。

それだけリユームの耳ときたら、ご領主様の言葉以外に影響されないと言う事ではありません。

ですが、それはとんでもない話なのです。

（ああ。リユームよ、この方に太刀打ちできますか？）

あまりに夕チが悪すぎます。
苦しく感じながら瞳を伏せました。

(やはりこの方はリユームの一番好きで、一番この世で嫌いな方)

「悪かった」

リユームが重苦しく黙り込むと、遠慮がちに抱き寄せられました。
「無様だがもうなりふり構うか。リユーム、おまえの全てを俺によこせ。どうかこのヴェインセイル・シエンテランの妻になれ」

胸の鼓動がひとつ、決るように大きく響きました。

ちようど宝石の柘榴さまの真下です。

まるでザク口様にほくそ笑まれたかのような気がします。ええ。
微笑むなんて可愛らしいものじゃなしに。

「ご領主様？し、しっかり？」

気を確かに持つてくださいまし！

こんなに弱気な彼は初めてです。

それでいて何気に命令口調なのは変わりません。残念。

「返事を。今すぐ。でなければ俺は何をしでかすかわからん」

その返答次第でリユームの身はどうにかなってしまいそうですが、
ご領主様？

それよりもひとつ、確かめておかねばならない事がありますですよ。

答えを無言で待ち侘び、じれったそうにこちらを窺う瞳を見上げます。

「あの、その。だから、その。ええと、ひとつだけ教えて下さいませんか？」

「何だ？」

「ご領主様はその、あの、リユームの事お嫌いではないのですか？」

「リユーム」

彼は今まで見た中でもそれはそれは最大に憐れなものを見る目で、リユームを見ておりますよ。

切れ長の瞳が見開かれた事で、幾らかまああるく見えました。

闇夜を見据えるエキのように、瞳孔が開いたようなまんまる。

その瞳を覗き込むように見上げます。

以外にまつげが長いですと、今さらながら発見。

ご領主様はしばらく信じられないものを見るような、真に奇妙なもの眺めるかのようにしげしげとリユームを見下ろすばかりです。

やがて盛大なため息が一つ、リユームの額をくすぐりました。

かと思えば、次の瞬間には湿り気帯びたぬくもりが一つ、額の一

点に集中しております。

「そこからののか」

ご領主様は額に唇を押し当てたまま、そう呟かれました。

そこ？ドコからでしょうかね？

とりあえず、そこはリユームのおでこです。

再びため息と共に抱きこまれました。

耳を掠めるのは重苦しいため息ばかりでは、こちらも切のつぎぎいます。

やがて脱力したかのように、ずるずると彼はリユームの身体に縋りつつ、膝を折って行きました。

リユームの両肩に置いた手も同じく、そのまま腕を辿るようにし

て手首を掴まれます頃には、彼のつむじを見下ろしてありましたよ。
やや！

そう言えば初めて見ましたよ。彼の頭のとっぺんなんて！
ちよつと触つてみたいリユームですが、両手の自由はありません。

やがてゆつくりと、ご領主様はご自分の左手を、ご自身の胸に当て
られました。

右手はリユームの左手を取ったままです。

「この胸の愛を捧げるただ唯一の女性が貴女様です。ジ・リユーム・
・シエンテラン嬢」

厳かな宣告の後、彼の唇が指先に押し当てられました。

「しよ、しよ、正気ですか!？」

思いつきり動揺し、恐れおののくあまり後ろにのけ反ります。

「人がしごく真面目に愛の告白をしているのになんだ!！」

「だって!だって、ご領主様が悪いのです」

一番最初にそのお言葉を下さいますよ!

「リユーム」

リユームときたら。

彼を見下ろしたまま盛大に涙の雨を降らせておりました。

奇跡としか思えない出来事に驚きのあまり溢れた涙は、彼へと降
り注いでしまいます。

いけないと顔をそむけようとしたのですが、やんわりと手を引か
れる事で拒否されました。

そのまま、腰を折り恐るおそる彼の頭を包み込みます。

呼吸を整えながら、こういった場合の返礼の作法とやらを必死で頭の中でさらいました。

まさか、自分がこのような作法を実践するとは思わなかったものですから！

一応淑女のたしなみとして教えられましたが、かなりうる覚えです。

「誰よりもお慕いしております、ご領主様。この胸の愛を捧げましょう」

「・・・と」

「え？」

「ヴァインセイルと」

耳元で囁かれます。

「ヴァインセイル様を、お慕いしております」
「様はいらない。呼び捨てで構わない」

同じく、耳元で囁きこまれます。

「ヴァインセイル」

「リユーム」

「決まりだな」

「何の事でしょう？」

「そのためにオマエを攫って来た」

あ。やっぱり犯行は計画的だった模様です。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「このまま駆け落ちとしゃれ込むか」

あまりに素っ気無くぽそりと呟かれたため、よく聞こえませんでした。

「が。。。がけ？オチ？」

「何故、崖を落ちねばならん。そうなれば心中だろう。冗談じゃない」

「心中？」

「かけおち」

何でしょうか？初めて耳にする言葉です。

「結婚を反対された男女がその土地を離れて行方をくらませることだ」

「く。。。くま・せらる？くら、せまる？」

嫌な響きでございますね、それ。

「くらませる」

嫌な予感もしてきますね、その言い方。貴方様が口にしたとたんと特に。

読めました。

駆け落ちとやらに及んだ男女のオチはどうなるのでございますしよ
うか。

「そうですね。そんな言葉もあるのですか。さすがリューム、世間

知らずの教養なし！勉強になりました」

それではっ！っとその腕をすり抜けようにもどろしいようもない。

「オマエはまさか公爵家に戻るとか言いだす気なのか？」

「は・・・んんっ」

はい、もちろんでございますよ。

そう答える前に唇を塞がれてしまいました。

口封じ。

何ていいいましょうか、今までの口付けともまた違っています。

必死でこの熱を繋ぎ止めておきたいと願いが込められているような。
な。

強引ですが、包み込まれるような安心感がありました。

彼もまた不安なのかもしれないね。

リユームもまた、そうであるように。

彼の熱を奪われたらリユームはきっと凍えてしまつに違いありません。
せん。

「んっ、あ、って・・・皆さ・・・しん、ぱ・・・んっやあ、ま・・・

て

「待てるか」

彼の狂おしい息づかいの合間に、どうにか訴えます。

が、すげなく却下です。

いやいやと、頭をふります。

だって皆さん心配していると思うのです。
挨拶すらなくいきなり立ち去る気なんてございませぬよ。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ちいっ、舌打ちと共に唇が自由になりました。

「何故だ？ たった今俺に永遠の愛を誓ったその舌の根が乾かぬうちに、何を言い出すのだ」

「た、たひ、たふいかに」

口唇のシビレが酷くて、言葉がうまく出てきません。

確かに乾いちやおりませぬね。

それどころか、かなり、湿っております・・・すよねって!?

(うわああああああん！慣れてませんが、けっして、慣れてませんが！)

リユームは今、何をしておりましたか!?

言葉にすら変換できません。頭の中であってすら煮えて、沸騰し

ております。

しばらくお待ち下さい。

ぜっぜと荒い呼吸を繰り返します。

それに大分脚色されてはおりませんか？
え、えいえん？ 永遠の愛って、ええ!?

「え、永遠でございますか！？永遠を誓われたのですか！？」

「改めて問う。また、そこからなのか」

「そ・そ・それは、永遠を誓うのはご婚礼のお式の際ばかりと思っておりますから」

「だったらこのまま神殿に乗り込むか」

「ええと？それはなりません。戻りましょう、ご領主様」

「まったくオマエは強情と言つか、何とつか。何故、俺に身を預けられない？」

「預けられる訳がありませんか。あと、余命三年ばかりの身で」

「ご領主様が息を飲んだのが解りました。」

第四十五話 シェンテラン家の狩猟小屋で立てた誓い（後書き）

『嫉妬に狂う領主』

焦がれすぎ 壊れた模様 ヴィンセイル （字あまり。）

そして動揺しつつも何気に冷静なのは女だよな！

リユームさん。

天然なのはブリだのうなぎだけで充分なんだよ！

そんなツツコミを入れずには、物語は進められません。

次回、かなり正念場かと思われます。（ワタシが。）

第四十六話 シェンテラン家の狩猟小屋での告白（前書き）

いよいよ立ち込める闇に踏み込む時が来たようです。

まずは見据える事で、一歩前進。

第四十六話 シェンテラン家の狩猟小屋での告白

「リューム。オマエは何を言いだす・・・」

珍しくご領主様の言葉には動揺が現れておりました。

言葉じりだけではなく、その眼差しにもなので正直驚いてしまいました。

それはそれは顕著に眼差しが揺らいでおりますよ。

彼は一度リュームから顔を逸らしましたが、すぐにまた見下ろしてきました。

それは意識されてきつい眼差しをご演出されたものと、リュームは判断いたします。

何せ、瞳が潤み陰りを帯びていらっしやいますから。

それは彼が心底哀れむべきものと出会った時だけ見せる色です。

例えば、そう。

リュームが死に掛けるほど無茶をやらかして幾日も寝込み、ようやく起き上がるようになった頃などにですね。

そんな風に睨まれたとしてもあんまり怖くありません。

ですからいつもの様に、リュームが黙ってしまふ事は無いわけです。

この方の顔色を窺い続けて早七年の、リュームの経験による勘を舐めないでいただきたいものです。

「ご領主様」

結論から申し上げます。

「もうじきこの呪いなるものは完成しますよね？発動してから十年という歳月をかけて。ですから、リユームという存在は今後、もっと三年です」

それはすなわち、彼と出会ってからちょうど十年と言う事でもありマス。

「呪いだど？オマエは何を根拠に言っているのだ？その柘榴石に関する噂が本当だと信じての事か？」

かつてそれでご領主様と言い争いになりましたものね。

『シエンテラン家の柘榴石。女主人の血潮を浴びて年経る毎に輝きが増す』でしたね、確か。

胸元のザク口様が否定するかのようになり、いくらか冷たくひんやりとして感じられました。

（はい。そうでございますね、ザク口様。リユームをシエンテラン家の主に相応しい花嫁と認めて下さって、感激でございますよ）

そう、心の中で語りかけ鎮めるかのようにそっと撫でました。

「いいえ。ザク口様よりも何よりも、もっと昔からリユームにまわり付いていた闇によるものですよ」

リユームは静かに首を横に振って、否定いたしました。

「あの日。シエンテラン家を後にした日、初めてこの目に闇なるものを見ました。それはリユームを探してその手を伸ばしておりました。その正体は何でしょうかとダグレスに尋ねたところ『闇』だと

教えられました。それはリユームという存在を狙うもので、あのままシエンテラン家に居続ければ確実に・・・かく、じつに、りゅ、りゅむは死を、死を迎えると」

ご領主様は静かに聞き入るかのように、リユームの背を撫でてくれています。

それはまるで続きを促がすかようにでもありますし、慰めているかのようにもございました。

言葉に詰まると、ぽんぽんと軽くあやすように彼の手が背に当てられます。

それがどうしようもなく嬉しくて、温かくて、自然と瞳が潤みま

す。「次に目にしたのはご領主様がルゼ様をお訪ねになった時です。リユーム、その、ジャスリート家の塔からご領主様を見送った際にです。ね、またまとわり付く闇を見ました。ご領主様の背後にその闇は在りました。リユームの視線に気がつく、その闇はリユームを狙って襲い掛かって来ました。ですが、このジャスリート家の結界に阻まれて霧散いたしました」

ぜはっと荒く息を吸い込みます。

息継ぎすら忘れて、必死で見たものの説明をしていたようです。

しばし、お互いの瞳を覗きこみます。

リユームはこれ以上の説明はもうご勘弁願いたいです。

おそらく、泣き出してしまうでしょうから。

ふと気がつけば、頬が濡れております。

もう、泣いておりましたか。

少し遅かったようです。

言葉になりません。

涙を封じ込めてしまおうと、きつく目蓋を閉じました。

呼吸が乱れ、身体が小刻みに震えます。

その間ずっと、ご領主様の大きな手のひらが背中を摩っつていて下さいました。

彼の胸に身を預けて、呼吸と鼓動を整えます。

「ご領主さま。闇をふり払わねばなりません」

「どうやって」

「どうあっても。このトラヴァイエの最後の生き残りの血に賭けて、何が何でも勝たねばならない勝負に出る所存でございます」

「正気か。カラス」

カラス。

その呼び方には賞賛といくらかの畏怖が込められているのだと、つい最近知りました。

はい。カラス・カラス・カラス。

リユームの闇色の瞳と髪は、ある種の才に恵まれた証なのだそうです。

まだその才能は眠ったものであり、何とかたたき起こさねば使い物になりませんという注意書き付きですが。

「カラスであればこそその決心ですよ。揺らぎません」

「どうやってだ!？」

「あらかた見当は付いておりますよ。だいたい」

「そんな言葉で誤魔化す気か!百年早い!」

さすが敏腕交渉人、ご領主様。

誤魔化されてはくれないようです。ばればれです。ちえ。

しかし、そこはそれ。開き直るしかありません。

はったりですがね、実は勝算が無いわけでもないの。

胸を張ります。

「百年後にはどちらにせよお墓の中です。下手したら墓標に刻まれた文字すらも風雨に晒され、誰にも読めなくなっていることでしょうね」

「リユーム。どうした? 誰の入れ知恵だ?」

「む。ちよつとばかり、アレでしたか? 賢そうでした? 残念でした! リユームだって高尚な物の見方・言い方くらい出来るんですよ!」

「威張るな」

「つきましてわー」

「何だ」

「つきましてわですわー」。ご領主様のご協力も必要となるんですよ」

「俺に拒否権は無さそうだが?」

「お察しの通りです。何せこれはシエンテラン家のかけた呪いですからねー」

「リユーム。オマエ、どこまで知っている?」

「ご領主様が、リユームを呪った張本人だって事までですかね?」

リユームはなるだけ、なるだけ。

明るく悲観的にならない調子を心がけたつもりでしたが、どうで

しょうか？

なるだけ平常心を保ってお伝え 出来ましたでしょうか？

………どうでしょうか。

いい感じで日も暮れ始め、辺りに夜闇が忍び寄ってきております。

「リユームを呪うほど、厭わしいと思われていらしたという事ですね。承知いたしておりますよ。あ、でも大丈夫です！なるべく長生きして、呪われ続けようと思えますのでご安心下さい。それでご領主様が安泰ならお安いものです！」

「リユーム！！」

怒鳴りつけられて、びつくと大きく肩を上下させてしまいました。

「あ、あの。お薬も欠かさず飲んでがんばりますからぐいっと顎を持ち上げられます。」

「リユーム。もうこれ以上俺を責めてくれるな」

「え……？責める？ご領主様を？」

言い終わるや否や、きつく抱きしめられます。

この身長差ですから、抱え込まれていると言った方がいい状態に身を任せます。

彼の手はやはり幾らか冷たく、リユームの熱を奪って行きます。いいえ？どうぞ、リユームの熱をこのお方にお分け下さいと思います。

ご領主様の両手が頬を包み込み、リユームの頬から頂を撫でさす

な口調で話しおつてからに、忌々しい！いいか、人の子の生み出した闇は人の子にしか見据える事が出来ぬのだぞ。我を当てにしすぎるな。ましてや嬢様やルゼを巻き込むな！フィルガなら構わぬが。あああ、もう！面倒だ面倒だ！こんな厄介な小娘今すぐシエンテラの若領主に返してきてやる！！”

その際「緊張感ですか。あるような、ないような？」などと間の抜けた返事をしたせいで、堪えきれなくなったらしいダグレスに滅茶苦茶怒られて体当りを食らいましたが、ディーナ様とルゼ様が止めて下さいましたよ。

リユーム、部屋の隅に吹っ飛ばされたまま丸まって動けずにおりました。

痛みからではありません。

恐怖とその恐怖に向う勇氣を持っていない自分自身が情けなく、です。

（だって。見たくないです。怖いですもの。そんな闇の正体なんてそれが、その正体がもしも・・・だったら、リユームは平伏してしまいます。一生、面を上げられません。それこそ闇を見据えるのを恐れたあげくに瞳を閉じてしまうのはまた新たな闇を見てしまうって、堂々巡りではないですか！？）

そんな恐怖から身体が震えました。

リユーム、往生際が悪いつたらありやしませんね。

だって、怖いです。

そんな事実を認めなきゃならないなんて、どれだけ救い様がない

んでしょうか。

(リユームが恐れているのは、後三年しかこの身が持たないかもしれない、という事ではないのですよ。ダグレス)

いいえ、まあそれも怖いですけどね。

怖いというよりも哀しいですけどね。

皆様よりお先にお墓の中は寂しいですね。

何よりも、ご領主様ひとりを置き去りにしてなんて。

彼の側で一生を共にする伴侶となる女性は、そんな期限付きであってはなりません。

そうでしょうか？

彼の跡継ぎとなる子供を産み、育てる体力が必要でしょう。

まあ何とか三年の間に成そうと思えばやれるかもしれませんが、その後は？

もしも運よく母となつてから、幼い子を残してご領主様も残して立ち去らねばならないなんて、耐えられません！

その後はご領主様にとつても子にとつても、記憶の中ではないリユームという存在に成り下がるのですか？

そんなのはどうしたって嫌です。

リユームはどうしたって生きたいという、欲が出てきてしまいません。

だったら、この身に降りかかる闇をどうにかするしかないわけです。

その諦めにも似た境地でせめてと望むのは事実です。
リユームは、このお方の口から直に事実を語っていただきたいのです。

まあ、諦めなどと表現致しましたがこの境遇を諦めてはなるものかと思っております。

要は運命とやらをですね、受け入れましょうって意味での諦めでござイマス。

この呪いとやらを我が身に降り注ぐ災厄ではなく、貴方との絆としようという心意気をどなたか買ってやって下さいませ。

そうでなければ何のためにリユーム、カラスで生まれたのか?で、
「ごぞいますよ!

.....

「ご領主様の表情はもはや窺う事はなりませんでした。

でも彼が心底、哀れんでくれているのだけは伝わってきます。
どうしてそう言い切れるのでしょうか?

それはリユームの希望がそう思わせるだけかもしれないの?

「リユーム、幼い頃から寝込んで大人しくせねばならない分、そりやあ色々と考えましたよ」

「例えば？」

「どうしてこのシェンテラン家に来てから身体が弱くなったのだから、とか。そもそもどのような流れで、おかー様がこの家の『お妾ではなく後妻様』に収まったのだろうか、とか。お義父様はリユームになぜこんなに良くして下さるのでしょうか？その反面、若様はどうして義兄とも呼ばれるのすら厭うのでしょうか？再婚されてからすぐにではなくその四年後の、今から三年前、お義父様はおかー様にどうしてザク口様を贈られたのだろうか、とか。そうしてお義父様が亡くなられ、おかー様が亡くなられてから一年も経たないうちに何ゆえご領主様がリユームにザク口様を下さったのか、などなどです」

「答えはでたのか」

「まあ、リユームなりに」

「聞かせてみる」

「おかー様はリユームをシェンテラン家に売ったのですね？ですから後妻様という立場を手に入れたのでしょうか？お義父様は『タラヴアイエのリユーム』が必要だったのです。若様の安泰のために」

背を撫でてくれていた、ご領主様の手が止まりました。

「リユームは、薄々勘付いておりましたよ」

「これだからカラスは小賢しいというのだ」

お互い少し前の関係の時のような棒読みです。

第四十六話 シェンテラン家の狩猟小屋での告白（後書き）

『呪いとはこの身に降り注ぐ災厄ではなく』

じゃあ、何とするのか。

リユームの答えは出ていました。

迷いながら、怯えながらの決断です。

今回、リユームがぐだぐだと『闇なんてやっぱり見たくない。このままでいい。このままで・・・知らないフリのままで』という気持ちらしく、書いてもなかなか進みませんでした。

見たくないよね、闇なんてさ。

そうは思いつつ、やはり闇を見据えるところからじゃないと始まりません。

リユーム、辛そうだ。

普段、ノータンキな気質の子なだけに、この落ち込んでる感じが調子狂います。

辛すぎて感覚が麻痺している模様です。

第四十七話 シェンテラン家の狩猟小屋での決意（前書き）

リユーム、落ち込みつつもやや復活？

第四十七話 シェンテラン家の狩獵小屋での決意

「お褒めに預かり光栄でゴザイマス。このまま知らぬフリを決め込もうかとも思いましたが、そこに予想外のご領主様のご・ご・きゅ、きゅ、求婚がつ」

そんな他人行儀に一線を引いた口調も、そこまででした。優しく包み込まれるように抱きしめられて、背を撫でられます。

(エキが撫でられているときはきつとこんな気持ち)
安心に身を任せて目蓋を伏せました。

「何故知らぬふりを決め込む必要があるのだ？」

少しいじけたような声音に、こんなに緊張した時だというのに笑いがこみ上げてきました。

「真実を明かす必要などございませんでしたでしょうか？リユームがどうなるかと、それはこの家の養女になった時に既に決まっていたのですから。どうなるうとも恨み言を申し上げる気などありませんでしたから、ご領主様」

「俺がオマエにその愛を乞うて、跪くとは予想していなかったのか？」

「夢にも思いませんでした。これっぽちも！ええ」

「自信満々に言い切るな」

「ご領主様の一連の行動は全てこの身を不憫に思った上での、お計らいかと思うのが自然ではありませんか？」

腕の中、彼の表情を確かめようと顔を上げました。

「リユーム」

「お答えにならないままでらっしゃいますが、それは肯定と受け取

す。

母親が己の安泰のために、実の娘の身を差し出したのですからね。それでいて、彼自身リユームを呪わねばならなかったのですから、嫌悪感は募る一方だったと思います。

きつと幾度と無く、ご自身の事を責められた事でしょう。

リユームだって生きるために、ウサギや鹿や鳥のお肉をいただきます。

生きるために、その命に犠牲になってもらったのです。

それと比べてはならないでしょうが、リユームは等しく同じ事だと思うのです。

生きるために犠牲を選ぶ。

生きている限りそれは止められないでしょう。

それがご領主様にとっては、リユームであっただけだと思うのです。

だからといつても『仕方が無い』等と物分りのいいフリをして、諦める気はないのですよ？

ご領主様がいけないんです。

リユームに永遠の愛を誓うなどと仰るから！

どうして下さるのでしょうか。

リユーム、こんなにも生きる事に欲張りになってしまったではないですか。

それこそ、もう取り返しが付かないくらいに！

。。。。* * * * *
。。。。* * * * *
。。。。* * * * *
。。。。* * * * *
。。。。* * * * *
。。。。* * * * *
。。。。* * * * *
。。。。* * * * *

「リユームは別に問い質し責めたいのではありません。ただ、はっきりとその出所を掴まねば対峙のしようが無いのです」

「対峙とはオマエは何を言い出すのだ？俺と対決するつもりか」

「いいえ。いえ、はい」

「どちらだ」

「ご領主様の、持つ闇と対峙しようという気構えです」

静けさの中、互いの言葉だけがすべてかのように響きます。

この静まり返った空気は覚えがあります。

ぴんと張り詰めた空気を震わせることも無く、不気味なほど圧する気配で忍び寄ってくるのです。

それはさり気なくも確実に近付いてきております。

そう・・・夜の帳が下りるがごとく自然にです。

(今じわじわと、闇が忍び寄って来ていますね。ジャスリート家の結界から外れたリユームの気配を手繰りながら)

恐らくきつと、まもなく追い付かれてしまう事でしょう。

そうなる前にきちんとお話ししたいのです、ご領主様。

リユームがまた、耳障りな舌足らずに戻る前に。

ですが急かしたりはしません。

ただ、静に見つめ上げて彼の心を探ります。

彼の出方を息をひそめて待ちました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

。。。。*。。。。*。。。。

バアアン！という物音と共に突風が扉を乱暴に開け放ち、小屋に風がなだれ込んで来ました。

その小さな竜巻は闇色と純白が垣間見えます。かと、思ったらそれはすぐさま勢いを失いました。

その風が凪いだ途端、姿を現したのはジャスリート家の守護獣たちの仮の姿です。

「ダグレス！それに、レド！」

「離れんか誘拐犯」

「リユーム、無事？」

紅い眼が真っ直ぐにご領主様を射抜きます。

琥珀の瞳は気遣うようにリユームへと注がれます。

ぐ、と彼の腕の力が強まりました。

「まったく！公爵の目の前で拉致とは何事だ」

「迎えに来た、リユーム。帰ろう」

え？え？とただ驚いてご領主様とダグレスとレドを順々に見比べました。

「領主はこの後たっぷり説教が待っている」

腕を組んだダグレスがダン！と片足で床を打ちました。

獣様の姿の時のままの、彼がいらだった時にやる仕事です。

「リユーム！来い」

睨まりましたが首を横に振りました。

ご領主様にしがみ付きませぬ。

「リユーム、駄目。言う事きいて。もうじき闇が来るから、危ない」

ふわ、と身体が浮いたように感じたのも一瞬でした。

軽々とレドに掴みあげられて、ご領主様の腕から引き剥がされておりました。

「ご、ごりよ、や！レド、放して」

「駄目」

「ご領主様！」

両手を差し伸ばして、彼に助けを求めませぬ。

しかし彼は悲しそうに見つめたまま、拳を握り締めておりました。そんな彼に眼差しを向けて縋りませぬ。

「ご領主様・・・ヴァインセイル様」

レドの腕に捕らえられながらも、両手を必死に伸ばしました。

ご領主様も手を伸ばして、一歩進み出られました。

「リユームを返してくれ。どうかその娘を俺の元へ」

「駄目。やれない」

レドは短く言い捨てると、リユームをしまいこむかのようにして下がりました。

代わりに一歩踏み出したのは、ダグレスです。

「おまえはこの娘に何を言い聞かせた？七年もの間」

腕を組んだままの体勢で顎をそびやかします。

「これはまず、この館に来てこう言い出した。　　食事は日に一回で十分に事足りませす」

「呆れたさ。何故と問うたら、自分は何もせず、ただ飯食いの厄介者だから、食事は最低限でいいのだと。

他にも衣装を用意してみたらうるたえ出した。おまえに請求をやつてやるから気にするなと、伝えてやった。そうしたら泣き出した。おまえが頑張るのはリユームのためだと告げたら、気に病んで熱を出しおつた」

ダグレス！ダグレス、も・もう、そのくらいで！

いたたまれなくなつて、今度はダグレスに向けて両手を振りました。

「領主。これはおまえが追い詰めた。もういいだろう？解放してやれ。そして、これは我々が愛^いしむ事にしよう。残りの、僅かばかりの間・・・もう、コレには構うな。真にコレを思うのならば」

「ご領主様は、もう何も仰いませんでした。

ダグレスは続けます。

「我こそが全ての闇を従える獣であると以後知りおけ、若領主。我に従わぬ闇を生み出しおつたその責任は重く、我に対する挑戦状でもあるわ！」

「俺が生み出したというのか？」

「そうだ。リユームを屋敷深くに閉じ込めるようなマネをしおつてからに。それさえなければ遅かれ早かれ、術の気配に長けたものの

目に留まっていたはずだ。そうすればもっと早くに手が打てたのだ。ここまで深く闇が複雑に絡み合う前に、いくらかな。こつも惑わしも無くあからさまに悪意を振りまく術を、神殿が放置するわけが無い。それを！」

「この娘の気配は存在からしてもはや『異質』なのだ。おそらくもうそれは周知の事となったはずだ。ルゼがその目的で茶会を開いたからな。その中には神殿の術者も数名おったしな。どちらにしろ、ザカリアが動くだろう」

「ザカリア様がですか？何故でしょう、ダグレス？」

「オマエを闇にاندくれてやりたくないからだろう。それより自分の息子の花嫁にしたいと、はっきり言っておったではないか」

「ダ、ダグレスっ」

聞かれていたようです。

それをわざわざご領主様に言い聞かせるようなマネはご勘弁願いますよ！

「闇など見据える必要は無いと」

噛んで含めるように繰り返されました。

そうですか。

見透かされておりましたか。

今、ようやくと腑に落ちました。

ザカリア様が何を憂いながら、リユームにご進言下さった理由がわかった様な気がします。

リユームが木漏れ日にあっても心は闇に向けていたのを、ザカリ

ア様をはじめ皆様には容易く知れていたようです。

無自覚ながらも、誰の言葉も耳に入らず、誰の存在もこの視界には留まらずのリユームの態度から丸解りなのでしょう。

リユームが誰を選んでいいのか、何て。

それが闇を見据える事になると知った上での選択と言い切ったら、ザカリア様はどんなお顔をされるでしょうか？

「これは我が少しばかり力を加えたからな。我の一部をこの娘に貸してやったのだ。返却はこの娘の寿命が尽きるまでとするから、まあ、くれてやったも同然だがな。なあ、リユーム？」

こつくりと頷きます。

ご領主様の寝台の下に転がっていた一角のカケラを手にとった途端、それは霧散いたしました。

冷たい感触が指先に残ったままでしたから、辺りをきよろきよろ見回しましたがどこにも見当たらず、ふと視線を下ろせば右足の中指が真っ黒に染まっておりました。

リユームはそそっかしいから、きっとどこかにぶつけたのでしよう。

その拍子に血豆になったのだろう、くらいにしか思いませんでした。

ところが、その後現れたダグレスとお話出来るではありませんか！

それがダグレスの角のカケラによる作用だと、後から得意げな獣様から説明された次第です。

「はい、そうです。ダグレス？」

ダグラスは言いながらリユームの手を引き、左肩を抱き寄せます。レドが面白く無さそうに鼻を鳴らしました。

「言うなればこれは我が術者となるように仕向けた仕上げ。それを貴様は好きにした。許されると思うのか？ 我の許可無く」

くつくつくと短く忍び笑いを漏らしながら、ダグラスは底意地のわるい笑みをご領主様へと向けています。

「闇を従える闇の獣。ダグラス。我の意に反する闇がこの世にあるとすればそれは人の子の覗き見た深遠の彼方。この我を差し置くとはやるな、シエンテランの術者よ。何をやったのだかな、タラヴァ イエよ？ どれほど深い恨みを買ったやら」

「申しわけございません」

いくら謝つても仕方の無いことだとは思いましたが、そうせずにはいられませんでした。

「オマエを責めているワケではない事くらい、言われずとも理解しろ。オマエの中に受け継がれてきたであろう血に潜む何かに問いかけているのだ。我の記憶が確かなら幾度かは、両家の血を一身に受け継いだ者があつたはず」

両家の血を一身に受け継ぐ者！？

その言葉に驚いた、ご領主様とリユームは互いに顔を見合わせました。

（え？ 今、なんと仰いましたか？ ダグラス、それは本当ですか？ ）、ご領主様！）

「リユーム？と、ご領主様がですか？」

「そつだ。覚えは無いだろうがその魂に刻まれた記憶を読み取るのならそうなるな」

「え？だって。リユームたちが存在するよりも前の出来事ですよね？」

それは一体何を意味するのでしょうか？

第四十七話 シェンテラン家の狩猟小屋での決意（後書き）

リュームは口に出したら決意が固まるタイプらしく、自分自身の言葉をよくよく己に言い聞かせているようです。

その闇と対峙する。

さて、ヴィンセイルは以外にまだ覚悟が決まっていないようです。

形勢逆転。

話が進みにくいので、頼むからがんばって領主！
そんな次回になりそうです。

やはり女は強いと思います。

第四十八話 シェンテラン家の狩猟小屋での顛末（前書き）

確かに語られようとしていたのは、闇の始まり。

（後書きに続きます）

第四十八話 シェンテラン家の狩猟小屋での顛末

期待に満ちた眼差しを、リユームはダグレスに向けました。

「かつて、婚姻が結ばれた事もあったのですか？それは本当ですか、ダグレス！だとしたら、随分前からタラヴァイ工家はシェンテラン家とは親戚だったという事ですね！」

「やったあー！ですよ！？」

「何がやったあ！ですかって？」

もしかしたらこの身に潜んでいるかもしれない、栄光の血筋にカラスなりに乾杯って感じですけども・・・あれ？

「……!?」「……」

嬉々として発言したところ、ご領主様と獣様お二方からの注目を一身に浴びてしまいました。

しばし、それぞれの眼差しに晒されて、リユームも流石に黙りました。

落ちた沈黙が思ったよりも長く続いて、痛ましい気がして来ました。

「実際視線って突き刺さるんだな、と改めて体感中。痛いです。」

「注目すべきはそこではないと思うが。」

「ご領主様が腕を組みなおしてから、ため息と共に吐き出すように咳かれます。」

「え？だって、何だか嬉しくて！」

「どこに喜びがあるのかが俺には理解できないが、リユーム？オマ

エがダグレスの話を、あまりよく理解出来ていないのだけは解るがな」

そうですか？

嬉しくないですか？

そう、眼差しだけでご領主様に問い掛けました。

(何故かしら視線が・・・リユームを通り越し気味に感じられますが、気のせいでしょうかとおきます。)

「そうだリユーム。我の言つた話をよく聞いての発言がそれか？我は今その結んだ婚姻のせいで呪いの変質を招いたと講義してやったばかりなのだぞ、このアホウが！何が嬉しいだ。気楽に聞き流すに毛程があるぞ」

別に聞き流したつもりなんてありません。

そう抗議するつもりで口を開き掛けたところを、レドに抱えなおされてしまいました。

その胸元に顔をぎゅーつと押し付ける格好ですから抗議所か、むぐっという変な空気が漏れる音だけです。

「リユームをバカにするな、ダグレス！」

「そうだ。そのまるで空気を読む気を感じられない、アホウぶりをけな貶しているのは俺だけだ」

さらりと言い切るご領主様にも、レドが吠えます。

「誰でも駄目に決まっているだろう！だからオマエはリユームの何！？何の権利があるわけ？」

リユームを抱えるレドの、腕にますます強く力が入ってしまいました。

視界も遮られておりますから、様子は窺いようもありません。それでも漂う空気の険悪さだけは、ちゃんと察知しておりますよ。ここはひとつ回避せねばともがき、レドの腕から何とか顔を出しました。

「確かにダグレスの言う事は難しく、今ひとつよくは理解できません」

きつぱり言い切ると、ものすごく疲れ切ったような、虚ろな眼差しをダグレスから送られました。

何の！構わず続けます。

「嬉しいですよ。だって、本来ならばシェンテラン家のような身分に縁もないタラヴァイ工家が、リユーム達が存在するよりも前からご縁があったって事ですもの」

「・・・そうか」

「はい」

ご領主様は答えてくれて、オマケに満足そうに微笑まれました。つられてリユームも微笑みます。

えへへ、とだらしなく頬が緩むってものですよ。

そんなリユームに、彼ときたら凜々しく笑い掛けてくれます。

リユームと違って笑うお顔すら丹精ときてますかシェンテラン家の血筋よ。

思わず見惚れてしまいます。

（わあ。リユームに笑みを向けてくれてますよ！夢みたい！夢みたいですよ！）

彼はゆるやかに両手を広げると、言いました。

「リユーム、来い」

「はい！」

「ダメ！」

すかさずレドに抱き込まれてしまいました。
こんな時、ちょっとだけレドが嫌いになります。

「レド、お放し下さい」

「ダメ。リユームはレドに抱っこされていて」

「嫌です。レド、申しわけありませんが、リユームを抱っこしていいのはご領主様だけです。ですからお放し下さい」

そう静かに、しかし強く見上げますとレドは黙って腕を解いてくれました。

しかし右手だけは解放なりません。

レドに手を引かれたままです。

「……………」

「レド、お気持ちは嬉しく思います。ありがとうございます」

「でもまだ領主の側にはやれないからね」

危ないから、とレドは小さく呟くと心なしか俯きました。

「ええ……。レド、解っております」

リユームは哀しく思いながらも、俯かずに面を上げました。
ダグレスを見上げます。

「ご領主様とリユームがこの呪いなる闇を始めたとおっしゃいましたよね、ダグレス？」

「そうだ」

「ならば終わらせるのもご領主様とリユームでと言う事になります

でしょうか？」

「何かを飛び抜かしてはいるものの……のリュームに、一言でまとめられると癪に障るものだな」

彼が少しだけ敬意を払ってくれたのが、わかりました。

彼は恐らく「アホウ」のリュームと言いたかった事でしょう。

そこをものすごく小声で留めてくれたらしく、リュームには聞き取れませんでしたから。

その割りにレドが物凄くダグレスを睨んでくれているから、実際には発声されていた模様とは推測します。

別にどうってことはありませんけど。

「ああ。そうですか。当たり前なんですネ、ダグレス。リューム、冴えてますね」

「どの口がそれを言う」

ダグレスが唇の端を吊り上げながら、大きな手を伸ばしてきました。

「！ダメです、ダグレスっ、リュームの頬を引っ張っていいのはご領主様だけです」

伸びてきた指先をかわし、必死で自由な左手で顔を庇います。

「何だ。もう上手い具合にまとまったのか。つまらん。もっとぐだぐだと悩むと踏んでいたのに。領主もリュームも思う存分悩めばいいのに。どうりでリュームが先程から嫌に強気だと思った」

残念でしたネ、ダグレス！

もう思う存分リュームは『彼を好きなの？どうして？嫌われてるのに？』に関しては、悩みつくしました。

それももう止めにしようとかご領主様は思わせてくれました。だから、もういいのです。

ですから、もうそれとは違う悩みに移行してるんですよ。

せつかくこの方と添い遂げたいと願っているのに、期限付きなんて跳ね除けてやりましようぞつとな。

「何て事を楽しみにしているのですか。良い性格してますね、ダグレス。リユームだって未だにぐだぐだ悩んでますけど、その悩む時間すら限られた身としましては覚悟を決めただけです。そうしたらぐだぐだぐだしてる間に三年くらいあつという間に経ちそうだったので。それでなくてもあつさり七年も過ぎてますからね」

「つたく！弱気なら弱気で鬱陶しい事この上なくせに！あまり調子に乗るなよ？」

諷めながらも、ダグレスの口調は張りがありました。

「お褒めいただき光栄でゴザイマスよ！」

リユームも今現在の生きてる輝き総動員でありますようにと祈りながら、その瞳を睨みました。

「キサマ。」

その期待一心に満ちた眼差しを煩わしいとでも言うように、ダグレスはぶんつと片手を振りました。

恐らく獣様の姿であったのなら、あの優美な尻尾を勢い付けて振っていた事でしょう。

まわり付く小虫を、ふり払うための動きと変わらないと思われ
ます。

「ああ！面倒だ面倒だ！！わずらわしくてたまらんわ！」

ふいにダグレスは視線を外しました。

「これ以上おまえの魂の記憶を読み取るのは、いらぬ闇をも刺激し
かねない上に不必要だからやらない。教えてやらない。闇を捧げ持
つ者の判断に委ねる。」

「ダグレスから言い出したことですよ。何ですか、気になるではな
いですか！そもそも闇を捧げ持つ者なる存在があるって事ですよ
？それはどなたなのでしょう。」

リユームは必死で食いつきました。

どうやらダグレスときたら全面的に応援してくれるものかと思っ
ていたのに、そうではないようですから焦りました。

だとしたら何て思わせぶりな獣様でしょう。

やはり、ダグレスはディーナ様のためだけにリユームに協力して
くれていたようです。

それといくらかの暇つぶしのために。

彼の持つ時は悠久らしいですからね。ちょっとくらいならいいか、
とも思っていてくれたようです。

しかしディーナ様に危険が及ぶかもしれないと、彼自身尻込みし
始めたのもまた確かなのです。

「我は退屈と面倒が嫌いだ！だがどちらがよりキライかといったら
退屈の方だな」

「さようぞ」

「だがこの面倒ごとは退屈しのぎになるような気楽さは無いから覗
く暇は我には無い。我は嬢様に仕えているのだからな。これ以上の
手助けは我が嬢様のためにならないからしない」

「それだけじゃないくせに」

きつぱりと言い放つダグレスに、レドの茶々が入りました。

間髪いれずにダグレスの右手が、レドの頭上目がけて振り下ろされます。

「何をする！ダグレスのばか！」

「馬鹿に馬鹿と言われる筋合いは無い」

レドはリュームの手を放して、両手でダグレスの胸元に掴みかかって行きました。

自由になったと思いき自身の手首を撫で摩ります。

そんな風にほっとしたのも、つかの間。

リューム、またしてもがっちり力強い腕に拘束されておりました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「何のマネだ。ばか領主、ついに血迷ったか」

リュームの首筋には鈍く光る剣が当てられておりました。

リュームの胸がひとつ、痛いくらい跳ね上がります。

後ろからリュームを羽交い絞めにし、紛れもなく剣を当てているそのお方。

この方の持つ感情、それが例え殺意であろうとも向けられるのはこのリユームのみ。

そう確信いたしております。

(誰よりも何よりもお慕いしておりますわ、ご領主様)

例えその感情を向けられる度、リユームに闇が寄せられるのだと知った上でもその気持ちの揺らがなさに苦笑するしかないでしょう。

「バカ領主。いいから冷静になれ。今ここで闇に囚われるな。奴らはその心のスキを付いて来るのだぞ！」

「黙れ。リユームは渡さない。誰にも」

「オマエ、本当にリユームの何！？リユームは誰にもやらない！もちろん闇の主のオマエになんて、やれる訳が無い！」

興奮した様子で叫ぶレドの瞳が、鋭い光を放ってこちらを見据えております。

リユームに突きつけられた剣に負けないくらいに、強く明確な光に思わず怯みます。

「領主。オマエは冷静なようできて、闇に突き動かされている。闇の力の支配を退ける。普段のおまえならば出来ていたはずだ。その胸に巢食う嫉妬も闇の温床ぞ？」

「何とでも。これ以上の関わりは無益と判断したのだろう、ダグレス？だったらおまえの仕えるディーナ嬢へと戻れば良い。我らに構う暇などないのであるう？」

「じゃあ、何！？リユームが闇に食われるのを黙って見過ごせって言うのー！」

言い争う怒鳴り声の中、リユーム自身の心音が一番やかましく響きます。

。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*

じゃーん。

（この鳴き声は！？）

ねえ、リユーム。こっちだよ！

（エキ？何故ここにエキが？）

エキが・・・エキが呼んでいます。

じゃ　んと遠くで、でもはっきりとエキの鳴き声が聞こえたように思います。

エキが呼んでいます。

リユーム、エキに呼ばれています。

行かなくちゃ、と思います。

エキが呼んでいるから行かなくちゃ。

早くあのコの身体を抱き上げて、撫でさすってあげなくちゃ。あのコのために、歌をうたって慰めてあげなくちゃ。

（エキが鳴いてる。　泣いている）

そう強く思いました。

エキが呼ぶ。

エキに呼ばれる。

エキの側に行かなくちゃ。

(でも、どこにいるの？エキ？)

目線だけでその姿を探しました。その時です。

しゃっ！と素早く視界を黒い影が横切りました。

ご領主様の足元の影から、素早く飛び出した猫の影にリユームも釣られて、そちらに意識を向けていました。

何の疑問も抱かずに、身体が勝手に動いておりましたとでも申しましようか。

その瞬間、妙に首筋がひんやりしました。

(え？)

次の瞬間には熱く感じましたが。

ご領主様が信じられないものを見るような目つきで見下ろしてきます。

その唇が戦慄いていて、リユームの名を呼ぼうとしているのがわかりますが、一向に動き出す事はありませんでした。

彼の持ち上げた指先が赤く染まっています。

それこそ、滴るほどにべったりと。

そんな彼の指先が眼前に迫ります。

赤い赤い、鮮やかに赤い鮮血。

(血、でしょうかね？もしかしなくても。でも、誰の？)

などという思考は、それを遮る怒声が答えを教えてくれました。

「リユーム、ばか者！！自分から動いて刃物に首筋を差し出す奴がいるか！！」

はい、ここに。

薄れ行く意識の中、心の中では手を上げて、己のバカさ加減を認めるしかないリユームでありました……。

第四十八話 シェンテラン家の狩猟小屋での顛末（後書き）

仮タイトルは『どうせならひとおもいに』でした。

闇の始まりに踏み込もうぞ！

狩猟小屋で語られる、その真相。

その『てんまつ』に違いなかったはずなのですが。あゝ。

ここじゃ舞台に相応しくないので、移動となります。

どこへだ？

そんなつつこみの答えも、次回であっさり判明です。

ちょっとばかりリユームが調子に乗ってますね。

両思いに浮かれるリユームさん。

短い天下に同情します。

第四十九話 シェンテラン家のかつての主(前書き)

にや

あん

第四十九話 シェンテラン家のかつての主

にゃん

エキの声がよく響き渡る薄闇の中で目を凝らします。

その闇に溶けた毛並のエキを見つけるのは、なかなか容易ではありません。

(エキ?どこですか、エキ!)

そんな風に発したリユームの声ですら、己の耳からは遠くで響くかのようです。

言葉を発した途端、まるで何かに吸い込まれてゆくかのよう。耳を澄ませます。

リユーム。ねえ、こっちだよ。

可愛いエキの声が誘い掛けてきます。

遊ぼうよ、お歌をうたってよ。

(ええ・・・はい。エキ、今、行きますね)

薄闇の中かすかに迷いながら、エキの声を頼りに進みます。

ふら、とおぼつかない足取りですが、慎重に一步づつ行くしかない気がします。

微かにほの明るい方向を目指して、眼差しをそこに据えました。

闇の中煌くのは、リユームの焦がれるあのお方と同じ光を放っております。

冷たくて鋭くて、深く深くリユームを射抜く光に身体が強張ります。

エキ！貴方は・・・もしかして『闇』の一部ですか？

にゃ んん！！

可愛らしい鳴き声が闇の中響き渡ります。

高音を保つそれ。

高らかに長くこだまして、まるで笑っているかのように聞こえます。

それでいて寂しさを伴っていて、まるで自分自身を嘲っているかのようにも聞こえてしまいます。

リユームは眉をひそめました。

ボクを忘れちゃったの？ジ・リユーム。

(まさか！エキを忘れたりなんてする訳がありません)

闇の中、首を横に振りました。

ううん。シュ・リユーカー？

あいつに復讐してやるうって誓ったじゃないか？

” リューム。ボクを抱っこしてよ。”

「はい。いらして下さいませ、エキ」

その滑らかな毛並に指先が触れた途端、リューム自身もまた指先から闇色に染まって行くかのようです。

” リューム・・・リューム。ねえ、リューム？どうしてボクの呼びかけに応えたりしたの？”

「まあ。エキが呼ぶからですよ。ただ、それだけですよ」

” 嘘だあ。どうしてリュームは呼ぶといつも答えてくれるの？”

「エキが可愛いとお利口さんだからですよ。それに寂しそうでしたから」

” うん、リューム。ボクは・・・ずっと寂しかったよ。リュームも？”

「エキが寂しいとリュームも寂しいですから」

エキが甘えるように身体をすり寄せ、のどを鳴らします。

” ボクもこんな闇に居たくないんだ。リュームは？”

「ええ、モチロンです。エキ。リュームも同じです。また一緒に干草の上で日向ぼっこがしたいです。もちろん、シンラも一緒に」

” だったら行こう。いいもの見せてあげるから”

左手にあどけない金髪の少女。

二人に挟まれて、リユームは立っておりました。

(あのうう？どなた様でしょうか？)

そんな疑問も何故か言葉になりませんでした。

出来るのはただ、疑問を投げ掛けるように視線を向ける事だけです。

黒髪の青年は瞳も闇色でした。リユームと同じカラスと呼ばれる配色です。

対する金の髪の少女の瞳は、薄淡く透き通った新緑です。キレイです。

青年の表情は険しく、もはや少女を睨んでいると言ってもいいくらいです。

少女はそんな眼差しを一身に受け、緊張しながらも必死で微笑んでいるように見受けられました。

二人とも、お互い以外は目に入っていない様子です。

そんな二人に挟まれているのです。

(見えていない？そんなバカな!?)

そんなワケで自分の存在を主張すべく、ぴよんと跳ねて青年の眼前で手を振ってみました。

彼の険しく寄った眉根は解かれる様子は見られません。

なかなか端正なお顔立ちの彼ですから、そんな風にムツカシイ表情を固めると少女が怯えてしまいますよ？もう遅い気もしますけど。心配になり今度はしゃがみ込んで、少女の頭を撫でようと手を伸ばします。

(忌々しい。俺の一族を追いやったクセに)

強い憎しみの感情にリユーム意識ごと彼に取り込まれてしまったようでした。

彼と同じ視点で見下ろす彼女は何もわかっていないように映ります。

その無邪気さすらも無神経と、腹立たしさを覚えるばかりでありました。

彼の面に出さないまでも抱えた怒りは大きく、リユームの視点を保つのが難しくなってしまうほどです。

もちろん少女のせいであるはずがないのは誰に諭されるまでもなく、彼は頭では理解していました。

そう頭では。

ですけれども激しい怒りの前では、そんな事は納得に値しない事実でしかありません。

「俺の名はギルメリア・シエンテラン」

「私の名はシュ・リユーカー・タラヴァイエです」

ペこりと頭を下げると少女はおずおずと手を差し出してきました。親愛の握手を求められたのです。

そつと理解するよりも早くギルメリアの手は動いておりました。

その手を叩き落すために。

バチンツとそれは空気をも叩き付けるかのような、勢いのある音が響きます。

シュ・リユーカーの表情が、ついに泣き顔に変わりました。当然です。

何て大人げの無い。誰かさん、そつつくりではないですか！
しかもそんな少女に構わず、その手首を掴んで彼は引き摺るよう
に歩き出していました。

リユームの意識も、彼に巻かれているようで一緒に移動となりま
す。

少女の家をつぶし、その忘れ形見とも言える少女の存在を知った
時彼の心は躍ったのです。

一族は散り散りとなり、少女は今誰の後ろ盾も無い状態でした。
放っておけば遅かれ早かれ、身を持ち崩さずを得なくなり、果て
は野たれ死ぬ危機に晒されているのです。

かつてのギルメリア少年と同じように。
だからこそ喜び勇んで引き取ったのです。

彼はそのどん底ともいえる状況から見事に這い上がりました。
その術者として長けた部分を最大級に活かして、傾ききったシエ
ンテラン家を立て直したのです。

彼の目標はただ一つ、一点のみに集中しておりました。

一族をまた盛り立てる事。

それが叶った暁には、一族を追いやったタラヴァイエの血筋を根
絶やしにする事でした。

それもすぐにはなくて、ゆっくりと時間を掛けて追い詰めると
いうやり方で、です。

何と言つか。執念深い青年です。

それだけ恨みもつらみも深く大きいのでしょうか。

その暗い歓びを噛み締める様は、術者としての好奇心も手伝って、

だからこそ、打ってつけだと目を付けました。

シエンテラン家のための生け贄として。

そう、正にそのための存在として、彼女以外の適任など見当たりませんでした。

そうして幾年月いくとしつきかが、目の前を過ぎ去って行きました。本当にあつという間でした。

彼の目を通して見下ろす少女の成長が、それを如実に物語ってきます。

十三歳、十四歳、十五歳、そして今は十六歳のシュ・リユーカが遠慮がちに見上げてきます。

初めて出会ってから四年の歳月が過ぎていました。

あの頃の幼いあどけさをそのままに少女は、女性へと成長していった……らしいです。

やや否定気味な評価なのは、彼の照れと言うものが入り混じるからでしょうか？

素直に認めましょう、ギルメリア青年よ！

貴方の目を通して見る彼女はこんなにも眩いではありませんか。金の髪は艶やかに流れ、まるで金の滝です。

それに負けないくらい眩しい彼女の胸元の白さが、歳月を追うごとに豊かに盛り上がって行きます。

ふつくらとした頬もだんだんと大人びて、瑞々しいながらも引き締まって行くのです。

そこに笑み絶やさない形の良い唇も加わって、何とも言えない色香が漂い始めています。

「まあ。可愛らしい！こちらにいらして下さらないかしら？ミルクを貰ってきましようか？」

” ” 必要ない” ”

「まあ！お話もできるの！？魔法の猫さんのね」

” ” そう・・・だね” ”

口を利いた黒猫に驚きはしたものの、まさかギルメリア本人とは思わないようです。

彼女は話し相手が欲しかったのでしよう。

次々ととりとめもない事を話します。

話題は次第にギルメリアの事になって行きました。

彼はどうしているのだろうか、お元気でいらっしやるのだろうか、またお忙しくて帰られていないのだろうか等を熱心に尋ねてきます。ギルメリアが居心地悪く感じているのが、その質問からも窺えましました。

” ” 何だ？そのギルメリアって奴は、オマエを嫌っている嫌な奴なんじゃないのか？” ”

「お優しい方ですよ。仇の私にこんなに良くしてくださるのですもの」

シュ・リユーカはにこにこしながら答えてきました。

少女の新緑にも等しい瞳の輝きは憂いを帯びて、いくらか深みが増したように映ります。

まるで雨に打たれて洗われたかのような、鮮やかさがそこにはありません。

あどけなさを残しながらも、しなやかに伸びた手足の白さが己の黒い毛並を際立たせるように感じました。

小さな来客に喜んだ少女が撫でようとすると手を忌々しく思いながら、猫はするりと逃れて距離を保ちます。

” 良く、だって？どこが？だったら何故こんな所に閉じ込めておくようなマネをするんだ？”

「だって。私この家にとつて、目障りなんですもの。それに閉じ込められている訳ではないわ。私が出ないだけなの。それにあの方は、お忙しい方です。それより何より、私の事なんて見たくも無いでしょうから、こうしているに限るわ。あの方の目を煩わせたくないもの」

でもそれは当然だからと付け加えた声音は乾いて響きました。何もかも諦めたかのように、ひっそりと彼女は微笑を称えています。

その瞳の深さがまた増したように感じて、リユームの胸がつきんと痛みました。

「私ここでこうやって一生かけてお祈りするって決めてるの。あの方が幸せで在れます様について。私の一族の罪が少しでも許されますようにって。一生を懸けて償うの」

” ばかばかしい！そんな事くらいで許されるとでも？”

「そうね。無理だと思う。どうしたらいいかしら？何か良い案はあるかしら？」

” ” その魂をかけて償うべきでは？” ”

その問い掛けは呪術の始まりでもありません。

きつと彼女は頷く。

そう確信に至っておりますが、彼はさり気なくも慎重に切り出したのです。

あまりに重い問いかけだから、普通ならば躊躇うでしょう。

しかし彼は確信しておりました。

彼を見上げる少女の瞳が、自分に対する想いで溢れかえっているのに気が付いていましたから。

彼女の瞳がいつも潤んでいるのは、自分の成果なのです。

その身を引き取り衣食住を与えた事で恩を売り、気まぐれに優しさを与えて気を持たせては突放す。

そんな事を繰り返されれば、誰だって彼の事で頭がいっぱいになるに違いありません。

(ぶ・・・ぶつてもいいですか！！ギルメリア！！)

思わずリリウムは拳を握ります。

振りかぶった拳が彼を素通りすると解ってはいても。

彼女が頷けば術は発動するのです。

彼の織り上げた『一族根絶やしの呪い』なるものは、解き放たれるのを今か今かと檻の中でその時を待ち侘びているのです。

「それもそうね！だって。わたくしが持っているものなんてそれ以外、見当たらない」

記憶をリユームに伝えるべきか否かと迷ったのでしよう。

確かにあまりの救いよしの無さ加減に、ためらいしか覚えません。

(バカだなあ。本当に。リユームに言われるなんて相当救いがありますよ、シュ・リユーカー?)

かつてのリユームよ?

第四十九話 シェンテラン家のかつての主（後書き）

ちよつと雰囲気変えてみました。

いよいよ大詰めと気取りたいところです。

ここで茶化しては雰囲気ぶち壊しなので、黙っておきます。

第五十話 シェンテラン家のかつての養女（前書き）

・・・この作品は残酷な表現があります。

苦手な方はご注意ください。

もちろん、十五歳未満の方はご注意ください。

（書いていて自分でも落ち込むのは何故？）

第五十話 シェンテラン家のかつての養女

さすが今は昔と言えども、かつてのリュームです。

やってくれますね！

何と言つ馬鹿なことを馬鹿なことを馬鹿なことを！……

今とさほど変わり映えのしないその犠牲気質は直っていませんね
ー？

いや。違いますね。

コレは過去なのですから。
直ってませんね、と責めを受けるのはリュームのほづでござい
ましよう。

これからリュームが直さねばならない魂のクセがこれですか。

時が流れて行きます。

窓の外は雪。

シュ・リューカは一人、暖炉の前でぼんやりと窓の方を眺めてお
りました。

とはいっても視線はそちらでも、その瞳には何も映りこんではお
りませんでしょう。

心は彼方にあります。

今日はギルメリアのお誕生日の祝いの日なのだという事を、シュ・
リューカの意識が教えてくれます。

契約が成立してから、大よそ三月程みつきが経過してありました。シユ・リユーカはだんだんと病に伏せがちになり、気力も落ちて行きました。

こつやって起き上がっている事すら、ままならなくなりつつあります。

今日もお部屋で一人大人しく養生を言いつけられたのです。それでもシユ・リユーカは、いつもよりも明るい装いをしております。

雪地に映える深みのある赤い衣装です。

嫌に目に焼きつきます。

何でしょうかねえ？

赤。赤・・・ここぞという時は今も昔も変わらず、赤い衣装をまとっている様な気がします。

シユ・リユーカが用意したのではなく、誰かが見立ててくれた物のようですが、確かに赤が似合います。

ルゼ様もリユームにと、お茶会に赤い衣装をご用意して下さいました。

姿や意識は違えども、静かに赤を訴えてくる雰囲気は放つのだそうです。

(そうですか。魂の色合いとやらが赤ですか)

そうですか　って、どなた情報ですか!?

という事の連続です。

リユームはもうあんまり深く追求しない事にしました。

誰が見守って下さっている方がそつと、意識の深いところに囁いてくれる情報だと思われず。

説明のつかない事に驚きながらも折り合いをつけては、目の前の出来事に意識を戻します。

本来ならばギルメリアの、祝いの席に出席するための正装なのでしよう。

体調の優れない身ではと辞したものの、せめてそれに相應しい格好で祝おうという彼女の心意気が伝わってきます。

何も出来ない無力な自分に出来る精一杯。

本当はこのような正装事態、身体が辛いと悲鳴を上げております。確かに。

コルセットはいくら弛めにしても苦しいし、衣装だけではなく装飾品の重みすら堪えますよね。

編み上げられた髪の毛のせいか、こめかみすら引きつりますし。

シュ・リユーカの血の気の薄い顔に、不釣合いなほどの赤い口紅が痛々しいくらいです。

(どんなに辛いかなんて・・・知る良しも無いのでしよう、ギルメリア！)

今は広間で人々に囲まれて祝福を受けているであろう、ギルメリアをなじってしまいます。

シュ・リユーカがそんな事をしたって、彼にとっては取るに足りないものでしかないでしょう。

けれど、それを承知した上で彼女は、女の意地とやらを張ります。

まずいでしょうかね。でも、まあ、これくらいなら許されるのでしょう。

できればもう少し早い段階でこう出来れば、シュ・リユーカとギルメリアを止める事が出来たでしょうか。

深く胸の奥から浮かび上がってくる何かは、静かに否を告げられます。

そうですね。そうですねとも。

万が一にでもシュ・リユーカに「領くな」と促がしても、彼女は聞きはしないでしょうからね。

リユームだってそうしますもの。

魂の奥底ではそのように望むからこそ、今も昔と変わらずこのような結果になったのでしょから。

シュ・リユーカの意識に寄り添うように、彼女の心が少しでも晴れますようにと歌います。

(闇晴れずとも 光はあなたの側に寄りそう 闇は晴れ 光があなたの側に寄りそう)

そう。闇がふり払われる事がなくとも、光は寄り添うのです。

ふ、とシュ・リユーカが横顔をこちらに向けました。

(え・・・!?)

一瞬ですが目が合ったように思います。

ぱちぱちと大きな瞳が瞬きました。

シュ・リユーカが瞳を凝らして、必死で凝らしてこちらを窺っております。

予告もなくでしたから、驚きました。

そりゃそうです。

不機嫌そうに睨みながら入ってきたのは、決してこの部屋に近付こうとしないはずのギルメリアでしたから。

黒地に金糸でかがった刺繍の上着に、黒い下ばきに編み上げの靴も黒のなめし革のようです。

緑石をはめ込んだ腰帯を巻き付けているのが唯一の色彩で、全身を黒で統一した出で立ちです。

それが彼の容姿とも相まって、何とも威圧的な印象を受けます。

何でしょうか。お祝いに臨むと言っよりも、何かの呪術大会にでも出席するのが相応しい格好ですよ！

シュ・リユーカときたら怯えながらも「ギルメリア様はやはり黒が似合つて格好良いなあ」等と思って、見惚れているから始末に終えませんか！

何やら、シュ・リユーカの趣味を疑っている場合じゃない気がします。

彼の真っ黒で艶のある髪は後ろで束ねられています。

それですらも彼女には眩しく映るようです。

「自分のような軽薄な色合いではなくて、落ち着いていらして素敵だな」じゃ、ありませんよ！

シュ・リユーカっ、それ所じゃありません。

何だか良くない気配がしますから、逃げた方がいいですよ！絶対。そんなリユームの焦りも恋する乙女の前では、吹かずとも飛ぶようです。

アーレー……ですよ！せっかく同調していたのに、あっさりです。

「冷えただろう?」

気を取り直したかのように、打って変わって穏やかな響きでギルメリアは尋ねました。

それは甘ったるくまるで媚びるかのようでありながら、小ばかにしているかのようにしか思えません。

何かしら寒気に似たものを覚えるのは、リユームだけのようです。シュ・リユーカときたら頬を赤らめながら、いいえと小さく首を横に振りました。

「冷えているではないか」

言いながら彼の指が首筋を滑りました。

そう尋ねるギルメリアの指先の方が冷たくて、シュ・リユーカは首をすくめました。

「あの、大丈夫です。ありがとうございます。御気使い感謝いたします」

抱き寄せられて、シュ・リユーカは吐息を漏らしました。

「あの、本日はお祝いの席に出られず申しわけありませんでした。ですけれども、その、本日のお祝いのお言葉を述べさせていただきます、」

「ああ。これをオマエにやろうと思って訪ねた」

ギルメリアはろくに耳を貸そうともせず、謝罪と祝辞を述べようとすするシュ・リユーカを唐突に遮ります。

そして素早く懐から取り出した首飾りを、彼女の胸元に回してはめました。

「あのつ、これは!？」

シュ・リユーカが驚きのあまり、目を見張ったまま固まってしまいました。

もうこれ以上は見たくも、聞きたくもありません。

薄闇の中、光の気配のする方へと視線をさ迷わせます。

第五十話 シェンテラン家のかつての養女（後書き）

お疲れ様です。

書き終わってこんなに消耗したのは久しぶりです。

じゃあ、こんな展開にするなよ、ワタシ。

そんなツッコミは、さておき。

小話に逃げてやたらと溜まりましたんで、もう一区切りついたらUPします。

第五十一話 シェンテラン家のかつての婚姻（前書き）

その魂までをも縛る事が出来たならば？

第五十一話 シェンテラン家のかつての婚姻

もう見たくはありませんが、助けを求めて泣くシュ・リユーカには寄り添ってあげたいです。

せめて。

触れる事も、助けを呼ぶことも出来ない身ではありますが。

さりとて

目の前がかつての自分が犯される様を見守らねばならないって、なかなか勇気が必要です。

直視できていませんが、何とかこの場に踏み止まってはおります。あまり近付くとシュ・リユーカの想いに引きずられてしまう事でしょう。

そうなったら、もはや正気を保てる自信がリユームにはありませんでした。

ギルメリア。

もう、お願いですから止めて下さい。

シュ・リユーカが壊れてしまいます !!

そう強く強く祈りながらも、目蓋を固く閉じて耳も両手で塞ぎます。

(や め て)

やめて やめて やめて やめて

たすけて たすけて たすけて たすけて
こわい こわい こわい こわい

どうしたって流れ込んでくる悲痛な叫びと、そこに愉悦を覚えて
いる意識がありました。

ギルメリア、です。

彼は嘲笑っていました。

笑って・・・いるのです。

シュ・リユーカの身体も精神をも思う様に蹂躪じゅうりゅうできて、彼は満足
していました。

それがシュ・リユーカをますます絶望へと叩き落します。

助けてと伸ばした腕を払うようにするのが視界の端で見えました。

シュ・リユーカ。もっと泣け。

シュ・リユーカの意識が途切れました。

シュ・リユーカは最後にその言葉を耳にしたでしょうか？
出来ればもう彼女の耳には届いていない事を祈ります。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

かしゃ・ら・らん・・・と軽やかな音が耳元を再び滑りました。

シュ・リユーカが目を覚ますと、再び首元には馴染みのない重みがありました。

石榴石の首飾りです。

(外したいのだろうか?)

「……………」

確かにこれは外れたはずなのに、何故?

ああ、そうか、あれは夢だったのだ。

きつと、悪い夢だったのだ。

そうに違いない。

そうでなければ、あんな あんなに怖いこと。

お優しいあの方がするわけがないもの。

シュ・リユーカはのろのろと寝台から身を起こそうと身じろぎした途端、あつと小さく悲鳴を上げました。

「あ……………」

身体の奥深い所で感じる痛みに、恐れおののいたのです。

思わず自分の身体を見下ろして、目に留まる紅い痕に身を震わせました。

夢などではなかったと痕が現実を訴えてきます。

どうして?

ならばどうしてコレは外れないのだろうか?

どうして どうして どうして !?

シュ・リユーカは青白い顔色のまま、必死で留め具を探ります。

震える指先のせいか、いたずらに首飾りの細かな装飾を揺らしま
す。

その度に振るえ奏でられる軽やかな音色に、ギルメリアの声が蘇
りシュ・リユーカを苛みました。

俺のものになれば外れる

では再びあの方のものとならねば、これを外すのも許
されないという事………？

「嫌……あつ！」

シュ・リユーカは、ただはらはらと涙をこぼし続けております。

あの辱めが、一夜で済むものではないと気が付いたからでしょう。

ああ、どうしましょうか。

落ち着いてください、シュ・リユーカ。

リユームがお側に付いておりますよ。

必死に呼びかけてみますが、シュ・リユーカの心は動揺していて
同調なりませんでした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

（ああ！いい所に来て下さいました、ギルメリア！）

ギルメリアが訪^{おも}う頃には、シュ・リユーカは首筋に小刀を当てて
おりました。

未だ薄く肌が透けるような下着姿のままです。

「何をしている!？」

刃物は首飾りの方に当てられている事に気が付いて、ギルメリアはいくらか表情を和らげました。

シュ・リユーカは怯えてしまい、瞳を閉じたため気がつきませんでした。

それでも慌てて刃物を取上げると、シュ・リユーカの指先が大きくさくれて血が滲んでいました。

そうです。

彼女は今までずっと、ザク口様を外そうと必死だったのです。

ずっと、ずっと、ずっと……気が狂ったようになりながら、泣きながら。

そのうち何でこんなに外そうとしているのか、解らなくなってしまうてもずっと。

ギルメリア!

どうしてくれるんですか!!

シュ・リユーカが壊れたらっ!

(責任を取ってください!!)

ギルメリアは素早く刃物を取上げると、シュ・リユーカを抱きかえしました。

「何を泣いていた？」

思いのほか優しい口調でギルメリアが尋ねます。

指先や涙に濡れた頬に唇を寄せるようにしながら。

「こ、っこれ、はずれないっ……じぶ、じぶんで」

「そうだ。自分では外せない。言っただろっ？そのように呪いまじなを施したと」

「う……っえ」

「そうだ」

「はずれない……じぶんでは、はずせない」

「そのザクロ石は、シエンテラン家の女主人となる者の胸に居座る。そう術をかけた」

「女、しゅじん？」

「すなわち、シエンテラン家の主の妻だ。シュ・リユーカは俺の妻とする」

再び涙を溢れさせたシュ・リユーカに、ギルメリアが口付けました。

（確かに責任を取って下さいよ、とは思いましたがっ。そうきましたか、ギルメリア！しかも求婚すらなしでシュ・リユーカの意味も問わず、決定事項ですか　！！）

どうせ聞こえちゃいないのでしようが、叫びました。ええ。盛大に突っ込みたい部分ですから。

この方の花嫁になるの？私が？

シュ・リユーカは驚きが隠せなかったようです。

そりゃそうでしょう。

リユームもその気持ちがよく解ります。

ギルメリアは降参したんですよ。多分。ええ、恐らくは！

それからも滞る事無く時が流れて行きました。

シュ・リユーカが戸惑いながらも、婚礼衣装を身にまとう所も見ました。

皆に祝福されて、晴れてシュ・リユーカ・シエンテランとなったのです。

ギルメリアに手を引かれて、彼の部屋に誘われる所も見ました。

朝が来るたびに柘榴石がシュ・リユーカの胸元を飾り、夜を迎えるたびに柘榴石が外されず。

その儀式を幾度か繰り返すうち、やがてシュ・リユーカのお腹が柔らかな弧を描いて行きました。

ギルメリアが愛しそうにおずおずと、そこに手を当てます。

シュ・リユーカの手も重なり、二人が微笑み合うのも見ましたよ。

シュ・リユーカのギルメリアの目を通して、世界が回っていく様を見守りましたとも。

シュ・リユーカの命が尽きるまでを、ずっとずっとずっと!!

世界のあまりの美しさに泣けてきます!

泣き叫びたい程です!!

シュ・リユーカは死にました。

お腹にいた赤ちゃんもろとも、その命は燃え尽きてしまいました。

世界はこんなにも光に満ちていて、祝福されているというのに!

闇の中。

ただひたすらに闇の支配する空間です。

どんなに目を凝らしても、そこにあるのは闇一色のみです。

今まで見せられた光景は嫌になるほど『ご領主様とリユーム』の出来事に似通っていました。

うんざりするほど似ていると、認めるしかありません。

このままだと。

このまま、闇がふり払われなままだと、リユームはまたシュ・リユーカーと同じ事をしでかすのでしょうか。

なんて事を繰り返してるんでしょうかね？

ねえ、エキや。どこ？

足元に気配だけで擦り寄るかわいいこを抱き上げます。

闇の中からその輪郭だけをすくい上げるかのようにする事で、形を与えられるのならばどんなにいいでしょうか。

ぎゅうと抱っこしてあげました。

ずっとこうしてあげたかったのに、叶わなかった憐れな魂の代わりにです。

エキは、もしや。

エキは、シュ・リユーカーの。

シュ・リユーカーとギルメリアの。

ねえ？

問い掛けに返事はありませんでした。

ただ柔らかな感触が、押し当てられたようではありました。

情けなくて涙が止まりません。

ひとしきり泣いた後、にやーんと可愛らしい声が聞こえました。

【覚悟は決まった？】

いつのまに、リユームの腕をすり抜けてしまったのでしょうか？
姿は見えませんがエキのようです。
はいと頷きました。

「闇を、ふり払うのではなく光に導き変えてゆきましょう」

必ずや！

やー！と闇の中で、大きく拳を振り上げてみました。

【大きく出たね】

「この髪も瞳も闇を見据え、闇にくるまれてもまた抜け出す証ですから！」

幾度も闇に晒されてその度に抜け出してきた証。

それに目蓋を閉じるたびに、焦がれ続けたあの方のお姿を目に焼き付けた証でもありませんゆえ。

それにきつとリユーム自身も、ギルメリアの血を受け継いでいるのでしよう。

遙か昔から受け継いだ一滴に含まれる、祝福も呪いもすべて。

シュ・リユーカーカとききましたら永遠の闇に彼を閉じ込める事が出来

て、さぞや満足だったと思います。

あのあと彼は、彼女のことを一生抱き続けて生きねばなりません
でした。

それは闇を抱えて生きていくのと何ら代わりがありません。

シュ・リユーカは彼の子を宿したまま、立ち去りました。

その時点ではもはや、ギルメリアには償いようが無かったのです。
どんなに許しを乞おうが、答えは返らないのですから。

彼を闇に置き去りにして、シュ・リユーカときたら何て事をし
かしてくれたのでしょうかと思います。

リユームこそ闇にいるのが相応しい気がします。

ですがそんな事も言っていられません！

目覚めましょう。

いざ、闇ふり払う調べを奏でるために！

今度こそ光の気配のする方へと、視線を定めます。

第五十一話 シェンテラン家のかつての婚姻（後書き）

『闇から目覚めてみれば』

またしても次回に繰越となった（仮）タイトルは却下です。

前回 後書きで 『小話』 落ち着いたらUPします。

などとほざきましたが、ありえない事になりました。

ええ。また。

『小話は別にしてUPしてはいかがでしょう？』

『スピン・オフとして発表しては？』

というコメント頂けること間違いなし！！

なんですよ。

どうしたらいいですか。（ 聞くな。（

はい。大人しくしています！

閑話　く願うのは君の声く（前書き）

眠り姫の目覚めを待ちわびる

王子つてがらじゃない若者と獣。

閑話　く願うのは君の声く

額同士を軽く小突くようにして合わせる。

その閉じられたままの目蓋が開かれる事を期待して。

リユームのその唇が生きている喜びをつむぎ出すのを待っている。

「・・・・・・・・・・」

頭を撫でる。

頬を撫でる。

唇の輪郭をなぞる。

くすぐるように。

無理のないように、少しだけ抱き上げてみる。

寝台から軽く浮く身体はやはり華奢で、改めて常日頃の食事を咎めたくなる。

何の抵抗も無い身体は、白い咽喉をこちらに差し出すようにのけ反っている。

痛々しいほど白いは、何も肌の色のせいだけではない。

リユームの首筋に巻かれた包帯にそつと唇を押し当てた。

これで意識があればその首筋に詫びるのだが、謝罪の思いも言葉も今のリユームには届くまい。

深く沈みこんだままの意識は浮上しないまま、二日目の夜を迎えている。

もしれない。

ふとそんな考えがよぎったが、ふり払うべく頭を振る。

「レド」

” !? ”

声を掛けると獣の身体は面白いくらいに跳ね上がった。

一応は人の気配に賢いはずなのに、まるきりリユームに夢中で俺の存在などは家具にも等しかったのだろう。

レドはそのまま部屋を飛び出していった。

大きな身体なのに物音一つ、立てなかった。

「……………」

椅子に腰掛けたまま眠り込んでしまったため、軋む身体を少し伸ばした。

やはり寝台に置かれた物は、俺の上着だった。

リユームの言う、俺に相応しい縫い取りが施されている筈のものだ。

表面は見たところ、これといって何の装飾も見られない。

だとしたら裏地に施されているのだろうか。

どのような？

どのような？

期待が膨らむ。

かつてリユームが必死で縫い取っていた、華やかな花畑ばかりが
浮かぶ。

暗にあれば俺にやりたくないと全身で訴えていた。

おかしかった。

大方ミゼル用かニーナにやろうという心積もりだったのだろう。

「リユーム、早く目を覚ませ」

上着を裏返したい気持を押さえ込み、リユームに掛けてやった。

閑話 〱願うのは君の声〱（後書き）

お久しぶりの小話です。

満足です。

第五十二話 ジャスリート家で目覚めた意識（前書き）

世界は何て眩しいのでしょうか。

第五十二話 ジャスリート家で目覚めた意識

眩しいです。

久方に闇から抜け出た瞳には、何とまばゆいのでしょうか。

まるで生まれて初めて光を見た時のよう。そんな感覚を錯覚と呼ぶのでしょうか。

そもそも、そのような記憶はございませんですよ。

自分が生れ落ちた日の事など、人は記憶を持たないはずですからね。

持ち上げた目蓋を瞬しばたかせながらも抗います。

目蓋よ、落ちてしまわないでと。

眩しすぎる視界に影が差し込んでくれました。

おかげで何とか薄目を明けていられるようです。

この柔らかさをなぜかしら感じさせてくれるのは、人影です。

逆光になっっているため、どなたかは判別できませんでしたが迷わず両手を差し伸べていました。

ああ、きつと、あの方ね。

確信に満ちてそう思いました。

焦点を定めます。

瞳に染み入る、緑の眼差しが覗き込んでくれていました。それにまた、光を浴びて輝く金の御髪がまた目に沁みますこと。

（ああ、やっぱり。ご領主様でしたね。また会えました、良かったです。良かったあ）

そう安心したはずなのに、指先に手を絡められた途端に身体が強張りました。

ナゼ？

取り繕いようも無いほど、大きく身体がしなりました。意識のない拒絶ほど、人を不快にさせる事もないでしょう。ですが説明がつきません。

「リユーム、気が付いたか！？」

「……………」

頬を包み込む大きな手にも怯えてしまいます。

「リユーム、リユーム。相変わらず目覚めるのが遅い……………」

このひとはだあれ？

リユーム自身がそのように感じた事に驚きました。

（ご、ご領主様に決まってらっしゃいますよ、えええ！？）

ええ。そうです。間違いありません。

ご領主様。シエンテラン家の現御当主様で、おおいばりんぼのり

ユームの・・・何でしたでしょうか？

あ！そうそう。一応、義兄さまですよ！
グインセイル・シエンテラン様ですよ。

そう自分自身を宥めてみますが、何の効果もございません。

むしろつるばかりの不信感、恐怖へとなり変わって行きます。

ちがう！ご領主様なんかじゃない
わ！

「リユーム？」

「ギル、メリア？」

リユームの表情が意思とは関係なく歪みます。
対するご領主様の表情も厳しいものでした。

「リユーム、ギルメリアとは誰だ！？俺は、」

きや、ああああああああ

！！

気が付けば大絶叫。

なかなか見事な大声つぶりに病弱の名残もありませんね。

っ

て！？

目の前のお方に抱き上げられそうになった途端、自分でも思いも
よらないくらい大きな声が出ておりました。

「リユーム、どうした？大丈夫だから落ち着いてくれ」

「嫌、嫌、放して、嫌あ　　っ！！」

どうでしょうか、この状況。

不安に泣き叫ぶシュ・リユーカの意識に閉じ込められたまま、ダグレスを見やります。

軽口を叩きながらも、ダグレスの紅い瞳も少しばかり揺れて見え
ました。

様子を窺っているようです。

（そうなんですよ、ダグレス！ おかしいんですよー！どうしよう
もないんですよ、ご領主様が怖くって！）

それでもダグレスの登場に少しだけ、シュ・リユーカが落ち着い
たようです。

人型の獣サマの黒い髪と紅い瞳に釘付けです。

「ギルメリア様、どこ？ギルメリア・・・様は？ねえ、どこにいら
っしゃるの？」

どこ、この方は誰？ ギルメリア様は、どこに？

それだけを繰り返し呟きながらご領主様の腕の中で、ダグレスへ
と両手を差し伸べるのはシュ・リユーカです！

シュ・リユーカの意識ですから！ご領主様！睨まないで下さいま
せーと思いつつ、何となく後ろめたい気分のリユームです。

シュ・リユーカ、しっかり。

あれはダグレス、獣様ですよ。貴女の愛しいギルメリア様ではあ
りません。

「今は眠っている、シュ・リユーカ」

げしげと眺めました。

視界に入って不思議に思ったのでしよう。

当然です。シュ・リユーカは綺麗な金の髪ですから。

「まあ？これはわたくしの髪なの？真っ黒だわ」

(うつ。すみません、シュ・リユーカは見事な金髪ですものね)

「そうだ」

「ねえ、瞳の色は？」

「同じだ。鏡を見てみるか？」

「ええ！見ますわ」

静かに答えるご領主様に嬉々として尋ねました。

シュ・リユーカは寝台に上体だけを起こして、大喜びで鏡を受け取ります。

855

手鏡を覗き込むと確かめるように頬や、唇をなぞりました。

くすぐったそうに肩をすくめながら、またくすぐすと笑います。

シュ・リユーカは鏡に向かって、満足そうに微笑みました。

「このコ・・・綺麗ね」

「ああ」

「まあまあな」

シュ・リユーカが二人に問い掛ければ、すかさず答えが返ります。

(きよ・恐縮でございます！)

「わたくしとはまるで違う。恋焦がれたあの方と同じ色彩。忌まわ

しい軽薄な金髪でも翡翠の眼でもないわ」

(えっとお。シュ・リユーカ、目の前にいらっしやるご領主様にケンカ売ってますよ。冷や冷やします!)

「オマエはリユームではないのか？」

ご領主様が慎重に声をかけました。

「リユーム？そう、このコはリユームというのね。そう。わたくしの名前はシュ・リユーカといったはずなのだけれど」

シュ・リユーカはゆったりと微笑むと、また手鏡を持ち上げました。

「不思議ね。このコ、わたくしなのね」

しげしげと持ち上げた手を眺めてから、再び鏡を覗き込みました。そこに映っているのは間違いなくリユームです。

闇色の髪と瞳の、カラス娘でございます。

はっと思い出したように、シュ・リユーカの眉根が寄りました。

「あの方はどこかしら？」

また泣き出しそうな声です。心細いのでしょうか。

「オマエの目の前におるが今は深くに眠っている」
すかさずダグレスが、同じ事を答えてくれました。

「ああ、そうなのね」

「そうだ。だからオマエもしばしの眠りにつくといい。シュ・リユーカよ」

「ええ、眠るわ。これは夢？夢の中で眠りに付いたら、あちらでは目覚める事になるのかしら？」

「そうなるのかもな」

「そうなのかもしれないわね。だってわたくし、ひどく眠くて眠ったはずだったもの。それにしても何て素敵な夢かしら。理想のわたくしの姿になっているのですもの。目覚めてもこのままのわたくしであつたら嬉しいのに！そうしたらあの方の前に堂々と立てるわ」

「あの方？」

ご領主様が尋ねると、シュ・リユーカはうつとりと微笑みました。

「ええ。ギルメリア様よ。ギルメリア・シエンテラン様。ご領主様なのよ。黒い髪で黒い瞳の素敵な方で、わたくしの旦那様なの」

そしてね、わたくしを呪った方なの。

そうシュ・リユーカが、声をひそめて付け足しました。

そこに哀しみや恨みは感じられず、むしろ誇らしげに響いて聞かれます。

ご領主様の身体が強張ったのが解りました。

「シュ・リユーカよ。くたびれただろう？しばし眠れ」

ダグレスがあやす様に言葉を掛けながら、頭を撫でてくれました。何とも眠気を誘う手つきです。

そのまま、目蓋が下がるのに抗えないようです。

「もう少し、もう少しだけ・・・こうしてたいのに、眠い」

上手く言葉が紡げません。

久しぶりにどもってしまします。

何てもどかしいのでしょうか。

伝えたい想いで言葉が詰まってしまつたのです。

伝えたい気持ちを言葉に出来ず、千切れんばかりに首を縦に振りま
した。

「ご領主様」

「リユーム！」

ハイ、リユームです。ジ・リユームです。

頷くたびに涙が零れます。

「ご、ごりよ・・・っ」

「ヴァインセイルだ」

「ヴァイン、セイル、ヴァイ、ヴァインセ・・・ル！」

「リユーム」

リユーム、リユーム、リユーム、リユーム。

カ一杯頷きながら彼の名を呼びました。

その合間にも彼に名を繰り返して呼ばれ続けます。

「ヴァイ、ン・・・っんんっ」

呼ばれた分だけ答えようと思ったのですが。

温かく押しつけられたそれに、甘く封じられてしまつては答えよ
うもありませんでした。

第五十二話 ジャスリート家で目覚めた意識（後書き）

『シユ・リユーカー意識が邪魔をする』

仮タイトルです。

おかしいな、ぜんぜん邪魔しなかった。

本当はもっと乗っ取られましたリユームさん、
みたいな展開を期待したんですがね。

何だか憐れなシユ・リユーカーを、無理やり起こして申し訳ない感じ
です。

さ。

次は小話です。

皆様、良いゴールデンなお休みを！！

閑話 くレドの策略く(前書き)

ほんのつかの間の独り占め。

苛立ちを露わにした男に見下ろされ、リュームの声が強張る。咄嗟にレドの首へとしがみつく。

「リューム。こちらに来い！」

乱暴に取られた腕に痛みを覚えたのだろう、顔を引きつらせる。それでも、いやいやと首を横に振り、か弱い力での抵抗を試みている。

この男は腹を立てている。

リュームが言う事を聞かないからだ。

男の側には来ず、レドの側に居たがるのを不快だと全身で訴えていた。

レドも負けじと威嚇して訴えたいが、リュームが怯えると悪いからやらない。

代わりに胸をそらせて勝ち誇って見せる。

いいだろう。羨ましいだろう！リュームはレドと居たいんだ。

なぜ、このヒトは怒っているのだろう？

なぜ、こんなに怖い人の言う事を聞かなきゃならないの？

なぜ、こんなにもこのヒトは………？

わけがわからないといった様子で、リュームが泣き出した。

「リューム」

男が苛立ちも露わな、それでいて弱り切った声を上げた。

リュームがいよいよ本格的に、しゃくり上げ始めたからだ。

「いや……なぜ？」

「いいから、来い」

「どうして？リュームはレドと遊んでいるのです。行きたくない」

一瞬だけ振り返ってみると、リユームは若領主の腕の中に居た。

レド、少し精神が成長した模様。それに伴って言葉使いも大人になりかけ。

閑話 ～レドの策略～（後書き）

レド、聞き耳を立てて「領主がいつくるのか」などを把握済み。

嫌な猫たん（じゃないけど。）ですね～。

あいつらは見くびってはなりません。

人の事をよく・よく観察している、小さいけれど立派な魔物・獣様です。

この後レドはリゼライにまわり付いてウザがられます。

キリが無いのでこのへんで！

第五十三話 ジャスリート家の新しい養女（前書き）

この中で最強は誰かな、と思っちゃいました。

そして最弱も。

第五十三話 ジャスリート家の新しい養女

只今、リユームはかなりドキドキしております。

胸の辺りが静かに、でも確実に何かを訴えてきております。嫌でも高まる緊張感に、頭がぐらぐらしてきましたよ。

「リユーム。いいことを教えてやろう」

「何ですかダグレス。また感じ悪いですね」

リユームが落ち着こうと呼吸を繰り返すのを面白そうに見下ろしながら、ダグレスが腕を組み直しました。

ここ最近、彼はこのように人の姿でいる事が多いようです。

今日もジャスリート家の護衛風の、かっちりとした出で立ちで腰には剣を佩いております。

向き合つリユームも正装です。

首筋を晒すことのない、きつちりと襟の詰まったドレスですとも！
まだ首には包帯が巻いてありますからね。

そんなものは襟の下に隠して、ザク口様をお見せしてます。

お茶会時程ではありませんが、新緑に合わせたドレスはなかなか
気合が入っているのではないでしょうか。

窮屈なコルセットおかげで、嫌でも姿勢がしゃんとするってもの
です。

何せこれからお客様をお迎えするのですから、失礼があつてはい
けません。

それなのにダグレスときたら！余裕綽々で緊張感のカケラもありやしません。

ちよっと恨めしく思ったので、機嫌の悪そうな声が出てしまいました。

いつだって自信満々の獣様に遠慮は禁物です。

リユーム、ダグレスに対して取り繕う事はもうとつくに止めていきます。

「何だ、せっかくヴィンセイルガルゼに叱られた話を聞かせてやろうと思ったのに」

ああ、残念だ、残念だと呟きながら、わざとらしく背を向けたダグレスに縋りました。

勢い良すぎたせいかわ腰掛けていた椅子が、がったんと音を立てたようです。

なかなか淑女失格です。

「ダグレス！ちょ、ちよっと、お待ち下さい」

「何だ？」

「いつのまにござ領主様の事、お名前と呼ぶ仲になってらっしゃるのですか！驚きですよ！リユームの知る限り、ご領主様とお名前呼び合う方なんてダグレスくらいですよ！」

「何だ！そんなに瞳を輝かせて言うな！気持ちが悪いわっ」

「い、いいえええ！これからもご領主様を、どうぞよろしくお願ひします」

「ダグレス、照れなくてもいいではありませんか。さ、ご領主様をお名前で呼んで差し上げて下さいませ」

リユームは照れを隠すためにも、ぱん！と手を打ち鳴らして促がしました。

さあ、さあ、さあ、遠慮はいりませんよ、獣様。

紅い目を眇めつつ、ダグレスが物凄く唇を歪めました。

「ヴインセイル」

「何だ」

「このバカをどうにかしろ」

ご領主様はダグレスには一瞥もくれずに進むと、書物をテーブルに下ろしました。

同時に息も長々と吐き出されます。

きつと書物が重かったからでしょう。そう思いたい、ため息です。

「リユーム。あまりダグレスを困らせるな。俺と違ってオマエの言動に免疫がない。一体何の騒ぎだったんだ？」

「ダグレスが！ダグレスが、ご領主様をお名前で呼ぶようになっていたから、感動したのです。良かったですね！」

しばらく無言で頭を撫でられました。

たっぷりと。

右に左にと頭をもしゃもしゃにされた後、キレイに撫で付けられました。

一応、整えてくださったのでしよう。

その間、ご領主様ときたら何やら虚ろな瞳で見下ろしてきます。

…*…*…*…*…

さて。

作戦会議なるものの始まりです。

議題は闇なるものをふり払う手立てについて、とでも表現すればいいでしょうか。

こんなにも関係の無い皆さんに迷惑を掛けてしまって、恐縮のあまり泣けてきます。

今世どころか来世まで二度と金輪際、呪いなんぞ始めるものが、持ち掛けられても頷くものかと心に誓います。

何でしたらこの場で宣誓でも署名でもします。

そんなもので何の侘びになるのかと言われても仕方が無いですが、それくらい居たたまれないのです。

侍女の皆様がお茶を用意して退室すると、早速だけでも始めるわとルゼ様が口火を切ります。

「まずはリユーム嬢ですが、このジャスリート家の養女としてお迎えします」

きつぱりと宣告されたご領主様は、口に運びかけたカップを下ろしました。

「ご領主殿、よろしいですわね？」

「否とお答えしたらどうなりますか、公爵」

「あら愚問ね。もう一回牢屋にでも入って頭を冷やす？」

（もう一回？そういえばリユームを攫い、あげく怪我までさせた事

を物凄く叱られたとは聞いていましたが・・・牢屋!?)

「例え形式上であろうとも、リユーム嬢は一度はシエンテランの家から抜ける必要があるのよ。ねえ、フィルガ?」

「はい。これはタラヴァイエに下された呪いですが、長きに渡る年月と両家の婚姻が原因で、もはや呪いは標的を定められない状態になっているものと思われます。だったらタラヴァイエの血筋は絶えたと錯覚させれば良い。ほんの少しの間の目くらましに過ぎませんが、ジャスリート家と縁を結ぶ事はかなり有効な手段となるでしょう」

「それに何より、リユーム嬢がシエンテラン家の養女である限り、義理であつても兄という立場の貴方に嫁がせるには準備というものが become になるのよ。おわかりかしら?」

「何でしたらこのザカリア・ロウニアの養女という手もありますが、ご領主殿?」

そうなれば他家には嫁がせぬように仕向けるかもしれませぬなあ、とザカリア様は付け加えられました。

あくまでリユーム嬢の意思を尊重した上ですよ、と流し目も下さいました。

ロウニア家。

現・巫女王様を始めとして、数々の神殿の有力者の出である名家中の名家です。

正直なところ身分云々もそうですが、実力名声ともにシエンテラン家よりも格段に上でしょう。

そうなればザカリア様の配分一つでリユーム、ご領主様以外の方にお嫁に行かねばならない可能性だってあるのです。

それほどロウニアの家長というのは権限があるのです。

もちろんザカリア様はそんな事は致しません。が、ご領主様は必ずごねるだろうからそう言っただけで圧力を加えるのだというのも、事前の作戦会議で決まった事なのです。

実のところ今日のこの集まりは、ご領主様を抜きにして進めておいた事の報告でしかないのです。

リユームの隣にはダグレスが、テーブルを挟んで目の前にはご領主様が腰掛けています。

ご領主様とリユームを挟むようにして、ルゼ様とザカリア様がこの沈黙の中でも構わずお茶を飲まれております。

せっかく用意されたお茶ですが、リユームはとてもじゃありませんが手を付ける勇気がありません。

身動きが取れないと表現するのが正しいでしょうか。

すごい迫力です。

ルゼ様は今、公爵様というお立場でもってご領主様とお話を進められているに違いありません。

流石のご領主様も右手にルゼ様、左手にザカリア様ときてはたじろぐってものでしょうか？

こつこつを手に汗握る展開というのかもしれないね。見守るしかありませんけれど。

ご領主様は何も仰いません。

無礼にもお二方を睨みつけ、代わる代わる鋭い視線を投げつけています。

対するお二方が、全く痛手を感じておられないのは明らかです！
ち、力の差は歴然です。

この沈黙に、重苦しい雰囲気の後どれくらい耐えれば良いですか？

かちゃり、とルゼ様がカップを置かれました。

それを合図と受け止め、リユームはルゼ様の方を窺いました。

「それでは、リユーム嬢。貴女はまず第一にその身を守る事を考え
ましょう」

「はい」

「よろしい。ではこれから五日の後、神殿に巫女としてあがって
もらいます。ザカリアが準備を進めてくれますから、フィルガと
ディーナに説明してもらってちょうだい」

リユームはルゼ様との打ち合わせ通りに席を立ち軽く礼をとった
後、扉に向います。

右手をディーナ様が、左手をフィルガ様が取って下さいました。
勢い良くご領主様が立ち上がったのが目の端に映ります。

ダグレスも同時に立ち上がり、ご領主様と視線を合わせましたよ
うです。

「リユーム！神殿・・・巫女だと！？俺は聞いていないぞ、リユ
ーム！何故、俺を見ない！？」

いつだってリユームはご領主様を一人にするような真似をして、
立ち去りますね。

お許しください。

突然、ぽつりとディーナ様が呟かれました。
消え入ってしまいそうな、晴天の日の一滴の雨のように儚い響き
でありました。

「ディーナ様もですか！」

「そうよ。ただし、わたくしにかけられた呪いではないわ。ああ、
でも同じ事かも」

「ディーナ様？」

「わたくしはね、リユーム嬢。獣たちを神殿から、身勝手な術者か
ら解き放ちたいと思っているのよ」

全てね、と付け加えたまま、ディーナ様はそれきり黙ってしまわ
れました。

ダグラスを見上げても、同じように沈黙だけが降りてきます。

「ディーナ様、そうしたら獣様達はどうなるのですか？」

「帰るべきところに還るのよね、ダグラス。リユーム嬢にしがみ付
く闇も同じね。きっと還るべき所に還るのよ」

「そうですか。そうですよね」

還るべきところは一体どんな所なのでしょうが。

見送らねばならないと解っていても、物寂しく感じるのは何故で
しょうか。

未練など禁物と思っても、自分の一部分が持っていかれてしまっ
かのような喪失感に途惑います。

おそらく身の内に秘めた呪いの抵抗なのかもしれませんが、執着
してしまうのは変化を恐れるあまりになのでしょうか？

「人間どもが結んだ絆を断ち切っても、獣らから絆を望めばまた話も違ってくるだろうな」

うな垂れたリユームに、ダグレスが声を掛けてくれました。
頷きます。

獣様との絆は例えどうなっても、温かなものであるのならそれは再び見える事が出来るでしょう。
そういう希望があると思えるのです。

ですが闇は？

闇は光に追いやられたら、どこに向うのでしょうか？

リユームもご領主様も闇が被われたら、二人はどうなるのでしょうかね。

リユームは気が付いておりますよ。

この胸に溢れる想いが呪いに囚る執着のなせる業かもしれないという事に。

闇がふり払われた後に彼の緑の瞳が映すのは、リユームではなくなるのかもしれないのです。

胸がずきんずきんと痛みます。

何を、受けて立つと思い唇を噛み締めましたら、二人から手を強く握られました。

そんな身勝手な不安と、指先から伝わる優しさが、涙の雫となって零れ落ちて行くのです。

きつとお二人に手を引かれていなければ、その場に崩れ落ちていてもおかしくは無かったでしょう。

「ありがとうございます」

何の関係も無いはずのルゼ様にフィルガ様にディーナ様、ダグレスにレド、そしてザカリア様までが温かなものを寄せて下さっているのです。

ですから！ 負けてなるものかと前を見据えて、進めるのです。

第五十三話 ジャスリート家の新しい養女（後書き）

『ジャスリート家で作戦会議というかお説教』

お説教はとうに済んでいます。（リユームが意識不明の間に。）
そこはまた今度。

領主は牢屋に入れられました。

ダグレスは後々からかう気満々でした。
ちなみにルゼの命令で放り込んだのも、ダグレスです。

フィルガも入った事があります。（笑）

第五十四話 ジャスリート家で見送る者達（前書き）

小話じゃないけど 作者にしてみたら ちょっと短めです。

第五十四話 ジャスリート家で見送る者達

まずはその呪いの内容を知る事から。

というわけで、フィルガ様とディーナ様とお勉強中です。

「ここにヴィンセイル殿からお借りした、シエンテラン家の歴代の年表及び記録文書があります」

それを読み解いた結果、たいそう救いの無い質の呪いである事が解りましたよ。

「リユーム嬢に掛けられた呪いは実は二種類の、まったく相反する作用を持つものであるようです。

ひとつは祝福。そしてもうひとつは災厄。二重に施してあります」

フィルガ様のお話を聞くうちに、気が付けばディーナ様に手を握られていました。

そのぬくもりがそっと寄り添って下さるおかげで、いくらかこの場に意識を保つ事ができます。

頭を殴られるほどの衝撃とは、この事だと思つのです。

「二重に、ですか。なかなか容赦も、救いようもないですねえ」

「リユーム嬢は賢くていらっしゃる」

ならばあえて口に出しての説明は控えさえて頂きます、といった風に聞こえました。

ええ、フィルガ様。

察して下さってありがとうございますと、感謝します。頭を下げてそのままうな垂れました。

要はすぐさま死なれちゃ困るので、祝福も授けられたって寸法です。すね。

道理でリユーム、やたらに死に掛ける割には何だかんだで助かっている訳です。

まるで彼　　ギルメリアそのままの性質ですね。

容赦なく傷つけるくせに、気まぐれで優しさを与えるような。

わかります。

シュ・リユーカーは、時おり与えられるその優しさで生き延びていたようなものですから。

「そして災厄の種類ですが、」

「フィルガ殿！もうそれくらいで、いいではありませんか」

フィルガ様の説明をディーナ様が遮ります。

リユームは、はっとして顔を上げました。

「いいえ！お聞かせ下さい。覚悟は付いております。ディーナ様、ありがとうございます」

「リユーム嬢」

リユームではなくディーナ様の様子に、フィルガ様は言葉を止められたようです。

フィルガ様はお優しいのですが、術やお仕事の事に関してとはとて

「リユーム嬢。あそこは俺たちのような神殿に属さない獣使いには冷たい目を向けるが、貴女にはそうではないよ。貴女のような稀有なる歌声の持ち主は、祭礼時の筆頭巫女として召されたって何らおかしくない。きっと今までだってあったはずだ。リユーム嬢の耳に届く前に、ヴィンセイル殿が断っていたのだろう」

「ええ、そうよ。今も昔もあそこは能力者を集めておきたいのよ。民の絶大な信頼を得るためにも、こぞって力のある者達を探し出してきているそうだから。貴女は歓迎されると思う」

「そう。それにあそこには生え抜きの術者達が揃っている。術が複雑であればあるほど、神殿は威厳を掛けて紐解く。リユーム嬢は何の気兼ねも心配もせず、堂々と助けを求めればいい」

「そうよ。そのための神殿なのですもの。それに・・・リゼライさんもギルムード殿もいらっしやるわ。きっと助けてくれるわ」
「リゼライ様。ダグレスの？」

お好きな、という言葉は潜めました。

ここにはいない獣様が聞いたら、いらなくらい全力で拒否して怒るからです。

そうそう、とお二人も声を潜めて応じます。

おにいさま。おねえさま。

心の中だけでそう呼びました。

「ありがとうございます！」

「リユーム、来い」

鉄格子越しにも関わらず、ご領主様は両腕を広げられました。まるで目の前の鉄の檻など無きにも等しいと言わんばかりの態度です。

「抱かせる」

「無茶言わないで下さい」

言いつつもリユームは瞳をそらしませんでした。いえ。逸らせませんでした。

（貴方様のお側に）

そう願いながらひとつ、瞬きました。

第五十四話 ジャスリート家で見送る者達（後書き）

『神殿に赴く前に呪いの本質を。』

それぞれリユームを思いやって、それぞれが出来る事をやって送り出してやるんだという気持です。

ある意味、嫁入りさせるんだくらいの気持かもしれません。

（ 一部 除く。 ）

珍しく 次々 さくさく 行こうと思います。

・・・行けるとオモイマス。

お付き合いありがとうございます！

第五十五話 ジャスリート家の地下牢での逢瀬（前書き）

色々と限界に挑戦しています。

リユームが。

領主もか。

第五十五話 ジャスリート家の地下牢での逢瀬

次に目蓋を持ち上げる時には、驚きのあまり目を見開くご領主様のお顔が飛び込んできて、おかしかったです。

「リユーム・・・おまえ、何をやった？」

「リユーム、これでも術者の端くれとしてこの程度でしたら何とか出来ます。まあ、修行中なのであまり大きなことは出来ませんが」

二人を隔てていたはずの鉄の格子も何もありません。

リユーム、ご領主様と一緒に牢獄の中でございます。

はい。初めて入りましたよ、牢屋！

ご領主様と一緒に囚われの身の上を体感中。

もう、少しだけ彼のお側に。

正直、無茶をやらかしたのは否めません。

視界が霞みます。

がんばろうとリユームは久々に祈りました。

(気力！おいでませ、気力！！頼みの綱の気力っ)

リユームも意気揚々と先程のご領主様に負けなくらい、両腕を広げました。

ささ！抱っこどうぞ！

ぎゅむゝとな。あんまり苦しいとエキバりに突っぱねちゃいます

けど、どうぞ？

そんなリユームをまじまじと見下ろすだけで、ご領主様は何故か一歩下がります。

「ご領主様、いかがされましたか？」

「その格好は巫女装束だろう。そんなオマエを汚せるか」

「確かに汚れの目立ちやすい真っ白い衣装ですが」

「そういう意味では無くてだな」

リユームが小首を傾げると、ご領主様は深々と息を吐いて前髪をかき上げられました。

その手のひらの下のお顔は、何だかばつが悪そうとでもいいまいようか。

瞳を瞬かせながらリユーム、自分の着ている衣装の裾を眺めました。

巫女入りする娘の正装とやらは飾りこそ無いものの、生地を重ね合わせや縫いのつまみが駆使された上等の物です。

これもまた、ルゼ様をご用意して下さったものです。

リユームの戦いに赴くための鎧と同じものよと、にこやかに言い渡されました。

「ご領主様。リユームを汚すって何ですか？どうやって？具体的にはどうなってしまうのですか、リユーム？」

慎重に一步近付きながら、彼を見上げました。

再び、目を見張られます。

「そうです。リユームときたら何一つ、わからないんだって理解しました。ジャスリート家でディーナ様とルゼ様とお話してみて、自

分がどうやら何一つ教えられずにこの歳を迎えたらしいという事だけは理解できましたが」

すは、とひとつ呼吸を吸い込みました。

続けます。

「食べられる、ってどういうことなのか。汚されるって？このザク口様を外すには、彼のものになると言われましたが・・・ご領主様のものになるとは？尋ねてもお二人はヴィンセイル殿に訊きなさいと仰るばかりでしたの。だから、リユーム。そのひとつ、ひとつ全部をご領主様から教えて欲しいんですの。他の方ではどうやら駄目みたいって事も解ります、それは・・・怖いこと？」

もう一度、おずおずと彼に両手を差し伸べてみました。

「ご領主様は一瞬苦しそうに眉根を寄せられました。

その様子にリユームはためらいがちに上げた腕を、もはや彼に向けるもはばかられて下ろします。

かと思うと勢い良く引かれ、彼の腕の中に納まっていた。

やっと望んだとおりにぎゅうつと包まれて、幸せだと思いました。

彼に思っぞんぶん、身をすり寄せます。

「俺も同じだ。あの変質者と」

「へ？変質者ですか」

「ギルメリア・シエンテランと」

「ええ！？」

今その方の腕の中にいるリユームって一体。

「やはり俺こそが、牢に入るのが相応しいのかもしれん。だから入ったのに、このバカめ。のこの狼の巣窟に自分から入るとは何事だ」

泣き声を堪能し

俺を感じさせる事だ。

そう教えられながら、言われた通りに実行されちゃってます・・・

・・・!

「ご領主様、ご領主様、リユームは限界でございます。胸が苦しいし、恥ずかしすぎて熱が上がってしまいましたよ」

「俺だつてそうだ。言っておくが限界どころの話では済まない。オマエが煽るから悪いのだろう。最後まで責任を取れ。取ってから神殿に上がれ」

「いや・・・たぶん、そうならら巫女の資格を失うと思います」

ちつと鋭く舌打ちされました。

「何の責め苦だ、これは」

苛立ちを含ませたままの唇が、リユームを髑ります。

大きな手のひらが、リユームの胸を思うまま弄びます。

太腿まで裾がまくれ上げられ、忍び込む指先に息を飲みます。

「あん！あ・・・っ、やう」

視界が大きくぶれました。

もはや、意識を保ちここに居るのも難しくなってきたようです。

時間切れです。

「リユーム？」

「ご領主様。リユーム。時間切れです〜」

ぐったりと、身体を彼に預けました。

受け止めてくれたはずの彼の指先が空を切ります。

抱えているはずのリユームの身体が透け始めた事に、彼も気が付いたようです。

今更何に驚くものかといった調子で、顎をしゃくられました。

「種明しをいたしましょう、ご領主様。このリユームは精神体でございまして、実体ではございません。本体は眠っております。シエンテラン家で倒れたあの日のように、精神体だけでうろついているだけなのです。それを最近実体化する事に成功いたしました！」

フィルガ様のご指導と修行の成果です！えへん！

「術者といえどもまだまだまだ、端くれでした。ちなみに。この技を使った後は二三日は寝込みます！」

「未熟者のクセに無茶をするな！早く戻れ！！」

実体でないおまえはただの幻に過ぎない。

そう苦しげに呟きながら、頬を撫でられました。

その手にかろうじて実体化できている、左手を重ねます。

「ですけどご領主様。この身は自由なのですよ。病んだ身の重さも辛さも息苦しさに制限される事も無く、煩わされることの無い自由な」

「何が自由だ。それは・・・」

死んでいるのと変わらない。

彼が苦しそうに呟きました。

途端に胸が締め付けられた気がいたしました。

実体ではないのに。

「ご領主様。もうそろそろここから出られて下さい。ダグレスに伝えてありますから」

「いや。オマエが完全に神殿内部に入るまで居るとしよう。そうでなければ、我ながら何をしでかすか・・・わからんからな」

「ご心配には及びません。リユームの本体は既に神殿の一室にあります」

「何？」

「嘘を言いました。本当はあの打ち合わせの五日後ではなく、三日後には神殿に上がりました。ですから、もう既に」

念には念を入れて、陸路ではなくダグレスのお背なに乗せていただいて行つたのです。

「それでいい。どうせ公爵とロウニアの老骨の策だろう。リユームの知恵だけでは俺に太刀打ちはならんだろうからな」

「言いますねえ。同じことをお二人に言われましたよ。良かったですね、ご領主様。一目置かれているようですよ」

視界が霞みます。

意識を保っているのも難しくなってきました。

第五十五話 ジャスリート家の地下牢での逢瀬（後書き）

『地下牢でエロい。』

なんちゅう仮タイトルか。

そのままですね。

地下という秘密めいたシュチュエーションで、巫女装束って。

リユーム、頑張った模様です。

閑話 くかつての身代りく (前書き)

かつての己の身代りに、八つ当たりのザカリア様です。

閑話 くかつての身代りく

リユーム嬢は守られる様に退室していった。

「リユーム！俺は聞いていない！何故こちらを見ない！？」

誰だって想い人の非難の声に、動揺しないわけがなかつた。

か細い背中が微かに身じろいだが、彼女は振り向かなかつた。

決意の現われだと思つた。

振り返つたら最後、彼女はまた彼を甘やかしてしまつたろうから、それでいいと思つた。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ルゼはもはや何も言わず、さり気なくカップをワゴンに移動させていた。

苦笑しつつ、それは避けられない展開を予想しての事とつかげえ知れる。

事前の打ち合わせでルゼが零していたのだ。

あの若者は相当気性が激しいわよ。
それに好戦的。

ただ普段はそれを上回る理性でもってして、己を律してるわね。
任命式の時の彼をザカリア、貴方にも見せたかつたくらい。

儀式にかこつけて、本気で私にかかって来たわよ。

煽った私も悪いからアレだけど、おもしろかったわ。

彼、リユーム嬢が絡むと本性丸出しの、破壊的な行動に出るから
気を引締めて掛かりましょう。

ふふ、とお互い目元のシワを更に深くしながら、笑いあっただ。

確かに面白い。

普段は澄ました顔でいっぱしの領主ぶっている若造が取り乱す様
は、己の苦い思い出も蘇って興味深くもある。

リユーム嬢から返答を得られなかった彼は、その背を傷ついた瞳
で絶っていた。

扉が閉められる。

迷い無く締め出すように閉めたのは、ダグレスだった。

行ってしまった。

振り向きもせず。

次の瞬間こちらに向けられた緑の瞳は、怒りと憎悪を織り交せて
鋭くこちらを睨んでいた。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

予想通り、この若者は腰から短剣を抜いていた。

ただし鞘付きのままだ。

なるほど。それくらいの理性はまだ残っているらしい。
だったら老体に刃を向けるのを堪えるくらいの理性もあれば、も
っと褒めてやるのだが残念だ。

もつとも、これはただの八つ当たりだろうが。

（だったらこちらも、そうさせてもらおう事にしようか。なあ？若造
だったザカリアの身代りに）

こちらも素早く杖でそれを受けた。

振り下ろされるよりも早く構えていた己を、まだまだ捨てたもの
ではないとほくそ笑んだ。

にやりと笑ってやると、いくらか若者の瞳に焦りが見えた。

そうそう。

ご自分が若いからといって、老人を見くびると痛い目を見るもの
なのですよ。

太刀筋は悪くない。

身のこなしも。

だが遠慮なくこの老骨に食って掛かってきた割に、幾らかの気遣
いが見え隠れしていた。

合格だ。

まあ、そこにつけ込ませてもらうとする。

彼とてそうであってくれと願っているはずだから。

ロウニア家。

たかだか地方の一領主がたてつくにはあまりに大きな隔たりがあ

ることだろう。

彼とてそこは頭の隅に留め置いての上での、この愚拳に違いない。ならばそれを汲み取るまでの話だ。

ルゼがさつさと扉の少し外に避難したのを見計らって、彼の剣を押し返してやった。

短剣はあっけなく床を滑った。

抜かりなくルゼがそれを拾い上げる。

何と言う連携のよさかと嬉しくなる。

そのまま、杖の先で彼の鳩尾をみそおち一突きした。

素早く後ろに回りこみ、ふら付いた身体を後ろに倒れるのを許さない。

首筋に杖を当て込み、締め上げる。

呻く彼が意識を手放す事の無いよう、加減しながら拘束する。

これから先は長引くとこちらが不利だ。

何せ体力が違う。

そろそろこの茶番も終わらせねばなるまい。

いつまでも駄々っ子に構ってやれるほどこちらも暇ではない。

体力で敵わないならば、次に攻め入るべきは精神の方と相場が決まっている。

そう例えば罪悪感やら、大事な存在を脅かすような事柄を突くに
限る。

「誰もあなたを責めず罪に問わなくても、貴方はご自分の犯した大罪に気が付かねばなりません」

いや。

本当のところは気が付き、己を責めている事だろう。だからこそ、だからこそ・・・だ。

誰も彼を止められ無かったのではないかと推測する。

かつての私と同じように。

身分や自分が男性という立場は時として、何と身勝手な己を作り出すのだろう。

他人の存在自体を貶めるような言葉を平気で口にする。

しかもそれは己よりも格段に弱い存在、本来ならば守るべき存在に向かう事が多い気がする。

それはとんでもない思い上がりにもならず、けして本心でなかったにしろどれだけ相手に傷を負わせるか。

『う、うめ、う・・・つなさい』

いくら年月を経ようとも忘れられない、心底怯えきったあの眼差しと嗚咽。

その傷は後々、己をも抉るのだ。

かつての、若かった私のように。

「私はかつて妻を・・・少女をみつともないカラス娘と罵り、嘲りました」

締め上げながらその耳元に独白を呟けば、若者の抵抗が止んだ。

「妻は真に受けて髪を切り捨て、ベールを深く被り人目を避けるようになりました。あんなに綺麗な髪を……。私は心の中だけではなく実際に言葉にして彼女を誉めそやすべきだった。私はとんでもない間違いを犯したのです」

その結果当然ながら少女は長く打ち解けず、求婚すらもなかなか受け取ってもらえずの日々。

「まあ、貴方は運がいい方だと思いますよ？リューム嬢に感謝する事だ」

眩しく笑う少女の明るい気質に、人並み以上の強さを思った。

何も妻が弱かったというわけではない。

普通、年頃の娘が容姿を非難され蔑まれたら『ああなって』当然だというだけの話だ。

妻は人並み以上に相手の心の機微に敏く、不安定な心の持ち主であつた私に消耗させられたのだ。

本当にひどい話だ。

頼むから若造だつたザカリアを誰でもいいから止めてくれ、と仕方のない事をいまだに本気で願う。

なぜ、若者はその事に気がつかないのだろう。

自身に溢れる若さという根拠の無い自信がそうさせるのだろうか？

どうして年を重ねて初めてやっと気がつくのだろう。

閑話 〱かつての身代り〱（後書き）

『ああなつて 当然』

どうなったのかは既に書き上がってます。

スピントフ予告。

すゝDE〱に〱10話分書き溜まってますよ。

（だから 何だ。）

領主の言い分としては「本当はザカリアのじじいの拘束なぞ、ふり
払えたが大人しく従ったまでだ。」らしいですよ。

一応、自分から進んで入ったんだって気持ちらしい。

そっち書けや私も思いましたが、彼のプライドのために今は書か
ないでおきます。

ただの強がりと正当化の羅列になりそうですからね。

それでは！ お次は 本編です。

第五十六話 神殿に一緒にあがった者（前書き）

闇ふりワールド、一口メモ。

リユーム「100・ロートで小さめのパンが一個くらい買えます
！」

だ、そうです。

第五十六話 神殿に一緒にあがった者

覗き込む金の瞳に金の髪。
豪華な色彩の美女様です。

そんな豪華な色彩まとう美女が、寝込むリユームの額に手のひらを押し当てて下さいます。

リユームはにんまりとしてしまいます。

(いいでしょう？羨ましいでしょう、ダグレス？)

ここにはいない獣様に、心の中で誇らしげに語りかけます。

「もう、弱っちいわねえ！大丈夫なの、お嬢さん」

「はい。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

寝台から半身を起こすと思いがけず、魅惑的な胸元が眼前にありました。

リユームを覗き込むその前屈みの体勢は危険です。
間違っても獣様と殿方にはやっっちゃあいけません。

「まあ、慣れない神殿での生活に参る気持も解らなくはないけれど・・・って、どうしたの？」

「参りました！」

「あっそ」

「そういう事にしておいて下さいませ」
「かえって気になるから言いなさいよ」

言える訳がありませんか。
リユームは口を噤みました。

そんなリユームをどう思ったのかわかりませんが、深々とため息をつかれてしまいます。

「これ」

はい、と勢いよく差し出されたそれと、彼女の顔を見比べました。

「何でございましょうか？」

「手紙よ。見ればわかると思うけど」

ああん！つれないところも素敵なりゼライさんです。

そうです。

お噂はかねがねの、リゼライさんですよ！

「ええとく？もしや、黒いお手紙配達係様経由でしたか？」

「そうよ」

そんなリユームの問い掛けに、いつそう表情を歪めながらリゼライさんは言い捨てました。

ダグレスはまた素直になれず、リゼライさんに軽口を叩きすぎて鬱陶しがられたに100・ロートです。

後でからかってやるとしましうと目論みながら、そしらぬ顔で手紙の封を切りました。

見慣れた文字に安堵を覚えながら読み進む・・・事など不可能な

内容に、思わず手紙をたたみ隠しました。

「……………どうかしたのかと訊くのも愚問のようだけど、どうかした？」

突っ伏したリュームに憐れむような声が降ってきました。

「いやあ。何と言いましょか。真昼間から読みたくない内容であった次第です！」

「そう」

リゼライさんのこういう淡々とした冷静なところ、とても魅力的です。

リューム、ご領主様からの手紙の内容は伏せておきました。

「とにかくお嬢さんはもう少し頭冷やしておいた方がいいわ。寝てなさい」

「そうですね。色んな意味で」

「そのようね。何その顔色。真っ赤なんだけど？」

「そうですね。リゼライさんの魅惑のお胸元が、あまりに近すぎるせいもあると思います」

両頬に手を当てて火照りを確認しながら軽口を叩くと、頭をはたきつけられました。

「ペしいっ！ と良い音がしましたよ。」

リュームのお頭の詰まり具合が良くわかる様な、軽い音でありました。

そのまま額に手を当て込まれて、いいから大人しくしていなさい

と叱られてしまいました。

何だかんだと面倒見の良いリゼライさんです。

リユームはそのまま再び横になり、目を閉じました。

. . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . * . . . *

初めて神殿に上がった日の事です。

厳かな雰囲気におおされ、がちがちに緊張しているリユームの目に現れたのがリゼライさんとギルムード様でした。

正直なところその時、リユームの視線はリゼライさんに釘付けでありまして。

その後ろで面白そうに笑う、背の高い男の方には全然注目しておられませんでした。

ただ髪の毛ぐるんとしてふんわりだなとか、お髭がお義父様みたいでなくらいにしか捉えておりませなんだ。

おぼろげに神殿の護衛の騎士様なのだろうと、その服装から見当つけたくらいです。

それよりも美女、美女様です！

小さなお顔に大きく意思の強そうな瞳。

すっと通った鼻梁と引締められた口元という完璧な配置です。すぐく整った凜とした印象に、ドキドキしてしまいましたよ。

流れる金の髪をサークレットで押さえて後ろに流し、彼女は小首を傾げて見せました。

途端にサークレットの紅い宝石が眉間で揺れました。

（おそろい、かもです！）

リユームのザク口様と同じ石かもしません。

そう考えて一人で胸を高鳴らせてしまいました。

おそらく、ただぼかんと目の前の美女様に目を奪われていたであろうリユームを、これまた金色に近い瞳が見つめていました。

美人に見つめられて思わず身を固くしたリユームです。

何せ、ギョルミナ様のことを思い出してしまったものですから。

「初めまして、ジ・リユーム嬢。ジャスリート家からようこそ。貴女を歓迎いたします。私は神殿の護衛団長を勤めるギルムード・ロウニアでございます。叔父からも貴女の事は窺っております」

少し視線を下げてしまったリユームに、大きくてハッキリしたお声をご挨拶下さったのです。

慌てて視線を上げると、その背の高い男の方は前に進み出てリユームに礼を取って下さっていました。

真っ黒い丈夫そうな衣装はきつと神殿の騎士様の制服なのでしょう。

ギルムード様はあくまでもにこやかなのにも関わらず、そこはかとなく緊張感が漂わせておられました。

その後につき、ギルムード様の一步控えめの後ろで、美女様からも頭を下げられました。

「お目にかかれて光栄です、リユーム嬢。巫女を勤めるリゼライ・

シャグランズと申します。この度の件、私もお力になるよう全力を尽くしますので、よろしく願います」

そこでやっとこさ我に返り、弾かれたように頭を下げたのは言うまでもありません。

「はっ初めまして！ジ・リユーム・タラヴァイエと申します。こちらこそ、よろしく願います！」

ディーナ様といい、この方といい何と言う美人さんなんでしょうか！

いえ、美人なだけではなく可愛いのです。可愛いだけではなく、お美しいのです！

「ああ、そんなに畏まらずともよろしいのですよりユーム嬢？貴女の事情はお聞きしておりますから、安心してこのギルムードの部下のリゼライを頼ってください。必ずや災いを遠ざけてみせましょう。な！リゼっ！？」

「人任せですか、ギル様。だったらもうお戻り下さって結構ですから」

「り〜ぜ〜、つれない事言っなよ？俺だってこの美少女の助けになりたいんだぞ！」

「ですからここはワタクシに任せて、速やかに任務にお戻りください」

肩を抱き込むようにされたりゼライさんは、心底嫌そうな顔をしてその手を振りほどきました。

そんな二人の気安いやり取りに、リユームはどう反応していいか解りません。

「そんなワケで任せただ、リゼ！じゃあ、俺は姉上のところに報告に行つて来る。では、リユーム嬢。いつでも御用の際は何なりとお申し付け下さい」

気楽な口調に驚きながらも、リユームは頷きながら出て行く彼を見送りました。

二人きりになってしまいましたよ。緊張します。

「……タラヴァイエ？」

たつぷりと間を置いてから、リゼライ様が怪訝そうなお顔をなさいました。

「間違いました！申しわけありません。シエンテランでした」

「なぜ、間違うのかよく解らないけど。私が驚いたのはタラヴァイエの家名を名乗ったからよ？紹介状にはジャスリート家の新しい養女となったとあるし、どれなの？」

「はい、そうでしたか。真正銘タラヴァイエのジ・リユームですが、一応シエンテラン家の養女なのです」

リユームは今までの経緯をかいつまんで話しながら、持参したシエンテラン家の記録書を差し出しました。

一緒に文字を覗き込みます。

「これは高度な呪術が施してあるようだわね。血筋の者以外が読めないようになってるから、私には解読不能よ」

確かに読むというよりも、まるで頭の中に流れ込んでくるかのよ

うに言葉が入ってきます。

リユームは書から手を放して、リゼライさんに向き合いました。

「聞いてくださいますか、リゼライ様」

「リゼライでいいわ。様は要らない」

「はい。ではリユームの事もそうして下さいませ」

「そうはいかない。いいから続けて」

「はい。この両家の始めた闇の物語をお聞き下さいませ。そしてどうかお力をお貸し下さい」

リユームは頭を下げると、改めて今までの事を順を追って説明しました。

「呆れる！」

あらかた話し終わると、じつと耳を傾けていてくれたリゼライさんが口を開きました。

「さようでございますか」

「そうよ。最初は些細な亀裂でもそこに闇が入り込めば、それは亀裂などでは済まなくなる。ましてやこの呪いを始めた術者ときたら！願ったんだもの。大きな闇を動かそうと、その闇を使って呪いを完成させている。人の子の分際で闇を操れる等と思い上がりもいところだわ」

「なかなか救いようのない事になっておりますね。今までもそう感じておりましたが、専門家の方に言われると嫌でも思い知ります・
・小娘が知った口を利くな」

あ・れ！？

リユームですね？

このような口ぶりが信じられませんが、心当たりはあります。

「たかだか　それだけの力量しか持ち合せていない小娘に、何がわかると言っ？」

声はリユームです。

ですがその口調はまったく違います。

あまりの違和感に寒気を覚えたほどです。

「私が小娘であろうとも、術者の端くれとしてわかる事がある。踏み込んでではない領域を侵した者の末路がこのザマだと」

「何？」

声は静かでこそありましたが、そこに深い怒りがくすぶっておりました。

自分の馴染み深い声だけに、余計に響いて感じました。

全身を悪寒が駆け抜けまして、意識が遠のきますが簡単に手放す訳には行きません。

せめて口を、目を閉じようと思いましたかと思うように行きません！

「これはこれは。初めてお目にかかる呪術者殿？俺の部下が無礼を働いた事、このギルムードが代わってお詫び致しますゆえお許し願えませんかな？何せ、ほら。この者はまだまだ若輩者だから世間知らずで、血の気が盛んなのですよ。貴方様だつてかつては覚えがありませんか。ここはひとつ先輩の者の余裕として引いてはくれませんか。コイツには後でよっく言い聞かせますから」

焦りでどうにかなくなってしまいそうなリュームに、先程追い出されたはずのギルムード様が頭を下げてくださいました。

いつの間にか、リゼライさんの横に立っていたのです。しかも笑顔で。

それがまた何とも余裕の表情でして、リュームは感心してしまいました。

ギルムード様は、この緊迫した空気をもともせず優雅に敬礼されたのです。

恐らくこうなる事を予想されていたのでしょうか。

きつとリゼライさんが心配で、影で見守っていらしたに違いありません。

「ふん。その娘、命が惜しくないと見える」

「まま。ここはひとつ穩便に頼みます」

ギルムード様はあくまで丁寧な物腰で接して下さっています。

リュームは顎をそびやかして、見下すようにする誰かさんに怒りを覚えました。

「リゼ！誰彼構わずケンカ売るなっていつつも言ってるだろ？んん、こら？全く危ないったらない。わかった、わかったから！睨むな！」

「・・・・・・・・」

リゼライさんは無言ですが、何とも言えない迫力でもってしてリュームを、頭を叩くギルムード様とを交互に睨み続けていました。

(いい加減に引けば良いものを！もうっ、ギルメリアのバカっ！！)

「す・す・すみません！もう、ご無礼をっ、申しわけありません」

主導権を取り返したリユームは勢い良く、頭を下げた謝りましたよ。

初日からそんな調子で、先が思いやられるったらありやしませんでした。

・：・*：・：・。　　・：・*：・：・。　　*：・。　　・：・*：・：・。　　・：・*：・：・。

その後。精神だけでご領主様を訪ねるといふ無茶をやらかしてから、二日が経過しておりました。

熱もいい加減下がり、平常に戻りました。

もう起き上がったても良い様ね。

確かにリゼライさんは夕刻ごろ、そう仰って下さいました。

ええ。

「飲まない？一応ちゃんと薬草酒だわ」

「いえ、その・・・飲めないのですが」

一応、病み上がりなのですがとも言い出しにくいのは何故でしょう。

戸口に立つリゼライさんの手にグラスが二つ、見えるからでしょうか。

確かに嫌というほど寝ていたので、なかなか寝付けそうにもありませんが。

「そう。じゃあ付き合って」

「同じことではないでしょうか」

「つべこべ言うな」

は！喜んでお供させていただきます！

そんな調子でリユームは寝台から飛び起きたのでした。

酒盛り酒盛り。夜更し夜更し。

何かちよつと楽しいですね。

シエンテラン家であつたならば、絶対許してくれませんもの。

わくわくとお酒に口を付けてみましたが、思い切りむせました。

やはりこの脆弱な身は、受け付けてはくれないようです。

せつかくの美人のお酌なのに、残念です。

ちびちびと舌先で突くようにしながら、次々杯を重ねるリゼライさんに賞賛の眼差しを送りました。

「お嬢さんは気兼ねなく神殿にいるといいと思うわ。とんでもない後ろ盾がふたつ・・・いや、みつつか。も付いてしかも何だこの寄付金という額付きでしょ。しかも意外に才能あるみたいだし、神殿側としたら歓迎する以外ないでしょ」

「三つ？」

「ジャスリート家、ロウニア家、シエンテラン家。ここまで権力者に好かれるなんて、何をやったのお嬢さん？」

「哀れまれただけです」

「それだけで公爵が動くものですか」

「桁外れの呪いのせいではないでしょうか」

「そんなものこの桁外れの寄付金とお嬢さんの才気で充分おつりがある」

何とも力強いお言葉です。

リユームもリゼライさんに惚れてしまいそうです。

リユームがお酒をちびちび舐めながら、そっと窺うとリゼライさんからじつと見られておりました。

「ど、どうされましたか？」

「うん。ああ、もう！悔しいなと思ってさ」

「悔しい？」

「視得ないんだもの。お嬢さんの後ろに守護としてついてる存在が生前は相当の術者だったというのはわかるけど、それ以上は視え^{みえ}ないの。術者として腕がなるわ。依頼は全うするのが主義だから安心してちょうだい」

視たら視たであのザマだし、とリゼライさんは悔しそうに呟きます。

「視るな、おまえごときに視られて堪るかということなのよね」

「すみません。ひい・ひい・ひい・ひい・ひいおじい様が、偏屈の極みで申しわけございません」

どうやら多すぎるらしいので、ひいを前よりひとつ削ってみました。

「そう。見当は付いてるのね。だったら話が早いわ。貴女のご先祖でいいのかしら？タラヴァイエの？ん？いや、違うか。この呪いを

始めたのはシエンテラン家だったものね」

「ええ。その通りでございます。この偏屈ぶりはシエンテランの血のなせる業です」

「貴女、その家とは何の血の繋がりも無い養女じゃなかったの？」

「ところがかつて両家の間に婚姻が結ばれた様でございます。遙か遠く彼方ではありましようが、この身を成り立たせる血の一滴でもあるようでございます」

「複雑ね。要らないくらい、解決の糸口が絡まっているじゃないの」

そついつ割には淡々と、何でも無さそうにリゼライさんは言いました。

ふうんと呟くとまたお酒を注ぎます。

何杯目でしょうか。

「ところで。ダグレスの奴がほのめかしてたけど、手紙のせいで熱があがったんじゃないのかって言ってたわ。別に他人の事情を覗き見る趣味はないから言わなくてもいいけど」

リユーム、またしても思いつきりむせました。

脈絡も無く話題転換し過ぎですよ、リゼライさんっ！

ええ。

「ご領様のお手紙はともじゃありませんが人様にお知らせできるような内容ではございません！」

第五十六話 神殿に一緒にあがった者（後書き）

『噂の二人。』

出すまいか、出さまいか。

悩みましたがやはり出しやばりました、この二人。

リユームはディーナと離れて不安でしたが、同じ年頃の娘さんによくして貰えて

いくらか安心しています。

前途多難なのに。ええ。

第五十七話 神殿で繰広げられる酒盛り（前書き）

酒の肴はもちろん……ですよね。

だらだらと続行中の夜更し中継です。

第五十七話 神殿で繰広げられる酒盛り

酒盛り酒盛り。

夜が更けて行きます。

リゼライさんとリユームは床の敷き布に直に座り込んで、例のシエンテランの文献を覗き込んでいます。

リゼライさんは読めない、文字が頭に入ってこないから、リユームが読む係りをやってと言われましたよ。

まず、分厚い表紙をめくるところこう宣言されていました。

シエンテランの縁の者以外の解読はならずや。

その一文から既に、ギルメリアの口調が蘇ってしまうリユームです。ゲンナリきますね。

(ギルメリアのいばりんぼ ギルメリアは偏屈じいさんになったの
でしよう〜)

何となく、心の中で歌いながらはやし立ててしまいます。

リユーム、ギルメリアが何となく怖くないといいましょうか。

むしろ、親しみこめてお呼びしたい。

リユームの偏屈おじいさま。

そして今は生まれ変わりご領主様の、残してきた魂の一部分という認識です。

ギルメリアがリユームのこの調子を、どうやら苦手としているようだと気がついております。

最後まで説明せずとも、リゼライさんは察してくれているようです。

表情も口調も、痛ましそうにひそめられましたから。

「呪いを受ける者にとって好ましい姿をとって近付くらしいです。人とは限らず、犬だったり猫だったり」

エキ。

でも、あんたリユームに言いましたよね？

シエンテランの怨嗟から守ってあげたのにつて、言ってくれましたよね？

「何か心当たりがあるようね？」

「ありますが、狙われた覚えがありません。むしろシエンテランの怨嗟から守ってくれたように思います」

「何の事が詳しく聞かせなさいよ」

「はい」

リユーム、エキとの契約の話を持ち明けました。

その間も押し黙ったまま、杯を重ねるリゼライさんでしたが、話し終わるとまた言われてしまいました。

「呆れる！！」

「ダグレスにも同じ事を言われましたよ」

「何でここでアイツが出てくるのよ！関係ないでしょう」

「それが無いとも言いきれないのですよ」。リユーム、一応ダグレスの力をこの身に潜ませてるんです。ある意味、契約を交わした間

柄となっておりますよ。期限はリユームの寿命が尽きるまで、です！」

なっ、とりゼライさんが杯から唇を放して、止まってしまいました。

「あなた！ それ、ここでは私以外に言わないのよ！？」

「何故でしょう？」

「神獣レベルの獣と契約してるなんて知れたら、あなた一生ここから出してもらえなくなるわよ。いいの、それでも？」

「まあ！ そうなるのですか。リユーム、ちつとも考えが及びませんでした。気をつけますね。リゼライさんは何でもよくご存知ですねえ！ これからも色々よろしくご指導くださいませ」

リゼライさんに重々しくため息を吐かれます。

前髪をかき上げて、そのまま突っ伏されてしまいました。

「あなた」

「はい？」

「自分がかわいいと知っているでしょう」

据わり切った眼差しに捕らえられ、指を突きつけられました。

「ええ！？」

「イトシした良家の娘が自分を自分の名前で呼ぶな！ 男ウケは良くとも女ウケは最悪だから直せ！」

「はいっ、申しわけありません！ ご不快にさせてしまいましたか、リユ、わたくし、物知らずで申しわけありません！」

「いや。やっぱり、あなたはそのままでいなさいよ。別に女に受け

なくともいいでしょ。少なくとも私は気にならないし。でも、公の場だけは気をつけたら？」

「そうでしょうか？」

「鬱陶しい女の嫉妬なんてほっといて、あんたはそのまんまでいいやいのよ。実際、かわいいんだし。許せるわ」

お許しを頂いてしまいました！

リユーム、このようにはっきり言って下さるリゼライさんに、いたく感心しております。

もちろん、他の皆様がそうではないという事を責めている訳ではありません。

ニーナもディーナ様もいつだって親身になって言葉を掛けてくれましたもの。

リゼライさんの場合、ちょっとやり方は違うようですが、同じようにリユームの事を気使ってくれているのが伝わってきます。

これは、これを相談できるのは、リゼライさんをおいて他にいらっしやらない！

「リゼライさん」

「何よ。改まって」

リゼライさんが面倒臭そうに、ちらと流し目を下さいました。

わあ、痺れます！

「リユーム、リゼライさんを見込んでその、ご相談が、」

「うつわ。勘弁してよ。私が請け負ったのは術に関する項目だけなんだから」

「そうは仰られますが、先程、リユーム宛ての手紙の事をお尋ねに

” い・要らぬ世話を焼くな、リユーム!”

「 だ、そうだから、行くわ。もう寝る」

おゝ待〜ち〜を〜!

そんなリゼライさんに縋りながら、話題を変えてみました。

「ダグレス、お久しぶりですね。何か御用でありましょつか?」

” ” ヴィンセイルがオマエからの返事を心待ちにしているから、様子を見に来たまでだ。どうだ書けたか?”

「そうですね。彼、無事に牢屋から出てらっしゃいますでしょうか?」

縋りついたリゼライさんから「牢屋あ?」と怪訝そうに呟かれま

した。
ええ。牢屋なんですよ、とそんな意を込めて頷きながらダグレスを見つめました。

” ” とつくにな。仕事で雑念を忙殺しておるようだが、そうそう上手く行くまいよ。己の感情は無視できるものではないしな。だから返事をさっさと書いてやれ”

「そう出来るものならばとつくにそうしておりますとも!」

リユーム、くつと唇を噛み締めています。

頬が火照ります。

「なによ」

” ” なんだ” ”

「お二人の知恵をお貸し下さいませ」

人様からの手紙を人に見せるものではないのは、重々承知の上でゴザイマス。

ですから数行だけを見せました。

「いいの？ 見ても」

「少しだけ、お願いします。リユーム、とてもじゃありませんが恥ずかしくて説明できません」

リユーム、上の数行だけが見えるように下の方を折った手紙を差し出しました。

リゼライさんの金髪とダグレスの闇色の毛並が同時に近付きます。

” ” リユームへ。おまえの存在が傍らにないのを不思議に思う。

あの日おまえのまるやかさに触れ……何をする！” ”

あろう事が、ご領主様の口調でダグレスは口に出して読み始めましたよ！

リユームは慌てて手紙をひったくりました。

それと同時に、ゴンツと良い音がしたのです。

リゼライさんが、ダグレスにげんこつをくれたのです。

ダグレスの頭は相当何か詰まっている音ですね。

「アンタ、どつかのおっさんみたいな真似するんじゃないわよ！
しかも声マネまでして悪ふざけが過ぎるわ！」

” ” ふん ” ”

リユーム嬢に謝りなさいよとリゼライさんに怒られて、ダグレスは押し黙ってしまいました。

そんなダグレスに構うことなく、リゼライさんは深く頷きながらリユームに向き合ってくれます。

うつわあ、ダグレス。こんな不器用な獣サマ、初めて見ましたよ。リユームはからかわれた恥ずかしさも忘れて、ぼかんとしてしまします。

「うん。わかった。こんな調子で延々と書いてあるってワケね」

「はい」

「私なんかよりお嬢さんの方がずっと経験豊富じゃない。私に聞くよりも自分に聞いたらどう？」

「新しい助言をありがとうございます」

全く、彼ときたら！

リユームが修行に臨む立場だというのに、ことごとく邪魔をする気なのでしょうか？

そう、問い詰めてやりましょうか。面と向ってではなくて手紙なので強気です。

多分あとで、思い知らせてやるとかいう返信が想像できるので止めておきます。

「彼はリユームの邪魔をしたいのでしょうか？ ふと、そんな気持ちに襲われる手紙です。こんなにもイケナイ事が並べ立てられた文章

に、色んな意味で心が乱れます」

「いいんじゃないのかしら」

「はい？」

「アンタはこの神殿に操を誓った巫女として、一生仕えるワケじゃないでしょ？　むしろ彼としてみたら、不安なんじゃないのかしら」
「不安ですか？　ご領主様が？」

いつだって自信满满、不安も憂いも垣間見せもしやしませんよの彼に、その言葉はひどく似つかわしくありませんでした。

「普通はそうでしょう。アンタ、思い切りズレているし。一人で勝手に暴走して自己完結した拳句、一生神殿で巫女として世間とは関わり合いになりませんかと言いだしそうな勢いだもの」

「な、何ゆえ、そのようなご判断をなされるのですか、リゼライ師匠」

顔ですか！？　顔にそう書いてあるのですか。

己のあけすけな、取り繕うという事を知らない顔に両手を当てました。

それかりゼライさんは昔話に出てきた、人の心を読むという魔女の末裔まっえいさまでしょうか。

「誰がセンセイだ。仕事柄、ちょっと話せば解るわよ。アンタみたいに自分にどこか引け目を感じてる子は、自己完結して己を隅に追いやりがちだもの」

「似たようなお言葉をルゼ様からも賜りましてゴザイマス」

「それはこの手紙を送りつけた主による影響も大きいと見るけど、どうよ？」

「どうもどうも……っ！」

くつとリュームは思わず唇を噛み締めて、俯きました。

何ともはやと表現するしかない七年間の間柄は、またしても呆れ
ると罵られること間違いありません。

「まあ勝手にやってなさいよ。アホらしい。充分上手くやってるん
じゃないの？ あんた達、二人の事は二人にしか解るものですか」
しっしつと追い払うかのような仕草で手をひらつかせながら、リ
ゼライさんは残り僅かな杯を呷りました。

「リゼライさん」

「それにそのアンタのご先祖の書だって、私には恋文にしか思えな
い」

「恋文、ですか？」

「独り言のようであって、愛しい者に宛てた呟きだわ。愛しいもの
にしか読めないようにしてあるのがその証拠よ。ただ彼なりの表現
が呪術の成り行きと展開であるだけで、最終的には愛しい者の幸せ
を願っている」

何という新しい物の見方でしょうか。

リュームは感激してしまいました。

やはり何もかもにおいて師匠とお呼びしたいです！

” ” 珍しいな。お前の口から呪術に関すること以外が聞けるとは
思わなんだ” ”

ダグレスが、からかうような口調で言います。

あゝあ、よせばいいのにダグレスつたら。

もうちょっと黙っておけば良いのに、ダグレスつたら。

リゼライさんは静かに一瞥いちべつくれただけで、すぐにそっぽを向きま

した。

『来たれ、デユリナーダ』

リゼライさんがため息と共に、リユームには聞き取れない何かを呟いたと同時に場の空気がうねりました。

隙間風が入り込んだかのような感覚に目を見張れば、そこにあったのはこれまた綺麗な綺麗な獣様です。

すんなりとした長い毛並は白に近い銀色に輝いており、見事な光沢です。

まるで月光をまとっているかのように素敵です。

首筋はすんなりと長めで、瞳は黒く切れ長であります。

静かに現れた獣様は一礼するかのように瞳を伏せると、長い首を下げました。

リユームもつられて下げます。

何て品のある獣様なのでしょうか！

リユームはぽかんと見惚れてしまいました。

ダグレスは不満そうな唸り声を牙の間から響かせます。

デユリナーダと呼ばれた獣様もそんなダグレスに一瞥くを見ると、すぐさまリゼライさんを背に庇うように立ちはだかりました。

” ” ふん。新しいオマエの聖句の徒か。何にせよ、我には劣るがな” ”

「デユリナーダ。悪いんだけど今夜は付いて欲しいの。変なちよっかい掛けられるのには、もうウンザリしてるから。じゃあね、リユーム嬢。おやすみ」

” オマエは！ オマエは！ オマエは！”

ドカドカ、ドカドカと彼の蹄が床を打ちます。
間違いなく、ご近所迷惑です。

何ですか何ですか、もおう！？

” 我が獣とはいえ、人型にもなれるのをよもや忘れたとか言い出すまいな！？ これだから鳥頭は腹立たしいのだ！ 我を何だと思っているのだ。そこらの愛玩動物か何かという認識しかないのか！”

「え？ 違うのですか？」

またしてもリユーム、体当りされて身体が吹っ飛びました。

第五十七話 神殿で繰広げられる酒盛り（後書き）

「女同士の語らいの時間が羨ましい、どこかの獣サマ」

仮タイトルです。

前書きの……部分には、があるずとーく（人の恋バナ。）とでも脳内でお入れください。

女同士、出会ったばかりでも気があっている様子です。

リゼライは性格がキツツいので、リユームやディーナくらいボケてないと衝突は免れません。

それはそれで良しとしつつ、女のコ同士の会話に脈絡もまとまりもないもんだと、常々感じています。

そのくせ妙に深いから、なかなか気が抜けません。

領主の書いた手紙はあまりにも桃色オーラ過ぎ、恋ばなっか生々しい事になっている模様ですよ。わぁ〜お。

では、また！

あんまり間、空けない様にがんばります。

お付き合いありがとうございます！

第五十八話 神殿で問われる覚悟の程（前書き）

闇ふり払えますように リューム！

作者も応援するくらい、君はおぼつかない。

第五十八話 神殿で問われる覚悟の程

神殿に上がって早七日目の昼下がりを迎えております。
本日の大仕事と呼んでもいいかと思われます。

リユームこれから、巫女王様みじまひにご挨拶するのでございます。

こうしてお会いしてご挨拶する事が決定したとリゼライさんから
告げられた時から既に緊張しました。

巫女王様。この神殿に集う巫女達を束ねる、最高位に座するお方
です。

祭事祭礼の全てを取り仕切り、中央政権とは一線を隔するものの
事実上、陛下に次ぐこの国の権力者でもあるのです。

お忙しいお方であらうのですが、必ず巫女として上がった者
達とお話されるそうです。

あまり格式ばったものではないから、そんなに畏まらなかつたつて
いいと言われたって無理です。

畏まり切るべく、言葉使いからご挨拶の仕方から練習しましたと
も！

通されるお部屋は巫女王様の私室らしいのです。

確かに公で使用される謁見の間よりは、畏まらずともいいかもし
れませんね。

そんな風に自分を慰めてみますが、やはり小刻みに身体が震えま
す。

リユーム、今まであまりお出掛けした事が無かったものですから、知らない場所でもかもこんなにも格式高いとなると緊張します。

ギルムード様に付き添われて一歩お部屋に入れば、白い巫女の衣装の女性がにっこりと微笑んで下さいました。

ふっくらとしたお顔立ちに優しい笑みを浮べて、リユーム達を手招きして下さいます。

確かに儀式めいた造りのものは一切無く、いたって品の良い女性のお部屋でした。

くつろぎやすそうな腰掛にクッションが置かれ、テーブルにはお花が綺麗に飾られています。

まるで生活は感じられなくて私室と言うよりは、客室のような雰囲気ではあります。

「いらつしゃいな」

鳶色の瞳が細められます。

髪の色もお揃いの鳶色で、少しくせがあるのか後れ毛がくるん巻いて頂にかかっています。

全体的にふくよかな女性です。

それが柔らかくもあり、備わった威厳というものが合わさって、優しくも厳しいお母様のような雰囲気です。

「初めてお目にかかります、シエンテラン家より参りました、ジ・リユームと申します」

「あら。あの忌々しいジャスリート家の紅孔雀じゃなかったのかしら？ それにしては随分毛色が違うようだけれど」

巫女王様から放たれた言葉が突き刺さります。

それと同時に疑問符も浮かびます。

ジャスリート家の紅孔雀？ しかも忌々しいとまで言われる存在を、信じられない気持で思い浮かべました。

(ディーナ様の事でしようか?)

惑いそのまま顔色に表れていたのでしょうか。

ギルムード様が苦り切った笑みを浮かべておられます。

「姉上。お戯れも程ほどになされよ」

「ほほ。もちろん、冗談よ。ようこそ神殿へ。貴女を歓迎いたします。カラスの称号を頂くお嬢さん？」

ち、ちっとも歓迎されている気がいたしません！

「い、い、至りませんで、申しわけございません」

へどもどと言い淀みながら頭を深々と下げました。

「あら？ 何故、謝るのかしら。私は貴女を責めたのではなく、褒めたのだけれども伝わらなかったかしら」

「ええ。微塵も伝わっていないようですよ姉上」

「そう。このコモカラスの称号が重荷だったようね。そうでしたか、リユーム嬢？」

「はい」

素直に頷きました。

「それならば申し訳ない事を言いました。だけど覚えておいてください。カラスの称号は、術者として長けている者に対する誉れ名だつて事を。確かにそこには軽い嫉妬も込められているわね。もちろん、私も」

そう言いながら巫女王様は優雅に手招きされます。

おいで、おいで。

そう真っ白い蝶々が舞うような仕草に誘われるように、ふらふらと巫女王様の御前に進みました。

そのまま言葉ではなく仕草だけで、椅子に腰掛けるように勧められます。

「さようでございましたか。そんな風に言われた事が無かったものですから、驚きました」

一礼してから腰を下ろし、溜め込んだ呼吸と共に吐き出しながら答えました。

「ザカリアも貴女を褒めませんでしたか？」

「……あつ、その、そういうえばそうでした。すみません、今ひとつ実感が湧かなかったものですから、ただ慰めて下さっているのだと思っていました」

「貴女は自分の容姿を引け目に感じてこられたようですね。他者の褒め言葉を上手く受け止められないようだわ」

うつわ。見抜かれていますよ。

ルゼ様といい、リゼライさんといい、巫女王様といい何て言うかそのお。鋭いのでしょうか？

それ以前にリユーム、誰が見てもそんな引け目感を丸出しの卑屈な雰囲気なのでしょうかね？

それはそれで問題ですね。とほほ。

「久しぶりに黒髪の娘をこの目で見ました。あの娘以来だから、三十年ぶりくらいかしらね？」

「そうですね、姉上。甥っ子達も黒髪だが、少女のカラスはこの国に一握りしかおりませんからね」

ギルムード様も腰を下ろしながら、頷かれます。

「そうなのですか。三十年ぶりですか」

「ええ。そうなの。ザカリアの奥方よ。彼女も類稀なカラス娘だわ。彼女こそがこの座に相応しいとも囁かれていたくらいに優れた術者気質だったのよ。貴女もそうなのでしょう？」

「えっ！ 私は何も優れたところはありません」

驚いて大きな声が出てしまいました。

「謙遜してらっしゃるといふよりは、本当に特別な事と思ってらっしゃらないようですね。貴女の歌声は女神様からの祝福賜ったものだと言われているんですよ。それにあのザカリアもルゼ公爵も、ただ事では無いと評価していたわ。あの何もかもに肥えた二人が世辞でそのような評価をしない事を、私は長い付き合いで知っている」

「恐れ入ります」

「ふふ。ところでリユーム嬢」

「はい？」

面を上げると真剣な眼差しとぶつかりました。

澄んだ鶯色の輝きは強く、何かを見極めようとしているようです。その前に晒されてはどんな嘘も真も、すぐさま見抜かれてしまう事でしょう。

「貴女は呪われてこの聖域である神殿に保護されたのだけでも、その呪術を用いた張本人が貴女のお義兄様……婚約者殿だって言うのは本当なのかしら？」

「はい。事実でございます」

「そう。報告及び調査の結果によると、シエンテラン家は代々生け

贅を差し出した上で繁栄してきたようね。酷な事をする」
「……仰るとおりでございます」

リユーム、何とかそう答えるのが精一杯でした。

「それが事実ならば神殿に属しない者が独断で闇なるものを解き放った事、見捨て置けない。しかるべき処罰の対象となる」

しかるべき処罰。

その言葉に一瞬呼吸が狭まりました。

緊張からではなく恐れから、身体が本格的に震え上がります。
罪を犯したものがどのような処遇を申し渡されるのか何て、想像もつきません。

ただ、栄光の道を歩むべきあの方には相応しくない道なのは確かでしょう。

「義兄を処罰されるのですか？」

「そうね。本来ならば資格も無く人を貶める呪術を用いた事、厳罰に値するわ。むしろ当然の事と罰してやりたくはない？」

「いいえ！」

リユームは勢い良く立ち上がり、不躰ながらも巫女王様を見下ろしました。

「いいえ！ いいえ！ いいえ！」

そんな気持を込めて必死で頭を横に振り続けました。
静かな瞳がその様子をじっと見上げてきます。

「ならば、この義妹も同じ罪で問われましょう。これはわたくし自身が見た事でもあります」

「あらまあ。そうなの？」

「はい。深い深い部分で」

胸に手を当てます。

誇らしげに笑ったシュ・リユーカは今、ここで眠っているはずなのです。

「その覚悟の程を問うつもりで貴女に問い掛けました」

「覚悟の程ですか。既に幾度も問い掛けられ、自分自身にも問いかけ続けております」

正直なところ、その度に揺らぎ立て直し続けている始末です。

浅はかな覚悟を確たるものにするべく、こつやつて皆様に問い掛けられ続けているのだと気がついております。

「そのようね。答えはもう出ているようだけれど、どうかしら？」

「はい」

挑戦的な眼差しに見据えられ、リユームは呼吸を整えました。

この神殿の聖なる領域に満ちた清浄なる大気のおかげか、リユームやたらと調子が良うございます。

「ご領主様の元へと精神体だけで訪れた後も、たったの二日ばかりで回復いたしましたもの。」

それだけ、ここは力が発揮できる場なのだと思います。

もしくは備わった力を引きずり出し、否が応でも遺憾なく揮^{ふる}えるように仕向けられた場なのかもしれません。

なんて御あつらえ向きの素敵な所なのでしょうが、神殿って！

諦めてなるものかと込めて歌い上げました。

何気に巫女王様はからかうようでありましたから。

貴女ごときに闇に立ち向かう覚悟何ておありになるの？

貴女みたいな娘がどうやって闇に立ち向かおうって言うの？

巫女王様のお言葉は、リユームの感じ取った言葉で変換させていただきますれば、そのような意味合いになりました。

ええ！ 全くもって仰るとおりでございます。だから、何だと言うのでしよう！

少し反抗心が沸き起こったのもまた確かなのです。

何を仰いますやら。見ていて下さいませよ、と受けて立ったままでございます。

力を振り絞り過ぎたせいか、ぜえはあと呼吸が乱れました。

我ながら少々情けなく感じながらも、不敵に笑って見せました。

リユーム、強がりには得意中の得意なんですの！ それもお披露目です。

対する巫女王様も嫣然えんぜんと笑われました。

何と妖しくも艶やかでありましょうか。

敗北感に苦しみながらも、思わず見惚れてしまうのではないですか。

「聞いた？ ギルムード。この子は二度と神殿より他の地を踏ませ
てはならないわよ」

油断なら無いから、と付け加えられます。

「姉上。リユーム嬢が怯えています」
「あら。あながち冗談でもないのよ」

笑えませんが、巫女王様！

リユーム、すっかり恐れをなしてその場から走り去りたくなりま
した。

何とか一歩下がっただけで済んでますが、それも時間の問題です。
そんなリユームを眼差し一つで、その場に縫い止めるのが巫女王
様です。あわわ。

「リユーム嬢。貴女には闇ふり払う力があると見込んで、祭典時の
祝福の歌姫に抜擢します。そこで貴女はこの国に女神様の祝福を称
え、豊穰を願う歌を奉納してちょうだい。その時こそが、この闇を
終わらせるまたとない機会となるわ」

「喜んで！」

びしっと姿勢を正して、勢い良く右手を高々と挙手しながら答え
ておりました。

謹んでお受けいたしますと膝折るのが淑女でしょうが、そこはリ
ユームなんでお許しください。

第五十八話 神殿で問われる覚悟の程（後書き）

「問われるたびに」

揺るがなくなるものではないですか？ 覚悟って。実際言葉に出して宣誓せざるを得なくなるからでしょうかね。

巫女王様〜ちよいとイジワル〜。

気に入った子には特に。

そして結構口が悪い。

中味は結構男前です。

第五十九話 神殿に集った光と闇（前書き）

深まっ て行く友情と 。

第五十九話 神殿に集った光と闇

闇ふり払い給え 我らが光

「あんた。歌っている時はまるで別人ね。神がかり的だわ」

「どちらもリユームでございますよ」

「差がありすぎる」

お褒めに預かり光栄です。

神殿の中のホールの一つで、リユームは祭典で歌う曲の練習をしています。

さすが聖域です。

この清らの空気はいつもよりも呼吸がしやすく、歌声も遠くに伸びる気がします。

(あの方にもこの歌声よ、届け。)

そんな祈りも織り交せて締めくくる我が調べなのです。

かしこまったお辞儀付きで、一曲歌い終えました。

あらたまった空気はそこまでで、リゼライさんにえへえと笑いかけます。

「本当に差がありすぎる」

「じ丁寧にありがとうございます」

「褒めてるけど、褒めてないから」

「リゼライさんは素直でいて、素直じゃないですね？」

リゼライさんの上目使いの眼差しを、真っ向から受けるリユームです。

パンツ　パンツ　パンツと重みのある拍手が響きました。

「やあ、リユーム嬢お久しぶり。相変わらずお見事だね。神殿全体に響く、響く！」

いつのまにかリユーム達のやり取りを覗いていたのでしょうか？
気軽な口調で手を叩きながら、明るい茶色の髪の彼が進み入ってきました。

親しみやすい笑みを浮べた彼は、もしかしたら生身で会うのは初めてかもしれないが。

「クレイズ！」

「おー、リユーム嬢。久しぶりー。元気そうで何よりだね」

大またで近付き、あつという間に距離を縮めた彼が見下ろしてきます。

「なあに？とつくに知り合いなの」

「はい」

「なー？」

にこにこにこにこ、お互い笑み交わしているとリゼライさんから、いい加減にしなさいよと小突かれました。

「さて。リユーム嬢。晴れの日に対応しい楽器の名手陣を紹介しようー！」

「ありがとうございます。それはそうとして、また嫌な感じの笑い
ですね、クレイズ」

少しばかり警戒してしまいました。

何か企んでいるというよりも、これから面白いものが見られそう
だと楽しんでいるようでしたから。

「ははは。気のせいだよ」

「女の勘をみくびらないで下さい」

「ははは。何、俺すごい信用無いのな？」

思わず及び腰で警戒しつつ、クレイズの持ち上げられた唇の端を
窺いました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

「クレイズっ、アンタは勝手に先に行くんじゃないわよ！」

もつと怒りながら巫女装束の長い裾を持ち上げて、急ぎ付いて
きたらしい女性の声に耳を疑いました。

ええ！？

クレイズがにんまりと笑います。

彼とよく似た明るい茶髪に、怒ってはいながらも親しみやすい顔
立ちの彼女は間違いありません。

リユーム、一瞬驚きのあまり何もかもが止まってしまいました。
次の瞬間に上げられた声で我に返りましたけど。

「……っ、リユーム様ああ!!」
「ニーナっ!？」

駆け寄ってきたニーナが、抱きついてきてくれました。
頭を何度も撫でてくれ、リユームの存在を確認しきったのか、今度は両手をしっかりと握られます。

「リユーム様！」

「ニーナ！」

「リユーム様。このニーナも微々力ながらお役に立ちたくて、来てしまいました」

「ニーナが居てくれるのなら心強いです」

お手紙でのやり取りは欠かしていませんでしたが、こうやって実際にニーナの声を聞いて感激のあまり涙ぐんでしまいました。

その後につき従うように続いた大きな人影に、こっそりと視線を上げました。

目が合うと身体の大きな彼は、頭を下げにご挨拶くださいます。
重みのある栗色の髪に深い灰色の瞳の、物静かな雰囲気の際はニーナの旦那様なのです。

「このニーナ、政略結婚しておいて良かったとこの時ほど思ったこととはありません！」

どう答えたらいいか困りました。

ニーナがどのような運びでここまでやって来てくれたのか、今の言葉で大体解りました。

後ろで控えているニーナの旦那様の視線が痛いです。

「お久しぶりでございます、リユーム様。この度の祭典の際、フィドルの奏者を務めさせていただきます。よろしく願いいたします」
「こちらこそよろしくお願い致します、シグレル様」

「は。どうか妻同様、呼びお捨て下さいませ。リユーム様……妻が主従も弁えず不躰な態度を取ることをお許し下さい」

やんわりと。しかし、きつぱりとたしなめられたニーナはうな垂れながら、ゆっくりと手を放そうとしました。

リユームはそれを引き止めて、いったんぎゅっと両手を包み込んでから放さずに繋ぎました。

にっこりと笑いかけると、しょんぼりとしてしまったニーナの表情がいくらか和らぎます。

「ではシグレル、さん。ニーナもよろしくお願い致します。ニーナもフィドルを演奏できたのですか？ リユーム、知りませんでした」

ニーナは困ったように首を横に振りしました。

「姉さんに楽の才は期待しないほうが良いよ、リユーム嬢」

「クレイズ。アンタにだって無いでしょう」

ニーナがからかうクレイズに言い返してから、口調を改めてリユームに向き合ってくれました。

「このニーナ恐れ多くも巫女様方と一緒に、手鈴担当つしんその一でございます。ですが気持の上ではリユーム様の歌を盛り上げるべく最善を尽くします！」

「ええ。歌いたいです。この命のある限り、響くものがあるはずですよ」

それが例え闇に吸い込まれ行くものであろうとも、闇であっても

何でしょう？この不穏な空気は？
そう思い振り返ってみました。

ギルムード様を先頭に、後ろに二人の巫女のお嬢さまに付き従われて入ってくる人物が目に入ります。

リユームの全てが止まりました。

鮮やかに飛び込んできたのは、かのお方のお姿だったのです。
この胸がお側にと切望する、ただお一人のお方なのです。

眩い金の髪がホールに差し込む光を浴びて、ますます輝かしいものになっております。

常緑の瞳から放たれる鋭い光は、まっすぐにリユームを射抜いております。

幻覚でしょうか。

いえ。幻にしては威圧感がありすぎますでしょう。

「ご領主様」

そう先に礼をとったのはニーナでした。

続いてシグレルさんも、軽く会釈をされました。

やはり生身の彼のようです。

それにしてもこの身を包む寒気を、何と説明すればよいのでしょうか？

「こちらのヴィンセイル殿にも闇なるものが迫り着ておりますからな。こちらの聖域で身を守られるのが得策でしょう。そういつわけ

です」

呆けるリユームに言って聞かせてくれるように、ギルムード様がご説明くださいました。

ああ、そうでしたとリユームは納得しました。

ご領主様はきつと闇をまとう部分もおありだから、それをリユームは感知して寒気を覚えたのかもしれない。

ええ。きつとそうでしょう。

ご領主様の目を通して、闇はリユームを見ているかもしれません。

「お久しぶりでございます、ご領主様」

声が引っくり返りそうになりながら、何とか挨拶をします。

「……久しぶりだな、リユーム」

じつと見つめられます。

「ご領主様です！ ご領主様です！ ご領主様なのです！」

このまま、ずっと会わないまままで終わるかもしれないとすら思っていたのです。

リユーム、何だか恥ずかしくて俯いてしまいました。

巫女の衣装を掴んだり、放したりしてしまいます。

本当は駆け出してもっとお側に寄りたいたいのですが、人目もありませんね。

そこは弁えて大人しくしております。

（良かった。最後の戦いに臨む前にこうしてお会いできて）

しくじればリュームの命は危ぶまれるでしょうから、彼に会うことも無く逝かねばならない事態に陥る事でしょう。
しかし。

闇がふり払われたらふり払われたらで、彼のリュームに対する執着もふり払われるかもしれないのです。

この呪いこそが、リュームとご領主様を繋いでくれた絆でもあります。

その絆が絶たれる事をも意味するのは、頭では理解しております。苦しいくらいに縋りつきたいと願う、この身勝手な思いに身も心も囚われそうになります。

それは執着というものでしょう。

だって。

この呪いがある限り、幾度生まれ変わろうとも彼の側に在れるのです。

その絆無くしては寄り添う事すら許されなくなるかもしれないです。

例え繰り返し繰り返し、添い遂げる事が出来ないとしても。

その度に身籠ったまま、生まれることの無い命と共に闇に還る事になったとしても。

それはそれでいいとすら思ってしまうのは、リューム、間違っておりますでしょうか？

本当はこう言い出してしまいたい自分にも……気が付いています、デス。

『ご領主様。やっぱり闇なんてふり払わずともいいではありませんか？』

後三年の命が何だつて言うのでしょうか？

その後もまた必ず出会えるとわかっているのなら、リユームは安心して微笑みながら目蓋を閉じる事でしょうよ。

いけない。

これこそが闇の囁きに他なりません。

彼の魂をずっとシユ・リユーカーのものにしてしまいたい。

呪われたまま、彼女もまた死の間際にそう強く願ってしまいました。

それがまた新たな闇を生み出したのです。

繰り返されるたびに幾重にも絡め上げられたであろう、連なる鎖を外さねばならないのです。

闇はふり払われたくなどないのです。

闇もまた人恋しくて、その光に縋るのです。

ふり払われてなるものか、と。

ぼんやりと彼を見るとでもなく見ていると、己の闇に囚われてしまいそうになります。

その泥濘むかるみにはまり込みたい等という願望すら闇のなせる業ですか？

「さて。ご領主殿も姉上と打ち合わせがあるからな」

無言のまま軽く挨拶をしただけで、一向に動きを見せないご領主様にみんな注目しております。

その状況を見かねたのかギルムード様が軽く咳払いをすると、場を取り繕って下さいました。

「リユーム嬢、アレがあんたの婚約者？　なんて言うか、アレね。」
ため息と共に沈黙を破ったのはリゼライさんです。

「ええ……。アレなんです」

皆まで仰らないで下さいませ。

リユームのそんな内心を汲んで下さったのか、リゼライさん一同
皆さま再び無言です。

物をはっきり言うリゼライさんが、流石に言い淀んで下さいます
のがかえって、いたたまれません。

「わたしの」「俺の」「私の」

「」　事を睨んでいきやがった。「」

リゼライさんとクレイズとシグレルさんの声が綺麗に被りました。

ええええええ！？

申しわけございません、申しわけございません！！

リユーム、平謝りです！

第五十九話 神殿に集った光と闇（後書き）

『呪いに感謝を寄せてみる』

仮タイトルでした。

途中で 『深まっていく友情と嫉妬。駄目じゃん』 になりましたけど。

メンバー初顔合わせといったところです。

本当はもっといいますが、この辺にしておきます。

問題児いますね、一人。

それでも団結して闇を抜かないとね、貴方たち。

気分は体育祭準備中です。

衣装合わせやら、係り決めやら、意見も足並みも揃わないわ、買出し班戻ってこないわ、てんやわんやの祭典準備です。

次は嫉妬に狂ってるお人のお話です。

閑話　く夫は優秀な楽師く（前書き）

「一応15禁だったんだなという事を踏まえてお読みくだされば幸いです。これでも年若くピュアな若人^{わこうど}たちが読まれても不快にならない表現を選んだつもりなので、ご容赦くだされればありがたいです」　ニーナより。

閑話　　く夫は優秀な楽師く

皆様、皆様様、リユーム様をお願いいたします。

どうぞ、どうぞ、お力添えくださいませ。

女神様、女神様、どうかリユーム様の闇を晴らしてください。

事実を弟から聞かされた時、恥も外聞も己の自尊心もへったくれもなく、迷い無くシグレルに頭を下げていた。

神殿で立場あるという彼に心の底から縋った。

何だって貴方様の言うとおりに致しますから、お情け掛けて下さいませってね。

勢いに押されてくれたらしい月一夫が計らってくれたおかげ様で、まんまと神殿内に巫女として上がった時は本気で驚いた。

だって、ワタクシめときたら人妻ですよ！　いいんですか！

そんな疑問は口にせず、喜び勇んでいざ神殿へ。

やれ、巫女の衣装がどうなの。

（黙って言われるままに大人しく身を清めてから、衣装の裾の刺繍の意味などをとくとくと聞かされた。）

やれ、シグレルの上司だの部下にご挨拶だの。

（大人しく従順で愛想の良い妻を必死で演じたつもりだが、どうだろうか。あのギルムード様とやらの笑顔は噴出す一歩手前のように思えた。）

やれ、クレイズの……以下同文。

（しっかり者の姉面は演じるまでも無く、最早身に付いたものであるのでこちらは楽勝と思われる。）

このまま行くと今日はもう、日が暮れてしまつてはいないか？

シグレルにも弟にも腹が立った。

さつさとリユーム様へと案内してくればいいものを、もつたいぶるから本気で暴れたくなつた程だ。

ワタクシの強い忍耐力も限界です。

そんな時に聞こえてきた歌声は、間違ひようも無くリユーム様のものだった。

声を頼りに駆け出そうとしたら、シグレルに腕を掴まれて叱られた。

「勝手に行動しないと約束したはずだが」

「はい。申しわけありません」

我ながら子供みたいだと思つたから、謝つた。

その割に身体は駆け出す気、満々で一向に改まつちやいなかったのだからため息を付かれた。

夫には月一回会えればいいくらいなのに、リユーム様には一ヶ月近く会えないとこの様だった。

何せ七年間、ほとんど毎日お会いしていたのだから当たり前の話である。

二年やそこらの夫が敵うはずもない。

お互い主人を一番に優先する、って言い合って結婚したじゃないか！

そんな焦燥が積もりに積もったせいなのか、安堵で口まで軽くなつたせいなのか。

やっと会えたリユーム様に抱きつきながら、ワタクシはとんでもない事を口走っていた。

必死でありにも必死すぎて、自分が何を口走ったのかなんてその場では気がつきもしなかった。

それだけ、本心がぼろりと零れちまいましたとでも言いませうか。

『これほど政略結婚していて良かったと思っただことはありません！』
きっぱり、言い切ったですよ。この口は。
だってそれは本心なのであります。

あああああああ！！

口は災いの元。

「ニーナ」

ハイ。

来なすつた！

二人きりになったのを見計らったように、シグレルが口を開いた。

振り返ったらワタクシめはいないんでやんの　！　残念賞！

逃げるに限る。

そう判断したわたくしめの歩調は慎重に落として行ったのに。慣れない神殿ではこちらが地理的にも不利でした。無謀でしたよ。気付かぬ内に夫と歩調があわないせいで、はぐれちゃってとかいう言い訳まで完璧だったのにな。

「ニーナ。ちゃんと付いて来れないなら、手を繋ぎますか？」

あろう事か追い詰められたよ！　迷ったフリして距離を取ったら最後、ここどこですか？

ああ、なんか人氣が無いですねってな背の高い庭木の囲いの辺りにですね。

笑って誤魔化そうとも考えたが、笑えないですよ。この状況。寒すぎる。

シグレルは本気で怒ると敬語になるのだ。

恐らく女に対して声を荒げてはならないという気使いがあるらしい。

そのため怒りのあまり語尾を荒げぬように、自分を抑えつけるかのように丁寧な口調になるのだ。

そこら辺は過去に何度（も）か怒らせて学習済みである。

これは先手を打って謝り倒したほうがいいのかもしれない。だが、それも癪に障るのでとりあえず相手の出方を待つことにした。

シグレルは背が高い。クレイズよりも高いくらいだ。しかも割合彫りの深い顔立ちなものだから、西日が当たって影になり彼の表情は極めて険しい物としてワタクシの目に映る。どこかのご領主様と、さぞや良い勝負になるだろう。

「私と結婚して良かったと今日初めて思ったのか？」

「ええと。まあ。いやゝそんな事ないですよ、シグレル」

「……。」

シグレルがじつとこちらを見下ろしてくる。

無言でもっと具体的に言えと促がされたようなものだ。

視線を泳がせながら必死で探した。

彼のいいところゝ結婚してよかったなと思ったところゝ。

それは。

変わり者の妻を自由にさせてくれる所に他ならない。

「見捨てずにいてくれてありがとうございます、シグレル。それに楽師の件も引き受けて下さって、心強いです」

これでどうだとばかりにぱっと表情を輝かせ、両手を広げて言ったが彼の表情は微動だにしない。

「……。」

「……。」

お互いに無言のまま、夕日に照らされた。

沈み行く太陽がワタクシの気持ちの急下降を代弁してくれているかのようだ。

それが口調にも現れる。

「シグレル。あの貴方の気が済むまでちゃんと謝ります。だから、あんまり怒らないで?。」

おずおずと顔色を窺うように、上目使いで彼を見た。

その後、シグレルに搔つ攫われて泣きながら謝らせられましたとも。

『どこで』とか『どのように』等と訊かないでいただけたらありがたいです。

そもそも答えようも何もあつたもんじゃありません。

ええと。一応これから神殿の祭事に臨もつて身の上。禁欲という二文字は大事なんじゃないでしょうかね?

そんな訴えごと、彼に飲まれましたよ。

閑話 く夫は優秀な楽師く（後書き）

『早いUPと思ったら やっぱりか』

ちよ、おまつ、確かに嫉妬に狂ってる人が出てきてるけどさ！

そんなツツコミもバッチ 来い。

相変らずの独りよがりの「暗に何かを言っている。」が、好きなワタシです。

優秀な楽師が爪弾くと妙なる調べを奏でるのは、何も楽器に限りません とか言いたいらしいですよ。

小話もUPしたしで満足です。

さてさて。

次は本格的にどうしょくもない、あの方の登場です。

リユーム、がんばって。（丸投げ。）

第六十話 神殿から見下ろす広場（前書き）

祭典準備完了まで あと わずか。

第六十話 神殿から見下ろす広場

巫女王様に呼ばれ、ご領主様と二人で改めてお伺いしました。

「グインセイル殿には剣舞を奉納してもらいます。彼もまた穢れを被わねばならない身ですからね」

「二人で始めた事だったのだろうか？ だったら二人で終わらせるのが筋つてもんだ。ま、俺も奉納試合の際には相手役として上がるがね」

ギルムード様も一緒にいます。

リユームは頷きました。

二人で始めたこと。確かにその通りです。

その事もそうですが、あの黒い獣サマからも同じような事を言われたように思います。

ぼんやりとそんな風に目の前の騎士様であらせられる、ギルムード様を見上げました。

「お？何ですか、リユーム嬢。このギルムードの顔に見惚れてくれていると自惚れていいのですかな？」

にこやかにいたずらっぽく、ギルムード様が片目をつぶって見せます。

（おひげ、無かったら。目が紅かったら。ダグレスの人型に似ている気がいたします）

そんな事を告げるわけにも行きませんので、曖昧に微笑むしかあ

「はい」

巫女王様に手招きされて、日の差し込む大きな窓際に歩み寄りました。

ご領主様も自然と、リユームに続いたようです。

背後に感じる圧力でそう判断いたしました。

不機嫌のカタマリ様が後ろにいと、やはり緊張してしまいます。

「お義兄様はそちらでお茶でも飲んでいてくれるかしら？
随分、警戒されてお疲れのようだから」

そう、巫女王様がきつぱりと遮られました。

有無を言わせず。

そんな威厳を感じさせる一声でした。

そして何気に彼を、リユームの義兄呼ばわりです。

何かしらの含みを感じさせる言い回しでありますね。

流石のご領主様も大人しく従うようです。

頭を下げると、そのままお付の巫女様に促がされるまま椅子に腰掛けました。

そつの無い動きで、巫女様たちはお茶を淹れて下さいます。

辺りにふんわりと心地よい、ほのかな甘みと苦味が入り混じった香りが漂います。

良い香りです。これでいくらか不機嫌虫が治まってくれますように！

リユーム、彼の出方をドキドキしながら見守ってしまいました。

「申し訳ない」

おお。一応、ちゃんとお礼は言えるようですね。良かったです。

ご領主様ともあるう御方が、いついつまでも他人サマに礼儀知ら

ずなマネを続けるようなら、リユームとて考えがありマスからね！
ちよつと勇気が必要ですが、実行に移しますよ。

リユームだって、負けずにムスムススツとしてやりましょうぞ。
そんな圧力が彼に届いておりますように。

澄ましきつたお顔でお茶をいただくご領主様の横で、ギルムード
様がにこにこしながら見下ろされておりました。

リユームと目が合うと、また片目を閉じて微笑み掛けてくれました。
た。

おそらく、任せておけという事でしょう。

リユームは安心して、巫女王様に向き合いました。

「さ。こちらにいらしてみてね」

促がされるままに、大きく開け放たれたバルコニーに踏み込みま
す。

全身で光を受け止めるかのような感覚に、一瞬くらりとしてしま
いました。

「……どうかしら？」

「え、と？ はい？」

あまりの眩さに、巫女王様のお言葉を聞き逃していたようです。
慌てて返事を致します。

「祭典時はここで歌ってはどうかしらなって、お尋ねしたのよ。ど
うかしら？」

「えっ……！」

あの他よりほのかな光を放つ場所は、花びらをいくつも重ねたようにも見えます。

何て綺麗なんでしょう！

ふと振り返ると巫女王様は固まったように動きを止め、ただ瞳を見張られておりました。

その瞳はまっすぐにリユームを見据えております。

嬉しくなつてはしゃいだ声を上げてしまったのが、いけなかったでしょうか？

「あの、巫女王様？」

怖々声を掛けると、はっと我に返ったように巫女王様は首を横に振りました。

「ギルムード！」

同時にリユームを見つめたままで、声を張り上げられます。

「どうされましたか、姉上？」

すぐさまお側にいらしたギルムード様の後ろに、何事かと続いたご領主様のお姿もありました。

「リユーム嬢の祭典時の立ち位置が決まったわよ。あそこがいいのですって。あの、神殿前広場の中央が」

「は。そりやまた……何ゆえ？確かにあそこなら入場者に制限無しだ。ただ警備の点においては面倒ですがね。何、女神の使いの乙女らに不埒を働こうという腐れ根性の輩がそうそういるとも思えないが……さて？」

ギルムード様が腕を組み顎に手を当てながら、警備に着いての采配をぶつぶつと呟き始めました。

「あそこに決定よ。リユーム嬢なら間違いなく女神の加護を受けて能力を発揮するわ。ねえ、リユーム嬢。もう一度聞かせて下さる？あそこがいいのはどうしてかしら」

「はっ、はい。あそこはお花の花びらを幾重にも重ねた紋様が浮かびあがって見えます。薄っすらと光を放っております。とても綺麗に見えます。他の場所より、キラキラしているのです。それに少し離れています。立派なフィローの樹があつて、白いお花が咲いていて、風に揺れていて、とてもいい風が流れ込んできております、ですから・です」

リユームの拙い表現力を駆使して、感じた事を一生懸命説明いたしました。

身振り手振りを用いてというよりも、ただあそこに紋様が樹がと指差しながら。

少し息切れしながら説明し終わる頃には、ギルムード様も巫女王様と同じような表情でリユームをぼんやりと見下ろされておりました。

「ね、ギルムード。この娘は油断なら無いでしょう。この神殿の機密をいとも簡単に暴いて行くわ」

「違うない」

「え？」

「このギルムードの目にはただの石畳にしか見えておりませなんだよ、リユーム嬢」

第六十話 神殿から見下ろす広場（後書き）

「何気に術者の実力満点リユームさん」

人とは違う視点でものを見ているコですからね。

色んな意味で。

人目なんて気にしない〜っちゃ、気にしない。

それでも恋する乙女は彼からの評価が気になるようですね。

さて、領主。

君の目にはどう映るのかな？ の 次回です。

第六十一話 神殿勤め人達の計らい（前書き）

どこまでも気の良い……だけではない、おじ様。

領主、がんばれ〜。

第六十一話 神殿勤め人達の計らい

着々と準備が整って行きます。

リユーム、一世一代の晴れ舞台に違いありません。

今から意識が遠のきそうであります。

「それぞれの間に立ち向かうべく 手を取り合つがよろしい」

そう、巫女王様は厳かに言って下さいました。

「ああ。そうそう。大事が済むまで禁欲を命じます。言うまでもありませんが、一応ね」

「はい。巫女王様」

リユームはすぐさま頷きましたが、ご領主様ときたら無言です。

巫女王様にまで感じ悪いって、どう思いますか？

「……。」

「聞こえているのならちゃんと返事をしなさいよ。この事態の元凶とも言える、ヴィンセイル殿？」

巫女王様は笑顔です。

ただならぬ笑顔です。

「ご領主様の放つ謎の圧力を捻じ込めるほどの、さらなる圧倒的な力が場を支配します。」

ものすごい迫力ですよ。

早く、早く、きちんとお返事して下さいまし！ ご領主様。

はらはらとその横顔を見て、巫女王様の方も窺います。

いつの間にか、お側に控えていてくれた巫女様方の姿が見当た

りません。

（おお。慣れてらっしゃるのかもしれないね。皆様、避難されたのですか？）

リユ、リユームも誘って欲しかったです。ええ。

こんな渦中においていけないで下さいませ。

虚ろに視線をさ迷わせてみれば、巫女王様の傍らに立つギルムード様が、笑いを堪えたように口元を押さえております。何故。

「つぶつ…つ、はははははははは！！」

「ギルムード！ 不謹慎でしょう、全く貴方はいつもそうなんだから！」

ギルムード様がもう堪えられないといった様子で、盛大に噴出されました。

え、と？ どこに笑えるような所がございましたでしょうかね？

リユームにはいつかな見えておりませんでした。

「ははは！ だって傑作ではありませんか、姉上。俺はこんなにもある意味、骨のある奴にお目にかかった事が無い！ 甥っ子共の反抗期だった時より、もっとふてくされた面をしてからに！」

一向に改める気配の感じられない気合の入った仏頂面です。

笑われた事ですます眉間にシワがより出す始末ですよ。

もはや、深く刻まれてしまって取れないくなっているんじゃないでしょうかね。

「まったく可愛げのない事。ギルムード、躡けなおしてちょうだい」「御意」

ぶくくと笑いを手袋に押し当てながら、ギルムード様がすぐさま
請け負いました。

「さて、若者よ。これから手合わせ願おうか。先程の手合わせは俺
の部下に任せたからな。ただの小手調べに過ぎないものだったと解
るぞ。祭典に備えて稽古と洒落込むか。何、俺は優秀な人材育成者
でもあるからな。どうすれば人材が良く伸びるか熟知しているから
楽しみにしている。さて、俺から一本取れたらご褒美に婚約者殿と
二人きりで語らう時をもつけてやろう。どうだ？ もの凄くやる気
が湧くだろう」

ん？ と顎をしゃくるギルムード様を睨んだかと思うと、ご領主
様はあっさり頭を下げておりました。

「よろしく願います、ギルムード殿」

「まー可愛くないわねえ」

「ご、ご領主様。何てあからさまなんでしょうか。
リユーム、何となくいたたまれません。」

「ははは。俺の方が血気盛んな若者と多く触れ合ってますからな、
姉上。それではリユーム嬢、日が暮れる頃には結果が出ていると思
いますよ。さ、行くとするか。その前に、リゼ！ 控えている
か！」

「はい」

いつの間やら後ろには、リゼライさんが控えておりました。

「リゼ。どう思う？」

「何をでございましょうか、ギルムード様」

「楽しそうにあごひげをさするギルムード様とは対照的に、リゼライさんの声も表情も冷ややかです。」

「この若者、俺から一本取れると思うか？」

「そうですね。リユーム嬢のためとあらば、やり遂げるやもしれませんね」

立ち上がりながら、リゼライさんはゆっくりと視線を持ち上げました。

「オマエも生意気だな。躰が必要か？」

「不要でございましょう」

「ぬけぬけと、よくもまあ」

「ではギルムード様。このリゼライは貴方様は誰であっても、

一本も取らせぬと賭けましょう」

「お？ 言うてくれたな。もちろんだ！」

ギルムード様は嬉しそうに両手を広げて見せました。

「ええ、ギルムード様。貴方様は誰にも負けないと賭けられるのですね。すなわち一本取られた場合はギル様もまた、このリゼライ同様賭けに負けた事になりますよ。それでよろしゅうございますか？ 賭けに負けましたら潔く、リユーム嬢とご領主殿が語らう時間をお許しになるのですね？」

お見事です、リゼライさん。

なるほど、です！ ギルムード様はご自身が誰にも負けないと賭けられる。

リゼライさんもそう賭けるとなると、ギルムード様がご領主様に負けた時点で賭けはお二人揃って負けとなるのです。

何かりゼライさんにふっかけ様と目論んでいらしたようですが、最初から勝負は見えているようですね。このお二人。

「何だよ。俺は勝っても負けてもあまり良い事が起こらんじゃないか」

「気のせいです」

「いいや。俺にも褒美をよこせ」

「どこに部下に褒美をねだる上司がいますか」

「ここに？」

「では特別に勝とうが負けようが関係なく、格別級のお茶をご用意してお待ちしております。いかがですか？」

「茶かよ！ 酒がいい」

「……………」

「解った。悪かった。お茶でガマンしてやる。いやいや！ 特別茶が良い」

無言で拳を握り締め始めたりゼライさんに、慌てたようなギルド様のお姿がありました。

そのお二人にしか醸し出せないような雰囲気犯し難くて、思わず見守ってしまうのはリユームだけではないようです。

「ご領主様と目が合いました。」

少し待っている。そう言われているような気がしたので頷きました。

ふと視線を感じると巫女王様とも、目が合いました。

ふむと、ひとつ頷くと、今度はギルド様とリゼライさんを感じと見つめていらっしやいます。

お二人は白熱していて、周りに気がついていらっしやらないようです。

「だいたいなあ、リゼはいつも俺に対して冷たすぎるんだ」

「ですから！ そのようなお戯れでからかわれる部下の身にもなつて下さい！」

「ねえ？」

ふいに巫女王様が誰にとでもなく呼びかけました。
視線がいつせいに巫女王様に集まります。

「あなた達。いつ結婚するの？ いい加減、一緒になっちゃいなさいよ」

巫女王様は真顔で呟くと、そうお二人に笑いかけられました。

「いたしません！」

「姉上。ははは、お戯れを。コレは俺にしてみたら娘のようなものですよ。さー、ご領主殿。訓練場へ向うとしようか」

ダグレス。うかうかしてられないようですよ。

思わず拳を握り締めます。

それをご領主様を心配しての事と受け取ったのか、巫女王様が囁いて下さいました。

「大丈夫よ」

賭けとやらの結末は恐らく、リユーム嬢の一人勝ちになるわよと巫女王様が笑って下さいました。

頬には泥がこびり付いておりますし、せつかくの御髪も筆り合いでもされました？ とお尋ねしたくなるくらいの明後日方向に乱れております。

剣舞の練習などではなく、まるで取っ組み合いのケンカでもされたようではありませんか。

ありえますね。

そして、ずたぼろ、という結果ですかね。

どうにか一本取ったが、ギルムード様の良いようにずたぼろにされました。に……100・ロートといったところでしょう。

何やらギルムード様からも下町っこに共通する、強かさを感じてしまいます。

何だかんだ言っても育ちの良いご領主様が敵う訳がありませんか。

良くも悪くも正統派を貫こうとする正義感の強さは、ギルムード様に見れば付け入る隙と映った事でしょう。

な、何だか。人だかりが出来ているような。

主にぼろぼろで砂ぼこりまみれの、この男性二人の様子を窺いに集まっていらっしやるようです。

あうう。

巫女の皆様もお集まりになっていらっしゃるようですよ。

彼の周りに熱のこもった視線が集中してますよ。

何でしょうか。この胸が狭められるかのような感覚は。

久しぶりの発作の兆候でしょうかね。

へふう。

何とはなしにうな垂れてしまいました。

彼も周りも見たくはありません。

「リユーム、行くぞ」

「はい？」

声が引っくり返ってしまいました。

突然言い出したご領主様に手を引かれ、そのまま人ごみを掻き分けてずんずん進んでいきました。

振り返るとギルムード様がにこやかに手を振って、見送って下さっているのが見えました。

「ここはどこでしょうか？ 中庭でしょうか」

「知らん。恐らくそんなところだろう」

引き摺られるようにたどり着いたそこは、背の低めの樹が規則正しく植えてあり、まるでそれが壁のようになっていました。

少し開けた場所にはお花畑というよりも、菜園と表現するのが相応しいような小さな花壇があります。

神殿ですからね。きっと薬草などの類なのでしょう。

そんな事をぼんやり考えていると、ぐいと手を引かれてつんのめりました。

「つきや」

小さく悲鳴を上げはしましたが、そのまま転んでしまう事はありませんでした。

先に腰下ろされていたご領主様に抱き止められていたからです。

ありがとうございます、とお礼を述べたと同時です。

彼の金の髪が目の前を過ぎりました。

「いっ、ご領主様っ、コレは」

何と！彼の頭がリュームのお膝にあるのです。

「疲れた。しばらく休ませろ」

仰向けでご自身の腕で瞳を覆ったご領主様が、深く息をつきました。

驚いて途惑いましたが、彼の重みはびくともしません。

「……………」

「……………」

せ、せつかくの語らいの時とやは、ただ刻々と過ぎて行くようです。

リューム、気恥ずかしいのと手持ち無沙汰なので、気がつけば彼の金の髪を整えるべく撫でさすっております。

「……………リューム」

「っ！はいつ？」

どれくらいそうしていたでしょうか。

もしかして眠られてしまわれたかと思いはじめたころ突然、名前を呼ばれたものですから驚きました。

「クレイズがオマエを知っていた。何故だ？」

はい？クレイズがどうしたというのでしょうか？

質問の脈絡の無さに、彼が何を言いたいのかつかめません。

「クレイズ？ニーナの弟ですよね？」

「いつの間に親しくなつたんだ。ニーナの計らいか」

「ええ」と。ご領主様の任命式の時」

「何だと？」

しまった　　！！　リユーム、馬鹿ですか。馬鹿ですね。違いありません。

勢い良く身を起こしたご領主様に両手首を掴まれて、真っ直ぐに見据えられておりました。

背中が樹に押し当てられる格好です。

どこにも逃げられません。

アレ？　そういえばこのような事、シエンテラン家でもありましたよね。とほほ。

「ええとくクレイズは命の恩人なのです」

少々認めるのも癪に障りますが、そこは事実です。

「俺は聞いていない」

「言っておりますから」

当然ですと頷きましたら、睨まれましたよ。

「言ってみろ」

「怒らないなら」

「俺が怒るようなマネを二人でしかしたのか？」

そういえば、祝福の道を踏んじやいましたよ。あわわ。

決まり悪く思いながら言い淀むと、彼の表情が更に凍りました。リユームも凍りつきます。

「闇など払わずとも良い。オマエは二度と屋敷から出さない」

「……じゃあ、リユームが自由を満喫できるのは三年後ですか。リユームは別にそれでも構いませんが、切ないですね」

闇ふり払われないうまま迎える、三年後。

それが意味するところに思い当たったらしい、彼の瞳が見開かれました。

そう。このまま行けば三年後に、彼のこんな顔を見ることも無くなっているわけです。

ま。それもいいのかもしれないけどね。

彼のしたいようにさせるに限ります。

まだまだ深い部分ではリユームを、シュ・リユーカを憎み足りませんかね？ ギルメリアさま。

「そうですか。その後はまた後妻様でも何でもお迎えください」

「断る。後を追う」

「ふざけないでください！」

「本気だ」

「なお悪いです！！ おかー様みたいな事して、いいと思ってらっしゃるんですか！！」

そう。

おかー様は耐えられなかったのです。

第六十一話 神殿勤め人達の計らい（後書き）

『痴話げんかと〜』

仮タイトルの後半は、また次回に持ち越しとなりました。

領主もギルのような上がいれば、もう少し違った人生になったかもしれません。

言っても仕方が無いですが。

そしていじげ気味なので、言うてはならないでしょうな発言をかましております。

ああ〜ああ。 知らんぞ〜。

そんなワケに行きませんので、次回きつちりオトシマエつけさせます。

（おかしいな〜後、片手で足りる更新で終わるはずだったのに）

これから踏ん張りどころなので、リユーム・領主・その他大勢達とがんばります！

最後までお付き合いいただけただけなら、幸いです〜！！

第六十二話 神殿で交わす新しい契約（前書き）

暑いですね

第六十二話 神殿で交わす新しい契約

そう。

おカー様は耐えられなかったのです。

二度も夫に先立たれて、心が折れてしまわれたのでしょうか。

折れたなんてかわいいものでは無しに、壊れたのだと言うのが正しいのかもしれませんが。

おカー様を責めるつもりなど全くございません。

ですが、どうなってもああはなるまいと心に誓いました。

『おカー様？』

おカー様はお義父様との婚礼の衣装を身に着けて、彼の棺の横で永遠の眠りに付かれておりました。

きゃあああああああ

!!!!

正気など保てるはずもありますまい。

リユームは空っぽのまま、ただただ叫び続けたようです。

その時、力強く抱きこまれて視界を遮られた事だけは記憶にあります。

あれはどなたの腕であったか等と、今更問い掛けるのは愚問でしょう。

今、その腕に抱かれているのですから。

おとう様方だけを見つめて他を省みないという事は、残された者

に空しさと無力感だけを押し付けます。

オルレイアの瞳に映っていたのは、シェンテランのご領主様だけ。

おかー様らしいといえばそうなのですが、だとしたらリユームの存在って何なのでしょう？

あなたさまの前にもリユームは何の助けにも慰めにもなりはしない、と直接言われるよりもヒドイ仕打ちでした。

おかー様が自ら命を絶たれてから、その想いを見つめるのは恐ろしかったですよ。

彼女の中のリユームの存在のちっばけさを、改めて思い知るってモノでしょう。

何もかもどうでもよくなってしまっただけで、男の方を想う事が出来るおかー様がまるで知らない人のように感じられてしまうのです。

おかー様は生涯「オルレイア」という、ただ一人の女性であったというまでの話でしょうかねえ……。

同じ女として少し羨ましいような、そうでもないような複雑な心境になります。

それはリユームが彼女の娘だからでしょうかね。

思い出したくない、見つめたくない未消化の想いを抱いたまま彼を見上げます。

そこにはおかー様と似通った想いを秘めた瞳がありました。

「領地など。オマエとは比べ物にならないくらい、何の価値も無い」

ああ、やはりと思いました。

やはりこの方もヴィンセイルとしてしか、今が見えていないと思

いました。

「ふ、ふざけないでください！ リユ、リユームが何故、貴方様をご領主様と呼び続けるのか、お分かりにならないのですか!？」

「何だ」

「ご領主様はご領主様なのです！ このエキナルドの地を任されたご領主様なのです。任命式の時、ルゼ様の御前で、皆様方に誓ったのです。それをお忘れにならなきようにといい願いを込めて、そう呼び続けております」

「リユーム」

「リユーム、ご領主様の鞆、ですから！ ご領主業を、領地をそのようにないがしろにされるのならば、今すぐルゼ様にお返しに上がりましょう」

リユームはきつと彼を睨みつけました。

「いつだって貴方様は勝手ばかり通される！ そんな事は許されません。何人たりとも愛しい者の旅立ちの時に、献花を阻むなど……あつてはならないはずです！」

おかー様の事を思い出したせいでしょうか。

あの日の無念を思わず口にしていたようです。

「何だ、恨み言か」

「ご領主様はリユームに献花をする必要など無い、リユームの事を呪いに差し出した二人などに哀れみは不要と仰いたかったですね」
「そうだ」

「それとこれとは別ですよ」

どんつと腕を掴まれたまま、彼の胸を両拳で打ち据えました。

「恨み言ならもつと他に言う事があるだろう。この際だから全部言ってみる」

「他にですか？ ああ！ 先程の皆様方に対する態度は、もつっ！ 何事ですか。そんなところまでギルメリアおじい様に似なくないのですよっ」

もう、ギルメリアといいご領主様といい、困ったものです。

気に入らない事があるとむすつとして黙り込むなんて、まるで子供です。

リユームが怒ると、ご領主様はため息と共にリユームの肩に大きな手を置きました。

「そうではなくて」

何を仰いますやら！ 大切な事ですよ、と言葉を続ける前に抱き込まれてしまいました。

「恨み言ならもつと他にあるだろう。おまえを呪いの生け贄として差し出した俺に対する恨み言が」

「いいえ」

「リユーム」

腰と背に回った腕に持ち上げられるように抱き上げられました。少しだけ、踵が浮きます。

爪先立ちになるので、自然と彼の胸に体重を預ける格好になります。

これ幸いとばかりに、その耳元に囁きました。

「もしも。もしもの場合、ご領主様はリユームに最後に献花をしてくださいますか？」

それは懇願に近かったと思います。それなのに彼ときたら！

「断る」

「即座に」

「オマエが俺にそうしろ。俺よりも長く生きて見せる」

「お断りします」

「オマエに献花をするなど考えたくもない」

「リユームだってそうでございますよ」

「だったらもしもの時などと二度と口にするな」

苦しそうに吐き出された言葉は、リユームの胸を締め付けます。

無言のまま彼の腕の強さに身を任せました。

彼の胸に押し付けたリユームの耳に、紛れも無く彼の鼓動が響きます。

日も傾きゆつくりと夜闇が忍び寄ってきていました。

彼の鼓動に耳を澄ますうち、リユームも落ち着きを取り戻せたとうです。

「いい加減にしませんか」

「そうだな」

「二人、今度こそおじいさんとおばあさんになってみませんか？—
緒に」

二人、額をくっ付けあって祈りました。

そして誓い合います。

「この闇を終わらせましょう」

「今度こそ」

「二人で、いえ、皆様のお力をお借りして」

「終わらせる」

「ええ。そうしたら、一緒におじいさんとおばあさんになりましょう。リユーム、ご領主様が偏屈おじいさまになってもお側におりますよ」

「断定なのか。俺が偏屈になると」

「否定できませんよね？」

「リユーム」

「ふふ。二人、ギルメリアの血を引いておりますからね。きっと口にして発した言葉は何よりも確かな呪文になりますよ」

そう確信して微笑むと彼の指先がリユームの唇をなぞります。くすぐったいのと、説明の付かない部分がどこかしら震えたのを感じて、身をすくめました。

「リユーム。闇をふり払い、シエンテラン家に新たな光を寄せよ。俺に跡継ぎとなる子を授けろ」

「ええ。お約束いたしましたよ。闇ふり払われた暁には必ず」

「誤解の無いように言っておく。別に 男児でなくとも良い。俺とおまえの子であるのなら」

「ええ。解っておりますよ、ご領主様」

彼の指先がリユームの頬に掛かる髪を、後ろに梳いてくれるのを心地よく感じます。

争いもひとまず落ち着いたせいでしょうか。

リユームはふと、先程感じた疑問を彼に尋ねようと思いつきました。

(きつとりゼライさんから何やら誤解されたくないからだろうと、リユームは踏んでおります。)

「嬢様も神殿に参られた」

「ダグレス」

彼はリユームの顔を見たと同時に、唐突に咳きました。驚いて言葉を失うリユームに、彼はひとつ頷きます。

ダグレスが嬢様とお呼びする方はただお一人です。

あの紅い髪が見事な、優しいあのお方です。

「このダグレスが付き添ったが、お一人で参られたのだ。これから神殿の奥で監視される。もちろん祭典に臨む事など望めやしない。それでもオマエの力になるために、この神殿の奥で静かに祈って下さるのだぞ。心して臨め。失敗は許されぬぞ。我とて許さぬ。嬢様の気持を無下にするマネなど許さぬからな」

「お一人ですか？」

「フィルガは許されなかった。まだな。アヤツも反省牢行きだ」

姿勢を正しました。

ダグレスの紅い眼には、すべて何もかもがお見通しのようです。

この身勝手な想いも含めて、全て。

「心します、ダグレス。その紅い眼に焼き付けてくださいませ」

「うん」

「ダグレス」

彼らしくない、幼く感じるような返答です。

彼もまた不安なのかもしれませんが。

ディーナ様にはディーナ様の戦いがある。

それに臨まねばならないとは、お聞きしております。

ダグレスをそっと抱き寄せました。

今、彼はオトナの男の人の姿ですが、いつもの可愛らしい獣サマに見えます。

「リユーム」

「必ずや生きた喜びを噛み締めて見せましょう。そしてダグレスも、皆様とご一緒にリユームとヴィンセイル様の結婚式にご参列くださいませ」

リユーム、ダグレスの力を身に潜ませておりますから？

彼の気持ちは、リユームも一蓮托生なところがあるのです。

「ダグレス。今日はいつものダグレスの姿に戻って、リユームと一緒に休みましょう？」

「うん」

そつと頂を撫でながら囁くと、ダグレスは大人しく頷いてくれたのでした。

第六十二話 神殿で交わす新しい契約（後書き）

『二人の将来設計』

恐るべし、神殿。

本当に二人きりになりたいのならば、闇をふり払ってからですな。

仮タイトルは『ケンカの続き。闇』でした。
わかりやすい。

リユーム、ちょっと母性発動中かな、と思いながらの六十二話でした。

閑話 く聞わずに聞いた勝敗く (前書き)

閑話 く関わらずについた勝敗く

「ご領主様は訓練を終えられ、リユームもまたリゼライさんとの今日の特訓を終えた夕暮れ。

日が暮れるまで中庭で、今日の出来事を報告しあうようになっておりました。

そんな穏やかな時間とも言える時に、ご領主様は仰ったのです。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「そして俺が勝った」

はいい!?

だから何故、事後報告なのですか!!

何でもレドとご領主様、どちらがリユームに相応しいかを争ったそうでした。

「な、何という勝負をされるのですか!」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ディーナ様も神殿にいらっしゃったようなのです、とダグレス經由の情報をご領主様にお話したのです。

「ダグレス、落ち込んでいました。最近会っておりませんが、レドもきつと沈んでいる事でしょう」

「ああ。レドならそうそうオマエに姿を見せられないはずだ」

「何故でしょう?」

「勝負に負けたからだ」

「何のでしょう?」

「レドが申し込んできたから受けて立った」

ですから何を！

彼の言葉の少なさにいつも悩まされるリユームであります。

そんな彼には根気良く根掘り葉掘り訊かねばならないものと、ようやくと学習したリユームでゴザイマスよ。

「お聞かせ下さいませ、ご領主様。何ゆえレドが姿を見せてくれな
いのかを」

「……だから勝負に負けたからだとさつきから言っている」

「ですから！ 何の勝負でございましょうかとお聞きして
ございます、先程から!」

リユームがしつこく食い下がるからでしょう。

ご領主様は面倒臭そうに教えて下さいました。

リユームがこれ以上つつこまなかつたら、うやむやにする気満々
でしたね。まったく！

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ご領主様とギルムード様の特訓中にレドは現れたそうです。

あの王子様と見まごう若者の姿で、手には剣を持っていたそうです

す。

「領主！ レドと勝負してっ！」

ご領主様は毎回本気で仕掛けてくる、ギルムード様の太刀を受けている最中だったそうです。

ですからレドに向き合う事もままならず、横目で窺うのが精一杯だったとか。

「……レド、俺は今手が放せないのだが」

「おお？ オマエ、レドか？ 久しいな！ いつの間にか人型が取れるまでに成長したんだ？ さすがディーナ嬢の元へ行った事はあるな」

幸い（？）わずかばかりですが、ギルムード様の手が緩んだそうです。

「ギルムードは黙ってて！」

「おおう、何だ、何だ？ 勇ましいなレド！」

そんな揶揄する調子のギルムード様をひと睨みしたレドは、剣の切っ先をご領主様に向けて宣告したそうでした。

「領主、レドと勝負……！」

「何の勝負だ？」

「どちらがリユームに相応しいか決める！ だから決闘」

「それはリユームが決める事だろう」

沈黙が続いたそうです。

その後、レドは獣さまの姿に戻ると何やら叫びながら立ち去った
そうです。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ご領主様はそれきりそんな出来事など、忘れ去っていたそうです。
相変らずヒドイ方ですね。

しかもさらに「俺が勝った」ときっぱり言い切りましたよね？
闘ってもいないのに堂々の勝利宣言。

そこは、リユームの気持ち伝わっていると喜ぶべきなのでしょう
うか。

しかしながら当然。。。

レドの方は忘れちゃいなかったようです。

「目覚めると枕元にヒキガエルがのびていた。今朝は三匹も」
「カエルさん、ですか」

リユーム、思わず身震いしながら尋ね返しました。
何てサワヤカとは程遠い目覚めでしょうか。おおう。

「何故カエルに敬称を付ける。しかも日に日に大きなカエルになっ
て行っているし、数も増えている」

「と、言う事は嫌がらせも三日目ですか」

ご領主様は嫌っそうに頷きながら続けます。

「しかも仮死状態にしてあるらしく、俺が触った途端部屋を跳ね回るのだ。俺の朝はそんなカエルを追い出すことから始まる」

「触らずに置いてはいかがでしょうか？」

「アホウ。そのままにしておいてみる。一日中気がかりであるばかりではなく、本格的に干からびた状態のカエルが寝そべる寝台に上がる気があるか」

「それもそうですね。カエルさんも可愛そうですしね。起こしてあげて下さい」

「俺が一番可愛そうだ」

「……。」

「何だ」

そこは賛同しかねます思いましたが、いいえええ！ と首を横に振りましたよ。

本音と分けて、建前とやらを立てるようになったリュームでございます。

レド。

レドはとても可愛いです。

話に聞くだけならそんな嫌がらせも何て可愛らしいのかと褒めたんです。

何て地味に嫌な現象でしょうか。

あのひんやりした感触が枕元にある目覚め。

あまり想像したくありませんね。

「最近、リュームが目覚めるとお花が枕元にあるのです。それもきつとレドの仕業でしょうね。あんなに大きな身体の子が忍んで来ているのに、目が覚めたことはありません」

「リュームの寝つきよさは俺が保障する」

少し離れた樹の影に、見え隠れする白い毛並に声をかけます。

「レドっ、お花ありがとうございます」

ちょこつとお顔を覗かせたレドと目が合いました。

何だか嬉しそうでした。

「レド。カエルさんもありがとうございます。ですが……。」

カエルさんの話題になった途端、レドはそおつと顔を引っ込めてしまいました。

「リユーム、カエルさんがちょっと苦手です。レドはそのう、お口で啜えてカエルさんをご領主様に届けているのでしょうか？」

尻尾がぱたぱたと左右に揺れました。

恐らく肯定と取っていいのでしょうか。

「そうですね。リユーム、これからレドに『ちゅっ』するのをためらってしまいます」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

翌朝からご領主様は仮死状態のカエルさんと目が覚める事はなくなつたそうです。

閑話 く闘わずについた勝敗く（後書き）

『レドは納得行かなくて決闘を申し込んだらしい。』

仮タイトルです。

嫌な猫 たん です ね 。

そんなテーマです。

実家の飼い猫がこんな調子です。

朝、目覚めると枕元に 遠い目みたいな。

そしてしっかり聞き耳を立てているレド、相変わらずお邪魔虫。

第六十三話 神殿で迎えた決戦の日の朝（前書き）

さあ、いよいよ本番ですよ！

リユーム、ヴィンセイル、がんばって。

第六十三話 神殿で迎えた決戦の日の朝

例えばリューム自分より背の高い草をかき分け、かき分け進むような感覚です。

それよりもしっかりと絡み合う蔦をかき分けていると表現するのが相応しいかもしれませんね。

しっかりと絡み合う、幾世代にも及ぶ闇の想い。

闇連ねた想いを抱いたまま沈む魂の救済に当たるのですよ。

自分自身で。

.....

決戦の日、迎える心持はどんななのだろう。

リュームの事ですから？

朝から落ち着かず、そわそわしている事でしょう。

いやいや。

それ以前に前の晩、眠れるかどうかすら危ぶまれます。

と、踏んでいたのですけれどもね。

ぐっすりでした！

あれ？

おかしいな。

リユーム、もうちょっと繊細さんだった気がします。
そうリゼライさんに訴えたら「勘違いもはなはだしいんじゃないの?」と、ばつさりです。

「……あなたはまた見境無く魔物でも心を許したようね」
「なぜそう思われるのでしょうか?」

リユームの衣装の着付けを手伝ってくれているリゼライさんに尋ねました。

リゼライさんは手を休めることなく、続けます。

「闇の気配が微かにする。ここは聖域なのよ? 少しでもそういう異質な気配をまとっていれば目立つに決まっていますでしょう」

「そうですか。リユーム自体が闇に染まっておりますから、問題ありませんでしょう」

「減らず口をたたくアンタのどこが繊細だ」

これもまた、どこかで聞いたような台詞ですね。

ふふふと小さく笑いを零すと、リゼライさんが何か言いたそうに見つめてきました。

素直に白状します。

この方を欺こうと思うことすら無駄ですから。

許したといっても明け方のほんの一時でございますよ。
そんな言い訳も通用しないリゼライさんです。

「先程まで夢を見ていました」

「何の?」

「そうですね。闇のとても表現すればいいでしょうか？」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

にゃあ　　ん！

闇の中で、こだまする可愛らしい鳴き声に呼ばれました。

リユームう。久しぶりだね。

「お久しぶりですね。エキヤ？」

にゃ　　ん。

答える代わりに長々とエキが鳴きました。

真っ赤な舌が闇に閃きます。

それに真っ白く、鋭い牙も一緒に。

「いらして下さいな、エキ」

リユームこそ、こちらに来てくれないの？

長い沈黙が闇の中で続きました。

そんな間ですら飲まれていくかのよう。

にゃ　　んと可愛らしい鳴き声が響いて、沈黙は終わりとなりました。

歌ってよ、リユーム。

「ええ。もうしばらくお待ちくださいね、エキ。今日、祭典の時に歌いますから聞いていてください」

リユームは誰のために歌おうっていうの？

「女神様やこの国の人々全てのために。そしてリユーム自身のために」

ボクのためだけじゃないの？

「ええ。エキのためだけではありませんが、エキのためにも歌うのですよ」

また、要らない嫉妬を買うかもしれないの？

「いいえ」

きつぱりとリユームは首を横に振りました。

いいえ、それはありません、と。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「エキの正体を、リユームはとうに知っておりますよ」

ふうん。リユームにとってボクは

何なの？

「エキは」。

うん。

好奇心に満ちてまんまるの緑の瞳が、リユームを見つめています。

深く色鮮やかな常緑の色合いが、ご領主様と一緒にです。

まるで森に恵まれた、この地に祝福されたような瞳です！

そう感激してこのコに『エキ』と名づけたのはリユームです。

エキナルドの地名にあやかっつての、エキ。

それだけではない事も、気が付いておりますよ。

エキ猫。

えきびょう。

疫病。

このタラヴァイエの血筋の身を犠牲にして、全て引き受けるよう命じられたこの地の災厄でもあります。

ですが、そこまでの正体を闇から引き出して差し上げねばなりません。

このコも犠牲になったひとりです。

そんな悲しいことを繰り返してはなりません。

必ずや光を引き連れて祝福の道を皆で歩み、人生を終えましょう。

「エキはエキですよ。真っ黒の可愛い、リユームの大事なカラ
ス猫さんですよ」

そ っ か あ 。

ためらいながらも手を伸ばしました。

どこまでが毛並であって、また闇なのかもわからないエキに。

すり、とエキ自身がリユームの手のひらに頭をすり寄せてくれま
した。

ボクがリユームのエキでいられるように、歌ってね、リ
ユーム。

どこか満足したような呟きと共に、闇は薄れていったのでござい
ます。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「不思議と恐ろしくはありませんでした。闇はある意味ずっとリユ
ームの側に寄り添っていてくれたものなのです」

ですからでしょうか。

少し物悲しくもあるのです。

厭ってふり払いたいと願いながらも、そんな寂寥すら覚えるので
す。

リユームの独白に近い呟きに、リゼライさんはただ黙って耳を傾
けていてくれました。

手を休めることなく、せつせとリユームの腰帯やら、飾りのついたベールやらを着付けてくれながら。

「出来たわよ、リユーム嬢。いざとなったらこの編み紐を使うのよ。わかった？」

リユームにとあつらえていただいた衣装の腰を飾る編み紐は、とても眩い金の染めです。

そこに緑と白との染めを組み合わせると、何やら不可思議な紋様が浮かぶように見えております。

それを手に取りながら、しっかりと頷いて見せました。

「これはどんな災厄が襲いかかるうとも、アンタの魂をこちら側に繋ぎとめてくれる命綱よ」

「はい。リユーム、間違っても闇に囚われたりしません」

闇は誘いを掛けてくるでしょう。

ねえ、こちらに來ない？

幾度かエキにもそう誘われておりますからね。

いつもうつかり頷きそうになる自分は本音でもあり、また、正気でもないと思うのです。

神殿の皆様方に言わせてみれば、闇という呪いはそこが目的として成る呪術だから当然なのだそうです。

そこに挑むのです。

挑まねばふり払えぬのです。

リユーム、恐ろしいくらい完璧な装備だと思つのです。それこそ闘いの最前線に臨む騎士様にだって負けないくらい、重装備だと言つても過言ではないでしょう。

姿身の前に立ち、リユームは自分自身の晴れ姿とやらを眺めました。

そして鏡越しにリゼライさんと確認しあいます。

身にまとう純白の衣はただの薄い布地を重ね合わせたものでしかありませんが、何。

ある種の頑丈さなら、甲冑にも負けませんよ。

何でも術句を込めながら織られた特別製の物なのだからか。

薄つすらと光に透けて浮かぶ紋様は、あの広場の中央に浮かび上がるものと似通っております。

まるで花びらのような、舞い落ちる雪のような。

そんな繊細でいて力強い、自然界の為す芸術品と同じ物なのです。正直、胸元の布地の少なさに心もとない気もしないでもありませんが、そんな事をちらと考えようものなら『私を見くびるな。隠さずに見せ付けてこそ、力になるものを』という幻聴がきましたよ。

ザク口様もとい、ひい・ひい・ひい・ひい・ひい・ギルメリアおじい様め。

リユームが言いたいのはそのうちのことではございません！

もう少し盛り上がりがあれば堂々としちゃいますよ、っていう女心です

うう。

まあ、いいですけど。

かつて付けた首筋の傷痕も隠さずに晒しますよ！

何となく、この傷痕すらも愛しく感じてきておりますから。指先でなぞります。

あの方が唇でなぞってくれた時のように、そっと。

「何、赤くなってるのよ？」

リゼライさんにからかわれました。

ええっと、えへへ〜と誤魔化して、指先をそのままザクロ石の中央に滑らせました。

頭の中央にはティアラ。

そこに付いた額にまで零れ落ちるかのような形の宝石は、緑玉であの方の瞳とお揃いなのです。

両手首には細かな飾りが身動きする度に、しゅらしゅらと音が零れるような素敵なものです。

そしてそして胸元にはザクロ様。

リユームの心臓の真上にあるのです。

皆様の想いをそれぞれの形で具現化された物なのです。

それをどうぞ、どうかお力添えになりますようにという言葉と共に、いただいたのです。

そんなにも得難い宝物を贈られて、身に付けることの出来たりユームは只今最強の気分です。

その気持ちに報いねば、タラヴァイエの生き残りの名が廃ります！

先程から湧き上がってくる雄々しい気持ちと、それを受け止める心持ちが奇妙な静けさとなって、この胸に横たわっているのです。

間違いなく勝利を収める確信をもって、戦いに臨みます。

ええ。臨めるのです！

皆々様方のおかげで！

ついと手を引かれました。

そのまま、ぎゅっと強く手を握られました。

お互い強く迷い無く、微笑みあいました。

いよいよですね。

いよいよ、ね。

無言で交わす、そんな決心とも諦めとも言えない気持ち。

「はい。ありがとうございます、リゼライさん」

「どういたしまして。さあ、行くわよ。覚悟はいい？」

リユームは無言で頷きました。

リゼライさんも無言で頷くと拳を突き出してきました。

お互いに力強く頷くと、拳同士をつき合わせました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

舞台の袖で向かい合って、ご領主様と二人きりです。

静かです。

ただ遠くから微かに人々の歓声が届くだけです。

二人の間を、あたたかくてやわらかな陽が差し込んできています。

お互いの手には、今日摘んだばかりのフィローの真白い花。

花びらが重なりあっているせいか、華やかに見えます。

白い白い真の純白とは正にこれと評するに相応しい、お花です。
リュームの髪には既にそのお花が飾られています。

巫女王様、ルゼ様、ミゼル様、ニーナ、リゼライさん、ディーナ様の代わりにダグレスが、それぞれ射してくれたものです。

その純白に想いを込めながら見つめます。

彼の装備もまた完璧でした。

濃い青地の長い上着を着こなし、鈍く輝くような布地のマントを羽織られております。

色味こそ違いますが、その気配がリュームの衣装と同じ作用を秘め持つものと同じようです。

きつと彼の事も守る力となってくれるでしょう。

裾と襟に配された紋様の刺繍にも安堵します。

……何て格好良く見せるのでしょうか。

ちよつと、どうしたらいいか解らない気にさせられます。

しかも腰に下げられた、ルゼ様から賜った孔雀の羽根模様の鞘に収まった剣が一際目を引きます。

ど、どこの騎士さまでしょうか？

恐れ多くもリュームの、騎士様です。

そう思い当たった途端、頬が勢い良く火照りました！

「リユーム？」

リユームの挙動不審ぶりにまたか、というような怪訝な声をかけられて我に返りました。

そうでした。

照れている場合ではありませんでしたね。

儀式とやらに乗っ取って、跪く彼の額に唇を寄せました。

「祭典の誉れ高い騎士に女神様の祝福が賜りますように」

「乙女に加護を得て災厄を封じ込める剣舞を務めきると誓う」

誓いを述べられた後、彼は持つ花をリユームの左の耳上に差してくれました。

につこりと微笑むと、彼の表情も淡くほころびました。

この身が有限であり、無期限のものではないと知っております。しかし今ひとつピンと来ないのもまた確かです。

(どうかこの時が永遠に続きますように。そう願う瞬間をたくさん、積み重ねて行けますように)

リユームも彼に倣って同じように耳の上、髪に花をさしてあげました。

第六十三話 神殿で迎えた決戦の日の朝（後書き）

『エキの正体。』

まだまだおぼろげですが、ハッキリして来ましたね。
決戦中にクツキリさせたい所です。

やはり決戦を迎えるまでが落ち着きませんが、来ちゃえば大人しく
なるしかないですよね、リユームさん。

いよいよです。

本当にかんばってくれ、二人+ !!

閑話 〵 舞台の袖に射しこむ光 〵 (前書き)

彼なりに戦いに臨む前。

閑話　　舞台の袖に射しこむ光　　

リュームが手にした花を髪にさしたので、苦笑した。

耳の上に添えられた小さな手ごとそつと外し、上着の胸元へと導く。

リュームは「せつかく似合ってらして、おそろいでしたのに」と不満げに訴えてきた。

こいつ。　　後でどうしてくれようか。

そんな想いがちらりと掠める。

まずは先程の礼にと額に口付けを返してやるに留めるが。

リュームにも女神の加護があるようにと、らしくもなく願いを込めた。

そのまま両手を絡ませ合う。

そうやってお互いの手を取り合って、額同士をくっつけたまましばらくそうしていた。

祈りを捧げる。

もはや言葉にならなかった。

ただひたすらにお互いの無事と成功を祈る。

先に面を上げたのはリュームの方だった。

もう行かねばならない。

わかつている。

リユームが日の差し込む方へと向いた。

ゆっくりと、目線で俺の事を気使い促がしながら。

その儂くも決意に満ちた強さに心奪われた。

食い入るようにその眼差しを見つめ続けたくてすがった。
追った視線はやがて光にぶつかる。

やんわりと手を引かれて一步を踏み出した。

差し込む光が彼女のまとう 衣装を透けさせてなおの事儂さを見
せつける。

魅せ付ける。

そのまま光に吸い込まれて行きそうな彼女の風情に、放した手を
空に泳がせる。

リユームが両手を広げて陽射しを抱き込むかのように、舞台へと
臨むのを見送ってからそれに続いた。

正に一世一代の晴れ舞台と呼ばれるであろうものに、これから二
人で挑むのだ。

リユームに付き添うように進み、定位置まで行く。

リユームが頭を下げる。

同じように頭を下げる。

人々の歓声が上がる。

何気にリュームは好戦的な所があると気が付いている。

そこを好ましくも思いつし、心配の種だとも思う。

正直、非力な少女がここまで闇を晴らすべく腹を決めているとは思わなかった。

歌う前からリュームはいつも神がかりになる。

そうなつてくると俺の言葉は届かなくなる。

他の何かを感じ取るので精一杯になるからだろう。

目に見えない何かを感じし拾い集めて、それをまた光に放つかの
ような事をやってのける娘。

全てが済めば、俺の花嫁となる娘。

リュームはいつだって歌う前から眼差し一つでその場を支配して
しまう。

今までに経験した事の無い大観衆の前でも、それは変わらないよ
うだ。

祭典はもう始まっている。

歌が始まる。

戦いも既に始まっている。

閑話 〳 舞台の袖に射しこむ光 〳 (後書き)

『 祭典の装いは花嫁のようできて そうでもない。』
らしいですよ。

え? どういうこと?

『 自分との婚礼のためにまとった衣装ではないからだ』

と、いう事だそうですよ。

ヴィンセイルと作者との (痛い) 脳内会話でした。

第六十四話 この美しき国に捧げる祝福の歌（前書き）

春の日差しに 女神様の祝福を 感じます。

第六十四話 この美しい国に捧げる祝福の歌

祝福の歌。

祝福の歌を高らかに朗らかに歌い上げましょう、小鳥たちのごとく。

生きている歓びを歌い上げるのです。

歌う前は必ず、そのような想いが胸いっぱいを支配します。

人々の熱気と期待に満ちた視線すら熱く感じます。

今回、リユームが今まで経験した事の無い程の人様の前です。

見渡す限り、人でいっぱいの広場を少し高い舞台から見下ろしております。

やはり胸が高鳴ります。

緊張もありマスが、それだけではないものも同時にわきあがって来ます。

それをリユームは歓迎いたします。

それはこの身も心も鼓舞させてくれるものだからです。

静かに高まって行く闘志に身を任せるのが、実は結構好きであります。

気分は決闘に臨む騎士ですよ、リユーム。

なんちゃって。

我ながら、どうにかなりませんかねえ？
この緊張感の薄さは。

巫女様のバルコニーに向ってまずは一礼し、次いでルゼ様がお忍びで紛れ込んでいるらしい皆様に向って頭を下げました。

拍手が沸き起こります。

ゆっくりと頭を上げながら、両手を広げて抱えるようにいたしました。

皆様を。皆様の温かい想いを、全て。

それを胸に抱えるように一歩下がります。

今度は片腕だけを広げて、舞台上に待機していらっしやる楽師と巫女様方を紹介するようにしたのです。

舞台上に腰下ろしていた楽師の皆様が立ち上がって、観衆に向って頭を下げられました。

それを見届けた頃に、手鈴を持った巫女様たちも一礼しました。

かすかに鈴の音がしました。

まるで鈴も一緒に挨拶しているかのように思えて、リュームは笑み零れてしまいます。

耳に届く微かな振動ですら喜ばしく感じます。

どんなささやかな喜びであっても見逃しますまい　で、ございますともよ。

どんな事でも拾い上げて生きてる喜びを噛み締めましょうぞ。

そんな決心が湧く晴れの日。前日には無かった想いです。あれ？
ついに今日という日を迎えたのだな、とぼんやりと実感中でございますよ。じわじわと。ええ。

舞台の上が上がってやっとなぞ。

そんなものでしょうか。

人間、土壇場であってこそ付けざるを得ない覚悟に乾杯ですよね
っ！

そんな思考を晒した事を口走ろつものなら、大目玉を食らうこと間違いありません。

ですから黙っておりますともう。

リユームも改めて今日の日に協力してくださる皆様に頭を下げました。

深く、ゆっくりと、丁寧に頭を下げる途中で、ご領主様が舞台向この奉納の剣舞の舞台に立たれたのを確認いたしました。

彼もまた同じように深く頭を下げたようです。再び拍手が起こり、静かに引いて行きました。

広場に満ちる熱気と静寂。

静かな期待に応えるようにゆっくり面を上げると、ご領主様とも同じ感覚であつたようです。

二人、一瞬確かに見つめあいました。

そしてどちらからともなく、頷きあいました。

せつかくですからね。思い切り良く、景気良く行きますとも！！

お〜〜〜！ と心の中で拳を振ります。

。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*。。。*

しゃららららららん！

それを見計らつてくれたかのように、鈴の音が響き渡りました。緊張した面持ちの、ニーナです。

それを合図にフィドルの弦がひとつ、爪弾かれました。

相変わらず余裕の表情の、シグレルさんです。

鈴はしゃん、しゃん、さりり、さりりい、とたいそう素敵に空気を震わせて何かを目覚めさせて行きます。

それに続くようにフィドルの音も加わって広がって行きます。

細やかな振動で空気を震わせる鈴も、爪弾かれた弦が空気を震わせるのも、リュームが歌声を発するのにも全て同じ作用なのです。

震える、ふるふると震えて行く、大きく広がって行く。

大気を震わせて行く。

伝わって行け、この決意。

それはまるでゆっくりと静かな湖面に、波紋をどんどん広げて行くかのように感じます。

リュームはひとつ、ふたつと大きく息を吸い込みます。

みつつと数えたところで大きく両手を広げました。

始めるとしましょうか。

準備はいいですか、リュームよ？

ばくばくと煩い心臓を宥めながら、一人でこくこくと頷きます。

い・い・いいい、行きますよ、リューム！ いざ、本番へ！

ぜつ、ぜつ、と肩が震える程の過呼吸を整えつつ頷きました。

(それにしてもこの期に及んで手がかかりますね、リューム。まあ、リュームはリュームでしかないって事なのでしょう)

春の風を迎え入れよう

この胸に

野辺にすみれの花が咲くよ

それは 春の訪れの証

女神が 地の果ての国から舞い戻り

大地に降り立った証

さあ 春の女神の祝福が始まる

この女神に愛されし 美しき国

何もかもを目蓋の裏に焼き付けて人の子は眠る

何もかもを心に焼き付けて人の子は眠りに付く

その安心に抱かれて 夢に見る美しき国

目覚めれば また この美しき国

終わりの無い 夢のさいはて

女神の祝福に満ち溢れたこの国

春には すみれの咲き誇る野辺

雪解けの水流るる 小川

あたたかく降り注ぐは 春の光

春の光が 導く この国の美しさへと

人の子は 目覚めるたび 感謝を捧げる

この美しき国に

この恵まれた大地に

この美しき国に

おしみなく

祝福授ける 大いなるものに

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

風が心地よくも強く吹き抜けて行きます。

それは、リュームの髪をさらうほどでありました。

街路に散り落ちていたと思われる、フィローの花びらも舞い上がり、そして再び落ちて行くさまは幻想的の一言です。

やはり最初ににらんだとおり、ここは心地の良い風が吹き抜けて行きますね。

思わずニンマリしてしまいます。

どうやらリユームの思いこめた歌声は、女神様に届いたようですね。

何とかお力添えして下さいような、許可をいただけましたものと信じます。

嬉しくなって、舞い散る花と一緒になっってくるうりとその場を一回りしてみました。

一回転し終わり、衣の裾が落ち着く頃には「祭典の歌姫」なる者にちゃんと戻りましたよ？

(とりあえず、第一関門は突破です！)

リゼライさんの指令どおり『女神様を褒め称えて感謝を捧げ、その祝福を賜りご助力願うこと』をやり遂げたようですよ。

都合良くそう思うことにして一つ領けば、観衆を挟んで向こうのご領主様ともばっちり目が合いました。

残念ながら彼の剣舞を堪能することは出来ませんでした。彼もまた無事にやり遂げたのは伝わってきます。

彼がリユームを見つめたまま、剣を勢い良く振り上げ天に向けました。

振り上げたそれを、流れるような動きで振り下ろせば観客の皆様から拍手と歓声が上がります。

うっ……か、格好良すぎです！

(何やら向こうの舞台の方が可愛らしい声援と、着飾ったお嬢さま

たちの観客が多く見えますよー。ちえ)

そんな場合じゃありませんてっば、リユーム！

頭を振りました。気持ちを切り替えます。

何とか掴みは良かったようです。

観衆の皆様の表情も晴れやかで、惜しめない拍手に迎えられています。

女神様のお心も掴めてます様に！ 等と意地汚くも願ってしまうリユームであります。

同じく手鈴担当として舞台上がって下さっているリゼライさんとも目が合いました。

リゼライさんは舞い落ちてきた花を一つまみしながら、満足そうに笑い掛けて下さっています。

しゃん！ しゃん！ しゃりらあん！

『よし！ 次々行け！』

彼女の震わす鈴の音に、そのような指令が込められているように感じます。

『承知いたしました！』

そのような気持ちを込めて頷いて答えます。

ええ、ええ。勢いにのせてこのまま、次々行きますよ。

行かねばなりませんですよ、リユーム！

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

しゃん！　しゃん！　しゃん！！

続いて勢い良く鈴を振り上げるように鳴らしたのは、ミゼル様です。

唇を引き結び、必死のご様子もまた可愛らしいです！

『リユーム、あんた！　最後まで気を抜かずに、しっかりやりなさいよー！』

そう励まされた気がしました。

『ありがとうございます』

そう感謝を心の中で述べながら、ひとつ頷きました。

ではっ、次々、行きます！

シグレルさんが少し曲調を変えました。

皆様の拍手が止み、期待に満ちた視線が集まります。

そんな呼びかけに応えるかのように、青空に闇が集まり始めました。

それは間違いなく、シエンテラン家の方角から。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

リユームは迷い無く、そちらに向かって両手を広げ差し伸ばしました。

第六十四話 この美しい国に捧げる祝福の歌（後書き）

『よし。褒めちぎれ』

そんなリゼライさん指導のもと、リユームは歌詞をこさえました
よ

後書きは、リユームとリゼライ打ち合わせ風景です。
スピン・オフにするまでもないので、ここで。

「歌うは訴え。歌うは祈り。祈りは願い。そして感謝」

「リゼライさん！！ なんですかそれすてきすぎですりゅーむの想
いを言葉にしてくださいわーーーー！！！！」

「落ち着いてくれる頼むから。」

そう呆れられながら、額を押し戻されました。

第六十五話 闇ふり払い給え 我が調べ（前書き）

術句なるものを編み出し、練り上げ、形にするのを手伝ってくださったりゼライさん。

声が遠くまで響くようにと術を場にもリユームにも施してください。つた巫女王様。

神殿の皆々様に今日ここへと集まってくくださった皆様方。

どれほど感謝しても感謝し切れません。

フィルガ様から闇の正体を、本質を知らされた時の衝撃ときたら！

『どうやらこの国にかつて蔓延していた疫病を、術の土台のひとつとして使ったようです』

疫病。

身体を熱し、呼吸を狭めるような咳が続き、口蓋こうがいに麻痺を起こさせて舌足らずと成り果てる。

まるでリユームの病弱であった頃そのままではないですか。

記録書によると、ギルメリアとシュ・リユーカが呪いを始めた頃から、流行り病は鎮まりを見せたそうです。

やってくれますね、ギルメリア！

どれだけ貴方様の想いは深く闇に食い込んでいたのでしょうか。ある意味それだけ、シュ・リユーカに執着していたと取れますよ。

そして……やりますね、シュ・リユーカ！

同じく舞台上上がっている皆様の不安も背後に感じます。

それすらも鎮まるよう祈りながら、歌います。

それでも意思こめられて響く楽の音と鈴に集中します。

今ここで人々の不安に同調する訳には行きません。行かないのです！

むしろ強く心を持ち、皆様方を安心させられるくらいでなければ駄目だと、リゼライさんから叱咤されたリユームです。

風がどんどん強くなって行きます。

時おりは、目を開けても要られぬほどの突風となって吹き付けてきます。

髪もベールも大きく後ろになびく頃には、上空を大きな闇の塊りが占めていました。

今、風はぴたりと止んでおります。

リユームは両手を天に向かって広げたまま、見据え続けております。

ふいに、ぽつりと頬に雫が当たりました。

それをまるで涙の一滴のよう、と思った瞬間、勢い良く大粒の雨が降り出しました。

容赦なく降り注ぐ雨の中、人々の困惑する声が聞こえます。

そんな中であっても凜とした力強い声がいくつか、何故かリユームの耳にはしっかりと届いていました。

『リゼライ！ ギルムード！ それぞれ皆、怯まず油断無く構えなさい！』

『おいでなすつたか！ 覚悟はいいか、ヴィンセイル殿。敵は天候までをも操る大物だぞ』

『楽師群は後方待機！ 弦を雨に濡らされては思うよう振舞えない』
『巫女様方は俺が護衛するから姉さん達、安心してよ。ちよっと濡れるけど』

『護衛団長！ 避難場所に神殿を解放し、観客が混乱しないよう誘導しろ』

『力のある者は歌姫の援護に当たれ！』

ええ、そうです！ 何の！ これくらいで負けませんよ！

降りしきる雨が衣装にしみ込み、身体に張り付き体温を奪います。髪から滴る雫が視界を遮ります。

それが何だって言うのでしょうか！

リユーム、このどしゃぶりに負けてなるものかと声を張り上げました。

例えこの雨音にかき消されようと、皆様のお耳に届かなくなっても歌うのは止めませんよ。

闇ふり払い給え

我らが光

そして迎える

数多の光

祝福されし

我らが光

闇ふり払い給え 我らが光！！

(皆様方！)

この国の方々、今日この祭典に訪れてきて下さった見知らぬ方々が、声を張り上げて下さっているのです。

一緒に。

雨宿りのために駆け出したりもせず！

もはや頬を伝うのが雨なのか涙なのかわかりません。

盛大に濡れているのは間違いありませんから、濡らしておきましよう。

リユームは皆様と一緒に歌いました。

何と心強いのでしょうか！

雨に打たれて冷えた体とは対照的に、胸の辺りが温かくなって行きました。

リユーム、やりますよ！ やり遂げられますよ、絶対！

嬉しくなって微笑みながら、皆様と共に歌います。

闇ふり払いたまえ 我らが光

そして迎える 数多の光

祝福されし 我らが光

闇ふり払い給え 我らが光！

その部分を繰り返すうちに、激しい雨は止みました。

ですが空いっぱい広がる闇雲からは、雷光の筋がいくつも見えています。

それが不気味に地の底から唸るように音を鳴り響かせて、威嚇しているようです。

雨がやみ、人々の歌声もゆっくりと止まりました。

しかし祈る気持ちは続いているようです。

皆様、両手を組んで祈りの形にしたまま、天を見据えています。

闇は一瞬怯んだように感じましたが、徐々に大きな獣の形を取り始めました。

エキ。

疫病。

そんなものにこれ以上、成り果てさせたままでなるものですか！

決意を込めて両手を差し伸べたリユームの前に、ご領主様が飛び出してきました。

剣を構え、リユームを背に庇い闇を睨んでいます。

濡れた前髪が視界を遮るのを邪魔をそうに払い、闇に向って剣を振り上げました。

「ご領主様！ いけません！ 闇に剣は通用しません！」

「うるさい！ そんなワケにいくか」

雷鳴が轟きました。

それは一際大きく、彼の背後で稲光が天から地上へと下りました。地鳴りがするほど大きな落雷です。

広場からそう遠くない場所の樹が、炎を上げながら倒れて行くの

大呪術者殿!？」

大呪術者? ギルメリアおじい様の事でしょうか?

ザク口様からぴりりとした刺激を感じました。

「そ、そうですよ、ご領主様! 攻撃すれば、攻撃されるのです! 剣をお納め下さいませ。闇に負の感情を向けてはなりません!」
「何を言う! やらねばやられるのが道理だろう!」

「いいえ! いいえ! いいえ! なりません! シエンテラン家の剣を納める時を見定めるのは、このシエンテランの鞆の役割りを担うリユームのはずです!」

勢いに任せて必死で説き伏せると、彼は交互に闇とリユームを見比べてから、ちつと舌打ちしました。

忌々しそうにでしたが、何とか剣を鞆に納めて下さいましたよ。

「ご領主様、大丈夫ですから。剣は闇を鎮めるためにお使いくださいませ! そのために特訓を重ねて頂きました。そうです、剣舞は女神様のご加護を得られるように働くのです。そして、闇に在る者の心を鎮めるための方円を描きます!」

「リユーム……。」

「おそらくこれは大呪術者ギルメリアおじい様から情報と思われるますよ! リユーム、今、知りましたもの!」

知らないはずの知識は、ザク口様から流れ込んでくるかのように感じました。

(ギルメリアおじい様、もう少しです、多分! 一緒に戦って下さ

いませ)

こくこくと頷きながら、彼にすがっていた腕を弛めました。

ご領主様は改めて剣舞を始める時のように、鞘に納まったままの剣で構えました。

孔雀の羽根模様を中心に、闇に向って見せ付けるようにしながら、空を切り円を描くように回されます。

レドが上空から滑るように駆け降り、威嚇しながらリユームたちの前に立ちました。

「よくやったぞ、レド！ 元・俺様の聖句の徒！」

” ” ギルムード、うるさいから黙ってて！” ”

少し遅れて、闇の中から飛び出すように黒い獣さまも降り立ちました。

まとり付いてこようとすする闇に、一角を向けふり払ってくれたのはダグレスです。

” ” 我は闇に属する獣。どのような闇であろうとも、我の意向に従え。この娘を保護する！” ”

虚空の闇に向ってダグレスが吠えました。

「おお！ 同じく俺様の元・聖句の徒！」

” ” ギルムードは煩いから黙っている！” ”

「何だと ! 冷たすぎるぞ、おまえらっ！ リゼライ、後方の

第六十五話 闇ふり払い給え 我が調べ（後書き）

『祭典時にどしやぶら。』

あともう少し、お付き合して下さい。

最終話 聞ふり払われてから 始まる調へ(前書き)

じやーんじやーんじやーん

最終話 闇ふり払われてから 始まる調べ

しゃん！ しゃん・ん！ しゃりら・ん！

しゃ・しゃん！ しゃん！ しゃ・しゃん！

雷鳴を振り切るかのように、また場を鎮めるかのように鈴の音が響き渡りました。

はっとして振り返れば、ニーナとミゼル様です。

明らかに怯えながらも唇を引き結んで、鈴を鳴らしてくれたのです。

それは決死の覚悟と見て取れました。

闇の意識がうごめいて、そちらにも注意を向けたのが解ります。

まるで手を伸ばすかのように、闇の塊りがゆらりゆらりと向い始めましたから。

(いけません、二人とも！)

そう慌てたりユームの思いと一緒にだったのでしょうか、シグレルさんがいち早く二人の前に飛び出してきました。

背に庇うようにしながら、弦をかき鳴らし始めます。

そんなシグレルさんと頷きあって、幾度も重ねた練習の時のよう
にお互いの出方を合わせました。

・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…
・…・*…・…

闇に差し込め日の光

女神様の加護を得て

長きに渡る闇の想い

日の光に暴かれて行け

闇ふり払い給え

我らが光

そして迎える

数多の光

祝福されし

我らが光

闇ふり払いし

数多の光

闇ふり払い給え

彼方の光

闇ふり払え

我が歌声

生れ落ちた時に 上げた

あの産声のように

闇をふり払い 給え

光放つ その息吹き

闇に在って

闇に在るものこそが

解き放つ

その魂の調べ

闇にある想いも

闇にある願いも

全てを光に変えて

闇ふり払いし

その光の刃

生きてこそ

放たれる

光の道末

そこに導くべく

エキが咆哮を上げると、雷鳴も一緒に轟きました。

闇の中から、苦しい訴えが流れ込んできます。

シュ・リユーカが言ったんだ！

ずっと闇にいようって。ずっと、ずっと一緒に！

だからボクらは闇にいたのに、今更裏切る気？

許さないよ、許さない、ユルサナイ、ユルセナイイ！！！！

シュ・リユーカと一心同体であったお腹の子は、シュ・リユーカの想いをそのまま受け入れたのです。

そうしてそれは闇に孕まれたままの子になったのです。

加えて闇の人格化とありました。

その呪われた者の心許す形を成して、近づくようになったと。

シュ・リユーカは願ったのかもしれない。

生まれることの出来なかった子に、例え闇からであっても目の目を見せてあげたいと、そう願ったのかもしれない。

その事を見越したのでしょうか。

わかりませんが、ギルメリアは呪われた者に祝福が行くようにとも配慮したのです。

それが良かったのか、悪かったのか何て。

今更、誰に問い掛けても仕方がない事と思っても、胸が突き刺されたかのように痛みを覚えます。

「エキ。ええ。許してくれなくなっちゃっていいわ。でも、闇からはもう出ましようね。今度は光の中でずうっと一緒に過ごしましょうよ？ ねえ！」

しゃん　しゃん　しゃん　しゃん　しゃ　しゃららん

リゼライさんが鈴を慎重に操りながら、場を鎮めてくれています。エキが再び闇の声に耳を貸さぬように、リユームの声にのみ耳を傾けてくれるようにと。

シグレルさんの弾く弦の音も同じ意図を持って、空気をかき鳴らしてくれています。

鎮まれ　鎮まれ　鎮まれ　闇に沈む意識　鎮まり給え

「さあ、いらっしやい。闇を抜け出して。ずっと歌ってあげるから」
寄り添ってあげるから。

急ぎ、腰帯の金の紐を手に取ります。

『これはあんたを光の中に繋ぎとめてくれる命綱よ』

リゼライさんの言葉を思い起こしながら解き、エキの首元へと掛けました。
いつかの昔、シュ・リユーカーの胎内で結び合っていたであろう魂です。

「ご領主様も一緒にその端を持って下さいました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

・：*：。。・

シュ・リユーカ、お願いです。

闇にまどろむのはもう終わりにしてください。

目覚めてください。

あなたの大切な方が、子が、待っているのです。

今だ呼びかけても応答の無い、闇を望んだ者へと心の中で叫びました。

胸が張り裂けそうです。

闇の発動者、ギルメリア。

闇の受動者、シュ・リユーカ。

そこに絡められたのが、二人の子。

このみつつが大きな核となってしまうたのが、シエンテラン家の呪いの正体です。

他の闇は小ささまさま。

それは嫉妬であったり、怒りであったり、悪意であったり。

そういったものが強い力に引き摺られて絡まりあい、出来上がったのが『呪いなる闇』です。

そこに寄せられたのはそんなものだけではないのも、また確かなはずです！

優しい気持ちや、人を思う気持ちや、美しさを感じずる心もあったはずです。

闇は闇だけで在り得るものではないのです。

光もまた、同じく。

・。

・ +
・。

・ *
。

。 +
・。

それは迷い泣く子へ寄せる調べでありました。

静かに静かに耳元に囁きこむように歌われる調べは、寂しさに泣き叫ぶ子の心を鎮めて行きます。

身に孕んだ愛しい子のためにと歌われる響きです。

それはジ・リユームだけでは到底、伝えきれないものが含まれているように感じます。

母親が我が子に向ける、無条件の愛という強い強い絆を。

二人で抱えた闇の獣は、徐々に瞳を伏せ、まどろみに誘われて行きました。

闇色の輪郭もそれと同じように光に溶けて行きます。

彼へと手を伸ばしました。

それとほぼ同時に彼の方も手を伸ばしてくれていました。

先に手を伸ばし、引いてくれたのはどちらであったのか。

不思議な感覚でありました。

身体が浮き上がったように感じたのです。
あたたかさに包まれながら、何と身の軽やかな事かと思ったのも
一瞬です。

瞬き、瞳を開けた次の瞬間に飛び込んできた光景は、眩い光に包
まれたシュ・リユーカとギルメリアでした。
まるでリユームからはシュ・リユーカが、彼からはギルメリアが
抜け出したかのようにありませんか。

二人とも向かい合い、手を取り合っています。
そしてその二人の間に光の珠が浮かんでおります。
二人はそれを愛しそうに抱えるようにしました。

（闇が、光に。エキが光に還ったのですね）

闇雲は晴れ、そこから天の光が差し込みます。
天に向って掛かる橋のように見えました。
それはギルメリアとシュ・リユーカの足元へと、伸びて来ており
ます。

込み上げてくる愛しさをそのままに、二人は慈しむように光の珠
を抱えて微笑み合っていました。

（ああ、二人も還るのですね）

言葉も無いまま、微笑みかけられました。
リユームも精一杯、微笑み返したつもりでしたが、涙が溢れて来
るので上手く行きませんでした。
視界がぼやけ始めます。

暖かな風が吹き抜けて行きます。

二人とも細かな光のかけらとなって風に攫われ、一緒に空に舞い上がって行きました。

天から差し掛かる光は、女神様が両手を広げて下さっているかのように温かなものでした。

闇にあった者達も皆、女神様に誘われてその光の懐へと還って行ったのでしよう。

花びらが舞い落ちて、光と共に降り注ぎます。

この街の至る所に植えられたフィローの花が、風に吹かれてここまで舞い落ちる様に目を細めました。

きつと闇の影響を受けていくらか早く、その花を散らせることになったのかもしれませんが。

それを思うと申し訳ない気がしました。

ですが攫う風が揺らす梢の葉は、まるで気にするなどとも言ってくれているかのように眩しく風にそよいでいます。

夢のようです。

いいえ、闇に包まれながら見る夢は終わりを告げたのです。

虚空に響いた歌声もまた生きた証。

これから先は生きる喜びを歌い上げましょう。

このお方と共に。

大切な方々と共に。

生きる喜びをこらして歌い上げるかのように、力強く！

拍手と歓声が、今日集まって下さった方々から沸き起こります。

「さあて！ このまま婚礼の宴と行くか？」

そんなギルムード様の、からかうような声が聞こえました。

・：：*：：。：：*：：。：：*：：。：：*：：。：：*：：。：：*：：。
・：：*：：。：：*：：。：：*：：。：：*：：。：：*：：。：：*：：。

答えるよりも前にリユーム、この大観衆の前で口付けられており
ましたよ！

最終話 聞ふり払われてから 始まる調べ（後書き）

お付き合い ありがとうございました！

二人の始まり（前書き）

スピンオフ

二人の始まり

花を買う。

それが暗に何を意味するのかを知らない男はいないだろう。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

神殿前の広場。

そこに件の少女がいるという。

「おい、そこの花売り」

「はい？女神様にお花とお菓子がご入用ですか？」

少女は神殿前の広場にいた。

か細い背に声を掛けると、嬉しそうに声を上げる。

正直何が嬉しいのやらと冷めた感情が沸く。

長く編んだ黒髪を揺らしながら振り返って見上げてきた。

その瞳も夜空を映している。

微笑みながら腕に抱えた籠の中の花と菓子を差し出してきた。

「お花は今朝摘んだばかりです。スミレの紫の花束とシロツメクサの白い花束と……。」

「紫で」

延々と説明されても花のことなど分からないので、即答する。

「はい。女神様の祝福がありますように」

にこにこしながら小さな花束を差し出された。

小さな指先が手袋越しにも伝わって、何故だか急に腹が立った。

「いくらだ」

代金を受け取るよりも早くに商品を渡すとは何事か。

踏み倒されたらどうする気だ。

このふわふわした生き物をなじってやりたくなった。

「2000・ロートになります」

「何？」

ますます腹が立った。

安すぎて、金入れを取り出すのも億劫になる。

「はい？ 2000・ロートです？」

少女は2、ひゃくですと言いながら、おずおずと窺うように指を折って見せた。

「では菓子をつけたらいくらになる？」

「はい。4000・ロートです」

お菓子はアメと、焼き菓子と、とこれまた説明されても分からないから遮った。

「その籠の中味全部でいくらになる」

「ええとく少しお待ち下さい」

お花が七束で、お菓子が十一つだから。

うんうんと唸りつつ、首を傾げながら計算しだした少女を見下ろす。

細く上がった顎に、血色のあまり良いとは言えない肌色。

お世辞にもあまり発育が良いとは言えない身体つき。

折れそつに細い腕に、籠の持ち手が食い込んでいる。

「3600、口」

答えを待たずに籠ごと奪い、代わりに金入れを押し付けた。

「全部もらおう。つりは要らない」

「待って下さい、多いですよ、おつりを！」

そんな風に必死で縋ってくる声も、人ごみに紛れるうちに聞こえなくなつた。

圧倒的に歩幅が違うから、振り切つたのだろう。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

次の日も行って花と菓子を買った。

その次の日も。

またその次の日も。

五日目に訪れた時、少女は籠ごと身を引いていた。

「何だ？」

何の文句があるというのか。
そう思った。

少女は言う。

「お買い上げ、いつもありがとうございます」

「ああ」

面倒に感じたので適当に答え、手を振った。

これ以上の質問はしてくるな、という願いも込めて。
しかし少女は律儀にも頭を下げ、丁寧に切り出した。

「おにさんは、お花やお菓子がそんなにいつも、たくさん必要な
のですか？」

「ああ」

どうしても必要かと問われれば否だが、不必要かと問われると
うでもなかつたりもする。

何せ館に人は多く、差し入れだと言えはすぐさま消費される。

だが毎日差し入れをしても妙なものだし、昨日などは孤児院に寄
付してきた。

子供らは目を輝かせていたから、必用であつたのだろう。

嘘は言っていない。

「そうですか。どなたかのお見舞いですか？」

「おまえには関係ないだろう」

「そうですね。ですが」

少女は「毎日3600・ロートで五日で、ええと、18000・

「ロートで、十日もすると36000・ロート!? うわあああ」等とぶつぶつ呟いている。

「お菓子はどうにもなりません、おにいさんの欲しいお花ならどうにか出来ると思います」

「は!？」

広場の喧騒が一瞬遠のいた気がした。
見下ろす少女は神妙に頷いて見せた。
唇を引き結び、両手を胸の前で固く結んで。

俺の欲しい花、だと？

その一言でここまで動揺する自分に驚くしかなかった。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「おにいさん、リユームと一緒に来てくださいますか？ 少し歩きますが、大丈夫ですか？」

「いいだろう」

神殿に背を向け、広場を抜ける。

広場の入り口に待たせていた馬を引き取った。

途端に少女の表情が輝いた。

「お馬!」

「来い」

返事も待たず、軽い身体を放り上げるように乗せ、自分も跨った。
「高いです! わあ、リユーム、お馬に乗せてもらうの初めてです

」!

「そうか。で、どこに向えばいいのだ？」
「あっちの方です」

少女の指差す方へと、進路を向けた。

「リユーム……と言ったな。年はいくつだ？」

「十一歳です。もうじき、十二歳になります。おにいさんは？」

「十八」

「そうですね。では、リユームより、七つも上なのですね」

花を売る娘たちから、花を買う。

街で花や菓子を売る、貧しい娘たちそのものを買う。

貧しさから身売りする娘がいるとは聞き及んでいた。

そんな折、父から「タラヴァイエの娘も花売りをしている」等と聞かされたのだ。

純粹に花を売る者もいるだろうか、表向きはそうでない者もいる。

そのせいで、花売りはそのような不埒な目で見られるのだ。

どうせ貧しい娘、小銭を握らせてやればそれでいい。

金を握らせ、後腐れなく遊ぶ男の仲間入りをする気は無い。

少女をそのような目で見た覚えも無い。

だが実際、目立つ黒髪を目印に少女を見つけてみて、妙な感覚に陥った。

嫌に大人びた、美しさのある少女だったからだ。

男の嗜虐心を煽るような色気を湛えた風情が、まさかという疑念を抱かせる。

まさか。齡十一歳にしてそのように男を手引きするのか？

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

しばらく進む。

街路を外れ、人の気配が薄くなってきた。

街中とはいっても木立が見え始めた。

木立を抜けると、見通しの良い野原が広がっていた。

確かにそこには小さな花がたくさん咲いていた。

少女の籠の中と同じものが。

少女が首を捻って、得意げに俺を見上げて言った。

「着きました！　ここですよ。ここなら、お花がたくさんたくさん、取り放題なのです！」

内緒ですよ、しつと言いながら、少女は至極真剣な表情で人差し指を立てて唇に当てた。

「おにいさん？」

早く降りて、一緒に花を摘もうというのだろう。

身を乗り出した身体を片手で抱えたまま、俺は動かずにいて、原っぱを見下ろしていた。

別に花など必要ないのだ。

そもそもこんな事を客に教えてしまっっては、もう商売にならなくなるだろう。

食うにも困っていると聞いている。

おまえには儲けようという気は無いか。

そうやって無邪気に振舞った拳句、痛い目をみても構わないのか！

見下ろした少女のスカートの裾が擦り切れているのが目に入って、また無性にむしゃくしゃした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

「お、おにいさん!?!」

野原に降り立つ事も無く、馬の方向を変えた。

まったくもって腹が立つ。

きつと頭が悪いに違いない。

これは俺の花なのだ。

他の誰にも触れさせない。

抱え上げた少女をそのまま馬に乗せて屋敷に戻った。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

勢いにのせて、シエンテラン家の聖堂に抱えて連れて来た。

『このヴィンセイル・シエンテランがジ・リユーム・タラヴァイエ
を。。。。』

そう呟いた言葉は『古語』と呼ばれる類のものだ。
だから、少女には理解できない。

「おにいさん、どうかしたの? ここはどこ? お城? おうちに
帰して……。」

「兄ではない。二度と兄とは呼ぶな。間違っても。ここは俺の家だ。

そしてオマエの家でもある」

そう一息に告げて、少女を抱えて父の元へと向った。

二人の始まり（後書き）

『義兄妹になる手前。』

兄さん、色々と妄想爆発気味。

そいでもってそれは誘拐だから。

ちよっぴり、期待したでしょ……。

ヴィンセイルの内心の動揺が表に出ないが、現れた言い訳の羅列です。

ものすごい勢いで語られた気分の作者です。

ルゼ様からの贈り物（前書き）

しょつもなくも、幸せな日常です。

（そつか？）

ルゼ様からの贈り物

「公爵様からお届けものですよ、リユーム様」
「ルゼ様からですか」

まあ、どうしまししょうとつろたえているリユーム様に、嬉々と
してお箱を差し出した。

リユーム様は若干困惑の色を浮べながらも、嬉しそうだ。
全くもって控えめで可愛らしいったらない。
さすが（まだ）ワタクシのお嬢さまだ。

ええ。まだ、ワタクシのと主張させていただきたい。

それくらいの特権を心の中にする主張くらいまかり通らせていた
だきたいんですよ、ちくしよめ。

あの祭典時の熱も冷めやらぬ今日この頃。
いかがお過ごしですか、皆様。
お久しぶりのニーナでございます。

「このまま婚礼式になるか!？」

という流れをきっぱりと断ったのは、意外にもご領主様ご本人で
したとも。

ええ。

えええ!？ せっかくの勢いのある流れを読もうよ、ご領主様!
そんなツツコミを飲み込んで、みんな（ミゼル様、ギルムード様、

リゼライ様、弟、夫、白と黒の獣さま）で彼を見たらばさ。

「今日のこれは祭典の衣装であつて、婚礼の衣装ではない。我が花嫁には相応しく着飾らせてやりたい。だから今日は婚礼を挙げると皆の前で誓うに留める」

さようでございますか。

「いいのか。それで」

「ああ」

「うん。俺ならガマンできない。色々と」

「……。」

ギルムード様が神妙な面持ちで尋ねました。

ええ。ワタクシだって同じ事を尋ねたかった。

流石です、ギルムード様！

オマエ、ガマンできるのか？ 出来ないだろ？

「もう禁欲の必要もないだろう」

！？

うっわ！ 言い切ったよ、このお人は！？

その場で皆、同じ事を思ったに違いないと思つのです。

ワタクシはさり気に、ミゼル様のお耳を塞いでいて「何て出来た侍女だろつか」等と、思わず自画自賛でございましたよ。

「ところで。当のご本人のリューム嬢のご意見はいかがなものかな？」

そこで大事に抱え込まれたリューム様の異変に、やっと気がついたという有様です。

お顔を真っ赤にされて押し黙っているのは、照れていらっしやるのかと思っていたのですが、違ったようです。

「リューム？」

「リュ、リューム様！？」

「……。」

返事がありません。

ただ、虚ろな瞳でこちらを見上げてくるばかりです。

リューム様はご領主様の腕の中で、ぐったりとされておりました。そりゃあ、無理もないと思うのですよ。

ものすごく、ものすごくおく！

リューム様、頑張りましたからね。緊張し通しの日々だったと思います。

先程の恐ろしい闇に立ち向かい、それでも愛情を向けて両手を広げたリューム様を思い出して、再び熱いものがこみ上げてきます。

（お見事でした！ リューム様、闇は光に還ったのですね。）
脅威は去りましたが、また違った意味での脅威の到来ですものね。ぐったりもすると思うんですよ。

それでなくても体力そんなにあるほうでは、けっしてごぞいませんものね……。

「リユーム、頑張ったものな。すぐに休ませよう。すまないが、今すぐ手当ての準備を頼む。二ーナ、手伝ってくれ」

承知いたしました！

リゼライ様と一緒にすぐさま神殿に駆けて行きましたよ。

「あのこ、大丈夫なの？」

リゼライ様がぼつりと漏らした呟きが、何を指しているのか。

特に身体の具合だけではないんでしょうね。そう思ったので、こ
うお答えした次第でゴザイマス。

「ええ、多分。我が主人は恐らく忍耐を重ねて早、七年くらいは経
つてますから！ そんじょそこの忍耐力ではない事は保障いたし
ます」

「ちつとも大丈夫な気がしないけど」

「そこは何ともはや」

流石です、リユーム様。

相手にお預けを喰らわせ続けるその威力、破壊力はいかほどかと
感心してしまいます。

そのまま、リユーム様は寝込まれました。

お式はおおよそ一カ月後となったのですよ。

そして、お式を控えた三日前の本日。

ぞくぞくとお祝いの品が届き始めておりますの。おほほほ。流石
ワタクシの、リユーム様。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「ニーナ？」

「さささ、リユーム様！開けて見られませんか？」

「はい。ルゼ様、感謝いたします」

しゅるり、とりポンを紐解いて編み籠で出来た入れ物の蓋を持ち上げると、目に飛び込んできたのは真っ白な。

「まあ、綺麗なレースですね！すごいです、こんなに繊細なレース編んでみたいです」

（いやだから何故そういう所に目線が行くんですか。さすがワタクシのリユーム様なんですけど。）

「素敵ですね。新婚家庭に正に相応しいレースですねえ」

ぶつぶつとこれなら編み棒は最少じゃなきゃムリかも、など等の明後日方向の感想を呟きだすリユーム様に適当な所で相槌をいれる。そうでもして止めなければ留まるところを知らないからだ。

「ええ。素敵すぎて普段からテーブルに置いては、お食事のたびに緊張してしまいそうですね」

言いながら恐るおそるレースを取り出したリユーム様の動きが止まった。

「これは？」

うん。ハイ、リユーム様。

完璧にそれテーブルクロスなんかじゃございませんね。

「獣様。ほどほどに」

何を言っているかは解らないが、リユーム様が居たたまれなさそうにしているから、大体察しは付く。

ちょっとムカついたので、窓際ではやし立てる黒い獣様を閉め出してやった。

ワタクシめは、きっと。花嫁の父親なる心境なんですよ、多分。

ルゼ様からの贈り物（後書き）

アホ話、第二弾です。

しかも、本編よりも早く出来上がっていたとかいう。

闇ふり払われた後に訪れた光（前書き）

闇ふり払われた後に訪れた光

正直、今までで一番の頑張りだったかもしれない。

闇ふり払うために臨んだ祭典時と同じ事を思いました。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「や……あ……りましたよ、リユーム。ご、りよ・うしゆさま」

息も絶え絶えのくせに勝ち誇って見せました。

「でかした。よくがんばった」

寝台にもたれ掛かってはいるものの、身動きの取れないリユームにご領主様の労いの言葉が掛かります。

頭をがしがしと撫で回されてから、額に、目蓋にと口付けを受けます。

えへへ。

シンラにするの何一つ変わらないやり方に、リユームも尻尾があれば良かったのですがと思いました。

はい。

リユーム、がんばりました！

「ご領主様、ご覧になって下さい。エキが戻ってきましたよ。また再び、抱っこされるために」

「……エキ？ 前にも言っていたな。確か猫の名前では無かったか」
「はい。エキ、猫でした。真つ黒の！」

「は？ リユームまさかその名前に決める気じゃなからうな？」
「え？ いけませんか？ だって、この子はエキの魂の生まれ変わ
りですよ」

「どこに実の娘に飼ひ猫の名を付ける親がいる　！！」

「エキは猫さんでしたけど、猫じゃなかつたです」

「じゃあ何だという」

「魔物？」

「もっと悪い！」

「エキや、ほら、お父様ですよ」

「うっ」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

以上がお母様にねだつて聞いた、わたしが生まれた日のお父様の
様子だ。

「エキルナでどうにか落ち着きました」

お母様はいつもそう締めくくる。

わたしは、このお話が大好きだ。

幾度もねだって聞かせてもらおう。

このお話を聞きながら、わたしは何て幸せな子なのだろうかと思
う。

おやすみなさい、良い夢を。

そう呟くお母様の声を聞きながら、眠りに付く。

わたしの名前はエキルナ。

エキルナ・シエンテラン。

皆はエキって愛称で呼ぶの……。

闇ふり払われた後に訪れた光（後書き）

『いきなり飛ぶのかよ。』

ええ。

二人の婚礼やら新婚生活やらは、こちらでUPは不可能です。

そんな出来具合なのでございますよ。

仮タイトルからすでに

禁止令発令しやがりましたよ。

おいといて。

シエンテラン家のエキルナちゃんの冒険が始まります

シエンテラン家のエキルナちゃん？

「そ・そうですか。それは全く気が付きませんでした。そうですか」

何やら感慨深げに黙りこんでしまったお母様は、おそらく自身
の思考を調節中なのだろう。

よくあることだ。

「お母様。自信をお持ちになって良いと思います。だってあんなに
気難しくて小難しい、将来偏屈じじいまっしぐらのお父様のお相手
が出来るのは、お母様だけですわ」

「そうなのですか？」

「絶対的にそうです」

七つになったわたしエキルナという、実の娘に諭されるお母様は
二十七歳。

その年の差、二十。

わたくしはふ、と思わず息をついてしまった。

お母様に対する落胆の為ではない。では、何にかと問われれば噂
の偏屈じじい候補の……実のお父様に対してだった。

お母様は、その、お母様なのだ。

わたし、エキルナ・シエンテランの。

頼りないといえはソレまでだが、自立心は煽られるように思う。

期待しないで置いた方がいい、というのがわすか齡七年にして導
き出した答えだ。

誤解しないでいただきたいが、何も親らしい事をという意味では
ない。

愛情はもちろん、お母様からはたくさんものをいただいている。
そうではなくて、お母様に世間一般の感覚を求めないといった点
でと言う事だ。

改めて言葉にすると何やら視線は遠くをさま迷う。

「そう。やっぱり、ご領主様は偏屈おじいじ候補でしたかー」

「ええ！ そうに決まっていますわ・っじゃなくて！！」

「ばしばしい！と思わずテーブルを叩いて注意を促がしてしまった。

「やっぱり違うのでしょうか？」

「~~~~~そうではなくて！ お母様、今の話の要点、注目すべき点はそこではありません！ わたしが言いたいのは『お父様の相手が勤まるのはお母様以外おりません、ですから自信をお持ち下さい』っという点です！」

「そうかしら？ どうして？ エキルナはそう思ったのでしょうか？」

話が。話がずれて行く……。

「そうねえ。お母様とエキルナとで生きて行きましょうか」

「お母様」

「でもね。そうしたらお父様はお一人では生きて行かれませんか？ 必ずやけを起こされてご自分を追い込んだ拳句、早死になさるわよ。それこそ偏屈おじいじ様になる前にね。言いきれますよ。それでもエキは平気なのでしょうか？」

お母様はにっこりと笑う。

いつもそれが悔しいと思う。

何につて、ほっとする自分が。

お母様はお父様と違ってわたしの事をなじったり、怒鳴ったりなさない。

本当はお母様だって……。

泣きたかったり、怒りたかったりすると思うのに。

お母様は辛抱強く、お母様であるうとしてくれているのだと思う。困らせたくないのに、困らせるような事ばかりしてしまう。

自分がとても嫌になる時がある。

「エキはお利口さんですね。お母様にはちよっぴり難しい事も、よく知っていますものね。だからこそ、皆のためになるように知恵を使わねばなりませんよ。お母様の言いたいことは伝わっておりますか？ エキや」

「はい。お母様」

ぎゅ、と抱きしめてもらえて安心する。

お母様はみんなから大人気なのだ。

そんなお母様が、わたし、エキルナのお母様でとてもとても嬉しいと思う。

思つのに。

ああ　　ん！

「あらあら。カリイデがお目覚めのようですよ、お姉さま？」
「……………」

この春、生まれたばかりの弟の泣き声がお母様を呼んでいる。行って欲しくなくて、お母さまに強く抱きつく。

「エキや。カリイデはまだおしゃべり出来ないし、自分の事は何にも出来ないけれどお姉さまの事が大好きですよ」

ちゅ、とお母様の唇が優しく頬に触れる。

でも、わたしは黙ったまま、何の返事も出来なかった。

「エキ、一緒に……………」

言いかけたお母様の言葉を見事に遮って、扉がノックも無く開いた。

そんな事をするのはこの館で一人しかいない。
密かにため息を付いた。

あらあら、まあまあとお母さまは笑う。

「リユーム！ 何をしている！ カリイデが泣いている」

「はい、ご領主様。只今、参ります」

「……。」

お父様はいつも偉そうだ。

すぐに怒鳴るし、少しでもイタズラが過ぎると容赦なく叱るし、おっかないったらない。

わたしにだけ、だったらまだ解る。

「一緒にお母さまの事まで叱るのだ。」

「おまえが甘やかすからだ」だの「おまえが行き届かないからだ」だの。

そんなの、聞きたくない！ たくさんだ！

お母様のせいにする、お父様なんて大嫌いになる。

それなのにお母様はいつもにこにこしている。

だから、お父様を付け上がらせるのだと思う。

正直、お父様はいつも苦手だ。

ぎゅ、と胸元の布地を握った。

さっきも、叱られたばかりだった。

「エキルナも来なさい」

大きな手をふり払って、精一杯大きな声を出した。

「いや！ お母様がいい！！」

だからいつもお母様に抱き縋る。

「まあまあ、エキ。甘えん坊さんですね。お母様は赤ちゃんが二人もいるみたいよ」

「お母様が、いいの！」

「エキルナ。わがママもいい加減にするように。さっきからどうした？ 聞き分けの無い」

赤ちゃん呼ばわりされても構わない。

お父様なんて大嫌い！

本当は……お母様も。

二人とも、生まれたばかりのカリイデに夢中なんだから！

「う……うええ、お母さまがいいの！ お父様はイジワルだから嫌あ！」

本当に我ながら子供っぽいと思うが、涙が止まらなかった。

それなのにお母さまときたら！

「あらあら？ お父様にあんまり、わがママ言ったらいけませんよ」

シエンテラン家のエキルナちゃん？（後書き）

『おひさしぶりです！』

みなさま、お元気でいらっしやいますか。

リユームも、ご領主様も、新しく訪れたコ達も元気です！

そんな調子で始まりました。

シェンテラン家のエキルナちゃん？（前書き）

お姉さんになった日。

お母様ときたら、そんな私たちにニツコリと笑って見せられた。

「エキヤ。あなたの弟がもうすぐ生まれますよ。そうしたら、お姉さまね」

弟。

生まれてくるのは男の子だという事なの？

「ふふ。そうよ。きっと男の子よ。どんなコかしらね？」

大きなお腹を愛しそうに撫でながら、わたしに、お腹にへと語りかけた。

お母様は不思議。

時々、色んな分からないはずの事だっって言い当ててしまう。

あの日は寝ないで頑張るつもりでいたけれど、誰も許しちゃくれなかった。

散々ごねたけど最後にはお父様に、無理やりベッドに押し込まれてぶすくれるしかなかった。

何よ、お母様が心配で眠れる訳がないじゃない……！

こんな時、本当に早く大人になりたいと思う。

何度も寝返りを打っているうちに、少しだけ眠たくなってきた。その時。

うにゃあ あん……！

遠くで小さな、でも力強い泣き声が聞こえた気がした。

「……うにゅ？」

結局は眩しい陽射しに目を開けた。
いつの間にか眠ってしまって、朝になっていたらしい。

がばつと飛び起きると晴れ晴れとした笑顔のニーナから「おめで
とございます！」と言われた。

おはようございます、では無くて……？

寝ぼけた頭で一瞬そう考えて首を捻ったけど、すぐにその意味を
理解した。

「お母様と赤ちゃんは!？」

「はい！ 無事お生まれになりましたよ。エキルナお姉さまをお待
ちです」

「着替えるっ！」

お姉さま。

そう呼ばれて頬がかつと熱く火照った。

何だか気恥ずかしくって、勢い良く寝間着を脱ぐ。

横着して掛けボタンを一個しか外さなかつたせいで、首のところ
で引っかかって大変だった。

早く、早くと気ばかり急いで、なかなか上手く着替えられなかつ
た。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「お母様っ!! お父様!!！」

興奮が抑え切れなくて、叫ぶようになってしまった。
お母様は寝台に背を預ける格好で、上体だけを起こされていた。
お父様はその側から覗き込んでいる。
お母様が腕に抱いているおくるみから、小さな手が伸びているの
が見えた。

「いらつしゃい、エキルナ」

「お母様！」

「静かにしなさい、エキルナ。赤ん坊が起きてしまう」
「……！！」

あわてて口に手を当てながら、駆け寄った。

「ふふ。大丈夫ですよ。さ、エキルナお姉さまですよ」

お父様に抱き上げてもらって、ベッドの端に座って恐るおそる覗
き込む。

わあ。小さい。それに何だかふにゃふにゃしている。

何だか壊れやすそうで、ちょっぴり怖いと思ってしまった。
それでもなるべくお姉さまらしく、ちゃんと挨拶をした。

「はじめまして。わたくしがあなたの姉のエキルナ・シエンテラン
よ。あなたも将来、私の事エキって呼んでもいいわ！」

あ、でも。ちゃんとお姉さまは付けなくては駄目よ！ と付け足
す。

「そついえばお母様。赤ちゃんのお名前は何？」

「カリイデ……。カリイデナルド・シエンテラン」

カリイデの髪の色は、お父様の金髪ともお母様の黒髪とも違う。違うけれども二人の色を両方混ぜ合わせて受け継いだような、不思議な色合いの髪をしていた。

灰色、とも言えなくも無いかもしれない。

光の色では無いけれど、かといって闇色でもない。

カリイデはまだ赤ちゃんだから、髪の色も少ないしほわほわしている。

もう少し大きくなれば、また変わるんだって皆が言っている。

瞳は濃い緑色ではっきりしているのは、きっと変わらないと思うけど。

それからほどなくして、カリイデのお披露目会が催された。

内輪だけって話だったけれど、うちはお父様のご領主様なのだから、なかなかの来客だった。

「グインセイル殿、奥方様。この度はおめでとうございます」

「お姉さまになられたのね、エキルナ様」

「待望の跡継ぎ様のお誕生、真におめでとつございます」

つていろいろを一番多く聞いたわ。

皆がカリイデの誕生を心待ちにしていた。

それを表すかのように、ものすごい贈り物の山だった。

全部、カリイデのためにと用意された小さな洋服やおもちゃだった。

中にはお母様に当てての物もあった。

その中でわたしにもって、用意してくれた方がいらした。

公爵家のルゼ・ジャスリートおばあさまと仰るお方で、ものすごい

くしゃきん！ とした感じのお方だった。

にこにこしながら、わたしに差し出したのは、首に真っ赤なりボンを結んだ真っ黒の猫のぬいぐるみだった。

大きさもしっかりしていて、手触りも本物の子猫みたいに滑らかだ。

正直、こんな子供っぽいものを貰うなんてと、ちょっぴりムツとしたけれど、たちまちその手触りに夢中になった。

その猫の子の瞳は緑で、いたずらっぽく光って見えるから不思議だ。

「わ……あっ！」

思わず感嘆の声を上げた。

何てステキな手触りなんだろうかと、嬉しくなった。ぎゅゅと抱きしめてみる。

「気に入っていただけ？」

「……！」

嬉しいのと恥ずかしいのとで、言葉にならなかった。だけれども一生懸命頷いて見せた。

「ルゼ様。ありがとうございます。ほら、エキルナもちゃんとお礼をお伝えしないとね？」

「ありがとうございます。ルゼ様」

それから。

そのコはわたしのお友達になった。

名前は、ルウナ。

わたしがつけたの。

エキナルドの地にようこそ。

わたしの、わたしだけのお友達。

いつもおんぶして歩く。たまに抱っこ。

お母様の気持ちが少しでも、わたしに伝わりますように、って願いを込めながら歩いた。

「あらあら。お母様みたいですね、お嬢さま」

ルウナに館を見せてあげるために歩くと、決まってそう声を掛けられた。

まんざらでもない気持ちになる。

でも表には出さないで、なるべくつんと澄まして歩いた。

疲れたら、お菓子をもらって一休みする。

カリイデにもルウナを紹介してあげた。

でもまだ、カリイデは「うう」「とか」「あゝ」とか言っばかりで、遊べない。

つまんないの。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

カリイデが生まれてからあつという間に夏が来て、それももう終わりかけ。

毎日暑かったけど、今は過ごしやすくてちょうど良い毎日だ。
毎日、お父様とお母様とカリイデと、館の皆と過ごしている。
でも時々、一人きりになる時がある。

そんな時、決まって向うのはシェンテラン家の聖堂。

神殿ほどまでの奥行きと広さは無いけれど、それでも十分に広い
ここはいつ訪れても独特の静けさがある。

シエンテラン家のエキルナちゃん？（後書き）

『リユーム。お母さんになっても相変わらず』

同じく領主も、お父さんになっても相変わらず。

間に小さい子が入ると、また違った感じですが。

エキルナちゃんは大人びていますが、まだまだ七歳。

猫のコ、おんぶして歩く辺りでまだまだ七歳。

お姉さんぶりたい年頃だと思います。

シエンテラン家のエキルナちゃん？（前書き）

お久しぶりでございます。

ぼくぼく書き足して行くつもりです。

お楽しみいただけますように。

シエンテラン家のエキルナちゃん？

ここはいつ訪れても、しんと静まり返っている。

でもそれが何だか心地が良く感じるから、不思議だ。

お母様にその事を言ったら、そういうのをオゴソカだと言っただおっしゃっていた。

コツン、コツン、と自分の足音が響く。

それはまるで足音の方が先を行くみたいだ。

ルウナを抱きしめながら、そつと呼んでみた。

「こんにちわ。ごきげんいかが？ オルレイア」

オルレイア。

綺麗な大人の女のひと。

でも、館のオトナには誰にも見えていないみたい。

お父様もお母様も、オルレイアの事が見えていない。

どうして目の前にいるのに、誰にも見えないんだろう？

オルレイアが可哀想だと思う。

でもわたしには見えている。ちゃんと！

だからこそ、わたしの大切なお友達のひとりだ。

そう告げるとものすごく、哀しそうな顔をされてしまった。
オルレイアは両手で顔を覆うと、しくしく泣き出してしまった。
そして肩を震わせるうちに、ふるふると空気に溶けて行ってしま
った。

(オルレイア。消えちゃった)

それもよくある事なので気にせず、その時はそのまま忘れてしま
う事にした。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。

それから時折り、聖堂に足を運んでは、様子を見に来るようにな
ったのだ。

最初は泣いてばかりいたこの女の人も、最近はやったり微笑むよ
うになった。

わたしの名前もお母様と間違えたりしなくなった。

わたしの、わたしだけの秘密のお友達だ。

「オルレイア！」

エ キ ル ナ 。

「あのね、わたし決めたの。ここを出て行くわね」

だから一番に報告にきたのだ。

なぜ？

「なぜって……。どうしてもよ。お父様ったら、わからずやなのですもの。元気でね、オルレイア。時々こっそり、会いにくるから！」

そうして、手を振ってから勢い良く駆け出す。

ともかく、挨拶は済ませた。

うん。

心残りなんか、無いわ！

喜び勇んで塀の隙間をくぐった。

ここは木が植えてあるからわかりにくいけど、隙間がある。

どうにか、わたしとルウナが、くぐれるほどの。

どうにかこうにか苦労して、塀の外に出た。

最後にバスケツトが引っかかってしまった。

それを力任せに引っ張っていると、何だか薄暗くなった気がして振り返った。

「あらあら。髪の毛に葉っぱが付いていますよ、エキ」

「お、お、お母様！」

「はい。お母様ですよ」

薄暗く感じたのは、お母様の影だった。

「どっしって……？」

「エキルナこそ、お母様に内緒でお出掛けですか？」

「う。まあ、そんなところですよ」

「どこに行こうとしていたのですか？」

お母様の口調はあくまで優しかった。

咎める含みは全く無かった。

でも、答える気になんてなれない。

そつと視線を外して、遠くの向こうを見下ろした。

領主家は小高い丘の上にあるから、街が良く見下ろせる。

視線の向う先に気がついたらしい、お母様がのんびりと仰った。

「あら、街に行きたいですか。あの辺りを探検するのなら、エキルナ。お母様が一緒のほうが心強いと思いますよ？」

「どつして？」

「お母様は昔、あの街に住んでいましたから」

お母様が胸を張って、イタズラっぽく笑う。

「ええっ!？」

びっくりした。

びっくりしすぎて、抱えたルウナがずり落ちてしまう程に驚いた。

「でも、お母様。カリイデは？」

「ニーナにお願いして来ましたから、何も心配いりませんよ」

「でも……。だって！」

お母様こんな事をしたら、後でお父様に叱られちゃう。

「ふふ。お姉さんですねーエキ。カリイデが心配なのね？」

「そうだけど。ちよつと違います。お母様のことも心配です」

「あら？」

「きつと叱られます。お父様に」

ルウナをぎゅつと抱きしめながら、恐るおそる言った。

お母様はしゃがむと、わたしとルウナに付いた葉っぱをとり始めた。

「そうかもしれないわね。まあ、エキルナ。少し頬を引っかきましたね。大丈夫？」

「そんなの、ちつとも構わない！」

それよりもと、大慌てで叫んだ。

「お母様！ 早く、お戻りになって！」

お父さまときたら、ご自分が帰っていらしてお母様の姿が見えないと癪癪を起こすのだ。

それがすごく嫌！

本当にお父様ってしょうの無い人だと思う。

「じゃあ、エキも戻りますか？ せっかくのお散歩日和なのに？」
「……………」

嫌だ。

絶対に戻らない！

それに。わたしのはお散歩ではなくて、家出なのだ。
そう訂正する気持ちも込めて、ふるふると首を横に振った。

「そうですか。じゃあ、行きましようか」

お母様は「はい、決定！」と言いながら、わたしの手を取って
歩き出した。

「お母様、よろしいの？」

「ん？」

「ですから！ お父様ですわ！」

「ああ。ちゃんご領主様にもお手紙を書いてきましたから、大
丈夫ですよ」

「手紙」

「ええ。今日はご領地の視察に行かれていますはずですから、帰って
きて私たちの姿が見えないと心配するでしょう？ だから、手紙を
書いてきました。今日はお天気が良いので、エキルナとお散歩に行
きますって。ちょっと遠出するので遅くなるけど、心配しなくても
大丈夫ですって書きました」

ほーら。何の心配もありませんね！ とお母様は自信満々で言い
きった。

どこら辺がちゃんとなのだろうか。
基準がよく解らない。

「手紙ですか？ お母様」

「ええ。懐かしいですわあ。ご領主様とはよくお手紙のやり取りをしたものです」

「恋文ですか？」

「まあ！ エキッたらおませさんね。そうですねえ」

「違うの？」

「ふふ。そうで無いものの方が、ほとんどでしたよ」

しかも。

お母様お得意の、話題が明後日方向にむき出している。

お母様って。

なんって、のん気者なのだろうか。

今更だけど。

実の娘がこれだけ心配しているっていうのに、まるで気にしちやいないんだから。

(しっかりしなくっちゃ！)

つないだ手を通して伝わってくるお母様の浮かれた気持ちに、心を引締める。

ぎゅっと力強く、手を握り返した。

そうしてお母様と二人、それにルウナと一緒に、街に向かった。

シエンテラン家のエキルナちゃん？（後書き）

『そこは気にして！ エキルナちゃん！』

不思議能力ばっちり受け継いでおりますな。

さらに上を行くりユームさんです。

色々と術者としての技も磨いちゃったらしいですよ。

そして無くしてしまった能力もあるようです。

何にせよ、お母様と二人つきりでお出掛け。

本当は嬉しいエキルナちゃんです。

シェンテラン家のエキルナちゃん ? (前書き)

お久しぶりです！

シエンテラン家のエキルナちゃん？

お母様の方も準備が出来ていた。

大きめのシヨールを頭から被り、バスケットから私にもとシヨールを取り出す。

「さ。おひさまよけもかねて、ちゃんとかぶりましょうね。シエンテラン家の者だって事がばれてしまわないように変装いたしましよ
う」

「はい」

素直に頷いて従ったものの、これくらいで変装のうち入るのだからかと思った。

もっとも、今日は二人とも思い切り軽装にしている。

いつもお父様がうるさいのだが、今日はおおよそ「ご領主様の妻子」という出で立ちからは遠い。

スカートだって少しだけ短しいし、飾りと言えば胸元のリボンだけ。それもシヨールで隠れがちだ。

重ね着なんでもっての外だという気分だったもの。

お母様にいたっては、お父様を泣き落として承知させたという、

庭仕事用の作業着としているお仕着せだ。

色も控えめな灰色で、いつもの華やかさは無い。

でもお母様がいつにも増して、若々しく見える。

綺麗に着飾ったお母様も魅力的だけど、この気安い感じだつても素敵だ。

わたしのお母様は、本当に何を着てもよくお似合いだ。

わたしは子供なので、たくさん泥んこになっても良いという服が用意してあるから、それを選んだ。

色は薄い緑の布地で、袖口がふんわりとされていて一番気に入っている。

ニーナ達とお揃いの、ポケットがついた前掛けもしてきた。

ぎゅっとリボンを結べば、これからお仕事をしに行くのだ、わたしはもうお父様を頼らずやってみようという気持ちが出た。

こういつのを準備ばんたんと言っただけだと思っただけ。

でも、ばんたんって何だろう？

お母様はしばらく歩くと、通りかかった荷馬車に手を上げて、乗せて下さいと交渉しだしたのは驚いた。

知らない人について行ってはいけないのでは無かったかしら？
ドキドキした。

「何だい、どこお行きたいんだい？」

「街までです。途中でもいいのですが、一緒にさせていただけませんか？」

「ああ、いいよ。小さい子も一緒じゃ、歩きじゃあ、きついだろ。乗りな、乗りな」

おじいさんは快く請け負ってくれたから、ほっとした。

それから屋根もない馬車の荷台に乗せてもらった。

砂ホコリが結構すごい。

ガラガラ・ガラガラという車輪が軋む音も結構すごい。

初めて乗る荷馬車というものに、心が弾んだ。

ドキドキとワクワクとで声が出てこない。

遠ざかるシェンテランの館に、そつと手を振っておく。

「何だい、ご領主様ん所の通いさんかい？」

「ええ。今日はお暇を少しいただいたので、里帰りしてこの子の顔を見せてこようと思ひまして」

「そりゃあ、いい。」ご両親も喜ぶよ。お嬢ちゃん、いくつだい？」

急に話題を振られて、慌てて答える。

「えつと。七つです」

「名前は？」

「エキ、です」

「そうかい、そうかい。わしの孫もエキちゃんと一緒にくだな。お嬢ちゃんも珍しい髪の色なんだなあ」

あんまり自分の事を聞かれても、答えない方がいいのでは……？
そう心配して口をつぐむと、すかさずお母様が声を上げた。

「まあ。お孫さんはどちらに？」

「それがなあ、山向こう二つ越えた所のクエールトの方でなあ」
「まあ！」

お母様はおじいさんに色々質問して、話題を上手くこちらに向かせないようしてくれた。

そんなお母様の物慣れた様子に、密かに感心した。

町が近づいた辺りで、おじいさんとはお別れした。

たくさんのお花が売られているお店や、山積みの果物のお店がいくつもいくつも並ぶ。

お魚や、生きた鳥や、他にも綺麗な布がはためくお店が、ずっとずっと続く。

いい匂いも漂ってきて、わたしのお腹がぐーっつと鳴った。

そういえば朝に食べたきりで、おやつも今日は食べていない。

「お腹が空きましたねえ、エキ」

「はい、お母さ……ん」

お母様とは呼ばずに、お母さんと呼んでくださいねと言われていた事を思い出す。

母ちゃんでもいいですよ、と言われたが、ちょっと言いくいし、第一お母様に似合わない気がするのでやめておく。

「おいしそうなパンが売られていますね。食べたいですか、エキ？」

「はい！」

「でも残念でした。お母さまと、違う、お母さんもエキもお金を持っておりません」

「!?!?」

お金。

そうだった。

何かをいただく、すなわち「買う」には「お金」が必要なのだ。

なのに子供のわたしはもちろんの事、お母様もお金を持っていない何て！

どうしたらいいのだろう？

お腹が情けない鳴き声を上げる。

いきなり浮かれた気分から、突き落とされた気分だった。

お母様は歩みを止めず、ただひたすら真っ直ぐ進む。

どこかを目指しているみたいに。

「お父様は、私たちにお金を持たせませんのよ。まったくもうったら、もう。ご領主様ったらもうですよ。見てらっしゃいですわ。ね
「！」

お母様はどういう訳かお父様に対して、対抗心を燃やす。

何故なんだろう。

勝ちたいと願う理由がわからないでもないが、理解できない。

「エキ。お金が必要な時はどうすればいいか知っていますか？」

お母様が楽しそうに言った。

シエンテラン家のエキルナちゃん？（後書き）

『エキルナびより通信。』

何それ、な仮タイトルです。

一年前に本編完結したよ記念日が今日だったな、と。

長くお付き合いいただいてる方も、はじめましての方もありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378f/>

闇ふり払う君の調べ

2011年9月15日19時17分発行